PL 798 .2 A6 1927

Shikitei, Samba
Shikitei Samba shu zen

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

Digitized by the Internet Archive
in 2009 with funding from
Ontario Council of University Libraries

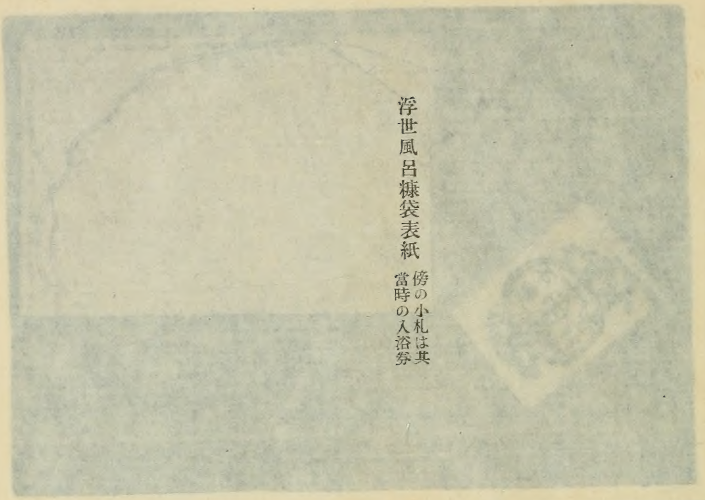
http://www.archive.org/details/shikiteisambashz00shik

式亭三馬集

全

LIBRARY
MAY 05 1971
UNIVERSITY OF TORONTO

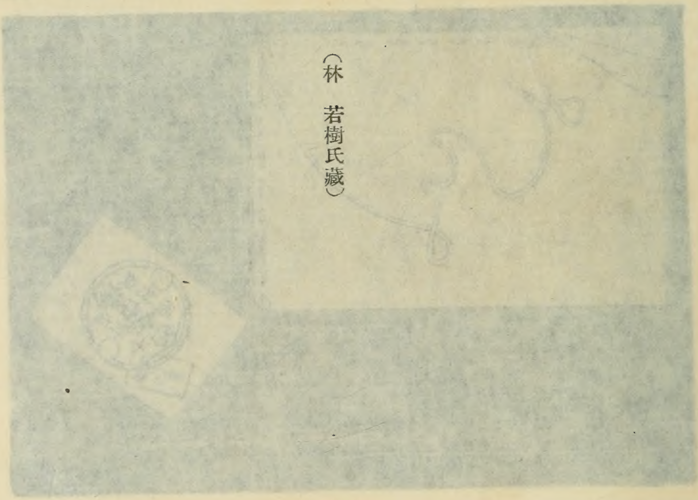
PL
798
.2
A6
1927



浮世風呂糠袋表紙

傍の小札は其當時の入浴券

（林　若樹氏藏）



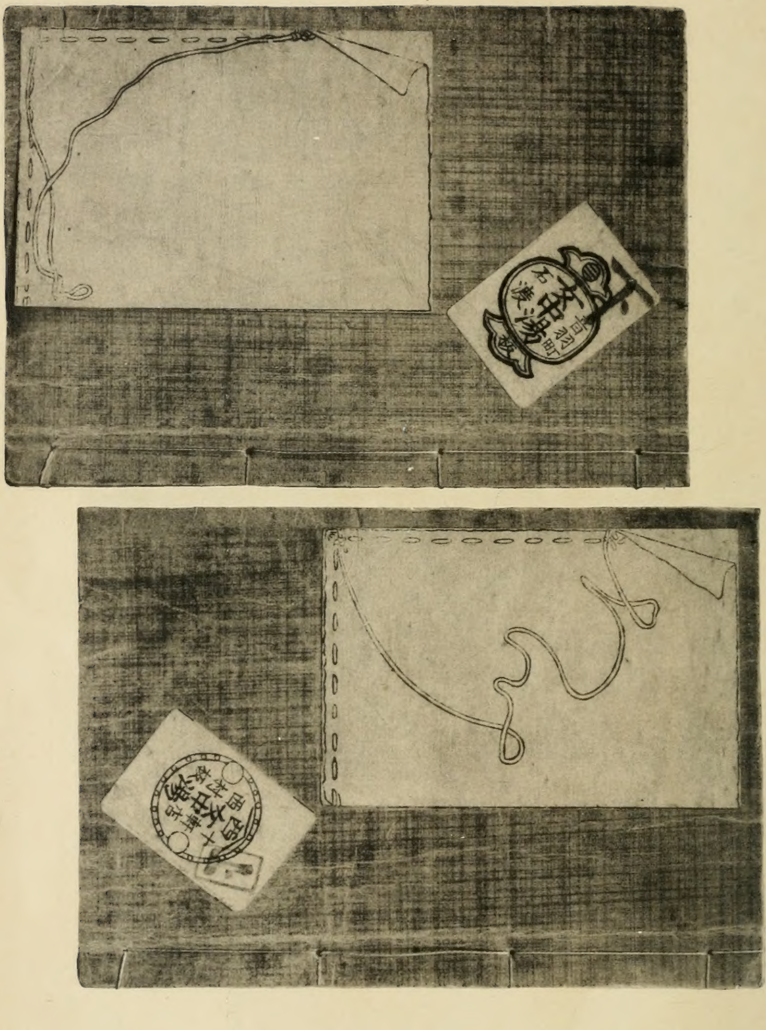
浮世風呂雜發表落

當時の人[illegible]

[illegible]の小[illegible]

（林 若園丸編）

LIBRARY
MAY 3 1971
UNIVERSITY OF TORONTO



近代日本文學大系　第十七卷目次

諢話浮世風呂……一—二六〇

大意……三

初編卷之上

發端……二
朝湯の光景……六
晝時の光景……三〇

初編卷之下

午後の光景……四四

二編卷之上

女湯之卷
自序……五九
附けていふ……六四
朝湯より晝前のありさま……六五

二編卷之下

女湯之卷續き……九七

三編卷之上

自序……一三一

目　次

女中湯之巻……[illegible]
三編卷之下
女中湯之巻……[illegible]
ぐつと捻つて俗物なる跋……一八四
四編卷之上
自序……[illegible]
男湯再編
[illegible]……[illegible]
四編卷之中
男湯之巻……[illegible]
四編卷之下
男湯之巻……[illegible]
四編跋……[illegible]

無而七癖 酩酊氣質……[illegible]

自序……二三三
凡例……二三五
品目……二三六

卷之上

かつぎ上戸……二三八
[illegible]い上戸……[illegible]

面白くない上戸……一七四
くどい上戸……一七九
小ごと上戸……一八三

巻之下

啼上戸……一八九
意見上戸……一九四
ねち上戸……一九八
利屈上戸……二〇一
腹立上戸……二〇六
さわぎ上戸……二一〇
しやべり上戸……二一三

流轉數回阿古義物語……二一七—五六六

序……二一八
述意……二二三
舊本阿漕草紙……二二四
芳町阿漕浦事蹟並地名考證……二二七

前編

標目……[illegible]

巻之一

開場　懐レ恨江島船……[illegible]

巻之二

第一齣　奪二媚珠一釀レ禍……二四〇
第二齣　老狐操二寃人一……二四五
第三齣　[illegible]……[illegible]
第四齣　[illegible]……[illegible]

卷之三

第五齣　[illegible]……[illegible]
第六齣　抱レ忠擾二愛子一……二九五
第七齣　[illegible]……[illegible]
第八齣　[illegible]……[illegible]

卷之四

第九齣　[illegible]……[illegible]
第十齣　[illegible]……[illegible]
第十一齣　[illegible]……[illegible]
第十二齣　[illegible]……[illegible]

撮引書目……四四九
伏案……四五一

後編

序……[illegible]
目錄……四五七

卷之一

第一齣　[illegible]……[illegible]
第二齣　阿漕浦の忘裴……四六

卷之二

第三齣　[illegible]……[illegible]
第四齣　[illegible]……[illegible]

卷之三

第五齣　怨魂殺ニ奸夫一……四九七
第六齣　夫婦閤奇遇……五〇五

卷之四

第七齣　惡瘡詰ニ俳醫一……五一六
第八齣　餌レ金釣ニ美人一……五二七

卷之五

第九齣　貞婦沈ニ煙花一……五三六

卷之六

第十齣　外川浦復レ讎……五五五

柳髮新話浮世床……五六七—七五一
四十八癖……七五三—八一七

初編

自序……七五五
標目……七五六
女房をこはがる亭主の癖……七五八
物事を氣にかける人の癖……七六五
通りものになりたがる人の癖……七六八
つまらぬ事を苦にする人の癖……七七三
詞數の多き人の癖……七七五
人の非を數ふる人の癖……七七七

二編

標目……[illegible]
帮開めかす素人の辯……七六五
大[illegible]を[illegible]いて[illegible]を[illegible]る人の[illegible]……七七一
[illegible]で[illegible]を出す人の[illegible]……七七[illegible]
金を[illegible]む人の辯……七七[illegible]
金をなくす人の辯……八〇三
浮虚なる人の辯並に不實者の辯……八〇九

古今百馬鹿……八一九—八六八

[illegible]古今[illegible]……八[illegible]
楊枝隱の傳……八二四
標目……八二六

上卷

[illegible]をのけ[illegible]馬[illegible]……八二[illegible]
[illegible]の下[illegible]馬[illegible]……八[illegible]

下卷

[illegible]かる[illegible]馬[illegible]……八[illegible]
腹自慢する大食馬鹿……八五[illegible]
[illegible]……八[illegible]

人間萬事虚誕計……八六九—[illegible]

自序……八六三
標目……八六八

初稿

あいきやうのよきうそ……八六九
まこと……八七〇
そらじぎのうそ……八七〇
まこと……八七一
雅人の虚……八七二
まこと……八七五
まこと……八七六
昔自慢の虚……八七七
まこと……八八五
精進の虚……八八五
まこと……八八七
女きらひの虚……八八七
まこと……八九一

第二編

叙……八九二
目次……八九三
稽古所の虚言……八九四
同じくまこと……八九五
ほうこう人うけ人のうそ……八九六
同じくまこと……八九七
けんくわのうそ……八九八
同じくまこと……八九九
娼女の呼声……八九九
同じくまこと……九〇一
ちうにんのうそ……九〇二
同じくまこと……九〇二
木てや屋のうそ……九〇五

同じく其の二……[illegible]
うはきめかけのうそ……九〇六
同じく其の三……[illegible]
利いた風流のうそ……[illegible]

善悪表裏 人心覗機關……[illegible]

自序……[illegible]
題目……[illegible]

巻之上

馬鹿は[illegible]人の表……[illegible]
其の裏……[illegible]
[illegible]を[illegible]書生の表……[illegible]
其の裏……[illegible]

同じく其の四……[illegible]
まちげいしやのうそ……九〇九
同じく其の五……[illegible]

巻之下

見[illegible]人の表……[illegible]
其の裏……[illegible]
[illegible]を[illegible]人の表……[illegible]
其の裏……[illegible]
[illegible]者と呼ばるゝ下卑女房の表……[illegible]
其の裏……[illegible]

解題………文學博士　笹川種郞…卷頭一―三

目次終

解題

文學博士　笹川種郎

傳記と著作

式亭三馬は安永四年を以て淺草田原町三丁目に生まれた。菊地氏、通稱を太郎と云ひ、名を泰輔、字を久德と稱し、本町庵と號す。遊戲堂、洒落齋、嘐囉哩樓、四季山人、遊戲道人、戲作堂滑稽堂等の別號がある。其の父は茂兵衞と云ひて、板木師であつた。一說には此の茂兵衞は八丈島爲朝神社の神主菊地壹岐守の妾腹の子だとある。三馬は幼少の頃より茅場町の地本問屋西宮新六（或は云ふ、本石町四丁目の書肆翫月堂とも）に奉公し、年季滿ちて後、山下門外の書賈萬屋太次右衞門の婿養子となつたが、妻なるもの世を早うしたので、離緣して石町の裏屋に借家して、古本を商つた。其の後、大阪の町人某が江戸掛店の中絶したのを再興せんとして、これを三馬に委ねたので、三馬は本町二丁目の木戶から二軒目に賣藥店を開いたが、舊來の業は賣れずに、三

馬の新製した江戸の水と云ふ化粧品が諸人に愛用せられて、賣行きがよかつたので、三馬は世才に富んでゐたが、經濟の方にも勝れてゐた。

少時から書肆に奉公し、好きな道とて稗史小説戲曲を耽讀したので、其の家の女主は遂に之をして戲作者たらんことを思ひ立たせたのであつた。其の處女作は、「天道浮世出星操」で、之についでは、「人間一生胸算用」を書にしたが、何れも寛政六年、彼が十九歳の作である。其の三馬と號したのは、唐來三和の三と、烏亭焉馬の馬とを取つたのだと云はれてゐる。最も當時の作者を羨んで、二世全交とならんとしたが、障ることありて果さなかつた。彼は其の著「素人通」及び「四人馬笑」の一部趣意に、「式亭三馬儀古人先全交の遺言につき此の度より二代目全交と可相成筈に候へ共、いやしき妄作を以て古人の高名をけがすは恐れ有のと存じ未だ改名に不仕候間、猶不相替全交儀と思召し御一覽奉希候」と辯解してゐる。併し彼が二世全交とならなかつたのは、彼の爲に幸福であつた。三馬には三馬の本領がある。豈他人の糟粕を嘗むるに及ばんやである。

曲亭馬琴は其の著「物之本江戸作者部類」に於て、三馬の無學を嘲つてゐるが、馬琴のやうな博識ではなかつたにせよ、三馬も小説戲曲の叢書を渉獵した上に、根が才子の事とて、これを活用し、利用し、二分三分の學を七分八分に應用するに得手てゐた。唯性來頗る短氣で、酒癖も惡かつ

たので、人と衝突する事が少なからずあつた。馬琴の物識振つた、しかつめらしいのは最も三馬の忌む所で、屡得意の熱罵を浴びせかけたのであつた。彼が黄表紙に敵討物の流行を憤慨して、「高が草雙紙の作者だから腹は知れてゐやす、餘り白癡おどしに、ちんぷんかんぷんはやめなせエ、夫れだから敵討に世を奪はれた、喜三二、春町、全交、月池、三和と此の五大家を調合して書いて居れば、間違ひなしヨ、大きに御世話だといふだらう。」と小つぴどく當つてゐる目指す當の敵は云ふまでもなく馬琴であつたが、確かに一面の眞理はあつた。彼は『長壁姫明石物語』にて畫家勝川勝亭と衝突したが、又一陽齋豐國とも衝突した。其の事は、『戯作六家撰』に詳しい。

大人（三馬）が撰びたる讀本に、『阿古義物語』と云へる五卷あり、稿成りて故一陽齋豐國が許に稿本わたりしかども、一陽齋いかなる故ありてか、繡像半にして其後をふつと畫かれず、やうやく畫譜に及びしかば、（其故か半より末國貞が筆なり）式亭憤りを發し、日頃刎頸の交り厚きを、斯くまでに已を蔑如にするその心根こそ惡しけれとて、自ら一陽齋にいたり、まのあたりにこの事をもて罵り、その怠慢を責めしかば、豐國ぬし言を盡くして詫びたれども、式亭が怒り解けず、これより何となく互に隔心いできて、此方にては吾が作意する冊子には、向後彼をして畫かしめじといへば、彼方にても彼が作りたる冊子には畫ふつと畫くまじなど罵り合ひしが、書賈仙鶴堂文彙堂等あつかひにて雙方和睦し、文化七庚申年、文會堂が上木せし『一對男

作者閑楽といへる男子は三馬を論評すること [illegible]

[illegible]

三馬の性格は、これに依ても、ほゞ察するに足りる。

或年鳶人足の争闘があつたのから題材を取つて、寛政十一年春、「俠太平記向鉢巻」を書いたが、よ組の鳶人足を悪評したと云ふので、其の年正月五日、三馬及び書肆西宮新六の家に、よ組鳶人足の為に破壊せられ、遂に公事沙汰となつて、鳶人足は入牢し、新六は過料に、三馬は手鎖五十日に処せられた。又はこれに依りて戯作の筆を絶せよと命じたが、三馬はつゆ〳〵其の志を翻さなかつた。然し禍却つて幸福となつて、其の処刑は三馬の名声を高めることゝなつた。

自他笑楚人が敵討物に手をつけ、寛政七年京伝と共に非常の大当りを取つてから、敵討物語作の勢力を来し、享和より文化の初めにかけては、黄表紙界を席捲する有様であつた。三馬は其の「敵討腿（ウチマタ）膏薬」にて、これを攻撃して流行を醒さず、前の世で作りたる話すが、此の世

で貸すか、是非一度は報ゆ、十二因縁因果は廻る小車の如く、親を討たれ子を失ひ、讎を報ふと雖も、また後の世に生まれ來て、討てば報い、討たれては報ゆ、さる故に毎年毎歳草雙紙の趣向に、敵討の種つきると云ふ事なし。此の敵討罪の滅ぶるまでは、生まれ替り／＼て主となり家來となり、親子となり、夫婦となりて苦しむ。又敵討の雙紙も、種の盡きるまでは、新板となり古板となり、燒直しとなり、おつかぶせとなりて、案じる苦しむは、これら作者と生まれたる因果なるべし。」と、盛んに嘲罵を浴びせかけてゐるが、其の三馬すら幾多の敵討物を述作してゐる。文化三年板の『[illegible]雷太郎強惡物語』十冊は頗る好評を博して、合卷物の濫觴と云はれた。

三馬は又洒落本にも二三の作を出してゐるが、彼が文壇上に地位を占めたのは、いはゆる中本であつた。中本とは形より名づけた稱號で、半紙本と半紙半截の小本との間にあるが故に斯く稱せらるゝのであるが、黃表紙が繪畫を主とすると異なりて、洒落本が進歩したものとも見るべく插畫は少なくして、滑稽の趣向に、長篇を編み出したものである。此の種の述作中、最も名あるものは、一九の『膝栗毛』と三馬の『浮世床』とで、二家が江戸時代の滑稽作家を代表するのも、亦此の二作に因るのである。

三馬が一生中の重なる著述を擧げると次の如くである。

黄表紙及び合巻

天道浮世出星操・人間一生覗替繰

[illegible]傳卜之寶吉　是全安夢寶吉

[illegible]心照子　[illegible]其[illegible]道[illegible]寺

[illegible]人[illegible]記　[illegible]太平記[illegible]

[illegible]兵　[illegible]式亭三馬[illegible]

[illegible]報條　[illegible]史[illegible]年代記

[illegible]青[illegible]　[illegible]歌[illegible]書

仲[illegible]仇討　江戸花三升格子

有田唄お猿仇討　[illegible]敵討

[illegible]仇討　[illegible]島名譽仇討

[illegible]有[illegible]　[illegible]討[illegible]六[illegible]

玉藻前三國傳記　[illegible]於[illegible]

[illegible]信　[illegible]

[illegible]大[illegible]　[illegible]道[illegible]

[illegible]　[illegible]由

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

忠臣振分道中雙六 自然磨三吉
無根草夢談
土佐□の□可白道□後□の高尾懺悔 印說浮世之助話
戀山崎與二兵衞物語
□投着□浮世七役 早替駒機關
親傍孝太郎次第
關取梅川契情梅川 艶競二人忠兵衞
法界坊野分姬 其寫繪劇傍
瀨川□□□村□子 兩面蓮華道
□□□□□ 舊内裡鄙譚
日高川清姫物語
小野道風□□□ 已巳巳巳歌字盡
□□□□□□ 和合神所緣赤繩
名總角二人助六

吾嬬織角觝大全
□七印□ 七幅譚
俠客荒金契情□□ 冠辭筑紫不知火
□□□□ 於竹大日忠孝鑑
□□□□□ 腕雕一心命
□□□□ 昔形福壽杯
石川茶右衞門祇園のお梶 昔語釜ケ淵
籠頓兵衞幻草紙
武者修行銳勇傳
江戸水福話
其浦島七世孫助
吾嬬花歌妓氣質
萬字屋玉桐燈籠番附
□□ 當世織績紛八丈

長壁姬明石物語
太平に□れ□久竹生島□□□討 歌祭文於三茂兵衞
□井□茨□合□ 一對男時花歌川
松王丸明月□ 昔語兵庫築島
鶉權兵衞俠客話
白子□□□道の□□ 堪忍五郎稚講釋
猪隈雷雲園力之助 祇雲非物語
腹之内戲作種本
昔話丹前風呂
□□□□ 花咲爺
大□□談□□說 累樣楓繪
二枚續吾嬬錦繪
□作□□世再 夢助魂膽紀
□□ 任俠中男鑑

[illegible]（[illegible]）むつな[illegible]　山崎明星[illegible]二人[illegible]　[illegible]
梅[illegible]色　[illegible]郎[illegible]　[illegible]情[illegible]人傳
昔形今の市容歌妓結（すがた・けいしや・むすび）　[illegible]　[illegible]
交無（なし）たにけの安賣　在色潮來[illegible]　[illegible]花[illegible]山[illegible]
[illegible]　[illegible]萬[illegible]　[illegible]柳島物語
[illegible]郎[illegible]　雲龍九郎偸盗傳

洒落本

[illegible]　[illegible]話　[illegible]
[illegible]言　[illegible]　

中本（中本に非らざる滑稽本なと併せ録す）

[illegible]之外　小野[illegible]字盡　[illegible]
[illegible]語　[illegible]語　當世七癖上戸
[illegible]浮世[illegible]　狂言田舎[illegible]（後編）　新水[illegible]
[illegible]　忠臣蔵[illegible]氣論　四十八癖

柳髮新話浮世床　　人間萬事虛誕計　　酒側輩之一杯綺言
素人狂言紋切形　　田舍芝居忠臣藏　　古今百馬鹿
有喜世話大千世界樂屋探　　假名手本藏意抄　　人心覗機關
茶番早合點　　客者評判記

讀本

阿古義物語

雜書

劇場訓蒙圖會　　緒繝詩話　　俳優細見記
俳優節用集　　雜題狂歌集　　狂歌鷹
狂文選　　式亭狂文集　　流行案文
狂言綺語

三馬は文を遣るに極めて捷才であつた　屢二日三夜にして、或は六七卷或は八九卷を脱稿した事があつたと云はれてゐる。『人心覗機關』の奧には、「小田原町の友宅に二日滯留の間筆を採る」とあり、『潮來婦志』後編の附言には、「一日香取の宮に詣で歸路を潮來に促し、娼門に寄りて遊樂

[illegible]

つて作者の得意として吹聴する所のものであつた。

[illegible]

いところがあつて、とかく嘲罵に傾き易かつた。これ各自の性格の然らしむるところではあつたが、三馬は他に經濟の累を及ぼすことなく、頂天立地さらに他人に頭を下げる必要がなかつたので、持つたが性分で、自づと人を人とも思はぬ樣になつたのであらう。馬琴は學識を以て他人を眼下に見、三馬は生活の安定を得て人に下らなかつたのだ。一九に至ると好々爺である。「そのあらましを式亭主人が机上に筆を走せて書き盡したるそのしりへには天窗をかくより外はあらじ。」と、『傾城買談客物語』に跋してゐる。

『戯作六家撰』に云ふ、

又一時おのれ大人（三馬）に語りていふ、頃日我が友なる光房といふが講釋にて「源氏物語末摘花の卷」を聽きつるが、こはいさゝか戯作の扶助にもなりなんやと問ひたれば、大人答へて、もと物語ものゝ隨一なれば、諸人多く和文辭をつらぬるにたすけとせざるものなしといへども、戯作者の本意はさるむつかしきものに非ず、貴君今より戯作をなして心を慰めんとの思ひあらば、源氏一部の註釋をもらさず聽くにも及ばず、源氏のことも水滸傳の事も少しづゝ聞きはべりしことあらば、似つこらしき事をとりなして、知りたるふりに書かんこそ戯作者の專らとする所なれば、餘り源氏にこり過ぎて、かた〳〵と笑ひ、さて〳〵と嘆息してなどの類なまこなしの源氏ぶりは聞くもうるさしとて、戯作者の贋といふものは、たゞ唐本屋の賣物になるとしく、

て居る」とある如き自序の語句等はそれをよく證するものであらう。ことに

と思はれる。

と、馬琴の三馬を評した言葉は、即ち狂歌に於て、野卑な戯作者仲間であつたの、またしも

物語たるにも及ばぬ、俗語をも平氣で用ひて居るのである。しかし其の人の作品を評して、

いうものではない。三馬は京傳の如く三馬自身が、京傳其の他には相當の名聲をもつて、

仙境館に於ても亦千古不朽の作品であつたが、其人の戯作を世に送りて、自身は讀本作家と名をうけるまでに

あつたのである。即ち日常を目の前にして、様々に描寫されたものであるが、必要な事實は

三馬の作品を以て戯作者一流の人物であると、三馬の三馬たる所以を以て實に三馬自身を言ひ得て居る。然し三馬は滑稽本の

に於ける自身の作品を見るべきである。

一九は滑稽を以て滑稽の人情風俗をのみ描寫した點を見せて、其の側に偏して居つたと言へる

滿ちて居るが、三馬に至りては、「浮世風呂」「浮世床」など、江戸を描かない、市井日常の生活を寫して、人情

の微妙を穿ち、興味を交へながら描寫してゐる。滑稽との調和はあり、滑稽と人情の描寫は

れないが、當時に富んだ世上事もとなき事に滑稽である。其の著作中には、いづれも二つのものとに

て居ない、是非と見はせるものもついてゐるのではない。本論に述べる如く

がら、洒落本が花柳界の内幕を生命としたのと異なりて、其の範圍も廣く、中にはよく社會の裏面を描き出した處に、彼が滑稽家の大家として、一九と比肩する價値がある。特に彼をして重からしめたものは、「浮世風呂」と「浮世床」とであつた。馬琴京傳以外に彼等兩人は江戸文學史上に重要なる地位を占めてゐる。黄表紙合卷には名作なく、洒落本にはやゝ觀るべきもののあつた三馬は、中本に於て始めて其の眞價を發揮したのである。

三馬は酒癖が悪かつたが、四十歳頃よりしては、これを愼みて渡世を專らとした。そこにも彼の理智が閃いてゐる。彼は其の父茂兵衛が酒好きであつたので、毎月酒代として南鐐三片づゝを贈つて孝養を缺かさなかつたと云ふ。書は平林惇信流にて拙からず、又書をも善くし、世に書賛を傳へてゐる。狂歌にも長じ、狂文には中々に旨いものがある。芝增上寺門前廣小路風詠亭の爲に作つた「手打新蕎麥報條」の如きは其の一例であるが、冒頭の一節は次の如くである。

花にかゝく重舌、水に進む甞切、いづれか詩歌を愛でざらんや。鮎川の風味は妙にして、しかも下手の手際にあらずと、長明も鴨南蛮を喰ひ、あし曳の山屋が温飩汁もよしなかへしを繰りすゝらんと、人麿も詞百首に詠みけり。そもそも〳〵、商賣は其のいにしへ、魏晋の頃よりはじまりて、もろこしふん漢土も客あきは、まづ饗應して商賣切の勝につゝを待ちたまふ、日待にござる唐人まで事なきにはあらずしてまたは人間天

且は、二幣も出来る咲かないが、令（ことの）を渡内に下して、一件を高峯の大宰にして[illegible]、兵者出車世の昔より、今にかはらぬ門実[illegible]、人巨大上うさなへもの、に、定めて後長な書き切ては、什具合りのかまに云ふを聞きけり（下略）

三馬は文政五年閏正月六日歿した、歳四十八、まだ前途洋々たる時であつた。深川雲光院内長源院に葬る。法謚を歡譽喜樂本天信士と云ふ。世に彼が辭世とて「善もせず惡も作らず死ぬる身は地藏も笑はず閻魔叱らず」の一詠を傳へてゐるが、實は醫師須藤田宮なるものに依囑して之は代作したもので、榎島の妙見に建てたのである。

門人には樂亭馬笑、古今亭三鳥、徳亭三孝、益亭三友、春亭三暁、築亭西馬、[illegible]亭三笑等十數人あるが、門人の一人狂訓亭三鷺は後の爲永春水で、人情本作家として最も名が高い。三馬の子は幼名を虎之助と云ひ、後に大輔と改め、徳基と稱した。文政十一年、十七歳にして「三國妖狐殺生石」及び「花雛女夫雛再陳」を著はし、作名を式亭虎之助と呼び、後に小三馬と改め、天保五年、父の號を襲いで二世三馬と稱した。家業を營む傍戲作を業としたが、これと云ふ名作もない。「作者部類」には、

思ふに京傳京山は兄弟にて、共に戲作に名たたるすら、珍らしき事なるに、三馬は二世の戲作者なり。抑も

いかなる因果ぞや。是れ前代未聞の奇事ならずや。且つ親の三馬が賣藥をもて、家を起したるは、戯作の虚名によりてなり。かかれば其の子孫の三馬も亦戯作をもて世に知られなば、其の藥店も衰へず、いよ〳〵繁昌すべき事、猶京傳が讀書丸の京山に至りても、世の人忘れざるが如けん。後の三馬を知らず、未だ其の戯作を見ざれども、必ず是れ才子なるべし、さはれ年尚若ければにや、一種も戯作に尤けきものなく、出藍の譽あるべしと聞くことを得ざるのみ。

とあるが、後の三馬は遂に出藍の譽がなかつた。其の二代相襲いで文學者たりしを珍とすべきのみである。

『浮世風呂』四編に金龍山人の跋した一文は、三馬の面目を見るに足るものがあるから、これを以て彼の小照に代へる。

式亭主人は幼年竹馬の友なり。性素より拙樸、生平の茶事殊に鈍し。故に人呼んで面白くなき人とし、且つ話のなき人とす。賈客にして騒人、野暮にして在行。居は市中に在りて自ら隱れ、躬は俗間にありて自ら雅なり。言語を通めかさず、妄に陳套論を吐かず、形容を粹がらず、假にも理窟臭きを論ぜず、ごまえすりの結交、散して開け、來玉への招待、辭して到らず、陰物ならず、陽物ならず、かた〳〵よらずかたよらず、凡そ中位の好男なり。

諢話浮世風呂

八冊、前編文化六年、二編同七年、三編同十年、四編同九年板。式亭三馬作

此の書初編が板行せられた文化六年には、一九の『東海道中膝栗毛』は、既に第八編を出して居る。其の書の市に往々『膝栗毛』の流行を趁うた作の外、三馬の名聲でなく、馬琴に剛ふる所以である。純粋に江戸の水の功能、錢湯の中の種々たる事を寫して立てゝ居るもので、三馬は全く市井生の種々な事を眼前にする作家である。男湯と云ひ、女湯と云ひ、種々の唄をいろ〳〵の種類の人達を集めて、駄洒落や悪ふざけを、連續させたことに、作者の觀察は冴えてゐる。陳腐の種類の種を直ちに見せる。併し自由自在に口を運びかけて、江戸人の性情を活躍させるところは、非凡の機敏と云はねばなるまい。

酩酊氣質

二冊、文化三年板。

『此の書作はもとより一夕の漫戯にて、櫻川甚幸に與へしを、書肆の需により小冊と做して

ありて、「彼甚幸は（慈悲成門人、居芝西應寺町）予が幼少の頃聞及びし一瓢、自笑、三業に等しき身振の達者、物眞似の名人なり。余かれを愛する事久し、故に此の書を授くと云ふ。」と註してゐる。かつぎ上戸以下十二上戸の癖を寫したものだ。讀すまで注意したのは極めて念入りである。

流轉數回 阿古義物語

前編四卷五冊、文化七年板。歌川豐國、同國貞畫。後編六冊、爲永春水補綴、文政九年板。歌川國安畫。

序文及び凡例に依ると、文化三年春火災に遭ひて、下總の佐倉に在りて、此の稿を起したので當時第三回まで草したとある。又其の初めは全部八卷の計畫で、前編四卷だけを刊行したのであつた。當時には珍らしく、曲亭集の考證やら引用書目やらが列べてある。蓋し引用書目の後に、一右に擧ぐる所の書は、阿古義物語前編に引き用ゐるといへども、因襲する所僅に半を過ぎず、其の他採引の書目を載するは、世に易く讀みけるどしの韻にして、自ら大方の笑ひを容るに似たり。舊宮禁制の戲作者だましひ、もとより吾が黨の稿を奪へば、鳥の裏に瓦石を包みることゝしく、不學を蔽うて、博物の招牌を打たてれば、或ひ忽ち下手作者と罵り、一年の素懐自ら空し

す、仍て延引の書までを出して西宮氏を勞はる事とはなりぬ。名を賣る作者、利を射る書肆、可招牌に虛誕ある哉」と自ら嘲笑してゐるところに、作者の惱みが偲ばれてゐる。文化元年には、曲亭馬琴の「[illegible]俳技娘」「[illegible]石言遺響」が刊行され、同二年には、山東京傳の「優曇華物語」、馬琴の「四天王剿盗異錄」「[illegible]」が刊行されて、讀本流行の幕が開かれてゐる時代であつたから、利かぬ氣の、負けじ魂ある三馬は、何小癪なとばかりに、此の書を作したものであらう。卷頭に、「四十八癖」にある阿漕の歌を紅毛讀びに書いて、世俗を嘲したなどは、三馬のやりさうなことである。この彫刻は父有地茂兵衞の手に成つたのである。文章は讀本一流で、「首は鵺、英の如く、胴は由月西山の如く、尾は八文字舍本に齊しくして、咄本に非ざれども、讀本偶院本に似たのけり」と、作者自らも斷つてゐるが、流石に才子の才子たる所がある。

その廣告にもある通り、「作者式亭主人、畫工豊國主人、例のすねけにて一向筆を下し申さず、とやかくやと催促仕り候うち、時光過ぎ易く、早くも五箇年の延引に相成り候段、御贔屓の皆樣恐れ入り奉り候。然る處さる巳年（文化六年）八月朔日より、この巻の著述に取りかゝり、又復延引仕り候て、さる巳の極月朔日より當午（文化七年）の正月までに、第三第四の巻だら／＼急に出來仕り候に付、早速取急ぎ上木仕り、當春の賣出しに相成申し候」と云ひ、「元來此冊子は、文化三年に

第三回まで著述出來これあり候間、第四回目よりは此の度の編述に御座候、發端より三回目までは五年跡の趣向故、文段並に繪組等も別して拙く、流行にも後れ候て、さぞ／＼御目まだるき事と察し奉り、三馬豐國兩主人、甚だ後悔いたし居られ候」と詫び「、後編四卷は當秋九月上旬、相違なく賣出し申候、當年は作者畫工殊の外心進み居り候間、毛頭延引の儀これなく候」と豫約せるにも似ず、遂に三馬の一生に後編の成らなかつたを見ると、作者に取りては、不得意の作であつたに相違ない。

白波雲平、まことの名は寶小四郎重廣と云ふ兇徒と鳴戸橋内とが大磯の遊女愛壽に戀著してよりさま／＼の事變を起し、老狐の靈玉、恩賜の名劍白鳴丸、天竺山の妖女耶魔姫の怪異など事件は事件を生んで、複雜となつたが、前編には主人公阿滿平二はまだ活躍してゐない。要するに怪異談と敵討物とを結びつけたもので、やはり讀本は此の作者の畑でないことを證明してゐる。

柳髮新話　浮世床

初編二冊、文化九年、二編二冊、文化十年板（歌川國直畫）、三編三冊、瀧亭鯉丈續稿、文政六年板。

浮世風呂と同じく、市井の材料としたものが少くない、中には江戸者と上方者との尻取言ひなぞ、浮世風呂の蒸し返しもある、市女の目まぐるしい膝栗毛を心得た趣向であらう、併し雜自在に書きなしたところに、作者のお職が現れて、「浮世風呂」の補遺とも見るべき物である。

四十八癖

初篇二冊、文化八年板、二篇二冊、同十年板、歌川國直畫、三篇一冊、同十四年板、四篇一冊、文政元年板、歌川美丸畫。

浮世風呂と同じく、人の癖を捉へて、巧みにこれを誇張る所に味がある、殊に會話の妙は到る處に伴つてゐて、これも作者の癖である。

古今百馬鹿

三冊、文化十一年板、歌川國直畫。

前書と同じ式のもので、作者は百回まで書き續ける趣向であつたが、四回で終つてゐる。

此の書の初めに三馬の店の廣告が出てゐるが、それに依ると、江戸の水の他に、奇化粧、金勢

丸、小兒百日咳の奇藥、龍樹散、癪の黑藥、箱入歯磨、歯香袋などがあつて「吉例正月二日より松の内可笑き趣向の新作景物に奉呈上候。」と、著書の景物までを記してゐる。此の書にも「江戸の水を附ければいい。」「付けるから、どうぞ買うて來ておくんなさいまし、婀娜文字や豐猫には買うてお遣りだから。」キンニ三馬が所の薄化粧といふ顔の藥をつけましたが、いつそよくのりますよ。」などと、盛んに吹聽してゐる。

人間萬事虛誕計（うそばかり）

前編一冊、文化十年板、歌川國直畫。後編一冊、瀧亭鯉丈續稿、天保四年板、歌川國貞畫。「愛相の好き虛」「空辭儀の虛」「風雅を好む虛」「背自慢の虛」「老婆の虛」「女を嫌ふ壯夫の虛」などありて、一々これにまことをつけて、對照させたところに面白味がある。

善惡表裏人心覗機關（ひとごころのぞきからくり）

二冊、文化十一年板、歌川國直畫。

前書に虛と誠とあるが如く、これには表裏兩面がある。いづれも三馬が人間の弱點を捉へて、

半ば寫實的に再現したものであるが、寫實的に透徹しないで、淺薄な皮相の觀に止るが、稍々世相を描き出したところは、彼ならでは出來ぬ業績である。

解　題　參

諢話浮世風呂

浮世風呂大意

熟監みるに、錢湯ほど捷徑の教諭なるはなし。其の故如何となれば、賢愚、邪正、貧福、貴賤、湯を浴びんとて裸形になるは、天地自然の道理、釋迦も孔子も於三も權助も産まれたまゝの容にて、惜しい欲しいも西の海、さらりと無慾の形なり。慾垢と梵惱と、洗ひ清めて淨湯を浴びれば、旦那樣も折助も、孰が孰やら一般裸體。是れ乃ち生まれた時の産湯から死んだ時の葬灌にて、暮に紅顔の醉客も、朝湯に醒的となるが如く、生死一重が嗚呼まゝならぬかな。されば佛嫌ひの老人も、風呂へ入れば吾しらず念佛を申し、色好みの壯夫も、裸になれば前をおさへて己から恥を知り、猛き武士の、頸から湯をかけられても、人混みぢやと堪忍をまもり、目に見えぬ鬼神を隻腕に雕りたる侠客も、御免なさいと石榴口に屈むは、錢湯の徳ならずや。心ある人に私あれども、心なき湯に私なし。譬へば、人密かに湯の中にて撒屁をすれば、湯はぶく／＼と鳴りて、忽ち泡を浮み出す。嘗て聞く藪の中の矢二郎はしらず、湯の中の人として、湯のおもはくをも恥ぢざらめや。總て錢湯に五常の道あり。湯を以て身を溫め、垢を落し病を治し、草臥を休むるたぐひ則ち仁なり。桶のお明きはござりませぬかと、他の桶に手をかけず、留桶を我儘につかはず、または急いで明けて貸すたぐひ則ち義なり。田

奈何でござい、冷物でござい、御免なさいといひ、或はお早い、お先へと演べ、或はお静かに、お寛りなどいふたぐひ、則ち禮なり。糠、洗粉、輕石、絲瓜の皮にて垢を落し、石子で毛を切るたぐひ則ち智なり。あついといへば水をうめ、ぬるいといへば湯をうめる、お互に背後をながしあふたぐひ則ち信なり。かかるめでたき錢湯なれば、此に浴する人々も、水槽の升、陸湯の桶、方圓の器に随ふ道理を悟りて、湯屋の流し板の如く、己が心を常に磨きて、諸の垢をたけな。人間一生五十年、二度入りの御方あるとも、御一人前の分別あるは湯屋の張札の如く、一心足らぬ萬能膏あり。馬車に附ける薬はあらずも、走馬の千里骨、鞭打つて嘆れる変はりの無二膏あり。口中散を離せば、忠孝一切の妙薬、二種の安神散、逆角煩惱の火の用心は、湯屋の定書に似たり。心に驕奢の風立てば、家財は何時にても早仕舞なり。五倫五常は天地より預り物なれば、大切の品を御持参物なるべし、魚と酒とに魂の失物不レ存、我から招く禍は、他人の一切存じ不レ申事ならずや。名聞利慾の喧嘩口論、喜怒哀樂の高聲御無用。此の文言を守らぬ時は、仕舞湯に入り損ひ、もゝ拔きましたといはれて、後悔手巾を咬むとも益なし。なべて世の中の人心は、錢湯の盥に等しく、善悪に移り易き物なれば、權兵衛が褌から、八兵衛が羽二重に移り、田舎娘の湯具から、令室の緋布へも移る。きのふの襦袢一枚は棚の上へ脱ぎしも、けふの重著は棚の上へ脱ぐに等しく、高貴貧賤は天にあり、善悪邪正は己が招く所

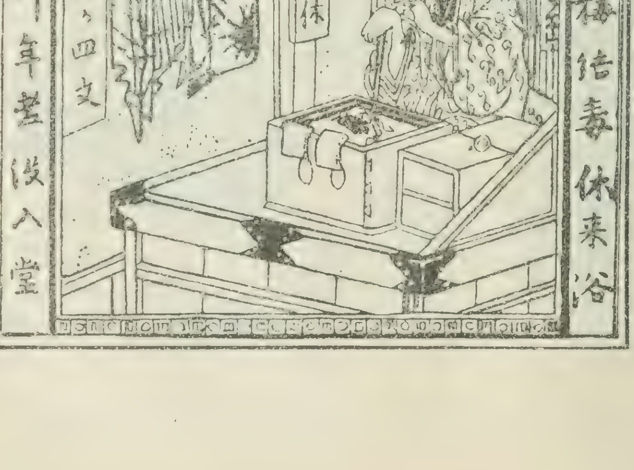
なり。此の意味をとくと悟らば、他の意見は朝湯の如く、己が身に染みわたるべし。たゞ一生の用心は、軀を借切りの戸棚へ納め、魂に錠をおろして、六情を履き違へぬやうに、かたく相守り可申事と、神儒佛の組合行事が牡丹餅ほどの判を居ゑてしかいふ。

維時文化六年、巳の春の發市にせばやと、辰の重九に毫をおこして例の急案、后の觀月の芋を食つて、屁のごとき小冊なる。

石町の寓居に於て

式亭三馬戯題

一夕歌川豊國乃やどりにて
三笑亭可樂が落語を聞
く。其の能弁よく人情に通
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
此滑稽の[illegible]柳巷
花街の[illegible]俗の
[illegible]増補せんとて又
[illegible]前編二冊
まづ男湯の部を[illegible]



諢話浮世風呂 初編巻之上

江戸 式亭三馬戯編

五日の風しづかなれば、早仕舞の牌を出さず、十日の雨穏かなれば、傘の樽をも出さず。月並の休日靜謐にして、賢きも愚かなるも、貴賤おの〳〵恩澤に浴する人心、今日煤湯を沐びて五塵の垢を落し、明日貰湯に入りて六慾の皮を磨き、いつも初湯の心地せらるゝは、げにも朝湯の入加減、嗚呼結構とやいはん。噫有り難いかな。這首にだぶ〳〵といふ俗あれば、彼首にぶう〳〵といふ俗あり。タロクととぐる男あれば、湯う屋と引く女あり。藥店の小二は現金湯としやれて讀めども、儒者の鑿生反つて忍冬湯と誤るは、讀み易く解し難きの類なるべし。女湯の湯舟に簪を墮せば、湯汲みの男、滑川めきて探すとも、御一人前拾文の孔方は、青砥も惜しむべからず。子供衆八文、御供付十六羅漢、偏袒右肩の湯上りに、浴衣姿のかほよはあるとも、當時の師直更に女湯を覗かず。男湯孤ならず、女湯必す鄰にあり。亭主の賓頭盧尊者は、面を撫つる糠袋を貸すいとま、拍子木で留桶をきつかけ、斜に女湯を見やりて、膏藥の流るゝをしらねど、男女風呂を同じうせず、夫婦別あるをしれ

ゐや、女湯の光明皇后、女湯の番頭にかはる。清貧の大鉢に宝の油を拝り、質手巾の雫は落れども、かへつて病老人なしき病人をいれざるは、阿閦仏の化益はあらずとも、千手観音の目通にも見るべきなり。洗粉の袋はぷん〳〵と匂ひて、下男の鼻をうがち、風呂の壁はとん〳〵と叩きて、湯汲の睡を醒まし む。或はきやあ〳〵と鳴き、或はがや〳〵と騒ぎ、あついといへばぬるいと云ひ、うめるといへばうめるなと喚く。どよめきわたる風呂の中、しんみりとして桜丹前をうたへば、六法で振りこむ提燈あり。ノヽ道になりて角力の段を語れば、土俵入の身で出るあり。爰にあはれをとゞめしは、石榴口の冷物ふる声にあはれ、まる程に越れば又、馬もや〳〵といふ人、思ひの外なる発にあらず。いま出ます子供をば、江戸節を唸る爺さまにて、いつも長湯の名をあらはし、御免なさい田舎者は、ありやす好の江戸子にて、こつと一風呂手拭を濡らすのみなり。それは長湯も温湯も、ある八百屋の裏の下と、蜘蛛音頭の白蝶は、浮間の廊下にて、長し頭も当ならぬ、ちよいと黄色なきさゝめ言は、ヰヰネンヰンの合の手あゐつにやんまちおや佛と咳ふまぜれば、法蓮陀佛と吐き出すあり。ほいほれと咽で轆がし、ふゝふんと鼻へ抜かすに引きかへて、是れは猫児かねを出しの声とは、何かも名告る蘭端声。あたまを押へて唸くあれば、尻をたゝいて語るもあり。片足あげて謡ふもあれば、踏みはたかりてどなるもあり。居たり立つたりする中に、寝てでんつるの口三味線は、湯舟の隅に隠るる鼓なし

猿の戯れ口、神祇、釋教、戀、無常、みないりごみの浮世風呂、所はいづくと定めねど、時候は九月なかばの頃、錢湯天明けていまだ店を開かず。

□朝湯の光景

▲昔は錢湯の看板に、矢の形を木にて作り、門口の目印としたり。弓射るといふ心なる由、古き締ざらしにまゝ見及びぬ。今も遠境には用ゐる所あり。

▲夜あけ烏の聲 カア〳〵〳〵。▲朝あきんどの聲「なつと納豆引。」▲家々の火打の音 カチ〳〵〳〵。○此の幕あきに出づる者は、三十あまりの男、ねまきのまゝの細帯にて、下まへとがりにきものをきて、下駄の齒のかくるゝほど裾を引きずり、油で煮染めたやうなる手拭を、いくぢなくだらりと肩に懸け、手のひらへ鹽を載せて、右の指で齒を磨きながら、蟲の這ふやうに歩み來るは、俗にいふ、よい〳〵といふ病の人。ぶた七「オヤまだ明かね、明かね、明かねか。あ、朝寐な箆棒だぜ。」ト獨言をいひつゝ、戸口に立ち ぶた七「ばゝ番頭さん〳〵、起けねか〳〵。おゝ、起けね〳〵。けつぱた焼痕すより、調子はづれに高聲、ウ程、おてお天道樣、おあがや、おあがやひつた。コ、コ、コ、コ、番頭樣、オヤ、オヤ、オヤ〳〵くそ〳〵、くそふだ〳〵。エ、〳〵汙ね。」ト、そばにねてゐる犬に向ひ、ぶた七「手前か〳〵。悪い奴だな。てめだね

だしといて、くそふだ〳〵。サア、こゝ、此畜生々々々。」ト、ごとを云ひながら、歯みがきの唾を犬に吐きかけて、[illegible]

▲頭を捩き上げ、[illegible]あたりを見れば、二十二三の男、肩の手拭、[illegible]、楊枝を[illegible]此の間へ挟み、暖簾をまくる時に小脇にかいこみ[illegible]より、此の頭痛を抜いたと見ゆる二十歳ばかりの男、帯と下駄ばかり目に立つ有様、少し背を屈めて、鼻背を[illegible]きながら来りしが、唾を吐く拍子に、肩の手拭を落す。これらの男[illegible] ▲「ヤ、いはい、手拭が落ちたイ。何よれそうか〳〵しやアがる。」ト、笑ひながら云ふ ■ 下駄の歯でぐるりと廻りながら、手拭を拾へ上げ、後を振り向いて、[illegible]

父犬に「キヤン。」●「畜生め、氣のきかねえ所にうしやァがる。」▲「ナニ、手前が氣のきかねえ[illegible]に、聞く、「ごふア見やア。」●「そねむふなイ、此の野郎、ほゝをのべゝを引つはつたと思つて。なんだ、まだ湯にもかねえか。朝寐な奴らだぜえ。ヱ、人をつけ〳〵にしたア。美しい着物 何時だと思ふ。モウ納豆賣は出直して、金時豆賣りに来る時分だァ。ドレ、手拭を見せや。紅を付けて、化粧〳〵をして、ヘン、いい業晒だぜえ。あれが所からあけて来やがッて。」▲「よせエ。癪をいふなエ。男なら持つて見や。兄が違はア。」●「違ふはずだア、目鼻が無けりやアわさびおろしといふ面だから。かながしらから揚錢を取りさうだア。」

▲「こんべらぼア。」ト、いけじやうだんに溝板の上に突き飛ばすと ●「ア、糞だ。どッこい。」ト、飛び退き「だれかもう踏んづけた跡だ。」よいよい「い、今、今、おやふだ。」●「おめへ踏んだか。何の踏まずとも、な事だ。だれがはんたうのよけいだぜ。」よいよい「よゝよけでも踏だかや、したゝねねたねた。」ト、下駄たゝたつてたたゝたらたた。」▲「何を云ふか根つから判らねえ、コウ、お前の病氣も困つたもんだぜ。まだ能くねえ

か。」よい〳〵「なゝ、なに、最能々々。でゝ大丈夫だ〳〵。こゝ此ん通いだ。夫う〳〵、のゝ、此ん通い大丈夫だァ。」ト、足を踏みしめて見せる。よろけさうになるを堪へて、足を踏みかためながら、よい〳〵「コ、コ、こん様だ〳〵。足や大丈夫だ。こん間も、本所の、伯母たん、伯母たんの方に、火々火事だつた。驅けてつたァ。働えたァ〳〵、思たま働えたア。伯母たん譽めた。伯母様譽めたァ。」●「何云つて譽めた。」よい〳〵「エ、大丈夫だつて大丈夫だつて、夫んぢやァ、讃岐の金毘羅様へ、金毘羅様へお禮參に行か、行かァ、行かでへつて。」▲「堀の内さまを信心さつし。まだ〳〵ほんたうぢやァねえ。あぶねえもんだ。」よい〳〵「堀の内樣、お張御符、いたでた。あいがてて、たゝたてやたちただち。なも妙法蓮華經〳〵〳〵とつて、お題目お題目、さばぺ、さばぺ、唱た。」▲「お題目を三百遍ぢやァ少ねえ。」よい〳〵「あた〳〵、朝飯前だ。お題目、かやば、空心でなくたァけかねてした。おたァお袋、おでえ、おでえ可愛がる。滅法だ〳〵、すて〳〵、すてきに可愛がるからいい。淺草の伯父たん、おでえ、にく惡、がつて、坊主になで、坊坊主になでてはァ。」●「坊主の方が能からう。伯父御の意見につくが能い。」よい〳〵「ナニ〳〵、おふくど〳〵、お袋合點しねえ。おで、おッつけ、花聟、はなもこだァ。またねえ〳〵。れこだァ〳〵、れ、れ、れこだァ。」▲「お侍になるのか。」よひ〳〵「兩刀だ〳〵。たまねえ〳〵。コ、コ、足やあ此ん通い、大、大、大丈夫だァ〳〵。」ト、溝板の上で、ふら〳〵する足を二つ三つ踏みしめる拍子に、湯屋の大戸を内より開く、とたんに、よろ〳〵として、大戸へこけかゝりしが踏み止らず、

戸二つ（いて、内庭へ御向にどいきり、）●▲「ア、あぶねえ〳〵。」（湯屋の番頭戸を明けて表へ下り、二人とも起上る、非力内よい〳〵は仰向に倒れたまゝ、目をまはして、人の顔をしり見てある、）番頭「何所も怪我はしなさんねえか。」●「夫れ見さつし。云ふ口の下から転んだア。」●▲「アハハ、、、、。」よい〳〵「な、な、何、大丈夫だ〳〵。イヒ、、イヒ、、、、、。」ト、負けをしみの苦笑ひして上へあがる　番頭「どなたもお早うございます。」●▲「アイ。」●「かうてきに朝寝だの。」番頭「アイゆうべは夜を更かしましたっ。」▲「あやしいぜ、番頭。」●「娘へでも行つたらう。」番頭「ヘ、、、、、大それた遣いけれども。」ト、番布間で銭箱の上をはたきながら坐る。（二人は裸になり、よい〳〵の方を向いて、）●「又すべるめえぜ。ア、寒い。今朝はめつぽう寒いナア。」▲「とでございやナ。同行でござい。同行々々々。」ト、出して「是れはいゝ。」ト、石榴口を這（そりごしなり、よい〳〵は、はだかになりて、手拭をいゝて、ごしやうたいしに向うをにらみつめて、はいながら、いゝあんじよりであはむ、）「ハテ、やつとこさ。」ト、石榴口をくゞり、「一御免ね〳〵。皆、皆、こいちやアたい。お難い。滅法だ。石川五右衛門だア〳〵。」ト、（湯を汲んで頭を洗ひながら、自分の好きな唄）男「ア、今は吉田町でねんとゞねんとゞよ。」●▲「こいつァいさみだ。そのや、ハそのや。」（ト、二人）て、よいゝ、男「夫で、ねんとゞ、ねんとゞ、とゞとゞねんねん。」（表の方より人が来るは、七十ばかりの隠居、置頭巾、紙子の袖無し羽織、丁稚）に、浴衣を持たせて、杖に縋りしながら　番頭「御隠居さん、今日はお早うございます。」隠居「どうなりや番頭どの、ただいぶ寒くなつたの。」番頭「ハイそろ〳〵加減が違つて参りました。」隠居「イヤ違つた段ではない。」「しつ鶴吉よ、風物を用心しろ。」ト、上へあがり、耳のあたり、珠数を懸紙へ挿みながら、隠居「ヤ、ゆうべは寒さをひれてこまり切つたし。」

それに犬めが、ヤ鳴いた〳〵。此の年になるが、ゆうべほど、犬の吠えた晩は覺えぬ。それから先つちやんと支度して、布團の上にすわつて、煙草をはくり〳〵のんで、暫く考へてゐた所が、さて寐られぬ。さうでもない、内の用心を見ようと思つて、手燭を持つて表裏を見たが、別條もなし。又もとの牀へ這入つたが、イヤ若い者といふものは、よく寐るものだ。おれが起きて家内を氣をつけてあるくに、一人でも目の覺めたやつがない。あれだから油斷はならぬて。コレハびん介どの早かつたの。」びん介「ハイ御隱居さんお早う。ゆうべの地震は何時でござります。」隱居「それよ。あれから暫くして七つが鳴つたから、八つ半前だらう。九は病、五七は雨に四つひでり。」びん介「七つ金とご五水りやうあれ。」隱居「イヤ〳〵、六八ならば風と知るべしぢや。」びん介「ほんに然うだつけ。魂の歌とはきちがへた。道理で風をひいたやうな心持だ。」隱居「イヤサ吹く風の事さ。」びん介「ホイ又違つた。私は又、九が病とあるから、六八も風をひくだらうと思つた。」「ドツトおあぶなう。」ト、つゞいて入る。▲これより追々、人ごみとなる。齒磨賣「梅紅散、薬齒磨、口中一切、ばいこうさん。」「あさアり、むツきん蛤、むツきん。」「ひしほ金山寺、醬油の諸味。」「菜漬、奈良漬、南蠻漬、菜漬はようござい。」伊勢屋「御用は宜しう、伊勢屋はよう。」「御用は能、御用は能、德利のお明きはござりませんかな。」木魚を叩く坊主「なむあみだぶ〳〵、なむあみだぶ。」ホク〳〵〳〵〳〵 番頭「あけませう。」ト、する。坊主「なまみだぶ〳〵〳〵〳〵。今日の御こゝ

あゝ、御先祖代々一切の諸精霊頓証菩提のため、なむあみだぶ/\/\」ト口の内で/\いふ。〔鬼〕「[illegible]此頃は、二人相手に二三度づつ、〔鬼〕「進ぜなせうか」〔西光〕「ナニおありがたう。にやんまいだぶ、にやんまいだぶ。〔鬼〕「西光さん、およへの頭巾は、いつもより新しくなつたやうだ」〔西〕「私が目のさめ[illegible]のさ」〔西〕「オヽ、去年のお十夜に、徳[illegible]すまへお通夜をしたりやア、私が前に[illegible]てあつたのさ。主が知れねえから、つゞくつて持つのさ。頭巾が悪くなつたからノ、小頭を見つけたら捧へよう/\と思つた所、これが信心の徳とやらだ。なう[illegible]さん」〔鬼〕「[illegible]にそれが名[illegible]来[illegible]のお授けだらうよ」ノヤ西光さん。なむ/\/\、にやむあみだぶ/\」ト、[illegible]今日は高屋さまが出る日だらう」〔鬼〕「サヤ叶屋のがから逃つて行かう」〔西〕「、腰が痛え」[illegible]すが、あいつまでもこゝに稲荷や猫のおなじみ[illegible]和尚おいでなさい。朝坊主[illegible]〔番〕「出ねえ出ねえ」〔鬼〕「さう云はずとおくんねえ。丸儲けだ。アイ一文、[illegible]和尚二人一文」〔番〕「出ねえ出ねえ」〔鬼〕「出ねえ/\ッ」ト、口真似しながら、手桶を持つて流へ行く。▲四十余の男、六つばかりの男の子の手をひき、[illegible]のやうにせなかへ負ひしは、三つばかりの女の子、竹[illegible]たる持ちあそびの手桶と、糠袋の[illegible]子を持たせて、なまぬるい口拍子。〔男〕「よい/\/\よ。ア、そりや/\来たぞ。おぶうはどこだ。兄さんやころびなさんなよ。能く下を見てお歩きよ。アよい/\/\よ。アおぶうはこゝだ。そりやそりやはゝつらいだ/\。飛んだり/\。サ、きたなや/\。コレ兄さんはの、わん/\のはゝつらい

を踏まうとしたよ。坊はおとつさんにおんぶだから能いの。」せなかの妹「坊おんぶ。」金「ナ、、オ、、坊はちやんにおんぶ、兄さんはあんよ。サア下りしな。コリヤ〳〵待つたり〳〵。轉ぶよ〳〵、サア兄様一人で衣を脱ぎな。坊の衣はちやんが脱がせる。ソリヤ手を拔いたり。」兄「おいらはモウ衣を脱いだよ。跡の〳〵千次郎、お前は遲い、お前は遲いと。」ト、小さい子の腮かしたをこそぐる 金「コリヤ〳〵、じやうけるなじやうけるな。」傍の人「オヤ、兄様のには似指があるが、鶴様のは無えの。」金「アイ鶴は落しました。へ、、、。福助さん、扨此の日和は能く續く事でござりますね。」福助「さやうさ、是れぢやア豐年でござります。」金「さやうさ。サア這入りませう。コレ〳〵兄さん、滑りなさんな。鶴さんはお持遊を落すまいぞ。アよいところ。福助さん、モウ是れぢやア納まらねえ。子が出來ちやア慘だぜ。」道「能いお樂しみだア。」金「能い苦しみさ。いくおやアねえ。ソリヤあたま〳〵。ハイ子供でござい〳〵。」ト、石榴口へ入り、二人の子を濕しながら、金「兄さんは手のとゞく所を濕しな。ソリヤだぶ〳〵〳〵。ア、、能いぞ能いぞ、温で能いぞ。」徳藏「是れは金兵衛さん、子供しゆには、チトしつはり物でござりませう。」金「ハイ徳藏さん、きのふは何所へお出でなすつた。大分御機けんだつけネ。」徳「ハイ王子へ行きました。」金「ハ、ア海老屋か扇屋かネ。」徳「夫れ許りですめば能いのに、田圃通りを拔けました。」金「例の今口巴屋かネ。ハ、、、、、、。どうも打留はさう來るて。ハ、、、、、。」徳「チトうめて上げよう。子供と

いふも、熱い湯で煉りこんだら湯婆にしたる向て」トン／＼／＼、ト鉄石「湯をかきまぜによ雨に、逆艪の浄瑠璃をかたる人が追い。ナド／＼言た言よ既はまず。ヤツシツシ、ヤツシツシ」トかき鳥「ハイ／＼是れはお嫌うござりますか。達人のそしよ」見さん中〳〵達人だなア」ト宅とつさん、まだ熱いものな。」ト「ヨ熱い事があるものか。やさしいんだが溜瀬うめておくれだ。鶴に強いから、コリヤ／＼、達人のましたよ」ト「鴨鶴やけうとでぬるくなつた」「それよしよし」ト鉄「鳥に頭いそ頭いぞよ」鳥「おとつさん、おいらも強いよ。コレ見な、達入つたよ」ト鳥「ドレ、魚い／＼。下桶でだぶだぶお汲んで、ソレさすりと面白いそ／＼。すヤ、すヤ、鯉の子が泳ぐよ。ソレ、ぶく／＼ぶくぶく。ア、能いそ／＼」見さん能く泥んであつたまるなア」鳥「ホ、よく泥むと、金魚や緋鯉が出るなう。」ト鳥「ナ、出るともさ／＼」鳴く泣くと水虎が出ますよ。こはい事いやいや、水虎出るな。翻は利眼者だから嚇させぬり。なう泣かねえなう」鉄「おいらも弱虫じやア無えよな」鳥「ヲヤ、ヲ、見こんも強いよ。ソリヤ耳の脇にばゝつちいの溜らぬ様に、ヨよいよと。目をねぶつてなア。ソリヤ鼻の下のあ掃除をして、蟲の食付かねえやうに、ヤレ能い子になつたぞ。アレ他所のをぢさんが勘あたよ、ソリヤお舌をべろりとヤレ能い子になつたぞ。ネイ／＼お咳が出る。ヲ、悪いおとつさんだの。あんまりお舌を洗つたから、噴くの方は災があるからよしませう」災〳〵熱がするたよ」鳥「おつかア」

金「ホヽッヽおつかァか。憎い母アめだの。うな〳〵をしてやらう。可愛い坊に灸ウするゝて。」妹「おつかア、うなウ。」金「オヽ〳〵、母アうな〳〵してやらうぞ。」兄「おとつさんモウ出よう。」金「まだまだモツトあつたまつて。」兄「それでもせつねえものを。」金「ナニおとなしくねヘ。鶴は是れ程おとなしいものを。サア〳〵兄さんも鶴も歌を歌ひな。」兄「おゥ月さまいイくゥつゥ、十三なゝつ。」金「そりや。」兄「まだ年や若えなア。」金「あの子を産んで。」兄「この子を産んで。」金「サア〳〵鶴も歌ひな。」妹「おまん抱かちよ。」金「ナ、〳〵、おまんに抱かしよ。夫れから、サア夫れから。」妹「太鼓あつて。」金「ナニ〳〵まだサ、お萬どうけつた。」兄「油買ひに茶ア買ひに。」金「アリヤア兄さん上手だよ。」兄「油屋の縁で。」妹「氷張つて。」金「オヽ氷が張つて。」兄「辷つてころんでエ。」金「あアぶら一升こゥぼしたア。」金「サア鶴も云ひな。」「その油どうちた。」「ト。サア云ひな。次郎殿の犬と。」兄「わアい〳〵、おとつさん違つたア。太郎どんだ物を。」金「ふんな嘗めて。」妹「おイまつた。」金「おとつさんは忘れますなう。ハヽヽヽヽ。」兄「其の犬どうした。」金「サア〳〵たこだ〳〵。」妹「たいこ張つて。」兄「あつちら向いちやアド、ドン。」金「こつちらもド、ドン。」兄「さうぢやアねえ。こつちら向いちやアどどどん。」金「ホイさうか。アどん〳〵どんよ。サアあがりましよ。ハイ出ますもの子ども〳〵。おつかアが待つてゐるだらうぞ。お芋か、餅か、何でも能い子になつた御褒美に、待ち〳〵して居るだら

う。ヤレ能い子になつたぞ。[illegible]初がお浴衣を持つてお迎へに来たぞ。」「初[illegible]」[illegible]
ナ。サア初や、あげるぞよ。ヤレ能い子になつたぞ。」上り端にては医者と隠居 卓庵「御隠居どうして[illegible]
[illegible]伊勢[illegible]、[illegible]、[illegible]が
[illegible]なる者[illegible]うて。ハツ〳〵〵〵〵。」ト、人を嘲るやうに笑ひて、口さきにて切り 隠居「イヤ
此の頃は親類共に病人が[illegible]で、家内の者が代り〳〵に[illegible]伽に[illegible]、[illegible]と取り[illegible]
れて、碁も出しませぬて。」卓庵「ム、それはわるい。ハテ夫れ[illegible]は気の[illegible]千万。[illegible]病体に[illegible]
[illegible]尾[illegible]
で。」[illegible]「仲景さまを[illegible]」
たび[illegible]して、只今では[illegible]でございます。」[illegible]
なすも、[illegible]やと[illegible]られます。」[illegible]でない。[illegible]
といふは、[illegible]に云う[illegible]。[illegible]なる者は、なか〳〵[illegible]
て[illegible]として、[illegible]が知れる[illegible]。ハツ〳〵〵ハ。[illegible]といふ内にも、外[illegible]
[illegible]などの[illegible]、エ、[illegible]といふ事があるて、エ、[illegible]、アノ[illegible]でこつす、息は[illegible]
[illegible]し、人は[illegible]にして[illegible]とある。サ、て[illegible]人の息は[illegible]といふて、[illegible]つた[illegible]

呑んだやうなもので、息がせかく／＼といきだはしいものでござるから、兎角飛んで散亂したがる。此の膈症なる者は、所謂俳諧などを好む人にある病とござつて、人は膈症にして達て俳諧す。人が止めろ止めろといふ程、達て俳諧する者などに生ずる病だて。」隱居「なるほど左樣おつしやれば、俳諧が好きで困りまする。」醫者「イヤそれも、一寸歌仙ぐらゐはよけれど、五十員百員などとくると、留員で又業をなすて。それ御覽じろ、俳諧が好きだ。見ずとも其の通りだ。見脈にして病を指す。此方は聞いたばかりで病を察するわさ。ハツ／＼／＼ハ。ア去り嫌ひがある、食物をお氣をつけられい。其の膈噎翻胃に似て非なる者を鵜飼の症といふ。是れすなはち物を食らつて、すぐに吐くものです。恐らくは鵜飼の症でござらう。難治の症でごつす。あの男等は、匙先より口先が功者で、病家の俗物を捉へては、新渡の唐本には點が無くて讀みにくい。唐人も甚だ杜撰が多い。」杯といふ傍から、「モシ丹溪さま、鷄卵を食べたいと申します、いかゞ致しませう。」と云はれて、「ア、ア、成程、エ、、雞卵は宜しくない。然し食べたいと思はば、あひる卵を少しが能い。」杯と、てにはのやうな事を云ふ男共だ。ハツハツ／＼ハ。歎かはしい事だてナ。ハツ／＼／＼ハ。イヤ、チトお出でなさい。此の間は腹こなしに鞠を初めたでごつす。所謂蹴鞠なるもの、成通卿ほどの高手にもならねど、踏みつぶすまでも大きく腹こなしに能いてナ。チトお出でなさい。ドウダ番頭。所謂主管なる者も大役だしナ。ハツ／＼ハ

ツハ一■■ヽヽヽヽヽヽ今日は何方へ■■ふ、今日は芥子園が書画会から、顧炎武が所に寄つて、山谷が詩会へ廻るが、東坡や放翁が代作を頼むことだらう。とかく隙つぶしが多くて、病家に不音を聞いてならぬ。是れで医者が流行つてはたまらぬ。イヤ然らば、ハツ／＼／＼ハ。ト、浴衣を抱へ出て行

八兵衛といふ男、頭でほつ／＼と湯気をたてて、手ぬぐひを下駄のかけ■に■へまいて、きものをふるつてゐる。松右衛門といふ男、首■にふりさしのさかやきを、あ■■業の■■であらう。元■手紙はも■■頭へかまいと■■、

松右衛門「八兵衛さん、マレ見なさい。深い後をおぶつて、障つたむひげさうな折■をしてゐるが、にがにおかしい、あれが三十■■の通にさまの果てだアこ■■角のとらかア■■さうも■はしもしい、たはしいネ。心がけがわるいと皆あのとほりだ■■八「ハツりやまゝ／＼よ。天■さまはたいふ形だ■■

■「あの御親父は伊勢から出て来て、一代に仕上げた人さ。其のかはり利勘だ。なんでも人に寄つてはゐかねエ。けふは大分魚が見えるから、チト驕つて奉公人に食はせようといふ■■、大きな皿に■■酢煎なら五匹ばかり、尾頭をならべて、鯉が小■原流で、■■■にかまへて居るわな。こはだなら■日買つて焼いて置いて、自身に明日の朝、さけかごを提げて河岸へ行きます。河岸中をぐる／＼廻つても直が出来ぬから、土大根の折を買つて来て、ソレ昨日の焼いたこはだを一匹づゝ入れて、■切大根の煮付、夫れが惣菜。大勢下女はしたがあつても、菜は婆さまが出てあれこれなく盛りわけす。■さまは彼のこはだをなり、／＼と頭からしてやわなから、■魚といふ物は、■にうまいがあるものだ■

といふから、四五十人の手代子供が、よんどころなく首から食はねばならぬ。ソコデ物が廢らぬ。年中朝が茶粥で、晝が汁許り、夜食は澤庵。それも鹽のあた辛い奴だから、二切で湯までの菜になる。今日は佛の日だといふ所が、八杯豆腐が、平の中をゆる〳〵とおよいで居る奴さ。鰹節のはひるおつけは、夷講と生辰ばかり。三度の飯のほかに食ふものは、冷飯を干した糒の鹽いり、その中へ田舍から貰つた味噌豆を入れた所が、豆の數は鉦太鼓で探すほどだア。おめへ、その豆いりのほかは、てめへ作りの醴よ。婆さまが上總產だから、薩摩いりといふ茶の粉を拵へる許り、その外に奢りといふはさつぱりなし。御先祖さまを大切にして、出入りの者に目をかけてやらしつたから、身代はよくなる筈。金が子を產んで家質が流れ込む、商ひでは設かる。暫時のうちに大造なものになつた。」八「なる程、私等が親父の咄を聞くに、先づ酒は夷講ばかりで、常に客のある時は、蕎麥二つを鼻の先へおいて、「サア〳〵お辭儀なしにお上んなさい。」といふ所が、たつた二つだから、客も一つ食つて立つ。そのあとで、「婆どのヤ。さらば相伴しませう、此方もまゐれ。」と、半分づゝ食ふとの事だ。夫れおやア金もたまる筈さネ。」松「先づ第一實利が能いわさ。僅か三十年の間に、地面が三十二三箇所、土藏が三十、穴藏が二十五六、出入りの人數からかけては、事も大造だてネ。」八「それをたつた二三年で潰したネ。」松「さやうさ。失くすは早い物。一文の錢もあだおろそかには設かりませぬ。おまへがた

もお粗いが、錢は使ひ手がねへ。金箔があたら、トヽ番頭、此の番頭もだまつて〳〵して居て、間でも買つたらう」「ハイかぶは小の前に買つたばかりさ」どうも金子といふ奴は溜りきりだ。サアキャア至つて溜る能いものだ。心がけが惡いから溜らぬ。あゝりきたい。この前江戸に居て、今の溜らぬ事があるものか。錢も金も一つ所に集まる。あの賑い所だによつて、諸國の人々が江戸へ出て來て、此の世するではないか。番頭も金を持た病氣なら、國に居てから顔を食つて治まるだらうて居るだらうが、サントどうだ、一昔もあるまいに、一寸〳〵とハねやしました上等しかし見所があるさ。此の番頭はたのもしい。裾の厚い着物が嫌ひでは身に持てぬ。昔は此の着物、潔癖になつては來ぬ限りだと思はつしやい。八兵衛さんも今ではかゝすん一人だとよ。贅分限行〳〵なさいと、世話をやかせるなら、唐の何とかいふ唐人は、寒の内に筍を掘らうとしたら、金の釜を掘り出したといふではあるが、私どもが孝行故、金の釜を掘れねえから、唐金の釜を掘つて來る。朝酒でも存分に飲せるでいゝなあ事ですか、三共ねでも能いのさ。今のどらが、それ程な身上を受取つて、あのざまは不甲斐の罰だ。ナニご親父の葬ひに燒香をすれば、役者のまねをして、上下で居るさうなく。現在親の別れに、泣しもの悔やみもせぬ奴だから、ろくではあるまいと思ふと案の如くだ。サシ藝者の、さし太鼓持の、ヤ何だの彼だのと、さまん〳〵の者を内へ取りこんで、どうひ〳〵と騒いで、茶屋だの女郎屋だの、總つたは轉んだは

内外の物入りが強くなる、仲間の取り遣りはあがつたり大明神、御親父の身の脂をたうとう失くして
しまつた。そのくせ高慢に人を見下して、文盲だの、ヤレ俗物とかやら云つて、茶磨藝を鼻にかけた
がる。茶座敷ばかりも何度拵へたかしれぬわさ。あれがほんの豐後よみの豐後知らずとやらだ。兎角
人は身の用心〳〵。」ト、出て行く。▲田舍出の下男、十能へ煙火をつッかけて持ち来りしが、此の話を聞いて、三助「モノ、金を捨へべい云つて、山
事は悪い事だネ。わしら國サ居たとき、珍事てうような事が有つけヱ。爰でヱ、何云ふかな。己方で
薯蕷と云ひます。」みな〳〵「江戸でも山の芋さ。」三助「モノ、夫んで其の、薯蕷めが、鰻いなつたアだ。」
みな〳〵「ハテナ。」三助「もつともハア、五體揃つてでもねヱ。半分が薯蕷で、半分が鰻子だア。そこで
ハア獵師イ、夫れ見てうつたまげただア。何でも山の神だの祟りか、蟒蛇だつぺい。蟒蛇の化けね
え所が魔性の物に違へねヱ。打殺さア手もねヱ事だが、臨終しねえ時やア氣味悪いと、何がハア、村
内打寄つて評定のした所が、モノ、曾根村の松之丞殿ちふ人は、神功皇后さまの時分から、代々續
いた博識だア、此の世開闢つてからの事を、何でも知らねヱちふ事のねえ人だアから、ハア松之丞ど
の鴈首のう打傾げて、まじイり〳〵見て居つけヱ。サア堪んねえ考へたア、是れえ鰻だと、鰻がまち
がつたら、生神殿う離れて、代々住居のうした、此の村内に住はねえ法もあれ、薯蕷が鰻になつたが
な、モノ鰻が薯蕷になつたがな、二つ一つの内だア。お禰宜どのの占へも、市女の筮つばたきもいら

ねえ、鰻だァ、蟒蛇でもねえ。モノうだけども、雀海中に入つて蛤となるといふ事ア書物にもある
が、山芋が鰻に化けた事は、庭訓の往来、今川了俊、其の外雑書にも、年代記にも、見あたらねえ事だ
と云つけえ。何がハア、山師ちふ者ア、何耳だァかな、早く聞き付けるもんだァ。この事を聞いて掘
掘つて、直ハァ熟談のうしたところが、小判二十両だァ。その二十両で村内へ割付けて、濁酒だァの、
搗びたり餅だァの、あんでもハァ三日正月で遊びつけた。扨その山師どのだァ、あにがはア、今度掘
ものの太夫どのだァ云て、両国へ備ていれて、開帳場の大金まうけべいと思つて、あらかた普請もうし
て、サアはア出あべいとしたところが、サァひよんな事があるもんだ」ト「上どうしたく〳〵。」三助「
サハヤ腹筋いよる事だて。ヱノ半分鰻だと思つた山芋めが、普請中の日数を経た内に、山芋の形が
からなくなつて、皆ハァ鰻になつてしまつたァ。半分山芋だものが、ずら〳〵鰻になつたもんだから
あつちイのたくり、こつちイのたくり、摑むべいとしても指の股さ、ぬる〳〵、ぬる〳〵かへ出て、
によろり〳〵鰻のぼりイするだァ。サァ魂消ゑ物か。がせうぎにかつ摑んだらぎつ死ぬべいサァ
土い埋めたら鰻い死ねて、芋にでもなるべいが、山芋に癖なつちやァ元直にならねえ。」三助「ハアッ
ハ、、、ハ、、、、、。」ト、ひつくりかへつて笑ふ。三助「何にしろかんじんの太夫殿の正体が知れねえから、う
つたまけたの何のおやァねえ。コレサア山師殿大きに目算違へだ、小屋掛けから何から三十両許損のまし

て、やけのやん八い起して、其の鰻を燒えて食つたげだ。一串の割付け三兩二歩何分となる。高い鰻だア。三十兩の蒲燒い、一人で食らつたア。慾の皮が引張つて、さぞ怖かつたんべい。アハ、、、ハハ、、。」 折から風呂の中にて、「湯氣に上つ たさうだ。 ヲイ番頭、目を廻した人があるぜエ。湯氣に上つた上つた。」 番頭「ナニ湯氣に上つた。其れは大變々々。」 ト、ばら〳〵大勢にて、風呂の中より擔ぎ出せば、以前のよい〳〵病人、湯氣に上つてたわいなし。「誰だ誰だ。」「よい〳〵のぶた七だ。」「病人の癖に長湯をするからだ。」「水を吹つかけろ。」「草履を顏へ載せろエ。」「ナニそりやア癲癇だア。刀豆と肩へ書くが能い。」「それこそ早打肩だア。」「ぶた七ヤア引。ぶた七ヤア、イ、ド、ドンチャン〳〵。」「じやうだんぢやアねえ。呼び生けろ〳〵。」て大騒ぎになる。 ト、顏へ水を吹いやう〳〵ぶた七は息を返す。 「どうだぶた七〳〵。氣がついたか〳〵。」「氣はしつかりか。」 よい〳〵「ウ、、、、で、で〻、大ぢやう夫だ、〳〵。おだどうすたの。」 大きな聲で 「湯氣におがつたよ。」 よい〳〵「エ、エ。」「湯氣に上つたよ。」 よい〳〵「湯氣、湯氣に上つた。ム、、ム、、飛だ事たの。最能々々、大丈夫だ〳〵。モウ湯氣下つた、〳〵。夢中々々、夢中だつけ。ヤット〳〵、湯氣下つた。大々、大々、大丈夫だ大丈夫。」 湯殿の男、番頭の言葉に來て奧に寢かせ 兩人の諸聲、「あやあ〳〵引。」「公時、湯出大角豆。」「とう唐黍。」「蒲燒は能う。かばやき。」「瀬戸物燒接。」「やきつぎはござりませんか。」 ムヽやきつぎよ、おらが所の水瓶を頼みてえ。」 やきつぎや「ヘンやつかましい。」

晝時の光景

風呂の中にて、トントントン「うめねへか〳〵。熱いぞ〳〵。うめなせへ〳〵。水に[illegible]湯が出なよ。」[illegible]「すこし。」[illegible]ト、留桶を持ち出づる。▲世話に[illegible]と見えて、手[illegible]コレ若い衆、たかしを能く[illegible]ます。老人はあぶねへ。辷りさうだ。此のまた小桶を並べた事はい、通り路がねへ。コレ水舟の水が溢るによ。だれだか糠ぶくろをあけたあのざまはい、いけぞんざいな。コレ、コレ、[illegible]を足のうらへ踏付けた。エ、穢ねへ。ヘッ、ヘッ、痰を吐くやら、瘡蓋をおとすやら、ヘッ、ヘッ、[illegible]ちはねへぞ。なん妙法蓮華經。」トりのぞき、石榴口より「ヤおびたゞしい尻だ。ヤイ御免なさい。[illegible]がたは悪い事だ。目もとを塞げて居ると、中へ這入んなせへ。跡から這入る事がならねへ。ツ[illegible]、旦様に腰を掛けてばかり居ちやア、どうもならねへ、ヤイ老人でござい。ヤ是れは能い湯だ。此の湯をぬるいと云ふ人は、鐵砲の方へ沈むか、此の格子を外して釜の中へ這入るが能い。ヤレ〳〵けつこうけつこう。ア南無妙法蓮華經。」ト又「清盛さまは火の病われらは[illegible]さん。鐵砲へ沈むと閻魔がうるせへわな。おめへ熱かア、香の物を一切入れてかき廻しねへ。[illegible]沸いて来たぞ。重畳だア。

蝨の食らつた穴へしみて能い鹽梅だぞ。體中へ一粒鹿の子の紋が付いた。蝨もまん更ぢやアねえ。」うた「忍び寄りくる小提灯、伊吾よく〳〵と呼んでも見たが、可愛いよし松は誰と寢た。サ、サ、おとつさんと寢たならよし〳〵。」うた「たとひ山なか三軒家でも、主と二人でくらすなら。」「へこおくしやうめ、心意氣だイ。すつぱり遣つてくりや。」潮來の「ア、づウなイ。まだこオいこい。」三味せんのまね「テコテントン、てこ〳〵、てん〳〵、つん、ほん〳〵。」「すイ靜かにしねえ。三味線が跳ねらア。」「アイ御免ねえ。」「ソリヤ出ます〳〵。ハイ跨ぎます、おゆるしなさい。」「大きな睾丸だぜえ。天窗と鉢合はせをして、睾丸が宙を飛んで行つたア。とんだ人魂だ。」「吉や、頭から睾と打たれちやア合馬アなるめえ、尻から銀で褌をかけやナ。」「うさアねえ。飛車とつぶれて角の通りだ。おきやアがれ。」「イイ出やす。田舎者々々々。」西國の方から初めて江戸へ出て、錢湯の勝手を知らず、きよろ〳〵として、立つてゐたりしが、下帶に新しきもつこう褌が、湯につけてあるを見て 西國者「是れア褌あな事。湯も汲み置いて、手拭まで添へ置くとは、どうする事もならんばい。」トおのれが手拭はしぼりて、褌を乾す懸竿へ擴けおき ▲さてかの新しきもつこう褌を、湯の中から取り上げて、顔を洗ひながら、西國「此の湯は臭か匂ひのする湯だい。ア、臭か事、臭か事。是や何かい。どうした物かい。人ども遣うた跡でも有つつろ。此のまア油どもの浮いた事もふ、のさんばい。ぎら〳〵する事、鯖ども洗うた跡どもの如あるけな。奇妙な匂ひ、是や、打明ける事。」ト、湯を浴びて、盥を湯汲の所へ持つて行く 湯汲「その盥はこゝへお持ちなすつては悪い。やつはりあそこへ置いて、

小桶で汲んで行つてお用けなさい」西国「ナイ〳〵」ト洗湯の男は、下帯を洗ふ事と心得、西国がもちし、かの男は、指図を受けて、元の所に持て行き、小桶に湯を汲んで来り、わざ〳〵下へ置く　西国「此の手拭は新たつとも、なしい此様に、彼所此所、穢居るか。せえたれほう打込うだごと、此のよごれのすさましい事」ト、もつこう面を顰げて見れば、前後に紐のついてある　西国「此の前後に紐共付いたは、此奴ども天窓を打被るときに、この紐にも、頭のあたりへ、からみ付く事か。是や、不辨な事ぢや」ト、かのひもを腕へくる〳〵巻いて、ふんどしをまるめて顔をふくところへ、上方者風呂より出、下湯の際へ来てアヽ見て居て　上方「コリヤ、うるさやい、最前ひやして置いた下帯が無いわい。まだ洗はん物が失せる筈は無いがの。何ぼでも見えん」と言ひうろたへいこ」ト、かの西国者は手拭にして、顔を洗ひかけるを見て、顔を流し、上方「ヤ、こりや滅相ぢや。たりやお前の手拭ぢやあるまいがの」西国「ナイ〳〵、此奴ども、此の垂にうち込うであるけれ、自己所持の手拭、こゝに掛け置いたに」上方「ヤ、そりや大変ぢや。テモサ、滅相な事する人ぢやな。たりや手拭ぢやない。私が下帯ぢやわいの」西国「褌で顔洗ふとは、ヤ、あほらしい。狐に摘まれたか、風気したのぢやないかいな。お前、ウヤ何さんすのぢやい。早う、おこして、其の穢れがんせ。勿體ないこ」ト、顔を流し　西国「道理で、油すべところと思うたテ。今一時過ぐると、皆洗ひ出いてのくる所ぢやいこ。ヘツ、ヘツ。是や、是や。臭かこと思ひ出すと、のさんばい、のさんばい」ト、下湯の中へ下帯を投げ込んで風呂の中へ入る　上方「アハヽヽヽ、ハヽヽヽ、節めちえらい燕栄めぢや。コリヤモウ私が洗うたよりや、いつかう能い。ふとした事でもつけの幸ひぢ

やない。コリヤコレ、ふんどした事で、もつこうの幸ひとけつかるわい。さてきびしい口合ひな。アハ、、、、。」

諢話浮世風呂初編巻之下

江戸　式亭三馬戯編

□午後の光景

一御膳しら菊あまい〳〵。○子供大勢、顔も手足も墨だらけ、黒ん坊の如くになり、目ばかり光らして、どや〳〵と入り来るは、手習から八つ下りと見ゆ。○ありやゝりやれ りうといゝ、ありやりやれ、りやれ〳〵〳〵〳〵。松さんなんざアしよにんな者だぜ。おいらアいやだア。おらア程、蟲拳をして、一極をしたぢやアねえかナ。能うじぶッくるぜえナア。アレおまんねえよ。着物が切れると、内へ歸つて叱られらア。お前の所のかゝさんは縫つちやア呉れめえ。馬「すまあねえ言ふのさ。サア出しなせえ。」竹「何の口功者な、其の時にやア、おかすかねえだらうナ、ヘン〳〵お前の内へ一つ告けて遣らア。」松「こいつア面白え、男なら一つ告けて見ろ。」竹「何だナ。お前達ア能う喧嘩アするぜえなア。」吉さん御免し。御免しだヨ。」吉「おいらア、しんぼうさ、しんぼうだヨ。」

サア湯へ這入らう。誰でも早く這入つた者ァ能い子だッ。」又「湯から上つたらの、あのの貝打をしねえか。」鐵「おいら否。」久「しよにんな子だなァ。そんなら今度つからお前たァ遊ばねエ。」鐵「遊ばねえでも能い。金様と幸さんと芝居事をするァ。石段の立ては威勢が能いつちやァねえヨ。」久「ァム、ム、、そんならおいらもしんに入れねえナ。」鐵「お前は捕人に成んな。」又「俺アいや。」鐵「それ見ねえ。お前抔ァ芝居も見ねえ癖に。」又「エ、いつか行きやした。姉様の宿下りの時に行つたァ。」鐵「おいら抔ァお師匠様から下ると毎日行きまァす。」又「夫れでもお前下手だァ。」鐵「下手でもお前の世話にやァならねえ。打遣つて置きねえ。新さんと龜さんと平さんと三人で、高麗屋と三津五郎と半四郎のたてをしたァ。あのの、あのの、あすこの内の階子での、傘を持つてギックリと睨んだらの、龜公めエ、とオんと落ちたァ。啼きさうな顔をしたつけがの、をばさんが「強い〱、高麗屋といふ者は啼くもんぢやァねえ。」と云つたもんだから、啼かねえ奴さ。」又「何のァノ啼蟲めエ。」幸「鐵さんヤ、是りよをおまへに上げよう。」ト、此の子は子供の内でもおとなしい子なり。おとなしき子には、友達の腕白者も、おのづから言葉が改まるなり。鐵「幸さんおかたじけ。こいつァ能いなう。豐國の繪だよ。威勢が能いぜえ、なァ又公。」又「ム、この源之助は能く書いたなう。おいらが處ぢやァの、みんながの、源之助が贔屓だからの、お屋敷へもの、上方へもの、源之助の繪ばつかり買つて上げるよ。あのの。」吉「エ、きたねえ。お前啣をすると、人の顔へ唾をかけ

るから悪い。」〈「堪忍しねえな。お前も臍が臭えおやァねえか。」ゑ「是りやァ胃気だからおしつけ治らァ。お前こそ鼻の下が真赤だァ。」〈「エヽ是れも蟲のせるだァ。おいらはお前のやうに、鼻糞を甞りやァしやせん。」ゑ「エヽおいらも、お前の様に爪は食ひやせん。」幸「吉さんも又さんも、喧嘩おするもんぢやァねえよ。指切りをして中ァ直んな。」二人「あいよ。」〈「サァお前出しねえ。」ゑ「お前先へ出しねえな。」幸「今度つから中の能いやうに油斎文しな。喉に大の字、額の頭に松の字、ツ、ツ、ツ、ツッ」幸「コレ亀様、此の本をやるからの、俺らも役者にしてくんねえな」ト、合巻の[illegible]をはなむけに[illegible]野、亀「ム、おかたじけ。しんに這入んな。後にの、俺が何にならァ。仁木弾正でせり出しの所をするからの、幸さんに団十郎が男之助で、縁の下から出る所だァ。お前其の時、鼠になって[illegible]時へ出さつし。」亀「おいらはいや。夫れだやァ幸さんに扇で打たれるのだァ。おいらァ、いや／＼。只這ひ出して頭をくらはされる許りだやァ威勢がねえぜなァ。」幸「夫んならの、あのの、幸さんに踏めへられて居なからの、キャッキャりときめねえ。」亀「私は否。夫れだやァ私が男之助より、鼠の方が強くなるものを。」亀「そして俺も否だ。おれが鼠でギックリをすると、幸様が頭を痛く打たれるだらう。」亀「そんなら後にせう。サア皆が這入んな。ありやりやん、りうといふ、ありやりやん、りやんりやん／＼。」ト、風呂の中にて、湯を口に含んで吹きかけるから、ばたばたと叩き散らして、頭から顔に浴びせ合ふうちに、大騒ぎになり　番頭「コレ静かにしねえか。此の

子供は騒々しい。武部源藏さんの手習子は皆いたづらだ。ヤイ靜かにしねえか。」「ソリヤ番頭が始まつたイ。」「皆がお無言だよう。」「竹鶴龜松さんお習ひッ。」「千萬億二郎さんお習ひッ。」番頭「まだ喧しいが。」「夫れ見ねえ、お前だァ。」「なァんの、お前が初めだァ。」「おいらぢやねえよ。あの子だようヨ。」「翌また留められようと思つて。お師匠さんに云つ告けてやらァ。」「ベエ引。」「ム、能い面だ。」「ベエ引。」ひよろ〳〵ひよろ〳〵きながら目を据ゑて、むづかしい顔つきしたる大生酔、往來の人と見えたるが入りきたり 生酔「コヽ、コレ、ば番頭、居るか、ア、居るか、居ねえか。」番頭「ハイ爰に居ります。」生酔「びゝ賓頭盧の手間取を見るやうに、しや、しや、しやちこばつて、ナ、ナビ、高い所に居る。ウハ、、、、ハ、、、。」ト、怖い顔をしながら、折々舌を出して高笑ひをする癖あり 生酔「湯屋の番頭だな。」番頭「ハイ。」生酔「チ違ねか番頭。名は何といふ。名は番頭か。番頭三津五郎か。お、おれが目には六つばかりに見えるから、ば番頭六つ五郎だらう。湯はいくらだ。十文か。」ト、錢入を出しながら、錢箱の張紙をよむ「ナンダ、奴が四文。フム、奴が四文、坊主はいくらだ。野郎が十文、奴が四文では、坊主はたゞ入れるか。エヽ、番頭、どゝ、どうだよ。」番頭笑ひながら「へ、〳〵〳〵。これは奴が四文ぢやァござりませぬ。ぬか四文でござります。」生酔「ムなに、糠四文か。ム、、ム、、コレぬの字をりきんで書けば、奴と讀むは。糠なら糠のやうに、誰にもわかるやうに書け。奴といふ字は、上げて書くと絲鬢奴、下げて書くと剃下奴と讀む。番頭知らねえか。」番頭「ハイ存じませぬ。」生酔「知らざァ宥してやる。

「ナニ其の糠袋も入れて四文か」番「イエ糠ばかりで四文でございます」八「フム糠代か」番「ハイ」八「フム夫れでは、ナニか、糠代番頭代が四文と、貰つておけばいゝ。ウー、ソレから、ナニか、夫れなら其の「ナニか夫れは番頭の看板か」番「イエ左様でございます」番「色々商売に向きない、[illegible]ではなし」番「湯ではかりは言へないか」番「ハイ、諸方から広めを頼まれまして、據所なく広めの遣は致します」八「ヘ、、、、、、、、、、、」番「フム赤切下ひかず膏。番頭」番「ハイ」八「なぜ赤切で手をひかれます」番「ハイ、ヘ、、、、、」八「アノ足へ赤切が切れて歩行かれなければ、手を引いて貰ふが能いそれやねえか。但しネ、手へ赤切が切れた時、足がひかねえなら尤もにもせう、痛くて一足も引かれぬ事はあるまいが、手の切れぬ事はあるまい。ネ、但しあるか。番頭ナ、、ナビ、赤切が手ひかね音だと」番「ハイ手をひかぬ間に治るといふ心でございます」八「ハア呑込みのわるい番頭だ。手をひかぬといふ事があるものかよ。エ、ナニこちらは、風流八人札ではない、アレハ、八人湯か八人散か」番「ハイあれは八人藝でございます」八「フム藝か。ハア、知らぬ藥だな。風流とあるから風藥だな」番「イエ八人藝と申して、一人で八人の眞似を致します」八「ハア奇妙な事を致すな。いくらほど有るものだ」番「イエ賣物ではございません。見る物でもないが、アレハ聞く物でございますよ」八「ナニそのきくが能いわさ」番「六十四文位でございます」八「ハア安いものだナ、一人前八文、

につく。湯錢より安いナ。その藥を呑んで八人藝をしたら、一人前八文づゝ、八八六十四文取つて、湯へ入る時は一人分十文拂ふ。差引くと五十四文づゝ利があるテ。斯う、たから待てよ、コレ、番頭、賣物ではあるまいが、せめて半分賣つてくれぬか。」番頭「ハテとんだ聞きちがひ。あれは八人藝と申して人でござります。」生酔「八人はわかつてゐるんだ。」番頭「イエサ、此方ではいたさぬ。他所できかせるので」生酔「ハテ扨きくから買ふ。きかぬ藥が益にたつものか。」番頭「イエサ藝をする盲人でござります。」生酔「ハテ此の番頭は、何を云つてもわからぬ男だわえ。ア、醉つた。グイップヮ。ア、面倒なことだ。」生酔又を觀めてきよろきよろ見る「アノあちらは何だ。ハテ讀めねえ書きやうだ。おれに讀めねえからだれにも讀めまい。番頭、あれ、あゝ、ありやアなんだ。」番頭「ハイ戲讀丸と讀むさうでござります。」生酔「ム、解毒丸か。」番頭「イエあれは落噺でござります。」生酔「ム、、ハアいろ／＼な物を賣る。能く手が廻るな。道理で高い所へ上つて居るわい。ハ、アヽ、あれ／＼、あの藥が第一だ。どうもいへねえ。グイップヮ。番頭グイップヮ。アヽ、醉つた／＼。あのナレ、夜ばいの藥といふ物は、何を置いても買はねばならぬ。今度は賣るまいと云つても買ふ。」番頭「何でござります。」生酔「アヽ、あれ、あれ／＼、アノ、夜ばいの藥よ」番頭「ヘエ、エ、あれかネ、ハ、、、、ハ、、、、。あれはお前さま、夜ばいでござります。」生酔「夜ばいじやねへ」番頭「寐小便のくすりでござります。ウハ、、、、ハ、、、、。」生酔も又讀み直して、大笑ひをしながら、

其の代りやア一文やるぞ。これで糠をまけやれ。ソシテ手拭も新しいのを貸してくりやれ。酔ひざましに一風呂。イヤどつこいナ。コン番頭、おれが草履は長刀だらうが、檜だらうが、履き違へられては詰らぬぞ。若し違へたら其の代に、裏付を取るぞ。番頭、氣を付けやれ」ト、二階の梯子を上らうとする。番頭「ア、もし／＼、二階は貸切でございます。どうぞ下に成すつて下さりまし」醉「番頭。コレ、お身はいふ／＼の事をいふの。何處でも二階へ貸して貸切とは何うだ。三百六十日晝夜十二時が間、飯も食はず水も呑まず、宿元の用事も足さずに、此の二階を借り切つて、湯へばかり這入つて居る者があるか。さあるなら爰へ出せ、おれが對手になる。もし借り切つた奴があらば不所存者だ。おれが利害を說いて聞かせる。」番頭「イエサ、貸切といふ譯は、店向のおなじみに、仲間を貸借してございますゆゑ、お騒ぎなさる場がござりませぬ。其をお前さまは聞分けのわるい、世話をやかせなさるお方だ。」醉「番頭、コレ、ナニ、其をおれも聞分けのわるい、世話をやかせる男だ。」番頭「ハテ、それでも店向の人、イヤサ世間で樽拔でも、おれが着物をおれが脱いで、おれが睾丸をおれが握つて、おれが湯へ這入ればおれが勝手だ。湯はその方の物、錢はおれが物だから、湯へ入つた跡で、借切の者が兎の角のといはば、體の湯の氣をさまして歸さうかい、其の時湯錢をも、おれに歸しやれな。ナント、是れほどわかる事はあるまい。ナ、何だ、あすこに居る奴らがおれを見て笑ひをる。不届な奴だ。何がをかしい。ヤイ、爰へ來い、

對手になる。うせぬかおのれ」二階の番頭見かねて、階子の上よりだましかける。二階番「モシ〳〵、是れハお上りなさりまし。」生酔ふり仰向いて 生酔「ナニダ、われはなんだ。正體をあらはせろ。」二階番「ハイ 私は二階の番をいたすものでございます。」生酔「ム、二階の番か。」二階番「ハイ。」生酔「番は番頭まで功を經かねえのだナ。よし〳〵、さう聞けば堪忍なる。ナア番頭、下の男のやうにわからぬ男もないものだ。」ト、二階へ上る。二階の戸棚は貸切の衣裝棚ゆゑ、戸に紙を張りて、家々の印を書き付けあり。生酔はきよろ〳〵見廻して、生酔「コレ番とう、おのしが呑むものはなんだ。」二階番「ハイ香煎でございます。」生酔「ム、錢を取るか。」二階番「イエ左樣なものではございませぬ。」生酔「フム八人藝ではないか。」二階番「イエ是れは賣物ではございませぬ。私は茶が嫌ひだから、これを食べます。是れは私ひとりで食べるものでございます。」生酔「ム、それで落ちついた。一杯すそわけをしてくりやれ」ト、一口呑む。「ゲイップウ、ア、醉醒には能いわいな。」二階番「ハイ。」生酔「ぜには取らぬな。」二階番「ハイ。」生酔「そんならモウ一杯くりやれ。」二階番「ハイ〳〵。」又呑む。生酔「ア、能いわいばんとう。」二階番「ハイ、へ、、、、。」生酔「醉醒には能いわい番頭。」二階番「ハイ、何うございますか。」生酔「ハ、ア番頭、何か旨さうな物を食ふの。それは何だ。」二階番「ハイ、あまり退屈いたしますから、晝過の目さましに買つて食べます。」生酔「ム、晝過の目さましか。おれも目をさましたいの。ハ、ア、竹の皮に包んで。ヤ、コレ、番頭、おのし買つたらうが、ナント、それもおすそわけは何うだの。人に見せてばかりは、置かれぬものだてナ。」

[illegible]い、是れはたゞごつけど、穢なうござります。」[illegible]ぶん苦しうない。是れは何といふ物だ」番「ハイ其れはお市といふ菓子でござります。」[illegible]「ムヽ、お市なら饅頭でありさうな物だ。風味には見ても能いわい。」二階番「イヤモシ、そんなにお手をおつけなさつては。」[illegible]「ナゼ悪いか[illegible]食物[illegible]おれもしに[illegible]るまい。[illegible]に及ばぬ。サア[illegible]ばあこ、またほかのへもいぶつこく舐る分は能からう。コレ番頭、モウ一杯くりやれ。」二階番「ハイ[illegible]

[illegible]

[illegible]此の湯の中へいれた物は、其の菓子の[illegible]

[illegible]から聞へて来る。[illegible]

[illegible]南蛮には能いわい[illegible]

[illegible]気儘に存まう[illegible]

[illegible]先[illegible]然らばこそ[illegible]風呂[illegible]上[illegible]に存まう[illegible]

[illegible]是れ[illegible]番頭、[illegible]角力取の[illegible]の様に[illegible]つたか、あの[illegible]

[illegible]でございます。[illegible]

な[illegible]に、人が[illegible]つて居るか。」[illegible]衣裳[illegible]でござります。[illegible]つた[illegible]

寐てでも居ることと思つた。此の疊は貸切ではあるまいな。」二階番「ハイ、さやう。」酔「ムヽ錢は取るまいな。」二階番「ハイ。」酔「夫れでよしと。」ト、ゲイ引て「ドリヤ一風呂。番とう行つて來て呑まう。醉醒には能いわい。」ト、梯子をひよろひよろと下りに行く。金兵衛「とんだ物が來たの。生醉でも程があつたもんだ。ナウ番公、源四郎さん奇妙な奴だネ。」源四郎「左樣さ。先刻から傍で口を出したかつたが、喧嘩になつては悪いと、目を長くして居ました。」二階番「イヤハヤ、呆れたお人さネ。」源「ヤ、傘屋の六郎兵衛さんが亡くなつたさうだネ。」金「ヤレヤレ、氣の毒な。」源「金兵衛さんお前もお出でなさるだらう。」金「久しい馴染だから、供に立ちませう。葬禮は翌の何時だネ。」源「大かた四つでござりませう。遠いお寺だネ。」金「ハ、ア方角はエ。」源「目黒の蛸薬師から、まだ十五六丁あると聞きました。」金「ヤ、夫れは遠い遠い。いつもなら四つと云つても、四つ半九つにもなるが、遠くでは早く出すだらう。」源「左樣さ。しかし葬へは遠くても近くても一日の潰れさ、歸つてから何の用も達せぬやつさ。」金「さやうさやう。ア、悪い方角だネ。二日がけの葬歸りが出來よう。」源「手負があらうて。」金「六郎兵衛さんも能い老人だ。息子達は能く粒が揃つて、皆大丈夫なり、娘はそれぞれにかたづくシ、モウ孫も五六人ある。今往生すれば殘ることは無えのさ。あの人も若い内苦勞したから、としよつて樂をする。今の若者は、としよつてから苦勞する。身持が大きにおべこべだッァ、久しい馴染だつけ。南無あみだぶつ、アッ

て、なむあみだぶつ〳〵」ほ「また〳〵将棊どもが、蠅のたかつたやうにはじめたの〳〵」（左六人あつまりて、将棊をさしゐる）一番「ヤ、横町の草履御出でなさい。又負けようと思つて〳〵」乙「ナニ此の宵将棊め、太言をなさア、一ト番攤をねぶらせると、本氣で勝つた積りで居る〳〵」甲「そんなら、此の跡で教へてやらう」乙「屁でもくんべい團扇だ。どう〳〵いはせてやるぞ」左衛門に何程すこす〳〵」丙「そいつは「マゝよ〳〵、ほまの跡はどうなつた。ハ、、、悪くなつたナア。負けになつたナア。先の齟齬だやア、丸で勝つた将棊だッ。些と見ねえと言うだ」丁「是れでも能いか。勝つて見せようッ」丙「今飛車角二枚渡したらいただから弱り切つたナ。洒落も出ねえ〳〵」丁「飛車と角で将棊に指さぬッ、こつちは王を取りやすッッし、王手。一つそこで合馬か。ヨットと待つたり」丙「きたねえ将棊だナア」丁「銀は惜しい。こゝは桂馬で。ソレそつちが王手だ〳〵」丁「いま〳〵しい奴だ。やつぱり銀にしておけば能いのに」丁「へ、此妙手を指すてナ。サア逃げろ〳〵。能いか〳〵。逃げたナ。そこで何を打つてやらうな。ヤもう間角を突つ込め〳〵」丁「角を突つこめとお出でなすつたか。イヤ角を突つこめとお出でなされたかッ。ソコデト、から打つ、あれで取るか。斯う来る、あゝ行く。若し引いたら尻からひたりと言うなれでも遣つて見ろト〳〵」甲「ハ、ア、おつな事をして来るナ。飛車王手がはいつたら、銀を喰ひ取る計畧だナ〳〵」甲「ナニ飛車もいらぬのさ」甲「此の手合の将棊は、王を詰めようとはしねえで、飛車と角

ばつかり惜しがつて居るぜ。コレ駒ばかり抓んで居ずと、有りつたけ打たつしナ。」先「ハテ、默つて見なさいッ。汝等が知る所にあらずだ。サア〳〵早くしねえか。下手の考へ休むに似たりだ。」後「ナンノ、些と能い手をさすとしやれらア。下手の考へ休むに似ちやり、ベイ引。」ト、口まね。後「ヤ、此のはかりごと究めて好しだぞ。ソレ來い。」先「ヤ、取れ〳〵。」後「イヤ遣れ〳〵。遣つてさせかい。」先「取つてさせ〳〵ッ。能いな〳〵。ソリヤ王手。ヤ逃げたナ〳〵。逃げたの内に横木瓜ッ。イヤ逃げたの内に横木瓜ッ。どうしてくれうナ。是れで行かうかあれで行かうか。まづ斯う行け。ヤきび助〳〵、ヤ逃げたの内に横木瓜。王手、サアどうだ。」後「ハテきびしゝに牡丹唐草かい。斯う引く、天窗からぴしやり。」先「ア、おなまめだん佛。」太吉「まだある〳〵。角を引いて取り捨ててしまはつし。」後「それでも能くないテ。」太「ナニ能いよ。マア引いて取り捨てさつし。」先「ア、やかましい、東西〳〵。一人に五人がゝりだな。大勢の智慧でおれ一人に負けるかい。可哀や〳〵。取り捨てたか。ソリヤ又王手。」太「ソレ引つたくれ〳〵。」先「ア、、ァ、なむさん、そこに桂馬がゐるとは知らねえ。待つて呉れともいはれまいス。」後「そこでお手に。」先「お手は山々、王が三枚飛車角六枚。」後「じやうだんぢやアねえ。」先「お手には山々といふうちにも、香桂前にたたず、金角寺の和尚。」後「銀があるか。」先「銀も一分や二歩はありッ。」源「いかい事渡したなァ。」後「取り捨てる事は綺麗だ。駒はいらねえ。」

も「ヲヽ、盤でばかり指すがいい。負ける氣遣ひなしの木さいから歳迄りや。ヤ、入王とさせまいよ。お打なさる。步を成れと打て。」傳「まア金をいたゞき女郎衆と。」馬「ハヽア惜しい成金を取られた。これかい。是れにて將棊はおだ佛かい。」[illegible]「ヤ是れにて將棊はおだ佛と、斯うしたら。」馬「[illegible]待つたり。これは爰に居たのだの。そんなら、此の香で此の金を取らう。斯うは逃げめえ。」[illegible]「ハヽ、ハア／＼、どうするのだ、二三手過ぎた事を仕直すぜえ。此方の駒まで動かして、大きにお世話な事だ。一人で兩方指すのだ。ァレ、御覧なさい あの通りだ。若殿様のお對手になるやうだ。だれでもしかし何でも佛のいふ通りにしてやらア。斯う氣の能い將棊だ物を。名人だてサ。ソレ、よくは引つたくれねけの夜時雨と責めるだ。」馬「おつに責めよせたナ。待てよ。爰が思案のあとや先ッ。ハテナ、爰が思案のあとや先、ッ。」[illegible]「責められてはチト辟易だて。ハテ、此奴はチト辟易仕るて、ハヽお責めなさるない。ゑ、面さたも精出して、お責めなさるが身のお勤めッ。」[illegible]「勤めといふ字に二つはないッサ。」[illegible]「ヤ、そこへ逃げるやア損だ。其の鄰へ逃げて、むだ駒を遣はさないがいい。」[illegible]「能く口を出すナア。」[illegible]「能い手があるッ。能い手があれば大橋もありやすッさ。」馬「ムヽ、目が晴んで居るから見えねエ。」[illegible]「默つてくたばれ。何にもいふなッ。」馬「何にもいふな、人ではないわッ。」[illegible]「ヤ何にもいふな、人ではないわッ。ソレどこへ行く。」馬「爰へ逃げる。」[illegible]「ア、悪い／＼。もう逃げちやアおへねえ。」[illegible]「ソ

レびたりだ。」先「ア、よんやらまかせろさト。」後「ア、よんやらまかせろさト。」先「ソレよんやらまかせろさト。」源「ソレ／＼そこが油断。」先「ハテ何にもいふな、人ではないわッ。」後「ヤ人ではないわと取る。」太「能いか／＼。」先「ソリヤ何にもいふな、人ではないわト。雪隠へお出でなさい。ア、臭い／＼。」後「いま／＼しい。たうとう雪隠へ。」先「ヤ弱い事／＼。」源「ドレ／＼、おれが敵を打つてやらう。」太「おれが出る。」源「マア待たつし。」「父へほめらが、金銀でもおかつたるい。エヘンエヘン。」五十餘りの母樣、内から迎へに來り門口から母「おらが太吉は何をして居るの。」ト、云ひながら、梯子を上り「コレ太吉や、此の子は何をして居るナ。父さんが仕事をしかけて、今つから店へ行きなさるつて、おのしが歸るのを待つて居なさるわナ。先刻つから首を長くして、モウ歸るか、モウ歸るかと思ふに、再び三寶歸る物ぢやアねえ。父さんかじれ出しなさるだらうかと思つて、ハツ／＼として居るに、ホンニ／＼思ひやりもねえ。能いきぜんだア。飯を食つて椀を突き出すと、モウはや、湯へ行き候と手拭を持つて出たがる。いくつだと思ふ。二十三の四のと、年ばつかり取つて、おれに世話ばつかりやかせて、世が世なら嫁子を貰つて、親をけつこうにすごす時分だア。世間の息子さん方を見たが能い。おのしがやうにうほつほで、遊んであるく者は、又一人とありやアしねえ。怠ける奴に、ろくな事を考へ出した例がねえ。見たくでもねえ、將棊をさして飯の食はれるほどになれば能いけれど、おのしがやうな物あき

なをする者は、萬一に飽きつぽくて、何を一つ遂げた事がねえ。くやしくは石垣へ頭を打付けて、死んででもしまつたが能い。おのしがやうな者は、死んでも親は泣かねえ。」（此の一言、子を思ふ親のことば、意見にはあらで恩愛の情なり）りこ合の「イエサ、もうネ、どなたもお喧しからうが、可愛くも何ともござりません。おへねえなまくら者で、悪くてなりません。あれがお蔭で、私が不断父さまに叱られます。私が蔭になり日向になりして、父さまの前をつくろつて置いても、それでさへ常不断しくじります。人と云ふ者は、何ぞれ彼ぞれ、取得のあるもんでござりやすが、あれに限つちやア、鵜の毛で突いた程もござりません。親に似ねえ子は鬼子とやらで、父様が曲つた事の嫌へな人だのに、あんな子を持ちましたから、世間の人さまに、私が面目次第もねえ。お前方の前でいふは悪いが、全體女が悪いからさ。折角内に仕事をして居る者をば、釣り出しに来てなりません。」（我が子の悪しきを思はず、他人の子を怨むは、愚癡無智の母親氣質、是にて我が子の悪しき源になる。母親たるもの、かゝる類はよくよくつゝしむべき事なり）「四五日も内に居るから、ヤレ/\のう/\としたと思ふと、又は駈け出し、又は駈け出して、本のせいせう乾かしさ。モウ/\、ほんに命も精も續くもんぢやねえ。サア帰つた/\、あて事もねえ。」太吉「今帰らアナ。」母「今帰らアナだやねえ。直に帰るがいゝ。」ト、息子を下りる。豊「太吉めエ、お袋に天井見せられたナ。くやしくは石垣へあたまをぶつ付けて、死んででもしまふが能い。おのしがやうな者は、死んでも親は泣かねえ。」ト、口真似（「ッサ。」をする）太「死んだら一はなかけ

に泣くだらう。」ト、ずるい詞をいふも、おのづから甘やかしたる毒の殘りしなり。▲おなじく口眞似、先「全體友が悪いからさ。」源「アイサ、さやうでごさんやす。おやんなさいやしッ。」二階番頭「サア／＼太吉さんお歸んなせえ。親の詞を背く物ぢやァない。親を不孝にすると、老つて又我が子に不孝をされる。」みな／＼「サア／＼歸らう／＼。」太「アア湯ざめで寒くなつた。湯の中でおつな聲がするぜ。」源「ほんにナア。」二階「あれは座頭の坊が來たから、大かた仙臺淨瑠璃だらう。」五人連の座頭の内、二人の盲人、風呂の中にて、仙臺淨瑠璃を語る。

「さる程に、爰に又、九郎判官義經殿が、八島をさして下らるゝ引。扨早、其の日の出立には、上には赤地の錦の直衣をひつ張り、下には紺の布子のどてらをひつ張りけり引。附き屬ふ御供には、龜井、片岡、伊勢、駿河、西塔の武藏坊、彼等なんどが御供にて、尻から泥水の流れるやうに、下らるゝ引。其の翌も下らるゝ引。また明後日も下らるゝ引。めつたやたらに下らるゝ。扨早、御大將も、長え旅路の事なれば、草臥れ果でだよ。ナント辨慶、何昝をかけべいが解く氣は無えかどさ、おぎやり申せば辨慶に、御大將の事だあ物、隨分謎を解きますべい。そんなら謎をかけべいか。そも／＼眞桑瓜とかけて何と解くと、おぎやり申せば辨慶は、少しばかりは、小首かたぶけ居たりけり引。やう／＼思按が附いたつけと、夫れは何より心易し、そも／＼眞桑瓜とかけては、俵藤太秀郷と解きまする。其の心はあんだんべ。むかでかなはぬと解いたりけり。御

天竺浪人の果でだよ。ソリヤまた辨慶は、日本一の謎解の名人だぞ。よいかへ、すいかへ、八島の浦へ着きにけり。扨いだつは早でかばちこそ起つたやう、爰に西塔の武蔵坊辨慶、刃も四尺、うはさこし八尺の長刀をふりまはすから、傍あたりの鼻ぺちやねこでこまは、いしやア、長刀ア何處へおつ取出した。由著へおつ取出した。いしやア、虎家來う、首引のいこと。おそれ白旗で平へ家の軍勢、それ辨慶が怒つたぞ。蜂の下では桑原々々、頭のいへでは萬歳樂と逃げるやら、疊頭、梨割、車輪、めたゝ切りにしてやるも有り、腕を切らるゝもあり、それとも怪我をするもありけり。ソリヤたまらぬと軍勢ども、とられたりの缺を拾つて繼ではとに、顎のかけをはめかゝと繼だ、なゝとのかけをば腮へ繼で、あこへあかゝの切らるゝもあり。でゝと一寸と命の生まるゝもあり。よつかけ廻つて辨慶が、三尺あまりのあゝすりのとげを、あたまのてつぺんのへどん、ふんづら鬼いたつけ、是れには何がよかんべい。ハテ朧豆腐の黒燒がよかんべいとぞかたりける。中華部代もかさねし萬々歳、貴賤上下おしなべて、感ぜぬ者こそなかりけれ。

▲風呂の中に「ヤンヤ／＼」▲座頭の坊、湯が好いところを目聞にて、日増同然に、風呂より出て來る一人一同に　勘の悪い盲人は、芝居の圍住合の如く、頭と頭を撫に當うて出る盲人は、小桶に湯を汲上て、流し板の上を、両手でおし「イタ、、、」と、痛いと盲人に鉢合ながら行きし風呂から出て來る盲人と頭をかちあわり、「そんなら上は、開盲め。」「ありいらうヤ此奴は、わが方からぶつ突けておいて、俺がいふ事を凡へ返かしを

る。おのれこそ明盲だわい。」栗「イヤ汝が明盲だわい。」柿「イヤ俺は睡つて居る盲だ。」栗「イヤ俺も睡つてゐる盲だ。」柿「又口眞似をしをるか。盲と侮つて。」栗「ハテナ、さういふこゑは、聞いたやうな聲だ。」柿「フフム、なるほど、わしも聞いたやうだ」ト、小首かたむけ栗「ハ、ア柹の都殿ではござらぬか。」柿「いかにも。貴公は栗の都殿ではござらぬか。」二人「イヤこれは〳〵。」柿「誠に其の後はうち絶えました。」栗「一別以来まづ〳〵お達者で。」柿「柹栗勾當の坊殿の所で、お目に懸つたまゝ、ちやうど三年になります。」栗「さやうかな。扨々かやうな瘡相が無くば、お互に擦れ違つてもわかりませぬ。おつぶりは痛みませぬか。」柿「イエ〳〵、何ともござりませぬ。貴公のおあたまは。」栗「イヤずんと痛みもござらぬ。併し座頭同士鉢合をして、オットねぶいッちやうといふ古い咄があつたてナ。」二人「ハ、、ハ、、、、。」柿「コリヤ柚の都、湯をくれるはずではないか」柚「今そこへ汲んで置いた。」柿「爰には無い。」柚「ハテめんようなたつた今汲んだがなう。なるほど無い。」ト、又一杯汲んで来て、傍へ置くと、さいぜんから生酔、せんの桶をそつと取つて、片脇へ除けておきしが、又今度の桶をもそつと片寄せにおく。柿「まだ汲まんが。」柚「今そこへ汲んだわいの。」柿「こゝには無い。」柚「又かいの。コリヤ怪しいわい。貴公使つて、そんな事をいふのではないか。」柿「何ないふざい、まだ使ひもせんもの。ハテめんようなな。」ト、又一つ汲んで来るを、生酔、又取らうとする手をしかと捕へ柿「コリヤ待て。湯を隠す奴をつかまへた。」ト、いふ内、生酔は手を振り離す。出合頭に柚の都が手をとらへて。柚「おのれ太い奴だ。最前

から何杯湯をつかつたか知れねへ。「コレサ〳〵、おれが手だ〳〵。」男「ナニ、桶の縁か。」生「ナニ、おれだよ。コレサ、おれが今汲んで来た所の手だわな。」生「ハテめんようなナ。」男「ハテめんようなナ。」▲生酔、その内に又小桶を取す。生「どこへ汲んで来た。」男「コレこゝへくんで来たよ。」生「ドレどこに。」男「イヤ、たつた今汲んで来たが、ハテめんようなナ。」生「ハテめんようなナ。」番頭笑ひながら「コレ貴様たちに湯を遣つたら、ハテ悪いたづらをする奴があるのかい。イヤ〳〵、これ汲みたてだ。」ト、以前の小桶四つ五つの湯を座頭にかける。「ハイ〳〵、これは忝うござります。」男「これは〳〵ありがたい。扨々悪いいたづらをする奴がござりますよ。」ト、已に汲んだ湯に一度に運ぶる。男「悪い奴だ。ハ、、、、ハ、、、、。コレ貴様達は、なぜ目がつぶれた。」男「ハイ寒の蟲でござります。」男「フムなるほど。夏は蟲干をするから、土用の蟲がないが、寒の蟲はだれも干さないでせう。」座頭不思議さうな顔して、棒「ハイ。」男「イヤサ、寒の蟲は、誰も干さないでせう。」男「それは何の事でござります。」男「寒の蟲よ。」棒「イエ、これは五痛と申して、いろ〳〵の痛の病でござる。」男「ハ、五痛か。いろ〳〵の借の病だと云ひ、高が五貫ばかりなら、一両にも足らぬ事だ。夫れがほんの日腐金だ。」棒「ハテわるい合點、ハ、、、、。」男「イヤ、何も笑ふことはない。イヤナレ、そちらのお座頭ども借の病か。」男「ハイ、イエ私は瘡毒でござります。」男「瘡毒とは何だ。」男「ハイ、へ、。」男「イヤなにも笑ふ事はない。瘡毒るなかの芋掘といふ事か。」棒の称しやれだと心得て「ハ、、、、、マアそんな物で

ござります。」醉「其れには能い療治があるわい。」坤「ハイ何を食べます。」醉「イヤサ療治がある、醫者があるてさ。」一人「ハ、ア。」醉「毎日箱を擔つて呼んで歩くわい。」一人「ヘエ何でござるな。」醫「あれを知らぬか。」一人「まだ存じませぬ。」醉「下疳瘡毒治し。」一人「ハ、、、、、ハ、、、。」醉「然し貴樣達は、三百六十日目を睡つて居るから、眠たくはあるまいな。」坤「ハ、、、、目を塞いで居つても、心は寐ませぬから、ヤハリ寐る時は寐ますのさ。懐胎の女の腹が大きいとて、食を食はずには居らぬ道理でござる。」醉「成程是れはその筈だわい。そちらの人は大分赤く湯出つたナ。無躾ながら、蛸にすると直打のある頭だわい。こちらのお座頭は、白座頭に黒座頭、寒の蟲で盲れた人は冰座頭ト、これまでは座頭も聞えたが、赤座頭とは珍らしいわい。」棗「ハイ、私は小豆に交ぜたのでござります。」醉「ム、能い〳〵、コレ貴公も瘡毒かつ。」棗「イエ、痲疹が目へ這入りまして。」醉「ハ、ア痲疹、ハテとんだ物が目へ這入つたの。這入る時に、何とぞ云ひましたか。」棗「イエ、何とも申しませぬ。」醉「ハテ、ぞんざいな奴だ。大切の目へ這入りながら、案内なしに無作法な奴だナ。まだしも痲疹でしあはせ。海鹿が目へ這入つたら、嚥寐るだらう。目へ這入つては眼病であらうな。」棗「ハイ。」醉「ハテ扨きのどくな。目は人間の眼だ、人の眼とする目へ這入つて、眼病になつては、盲になるはずだ。」トいふ折から、後の人、立つてゐて岡湯を浴びる、とたんの拍子に、又一人の男小桶へ水を汲んでさげ來りしが、ぶちまけて座頭の頭からどつぷり。□「ヨ、冷つこい。ホイ〳〵、己は

おのれに。ヤア、あちらの男、まだ立つてゐて跳をかけた。まだあるまだある。ヤイこちらの男、また頃んで水を浴びせた。男「ハイ、御免なさい。どうも麁相だ、仕方がねへ。」男「エヽ麁相だ」トいふ。もうわし輩ぶは麁相でも濟まうか、俺に水をかけて麁相で濟むか。湯を浴せた上で、水をかけるとは野郎の素麪と思ふか。」男「ハヽヽヽヽ。」男「ヤイ笑ふな。をかしくないぞ。人に水をかけて、其が何んの水かけ論だ。二人ながらおれが對手だぞ。コレ、此の通り、水瓶が頭へ落ちたやうに、一分も濟た、料簡ならねへ。二人ながら出つて相手に。コレ番頭、先刻から喧嘩の對手が欲しかつたが、漸うの事で、二人一時に出來た。とても事の序に飛を欲せ。湯の中を探して見たら、最う二三人ありさうなものだ。皆覺悟しろ。今の二人逃げるな。逃しては番頭對手だぞ。今見ろ、どうするか。」トいきまいてもしまい、番台の見をうたてゐ男が、いてまくしうぬら出して見けにして見れば、ぬかみそ下ゲの「ハイ、輕石で、御前にいはれて」な。輕石でもどいつでも、みんな對手だ。」ト、對手を間違へて、またつ人に、いきなり立つこしつけうう人め。四文一合湯豆腐一杯が關の山で、に、に、濁酒の精食へめ。とんだ奴ぢやアねへかい。誰だと思つて、ただことをつきやアがる。二日の初湯つから大晦日の夜半まで、これん晒しもいいすすぶつ事のねへ東つ子だ。ナア、斯う云つちアしやうがねへれんだけれど。」いきまけば、ハヽヽ、とんだ能いれんだいやなイヤニヤサ、お前までがおつかじある事アねへ。こつちやア大儀な事で料簡して、ちんこ

ゐが糞を踏んだやうな面で通さアな。無面目も程があらア。何處の釣瓶へ引つかゝつた野郎か、水心もしらねヘ泡ア吹かア。コレヤイ、六十六部に、立山の話を聞きやアしめえし、頭ッから威嚇をくふもんかえ。石菖鉢の目高なら、支體相應な孑孑をおつかけてりやアまだしもだに、鯨や鯱を呑まうたア、大それた芥子之助だア。掘抜の足代へ、家鴨が登らうといふ態で、おれに取つてかゝつたのが馬鹿だ。」番頭「ナニサ、まあ能いから料簡しなさい。」生酔「ナ、ナ、なんだ。家鴨だ。あ、あ、家鴨とは、ナ、ナ、なんの事だ。」いさみ「ナニどうしたと。」番頭「ハテサテ。」そばの人「コレお前も生酔の癖にしつッこいからだア。默つて居なせえ。」生酔「ナ、ナ、生酔、俺がいつ生酔だ。俺ア酔やしねえ。コレ酔やアしねえぞ。酔つたと思つたらほんの事たア。當が違ふぞ。眞の事たア。」いさみ「コレ生酔だからふしようすらアエ。さもなけりやア、とつくに張り挫く、だア。」生酔「オ、面白い。は、は、張り挫いて張り挫いて、見、見、見ろ。くそ、うぬ。ほんの事たア、眞の事たがまた眞の事たア。コレヤイ、は、は、張りくじいて見ろエ。ほんの事たが又ほんの事たア。」ト、二三人につかまへられて、ひよろ／＼ひよろ／＼、南京あやつりのごとく、その癖に目を据ゑて睨んでゐる故、いさみをやう／＼に宥めて引き分くる。まんとう「ハテ、おめへ跡でわかる事だわな。皆が知つてゐるから、堪忍してやんなせえ。高が生酔だから、どうもしかたがねえ。」ト、宥めて歸し、さてかの生酔には、まつてかかつて著ものを著せて、表へ出してやると、門口に子供大勢「なアまぬ、粕食れ／＼。」生酔「ナなんだ、此の、と、とッ、唐變木め。」子ども「ほくねん人て

すりん一番め、よね、ほくねえしんなに、かい[illegible]は、大根だ[illegible]まだ稽古[illegible]事だ。イヤまた、ほんの事だが又ほんの事だ[illegible]（あとは大夫の事か、▲ほんに[illegible]さ太夫さん此間は[illegible]稽古屋とおほしき男、[illegible]八、八、ヤ、まはう返す[illegible]（▲さ、芝居の引幕を贔屓に[illegible]ところへ稽古所の月並会には、三味の[illegible]本田[illegible]に出す、はいでつぱりとした男、丁度なしきりなから、）[illegible]イヤ親方、お早い[illegible]さア義遊さん、[illegible]ら満おやけな[illegible]ヤモ春太夫が所を始つてくれた、濃客めが、紙治の茶屋場を出して、丸で[illegible]の氣で語りをるから、憎さも憎しと、紅海鰕の三つ胴をはり出させて、久しぶりの石切をきかせる積りであつたが、赤助がいふには、[illegible]やつぱり音十郎殿に稽古した、先斗町が日[illegible]いて大丈夫だ[illegible]といふから、假橋を出した。」（音十郎[illegible]名人、すなはち吉人桧垣[illegible]なり、[illegible]）[illegible]一本槍ぢやナ。しかし和國の浄瑠璃に、やつぱり住さんの性根で押して行きなされ。それが徳ぢやの見物の請が能くて一割設かるわい。」義「イヤ又いうへも、浪花が例の鍋屋で、中二階を張りをつたわい。的めも借人ぢやな。」（鍋屋とは豊竹麓太夫の事、借人とは浄瑠璃のみそをあけて、語口をむりに上手めかして、わが物に語りくづす類なり。▲語上をいふは、▲浄るりの方語人なるべし、語なり。）[illegible]大借人なり。東へ持つて来もよけれど、的めはあまり仰山過ぎるわい。」（東竹麓前[illegible]の方、若太夫、竜太夫、駒太夫のたぐひを東といふ、竹本筑後掾の方、政太夫、住太夫のたぐひを西といふ）しかし巧い事は巧いナ。ほんまの東口といふものは、まだ〳〵あのやうな物ぢやない。白湯さまはどうおやつたナ。」[illegible]例の通り、白湯と鼻をかむ音ばかりさせをつて、腓の内で咳拂ひばかりし

てけつかる。」太夫「あの人のかたるとき、あの人を牀から出して聞人にして聞かせたい。自由にならぬもんぢや。」番「立會はまだかナ。」太夫「稽古がやつと殘つてある。まだマア今やそこらの事にやいけそもござりませぬ。チトお出でなされ。」義「弦絲は見えるかの。」太夫「こなひだすきとお出でがない、」

長「アあいつも古い下手ふけいきなこゑだ。」ト、立ち別れる、此のやうに人の事ばかり悪くいふ人、おのれ聞く人に悪口をいはれ、牀のなかまで欠伸の聲の高くもかまはず、汗を流して語る。されども湯屋淨瑠璃の三の切語なり。△萬「昨日大師河原へ參つたが、ヤ遠いぞ〳〵、歸りに羽田の辨天へ廻つて、大森の橋の際へ出たがくたびれはてた。ナイ金公、久しく潮來を聞かねえぜ。ちつと唄はつし。」金「へンそんな安いンぢやァねえ。是れでも大體錢をかけて習つたのだァ。潮來をさらふとつて、毎日六七十づゝ錢をつかつたァ。」萬「何につかふ。」金「見あたり次第に湯へ這入つたァ。翌は杵屋のさらひがあらァ。」萬「茶屋か。」金「ウム今ッから湯の中でさらつて、これから彈き合はせだァ。」萬「たまらねえ。」金「ナやなんだか女湯の方で、大きな聲をして喋るぜえ。」萬「新道の藝者の内の婆さんだらう。」金「番頭のわきで聞かう。」萬「こいつァおもしれえ〳〵」

番頭曰く、男湯の殘鬪、女湯の光景、をかしき事さま〴〵あれども、前編の紙數僅かなれば、書きつくしがたく、後編に猶くはしくおめにかけますする。女湯の趣向おもしろく出來の上、來春出版を皆さまが、まつの内早仕舞 めでたし〳〵

女湯之卷自序

嚮に著はす男湯の浮世風呂、一篇這入つた大入に、發客腹をば溫めたれど、湯番のあたる火とゝもに、焚落しの灰となりしは、終湯の入り損ひ、今一足で噫惜しいかな。其の燒板は東も西も、寂湯のせぬ間に今一編と、二度入の御方樣より、休みの翌を俟つ如く、御懇望頻りなり。湯汲の柄杓、作者の毫、まだらくと埒あかずは、六日の菖蒲湯流行に後れ、殘暑の桃湯跡篇なるべし。未だあからぬかあがらぬかと、草稿を急ぐ事長湯の迎へに彷彿たり。然れど小さな智嚢を、糠袋ほど絞るとも、久しい物日の十二銅、ちよいと捻つた趣向もなし。勿論覗いて看もならぬ女湯の別世界、こんな物でもあらうかと、淨湯の樋の當摘棒が、竟に二冊の草紙となりぬ。此の節薪高直に付き、前篇の餘計を轉あてし、二番仕込の女湯なれば、鳥の行水早拵へざつとながして云爾。

文化六年巳の重陽前後五日の急案

江戸前の市隱　式亭三馬題

女中湯入物之圖

附けていふ

小兒を養ふに丸藥の苦きと、水飴の甘きとあり。これを書に喩へば、三史五經は丸藥の苦味にて、稗官野史は水飴の甘味なり。蓋し世に女教の書許多あれども、女大學今川のたぐひ、丸藥の口に苦ければ婦女子も心に味ふこと鮮なし。這の女漫の小冊は、素より淺草の書といへども、心を用ゐて讀む刻は水飴の味ひ易く、善惡邪正の行状は、おのづからに曉得すべし。されば常言にいふ如く、他の風見て吾がふりなほすも、好惡ともに改め給はば、教訓の捷徑となりぬべし。又貴意見は、耳に逆ふ若者も、含笑ある教訓は、聽くに倦まざるものなれば、自然と心にとむるものなり。人々假初の小冊子も心をとゞめて味ひ給はば、大益必ず小益の中にあるべし。云爾

此の書初編は文化巳の年の韶春、蔦屋氏の怒りに觸れて版面ことごとく烏有となりぬ。仍て今般再び増補して、上梓せんことをはかれり。四方の君子、書肆の日に從つて需め給はゞ、著者の幸ひ甚しからんと欽白。

諢話浮世風呂 二編巻之上 〔女中湯之巻〕

江戸戯作者　式亭三馬

□朝湯より晝前のありさま

物もらひの百さへづり、

「一切成就祓、極汚穢毛滯無けれ、穢者有羅之。内外乃玉垣清淨と申。」

「一天四海皆歸妙法、南無高祖日蓮大菩薩、なむ妙法蓮華經〳〵。」

「願はくは此の功徳をもつて、普く一切の衆生に及ぼさん。なむ阿彌陀佛〳〵。」

淨土宗やら、法華やら、八宗九宗入り集ふ女湯の障子を明けて「うす、寒い。」といひながら、肩をぶるぶるとして入り来るは、何文字とか與何とか名告るべき十八九の白歯 よき こと きくといふ昔模様、謎染の新形浴衣を抱へて、おさる「すヤお鯛さん、お早うございますネ。ゆうべは嘸お喧し

「ム、一浄瑠璃がお好きか。[illegible]夕べにお聞なさつたか。[illegible]でもあの生酔[illegible]は夜が更けるのに[illegible]
申しました[illegible]
ござります、それでも節がなくて能い上方さ。伊兵衛さんのやうに、酒癖でないで[illegible]
ちよ、聲が[illegible]違つて下道にうとつて、喉遣い曲角で三つ[illegible]たら[illegible]
くいい気ざんすな、きつい世話やき[illegible]だが、春助[illegible]は[illegible]と、鉄六さんの[illegible]
被ます」[illegible]さやうさ、酒[illegible]の[illegible]も[illegible]
お仕舞が出来ました[illegible]、今[illegible]お[illegible]が一番に来て[illegible]れたから[illegible]
ださ」[illegible]お前ござります[illegible]いつ[illegible]がよいね[illegible]上方[illegible]は今[illegible]
てきなアしい気持さ、[illegible]人が皆るど、上手でもわるいもの[illegible]
[illegible]きよいかネと[illegible]があまり過ぎたぢやアないかネ」[illegible]い、能さ[illegible]
お[illegible]と[illegible]ト、駒下駄をおろして　さみ「ちつとお寄んなはいましな。宿に[illegible]がりますよ。[illegible]
なら。」ト捨臺詞にて風呂へ入る。

[illegible]同じなれど[illegible]白[illegible]うすい[illegible]、白髪も[illegible]になつたれど、ひつじばえの眉毛が、りき[illegible]
[illegible]
[illegible]一味[illegible]、〳〵[illegible]

お擬さんか、おはやいの。」はち「おはやいぢやァねえわな。おめへといふものは、しよにんなもんだの。さうしなせえ。ずゐぶんつき合をしらねえが能いのさ。あれほど待つて居て喚んなといふのに。」きぢ「それでもお前のおまんまは、らちがあかねえものを。」はち「アイサ、大喰ひだからね。きやうさ。至極お前さまのが、御もつともな筋さ。」ト、風呂へ入りいひながら「いまの、お前のところへ寄つたらの、おめへン所のかゝさんがいふには、たつた今行きやした、今し方までお前の來るのを待つて居たわな。どうもあの子はしよにんだねえ、何の角のと嬉しがらせる奴さ。ホンニお前のかゝさんは世辭者だなう。いつそ世事が能いよ。おらが所のかゝさんと來ちやァ、小言ばァつかり云つて、煩くつてならねえもんだやァねえ。」きぢ「能いわな。その代りにとつさんが氣が能いから能いわな。」はち「あんまり氣が能過ぎるから、常日一夜かゝさんに叱られてばつかし居るわな。とつさんの贔屓をするぢやァねえが、傍で齒痒い様だよ。」きぢ「ナニ／＼お前ゆうべは大酒屋かへ。」はち「アヽ、」註に日く、アイといふ返答を、アヽといふは、すべて少女の通り言なり。ト お前は。」はち「わたしは蛭子講の座敷さ。丁度八つに歸つたわな。」きぢ「わたしもそおこも八つ前だつた。」はち「なり酒をのんだから、これ見な、未だに目が腫れぼつてえよ。」きぢ「道理で、色が惡い。」はち「す熱い。」きぢ「熱いか、よわむしだなう。」はち「よわむしぢやァねえわな。お前もあつからうが、此の子のやうな、意地の突つぱつた子はねえよ。」ト、く／＼＼／＼、「ちつとうめておくれ。」しきとからかひ、湯くみ男、わ

「今うめました。そゥなりませんね」ばゞ「いまうめたも、凄まじい。まだあついからうめるがいゝね。三助だなう」[illegible]「三助と云つちやア、たばうめませんよ」[illegible]「そんなら、三助も明神とでもあがめますか」此の[illegible]水をうめないで[illegible]「撮きまはしなさい」[illegible]「いゝだよ。たれが撮きまはすもんか」[illegible]「コゥ、こゝへ沈みな。水の来る所へ」[illegible]「アレサ、あれかね」[illegible]「コゥお三番さん、おめへ、一体何所へ行つたエ」[illegible]「一しまるへ」[illegible]「ヲヤ／＼、お客となつて[illegible]」[illegible]「ヲイヤだれと」[illegible]さんの所から誘はれたからの、おつかさんと[illegible]、一所に行つたわな。お前の所へ人を遣つたら、若道さんと隣の内へ行つたといふから」[illegible]「そうさ、まだ見ねへが[illegible]」[illegible]「此の間[illegible]さ」[illegible]「さうだらうといふやう、ここの綺麗な跡の替り目も見損つたよ」[illegible]寄つて、三さんに講を云つて出たらの、お隣でエヘ／＼といふから、何か開いて見たら、仏前を出して居たわな。鼻色の瑞七さんと、のし松さんが、調をかけたつけ。そのほかは誰が居たか[illegible]け出して来た。ア、まだ熱いやうだ。サア／＼出よう／＼」ト、湯を[illegible]出る。[illegible]男、湯船[illegible]「サア、お嬢ちやん、背中を出しなせへ」ト、湯かける。[illegible]「コレ、此の人はや、お礼が[illegible]東[illegible]のを[illegible]男どつちでもいゝ。どうで一番に縁るもんだ」此のなにしの男は[illegible]といふ人物、此の家に[illegible]女中に、一同に心やすく[illegible]ばゞ「コゥ、ていねいに撮つてくんなせ。いけそんぜへな[illegible]もいけそんずい[illegible]た奴なり[illegible]

ゐたと思ふと、湯をぶつかけて、おしめへにするなう」「ていいけえで能いことさ。垢だつても、まいにち出るもんでねえ。」「さう云ひなさんな。お猿さんのは、猫背なかとさてゐるから、鼠のふんのやうな垢がよれるよ。」「エヽ、置いてもおくれ、能い口だなう。」また、けんくわをせうと思つて、「モウ〳〵水の吹つかけくらは悪いぞ。ア、やかましいのぞもだ。ソレよし。ヤレ〳〵お三味さん、せなかを出さつしやい。」「ソレ出さつしやつた。おらはつせえ。そんせえた親父だなう。」

ト、此の裏のかゝか 三十四五のかみさま、八つばかりの娘を連れ、二つばかりの子を抱きて、門ぐちから ひ長ければ略す。

あぶかつたなう坊や。ヤレ〳〵、内へ這入つたら、温になつたぞ」ト、振り「おかみさん、此のあひだは。」湯やのかみさま、いとこうにゐて、高「ハイ、おはやうございます。両日はけしからぬお寒さでございます。お杉さんおいでかね。オヤ、、、、いつも御げん気で能いぞ。お玉さん、今日はお手なれにはおやすみかえ。」「ハイ、エ。」「ハ、、、おたまけだねえ。」「御覧じましな。わたくしの目様を忍んでは休みたがります。今日もちやんと、お孫さんを欺かして、お休みに致しました。兎角お孫さま贔屓が甘やかし過ぎて困ります。それだから私のいふことはきつぱりお取り上げなしさ。」「まだその筈さ、お前さん。シタガ、変つた物で、女房のお子は、兎角爺親の可愛がるものさ。ハ、、、。お杉さん、何をお持ちだね。お隣かへ。オヤ、、能い物をお持ちだぞ。いつそ凄さかりだ」とたた人

悧巧で能いお子だ。アレ〳〵一人でお洗ひでさ」ト、「ヲヽ、お利口さんかよ。ヲヽ、いいお子だぞ。ドレ〳〵、オヽヨシ〳〵お玉は衣をお脱ぎなら、爰へおよこし。ソレお衣ではないよ。お袴も紋の足袋を脱いで、ソリヤ、お胴着も解いて、ドレ〳〵わんだが意久地もねえ結びやうをした。お襦袢の紐が解けるもんぢやアねえ。サア〳〵、ソリヤよし、サアいい、はやくお湯で溜になりませう。アよい〳〵、よい〳〵」（八歳ばかりの女の子、門口の格子を明けて、）〽「おつかさん〳〵」トいふ。母親、内より出て、〽「なんだお島や。何しに来た」〽「あのね、あのう、お父さんがね、お客があるから、あのう、早くお上りよ。そしてあのう、何処へも道寄のないやうに、たつた今お帰りよ」〽「アイ〳〵、今帰りますよ。誰が来たなう。たま〳〵の湯へ来ても直にお迎へだ、煩さいなう。そしておのしはお手習に行つたぢやアねへか。なんでお帰りだ」〽「今日はね、あのう、お清書だから、清書双紙を取りにさ」〽「そんならさうと、早く行つてお習ひ」〽「アイ、そしてね、あのう、お父さんがね、あのう、今日は御褒美に、お弁当にしてお遣りよ。」〽「また久しいものさ。雨の降らねへ日は、お弁当は入りませんよ」〽「ウヽ、それでも」ト、母を「ヨウ、おつかアさん、お弁当にしておくれな。ヨウ、おまへなにさ、お父さんが、お弁当にしてやれとお云ひだ物を」〽「チヨツ喧しい。そんならお弁当にしてやるから、お菜好みはならないよ」〽「アイ〳〵」ト行く。●傍にゐる人〽「どこのもおんなじことで困りますよ」〽「ハイ〳〵、もう煩くてなり

ませんこ。いかな事でも、お辨當が遲いと宿まで取りに參りますわねへ。さうして、えつさらおつさらお師匠様へ持つて行つてたべます。」「ハヽヽ、いえ又雨降り風間には、轉んだり何角致さぬで、お辨當も能うございますが、お菜が何だわ角だわと、望み好みが煩うございますよ。ヤレ水いれへ插すから花を買つて呉れろの、肉桂が欲しいの、王子水にするから、王子も欲しい事のと、さまざまのねだりごとであくせい仕果てます。」「いえさ何處のもその通りで困ります。金紙だの行成紙だのと、金にもたたぬ事に切りこまざいて遣ひ捨てますし、それにまたアノ、替り繪とやら申してネ、あつちへこつちへひつくり反つて、役者の早がはりの繪がございます。それをお前さん、買ふ程に〳〵、箱に一つはい溜つてさ、わたくしも肝が潰れましたわな。二番目の見いどのは又、合卷とやら申す草雙紙が出るたびに買ひますが、葛籠にしつかり溜りました。ヤレ豐國が能いの、國貞も能いのと、畫工の名まで覺えまして、それは〳〵、今の子供は功者な事でございますよ。」「左様さねえ、私どもの幼少な時分は、鼠の嫁入や、昔噺の赤本が、此の上なしでございました。」「いえさ、何事も移り變る物でございますよ。鬢插を入れ初めた事は、近頃のやうに存じましたが、その前は一面に」「アヽ、みんな摘髱でございました。それがお前さん、髱插だの張籠だのと、調法なことになりました。獨手に髪が結はれます。あの島田くづしのかたちなどは、役者の鬘同然さ。つむりへ乘せさへすれば

手つかずに噺が出來る。ナニサいへ利口なことでござります。其一言のは、頭の上へ酒をかけるとこぼつて顔を
ましたが、また昔へ歸つて、もいつばかり貰つて來た時ぞの嶋田になりましたつけ。上方風に上方風の
こんなものも出て參りますし、キンニヨノ、移り氣なものでござりますね。上方風は上方風ながら
ござりまして、何でも珍らしい事を好みます。此お江戸の人に、お江戸の風を
よ。今時とてもござりますまいかね。

に、御如在はございませんのさ。」「ハイ、私にも合薬でございますが、てりふり町の足袋屋で賣る血の道の薬が能うございます。看板も出てはをりませんが、能く人の知つてるお薬さ。逆上せないで至極よいお薬でございます。あのお薬のお陰で大分よい人がございますから、方々へ教へて上げます。」「七夜の内につければ、乳も出る、ソシテよくしこりも取れて、乳口の明くお薬がございましたつけナ、どう忘れを致しました。何處でか有つたて。」長「ハエそれは、尾張町の平松の黒ぐすりでございませう。あれはよいお薬さ。熊の腹帯だの、子安のお守だの。お雛形だのと。それに／＼有りがたい品を、方々さまからお借り申しました。私がたび／＼産を致しても、子の産は皆な楽じられませ、氣味の悪いものでございますよ。」上「その筈さお前さん。お産まれなすつたら、産湯を徳利に一杯そとおなすつて、胎衣と御一緒にお埋めなさいまし。妨でますが、お乳にお困りなさらぬといふお呪でございます。」「私どもは兎角に子育てがなくて困りますよ。まことにお羨ましい事だ。」上「それでも御總領が、お娘もござらつしやれば澤山でございます。殊に男のお子ではあり、私共は女の子が二人、男の子が二人でございますが、そのうちにも女の子は、ほんに／＼生まれるから死ぬまで厄介さ。」「いゝえ、女の子が心安くて能うございますよ。お前さんのも、お二人男のお子たちなら、一番目のお兄イさんは、丁度能いお年ごろさ。私どもの總領どのも、世話ばつかりやかせて困り切

日まで、晴にも褻にも一人の男だけに、甘やかして奉公にも出しませんから、今ぜの後悔さ。利口発明でも、人中を見ねば、おやくに立ちませぬ。設ける事は知らねども、遣ふ事ばかり功者にはなれますまいと存じます、[illegible]。私しも一番目い、人中で揉まれと申して、[illegible]、いやもう、[illegible]、世人の飯を食はねば、他の気性もつくまいと思ってね、奉公人をつかへばとても、わがまゝを言つて見れば、[illegible]、此の子も[illegible]、[illegible]。御奇特に御奉公させ申しますと、[illegible]。いだけにも、[illegible]、内へ来るなって申しつけましたのも、[illegible]、内へは寄りまで[illegible]、番頭さん下、[illegible]、お手代の馬太郎さんが[illegible]、一寸の間[illegible]、御馳走しました、二度三度の御迎にも、[illegible]、[illegible]、お袋代や、[illegible]、[illegible]、毎日、[illegible]お迎へにいらつしやいます、[illegible]。[illegible]、存じております[illegible]、[illegible]。[illegible]

の挨拶なり。どちらがをばさんか根からわからず。さる「ホンニをばさん、此の頃はお達々しいの。」とり「アイヨ、お前あんばいが惡かつたぢやアねえか。」さる「ソレヨ、その事よ。何最う年病だらうわな。日は惡しの、足腰は不自由なりの、かかつた事ぢやアねえわな、嬉しがるものは嫁許りさ。」とり「何まだその年ぢやアねえわな。」さる「アヽ、上所か、一廻り違はア　最う丁度だわな。」とり「八十か。」さる「ヤレヤレ、可哀さうな事をいふをばさんだ。七十よ。」とり「おや、おや、おれはの去年まで五十九だつけが、取つて六十だヨ。おほかた來年は、本卦歸りだらうといふ噂だ。」さる「此のをばさんは、馬鹿な事ばつかりいふわ。ホンニホンニ、いつも若い元氣だ。」とり「若くなくてさ。おばゝ四十九で信濃へ嫁入りといふけれどの、六十ぢやア脈が上つたよなうをばさん。ハヽヽヽ。」さる「お前はいつも氣さくで能いよ。白髮にはなつても氣は若いヨ。」とり「氣を腐らしたつてはじまらねえ事だ。何でもこちとは貪惜しねえのさ。黑油でもなすつて最う一ぺんお洒落をする氣だものを。嫁に行く口があらばをばさん、仲人してくれなよ。鬼も六十、今が婆盛りだ。アッハッハッハ、、、、。」さる「ハ、、、、、ほんにお前は後生がよからうヨ。」とり「なアに後生も三升も構ふ事か、死んだ後は勝手にするがいい。此の世の事さへも知れねへものが、死んだ先がどう知れるものか、寢酒の一杯づゝも呑んで、快く寢るのが極樂よ。」さる「それよ、お前は

ちッとづゝも酒がいけるだけ、氣の持ち樣が違ふ。こちとらは氣の晴れやうがねへ。年が年百うく〳〵して居るだ。ホンニ〳〵、見たくでもねへしつず、最う〳〵娑婆に倦んじ果てた」トやゝ〳〵、此のをばさんは、今つから娑婆に倦きてつまる物か。死んだ先には酒も肴もねへから、お迦の世界に、百までも壽をするが能いわな」「ヲヽ、否な事ゥなア〳〵、しみ〳〵いやだ。些と早く御來迎樣のお迎へを待つのさ」ト云ふ「イヽ、何の事たな。貴公はねへ。死にたい〳〵といふのも、死にたがつた樣にせよ。お迎へが來たら、最うちつと待つて呉れといふだんべい」トすこしほゝゑむ「ハテ死んで見たら、また生きたがるだらう。追ひ出した娘を思つては、彼の顏を思くいふやうなもんだ。夏が來れば冬が能いといふし、冬が來れば夏が能いといふし、人間といふものは自由のならねへことをいふものよ。そのくせ、不斷息子や娘に云つて聞かせるのさ「手前たちはの、俺が死んで居た日に、美い物をたんと喰はせろとの、死んだ後で日がすめるな。その霊前へお供物を備へ立つて、ナニが燒きすりこ木を削りこんだつて、佛になつて喰ふやら喰はねへやら知れねへ。ツヽ精進日を忘れて、油揚を一枚燒いて着けたの、お膳へや七色唐辛子を上げるよりか、生きて居る内に鰹魚で一杯飲ませるが、はるかに功德だことなア。然うだらうとはうさん。さういふ氣だからの野郎どもも、能く孝行にして商賣を精出すわな。每日前から歸りにはの、なにかしらを竹の皮へ買

つて來ての『サアかゝさん一つあがれ。』と、一合づゝも寐酒を飲ませるしの。」ト、すこしうれし涙で、涙ぐみたるおもむき、「あれもお前、前方はちつと、道樂だつけが、いまでは鹽がしみたか、それは〳〵おとなしくなつて能くかせぎます。爺さまに早く別れたのが、あれが身の締りにもなつたのさ。そん代におれが、あれを育てるにはなうをばさん、海山の苦勞をしたわな。なんとして〳〵、なか〳〵生やさしいことぢやアなかつた。それでも、生まれだちの悪い野郎なら、おほつほであそび歩行いて、いまだに役にも立つめえが、はやく料簡が付いたで、あれもおれも兩だめさ。それにまた娵がすなほなもんでの、朝晩よく氣をつけて呉れるからの、これがまた一つの安氣よ。あれもお前、龍の糞新道の、足右衞門さんの媒人で、不意としたこつて貰つたが、最う足かけ三年になるわな。どうぞ孫が欲しいけれど、埒のあかねえ夫婦さ。あれも授かり者だから、いくら欲しがつても、無い種は出來ねえものよ、なうをばさん。」さる「さうさ、自由にならねえものよなう。おらが内ぢやァ、おれが骸がきかねえから、守が一つ出來ねえのに、年子だァ　ホンニちつとお裾分けしてえ位よ。先の娵が置いて行た子が二人に、今度の嫁が續けて二人、又おめへ出來さうだ。せめて仕事でも精出せばいいが、大酒食れへだから、五日も三日も怠け出すと、細工はあがつたりさ。かゝァどのは長屋中で評判の引きずりよ。うぬが要兒には構はねえで、髪頭ばつかり作り立つて、亭主にはぼろを下げさせるか、屎小便もかけ流しで、

しめしふ一つ洗はうではなし、飯を食へば膳をつき出して、その餓鬼も背負ひ出す。誰も仕手はねへ
から、せう事なしに俺が取り始末をすればこそ、大勢の子持を權に掛つて、內の事は一ッ端も構はねえ。
誰が大勢子を持てといふもんだ。天狗が好きで子を拵へて自慢らしい、呆れ返るといふ事さ。あ
のまアざまあ見なせえ。お前の方へも行くだらうが、椎茸さんに勘平さんといふ天窓をして、なげだしの
いつもやうらし、着殺に着切つて仕まふだ。着物もつお前、身じんまくも能くすれば、ぢゝむさくも
なく、小ざつぱりと洗濯物が着られるのだわな。洗濯物は置け、針を一ツ持つ術も知らねえだ。繕
ひだから、大かた子も出來めえし、教へたらちつと上つて縫物も出來ようと思つたが、何が出來る
うぞ。出來ねへといい子は出來て、ようかし雑巾の振り返しも手にのらねへ。針を一本持たせると、
他屋さんが端をさすやうだ。口は達者にべらべら喋つて、人が一言いへば十言程も口答をする
が、ホンニく、肝の煎れた事よ。聞きなせえ、練盤の上で鰹節を掻いたり、敷居の上へ腰をかけ
いたり、富り合の着を枕にして、いけすうく昼寝する。火鉢の中へは、ひよつくりよと痰を吐いたり、
灰でぐるくと轉がしての、丸いものをいくらも拵へて置くから、おれが後から廻つては掘り出して
捨てれば、意地にかゝつて、お竈さまへ唾を吐くわな。宵っぱりの朝寝坊ときてゐるから、人を呆
あて面白くもねへ芝居話か、てエんくしとしやべつて、そのあげくは寒いからと三つかけ布団をしいて、き

んさつはら暴れ食ひをして、おしかまると高鼾だ。息子どのの寐言と掛合に、ギリ〳〵齒を咬むといふもんだから、喧しくて寐つかれねえ。その合間には、子供らが目を覺して、ギヤア〳〵吼えると、おつかもこつちも一時に泣き出す。サアそれでも起さねえぢやア目がさめねえ。それだ物だから、夜がな夜一夜、騷々しくてならねえよ、をばさん。」 とり「いいわな、それでも夫婦中がよくば。此方の知つた事ぢやアなし、打遣つて置きなせえ。お前が世話やき過ぎらア。」 とら「何俺は構はねえのさ。夫婦中がよくば、夫婦喧嘩もねえ筈だが、親子喧嘩の合間こまには夫婦喧嘩さ。出しええもしねえ癖に出て行けといふ。片々どのは見くびつてゐるの。その後は、科もねえ行燈へ當つて、暗くもねえものを、エ、暗い明りだなアんの角のと燈心を抓み込んで、此の高い油をぼつぼと減らすか、こつちら殿はこつちら殿で、あたけ散らして、傍にある入物小鉢は、その度に打壞すだ。瀨戸物燒繼と塗師屋は常得意さ。あれでも濟まねえもんだが、ほんに〳〵、からつきり氣の休まる間がねえ。」 とり「ハテ、そんな事に苦勞するはお前の損だよ。氣で氣が休まらねえのだ。後生を願はずと、此の世を極樂にしなせえ。お前が修羅を燃すと内中が納まらねえから、やつぱり地獄の苦しみだわな。おれがやうに氣を持つても、これでも姑は喧しいといはれ勝だ。お前も五十年あとには二十歳だなう。そんなら五十年あとの氣になつて、お前が嫁で、嫁が姑のやうにあしらふ氣になれば、七面倒な事はねえ。家を

納るために、嫁を取つてあてがふからは、姑は遠くへ退いてゐるがいい」とかく姑が口を出すと叱られるよ。お前死にたい〳〵といふから、死んだ氣になつて居れば、何も喧しい事はねえとさ」「それをはさん、お前までが嫁の贔屓をするから」「ハテ、誰が贔屓をする者か」「これがお前の愚痴だな。俺ア女だけれど、心は男のやうだから、愚痴な事は嫌へだ。そんな事をいふ間に、大般若經の建立にでも出なせえ。内に居るから惡い。おいらは毎日お念佛だ。ハアさうだぞ、と囃して、鉦を叩いて出なせえ。氣がはれてとんだ能いよ。いつまで活きるもんだなア」「そんな事はこちら追つて聞きなせエ」「ヱ、役にも立たねえ。ホイ、寒くなつた。お前最うお上りか」「お十夜には來なせえよ」「さう世間信坊が札を二つ持つて往くだらう」「アイ〳〵、どうぞして參りてえもんだ」「もんださやうでござえ」とつさと出かけなせえ」ト、風呂へ入る ●三十位の女房、人柄のよい風俗、帶を下に長く、着なしこ、もみあげの」「ヲヤ〳〵、お嬢さんでございますかえ。あのお子さまは、すこし見申さぬ内におみ大きくおなりなさいましたネ。もう御幾年お幾つでございますえ」「ハイ九つになります。トモ、、、」「アノお宿下りでございますかえ」「ハイ、三夜泊りにお暇を頂きました」「それは宜しうございます。御勤めと申すものは、お少さい内から、御奉公が出來て宜しうございますねえ」お幾つからお上げなさいましたネ」「ハイ、六つの秋御奉公に上げました」「ヘヱ、よく〳〵思ひ切つてネエ」「ハイ、乳母を付けて出しま

きぢ「ハイ、六ッの秋御奉公に上げました。」いぬ「ヘエ、よく思ひ切つて子エ。」きぢ「ハイサ、乳母を付けて出しましたから、只今までも御奉公が勤まりますが、最う早、我儘者で困ります。」いぬ「イエサ、やんちやんが能うございますのさ。併し、お乳母どのが大體ではございませんネ。何は、御稽古は何うなさいますえ。」きぢ「ハイ、藤間さんがお屋敷へお上んなさいますから、やはりお屋敷でいたします。」いぬ「それは、幸ひな事でございます。モウ餘程お上げなさいましたらう。」きぢ「ハイ、何か埒もございません。それでも此の子は好きでござりますから、覺えもよい樣でござります。ヘ、、、、、。」いぬ「大かた芝居をおねだりでございませうネ。」きぢ「ハイ、最う二軒見せましたが、今日はお寺詣りに連れて參じますのさ。これが下つて居りますうちは、何角手につきませんで、モウ/\用がさつぱり片付きません。明日は早々お屋敷へ上げます。」いぬ「ナゼエ、追願ひをなすつて、もう二三日お泊めなさいよしなネエ、お鍋さん。オホ、、、、。ホンニ私共へも些とおよこし申しなさいまし。お釜と丁度能いお友達だ。」きぢ「ハイ、有り難う。ホンニお釜さんもきつい御成人でございます。毎日よく御稽古にお通ひなさいます。」いぬ「ハイ、もう脊丈ばかり延びまして、おとなしくございません。ヤレさらへ、ソレさらへと申して、やう/\さらひます。兎角無精で困りますよ。それにお前さんネ、御縁がなくて、どうも御奉公の口が外れます。此方で上げたいと思へば先樣へ濟ます、御意

いゝえ、これは此方が不承知なので、度々御目見えに出ますが、兎角に故障がございまして、ネエ、、、、旦那がモウ、堅物なものでございますから、、、、、、」「さやうで、何事も御縁でございますからね。そんなお氣長になすつていらしつたら、御本宅の方のお嬢さんが、どうか私しに、旦那遊ばしたら宜しからう、内に置いてといふのに抱へて置いても、旦那の氣に叶つてみますと、お屋敷から上げまするお勝手を、御新造さまがお世話して下さいまして、宜しいさうなのですが、此旦那も大のお屋敷さまは、お前の謹い所で、固物でございましたが、みんなからいかに何か、萬事に付け大ざつぱでございますよ。それに御新造さまが、いつもお氣付でいらつしやるので、この頃も前の小僧のやうにお成りなすつても、お世話なすつてましたが、至極お堅い方でございますので、奥樣の御意に入りましたら、名を付けて呼びつけ遊ばさうとお考へなすつていらつしやいます。お茶をいたゞいて御目通りなさいまして、お客さまのいらつしやる度に、此の子に御歌を遊ばさせてさうでございまして、誠に有りがたい事でございます。幼少から上げて頂きました私にも御奥一生忘れては濟みませんのさ。さりながら、婚禮も漸く整いましてね、この上まではお人様には、家を立てかうくなりまし、何も角も、只今からは、皆に人達に添ふ直しますから、ホホホ、いつも御新造さまにおいでなさいますよ」「さやうでございませう。しかし樣子を御通りになすつて、あの若子さまの仰しやるには、お妹子樣におなりますから、無駄はございません。それはもうおとつさんのお稽事でございますね。

ホヽヽヽヽ。ホヽヽ些とおよこし申しなさいまし。私どものお釜に地を弾かせて、何ぞお踊をなさいましな。チト拝見いたしたうございます。」きぢ「ハイありがたう。コレ御挨拶を申しやれ。此の子はさ。」山「ハイ有りがたう。」きぢ「お釜さんは、お琴もなさいますネ。」いぬ「ハイ、生田は習はせましたが、此の間は尼駄さまの方へ上げました。モウ中許を取りました。」きぢ「それは宜しうございます。チトもしお話しに。」いぬ「ハイ有りがたう。」ト、別 ●上方ものゝ女、ずんぐりとした風俗、色白にこ〳〵塗り、太い笄を、白紙にてぐる〳〵と巻きたるは湯気にて、鼈甲の反らぬ爲なり、 侍厚く、目の縁は紅のぼかし、口紅黒光りに濃●可愛らしい声にて かみがた「お山さん、えらう寒いな。何ぢやとトトたウ此間はお腹の耦合がわるうて、夜さり毎に腹痛でずつないわいな。それおやさかい風呂になと入つて温めてこまそと思うて、なアんぼも入つておやわいな。お山さんあれ見イ、お家さんの傍に立つて居なます嬰児さんを見イな。ありや何色ぢや知らん。」お山「あれかエ、あれは紅かけ花色といふのさ。」かみ「いつかう能う染めておやなア。」山「薄紫といふやうなあんばいで、意氣だねエ。」かみ「いつかう粋おやナ。こちや江戸紫なら大好き〳〵。こちやあないな著物がしてほしいわエ。お山さん、あつちや向きんか。」山「流しておくれか、夫れはお憚りだネ。」かみ「何のいな。チト能う肥えておやなア。」山「いやよ。太つたやうはしいよ〳〵否だ。酢でも呑んで痩せたいよ。」かみ「なんのマア、肥えたが能いおやないかいな。」山「それでもお前、ほつそりすうわり柳腰とさへいふおやアねへかね。」かみ「かいな、こち

やうたい、難儀はせいで能いかと思うたら、わしでど走り暦せうなら、横に寝て転けるから、ヤツと世に
おやつたら暦か、、、、、、、ハア四つ打つたわいな。ト「能いひなやいな。ツイと最前打つておや
最う九つかい昼おやがな」ヤアヤアおまへ、日は短いわいな。ト「さいな。それから往んだら、わし所へ
お出でて飯食ひんか。ト此の風にれた評判して気て見たいと、千度いうたけれど、こちのが其儘
しだやつたが、今日はどうやら、出て気いて食はそうと、此様に言うておやきかい。其は丸で
おん上とは何だいな。三郎兵衛でいふ艦ぢやがな。お前も来て見いな」ト言ひませいやな。まつかな。
ち、なんたで見るもいや。丸を吹くといひたはるから、変顔かと思うたら、能かいナ、鼠味のわ
るい。江戸ぢやわ、饅をしやれてそといひやすふにゆ何ぢやい、甚、あほらしい。真とにてま
んのこつちやいな。此の様だから嘘き、上がりの丸とはなんだな」ト「中がないさかい、丸たか
わいな」ト「そんなら、どつちらも五分々々のこどつけたな」ト「さいな、御當地の龍なとい
ふはな、どないな仕方かやと思うたら、あほらしいナア、喰物おやさうて、上でいふ離懸でやさかい
嘘が辛うて、ト、やくたいぢや。上の擂へ方は、又あないなもないもんぢやない。酒一合飲んだとは
で喰物がやさかい、酒の下料にたとすうものなら、いつかう能いおやる。これや最う大好ぢやアノ、鰻な
ども御當地のは、和いばかりでもみないがナ。上の鰻といふたらまア、どないなもんだやいな。名品い

所がマァ、京で上の生洲な、大坂で大正ナ。その外に川魚屋もまだまあ多とあれどナ、玉というたら的等ぢや。何ぢやろとマァ、鐵串にさして燒くぢや。ハ、その燒いた後で、能い程づゝに切つてナ、平に入れてぎつしりと蓋して出すさかいに、なんぼでもさめるといふ案じがないわいナ。」山「江戸ぢやァ、そんな吝な事は流行らねえのさ。江戸前の樺燒は、ほつほと湯氣の立つのを、皿へならべて出す、たべるうちにさめたらその儘置いて、お代りの燒きたてを食べるが江戸子さ。さめると猫に持つて行つて遣らうと、竹の皮へ包んでかへる人は、よつぽど勘定高な人さ。」かみ「デおますか。それがマア、何で江戸子ぢやナ。物の廢りにならんやうにしてこそ、自慢したが能いわいナ。いしこらしう江戸子ぢや何たら角たら云うても、上の者の目から見ては、トトやくたいぢやがな。自慢らしういふ事が皆へこたこぢや。ぢやによつて、江戸ッ子はへげたれぢやといふわいな。」山「へげたれでも能いのさ。江戸ッ子のありがたさには、生まれ落ちるから死ぬまで、生まれた土地を一寸も離れねえよ。アノ、お前方の樣に、京で生まれて大坂に住つたり、樣々にまごつき廻つても、結句の果てはあの恐いお江戸だから、けふまで暮してるるぢやァねえかナ。それだから、お前方の事を、上方ぜえろくといふわな。」かみ「ぜえろくとは何のこつちやエ。」山「さいろくさ。」かみ「さいろくとは何の事でやエ。」山「知れずはいいわな。」かみ「へ、關東べいが、さいろくをぜえろくと、けたいな詞つきぢやなア。お

思外も、おのよけも、鶯音ござえも、かんのんさま、何のこつちやのう。さうだから斯うだから、ありますへ。ひふとはなんだやへ。」「思ふから吹かふから、故といふ事よ。そしてまた、上方のさかいとは何だよ。」「ソレさかいとはさ、物の境目さ。ハイ、跡の限る所が境ぢやによつて、さうぢやさかいに、斯うした境と云ふのぢやわいな。」「ハテそんなら云はうか。」「江戸詞のからを笑ひではるが、百人一首の歌に何とあるぞ。」「ソリヤモウ、百人一首ぢやで。」「シテ人首やない百人一首もやれいなふだまア、しやくにんしや云はいで頼もしいす。」「ヤそりやア、わたしが云ひそこねたにもしろ、まさにまアそこねへぢやない。言ひ損ひぢや。」「えらう聞きづらいすぜ。芝居なと見るに、今が最期だ、観念閑たらいうたり、大阪の嵐座蛇の角のいうて、萬葉の狂言のと、とてもわたが聞きづらいものや。てかの人のたいさかい、よう済んである。」「そりやア、上がたも悪い／＼。ひまれんやつ……とはとは醜婆かい。あつたねエ。江戸では叱るといふのす。それそんな片言は申しません。」「三どうまれひかる、なるほどこのや貴が讀つた。そしたら其の、百人一首は何のことゐ……。ぞからといふ詞の譬さ。能くお聞きよ。百人一首の歌に、文屋康秀、吹くからに秋の草木のしをるれば、あみツレ吹くからに、ネ、よしかネ。吹くのゆゑにといふことを、吹くからにさ。なんぼ上方ですかい／＼と云つても、吹くさかい、秋の草木のしをるればとは、詠みはいたしやせん。」「とつさる様さう聞き

や、おまへのがほんまに乙もらしいが、ハテ云や何ぼでもいはれるわいな。」山「大願成就でも何でも、利口をじこうといつたり、立派をぎつぽ、狐をけつねといふより能いのさ。『五音相通とか、何とかが適つてゐるから、無理ぢやァねえ。」と、此中も博識な人がお話しだつけ。『延引だの観音だのと、あいうえおの上へ、んの字が乗れば、五音相通で、恩愛、観音、延引、善悪などといふものだ。」と、能く教へなすつたから、今度お前が江戸詞を笑つたら、一番締めてやらうと思つて待つてゐたわな。」かみ「さうかいな。そんならまァ、くわんのんも能いわト、からも能いわト、扨又関東べいぢや、どうしべい、斯うしべい。行くべい、帰るべいとは、扨見たうむないナァ。」山「それもネ、萬葉集とやらその外神さまの時分の本にネ、べいべい詞があるとさ。べいとは可しといふ事で、行くべい帰るべいは、可行可帰といふ詞で、いまでも萬葉とやらの歌よみは、べい詞を遣ふさうな。この事も一緒に聞いて置いて、内へ書きつけて置いたから、その歌や詞を来て見なせえ。鄙言の、何ちふことだの、何ちふことだのといふのも、ちふとは、といふといふ詞を詰めたので、古い詞だからたのもしいとおだひだよ。」かみ「なんのいナ。べいべい詞が何ご譯があるぞいナ。」山「譯がなくつてさ、嘘ならわつちが内へ来て書付けを見なせえ。」かみ「ハテ、ちと見よかいナ。何なと賭にせうかい。私がまけたらナ、鶍なと大福餅なと奢おふわいナ。おまへ又何なと奢てきなせ。」山「奢てるとはえ。」かみ「振舞の事ち

やこ二道おこんなかおに」[illegible]たら、血ふ、おつ[illegible]お負けた鰻の枕木は下まう」[illegible]の中に
いわいな」[illegible]いた〳〵〳〵、[illegible]痛いよ、お前はまア、調子に乗つて背中を痛くさせ[illegible]た
[illegible]よ[illegible]、[illegible]拍子にのつ[illegible]、[illegible]背中を御用[illegible]
[illegible]又通鼠が[illegible]しに、[illegible]い事すまいぞや。こうやどうぢやいなお山さん、アいた、アいた、ア毒性
なお方な[illegible]いつこ[illegible]つてやかんせ[illegible]いた、[illegible]しい[illegible]いな[illegible]
い[illegible]灸があるさかい、味能うながしいな。アいた、アいた〳〵〳〵〳〵。」子守の少女、お

[illegible]

[illegible]助や、おとなしく寝んね[illegible]
きしれい、[illegible]日覚に[illegible]やるう[illegible]又起きたか[illegible]世話[illegible]なら、お寝さん〳〵
うちやアなかつた、お前のおかみさんは、最う私どものうちの坊はね、どうも泣いてならない
よに」[illegible]「そんなら灸を据ゑておやんなさいよ」[illegible]ハイ〳〵、おりや怖いよ、灸だと、まア、怖
いの、早く寝んねしな。[illegible]いや来るよ。いく〳〵坊は最う寝んねいたしますと」中で[illegible]
を泣かせたり、[illegible]の中を引き[illegible]、[illegible]
といふ頃、此の仲間の子供なり、[illegible]の子を[illegible]なさ[illegible]〳〵

すゞ〳〵、わつちやア否、わつちやアいや、おはるさんなんざア蟲の能いねえ。お前はおかみさんだやアないよ。お夏さんと私がおかみさんでネ、お前はお三どんだ物を。ねえお秋さん。」中でも、お心よしばうたこお秋「ア、さうだよねえ、お夏さん。」仲間中でも常なまつ「何うだか、私は知らんよ。」おはる「すゞ〳〵、すぁ、然うぢやアないよ。先刻の極めおぢやア私がおかみさんな筈だよ。私はそれぢやア否。お前とは遊ばないよ。」両方へつく内股膏やくのお冬「ア、能いよ、お前がお遊びでなくつても能いねえ、おにくさん。」おにく「ア能いのさ。根つから困らねえネエ。」なつ「おはるさん堪忍してお遊びナ、お三どんに成つたつて、指が代り番事だから能いわな。又後でおかみさんにおなりな。」はる「わつちは否。おにくさんやおふのさんがあんな事をお云ひだもの。」あき「わたくしが何うしましたえ。」はる「いまお云ひだやアないかえ。」にく「能いわな、打遣つてお置き。あんな者にお構ひでないよ。」はる「そんなら、今しがた上げた物をお返し。」にく「ア、返すよ。こんな穢い物は入らないよ。」ト、金巾の小ぎれを投出す。はる「お冬さんも先刻の物をお返し。」ふゆ「アイ。」ト、懐からたもとをさがしつゝしまひにつかみ出して「三味線の絲屑なんぞを何にするもんか、ねえおにくさん。」はる「能いのさ。今度つから何を呉れろとお云ひでも、遣りやアしねえから能い。」にく「びい、びい、びいこ。」ト舌をかつ、目返しして頭を叩かる。はる「いやなわるやだよ。」ふゆ「頭がお禿なやつ。どうするほどのもの。今年のころほに油断がならねえ。ちつとの隙に私がそのほしたらば、はる「歯のかけ櫛な茶々にして、歯のかけばゝ、

一茶でのましよぞ。なま、歯つかけでもお前の世話にはならぬぞへ。……出て、……三秋さん
お秋さんこつちへお出で、この婆が上げよう。……お肩じけよ。……お前と私と遊ばうね。
隣り子っこしませう。……に「ずよう見ろ、お秋の……ほうら、お夏さんとお……さんはお出で
でないか。私とお遊び。なにを致さう。」ふゝ「ア、毬を突きませう。」あき「能いねえ。お前と二人で
隣り子っこ……さうねえ……馬……に入れないやうなお秋……く……
は、毬をはじめませう。……中をお直り……喧嘩をするもんぢやないよ」……「能いよ。……
誰つてお呉れ。誰がお遊び。一二、三四、五六、七八には、九と十、二十、……
五十や、六十や、七十や、八十や九十九百目、おてさま三六、おやうどの目の前で、……
二ッ、三四、五六、……落ちたこ……お前が一で、私が二で。お冬さんは三そ上……
何に致さう。大門口にいたさう。大門口と、揚屋町、三浦、高浦、米屋の君、皆々道中見ることも
と、ふのさけ見よなら花紫、相川、清川、あの違染川、……あはせて瀧田の川。あの世、この世、
やつこのせ。向見さい。綿川見さい。……が二……、あの向に……次郎……さて、
跡から家形が押しかけたる。ヤレ留めろ、……留めたら後室に五升遣るぞ。五升入らぬ。
五升入らぬ。わいらにかまふと日が暮れる。日はくれる。お月は出やる。それで殿御の……、

それ百よ。それ二ィ百よそれ三百よ。中客とゞめて〳〵一貫貸したせんそうせん。大紺屋のおこすみさアまは、旦那も大八さアまも。きよなら清水六角堂、大格子の松の陰で、おひとの聲が見て候ぞへるよ、ソレ百よ。」なつ「アイ落ちました。お白のサア。御しろ白々白木やの、お駒さんウ、才三さんウ、見せには丈八ならひ筆。」ふゆ「ア、落ちた。ゐでん遠州はやいちごぢやなウ。油まんじゆの孫およというてエ、いふにいはれぬ伊達なる男ウ、夏も足袋にくばらんのせきだア、じよりゐく〳〵とじよゐはくばかり。オヤ落した。エ、業腹な。」はる「能い氣味だねえ。」にく「打捨つておきやアがれ。おちやつぴいめ、今度はネ、お夏さん、京々京橋、中々中橋、おつや十六大ふり袖たもウ。あの歌にせうネエ。」ふゆ「アヽそれがよいよ。」こちらの二人はとなり同士をしてゐる、はる「おとなりのおかみさん御免なさいまし。」ふき「ハイ、お出でなさいまし。コレハ〳〵マアこちらへお上んなさいまし。」はる「ハイ、これは赤いまんまよでございますが、わざつとお祝ひまうします。」ふき「ハイ〳〵、御丁寧にお拵へなさいましたねえ。」はる「たんとお給べなさいまし。」ト、帯を前へ廻してあぶれ木綿でこしらへた他の猿をせおひ、子守唄をうたひながら、「どうらも坊がなきむしでございますから、迷惑でございます。ちよつとお山を見せながら、小便をやりませう、こゝが木や花のたんとあるお山だッサね。よい〳〵、よい〳〵、こゝがどん〳〵橋を渡るとこだッサ。サア最うお山からだん〳〵けへるとこだよ。サア小便しな。シイ〳〵。」ふき「おかみさん、もうおかへんなさいましたか。」

はる「アレサ、まだ歸らねへ所だわな。今お山に居て花見の所だもの。」[illegible]毬をつく女の子、[illegible]
ア、わ[illegible]い〳〵。芥子坊主のおか[illegible]何處に[illegible]
寄[illegible]て、[illegible]口で芥を搔き廻して、[illegible]やん、わじやつと。[illegible]
ア」[illegible]返して日[illegible]　はる「[illegible]事だから[illegible]も能いねへ、[illegible]の[illegible]見[illegible]「お[illegible]
[illegible]の悪い事を云ひなさるナ。[illegible]お前に[illegible]い者が[illegible]皆な中[illegible]で遊び。[illegible]
別になる[illegible]仲間割れ[illegible]
[illegible]な、[illegible]
よ[illegible]お前の事だ[illegible]
[illegible]
[illegible]なら[illegible]わたしも[illegible]
も[illegible]出で[illegible]
けへろ。蛙が鳴くよ。」

浮世風呂二編卷之上

諢話浮世風呂 二編卷之下

女湯之卷

江戸 式亭三馬戯作

あくたれと呼ばれたる、しやべりのかみさまお香は「おかみさんお出でなさいやしたか。鍋田屋のおかみさん。」愛想の悪いかみ様おにか、「ハイ。」ト、ばかりいつた　した「ほんに今朝ほどは、お珍らしいものをありがたう。いつでもおもらひ申してばアつかり居りやすネ　そしてあのお香々のお鹽梅の能さ。ありやアもし、どんなにお漬けなさるか、とんだお上手だ。」にご「ナニサ、上げるやうなもんぢやアないけれど。」した「いかな事でも、あれほどおいしい物をや。ヲヤお泥さん、早かつたの。」どろ「おしたさん、お早うございますネ。何うなさいましたエ。」ト、何者かしらず、此の女の言葉おつに訛るなり。した「何うないましたエ。斯うないましたヨ」眞似、ト、口　どろ「どうなされましたとサ。能うことばとがめをする。好かねえヨゥ。」した「好かねえヨゥも、馬鹿らしいでございます。きざでありますヨゥ。」ト、大きな聲する。どろ「すヤもう後生だよ、おしたさん。おまはん何の眞似をさつしやるのだエ。」した「お前の口眞似をさつしやるのだよ。」どろ「眞におまへ世話焼き性だねえ。おつつけ治りまさアなえ。」ト、いひながら風呂へ入る。した「ようかし、治りうざい。滅多に治るこつちやアねえ。

「ヨウくく、智惠を貸しやしやうかで。ござります」――一よく女房をおせたね。不思議ねへよ、鶴三三昧な、お宅さんも、お前をもかかるか、聞うと思つてつけく、不乍もう一盃買つて来て一盃にありつきやく。ワイくと幸氏に茶香のものとて、よつが内をも取りねへ。とおもしれもねへで、明りでよこの、と泣目を踏ぐか背くが、此の子に臍えそへて、色と三百八百ゥ言つての、困らせ抜いたわな。其の上句つ果ては、皆だと思ひはじるて、またせかけられる。酒え買つてこいだ、すてきに強くも膝を向けての。」婆の女、其の鍋を見べるまい、鍵を買つて来いといふから、草臥を寄しやから、わつちが引捨てての、お湯といふ方へ附面だといへ、だから入切つて沿も逃られぬ間に、そかしいしねへ。何なんで、見たくでもね。ことさる中の、臥を泣いて質下し込んだと思ひねへ。丁度宵の口つら遊ると、またそれのやうに吹まる、丁と雨の日やアがれどもいひながら、行の勘を打つかけに掛ると、其の途中に、来糖をふてくるやうだから来経ら大喰も嫌だらけさ。それから隣のお鰭さんが聞け付けて、明りとうけたりとあるよ、大辛だ。わつちも歯を持つ居る人間だから、合點しねへ。何なんだ、おしやべのあとも頭とつてしはせ、口も八丁手も八丁だア。山の神の功を経たのだから、よまんがんまん達とは舞下と遊ぶだらう。湯水で腹をふくらした女だね。思案をなくふの捨場しても、亭主を反ふ傷しにやう。にや

ねおめえ。」とかなんとか云ふと聞きやナ、しろ帯を振り上げて、半死半生な目に合はされたァ。今に骸が痛くつてならねえ。コレ見な、こんなに痣が出来たァ、それでも亭主といふ者は位の能い者だなう。」皆が寄つてかゝつて、「お舌さんお前が悪い。何事でも亭主に食つてかゝつて済む物か、勿體ねえ事を知らねえ、何でも謝んなせえ。」ト、思ふさま手の甲まつて、漸うおつつくねたわな」ト三「そりやァ飛んだ事だつけなう。おいらァかたつきし知らなんだ。知つたら止めせへに行くんだものを。」ト二「それが燈臺元暗しとやらだわな。我が家樂の釜盥とやらで、内ぢやァ我儘一杯されても、仕方がねえ。おべそがあんまり云へばねだろから、昨日三絃を一挺買つてやつたら、それでも踏んびしいて、撥ば何所かどう迷子にして仕まつた。喧嘩の度に徳は行かねえ。おめへさん所の肝右衛門さんなんざァ、全體氣前が能いから静かだ。おら所の氣位とは、雲泥萬里の違へさ。」ト三「ナニ、さうでもねえよ。あゝ見えても喧しいわな。」ト二「そりやァおつとらまつのことは無くつてさ。おらが内さやァもよいと踏んだりすると、直に横をつはうだ。總別魂が違はァな、亭主の事だから悪く云ひたくはねえが、あんまりしねえわな。大津繪の福禄壽を見たやうに、天へとゞきさうな天窓をして牙をむき出してにらめ付けらァ。」ト三「オヤ／＼勿體ねえ事をいふなう。お前がそんなことをいふが悪いわな。」ト二「ナニ構はねえ。おれがことを古狸だとはいふけれど、てめへは狼だ。自分で買つ

た馬が、癖行の數を見たやうに、横つ面に筆をくつ付て、年中竪の物を横にもしねへですネ、仕事を精出しなせへといへば、打遣つて置けよ、果報は寝て待つと何のかのと平氣島左衛門、何よりつても知らぬ顔の反兵衛さんだ。ナニサ、あれでいゝぞへ、さうさね、金の草鞋で尋ねてもあるめへと」ヱヽそんなに云ひなさんな。おいらが内へ來ちやア、きんた世辭を遣ふが、内廣がりの外すぼまりよ。だから方々で請けが能いよ。ト、寒い、最う一ぺん熱ためよう。」ト云ヒツヽ、内廣がりの外すぼまりよおいらは陰辨慶だつちやアねえよ。ドレおいらも這入らう。ヲヤ〳〵、泥だらけのお前まだ這入つて居るかな、あきれが湯氣に上らア。ヲヽ能い加減に出なせへ。誰も身のうちだよ。體の分も除け置きなせへなごう「ようございますよ。好かねへ。ヱヽ好かねへ。好かねへでお系だ、これで好かれてみな、命も脊もつゞかねへ。ハイ御免なさいやし。」ト、□□□ヲシ靜かに這入りながら、□□□□□□よごし□□アイ、それだから御免なせへと云ひやす。人込の中だもの。其上にはねかゝらねへでさ湯水を遣ふのだもの。かゝるが惡くば、遠く退いてるがいゝ。これがまたでも遣つて、水がはねるといふ物なら、燒石でも出來ようが、高が湯だ。但し湯がかゝつて熱いなら、水のはねをかけてやらうか。ヲイ又かゝりやす。はねたら御免なせへ。」ト、やたらに遣ふゆゑ、傍の人も呆れて、隅の方へかゞむ　トいひけッ太造なってあへひとの買ひ切つた湯だやアあるめへし。向三軒兩隣のつき合を知らねへたんちきだ。

煤掃なら、チット奔がいたしやすと、斷りもせうけれど、湯う遣ふ度に、アイはねが懸りやすと斷られるもんか。なうお貧さん。オヤ最う上つたか、お泥さん出たか。オヤお蔦さん、こいつも居ねえ。おれを出しぬけにして皆出たナ。ア、豪氣と男湯が騒々しいぜ、氣のきかねえ冶郎どもだ。黄色な聲や、白つ聲で、湯の中を五色にするだらう。十二文ばかりが稽古した闘雁だか、蕗の薹だか、震ひ聲で湯殿中を震はせらア。困つた病人だぜ、今日が發り日ださうだ」ト、獨言をいひながら石榴口を出る。△湯屋の障子をあけて、ワアワアと泣いてくるは娘おべそ、「かゝさん、お鬢さんと、お髷さんが打つたア引こ」ト云「なんだ、此のがきめエ。又啼えてうしやァがつたか。見たくでもねえ。どゝ、どいつが打つた。お鬢の兒か。何だお髷と二人だ。あの兒あらア、總體依怙地惡い奴等だ。何ぞの代曲りにやア、泣かしてよこしやアがる。うぬもまたうぬだわあいつらに泣かせられることがあるもんか。役にたたねえ。なぜ向うの面でも思ふさまひつ掻きむしつて遣らねえ。ソシテまア、いけ外聞の惡い、湯屋まで泣えてうせることがあるもんか。能い能い、待つて居ろ、今俺が連れてつて、あの親めらに誤らして呉れう、全體また親めらも世間を知らねえ奴等だ、己が兒ばつかり可愛がりやァがつて、他の子はくたばらうと構はねえ。長屋中鐵棒引いて、人の陰沙汰アするのが眉目でもあんめえ。そんな事は棚へ上げ置いて、己が兒の世話アしやァがつたが能い。うぬも又あんまりしやはけるからだわ、此のあまめエ。」べそ「ナアニ、おいらア、おと

となしく、遊んで居たものを、やつたらむしやうに前あたらしくして、着物を汗ばませるの、貧乏人だと、色々な事をいつて、あのを、きやんしてかゝら。「ナニ何だ、貧乏人だ。いふずる世話やき彼奴が内はどれほど身上が能いのだ。着物を貰つて着せようがやァあるめえし、そんな事に小児のいふ詞おやァねえ。あの親めらが不埒なるから事だ。思ふさま咽こんでやるへいと、せた娘の姿さま来合はせゐたりしが、風呂のうちより出で、さいな「何だ、此のかゝさんは。親めら、親めらと、口穢ない事[illegible]つらい娘をいたづらな事はいはねえで、人の子に迎ひくじを食はせるさ。口廣い事だが、わたしらが孫といつちやア、近所で名代の内端者だから、何様他の子を泣かせようでも、それで長屋中雑作などとは何の事た。わたしらが嫁はそんな口巧ざやァございやしねえ。人さまの噂などは、これんばかしも仕たことのねえのだ。そこはそれ、わたしが見上げて居やす。能いかと思つて、大勢で人様を悪いことゝさる中で、いけふざけくしい。そつちの子こそ常不断、おらが孫を泣かせてよこすわ。」と嘲りこで能けりやア、こつちから嘲りこむのだよ。」トまたコレ、コレ、喧しいワ。と黙るが能いわな。年をとつたくせに出しやばつてゐるに。コレ、俺が見るが、あんまりだ。おまへ、うぬが孫が悪性だから、人さまが御存じだわ。着物が穢ねえの、内が貧乏だのと、他の口からいふ詞ちやァねえ。てめへ達が云つて聞かせるからいふのだァ。畢竟一本、寄片し、御合力は受けた事はねえよ。すれば、そのやうに貧乏と

ても、こんた柴の疫介もつけえにやァならねえ。」そばにゐる人々「コレサ、お前方はどうした物だえ。子供の喧嘩に親が出ると譬へにさへ笑種だ。」「コレサ、お舌さん、おめへまあ。」した「ハテいいわな、打遣つて置きねえ。貧乏人だの何だのと。」ばゞ「ハテ云つたか云はねえか。子供のいふことに證據があるものか。」そばの人「ハテをばさん、おめへもマア危えわな。マア／＼おがんなせえ。逆上せて毒だよ。」ト、引きつれて戸棚の方へあがる。▲した泣聲交りの詞走つた聲にて、「ナニサ、年老なら年老らしく引込んで居りやァいいのに、若え者泣にしやべくるからのことさ。澀紙へ憲法小紋をおいたといふ面で、口ばかりむぐ／＼したつて齒が立つもんか。」「アレサ、あの子が泣くわな、靜かにしなせえな。」ト、口をとがらして、「後で云つても濟む事だわな。」ト、やう／＼なだむる。●お舌は、子のはうを閃んで、した「よく泣える兒だあ。ヤイ兒やァがれ、親まで血道をぶちあけて騒ぐわ。何だと思やァがる、皆うぬから發るわ。」ト、著物をきて「チョッ、先へ歩行ァがれ。」ト、子を叱りながら出て行く。婆さまも別に歸りて、後は静まる。「怖いお上さんだネエ。ほんに／＼おつかない。」「さやうさねエ。一體また、子供の喧嘩をとり上げるは悪うございます、すべて手前の子に理を付けては濟みません。」「ハイサ左樣さ、私どものあたりでも泣いて来ると叱ります。云告け口をとり上げては方圖がございません。利も非も構はず我が子をしかるのが一番能うございますよ。ひよつと餘所のお子さまが、云告けにお出でなすつたら、我が子を叱るほど折檻なる事さ。「悪い奴でございます。堪忍しておやり、今に歸つた

ら、大きな目に逢はせて進りませう。」などとまうすと、先のお子も納得いたします。」「イヤモウ、その内にはよく告け口をする子がありますヨ。」「あれも癖さネ。どれも〳〵、一人前づゝいたづらでございますから、皆能い事はございません。その内にも、殿のお子は、おいたづらばかりでござりますが、女の子は意地の悪い物でございますぞ。」「さうも申されません。女郎のお子は大概おとなしうございますけれど、男の子は悪あがきが過ぎます。何でも厳しいにしくはございません。」「ホヽ、、、、、」「ホンニ只今の様なもので、子供の居る前では、めつたな事は申されませんよ。」「ホヽ、、、、、」「ホンニさやう、餘所のお子に怪我でもさせ申しては済みませんから、負けてかへるが能いのさネ。」「アイサ、弱蟲が世話なしで能うございますよ。」ト、いふ所へ、二十四五の[illegible]しき女、七十あまりの白髪の老婆、[illegible]とも手をあてゝ[illegible]「[illegible]お危うございますヨ。お静かに遊ばしまし。」しうとめ「アイ〳〵。」ト、[illegible]湯をかき[illegible]「[illegible]すこしお待ち遊ばせ。お前さんには、チトお熱うございませう。[illegible]しこ[illegible]り、爰へ水をさしお湯が[illegible]」[illegible]「ハイ〳〵。」ト、後は来り、[illegible]〳〵待つたらうネ。」[illegible]「ヲヽ〳〵、丁度能うございます。お前さん、これへお浴び遊ばしてお上りあそばせ。」しうとめ「アイ〳〵、最うあがりましよ。今日はこなたが能く流して呉れたでさつぱり仕ました。私はあがるが、こなたはもつと這入るが能いよ。」よめ「ハイもう、私も宜しうございます。」しうとめ「よいかネ。能く

温まらぬと後で寒いによ、私に構つて風を引いてはならぬ。よいかエ。」よめ「ハイよろしうございます。彌壽か。」常の詞なら、彌壽やと呼ぶところなれども、此の嫁は、未だお娘の詞失せぬゆゑ、やすか、彌壽かと、かの輩によぶなり、▲下女おやすも、この嫁が、娘勤めの頃より、部屋方に勤めたるが、嫁入について、婚禮付きの腰元と見えしが、旦那さまの名を呼ばず、あなたエあなたエと、發言して用事を述ぶるなり。よめ「彌壽か。」やす「ハイ。」よめ「おのしはの、後へ残つてゆるりと流してお出で。私がお供するから能いよ。」やす「ハイ／＼。」ト、片湯の方へ向ひ「勝どんや、お上り遊ばすよ。」ト着物の番に来てゐる丁稚、「アイ。」ト、見かけてゐた、合巻書草紙を懐へ押し込み かつ「ハイ／＼、こちらへ。」ト、盲婆とよめの手を引く。嫁同じく背中と、片手をもちそへて、よめ「お危うございます。」やす「あなた。」ト、聞え やす「あなたエ。」よめ「アイ。」やす「お浴衣か。」と、後よりつくろひ、「御隠居様エ、お靜かに入らつしやいましエ。」いんきよ「アイ／＼、おのしはよく温まりやれよ。」やす「ハイ／＼。あなたお靜かに。」ト、嫁にも挨拶して殘る。かつ「チツト、お危うございます。御新造さんエ。お糠袋は。」よめ「ア、彌壽があとからゆすいで來るから能いよ。」やす「イエ、お風でもおしてはお惡うございますから、すぐにお着物をめさせ申しませうネ。」ト、着物をきせて、手を引き出づる。丁稚は、後より浴衣を抱へて從ひ行●あとには、下女おやす、やす「おかみさんエ、チツトお流し申しませう。」かみ「アイおかたじけ。オヤおやすどん、けふはお早かつたの。」やす「ハイ、お供で參じましたから、今日は早うございます。お夜食を仕舞つてから參じますと、氣がせか／＼致しますから、落着いて流しては居られません。」かみ「さうさなう。お前の所も、お人が多いから大體ではないなう。お前の所の御隠居様は御目が御不自由だ

か、御不足のないお嫁御様をお貰ひなすつてお仕合だ、鐘も撞木の中のからとやらで、なんぼ結構なおかたでも、お嫁御さんが悪いと、是非しつくりといかねものさ。親孝行で御器量はよし、人あたりは云ひぶんなし、何所と云つて難のないお方だ。お羨ましい事だねえ」「ハイ〳〵、いまもう私の旦那をお噂の申すも如何でございますが、惣別お氣だてのよいおかたでネ、お前さん、あなたがお屋敷にお出で遊ばす時分は、お部屋中で評判のお結構人でございました。私が一體疳癖かしい性で、それさい者でございますのに、つひしか、ぶつつりともおつしやりません。それで私もあんまりの有り難さに、せめて御婚禮までお附き申さうと存じまして、只今までたうとう長年勤しましたが、これからはどうぞ、お子様でもお出來遊ばすのを見て、何所へぞ、片付きませうと存じますのさ」「それは能い心がけさ。まア〳〵お前も、最う片付きなすつても能いなう」「ハイ〳〵ありがたいことには、私のやうなものでさへ、あちこちからお世話遊ばして下さいますがネ、マア運がらぬ事でございますから、氣長に致して、何所ぞ見定めます積りさ」「有りがたい事には、旦那様から、支度をして遣はさうから、相應な所を見立てろ」と仰しやいますが、私は、姑の面倒は随分見ませうけれど、田舎出の人か何か、當世めかぬ律義な人の所へ参りたうございます」「それその事さ。當時はモウ、色男より律男、それが大丈夫で能いによ」「ハイ〳〵もう、恥を申さねば理が聞えぬとやらで、私

の姉がお前さん、男望みでございましてネ、小ぎれいな男を亭主に持ちましたが、サアお前さんその人がネ、兎角浮虚が止みませんで、大きに苦勞致します。それもお前さん、遊びに參るならまだしもでございますが、意地の汚い人で、兎に角近所の娘御や何や角や、いぢり散らしまして、人聞きも惡うございますのさ。」女房「さうサ、それが第一の疵さ。女郎買は、大概程があるから能いけれどの、地もの好みのほうつ買といふ者が、性惡でいかねえものさ。わたしらもきつい嫌ひさ。マア一體男らしくねえネ。男なら男のやうに、金を遣つて賣物買物が能いわな。何所にもそんな人の多いものさ。」ト、己が身に引きうけこの挨拶。やす「ハイ左樣でございますよねエ。モウ〱〱夫れを見ましては、私どもは、どんな男でも、正直で律義まつたうな人が能うございます。」女房「さう仕なせえ。必ず好い男を持ちなさんな。好い男だと思つたのも、其の當座ばかりさ。世帶染みてお見、綺口能い顏もねえものだから、兩方で面白くないわな。そして好い男ほど浮虚で飽きつぽい物さ。その筈だもの、方々から引つぱりだこにするから、己惚で身持が惡いわな。何でも好い男は傍から身を持たせねえ。わたしらも女の端だが、全體女といふものは、男の爲には惡いものさ。芝居でする忠臣藏をお見。元は何から發るといへば、師直が顏世御前に惚れたから事が發つて、あれほどな騷動になつた。小波が力彌に惚れたばつかりで、親の本藏が命を捨てて、夫婦にして貰ふの親馬鹿とはよく云つた譬へさ。あのまア勘

平を御らん、旦那のお供に來ながら、腰元のお輕と色事をした計りで、あの大騷動にも間に合はず、これも色事の所爲だ。伴内もお輕に惚れるか、何でも角でも、原の[illegible]は叶はず、今は[illegible]もなくつて、[illegible]中間よりは、敵役で半道かひく、世の中、[illegible]、男を[illegible]て、[illegible]にするやうだから、人も長く[illegible]になつてしまふ。それだが、あの勘平は役に立たねえのだ。わたしが[illegible]ならば、伴内のやうになるのさ。マアなぞ云つて御覽、主人の一大事に外れて、[illegible]つて切腹せうとしたを、[illegible]に止められて切腹も仕得ず、女の[illegible]を[illegible]てその上に[illegible]じ〳〵と、[illegible]中一[illegible]つて[illegible]になつてゐるわす、それも能いけれど、主人から[illegible]た[illegible]を[illegible]にして[illegible]つ[illegible]い身に[illegible]して、猪や[illegible]を打ちに出る。まして[illegible]、[illegible]かしい、定九郎が[illegible]を[illegible]へてから、[illegible]する事が何處にあるものか。猪だか人だか大[illegible]さうなものだ。[illegible]人を[illegible]やうな[illegible]で何うして渡世がならうぞい。最う疾くに死んだ後を、藥はなきか何の角のと[illegible]るが、[illegible]で打殺した物が、[illegible]位で屆くものぢやアないわな。つもりにも知れたもんだ、[illegible]んで見たる[illegible]、天の與へと押戴きッ、、天道樣が人を殺して取れと、何教へるものか。ソシテまア猪は最前樂屋へ引込んで、お食をたべ居る時分だのに、猪より先へ一散にッ、、何うしたて人の足で一散に驅けたとて、猪に追付かれるものかナ。あてこともねえ。切腹だつても其の通りさ。一體[illegible]相かしいに切腹するから

惡い。まづ氣を靜めて與一兵衛の死骸を改めれば、鐵砲疵か、刳つた疵か、判る物だから、その上で昨夜の話をすりやァ、『そんなら斯う〳〵で、親の敵定九郎を直に打ち留めた。』と云つて、却つて譽められるのがならねえ、痛い腹も切らずに濟む事だ、餘り馬鹿らしい男さ。お輕もお輕だ働きのねえ、あんな意氣地なし男に情を立つて、女郎に賣られる事は無いわな。可哀さうな者はあの婆さんさ。島の財布の鵄黄金、四十九日や五十兩、合はせて百兩百ケ日と、とんだ忙しい所で、洒落を云つて殘して歸つたが、あの五十兩で一生は食へまいよ。與一兵衛は死ぬか、勘平は腹を切るか、平右衛門が敵討の供をして歸つた所が、永々の浪人者なりサ。お輕はお比丘尼になる、三人口を養ふに四十九日や五十兩所か、どうも暮しやうが無かつたらうよなう。」やす「左樣でございます、お輕も身請されました所が、年明といふものは借金が多くて丸の裸で出ますさうだから、切なうございましたらう。」女房「さうさ、それに急な事ではあるしの。然し由良之助がじよさいないから、内證で手當もしたらうのさ。」やす「そして、女郎になつても名が變らず、ヤハリお輕で居りましたネ。」女房「その代りに、お比丘尼になつてから名を更へたらうよ。」やす「なる程ネ、さうおつしやれば、勘平は働きのない男でございます。」女房「伴内がいくら能いか、マア私なら二つ取りは伴内さ。男が惡いといふけれど、苦みのある能い男さ。まづ第一忠臣でネ、旦那の身の上を案じて、一力へ犬になつて入り込むが、三段目では

若侠之助の權威を取つて主人をかばふ。萬事拔目なく奉公を勤めて、仕舞ひは主人のために討死とやら、十一段目に死んだが、勘平に競べては大忠臣さ。」やす「さやうさ、あなたも能くお覺えなさつてお咄し遊ばします。」金持「アイサ。それだから何でもなさ。イメエも琴責なんぞも岩永は本當の役目を守つて、景清が行方を詮議するけれど、重忠は半分只で、役目を麁末にするわな、琴だの胡弓三絃だのと、あんなやさしい事をしてゐる。あれで間尺の合ふものかネエ。岩永がいふことが皆尤もだが、あれも岩永はなにぶんかれえから眞直だが、重忠はあこやに現をぬかして、あの琴を聞く顔を見な、鼻の下へ涎が三尺ほどたれるやうだ。萬事なかが爲だなう。」やす「ハイ左樣でございます。」まま「、、、、、。主人を何だから、お前も亭主を持つたら油斷をお仕でないよ。男といふものは不斷のこくいの、皆の通りだ。」やす「いかなこつてもあなた、ハ、、、、、。さやうだが私ども旦那樣は、好い男と申しても如何でございますか、御器量の好いに似合はぬお堅いお生れでございます。お客合參會がございましても、一番にお歸り遊ばし、お弔ひや何角にも道寄りなしにすぐとお宿へお歸り遊ばして、けふは茶代が十二錢、お賽錢が七錢だのと、お算へ遊ばして、お小遣が漸う三十二錢ぐらゐで濟みました。是は何の衆が生得だ／＼と申しますが、生得とは何の事でございますか、大かた御實體な事でございませう。其の代りお友達づき合ひが惡いさうで、大旦那が折々御意見でござります。

モちつと、若者らしくして、物見遊山にも出るが能い。どうも外嫌ひで困るとおつしやつてでございます。」女房「お羨ましいなう、わたしらが内なんぞは、出好きでの、内には尻が居る間なしさ。私が意見めいた事を云ふと煩がつて、ハテ奈何之町の湯豆腐も食つて見ねえぢやア行き渡らねえの。膳を居ゑるものを、お辭義は無躾だのと、能いやうな事を云つて出かけるのサ。アノもう、割開だの神だのといふ者が、しみ〴〵悪いよ、主がおとなしくせうと思はしつても、湯の行き返りや、髪結床あたりにぶらついて居て、すゝめ出すだ。マア初めは料理茶屋で、それから一つ上るとお船かお駕籠さ、ホンニ〳〵お前の所の旦那を煎じてあげたいよ。ナ、長咄で骸が乾くのも忘れた。」ト、留桶を浴びる。やす「私が汲んで上げませう。」ト、小桶へ三杯汲んで來て、留桶の中へあける。女房「これはおはゞかり、頂きますよ。サアお這入りな。」やす「ハイ〳〵、まア貴方お先へ。」ト、風呂へ入る。▲拜むやうな手つきをして、指の尖を洗ふかみさま、後を振向いて、輕石で踵を洗ふばアさま、▲かけ合 此の婆様に、ノヤノ〳〵といふ言葉癖ありて、泣言ばかりいふが株なり。▲「おかみさん何うしなすつた。お前の内ぢやお皆お達者か。」●「アイサ、捨てる神あれば助ける神ありとやらで、内で亡くなつても、どうやら斯うやら食べ續いてをります。」▲「そりやア仕合だなう、聞きなせえ、おらがとこはのや、爺さまがどうど牀に著いて、十死一生だわな。初めの内は、今はやるよい〳〵といふ塩梅だつけが、のや、サアお前、此の頃は立居も獨りで出來ねえから、屎尿もおまるでとる。イヤハヤ粉になるよ。」●「オヤ〳〵、それはほんに能く能

くの大病だもの。それで一倍わが儘を云つて喧しくてならねえ。」[illegible]お前、泣く子と地藏にやア、かなはねえといふから、病人の、いひなり[illegible]にして上げなせえ。一日延びれば一日延びるとやらで、寒さの内を凌いだらまた能からうに、案じる[illegible]いと、思ひの外にすら〳〵と治る事もあるからの。一寸先は闇だわな。これが斯うと、[illegible]、蟻の思ひも天に屆くとやらだもの、一心に介抱すれば、また能い目の照る事が無くつてさ。兎角神佛へ信心しなせえ。鰯の頭も信心からで、聞きなせえ、斯ういふ事があるわな。私等が親方の出入り場の旦那寺さ、三つ子の魂百までと譬への通り、小さな時分から氣儘八百に育てた者だから、[illegible]つても[illegible]蛇物に[illegible]だ、何がお前、身上も構はずに遣つた程にの、運の[illegible]、人に[illegible]長じ[illegible]が面白さに、たうとう大身代を[illegible]して、[illegible]一[illegible]となつた[illegible]上句が、悪い者を[illegible]出して、二進も三進も行かねえわサ。兄弟他人のはじまりとは能く云つたもんで、大勢兄弟衆もあるけれど、馬の耳に風で、ふつつり音信不通さ。どうも仕法がねえから、[illegible]は身のさし合はせだと、殘つた道具諸式を賣つては喰ひ、賣つては喰ひとした所が、三年越しの長煩ひだから仕覺がねえと思ひなせえ、子を捨てる藪はあるが身を捨てる藪は無えとやらで、たつた一人の女の子を他所へ貰はれて、夫婦兩口となつた。さすが[illegible]も惜しかつたらうが、負つた子より抱いた亭主

だわさ、脊に腹は換へられねえから、其の子を遣つて了つて、爲つけもしねえ人仕事をして、主を看病したよ、その昔は、一寸出るにも乘物で、眷族の五六人も引連れて出たお人が、味噌漉を持つて豆腐を買ひに行つたり、朝晩の介抱から口食物、縫針の餘計に人仕事だ。あだやおろかな事ではないによ。サアその御新造の一心で、淺草の觀音樣へ朝參りの日參をして、一年が間精進潔齋したらば怖い物だの、それほどの大病が、やう〳〵に能くなつて、此の頃にはすつぺり素の通りさ。それだから一心に凝り固まるといふものは強いもんだの。お前の所のも隨分信心して看病しなせえ。貴い寺は門からといふけれど、醫者樣ばかりは見かけによらぬものよ、裏店に居る貧乏醫者に功者なお人があるものさ。藥紙を袂へ入れて自身に持ち運びをしてくれて、第一まア手がかゝらねえで、貧乏人には能い利方だ。アノまア、藥とりに半日づゝ掛るのは、人少なな者は難儀仕果てるよなう。」▲「然うさ。お醫者樣も今度で九人目だ。今度のお醫者樣は、アノそれ、豕右衞門さん、のや、あの人がよい〳〵がゝつて、一トしきりぶら〳〵したのを治さしつたつて、功者な噂だからかけて見たが、タッタ一返お駕籠でござつたが、それから後は、一日置きに、代脈だわな。」●「フウ醫者樣の方ぢやア代脈でも承知だらうが、素人の目からは安堵しねえものよ。」▲「そのはずさ。お醫者さまばかりが便りだものを、のや。それに又かこて加へて、妹のお糠が屋敷から病氣で下る、息子は息子で便毒をふみ出し

てうんすんと寢てゐる。此のごろは生憎に齒へが隙でのや、小遣にも追はれ切るわな。高くはいはれねえが、質八を置いて暮してゐる所だ。その上にのや、姉娘のお荷は片付いた先から出るの引くのとやつさもつさが發つて、家内中こねつ返すわな。年老つて能い耳を聞かねえで、まゝよ/\長生するやァ恥多しと能くいつたものだのや。おかみさん。それでお荷にいふことさ、我が好き好んで持つた男だから、此の後まごつかねえやうに分別して、どうとも好きにするが能いと、親の持たせた男なら つて、手前細工の亭主だから、どうでゐくそつぱうな事はねえ筈だ。わが目の利きやうが遅いといふ事さ。遣へあるめえのや、おかみさん」●「然うさ、あの子も大不出來しさ。女賢しくして牛を何とかやらで、女の利口は役にたたねえ」●「總體情の強いから發るわな。まア/\、何で苦勞するかと思へば、皆子故だによ。世間の親は子を持つて樂をするに、大きなあべこべだ。こちとら樂はさてといふから、せめて苦勞の薄らぐやうにしてさ。それより外に願ひはねえ。この中もお寺樣が、大般若經建立するから、志を附けろと頼まつしやる。私らがお寺樣は、ついしか勸化事をさしつた事がねえから、澤山奉納しても能いけれど、自由にならねえもんだのや。それにお前田舍から居候が來る、日掛の錢は毎日金毘羅樣、成田樣、江の島、大山、鹿島講、御湯花講、何や角やで一貫三百の出入りだ。生やさしい事ぢやねえよ。どうしたら樂になるだらうか、のや、おかみさん」●「なア、おま

みだぶつ。」■引違へて、太つちやうの下女一人、石榴口より出しなに、ぐいと辷つて仰向に轉ぶ。「オ、危ねえ。ヤレヽヽ痛かつたらう。」友達の下女「オ
ツト危し、お開帳なんまみだぶつ。」■「しやれどこぢやァねえわな。ア、痛え。」ト、云ひながら顔を眞赤にして起き上る。直
に小桶をとる、▲「オヤヽヽ轉んでも只起きねえとはお前の事だの。」■「さうさ。チット違ふよ。」ト、負け惜しみにて湯波み
の所へ行く、湯波みの男湯をのろりのろりと汲んでゐる、■「きりヽヽ汲みな。日が短いよ、いつだと思ふ、十月の中の十日だぜ。」
ゆく、「何だ氣のきかねえ。湯屋へ來て辷るやうな古風な事があるもんか、乙姫時代の事だ。」ト、此の湯波み珍らし
い事には、江戸ッ子の氣のきいた奴なり、■「能いよ。うつちやつておきや。其の隙に流板を砂で磨くが能い。いけ無性な。」
ゆく、「ハイヽヽ畏まりました。」■「何ノそれ程平座をかいて居ながら」ゆく、「そんなら平座かきまし
た。己は平座かきましただが、お前は寢轉ばりましただの。」■「喧しい。」ゆく、「然し能い音だつけ。
ずつしりと地響きがして、各別なもんだ。お蔭で居眠りの目が寤めた、どうぞ翌も眠つてえ時分に、
ナ、ソレ、ちよいと湯屋轉び寐起きさ。」■「エ、、しやれずと早く汲まねえか。じれつてえ。」ト、小桶をさ
げてゆく、「お丸どん髪を結つたの。とんだ能いお前か。」●「ウンニヤ、おかみさん。」■「道理だ。別に女
ぶりがあがつた。」●「なアんのかのと、ヘン能く云ふもんさ。」■「本統にヨ」●「コウ、おめへン所
のおかみさんも、お髪はお上手だの。」■「なんの、しやらつくせえ。お髪だの、へつたくれのと、そ
んな遊ばせ詞は見つとむねえ、平つたく髪と云ひなア。おらアきつい嫌へだナ。奉公だから云ふ形に

なつしお前樣お持佛樣、左樣然者をいつて居るけれど、貧乏世帶を持つちやァ人もねへ國だ。せめて湯へでも來た時は、持前の詞を遣はねえぢやァ、氣が欝きらァナ。」●「それなら、うぬが所のかゝァめは髮を引束ねやァがることが上手だナ。」■「ナイ、上手だが何うした。うぬが所の旦那めは、今おらが内へ來やァがつて、俺が親玉めと一緒に酒を食らつて居やァがるが、まだ湯錢に仕舞やァがらねえから、かゝァめに預けて置いて、おれ獨りで湯へ來やァがつたら、いつの間にかうぬも來て居やァがる。そつちらを向きやァがれ、脊中をひつ擦つてやらうから、後でおれが脊中を引擦りやァがれ。うぬ又いたくひつ擦りやァがんな、ァ、息が切れた。ヨ、せつねへ。」●「待ちやァがれ。うぬがいくらひつ擦らうとぬかしやァがつても、おらァ垢擦を落したから、うぬが垢擦でおれが脊中をひつ擦りやァがれ。湯が熱くは水をうめやァがつて、うぬ又泣きやァがらねへやうに、そろそろと流しやァがれ。ヨ、息がきれた。ヨ、大儀だ。」■「これぢやァ喧嘩をするやうだ。ァ、これでさつぱりした。とゐもゐ／＼／＼内に居ると、あなたどう遊ばせ、斯う遊ばせで、恐れぬがはるなう。しかし贅沢者だ」●「さうさなう。コウおべかどん、お前の簪はをゐ繕いで來たか」■「ゆこゑもしたゞ。コウ、先刻油をとられたのは何だ」●「戸張をしたら、大首先を張り曲げたといふ小言さ、解き物をするとき、■かたをひつ裂いた事と、火熨斗摺を出來した事とか、小言の度に出るだ。」■「おらが内ちやァ、南京

の鉢を割つた事が、いつの小言にも附祭だ。煩えなう、おもひ切りの悪い、小言を並べたつて、割れた鉢が歸る物ぢやアねえ。おらが所の悪婆は、ホンニ〳〵、いび〳〵小言の本家だらうぞ。此間三馬が作で、早がはり胸のからくりといふをかしい繪本が出たがの、その中にある姑婆の口眞似は、あの婆に正だよ、ソシテお前達やおいらが事も書いてある。何でもそこへ出たやうだ。今年中でのをかしい本だと云つて、店の衆はてん〴〵に、一冊づゝ持つて居るよ。借りて見な。をかしくて堪へられねえよ。」●「ム、あれか、見た〳〵。叱られた小藏が、直に番頭に變つたり、嫁が姑になつたり、しかも豊國が繪で、あの繪はよく書いたなう、見てゐるうちにふき出すなう。そして直が安いから、年玉に能いとつて、おらが所ぢやア、いかいこと買つたよ。」■「こんな事をいつて、又繪本にでも書かれねえうちに止めよう。サアお丸どん、這入らねえか。」■「ム、這入らう。」ト、續いて入る。

此の所に嫁、姑を謗る事、嫁を虐める姑の事、主人を謗る下女の事は、はやがはりむねのからくりと申す小冊に委しく記したるゆゑ、この草紙には省く。なほ珍らしき嫁姑のせりふは追つて三編にお目にかけます。

東西々々

三十四五の乳母、四歳許りの唐子髷の子を、留桶の中へ入れ置き、欺しながら月代を剃つてゐるかたはら、十三四の子守女。

子もり「御乳母どん、その後で、わつちの襟を剃つておくれナ。」うば「ヘン、呆れらア。襟や顔をすりつけるよりは、小鬢先の兀つちやうでも治すが能い。廣島藥罐の口をもいだといふ額だ。髪といへば赤く縮れて油揚と一緒に煮さうなざまで、何の洒落臭え、おきにするがいい。」子もり「コウ、御乳母どん、剃らずば剃らねえで濟むわナ。何もそんなに棚卸

しなさるには及ばねへヨ。わつちが天窗が是程に油揚なら、雲脂の溜つたお前の天窗は、團尾扇の白紙だ。」戯場あなたさまはお美しい。」ト、いひ出しに、指を差す。「ヱヽ、チット遣ふよ。」「ドレ一通で八笠とはチット違ふわな。」ト、鼻の仰向いて二階がきなつ臭いといふ、齒は返歯で鼻の下を覗かうとする。「目はやゝ居て眼がひいて下ら、耳は遠いく〜だ。」「ト、此のあまめ、覚えてゐろ。」「ト、應えて居ねへで、そんならなさい。」「己がことを惡くぶつた。」「ト、口が惡いから正直をいふのよ。」「ト、ヲヤ〳〵其の通りよ。」「ト、また負けねへお口へはたきもこ」「ト、己が口つはたきなら、そつちは鼻つはたきだ。」「ト、ナニ耳つたかのあこ」「ト、狐臭ぶん〳〵あこ」「ト、己がいつ狐臭がある。」「ト、己がいつ口がある。」「ト、二階堂藥を附けるぢやアねへか、目臭れめが。」「ト、茄子藥を附けたぢやアねへか、猿眼のこ」「トにに、こつちへおいでなさいましよ。」「ト、ヱヽ、おしやらく御乳母あ、いけもしねへ。」「ト、また諍ふようと思ふて」「さアお嬢さん、あんなへらほうには構はねへが能いよ。お嬢さん、おつとしてお出でなさいや、ぞの〳〵〳〵。」「ト、出臭い お嬢さん静手してお出で。さアいゝ、よいの〳〵〳〵。」「ト、いふやかましい、邪魔になるわ。」うぬに構ふとかん癪が突つぱりはへるわい。これつて、ヱ、そつちの野猿は三年も生へるね。お嬢さん〳〵、おつとしてお出でで無いよ。頭をかぶの〳〵して主動かす。さうするヱ、おまへさんのお頭を、思ふさま痛くまにして、御乳母が乱しくないのだ。ア、能い氣味だ。

早く振り廻してお動き。」うば「いや〳〵だねえ。天々をお動かしだと、ぞり〳〵が剃れませんネ。剃剃を剃つて能いお姉さんになつて、おつかさんに譽められませう。ソリヤお後の方を、チヨイト一剃刀。オヤ能い子におなりだわえ。」子もり「オヤ、ばゝッ子にお傷りだわえ。」うば「喧しい。これ程能い子におなりだものを。ネエお嬢さん、大方今日は神さまへ連れてお出でだらうぞ。」●「ばゝア痛え。モウ御仕舞にせうよ。」うば「ハイ〳〵最うちいつとでございますよ。オ、〳〵、これ〳〵、毛蟲がたかつてサ、今ばゝアが、毛蟲をぞり〳〵と取つて、ネエ、オヤ〳〵憎い毛蟲だねえ。オ、〳〵ばゝつちい。エ、きたな。エ、穢な。ホイ〳〵また毛蟲が。」子もり「お嬢さん譃でございますよ。毛蟲ではないよ。最う否々とお云ひ。」うば「また口を出すか。これ程長しくお剃りだものを、ネエお嬢さん、この御褒美には嘗人形に、何でも四文の人形か。」●「ムヽ、番太のよ。」子もり「番太の炭團かえ。」●「アイ。」うば「お嬢さんは頭だから、アイとお云ひだ。ナニ炭團な物かネエ。番太で見た達摩に乗つてるお小僧だねえ。上げましやうとも、ソリヤ最う清剃だから、そろ〳〵とおさすり許り。」子もり「がり〳〵と痛いねえ。」うば「ナアニ、ばゝアの剃るのはいたくないねえ。サア能いぞ〳〵。ア、綺麗におなりだ。能いお子だぞ。」子もり「穢くおなりだ。ばゝつ子だぞ。お嬢さんばゝつ子だね。」●「ウンいい子だ。ばゝつ子ぢやアねえ。坊は能い子、愚太さんはばゝつ子だ、なう乳母。」うば「さやう〳〵。」子もり「イ、エ

愚太さんは能い子、お嬢さんはばゝつ子。」●「ヲ、さうぢやァねえ。」うば「また世話をやかせ申すよ。ホイ／＼、片時黙つちやァ居ねえ、内へ帰つたら御新造さんに云つつけてやらア。どうするか見ねてゐろ。」おもり「へ、、何うもなりやせん。こつちがお嬢さんの御乳母なら、こつちは愚太郎さんのお守だよ。安くはないよ。お後とりの若旦那様のお守でござんやァす。アイ、先代萩なら政岡といふものでございやァす。芝居ですれば半四郎の役さ。チット違ひやすでございやァす。」うば「ア、喧しい。通らつせえ。おやんなさいやしが来たやうだ。愚太さんは男のお子でも、次男だから意気地はねえ。お嬢さんは、御總領だからお跡とりだ。ネエお嬢さん、やがて能い壻さまがおいでなさるネエ。愚太さんは、ばゝつ子だから、他所へお出でだね。」●「坊は能い子で。」うば「ヲ、／＼、能いお子とも。」おもり「イ、エ、それでもね、此間旦那さんと御新造さんとお噺に、「愚太は跡とりにせう」と云つてお出でなすつた。」うば「なに跡とりにさせる物か、此のお子さんは、女でも何でも總領だから、他所へは遣らせねえ。そんな噺でもあるなら最期、己がおや／＼ばつて合點しねえ。」おもり「何の、俺ら聞いても歯が立つもんか、お前の子ぢやァあんめえし。」うば「己がお育て申したからは、俺が子も同然だ。」おもり「何でもかでも、跡とりはおらが愚太さんだ。」うば「ヲウ、ニニャ、己がお嬢さんだ。」おもり「愚太さんだ。」うば「お嬢さんだ。」おもり「愚太さんだ／＼／＼／＼、愚太ばた／＼／＼／＼。」うば「お嬢

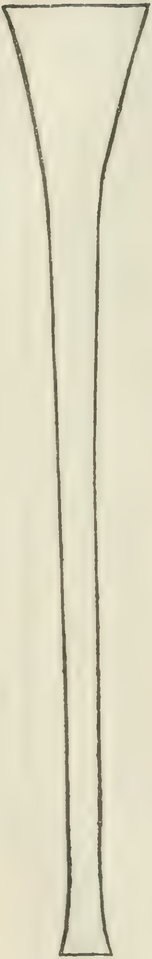
さんだお嬢さんだ〱〱、お嬢さだ〱〱〱〱。」子もり「憎い乳母だネエ。うな〱をして遣らう。斯う〱。」ト、叩くまねをする●「ばゝアを打つちやア否だア引。」うば「それ見たがいい。畢竟泣かせ申した。ナ、〱、堪忍お仕、〱、憎い奴だねエ。」ト、乳を飲ませてだましかける。■上り口には、鼻腐の中年増、手拭を絞つてゐる。おかさ「御疾さん早く上んな。己ア遅くなつたへれど、御前ならつき合ふ氣だ。」おしつ「おかたじけ。そんなら一緒に上らう。コウお前、此中の簪をどうした。」かさ「京打か。」しつ「ウ、京打よ。」かさ「買つたわな。」しつ「買つたか。」かさ「ウ、。」しつ「おらもの角琴柱は、チトきたつたから打ち直させうと思ふよ。」かさ「フムさうするが能いわな、角琴柱を止して、己が樣に昔形にしての、唐草の毛彫に仕なナ。」しつ「ム、さう仕ようヨ。此の頃は、括猿の指込が流行るさうだなう。それも知らねえが、小間物屋のちやらッぽこがさう云つたつけ。」かさ「彼奴もほべつかばかり云つて、當にやアならねえ。そしての、ほめへの所へ來る竹馬がとほるなら呼んで呉んな。」しつ「竹馬か。あの裁屋は碌な物は持つてねえよ。たしか昨日も通つたつけ。日暮方に氣を付け居りやアいい。おめへ何を買ふ。」かさ「片身頃有りやア、御化が一枚出來ようといふ洒落だアな。さうしての、袖なしの肩入にするから、太織縞かなんぞ見繕つて買はうと思ふヨ。」しつ「その位な物はあるだらう。しみつたれな裁屋だから、直は恰好だが、代物が少ねえわな。此中見た内に、甚三紅絹の八つ過ぎかといふ身頃があつたが、貳朱

ト四百といふ云直だから、直切つたら又負けるだらう。ひよつと直が出来たら、片身頃づゝ分けよう
おやァねえか。」　かみ「フムそりやよからう。二ツものも目利をして買はねえと、後で御役に立たねえ
よ。」　しつ「さうさ。此間布子の裏をの、布布に解いて見たらの、手をあてる所がビリ／＼さ、ヤツ／＼
一冬はつちやァ著ねえものが、あれぢやァ堪らねえ。しかも去年みつ物で買つたのさ。そしてアノ不
断著の繻袢しはの、秩父絹ぢやァ切れるにかゝつてゐるから、今年は絹紬にしたら、いつそ丈夫でい
いよ。おめへのとこの在我八さんにも、さうして著せなせえ。」　かみ「そりやァ、ほんによからうよ。」
しつ「コウお媼さん、つかねえことつたが、先刻の簪の事で思ひ出したがの、今總別昔の形がはやるによ
つて、笄もおつつけ昔形といふものが流行るだらう。」といつて、小間物屋が形を見せたよ。」こりや
アマア、俺が書くのだから能くはねえがの、形ばかりさ。」　ト、板の間の乾きたる所へ、小桶の水を指に付けて指先にて書く

笄之圖ハ貞享四年印本
女用訓蒙圖彙ニあり
今文化七年迄百二十四年ニ及ぶ

しつ「これ見な。マアちやうどこんな形さ。おつりきだなう。モツトながい大きいのもあるとサ。」これ
はべつかふさ。こゝの所にぼち／＼／＼と斑があるのさ。」

かさ「オヤ〳〵、ひかな事ても、ほれが昔のほうがい。ホヤ〳〵〳〵、へしはらねえ。」しつ「まだこんな形もあるよ。斯うの、斯うして、斯うして、斯うさ。おつだなう。篦のやうだなう。」



かさ「ほれが夫か、己アまた三味線の撥かと思つたこオホ、、、、ホ、、、、。」しつ「まだこんなのもあるとさ。田舎の婆様がさしさうだなう。」かさ「ほんになう。古風なもんだ。新型を仕つくしたから

また昔に歸つて、追付けこの樣なはうがいかはやるだらうよ。」「アハヽヽヽヽ」ト、指でかき廻す▲かゝる所へ高慢なるおや娘、はやりの島田髷しにて浴衣を纏へ入り來り、兩人の女に向ひ、「まア／＼お出でなせえしたか。大分お靜かでごぜえしたね」▲「此の間は暫くお目にかゝりません。御機嫌ようございますか。」ト「アイサもう、何だか色々、目出度い事が重なつてね。まア聞いておくんなせえし。大隱居の夫婦が、百五つと百三つになりますから、又改めてお祝ひさ。」▲「それはお目出度うございますね。」●「それから中の隱居が、八十八の米の寿を出しますネ。」▲「それはお目出度うございますっ」●「それから聞きなせえし。つぎの隱居は七十の賀。」▲「それはお目出度う。」●「その連合は、六十一の本卦がへり。」▲「かさね／＼お目出たう。」●「その妹が六十の賀。」▲「さても／＼おめでたい。」●「わたしの亭が五十の賀。」▲「やれも／＼おめでたい。」●「惣領の孫が七つのいはひ。」▲「やれさてそれはおめでたい。」●「次男の孫は五つの祝ひ。」▲「さて／＼これはおめでたい。」●「末子の孫は三つの祝ひ。」▲「さてまたそれもおめでたい。」

●「重ね〴〵のめでたさを、これから拍子でやつてくりよ。」▲「やれこれ拍子でたんのむぞい。」●「髪置、袴着、帯解、元服、嫁取り、聟取り、さて誕生。」▲「めでたい〴〵。扨もめでたい。こりや又、やたらにめでたいな。」●「七珍萬寶、しつかり詰めたる土藏の數々、十千萬軒。」▲「さつてもめでたい、しつかり詰めたるめでたい數が、十千めでたい。」と、口に餘りしめでたさを、めでたき春の笑ひ初に、目出度く述ぶるぞ愛でたかりける。

譚話浮世風呂二編卷之下　終

浮世風呂三編自序

丹前風呂の風流は、古に廢れども、浮世風呂の滑稽は、今行はるゝお蔭にて、今茲も毫をとりがなく、吾嬬訛の關東べい、べい／＼詞が書けべいなら、借りても三編つん出すべいと、書林の慾心增長して、需むる事頻りなり。オット承知の幕湯に浴る、趣向有馬の溫泉はしらず。三寸週圍の胸の中九尺四方の風呂の裏、筆おつ取りてかき廻すとも、工夫の出づべき筈もなし。假令楊雄が方言を闇記じ、半二が隱語を鵜呑みにするとも、諸國へ見する諸國の言語、うかめだての謬誤だらけが、便ち一興の端ともなるべし。江戸の嬶々が脣紅兀がして、磔野郎とは似氣なき惡態、京の老爺の鼻嗚呼めかして、あのおしやんす事わいなと、弱氣た言もそらかぞふ、大坂の壯夫が、何おやいとけつかるまで、書き古したる蹟なれば、爰らで留湯と固辭すれど、宥す氣色もない智慧を、絞り出したる糠袋、四文と出たがる安作者が、上文の湯氣に上りて、譫言を吐く事しかり。

文化八年辛未の夏四月本町延壽丹藥店において

式亭三馬戲題

江戸の水
國直画

雪亭 三冬

諢話浮世風呂 三編卷之上

女中湯之遺漏

江戸戯作者　式亭三馬 編

春は曙、やう／＼白くなりゆく洗粉に、舊年の顏を洗ふ初湯の烟、細く棚びきたる女湯の有様、いかで見んものをとて、松の内早仕舞ちふ札かけたる格子の下に佇み、障子の隙よりかいま見るに、その様をかしくもあり、又己が身のぶざめいたるは、あさましくもありけり。をみな湯、ぶざめいたるなど、さるたぐひの古言は御國學びの大人達も未だ知らせ給はざるべし。▲白き物は、初湯の三方とかいふめる、ものはづけとやらんも宜なり。御祝儀の十二銅、男衆への水引包は、二つの三方にうづ高うして、雪消えぬ不盡と筑波山を爭へり。そも／＼こゝには、神代の有様をやうつしたりけん、注連繩ひきわたせる石榴口の後には、榊葉ならぬ松真木もて、風呂焚く男の庭火もやすありて、湯汲場の天岩戸をさと開きてより、常闇にまがへる朝湯の湯氣は、漸くはれ渡り、人々の面白さといふころほひ、髮のかざしも少しうずめの命めきたる女の、指の爪に絲道とふ物の殘れるは、世にいふ舞子白拍子のたぐひと覺し。彼の太政入道殿の世にめでたくおはさば、遊びの者の推參は尋常の事に候、などいうて、見參申すべき癡者にこそ。●豐猫といふ十八九のぼつとりもの、看板に僞りなしの浮虚にこ、オツトきなさいの、跳び上りなるべし。顏をいびつに背けて下目を使ひ、指二本で左の耳をひつ張り、垢磨で耳の脇を洗ひながら小聲にて、上方下りのはやり唄、ウタ「おきやくの譃は、引かして女房にしよ。女郎しゆのうそは、惚れました。げいしやのうそは、きやくとらぬ。幇間のうそは、酔ひました。ちや屋のうそは、おそてもお早うございますッ。

▲今、一人は、おはれこといふ二十一二の婀娜ぼち、目をねぶりて、額に八の字を現はし、口を結んで鼻の下を長く延ばし、襟袋で顏をなでてゐる所へ、同じ年と覺しき三十ばかりの新造、風呂の口へ入り来る、この名はお文字

〇二ハサ「おはねエさん、お早いの。にもう紫文がすんだか。今朝は早かつたなう」あさ「紫文がすみません、私らにもまだ稽古がすみませんもの。さうするのが能いのさ」ぴん「此の子は能くつづけて來ます。まだ此方の稽古がすまないのに」［illegible］「さうか」［illegible］「寒稽古、明けまして［illegible］の稽古でございます」［illegible］「是ればお中をとらへておかなければ」［illegible］「よしさ、寒もまだ往かないか」［illegible］私「オヤさうだなう。［illegible］紫文さん、お客人に逢つたら聞かうと思つてゐた」［illegible］「鯨だ〳〵、マア待れな［illegible］よつと［illegible］つて聞かう［illegible］、何に［illegible］二編、女中湯の發端も、［illegible］鯨舍か、［illegible］町は、町たり。

ぼう「はやく〳〵、何の噂だ」［illegible］「あの、先一昨日の晩は、［illegible］、先一昨日と云へ［illegible］、さう去年だなう。去年と云ふと、とんだ久しい様だが、大三十日と元日と、夜が明けた許りで、去年もをかしいぢやアねエか」［illegible］「何だな、お前の噂は、いつでも下らねエ事計しなさるよ。肝心の用向は云はずに、去年の噂が、［illegible］、それつて、夫れが何うしたな」［illegible］「うんにやさ。暮の二十九日、大雪の降つた晩にの、とつちめられて、工左衞門が來たわな」ぼう「ぜエへ」ぴん「物川へさ」［illegible］「フム」ねこ「工左衞門とは役者のやうな名だなう」ぴん「さうよ。大坂者で浪花さんといふ表徳さ。その人の形が、工左衞門の若六に生寫しだといつて、髪の字の鬢名を付けたのよ」ぼう「フム、さうか」ぴん「お

前を呼びに遣つたら、桃林だと聞いて例の小言さ。いま〳〵しいがきぢや。あないな獄道奴はない。私が呼ぶ度にうせをらぬ。へげたれめが。」はな「すヤ正だわ。お前の上方詞は、浪花さんが出たやうだ。おほかた悪口を腹さんざ云つた跡が、駄味噌の拳だらう。ホンニ見る様だよ。」はれ「拳がきつい鹽屋さ。すヤ又忘れたわ。肝心の用を云ふのだつけ。」はな「それ見な。いはねえ事か。」はま「夫れだつても、口數が多いから、竟遲くなるのだわな。あのの『正月は、お屋敷のお禮を三日までに仕舞ふから、五日の日には舟で妙義様へ參らう。」と云ひなすつたよ。其の事をお前に『忘れずに云つて置いて呉れ。』ツサ。『大てい間違はねえけれど、約束も大騒らしいから、心待ちにして居な。』と云ひなすつた。其の代りに、恨みつこいのねえ様に、お前と私と、ねの字と、豐家さんと、黒文字さんと、斯う五人連れて行く筈だ。」はな「フウ嬉しいなう。初々しく能からう。然し酒が恐れるなう。」はま「その代りには氣が張らず、三味線なしの心やすい遊山で能いわな。」はな「浪花さんは、日外太鼓持で、御座敷に居たお方だの。」はま「さうさ、氣さくで解つて居るから妙さ。」はな「陽氣、灰汁の抜けた人だから、氣前が能いよ。二本目ェには庭の松ぢやアねえわな。」ねこ「あのモウ、松づくしを唄ふ上方者たら、お里が知れるわな。」はな「あれと、伊勢音頭が、上方者の押物だよ。シカシ拳は強いなう。」自慢をするも無理ぢやアねえ。夫れだから他の拳を見るとの、的さんのは、や拳だや、あれや益たたねえ。や拳

ト「ア拳殿は、あほらしうて對手にならんわい。ホンにモシ三下に見てゐるわネ。」「コウ拳、ア拳よ、何の事だネ」「三六や、五や、と、その字を付けるが、三ツで、七で、九で、と、アの字を付けていふので、ア拳だッサ」「そんなら何といふのだらう」「あれ日本や、おかしな人だ。みんな其の連中だから、[illegible]蘭陀人[illegible]の拳を見たでも、やれ[illegible]ねへわな」「アヽ[illegible]の拳では其の細さ」「[illegible]ていふか、九といふと笑ひなさるが、頂の[illegible]と云ふ物は、一二三四なら六七八九といふのだッサ。五だの七だのといふは、おほかたさ」「ムヽ熊手と[illegible]打つて、ねへと、おまへさんが教へなさるから、おいらが様な人は拳さへでもする恥かしいよう[illegible]四、五、六、七、八九と打つは何うかいふのだ」「ハテ、[illegible]一本[illegible]云ふは宜い[illegible]筒の間に、五つ六つと、常の数でいふのは、かまはねへようだ。[illegible]道に理窟にあるならう。面倒くさい。両方から指を出して数が當つたら、勝で能いよう[illegible]そうだが、おれもおまへも負けると腹が立つ。上客でも構はねへで[illegible]来[illegible]八は、意地が張つ居るかな、[illegible]上手だ」「[illegible]なんだな、懸めるの悪くいふのも、[illegible]ね[illegible]浪花さんも[illegible]六[illegible]ね、聲が[illegible]い上手に出し切れで、指さすなおつに[illegible]な」「[illegible]、寒くなつたら[illegible]の字違へ[illegible]ねかつ。[illegible]違へはひ[illegible]ト、右[illegible]打ち[illegible]

前達が這入るなら、おいらァ出よう。」はね「すヤしよにんな子だの。」はゝ「夫れでも逆上るわな。初春早々ゆだるも智慧がねえ。」ねこ「ゆでたき春の御壽ぢやァねえか。」はゝ「ヘン、よろしく申しておくれ。能い口だの。」はね「おいらァ風を引い居て、今日が初湯だよ。夫れだからやつとけふ禮に出るわな。」はゝ「己ァ元日に出た。」はね「違つたもんだの。チトお衣裳を拜見致したいネ。」はゝ「長持七棹。箪笥が四棹で、日移りがしてならねえわな。」はね「そりやァさうと、彼のに極めたか。」はゝ「さうさ。」はね「あれがお前には似合ふよ。」はゝ「帯もいつかぢう咄したとほりさ。」はね「ム、ありやァ好からう。」はゝ「ハイ御免なさい。出ます／＼」　トいひながら、ざくろ口を出ると云ふ柵をつかひながら　「そんならきつと五日だの。」ねこ「アア。」　作者曰、此のア、といへるは、女の返詞なり。もちろん江戸詞に限れり。以下推してしるべし。　はゝ「よし／＼、又一日からかつて遊ばう」はね「その代り口は惡いなう。」はゝ「毒々しく云ひなさるけれど、癪な事はいはねえわな。」はね「そこへかけちやア三徳さんだらうよ。」ねこ「わたしが初めての座敷の時、がうぎと虐めたわな。」「反吐鯨者だ。」「何の彼のとひどいことを云つて、癪に障る事だらけさ。それから、「居たたまらねえから、下らう。」と云つたらの、桃林の内でいふには、「ナニありやァあゝいふくせで、氣には何にもねえが、口に惡を持つ居る人だ。」と云ひなすつたが、だん／＼つき合つて見りやァ、今ぢやァ、株だと思ふ所爲か、耳にとまらねえ。」はゝ「なんの、あの爺さんは口ばかりさ。おいらァ、常不斷喧嘩をするわな。人をきざがらせ

て面白がるのだが、悪い洒落さ。此中も、おれがことを「手前をさ、百七への[illegible]でも[illegible]といふ。ふいけ年仕つて、其の眉毛は何の真似だ。此とは鏡の手前をも恥ぢたがいい。其の眉毛は僅に三度、善光寺様のお開帳にやア、七度半も引廻つたらう。さあ鏡の間へ白粉を身に[illegible]、[illegible]じりしてゐること事の、キャレ、橋詰で箱代建立が呆れる、とんだばくれん[illegible]に憎いたらう。」[illegible]「此方ら負けずに、[illegible]、どうで[illegible]は[illegible]、其れだから[illegible]の[illegible]で一緒に赤飯を配つて引込む覚期だが、おまはんも、いろいろ世話焼だ[illegible]と云つたら、一日の[illegible]な事を聞くな。客が世話焼故に、[illegible]が[illegible]、[illegible]も堀川だ[illegible]。まあ呆れた口だの。ねえ[illegible]」[illegible]「面の憎い人だなう。」ねこ「ア、温まつた。モウ出よう。」ト[illegible]、女、[illegible]おけ[illegible]、[illegible]「[illegible]、つめてえ。だれだなア。わりいことをするぜ。[illegible]お國さんか。[illegible]したわな。[illegible]こゝな[illegible]いよ。それおぼえてゐるな。」[illegible]「まア、、、能いきびしい[illegible]、[illegible]とさうもごうんやア[illegible]、この中の意地だへしだよ。」[illegible]「お国さんか、ひさしいもんさ。」[illegible]「イヤおはねさんか。棒組お揃ひだねト いふうち、[illegible]、お国に[illegible]、[illegible]言いろな[illegible]ン二能い気ざんだなう。」ト[illegible]、[illegible]「おはねさん、お前昨日はなぜ来なんだ。[illegible]な者だなう。

あれほど約束したのに。きのふはの、旦那様が、一日御入りだつたわなう。」はね「ほんにか。其の癖に昨日は内に居たけれどの、朝つはらからふさいだ事があつて、寐て居たわな。やつと今日禮に出る位だから、是れにて御推もじさ。」かこ「そんなら、お初を呼びに遣ればよかつたなう。惜しい事をした。」はね「何さ、口ぢやアあゝ云ふが、正はといへば邪魔になるのさ。」はな「さうだらうよなう。おちん〳〵でさ。」かこ「ヘン可愛さうに、そりやねえよ。昨日はの、酒孝さんと、雅文さんと、わつちらが旦と、旦とけ、（しやれたる言葉、）だんなを三枚が何所で落ち合つたか、おひやる手合を四五人ひき連れて、押しかけたといふもんだから、大酒となつてだり切つたわな。（だりむくれの方言をだりと略し、むくれとつゞめて通用するなり。だりむくの方言世上に弘まりてより今は又、へちむくりといふなり。）最う昆布鱈に鰤の麹漬といふお定まりでもあるめえとかいつて、種々取り寄せた擧句に、旦の思付きが能いぢやアねえか。『去年の暮には年忘れをしたから、今日はめでたく年覺えをせう。』斯う又能い顔の揃ふ事もねえ。何でも天々爾々に一番苑趣向して、穢細工の料理をせう。』と云ひ出すと、こりやア妙だ。」とか云つて、天々爾々に何處か行つて案じて來た所が、こや〳〵穢くて堪らねえのよ。」はね「嬉だなう。つひごねえ。」かこ「まづ雅文さんが、新しい煙盆を提げて出たから、ト見るとの、火入の中へはむしり海老を細アかにして櫻灰と見せて、中にちよんぼりと火のいけてある形が、海老の殻の赤い所さ。傍の灰吹の中が雲丹さ。」はね「エ、穢ねえ。」かこ「夫れから酒孝さんが買ひ立ての耳盥の中へ、え

よし姿に湯若切ぎれ／＼姿つたらきれ。」[illegible]／＼[illegible]そりや、小間物店に見立てた[illegible]
おこ「さうだらうよ。いやだなう。聞いても胸が悪いよ。」[illegible]すると、目[illegible]、[illegible]いあるを
つと持つて出て、穢さうに蓋を撮んで傍へ置くと、其の中から、[illegible]山の[illegible]ふに[illegible]
否だらう。何ですとて仕合せとしてそれた悪[illegible]落を[illegible]めたらうた。」と言ひ[illegible]て[illegible]
な、[illegible]いやな事はいから、[illegible]な事は何も承知で居ても、[illegible]うも[illegible]は否だ、其の時[illegible]
の、[illegible]に[illegible]も否だらうで「命あもやいいね。」[illegible]
つたれた「ハヽヽヽ」お商達も見るお目にかかり[illegible]一遍つてやつて[illegible]
まだいや／＼。[illegible]しよにんな子だなう」此の内[illegible]
ま「おかさんしつかりに」[illegible]後に必[illegible]
其「なん[illegible]のお姿を見ねえのう」[illegible]松[illegible]のしたいた[illegible]が来たから[illegible]
さんは色別だよ、何か見る。見せな」[illegible]大[illegible]十日の[illegible]
ト、[illegible]「見れだものを、[illegible]はこざいませんね[illegible]此の[illegible]
見えなさんねえね。」[illegible]、あの子は病気だわよ」お[illegible]見舞に行つてやんなよ[illegible]
そりやアほんに[illegible]、[illegible]しくお見えなさらねえ。[illegible]見舞に行つたら[illegible]に[illegible]

うなら。」三人「アイ。」ト、出てゆく。（作者曰、凡て女中湯は、常に茶を出す家あり、又常に出さぬ家にても、松の内は茶を出せり、さるたぐひの些細なる事がらはもらしとてこゝに記さず。）

■年の頃十か十一許りの小娘、こましやくれた形にて二人著物を著ながら噺すを聞けば　お丸「お角さん、此の間は、お稽古がおやすみでよいねえ。」お角「アヽ、お前もかえ。私もね、お稽古のお休みが何よりも／＼最う／＼＼一イばんよいよ。たれたから、お正月の來るのがお樂しみだよ。」丸「アヽ、ネエ、お正月も、松が取れると不景氣だねえ。もつと、いつまでも松を取らずに置けばよいのに、何所の内でも、直様お取りだねえ。否だつちやアないよ。」角「アヽ、お前はね、お正月がよいかネ、あのウ、お雛樣が好いかエ。」丸「どつちも好いよ。」角「マアどつちか一つお云ひな。」丸「マアお前お云ひな。」角「わたしも兩方よいよ。」丸「それお見な。」角「そんならね、お丸さん／＼、毬と羽根ではどつちが好いエ。」丸「毬と羽根でかえ。」角「アヽ。」丸「どつちも好いがね、羽根はお天氣が悪いと突かれねえから、毬の方が好からうか。」角「イヽエ、お天氣が悪くてもね、私はお藏の前で突くから好いよ。お藏の前はね、高アい家根が拵へてあるから。」丸「わたしの所には、藏はないものを。」トいひながら、懐から手毬を取り出し、丸「これ御覧。お屋敷のね、伯母さんの所からね、お年玉にお貰ひだよ。」角「よく縢つたねえ。これは板毬かエ。」丸「いゝえ、疊の上で、よく彈むよ。」角「お前の伯母さんは能い伯母樣だね。そしてお前のおつかさんも氣が好いから好いがね、わたしのおつかさんは、きついからおしやうとお叱りだよ。まアお聴きな。朝ツからり起きる

と、手習のお師さんへ行つてお座を出して来て、夫から三味線のお師さんの所へ朝稽古に参つてね、内へ帰つて朝飯をたべて、踊の稽古からお手習へまはつて、お八つに下つてから湯へ行つて参ると、直にお琴の御師匠さんへ行つて、夫から帰つて三味線や踊のおさらひさ。〔此の内、鼻をスウ〳〵と云ながら聞て居る小娘の詞なり〕其の内に、ちいッと許り遊んでね、日が暮れると又琴のおさらひさ。それだから、さつぱり遊ぶ隙がないから、否で〳〵ならないわな。私のおとつさんは、一躰可愛がつて気が好いから、おつかさんが、さらへ〳〵とお云ひだと、何のそんなに喧しくいふ事はない。あれが気儘にして置いても、どうやら斯うやら覚るから、打遣つて置くがいい。御奉公に出る為の稽古だから、ちつと許し覚ればいいとお云ひだけれどネ、おつかさんは聞かないで、むしやうに稽古をさせるから身に染みて覚えはしねへ。お役にたちはせん。女の子は、私のうけ取りだから、お前さんはお構ひでないよ。あれが大きくなつた時、後悔とやらをしますよ。お前さんがそんな事を仰しやるから、あれが私を馬鹿にして、いふ事をきゝません。何の角のとおいひだよ。そしてね、おつかさんは、幼い時から無性やらでね、字はさつぱりお知りでないわな。あのまア、山だの、海だのとある所の、読めぬかでお産まれだから、お三絃や何角もお知りでないのさ。夫だから、せめてあれには、芸を仕込まねえおやアなりませんと、おつかさん一人でおやく〳〵ばつてお出だよ。ナ、ほんたうに」と、奉

にかえ。わつちのおつかさんは、何でも知つてお出でだから、些とでも三絃の弾き様が違ふと、直にお叱りだよ。私のおつかさんは、七つの歳に、踊でお屋敷へお上りだと。それだからネ、地赤だの、地白だの、地黒だの、紫縮緬の裾模様だの、總模様だの、大振袖だの、帯は黒天鵞絨のや、厚板のや、何角を、お長持に入れて、たアんと持つておさがりだけれど、私のおとッさんが道樂だからネ、皆お亡くしだとさ。アヽ、お婆さんが私にお話しだよ。それでね、お婆さんは、おとッさんの事を、どら殿と許しお云ひでね、一寸お憎がりだよ。私は夫れだから、稽古は何でもする筈だが、お婆さんのお云ひには、うちのお丸は病身だから、手習と三絃許しで、外の事はさせねえが能い、其代に、女は縫物をよく覺えさせるが肝心だ。」と。此間はネ、縫物を致すよ。お前もお仕か。」角「いゝえ。」七「私は此間もネ、人形の衣を二つ縫ひました。アイ、アレ／＼お角さん／＼。」ト、耳へ口を寄せて、中に流してゐる女を横目で見ながら小声に叫く、「アレ、あのをばさんを一寸お見。子が三人有りながら淺葱縮緬の裁をかけてさ。」七「すヤほんにねえ、若い作りだね。あのアレ、ぐるり落しに結つ居るおかみさんの頭を御覧か。」角「イヽエ。」七「黒油で禿ちやうを隠してさ。」角「アレ小さな聲をお仕、聞えては悪いよ、お前。」七「サア参らうじヤ、お前の袂から何だか落ちました。」角「ホイ。」ト、拾ふ。七「オヤ／＼髷結ひの裁だ。」七「一粒鹿子かエ。」角「アヽ。」七「麻の葉もよいねえ。」角「あれは半四郎鹿子と申すよ。」七「私はね、おッかさんにねだ

つてね、あのゝ踏考案をね、不断著に染めてもらひました」▲「ハイ、わたくしはネ、谷茂に居
る伊豫染を不断著に致ますよ」●「お前のも大様かネ」▲「アイ、是れはネ、田舎から離縁の節に取つた
から安いとさ」▲「おとつさんがいつか中お云ひだつけ」●「御新造、お前さん、俺にお出でなさ」取なが
ら取つて遊ばさう」▲「ネイ、とあるう」●「出て」▲「人柄のよいお方ですネ、本所の小梅とかへ
しな●「お袋さんお早うございましたね」●「大坂は」▲「ハイ、是れは渡したネ、どなたかと存じま
した。まア聞けましては結構な春でございます」●「ハイ、あなたにもお揃ひ遊ばしまして御機嫌よ
うお出で遊ばし」▲「ハイ、おまへさんにもお揃ひなすつて」●「ハイ、お揃ひなさいまして皆様も
ます事もございませんネ。ニお寒さもお増に遊ばしたさうでございます」「それでも御無事
御様子で、別して御めでたう」▲「いいエ、お前さんネ、暮に押し詰めて人手はございませず、大
前御ぞんじの通りネ、俺が重うございましたから、どうかと存じましたが、案じるより産むが易い
きに皆様致しましたが、仕合と軽うございまして、ネ、ニノ御方便な物でございます。御暮し、お
で、人様にはわたくしと存じましたから、手足に添う導へるばかりでございました。あなた様は何やら
御神のおかげでございますのさ、馬橋の萬満寺の仁王様の御草鞋をお借り申して、丁度に産みまし
たが、其の御利生でございますのさ」●「それはマア、あのおめでたい事でございますね。私も商売

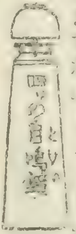
ら一寸お見舞ひながら、お歳暮にも上りますのでございましたが、御存知でもございませうが、娘をお屋敷へ上げますので、何かせはしうございまして、存じながら御不沙汰致しました。」▲「ホンニ左様だッけね。おめでたうございます。お宿へお置きなさると、お心遣ひだから、たれがようございます。タシカお十六カネ。」●「ハイ、さやうでございます。」▲「いえもう、近所の若い衆が騒々しうございますから、何事もない内に御奉公の事さネ。お屋敷はどなた様でございますエ。」●「ハイ、やはり私のお勤め申した旦那様へ上げました。」▲「それはホンニ御重縁で、別しておめでたうございます。」●「此のまアお寒さはどう致した物でございませうネ。」▲「左様さ、今年は餘寒が強うございまして、あのまア雪を御覧じましな。」●「さやうでございます。雪の所為かして、兎角病人が多うございますよ。」▲「左様さ、いつも寒明にはちつとづゝ病がおでございます。シタガ、お前様はいつも御丈夫でようございます。」●「イエモウ、是れでも病身でございますがネ、本町二丁目の延壽丹と申す練薬を持薬にいたします所為か、只今では持病も發りませず、至極達者になりました。」▲「ハイ、それはお仕合でございます。あの延壽丹は私の曾祖父の時分から名高い藥でございますのさ。あれは一丁目でございましたッけ。私も暑寒にはたべますのさ。」●「ハイ、只今は二丁目の式亭で賣ります。」▲「、何かネ、此の頃はやる江戸の水とやら、白粉のよくのる藥を出す内で御ざいませう。」

●ハイ、さやうでございます。私どもの娘なども、江戸の水がよいと申して、化粧の顔につけますのさ。[illegible]、顔のでき物なども癒りまして、白粉のうつりが綺麗でようございます。」▲[illegible]どもの[illegible]、田舎育ちだけに、根から白粉がのりませんが、[illegible]すがネ、翌の朝、顔を洗つた跡でちよいと紙で拭ひますと、薄化粧でも致したやうに、昨日の白粉が出るさうでございます。種々な重宝な事が出来ますネエ。」●ネ、[illegible]の[illegible]は、[illegible]に能く働きますネ。水ぎれの時にも擔で水をかつがれますが、[illegible]と気味のよい人でございますネ。私どもあれたのは[illegible]と申しては、[illegible]地[illegible]て出替[illegible]、[illegible]風だと申して[illegible]まつて居ります。」▲それは御不自由でございませう。[illegible]が一番[illegible]でございます。」●ハイ[illegible]、兎角お[illegible]喰ひでとうも[illegible]て居るも、病なら致方もございませんが、御膳をたべて、そして寝て居ると申しつけますが、[illegible]ものので、何の奉公人も兎角さう致さぬ物でございます。」▲ハイ左様さ。奉公人[illegible]とやらで、[illegible]をたべては寝て居にくいか致して、どこのも左様す。[illegible]な身でも、一[illegible]が悪くなりますのに、ましてや病気のときは、それだけに養生を致したが能うございます。つまる所は、面々の損といふ所に気が付きませんて。」●イエモウ、いかい事人も遣つて見ますが、[illegible]ふではこ

ざいません、遣はれるでございます。」△「ホンニ去年まで居つたお三殿は、至極柔和に見えましたつけ。」●「ハイ、あれは久しく年季に置きましたが、相應な縁がございましたから、片附けて遣はしました。」△「それはよくなさいましたネ。」●「今度のは、がんさい者で困り切ります。叱ればあたけ散らして物を壞しますし、騙せばつきあがりが致す。あのモウ顏付きをするのと、ふて寐を致すのが、第一に惡うございます。」△「イ、エサ、私どものりんめが、やつはり左樣さ。大の差出者で、口をきけば手許がお留守になります。朝飯を仕舞つてそこらを撫で廻すと、二階へ上つて髪に半日かゝります。「お晝の支度を仕やよ。」と云はぬ内は、物干へ出て、ばかり〳〵無駄口をたゝいて居ります。毎日知れた事に世話をやかせて、啼いても笑つてもせねばならぬ事を骨惜しみをした物さネ。サアお前さん、水を汲み、候と申して井戸端へ出ると、一寸一手桶提げて來るのも、やゝ一時かゝります。其の筈でございますわな、お長家中の男衆を對手にどこぞ狂ふ隙には、同じ女中達と寄り湊つて内の事を誹り走りさ。此間も何をいふかと存じて、雪隱の陰で聽いて居つたら、先の主人を譽めちぎつてネ、ヲヤコノ世界中が白壁造りだ。二月が來りやアおさらばさ、お願ひ申しますと手をついても、こんな不吉な内に居るもんか。他人宿に雜用を拂つて、まごついて居るには増しだから、居てやるのだつさなんざと太平樂さ、お前さん。ホンニ〳〵、面の憎さ〳〵としたことが、ネヱまアさう申しますわな。立ち

讒をするなと三尺地の下の蟲が死ぬと申しますが、いらざる罪を作りますのさ。●「ハイ、そりや聞頭で、つい一言も小言をいひますと、日に三度でいけません草臥さ、お前さん、それに又、私共碌でもございませんが、鳶の羽を廣げた様に鬢を出して、あの顔へべた／＼と塗りますから、半襟は白粉に染まつて地が判りませんわな。賤しいお話でございますが、十六銭や二十四銭の紅は、二日か三日に皆めてしまひます。夫れにつけては元結油も麁末に遣ひますから、お足の遣ひ方が荒うございますよ。今の家も何方も同じ事さ。着替もない癖に能い物好で、竃元を働くにもおなじ胴で、そつはりおしやいくらかおわかりますかね。此の竃元を立ち働く内は、古い着物を着て、足袋も古いのと穿き替へやれ。』と、毎日々々口の酢くなる程云ひますがききません。さうしては新しい足袋も前垂も汚れ臭つたので、衣類のまゝ／＼踏んで歩きます。●其の湯具もさ、四尺位買つて二布に致せば、つい通りでよいのに、七尺も買つて二布に致すから、サア裾も褄端を集めて纏ふ氣はございません。當世も、髱坂は否だことが申して、廣幅を買ひますから、緋も緋繻子の紺縮緬を縮緬に仕立て、大きな尻へ巻きつけます。どこの國にもお前さん、茶屋小屋の女中衆ではなし、商人家の女房衆が、これでは濟みませんに。▲さやうさ、まことに能く似たお話がございます。」私ともの嫁が、湯具を縮緬の中幅を二布に致して、居るにも立つにもびら／＼と致すから、貴様はあまり無作法な人だ」と。故

湯具といふ物は、白木綿二布に規した物で、膝から下へ下げる物ではない。上つ方の御奉公する女中衆を見さつしやい。羽二重だらうが絹だらうが、皆短く遊ばすネ。長湯具といふ物は下部た人のする業でござるッサ。女郎ですら好蘆は昔の風を廃てず、萬事長しやかだから、長湯具などといふ事はないといふ事だ。早々止めさつしやい。」と申して意見致しましたが、それをも知りつゝ、りんの馬鹿めが、幾布に致した事やら、木綿の長湯具を、ちやんと締めましたわな。」●「いかな事でもオホヽヽヽホヽ。」▲「オホヽヽ。ホヽヽヽ。」▲「あんまり悧れて叱るにも叱られません。アハヽヽヽ。」●「否モウ、真に悧れた物でございますよ。着物なども手まめに洗濯でも致して、夜業に縫いで置けば、さばさばとした布子も着られますのに、穢れたらその儘に葛籠の隅へ押込んで置きますし、兎角針さへ持てば晝も居眠りますが、ホンニ〳〵仕様仕方のない物でございます。」●「ヤハヽヽヽヽホヽヽニ怜悧のない物でございます。」●「最う貴方お上り遊ばしますか。」▲「ハイ」●「わたくしも御一しよに參りませう。」ト、着物を着て出でゆく。跡へ下女二人、風呂の中より出て來り、浄湯を使ひみる折柄



「なんだか、お猿どんは、いまのをきいたか。」今一人「あゝ、聞いたわ。」「よくしやべくる婆さんだの。」「さうさ婆はあたりめへだが、金溜屋のおかみさんよ。人品の能い風をして居て、とんだ口乾きだの。遊ばせの、入らつしやいのと、だゝつけねえ詞をしても、お里が知れらア。あれだか

ら奉公人が居着かねへわな。ま、試して見な。去年まで居たおさんどんが、六十四文ばかり置いて来に
人だから、久しく辛抱もしたらうが、あの跡で幾人出たと思ふ。たつた十月ばかりの間に、丁度九人
替つたぜ。」ミ「どうぞ又、あので八の気に入らうとすれば、雑言も埒外だ─」「何も同じ事さ。何
又あの家でも貰はうがやァあんめへし、高が一年限りで、ふい〳〵と風まかせの奉公だから、同じ
寝ならば気散じに暮すはうが徳さ。針を持たうと持つめへと一つもの料簡うくだ。縫物も出来ねへで
打遣られたでもねへ。もんだわな。こちとらはどうで着た限り雀とさこみるから、気に入つた着物をさ
つこつと着殺すがいいのさ。」ミ「その方がさつぱりして能いわな。見たがいい。てんでに奉公人
を悪くいふから、また奉公人の方でも悪くいふ筈だァな。差しひいて見りやァ五分だから、損と徳
もねへ話さ。」ト「損も徳もと云へば、お猿どん聴きな。頭日まで挿した京笄の簪の二
一本あれが下に遣つて挿込みのある簪と取り替へたがの、二朱と六百いくらか足したわな。剛細な
損をしたよ。」さる「そりやァお前さん、とは損をせでもいい事さ。」「いやさ、流行だから能いなァ。」さる「ま
マア聞きな、おべかどん。昨日小間物屋のお日車が持つて来た鼈甲の櫛さ、京で中の能いとし
た事か、中の恰好から何から今風で、是う〳〵ふるひつく様だつた。御新造さんも不審になさる様
な下に遣つて、三匁とか打てと云つたつけが、年日は相談が出来なんだが、あの人はあやしい

こ者だから、御新造さんにきつと賣りつけるのさ。」ぶた「おめへン所の小指も派手者だの。」さる「派手者所か。髪は髪結のお櫛様が常詰めか、小間物屋は四五人這入り込むわな。アノマア親玉のあたじけねえに合はしては、不思議に買つてやるよ。ヤレ薪が入り過ぎるの、炭が多いのと、おいらには小言をいふけれど、御新造さんには御意次第、何でも角でもハイノヽさ。」ぶた「餘程鈍い男だの。」さる「鈍いばかりぢやアねえ。生が入り婿だにの、店者上りだから女珍らしいのよ。二朱や三朱の女郎にばかり騙され居た上句に、艶な女房を初めて持つて見た物だから、そりやアおたまりやアねえ。」ぶた「尤もだの。全體能い御器量だ。」さる「めつと權があるよ。あれで愛敬がありやア鬼に鐵棒さ。」ぶた「餓鬼に簪とはおいらが事たらう。そんな櫛や簪を見ても買ふ事もならず。」さる「きつい事はねえ。おいらが三年ぶりの給金が不斷緒さ、そりやアさうと、おらア伯父さんの來るのを待つ居るがさつぱり來ねえ。」[illegible]「又ねだるのか。」さる「さうさ。伯父御でもいたぶらねえぢやア出所がねえわな。藍が大分とねたから、川岸の問屋へ仕切を取りに出る筈だが、なぜ來ねえしらん。そしての、内で給金を借りようといへば、最う遣ひ切つたか、錢遣ひが荒いの何のと、只でも呉れるやうだ。」ぶた「おめへ又さういへば能い。此方は錢遣ひが荒い。お前方は人遣ひが悪いッ。」さる「違へねえ。おでかどんおめへン所も喧しからうよなう。」ぶた「喧しいの何のぢやアねえ。へ、、そこへ行つちやア、喧しいを初

あた間抜けて、其の癖にあたじけなくつての、おはう僅はねえかな。三年前の寒くなつた澤庵二本、たまたま惣菜といふ所が鹿尾菜の中へひゞこが三匹、精進日が荒布に油揚の細引いたのが二切ぐらゐ。其の菜は、てんでんに料理茶屋へ這入りやアして、旨い物のくすね食ひをするから能いが、二人とも吝嗇はまわたつて其の癖大嫌ひして旨い物は食ふけれどの、内の者には見せた事がねえ。あれが悪いわな。いつそあたじけねえなら、てんでんも食はずに居りやアよい。似た物夫婦とやらで、どれもどれも哀れはねえ代物さ。それにこたあの兒めが、いびいびと噛えて、ぴつたりつ子で、我儘育ちときてゐるから、小癪とははげしのよ。何でも角でも云ひたい次第、離し飼といふ物だから、悪い甘やかしで可けあるもんかやアねえ。能く育てりやア相應に可愛氣のある子だけれど、猫撫聲の親めらと、舌ア廻すの真似をする兒だ。見ると面が憎い。あれ程なた夫婦だが、親馬鹿とは能く云つた物だよ。今の分でも大きくなつたら、あの兒は碌な者にはならねえ。いけつ憎くして溜めた金は、きつとばらまかれるのよ。ホンニホンニ、見る様だアな。ことさら子には甘い物よなう。二歳きな、どう思つたか寳籍に足貫一足、年玉に孔方を二百呉れたがの、おほかた氣でも違つたらうよ。其代に元日しまから小言た、三日でも跡何でも未練ぶしやくはねえ。いびいびと箸の上げ下しだから頓て、ても顔ぞの皺寄と御沙汰にも及ばうと思ふが、あたつきしあけしい間にはきまれる、それから見りやア、お前さんの所なんざア、

能い旦那様だ。何だつて不自由がなく、第一氣が詰らねえで勤め能いわさ。」さる「なアに、他から見りやア然うだけれど、餘り能い事もねえのよ。何所も同じ春の夕暮とやらさ。せめて正月だから晝の内湯へ來ようと思つて云ひ出したらの、小指のいふ事を聽きな。正月と云ふ物は忙がしい物だから、用でも仕舞つて行くが能いことぬかさア。そりやア百も承知だけれど、松の内は早仕舞だの、そちこちする内這入り損ふから、こつちは手廻しをする氣よ。不斷夜ばかり這入つて居るから、たまたまは默つてよこしても可さきうな物だが、依怙地惡い人よ。おらが内なんざア、親指が是れ式といふもんだから。」ト、左の手で飲む仕方をして「よそからうせる客めらが、みんな、酒ッくらひよ。見たくでもねえ。日がな一日、皿鉢を拭いたり返したり、あれにも恐れるぜえ。下手な料理茶屋の様だわな。全體酒客といふ奴は、人の想像のねえもんだよ。他の奉公人をば、うぬが飼つた犬兒の樣に思つて、好き三昧をぬかしての、夜中までべん／＼と飲ん居らアな。こつちは、晝の勞れでおつとも早く寢てえと思つ居るに、夜深け夜更けまで、能い氣になつてしやれ居るが、齒も氣も利く物ぢやアねえ。てんが／＼は、寢ずんぞ朝寢をして、ヤレ宿酔だの頭痛だのとぬかして、藥を呑んだり、水雑炊を食つたりして、うんーん云ひながら、八つ九つまで起きて居た奉公人の想像なしだ。料理茶屋なら花でもはずむだらう、こちとらには、お蔭で小言さ。お茶でも何でもねえ。」ト、咄して居る。後の方に[illegible]

[illegible]ましかし御料造さんに聞つたおかさ、一體お慈悲深い[illegible]の仕合さ。」ト、[illegible]
「[illegible]迎へりう。」[illegible]「[illegible]中でなかし合はう[illegible]。」[illegible]、さうしては[illegible]
るだらう。はやく歸つ[illegible]お節の支度をさにやァならねえ。おめへン所は味噌[illegible]うれに
やゃつけの醬油のお雑煮さ。」[illegible]奇特だなう。おら[illegible]所も醬油[illegible]
人[illegible]三[illegible]どうだ色女め。」[illegible]お[illegible]、何だな、[illegible]
さ、ふざけなさんな。おめへの傍へ寄ると、色かぶれがして困らア。」[illegible]洒落[illegible]、その
やァ、あつちらこつちらだよ。こつちは[illegible]はねえわな。[illegible]」
[illegible]「さうよなう。彼のが[illegible]宜しく。」と云つたよ。」[illegible]「その通り。[illegible]
らと見ためる[illegible]何れ色よき御返事を、松蟲、鈴蟲、轡蟲、[illegible]
亀次郎はあたりめへさ。打遣つて置きな。どうせおいかぞんの様に、硝子を横っ倒しにするやうな[illegible]
おやァねえから。」[illegible]「なんだお前のいことを云つたのおやアねえ[illegible]
[illegible]負けなきんな[illegible]」[illegible]「何の又四文と出るやつさ。」[illegible]おめへも出[illegible]
[illegible]の間へ[illegible]んでお念佛でも申して居な。」[illegible]
んの様な美人徳利おやァねえのさ。」[illegible]「備前徳利を横つ倒しにしてもよいよ。わつ[illegible]

から、おべかどんのやうに餌はつきやせん。」ばか「なんだ此奴が。」ト、湯をすくつてかける。またこちらからもすくひかけると、雨方から加勢が出て、石榴口と風呂の中で大騒ぎに狂ふ。此の時風呂の隅にかゞみ居たるは、うんざり婆とかいふ中ツ腹の中年増、さきほどよりだまつて居たりしが、この騒動おびたゞしく、湯の跳ねるに熱くなつて、風呂の隅から眞赤に怒り出す。女「ヤイ〱、此のあまめらは何をふざけやァがる。いけ喧しい。何の事たい。あたり近所へ湯が跳ねて、是れ見やァがれ天窗からお湯をめした姉さんがお一方出來たわい。惣體此のあまめらァ悪くふざけやァがる。うぬらばかし買ひ切つ居る湯ぢやァあんめえし、あたりに人樣も御座らつしやんねえ樣に、野方圖な奴等ぢやァねえか。コレ、人は人と思つてナ、些と熱いと思つた湯も、湮めちやァ口が煩えから、辛抱して這入つ居るのに、あんまりてへば無暗な仕方だ。べつちやくちやく〱と、あくぞもくぞを算へ立つて、おやんなさんやしの口を寄せやァしめえし、湯の中中を口だらけにして、いけ騒々しいあまつちよめらだ。是れ見や。罰もねえ者にまで、ざつぶりと浴びせやァがつた。いかつはちの錢を蒔いて、はゞをするか知らねえが、コレ番頭、此奴らァ、打遣つ置いたら、湯の中へ糞を垂れて、鬼渡や捉迷藏も仕兼ねめえ。片端からしよびき出して、一軒々々にこてへねえきやァならねえぞ。皆覺期をしやァがれ。」ト、鳴り立てにらみつけられ、四五人のおちやつぴいは、色を變へて悄氣りゐる。番頭これを聞いてあわてゝかけ來り、ばんとう「モシ〱おかみさん、お腹立ちは至極御尤もでござります。何を申すも若い人達だから、跡先の勘辨なしでござります。初春早々かれこれがあつては、お互に快くございませぬから、どうぞ御不承なさつて遣はさり

まだに上靜寂なかでこつちは何も云ひませぬ。むかしが、訳もとつて噺みものあつた物だ。今の世世界いやて、暗く上はうゆゑ、そんでも、無面目もやア根はわなは」「それエヤようこうございます。何事も、並に菜喫なりませぬ」「エヽ亭主、那様は撰れねえが、五月の三日に大雪から湯を出しもやい、亭主の前へいい斷かれえ」「ほんにまア「へエ清めるのだからようござります。四月八日なら天窓から茶をあびるが、正月三日だから、頭から湯をかけ、ことをかしくもねえ、此の番頭は、これたまでが四ござ」「ニーうハ、何曲「こう情をすりなすらあやアわるい」ハア左様でござりますか」もいいれなゝ、暖気でした事でもねえから、勘弁してやらうか、との尼でも堂へ来ておれへ拭うかれ一寸宴へ来うとは、りらこうハすて、お頭を退れて宴へは来られません」「左様ならばも許ばせず、怖くなつて隠んで居たが、態意で、いやアへまさくへだ。了縁するのは是ま居て只ものの用心じや、凶のものにて、鍵が絶えねえ為にや、一つ身もゐでゝ置ものや、小判小粒が、噓をしてはけ付る」「おつにこのやく藥の隠太から、聞くいたぶる身体のから工とで、あも承知とはゞ、おいらが云ひ出した事だ。手分子が有り顔って、を良つた私にー、上を離れても姉御だまへ、ヽ、鑿精霊の、何の云つても長い合へかれえ不承しておくれへ、よわたし一國に返ばれまか、昆布らたゝき牛房も舌を嘲だから、まらけはもの、古風な餅も突かうと、角

大を抱いて剣菱五といふ正月だ。歩ばつし。例所へ行つて、もゝんぢい（獣肉の料理店）で四文二合半ときめべいこ」（異の銘　酒の銘五合の事）

はんさう「アハ、、、、お跡から参りませう。モシエお前方に不断「騒ぎなさるなこ」といふは爰の事さ。今度から嗜みなさい。モシおかみさん私が拭いてあげませう」ト、手拭で鬢の毛をふきながら、「私は是れでもね、昔風の狂歌が大好きさ。しかも一風齋の弟子で、一風呂齋とまうしますこ私は御高名を承知だが、他は知らねへ。惜しい時止めました。今だと判者になつて、翌から一風呂齋大人といはれるのだけれど。」

女「コレ何をいふのだ。」はんさう「イエサ、そこで一つ祝ふ積りでございます。エヘン〳〵、斯うもあらうかツ。エヘン、此の即狂が名人だてネこ」女「道理で獅子つ鼻だ。」はんさう「東西〳〵、ア、折角出たものを、エ、まづ前書きを、イヤナニあり、はし書を、エヘン〳〵、扨て、エ、何さ、エ、

○エヘン、浮世風呂の風呂の中にて、女の数が五人、六人、七人
　おゝく居はべりて。」

女「佛の数は三萬三千か。」はんさう「オット東西々々。

○エ、、居はべりしが、くちやくちやとしやべり侍りて。」

はんさう「こゝらが、狂だてネ。

○エヘン、しやべりはべりて、あたりのものには、またがいに湯をあび

ゑ、おびすゑ、かけろ、かけすゑと」

生酔「ふりゑふらすゑの心で、浴びたり浴びなんだり、掛けたり掛けなんだりさ」ト又いふたりい

へりふまなんだりおやアねえか」○「ヨツト東西々々」

湯で狂ひはいわしが、その湯が、ハヽヽ、その湯がはね湯でありけれ

ば、そこでかゝる様顔をなし侍り、合點で泳上て四の五つ侍りける

を、諸うに和しも侍りて、百萬年の御祝ひと祝ひ侍るハ…

○ト申しかけ、そこで歌に、

「錢金は湧き出る湯屋の手拭で年の頭をふくは来にけり、ト

ヒヽヽ、アハヽヽヽヽ、何と如何でこざりませう」○「アハヽヽヽヽヽヽ、此の番頭のいふ事は、今戸燒の瀬戸

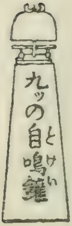
物の様だ。アハヽヽヽヽ。」番頭「それでも歌讀だ。アハヽヽヽヽ、猛きもののふの心を和げるも、

一風呂齋が歌の徳なりけりサ。アハヽヽヽヽ。」ト笑ふ門には福大黒、當年の恵方から庭に舞ひ込み打

囃せば、七福神の寶船、唄ふ鳥追諸共に、

聲長閑なる「しろォざけしろ酒」

しばらくありて、



浮世風呂三編巻之上 終

諢話浮世風呂　三編卷之下　女中湯之遺漏

江戸　戲作者　式亭三馬　編

[illegible]

おまゞ「おいらが今お前を祝つた腹だのに、どんだ熱田さまといふ腹だア、お株な腹だよ。[illegible]我ながら何故こんなにしてくれるだらう」ト、おひなが顔を見て[illegible]しにいかい面附をお鍋[illegible]禪寛なさい[illegible]田舍者と江戸者と半分でござい[illegible]にねだり込んだら、角兵衞獅子が舞ひ込んだといふだらう。アハヽヽヽ[illegible]さんかは、そなたも能くお遊びなさつた。[illegible]背と高くたて[illegible]「アハヽヽヽ」[illegible]月の入り込みはなりませぬ[illegible]荒神をお遣ひだ[illegible]

サア臭い。」ト、大きな屁をしてよぶ。「是はサアございく\と云ふ洒落だが、どなたもさう聞いておくれ。正月めいた物だらう。オヽく\熱いわく\、道理で石榴口が込んだ。誰様も長しい事ネ。なぜお湮めなさらぬネエ。モシ憚りながらそこからトンく\をお狸申します。骸はこつちの物、湯はあつちの物、何にも御遠慮には及ばぬ事さ。オイ三公、湮めて呉んな。ゆで海老にしても最うお飾りは済んだぜ。さうださうだく\。もつと湮めたりく\。ぬるくなつたら、又湯をうめる分の事さ。此方の腹の痛まねえ理窟だ。トンく\、トツトゝかろ。ハお邪魔になるな。三助殿の厄介者だア。おなまめだんぶつ。」ト、いひながら一寸、あつツ、ツ、ツ、しつはりだく\。」ト、いひながら「そりや、はねがかゝります。中へ飛込む。はね物く\。おれと同じ事だな。ア、よくなつた。どうでどなたもお這入んなさいまし。ヤレく\結構結構々々。」トみな「南無阿弥陀仏。ヤレく\湯と鮭味噌は、兎角かき廻すことだ。」大笑ひ此の内、なかく\こゝうなり、しばゝかりの女の子「をばさん。」まご「ナイお坊か。誰と来た。」ぼう「お隣のをばさんと。」まご「よく来たの。なんぞやつてえがこゝは湯の中だ。」「ハ、、、、」△「見なせえ。私が湯へ来るにも腰巾着だ。」まご「さうさナア。お前があんまり可愛がるからさ。いつそお前の娘にしなせえ。なうお坊、娘に成るだらうか。」△「まさかそれも否だッサ。何でも朝むつくり起きるから、晩まで私が内に居続けだ。前生で何でかあつたらうよ。兎角くつついてゐたがる。」まご「くつついて痛がる物なら、猿の生まれ

ろはらだらう。ひつ付いて離れねえなア狐さま。ひつ付いて離れねえなア石漆。もし煙草入が[illegible]かねえ。門に味噌汁を[illegible]。[illegible]したのなら[illegible]で、[illegible]きたるにしよ、お前は気さくだまさう。お前へ[illegible]所の旦那殿は、[illegible]を食つて[illegible]で、それこね坊だに、夫れに引掛けて、お前の又元気の能さとした事が。[illegible]似た者は夫婦といふが、おれしらかた夫婦は鬼夫婦といふのだ。からつきりうら腹だねえ。見なせえ。わたし一人を家内中と称すかられねえ。今朝も聞かなせえ、旦那殿に、胸がやけるといつて、お雑煮を[illegible]二切れ[illegible]たが、こつちはそんな事もやアねえ。[illegible]角に切つた餅を、[illegible]も[illegible]れずに[illegible]十八切、其の跡で[illegible]まあ[illegible]で、茶漬を[illegible]と三杯さ。[illegible]、肝を潰しさうだね。[illegible]時のおまんま[illegible]一文からの商人で、日がな一日あたりつた[illegible]の、腹もへらうだらうぢやねえか。お昼は[illegible]早とつたから、未だ腹が満いかと思つて、食つて見たら又いける。[illegible]て物を食ふほど旨い物は、[illegible]ねえにまた[illegible]餅、[illegible]大根、田作といふ奴を、[illegible]田作が這入ると[illegible]やしたら、お汁の所でもさう仕て御覧じろ。アイサ、田作鮨に[illegible]の[illegible]たので、[illegible]又六杯と五目にさけた。鹽引ぢやア飯が進むよ。今も番頭に笑はれたが、さう食ふから體が丈夫だ。下手なお医者[illegible]

せねえ。」▲「オヤ〳〵よくそんなに食べられる事だね。」ト、笑ひながら石榴口を出る。●三歳ばかりの小兒を留桶に入れておき、母親は片手で留桶の縁を押へ、右の手で糠袋をつかひながら ふたこ「ちつとして這入つてお出でよ。ぼちや〳〵をすると、だぶ〳〵が跳ねます。ソリヤ〳〵、言はねえことか。夫れ見なせえ。いふ口のしたから湯が目へ這入つた。それよし〳〵。」ト、額を拭いてやり「最う今度からおよし。ヨ、ヨ。手拭でお顔や手々をよくおあらひ。ヱ、穢い足だ。お鼻の下もばゞつちいだから、お湯をかけてお洗ひ。番頭さんがお叱りだによ。オヤ〳〵能い子におなりだぞ。上手におあらひだなう。是れお見、おつかさんも上手にお洗ひだよ。」小兒「坊も、上手に、お洗ひ。」ふたこ「オ、〳〵、坊も上手にお洗ひだぞ。コレサ〳〵それが悪いわな。天窗からお湯を浴びては、今のやうに目に染みます。さう、〳〵、能く云ふ事をお聞きだぞ。坊は聞き譯が能いから、御褒美をやりませう。餅がよかろ。薄皮か、お燒芋か。」小兒「はちいあんが能いよ。」ふたこ「はちいあんとは何だの。」小兒「はちあんお芋が能いよ。」ト、泣声 ふたこ「オ、、お芋〳〵。ム、八里半か。オホ、、、。此の子はマア誰が云つて聞かせたか、おつなことを覺えてさ、オホ、、、。」そばにゐるかみさま ふいご「オホ、、、八里半ッサ。いかなこつても、とんだことを覺えてきたネエ。ほんに〳〵子供衆といふものは、能くまア小耳に挾んで、お忘れなさんねえ物でございますネエ。功者な口をお聞きだ。」ふたこ「イヱモウ店の者が、色々な事を教へましてどうもなりません。」

ゑせた日でございますに、畑から附木を一ついたゞいて[illegible]になりますにござります
ト、ゝゝ、それに又、今年は御殺生沢山な瀬々、焼芋[illegible]をお前さま方へ御覧に入れ
もございませんが、いづれたり焼芋のこいゝ事でございます。[illegible]三年[illegible]様でございますとて私も[illegible]
初めは何の事を申すかと存じましたれば、八里半と申しまして、九里に近いと申す事だと申す様で、[illegible]
上で栗[illegible]といふ事だそうにございますが、お前さまはようお存じませぬが、私どもは[illegible]
ございますと、[illegible]様でございます。栗は川を渡[illegible]世話でございますと、「お芋の好き[illegible]
つと言ひますこと[illegible]、薩摩のまだないお[illegible]も私[illegible]
どうでも、毎日お薩でございますよ」ト申しますから、「お芋、お芋をおくれ」ト、鼻をならし[illegible]とんだ
事をしでかし[illegible]坊[illegible]そんな事を[illegible]と[illegible]しか[illegible]
どうも困りますが、もう[illegible]と聞き訳がありませうから[illegible]でございますが、根から分りません。また[illegible]
ござん、尿も[illegible]その[illegible]、[illegible]
つて御覧じまし、大きにお世話でございますよ[illegible]
さんにまたのだが、髪を結つて顔をなさつて」[illegible]
いた櫛をで[illegible]よく物を仰しゃる。[illegible]お前さん[illegible]櫛い、

紋有つてツサ、アハ、、、、、、なか／＼分ります。イエモウ女郎のお子様は各別お早うございますのさネエ。エヘ、、、。」おたこ「何だか小癪な者でございますよ。オホ、、、。」おいか「お湯がお好きでようございます。」おたこ「ハイ湯は好きでございますが、變つた事で、行水が嫌ひで困りました。最う今年らは何うございませうか。去年の夏は大困りさ、おまへさん。」おいか「オヤ／＼どう致した事でございませう。水なぶりをなすつておうれしがるはずだが。サア／＼、伯母とお湯へおはひり。」ト、手を出す。小兒「いや／＼。」おいか「いや／＼かえ。オヤきついお愛想づかしだネ。大分ごり／＼が生えました。」おたこ「ハイサ兎角嫌ひで困ります。サア中へ這入りませう。サア／＼お手桶とお徳利をお持ち。」ト、寒くなつたぞ。坊は留桶のなかだからよいが、おつかさんはあぶうございます。」小兒「坊、あぶい。」おたこ「オヽ／＼、あぶからう／＼。」おいか「サアをばあも這入りませう。」ト、なかへ抱き行く。おたこ「ハイ御免なさいまし。子供でございます。」ト、踏段へたゝせおき、「サアこゝに立つてお出で。お脊なかをよく濕しませう。」ト、手拭にて湯を浴びせる内、おいかは小桶二つへ水を汲みて持ち來り、おいか「おかみさん、此のお子さんにはお熱うございませうから水をうめて上げませう。サア／＼爰へお這入んなさいまし。」おたこ「これは／＼憚りさま。お手を頂きます。これはモウ有りがたうございます。サア／＼坊や這入りませうよ。ヤレ／＼結構なお湯だぞ。伯母さんがうめて下すつて、丁度よいお加減だ。ソリヤ沈みませう。ソレぶく／＼／＼、アヽよい

そノ〳〵ニまあおもいよのう。おつかア、あもいようでも三十も違ふ事があるものか。弱い事をいひな
さん。ヲヤ〳〵、まアあのねへさんも夫にお這入りだものを。ヲヤ〳〵まアその面をお聞なめだよ。ハテ
ハテお嬢坊は、とんだ能い子でよく湯へはいりますね。お嬢めかすつて下さいまし。ヲヤ〳〵、お爺や
お嬢めだ。ヲヤ、最う上がらう。ヲリヤ熱くも何ともないネエ。今度能うございます。ヲヤく能
く温まつて出ませう。ヲヤ最う出ようかの。おつかア、出ようよ。ヲヤ〳〵出ませう。出
ますう。ハイ御免なさいまし。出ますものでございます。ヲヤ、乳母「ヘイおやかなもおかみさん、お早
るりとお出でなさいまし。私はまアもう上りますいねへ。さうならさうと言へばいゝに
ナニ「それはそれにあばよ〳〵。サア〳〵御覧なさんな。ホンニ、能い言葉だよ。ハイ〳〵〳〵。お
あさん〳〵。● 湯舟の内にて、浄瑠璃をうなり出すものあり、下　由良之助「をとまる声の、黒塗の、産
黒い主師匠だね。しようかへ。● ヲヤ〳〵何を唄ふのだネ。女湯の中で、唄をうたふものが何處
にあるものか。貴様の國では唄ふかネ。△ヲヤ、わたしが國でも唄ひませんねエ。● そんならば唄
ふのだに。△それでも男の湯で唄ふから、私は又江戸といふ所は、男へまじりて入れば、唄ふものの
と思ひましたよ。●「馬鹿な事をいはつしやい。あれは男だから唄ふのだわな。女湯で唄つてすむ
ものか。いかな事たつて呆れけへるわな。△それなら止しませう。ハテネ江戸は妻つたもの。野郎を

男は唄つても能いが、女湯で女が唄つちやア悪いだネヘ。」●「知らねへよ。じれつてへ。」女 そばの お松「い
いよ。唄つても能いから唄ひたくは随分大きなこゑでやんな。とんだ能いこゑだわ。」●「ヲヤお松どん
んか、聞きなナ。あゝいふ代呂物だわな。」お松「此の内が能いわな。おつつけ江戸の水がしみて見な。
頼んでも唄ひはしめへ。」●「さうよなア。そしての、田舎の女の声は、あはれつぽくおつに震へるな
ウ。」お松「そのくせ能い声さ。」●「この人はこゑ自慢だわな。」お松「道理だ。最うひとつうたひなナ。」
▲「イ、エよしますべい。」●「お好みが出たから唄ひな。鬼も頼めば人も食はねへとやらだ。」▲「何お
前方が笑ふだんべい。私は国にゐた時、観音堂建立の御詠歌に出ました。十六七を頭にして、私らが
十三の時分だつけ。毎晩建立に歩きました。」お松「そんなら御詠歌も知つてゐるだらうの。」▲「アイ、よ
い一番知つてるものが坂東の御詠歌、それからじやうかよ節、潮来節、しようがへぶし、それから甚
九、それから川崎節、何でも知つてるだ。中でも海老屋の甚九が面白えだ。」お松「それは何だ。」▲「今
度喜代が崎海老屋の甚九さ。」●「うんにやよ。」なんといふ節だよ。」▲「甚九のトヽキといふものさ。」
お松「うたひなナ。」▲「唄ひますべい。笑はつしやるべいが何うするもんだ。」ト、大きな声にて「今度、喜代
が崎海老屋の甚九、親の代から小間物売りよ。今は小間物売りを止めて、大坂通ひの絲物立てよ
船は黒船ふたなり帆、綾や錦を下荷と積んで、まだも積みましよ金襴緞子、硫黄さしはしてんまを

徒ゑて、白帆まき上げて帆口しめて、追手がのぼる汐風なれば、甚九郎風はそ吹きまくる。四間帆をも、七十五里よ。播磨灘よ、二十五里よ、遥か見ゆるが津の島灘よ。ヤア押せ押せ船頭も水主も、押せば大坂がもう近くなる。甚九郎が能いで一夜で走る。おや嬉しや大坂へ着いた。宿はどこぞと尋ねて代家にうけば、宿は堺筋の八郎兵衛さまよ、中の座敷は何をこうする、綾もこそれば誠もこそ。またらござゐる駿河(?)、けふは日もよし御住吉の、人を迎む新町通り、此の郭にて目につく人は、小銀小座倉の花よりも、三味の音を出す白糸さまよ、鷲の目につく道芝さまよ。こゝろざしまた道芝さまへ、そこで道芝大きな事言ひ、こゝろざしは仏の事よ、今時一夜に千両箱を、金を使うて恋路をでもあらうと、とくとくと、ほしき事長(?)なる、これも住吉のそれとも、小町やそれとぞそれと」●ヤ、アとう

▲ヤ、ヤレヽ、うたはずれたわいな。これはあまりに御苦労なのを」●とうたさしあげのつた。ハハ、、、、

・・・、、、「道頓の中の人さみなみな集めて、▲由間(?)しのゝ下々、左様にこゝら出し、水神のとほり、信号(?)作もこゝに来すな、このひとは、

●ヽヽヽコレノヽ伊勢屋の女中、喜様はしらん能い醉たか、、、、、「女郎衆をとつて遊ぶとは事だこ

●ヽヽヽ「アハ、、、、」●寒けどもいまに女郎　上人「おやヽヽ恋川さん、よいへいの今ひかへたまへ」とむイそれならうつと早くおかしてたのを、ハイはまちそう上「能い」と申す。承知の楽をて、トキお壁突かいはつたのよ。痛かァねえか、イエ痛いわな。けふは日本橋の家の丸かち、店帳を買って来てもらつた。

お山「そいやァ能かつたの。あすこの膏藥は能くきくとさ。」
因に云ふ、藤の丸は舊家なり。慶長年中、湯島天神の門前に於て創業し、萬治二年日本橋通二町目に開店してより、年數凡そ百五十餘年、連綿と相續す。江戸に於て膏藥を鬻ぐ家は、藤の丸法橋高室兒林を元祖とせり。其の證くはしくは國家萬葉集に見えたり。かつ慶長より數ふれば、凡そ二百十餘年におよぶ。おのれ三馬當主と金蘭の友たり。ゆゑに舊家の緣故を記して、普く世人に知らしむ。

お川「コウ／＼お山さん、お前の鄰ぢやァ、夕べも夫婦喧嘩があつたの。久しい物さ。なぜあゝだらう。」お山「思ふ中の小諍ひとやらさ。どつちをどうとも云へねえわな。」お川「兩方が惡いといふ内にも、商賣あがりの者は、癖として嫉妬深いから、夫婦喧嘩が絶えねえのさ。男の贔屓をするぢやァねえが、總體男といふものは、表を勤める者だから、些とうゝのつき合へもありうちだァな。そこを女房も得心して居ねえぢやァならねえ。目があかずに惡く喧しく許り云つて見ねえな、それこそ猶逆らつて出懸けるわな。さうかと云つて默つてばかり居てもすまず、諸事鹽梅物だによ。然し又、おらがかゝァだの、おらが山の神だのと云つて、かみさんを怖がる亭主も世間體の惡いものさ。なんぞの噺序には、てん／＼の女房を褒めちぎるも氣障な奴さ。さうかとつて、醜くあたるばかりを能にして、ひど

いのにおはなる亭主も顔の憎いものだ。何でも氣の合つた時が亭主の値打。長い月日に辛い苦しい事計りもねえもんさ。南方で不承仕合のさ。嫁の所帯も面倒とやらで、さつても西東なれど、隣の太郎四郎さんを見なせへ。屋敷から下りたてのおかみさんに、持うたしりの女房だつて、聞かぬ盛のお綱さんの傍へ倣つて、ぬかれた顔を見な。愛嬌の尤も綺子で世の神だとさ、よく寝を心つて居て、女房が在大刀の脈障を聴いてゐるよ。するな拙拙と、されたこ云ふは屋敷出だとつて、餘りあつかましいお役で「ゐ」お前ひいをいれもしたい物て、花嫁の内は花でも、おつつけ小児でも出来てみな。のゝ様いかねえ。の「お目」、花嫁は所謂をすし百ふ女ぞの家を云らふのと、大き腹が臍の胸かのお諸醴と仕たとつて、風呂り場の鳥が見も築に、高い鼠つて譜ます。居るも小姑にも噂して、人が行きや、遠者目へ漢員から茶をつゝいで杯ましして、本所の楠生亭とやらが据ゑ菓子團子が、日へ這入りさうな菓子を出して、一つお取んなさいまし、私どもは居酒をたへつけれる、体の菓子はさうも口には、嫁の口から百姓の言ふす。まうかし房齋も、大事にしても大ぶおそれもやり〳〵て居なさい。催るの琴ひ弾くのと世帯もつのいら氣も好さ。飯を焚いて着物を縫つて、内外の者の身をかまうくして、鴨にすたりの出来ぬやうにするやう、女房の役は澤山だわな。それで氣にいらず、先さまの無理だ

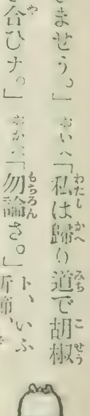
お川「アノお縁さんは、亭主が御そくさいで持つたものよ。芝居は代り目〳〵に、丸三と越長二軒へ行くし、指物はオット来たりで、自由三昧に取り替へ引つ替へ買ひ立てるし、呉服屋へは夫婦つれで見立てにいくか。」お山「ヘンお樂だの。ホンニ呆れかへしねえ。」お川「何の相談でも、お縁や〳〵さ。朝から晩まで口つけにお縁やだ、荒神さまのお縁や〳〵が聞いて呆れらア。」お山「ホホヽヽ、不景氣や。きいた風な。然しそんな亭主といふものは、嫉妬深いもんだによ。」お川「あの面でやきもちおやア銅羅焼だアな。」お山「お縁さんがお色白ときてるから、夫婦揃つた所は、白玉と金鍔燒をひとつ竹の皮に包んだといふ物だらう。」お川「まだしも色白だから、七難も隱すけれど、あれで黑からうもんなら、こちとら組さ。さうだがの、亭主はあんな老實者がいいよ。常住取り替へ引つ替へ見立て直しの女房を持つ人は、氣がねえなう。」お川「第一居る空がねえわな。ハテおめへ女房で候と打居ゑて置かれて、賣藥屋の銅人形見たやうに、看板にされた許りも詰らねえぢやアねえか。」お山「さうさ。そりやア此方にも荒神様があるから、さう旨くはいかねえのさ。何にしろ外の事は打遣つて置いて、此方のあたまの蠅を追つて居よう。いつか一度は旦那様の思召しにかなふだらう。」ト、脊中を流して、小桶の湯をざつぷり。お山「ア、さつぱりした。サア這入らう、這入らう。」二十三四の年頃にて嫁と見ゆる女、[illegible]「お[illegible]さん今しがた表を通つたおかみさんを御覧か。」[illegible]「いゝえ。」[illegible]「二とんだ華やかなお形さ、路考茶縮緬に一粒鹿子の黑裏で、下へ同

し一粒鹿子の黒の引返しを二つ重で、緋縮緬の襦袢に、白繻子の半襟で、緋の唐縮緬の帯のこゝろ/\する丸髷さ。右格好はすらりとして、故人だこを中年増に作つたといふ風だつたが、なぜさう結び付く物をネ、ふしてや男もさもさ事をたう。今も只聞きな。髪結床の前を通つたら、昔い昔が大声で其のおかみさんの路考茶を見てネ、お礼見な。とか「見ろ」とか云つて、今の女は昔の若い者物だ、惜しいなに馬鹿の衣をかけたぞ、あつたら事をして仕舞なんだといふわな。男といふものは憎い事をいふもんだねえ。「さうさなう。それだから髪結床の前を通るのは恥かしいよ。先刻通つた人も立派な事さ。髪が上方風で、化粧まですつぱり上方さ。鼠色縮緬だつけが、伊予染に黒繻子と云ふ形い上のだつた。あの背はすつと染返しの比翼で、緋縮緬の襦袢、やつぱり白襟をかけて黒繻子の帯、どうもいへねえ風俗だつけ。外のおかみさん達は、押返されねえ形でね。目を遣すか、こゝとは、つまらねえものさ。あの薬は、よく/\能い月日の下で生まれた人だらうよ。そのかはりと、一面に伊像染だの。」おいへ「アイサ、路考茶が、鼠が、伊像染さ。みんな昔流行つたもうだが、段々と行り返るのだ。」おかへ「さうさ。梅色も案じ尽す物だから、一人の取つた人が有つて、色を見付け出すとネ、今の目には珍らしいから、ハイ能いわと云つて、一人着い二人着いして流行の出来るのさ。昔し丁子茶から見ては、今の鼠や路考茶は近頃の物だッけ。伊像染はよつぽど古いはやつた物だが、出

變らず廢らねえ居て、今又ずつと流行るのださうさ。私等が内の婆さんが話したつけ。そりやァ能いが、なぜあんなに、上方風を嬉しがるだらうか氣が知れねえよ。」おかべ「さうさ、あのまァ化粧の仕様を御覧か。目の縁へ紅を付けて置いて、その上へ白粉をするから、目の縁が薄赤くなつて、少しほろ醉といふ顏色に見えるが、否な事たねえ。」おいへ「そしてお前、そればかりぢやァねえわな。顏の白粉と、生際の白粉と、襟の白粉とは、別々に有つての、眉掃も三本入るとさ。」おかべ「すや大騷らしい、私らは眉掃さへ遣はねえものをや。」おいへ「それだからあの態をお見、本面屋ともいひさうに、顏がてらてらして、誠に本塗だわな。あんまりべたべたと化粧したのも、助兵衛らしくしつつこくて見つともないよ。諸事婀娜とか云つて、薄化粧がさつぱりして能いわな。」おかべ「そしての、鼻の先ばかり一段べたべたと濃くつける風があるが、あれは全體上方の役者が始めたことだつけ。何とかいふ女形の鼻が、人並だから舞臺で榮えねえツサ。」おいへ「成程なう、役者の鼻は人並より少し高みな方が見能い容だネ。」おかべ「それだから其の女形の工夫で、鼻ばかり別に白粧を濃く付けたら、ソレ鼻が高く見えて、舞臺顏が美しく見えたさうさ。」おいへ「成程いい利方だ。」ねかべ「それを町方の女中が眞似てする物だから、見やう見まねに江戸の女までが、此の頃はちらほら眞似やす。」おいへ「さういへば閒に見かけるネ。」おかべ「あれは役者といふものは拵物だから、遠見の能い事ばかり考へたものさ。それだから

[illegible]も皆好な能いけれど、[illegible]には、[illegible]
[illegible]穢らしい[illegible]目の縁へ紅を[illegible]、一體は役者から出た事[illegible]
[illegible]大方は[illegible]昔から[illegible]人が有るから、[illegible]許[illegible]
[illegible]た人は、年よつて目の縁が黒くなるソウ。氣を付けて御覽、目の縁の黒い人は大年[illegible]
[illegible]上方の女中は、役者の[illegible]見て、化粧下へ[illegible]
[illegible]豪といふ油[illegible]○[illegible]江戸でも役者の化粧するのは、[illegible]油[illegible]
[illegible]其[illegible]といふ[illegible]油[illegible]
[illegible]は、三馬[illegible]の江戸の水[illegible]方[illegible]化粧[illegible]
[illegible]今一面に流行るから[illegible]贋[illegible]出來た[illegible]水の色に似せた[illegible]
[illegible]化粧[illegible]江戸の水[illegible]
[illegible]「[illegible]買ふのを忘れ[illegible]油[illegible]」[illegible]お前[illegible]
ら、本町二丁目の江戸桜でお買ひ[illegible]此の油[illegible]能い[illegible]目が[illegible]
と有つて、[illegible]安い[illegible]話[illegible]去年の春[illegible]
[illegible]助[illegible]の時は、[illegible]「[illegible]」[illegible]

おあがりか。」おかべ「アイ一緒に行きませう。」おいへ「私は歸り道で胡椒を買はねえきやァならねえ。おつき合ひナ。」おかべ「勿論さ。」ト、いふ折節、*學びなどすると見えて、物しづかに人がらよき婦人二人、おの〳〵玉だれの奥深く侍るたゞけの文章をやりたぶり、几帳の陰に檜扇でもかざしてゐさうな品位なり。



*本居信仰にて、いにしへぶりの物

けり子「鴨子さん、此の間は何を御覽じます。」かも子「ハイうつぼを讀み返さうと存じてをる所へ、活字本を求めましたから、幸ひに異同を訂してをります。さりながら舊冬は、何角と用事にさへられまして、俊蔭の卷を半ば過ぎる程で捨て置きました。」けり子「それはよい物がお手に入りましたネ。」かも子「鳧子さん、貴方はやはり源氏でございますか。」けり子「さやうでございます。賀茂翁の新釋と、本居大人の玉の小櫛を本に致して、書入れを致しかけましたが、俗びた事にさへられまして、筆を採る閒がございませぬ。」かも子「先だつてお噂申した、庚子道の記は御覽じましたか。」けり子「ハイ見ました。中々手際な事でございます。しかし疑はしい事は、あの頃にはまだ開けぬ古言などが、今の如くひらけて、遣ひざまに誤りのない所を見ましては、校合者の添削なども、少しは有つたかと存ぜられますよ。」かも子「何にいたせ、女子であの位な文者は珍らしうございます。先日も外で消息文を見ましたが、古ぶりの書き樣は、手に入つた物でございます。」けり子「さやうでございます。何ぞ著述があつたでございませうネ。世に殘らぬは惜しい事でござります。」かも子「怜野集をお返し申すであつた。永々御恩借いたしました。有りがたう

ござります」かち子「いゝもうおのゐるりと御覧なさりませ。私はうけらが花を一冊貸しましたがト
ント行方が知れませぬ。」ナリ子「イエどうも、貸した本で困りますよ。此の間はお歌はいかゞでござり
ます」ナリ子「何か評判さませぬ。先日どなたにか承りましたが、あなたはひなぶりをお詠みなさ
るさうでござりますネ。」かち子「ハイ、もう、お恥かしい事でござります。あまり本歌で退屈いたす時
は、思ひ出しては狂歌を致しますが、何もうお恥かしい、お耳に入つては恐れ入ります。」ナリ子「イエ
古萬葉の中にも、大伴の旅人の卿の、しかりうたにあなたがきの歌、エ、それから夏蔭によむといふもあるなどと
りますもの無、その外また見えますし、既には萬葉に俳諧歌と申す類がありましたから、歌心得
の歌も、お詠みには宜しうござります。」かち子「さよでござりますか。私のあれは[illegible]
此の間も、あまり暖しい時でござりましたから、[illegible]川にいたしまして、其の時で頂きましたから
とりあへず一首致しました。

うまじものあべ川もちはあつきもよし[illegible]

と、いたしましたハ」ナリ子「イヤ、、、、歌の体をふたつまでも入れて、至極面白う御座いま
す。よふしてなどが、ヨウか古今のやうに聞えまして。」ナリ子「ハイ、、、、」かち子「ナニもう、ほんの慰み
でござりますよ。先生などのお耳に入つたらお叱り遊ばすでござりませうよ」ナリ子「何お前さん、いへ

れ雅びの道でござりますものを、オホ、、、。うまじものあべ川とかゝり、あさもよし、きとうけて晝くふもよし。どうもいへません、オホ、、、。あなたお這入りなさりますか。」けりよ「ハイまづおさきへ。」ト、石榴口へはひる。●引きちがへて六十ちかきばあさま、小桶を二つ、雨手でずつと押しながら來り「オヤおばさんよく來なすつたの。」こちらのばあさまも、同年ぐらゐの人、▲「ホ、オ姉さん今來なすつたか。」●「何だな。此のおばさんは、他の心もしらずに、そんな元氣ぢやアねえわな。」▲「オヤ／＼なぜよ。」●「マアおばさん聽きなせえ。」▲「又初々しく泣き事か。おらア最う正月の耳だから、泣き事の聽き役は否だよ。」●「泣き事ぢやアねえがの、聽きなせえ。野郎殿が又始まつたわな。」▲「オヤ。」●「元日に禮に出候とつて、袴羽織で、吉の野郎を五種香にして、年玉物を持たせて出たと思ひなせえ。」▲「オヤ。」●「さうすると、元日の暮方になつて、吉ばかり歸つたから『金太はどうした。』と聞いたら『何所へか廻るから、先へ歸れと云ひなさりやしたから、私ばかり歸りやした。』と、何かお前、己が指して行つた脇差も吉に指させて、袴もぐる／＼とひんまいて、年玉の箱の中へ入れてよこしたのさ。サア父爺様の耳へ這入つたら大事だが、併し元日しまから這入り所もあるめえ、追付歸るだらうとおもつて、待てどくらせど歸るもんぢやアねえ。昨日になつても歸らねえから、親仁殿は、私に許り食つてかゝる、私もどうも居たたまらねえから、下駄屋のけほう様の所や、いかけ屋の鍋さん、花やの松さん、箔屋の金さん、留場へ出る傳坊が所ま

で揺し歩いたが、友達はみんな内に居るのを、あくせく仕果てて内に居るとの、昨夜のやうに居つた斯が、内へは這入られねえから、車屋の大八さん所へうつちやつて、うろ一人で歩してきてゐる新かお湯に、いつでも湯に尻を拭はしてるだに。▲ここのもさうさ。此の頃まで毎晩の世話をしたのが、甚う文金屋をたれかけるだ。●ホイ、ちやうど女が悪いから、おくんな所へは行きやしねえ。いつでも馴を連き連れて、あたいは近所の格好も悪いに、近所外聞といふことを知らねえだ。▲五月もよそ馬だの牛だのとひき連れて、とんだお仕舞様だ。身持にひつ付くで途中の女で岬を出すが悪いのさ。●ほんにさ、打つてもはたいても、陸に附といふ奴だからやるせがねえ。▲それで内へ、れなやつたかい。●一向をかしく騒動するも悪いから、内へは入れたけれど、いふは本気でない、あの晩で、聞きあやす意けらおして逆にあるく。ゝゝゝ家業を休さうにして、意ける奴は、一番に相その通え所嫌な事を仕出しですしね。皆こも障るも銭を貸ふ厭ばかりで、友達めらが、友達なもの体一人よねえしい此中もあんまり夜遊びに出るから意見したら、そうことなしに乗飯なして居ると、云つた筈つた。友達共が集まつたときには、踏込に下賎な事ばかり合つて、是が友達ならまずこれならばや、揃合柄はその女ばかりで、起きて居られねえから、外して来た風をしてゐたら、直ぐに出やうとで摺りかけるだ。大福餅から、卵で口卵、お芋のお田、何でも通る物を買にうと六つ叫して来やうて

るだ。『御膳麥飯温かい。」『ソレ來た。」と買ふ。『正月屋でござい。」『ソレ買へ。」と呼ぶ。どこの國にかお前按摩を六人まで呼び込んで、手々に肩を揉ませながら、風鈴蕎麥を總仕舞にして、蕎麥屋に燗をさせてはとも食らふだ物を、有頂天になつて夜鍋仕事も手につく物ぢやアねえ。世間ぢやア餅を搗くの煤を掃くのといふのに、其の勘辨もなく、寒聲を使ふの、寒聲色を語るのと、毎晩年忘れだ。あんまり年を忘れ過ぎて、大晦日の來る事も知らねえのさ。」▲「いやはや困つた物だ。些と大屋さんでもお頼ん申して、意見して貰ふが能いのさ。」●「そんな事にでもせざアなるめえ。ホンニ〳〵いつ苦勞が止む事か。子を持てば七十五度泣くといふが、あの野郎に掛つては、何百度か數がしれねえわな。」▲「息子だと思ふから惡い、郭公だと思つて居なせえ。」●「なぜ。」▲「八千八聲啼くといふから。」●「あの野郎ぢやアねえ。こつちが泣くのだわな。」▲「そんなら、ふとゝぎすさ。」●「此のをばさんは又はじまつた。」●▲「アハヽヽヽヽ。」（此お邸から去年あたりお暇を頂いたが、たなしは不顧で素治にてことをおいてお るか、二十四五のぼつとり者、片はづしの髪の風もはでなお邸と見えて、人柄よく、いきな形なり、おはしたのお初は、云はねどしるき部屋が風俗、お鄰のお娘御をまさか今はせこ、三人づれ、留桶を拵へて、べん〳〵との長湯。）おなか「あなたエ。」おさめ「なんだ。」母「あのネおむすさんのお髪は、今日のは眞に恰好がよいぢやアございませんかねえ。」おさめ「さうさ、ホンニおむすさんのお髪は、どなたがお結びだエ。」おなか「これかエ、これはあのウ、何でございますよ。お前さんも御存じの忠七ネ。」おさめ「ハイ。」おなか「あれは私の所の地面の家守をいたしてをります

かネ、其のかへさんが結ひましたネ。」卓「ハイ、左る程昨日からお手傳にお出でなさつて、結て下すつたので
見かけ申しました。アノ綺麗なお女中でございませう。」卓「ハイ、アノやうさ。」卓「誠に能く申しま
根場口から何から極つたもんだ。」卓「さうなつて極まりがつたものでございますかネ。」もと
人柄で眞に能うございますよ。」卓「ホンニ眞に感心だネエ。私どもは、一筋で調へに來ても、一匹
に頂いても、此の眞似は出來ません。」卓「すや廻りくどい事をお云ひだなう。百米を一度に結ひて
れとお云ひよ。」卓「イヤおむずかせん、いかな事でも、ホホ、、、、「いつそもの感心なお子さんだネ
エ。」なな「私は名代のお轉婆だ物を。ハアおちやっぴいとおでしてばかりネ、一人で仲間で、ないとも
大れだからネ、感心なおしやもじだネ。」さき「ホホホ、、、、しやもじだとは、おしやべりの事かネ、
ホホ、、、、ニヤアおさらきせん、眞にかネ。」卓「私は又おしやべりの事かと思ひました。鮓かなんぞに、
肴をつもじとお云ひだから、おしやべりもおしやもじでよいがネエ。」卓「さいわな事でもお前さん、
ホホ、、、、上ぶさややうでお屋しきへおあがりだとわかりますわネ。」卓「ネさやうさネ、おもの御家
公にお上の遊ばすと、ほれこそ最う大和詞で、お人柄におなり遊ばすだ。其の時には、私の日那
まのやうに、片はづしか勝山に、お髪をおあげまで遊ばして、さぞおうつくしからう。お規式の時に
はお下髪で、お眉を遊ばして、地黒や地白や時々のお襟を召して。」卓「お襟と云ふ。」卓「お裲襠

むす「お屋敷では、毎日うちかけを著ますかエ。」芸「イ、エ出番と引番がござりますから、出番の時に不断も召すお屋敷がござります。又お規式の時ばかり召すのもござりますのさ。四月から九月までは何方さまでも帯付でございますから、お襠はございません。みなお下帯でございます。」むす「下帯とはお下髪の様なものかえ。」芸「イ、エ、お下髪は、五節句などのお規式でございますのさ。お年寄様方は長かけと申して、長をおかけ遊ばす。お傍様方は中をお掛け遊ばすネ。お小性は童でございます、お居をお付け遊ばしても、さげ下地にお結ひ遊ばすお屋敷もござりますのさ。ネエあなた。」おさめ「それは略したのさ。おむすさんのお聞きの下帯といふのはネ、心の厚く這入つた。」おむす「ア、知れました知れました。蜻蛉が羽根を廣げた様にしやつきりして、幅の狭い帯でございませう。」芸「あれより役者の致すのはしやつきりして居るが、あの様ぢやァございません。」おさめ「役者は狂言だから、三月の節句などに下帯で出るけれどネ、眞は四月から九月までの間で、袷と羅衣の時候に用るのさ。さうして、三月と十月は、帯付が開白さ。」おむす「開白とはエ、」おさめ「開白とは、白綸子に紅絹裏をつけた衣裳さ。」芸「中白とは四方の味噌でございますよ。」おむす「アレ御覧。お初殿があんなにおしやれだよ。」芸「一お酒もじかエ、オホヽヽヽヽ。」おむす「そして三月のうちかけはエ。」おさめ「三月のかけは桃色さ。」芸「五月の御節句は、綸子の總模様でございますネ。」おさめ「ア、綸子もあり、絽

ますゆゑ、もうやつぱりあるのさ。[illegible]四番模様(そうもやう)でございます。七月(ぐわつ)は[illegible]
十七日七夕(たなばた)より、[illegible]二番目に六月(ぐわつ)七月(ぐわつ)と、二月(ふたつき)は飾(かざ)るやうでございます。[illegible]
うさ。[illegible]模様はやう[illegible]二番目とは紅葉の
模様が[illegible]一番目が紅葉や楓模様を摺箔でおいた物さ」[illegible]
[illegible]開帳(あひあか)に[illegible]正月(しやうぐわつ)[illegible]座敷(ざしき)の端(はじ)[illegible]
と申すのさ」[illegible]私(わたくし)[illegible]
お姫様(てんは)なぞんざいな者(もの)は、御奉公(ごほうこう)の[illegible]
[illegible]お背中(せなか)をお出し遊(あそ)ばせ。お流(なが)し申(まう)しませう[illegible]
[illegible]お出し[illegible]流して[illegible]
お湯も[illegible]あつい[illegible]あぶない[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]感心(かんしん)[illegible]かん心(しん)[illegible]
[illegible]又今宵(またこよひ)も私(わたくし)どもでお琴(こと)をおさらひ[illegible]

っしやるもんだネ。」むす「ほんにお前さんもお彈きなら參りませう。」おさめ「夫れは隨分。」むす「さやうなら參りませう。」はつ「アイほんたうとて、ナニうそを申すものかエ。」初「オヤ嬉しいなう。今宵もお琴でございますかエ、有り難うございますネエ。おむすさんのお聲は無躾ながら、まことに〳〵感心なお聲でございますよ。」はつ「ハイサさやうでございますよ。細くてお綺麗で、意氣で能く立つて、何のかのと、お初どんおふしナ。能い加減に嬲つてお呉れよウ。」初「アレ勿體ない。なんのつきにお嬲り申しませう。まことに〳〵、ほんたうさ、でございますよ。ネエあなた。」おさめ「ア、夫れは最う噓つこではないのさ。」むす「ホウ〳〵お初どん、お前のお好きを當てゝ見ませうか。御待ちよ。斯うだにふつて、ア、知れた〳〵。葉隱れのめりやすだらうが。」初「ハイさやうでございます、私はモウ〳〵〳〵、あれほど好いた物はございません。」おさめ「葉がくれは誰でも好いた歌さ。ひと夜〳〵の仇枕、ほんにしみ〴〵憂やつらや、といふ所はまことに能いなう。」むす「ア、モウおつしやいますな。あすこの所を承ると、體が解けるやうに成りますよ。噂におつしやり出しても、ぞつといたしますわな。」むす「お初どんは、葉隱れで氣違になりさうだよ。私が晩に唄ひませう。」初「ハア有り難う。」おさめ「山坐さんのお唄ひなさる所を、初に聽かせたいなう。」むす「ネまあどうしてゝ、あのやうな聲が出るかしらぬ。」はつ「おさめさん今宵はネ、斯うさらひませう。」おさめ「アイ。」

りや、よく「櫻鰤[illegible]」[illegible]江の嶋[illegible]「江の嶋[illegible]行[illegible]江の嶋[illegible]
ネエ、江の嶋[illegible]弁天[illegible]縁[illegible]」「これでも[illegible]江戸[illegible]
面白うございます物[illegible]長命丸[illegible]
ら櫻鰤、江の嶋、長命丸[illegible]住吉[illegible]那須野[illegible]
て[illegible]今宵[illegible]の楽と、[illegible]
中[illegible]お[illegible]では[illegible]
琴なら[illegible]も[illegible]初[illegible]何[illegible]ごとといふものは[illegible]
トト[illegible]
人[illegible]女子の言
[illegible]
[illegible]
[illegible]住吉さんか」「今[illegible]」[illegible]
た」「[illegible]」[illegible]
復さ[illegible]天神[illegible]
の癖に[illegible]浄瑠璃[illegible]癖[illegible]味噌[illegible]両方[illegible]

人といふわな。しかも三絲さんが諢名の號親さ。」●「えらい〳〵。煮殼は荏柄の天神と聞えるが、から〻借人はあら〻仙人と聞えるナ。むごく太郎四郎にされるわい、可哀さうに。」太郎四郎とはたはけの事。▲「其の筈さ。なまるに、絶句するに、本が有つても讀めねえから無本同然。あれで牀本を大騒に書かせて持つ居るがをかしい。」●「其の粹本持ぢや。死んだ市右衛門はいふに及ばず、あの人の若い時分はりついた本書きに、龜喜といふが有つたけな。我等とは時代違ひぢやからしらん事ぢやがナ。

わしとはとか、こちらとはとかいふべきを、わたしらなどの詞交るは江戸者の京談まじり、此の外氣をつけて讀み給ふべし。江戸詞のお里のしれる事あり。○龜喜とは、大阪下りの牀本筆者なり。江戸六くだり、或は太夫牀本數多をうつせり。正本には、本町をだちを初めとして、其の時代の江戸淨瑠璃に數多あり。常の淨瑠璃本の書體に變り、近松時代の書法に據つて一流なり。此の龜喜は章をよくする事の名人、神田紺屋町に住せしが天明中に歿す。○市右衛門一流の上手なり。江戸六くだりは書かず。太夫の牀本數多を寫せり。正本は納太刀誉鑑を書きたるのみ。○中橋に住せしが寛政中歿す。牀本近年の能筆なりし。其の後樣々の牀本かき出でたれども、龜喜市右衛門の右に出づるもの少なし。○助兵衛といふ人、本町筋通にありて、太夫のゆか本をうつせしが、今は如何なりしやしらず。○龜喜、市右衛門、助兵衛各浪華の産まれなりし。因にいふ、江戸板の七行並に六行の筆者多き中に、中古の名人は吉八金三なり。これに並びて小平軍、ふきや町に住す。此の人のまれつきを細密なる故、文句節付とも一

點を[illegible]事かし[illegible]人[illegible]
あの江戸本のバ[illegible]並に[illegible]丸本を写しまして、太夫の[illegible]
[illegible]江戸大く[illegible]法[illegible]
それから後に吉兵衛といふ[illegible]人に、[illegible]つてこうして書き出した本が、[illegible]
だまさはどうおそ[illegible]、ハ、、[illegible]あの学者[illegible]の[illegible]が切れ[illegible]」口まね[illegible]●「ハ、、[illegible]
にいふ内か能[illegible]
[illegible]」●「ハ、」是は[illegible]まだまだ[illegible]良い事でおざります。三十日[illegible]に[illegible]
立会を致しますから、お頼み申しますよ。[illegible]宿の御[illegible]申して[illegible]
ませんさかい、宜しうお頼み申しますと、此間に[illegible]うてお[illegible]▲「[illegible]」[illegible]云ひます。何
を出しなさるの。」●「さればそこだって。連中が多いさかいに、二段でも余る。[illegible]にしても、[illegible]
せ[illegible]掛らんならんさかい、内でもほっとしてゐるわいな」「こうつうまつりしこなどいふ[illegible]、江戸者[illegible]
▲「なるほど[illegible]割り物が[illegible]なう稽古の入らねえ物にして、他の[illegible]見取りにするが[illegible]
ふ物か、世話物でも後へ付けるか、二つの内だの」●「それいな、立会も稽古のかゝらん物といふうた
ら、忠臣蔵、[illegible]菅原、千本、まア此様な[illegible]かいな」▲「どうも珍らしくないネ。」●「さいな、

だれぢやによつて困るわいな。」ト、上へ▲「ハイさやうなら。」●「おゆるりと。」来る。ト、別るゝ折から時の鐘とともに＊

＊男出で来りて、風呂の栓を抜く。「コレ／＼三助どん、最う些と待ちな。邪見な人だなう。」三助「私は斯うして置きたいが、松の内早仕舞といふお定まりだから、仕方がございません。そりやぬけます。」「すゝ情ねえなう。おれが斯うだらうと思つて氣がせいたけれど、禮者が永尻でヤット今来ました。せめて二度這入ると能いに、タッタ一遍。」「ナヤ／＼それはお寒からう。」私は仕合と、浮世風呂もこれで三編。板元の金まうけ、又ずつしりと抜けました。最うぬきました。」と、番頭が挨拶をする門口から、●「御慶申し入れまする。」「忝い。」と名札を渡しますれば、

浮世風呂三編巻之下　大尾

年頭佳儀

本町二丁目延壽丹
式亭三馬

ぐつと捻つて俗物なる跋

いつまでぐさ、いつまでも　くだらぬ趣向の筆とつて、又三編に[illegible]、[illegible]
じと、否む詞[illegible]こそ、是非にと頼む發客に、なまなか[illegible]
去年も[illegible]閑に[illegible]、然れ今年の[illegible]、[illegible]に從いたる[illegible]、[illegible]
ら、[illegible]と、亡き[illegible]には[illegible]、[illegible]と思へ[illegible]ならん、[illegible]
[illegible]、[illegible]の流行も、人氣に適[illegible]、[illegible]しく[illegible]
も、[illegible]の作者に引きかへて、[illegible]、[illegible]
[illegible]仕立て[illegible]たる小冊の、[illegible]とか[illegible]、[illegible]
た[illegible]、其の[illegible]の御陰にて、京城までも[illegible]、[illegible]に書き遣る[illegible]
に、かはるいろなき[illegible]、やがてあほうえ　つじつまも、亦面白く、四編目に、殘りの條を　かた
ろぞえ。書きたい事の數々に、言はれぬ筆ちこきまぜて、をしき筆とめ候もの

と、しかいふ。

文化八年辛未五月八日、浮世風呂三編の稿を脱して、錢湯に浴する刻、風爐の中の鼻唄を聽いて一篇の狂文成る。仍て此の書の跋に換ふるものなり。

たらり樓のあるじ

三馬しるす

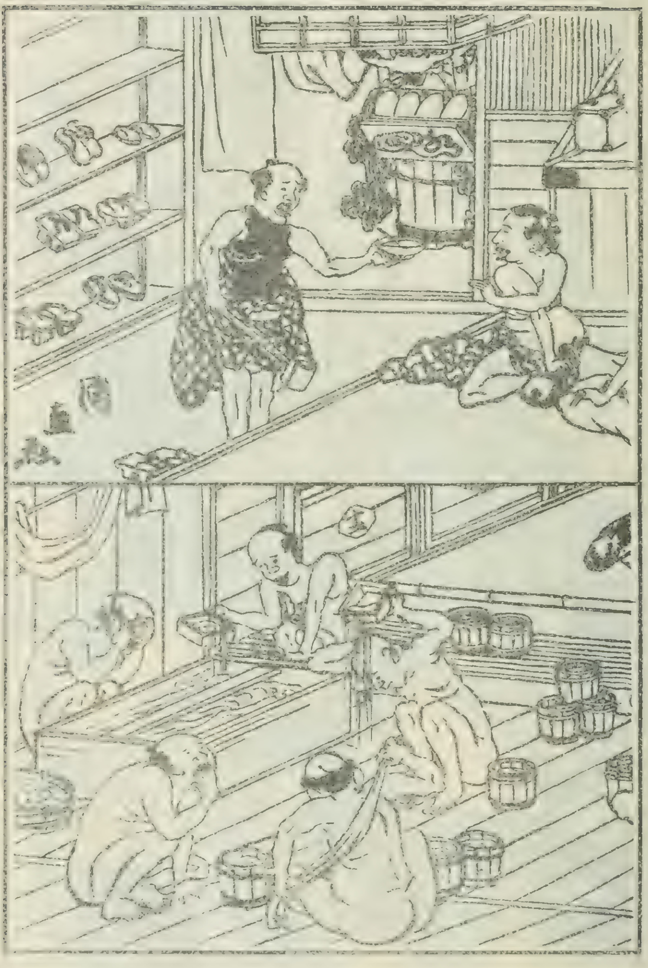
浮世風呂第四編自序

秋風起りて白雲飛び、債券拔きて心先づ踊る、盆前の鬪をほと〳〵と音づるゝ者あり。誰ぞやとみれば債主ならで、催促は彼に齊しき發客の主管なり。稿本たび〳〵虐ぐれど、紺屋の明後日、作者の明晩、久しい分說と合點して、春と暮れ夏と過ぎ、秋は來れども看官に、未だ倦きは來ぬ浮世風呂、初編の鐫版烏有となりて、製本最も世に絶えたり。嗣いで二編三編あれども、各〻女中湯の趣向なれば、男湯を人皆俟てり。今宵は是非にと責め懲られ、明朝までとの詫言さへ、爲方案にむかひ酒、一杯機嫌に筆を採りて、序とか何とかいふ物を、態つと許りお祝ひ申し、これで好いかと與へたれば、主管忽ち莞爾となり、唯々として去りぬ。

式亭三馬戲題

三馬

三馬



三馬

○當酉年新版繪入讀本　式亭三馬戲作

潮來一盃綺言　初編　一冊
諢話浮世風呂　四編　二冊
擬所謂癖物語四十八癖　二編　一冊
田舍芝居忠臣藏　初編　二冊
素人狂言紋切形　初編　二冊
古今百馬鹿　初編　一冊
假名手本藏意抄　一冊　これハ他人の作を當行しまする所有の本なり

人間萬事虚誕計　初編　二冊
人心覗機關　初編　二冊
柳髮新話浮世床　初編　三冊
好古愚癡録　大本　三冊
大千世界樂屋探　大本　五冊
三芝居容者評判記　殘編　三冊
童蒙の教訓鬼打豆　大本　五冊
其外ハいろ〳〵著述し出板

諢話浮世風呂 第四編卷之上

男湯再編

江戸戯作者 式亭三馬戯編

秋の時候

秋來ぬと目にはさやかに見えねども、燈籠〳〵と賣る聲に、驚かれぬる盆前の怔忡も、親の心子知らずとて、お閻魔様の日を樂しむ娘子共の一羣、これも浮世か風呂屋の門に、立ち竝ぶを見るに、十許りより六つ位までの小兒を先驅に竝べ、十一二歳より十四五歳の娘は、其の次に二ならびとわかり、そのあとだちいふものは、子守の小めろこ、十五六より十七八歳まで、五六人立ち竝び、お乳母どもを軍師と頼み、前後に備へを配りて、隊伍整々と練り出すは、江戸流の盆踊(上方の御見物に申す)江戸は、他國の盆踊の如く、對の浴衣音頭取などありて、踊る事絶えてなし。只盆唄といふものを唄ひて、三四だんに竝びて行くのみ。▲おしやべり、おてんば、おちやツぴいと、外のこの子も大勢の子どもに指圖して、いろ〳〵と世話をやく。おてば「ヨリ〳〵お雪さん。おまへは背が高いから、先驅ぢやア見つともねえ。中央にお竝び。オヤ〳〵お霜さん、なんだエ。お前は其處ぢやア無いわな、お曉さんとお朝様と手をお引かれ。アレサ、無きついやうなお子だ。其處ぢやア無えといふにさ。[illegible]おてばんどさん、あんまり惡くいふと、あの子さんはお泣きなさるよ。[illegible]だれだつても世話が焼けてな

これまでおら、じれつてえわな。」おとな「さう云ひなさんな[illegible]年[illegible]ねえお子たち[illegible]、雛が手を[illegible]りて、「サア〱爰へお這入り。お前さんが諠嘩をお爲でないよ。皆さんが中をよく手々をひかれてお嫁[illegible]よ。[illegible]八百屋のお大根さん、長しく[illegible]何[illegible]程の下どちらの中でお商[illegible]しだ。意[illegible]根性[illegible]何だ[illegible]世[illegible]世話に[illegible][illegible]儀治の[illegible]は、脳[illegible]だから[illegible]ひかれ[illegible]くれたで[illegible]お[illegible]んと手[illegible]ようといふのだ。夫れが悪いか。悪かアうぬ何うともして見たがいい。目腐れ女め[illegible]見[illegible]亜屋の御乳母どん。あの小娘の口を聴きなナ。」[illegible]呆れた物だなう[illegible]流石のお[illegible]も[illegible]口だ[illegible]何[illegible]口[illegible]か。[illegible]小娘はしんどきに[illegible]がいい[illegible]、しんど[illegible]見[illegible]小娘も[illegible]しい[illegible]うぬは何だ[illegible]子守ちや[illegible]無[illegible]が、おいらア是れでも八百屋のお嬢さんだ[illegible]へ[illegible]と違ひ[illegible]なんだ、此の[illegible]目腐れの兀頂め[illegible]「兀頂[illegible]気が強い。」おでこ「気がつええもすさまじい。」[illegible]なも気が強え。」「コレサ〱おてばどん、マア默止んな[illegible]い、中にもおとなし[illegible]人が中をおしわけて「お大根さんも他のいふことをお聴き[illegible]其様に[illegible]ない。お下[illegible]も、あのお子は云ひ出した事を[illegible]ねえから[illegible]、不承した[illegible]」[illegible]、両方[illegible]中[illegible]小娘[illegible]

たと見えて、眉あけを下した跡が眞新しく剃り、襟肩から胸一面汁のかゝつた古跡べつたり、前あけの縫目にはお飯粒が二粒ばかり、下飯になりてこびりついたる形、脊中におぶつたお坊さんは、首をがつくり横に曲げて、たわいもなく寐入りたるを、腰帯で處に結び付けられ、左痺、驚風、食惜なし、疳んだりはれたりの元氣者、此の侍には一枚の道化役とおぼしく、いざござの中へ踊りこむ。おなぐ「ハイ〳〵、眞平々々、御免な菜箸火吹竹、灰ならしも御座候ッ。先刻から承りましたが、お前さんの御無理も御尤も。又お前さんの御無理も御尤も。ハテ御尤もでございますから、今日はお仲をお直りなさいまし。結構なお天氣でございます。どなた様もお揃ひ遊ばしまちて、御機嫌ようお出で遊ばしまち」ト、地上にべつたりと坐して、奇あらなかほをしながら、「矢はへん〳〵こほん〳〵ほこたやア、茶はへん〳〵こほん〳〵こ矢。」ト、手拍子をとつて爲損ふゆゑ是れにて一同にお笑ひとなり和睦してみな〳〵竝ぶに ▲後驅の小娘、「サア〳〵、みなさんよくお竝びよ。」ぼんうた「踊子は竝べ。をすどり子は竝べ。」「アレサ私ばかりおやァいや。お前がたはなぜお謳ひでない。」「サア〳〵、お謳ひ〳〵。」長い長い兩國橋や長い。おす馬でやろか。おす駕籠でやろか。おす馬も否よ。おす駕籠も否よ。十引六七に手をすひイかアれエ、手をすひイかアれ。」「アレサ、もつと大きな聲をお爲な。」あきだちウヽ「先驅衆はおす聲が低い。」大勢一同に大口を開き ときなおウヽ「さアきイだちイ衆は、おすこすゑがひくい。」ときなおウヽ「最う、ちと、たかく、たアのウみイまアせう。たアのウみイまア、しよ。」ときなおウヽ「もすす、、ちと、高くたアのウみイまアせう。たアのウみイまア、しよ。」ちう兵「アレ〳〵向うから、男の子が盆々をなして來たよ。」ねこは「皆がきつウく手を引合つて往きな。かまふ事アねえ、叩きのめしてやらう」ちう兵「アレ

すことはふことは嫌ひかとお思ひになない。此気分をかけんとな[illegible]のにし[illegible]私は[illegible]
これの[illegible]、此の[illegible]一寸[illegible]、今に[illegible]一[illegible]
[illegible]の[illegible]今[illegible]、[illegible]
ですから、[illegible]、私たちの国では、番頭を大層さ。[illegible]
[illegible]、江戸[illegible]昔は[illegible]、[illegible]の[illegible]
なったもんです。[illegible]蛮句といふ[illegible]
ぞ、[illegible]蛮頭和[illegible]、蛮句を[illegible]、[illegible]歌[illegible]一流
歌で、[illegible]らしくなれの[illegible]
ねえ、今様[illegible]と云ふものは、悪[illegible]何[illegible]でもね。[illegible]花[illegible]
言葉の節で、俗謡の文句を作るに就いて、その中に[illegible]しくなる[illegible]一種[illegible]
は、やさかたな事を[illegible]たいものです。[illegible]聖人[illegible]
ば、自然と長しくなるから[illegible]。[illegible]
分から[illegible]切ます。其の[illegible]には、[illegible]小説は、[illegible]
は、[illegible]を[illegible]にして、[illegible]それらは[illegible]と[illegible]子の[illegible]

さまは、三たび轉居をさしつたとある。成程御尤も大事さネ。」むだ「イエさうもいへやせん。其の證據にはス、本町に吐虚誕もあれば、深川に淺い川もあり。是れ如何。」其「コレサ〳〵足下のやうに、さう意地惡く出られては、どうも叶はぬ。」むだ「足下でも反齒でもいいが、憚りながらお前の料簡は狹い。ハテサ、今の女の子の中にも、おあんなんしになる女もあれば、絹布に包まつて、一寸出るにも定乘物で、きん〳〵になるもあらうス。されば云つて、盆唄の惡態がついて廻るもんでも無し。こりやア面々の性質さ。盛場の小兒だとて、鳴物に怯えぬもあれば、怯える子もあらうシ、寺地の者だとて、葬禮の強飯を食ふ者もあらうシ、又食ふと限る事も無えネ。」其「ハテ扨、さうではないが、そこには聽所がある。」むだ「こゝ一ばん聽所だいッ。お前の料簡は臍だッ。ハ、、、、上戸は酒を飲むものだ。下戸は餅を食ふに限ると思ふのは、チト來つた代物だぜ。お前のやうに義理をかたく覺えちやア、今時は往かねえ。ハテ潮煮で飯を食ふ下戸と、唐茄子のあべ川を食ふ上戸は、たひら一面の押物だ。眞田の腰帶は、男がしめて羽織を挾むシ、晒の手巾は、女中衆がかぶつて野遊に出る。厚ぼつてえ綿頭巾は、血氣さかんの壯夫が、襟へ卷いたり天窓を包んだりする。さうかとおもへば、嫁にはこうたうなたうをさせて、押返させねえざまをする姑もあり。」其「サア〳〵そこだテ。それが此方のトント心に落ちぬ所だわや。」むだ「ハテサそれが料簡が小さい。昔から今まで流行といふものは、廢るを

すえ間に後れるから、また色々になるわな。」 丑「それは古今變化の理で、今は昔に變り、昔は今に變り、古往今來風俗の移る事は、桑田碧海ぢやが、其の中にも。」 むだ「ナニ、エサ打遣つて置くがいい。世話にもならねえ事だ。世の中の放蕩家が、親や親類の意見する間はきかねえ。ソコデ、「己」の氣から出まつた時には大磐石となるぜ。其の理窟は萬事に通じる。ハテ捷い譬喩だ。總體の事が一旦はかぶれるけれど、善惡は三歳兒にも解る物だから、是れは惡いと思ふ事は、永く續かねえわな。」 丑「然らば、色と酒で家國を傾け、角家敷を亡くす筈はないが、和漢古今共に、貴賤を云はずして數多あるはどうぢや。」 むだ「そりやア、うぬが氣で料簡の付かぬ者に逢つちや、仕方が無え。早く云へば馬鹿者だから、是れは論の外さ。オツト馬鹿者といへば、アレ〱、向側を通る日傘を見なせえ。」 丑「ドレドレ。ハヽア、たぼと喋くる者、相合傘で、面も[illegible]通る」 [illegible] 中位の色男だが、頭へ青黛を塗つて、[illegible]嫌味たつぷりの拵へ[illegible]と見えるが、高慢な面をして、相合傘は出來ねえ[illegible]厚顔皮な奴らだ。[illegible]擧動だ」[illegible]自慢の高慢に入つた奴ぢや。」 むだ「女房[illegible]女に入れ上げて、漸う内へ引込めの、晝も[illegible]の癇が鳴るといふ世界で、[illegible]しいネヱ額の汗を下手に拭くと、色男の面が[illegible]になる[illegible]

あれも京都なとで見ると見苦しくないテ。總て京の町は女と相合傘はおろか、娼婦歌妓などを引連れて、手を引き合つて歩くが、一向目だたぬ。江戸で見たがいい。夫れこそ口々に毒づいて、大騒ぎだが、上がたは人氣の和かい所爲か、トント穏便さ。江戸ででんぼふ、上方でまうろくなどといふ、あばずれがあれど、夫れさへも馴事になつ居る所爲か、更に構はぬ」むだ「己」の好き／＼だから、他人様はいらねえことだが、先づ誰でも口を出したがるテ。」ト いふ所へ風呂からあがつてくる男、大のひやうきんものと覺しく、「オヽ暑い暑い。」といひながら、近年の流行にて、妙薬の能書を兩面に張りたる反古團扇をとりて、披露の薬名をよみながら、さび八「ヤ何うだね、だ公、大分早く來たの。イヤ甚次さん、暫くお目にぶらさがらねえの。ヲウ見ねえ。如在ねえ事をするぜ。薬の引札を團扇へ張つて、湯屋へ配るなどとは、五分も透かねえよナウ。番公どうだ、居眠りか。久しい物よ。番公の居眠りはまだいいが、湯汲の居眠るのが恐れるぜ。今時分はいいけれど、冬、寒くてがた／＼震ふをもかまはず、小さな柄杓で、だら／＼と汲むやつさ、あんまり心意氣がねえ。」ばん「そりやア夏は猿頬をつけて隨意に汲ませる」甚「其の筈さ。冬は湯が沸かぬ、夏は捨てて置いても沸き上るわさ。」ばんとう「よび出しの湯を、早々と汲み出されると、湯の沸く間が無えから最も至極だけれど、他はさう思ひませぬ。」むだ「よび出しとは、△の片つ小鬢に書いてある奴だの。」甚「細見おやァあるめえし。」ばん「アノ浄湯を汲む升形の所をよび出しといふわな。湯くみの若者のことを、上り番といつて、大概

何所の湯屋でも、[illegible]「所うな[illegible]に[illegible]」[illegible]
[illegible]に、[illegible]さんの[illegible]、[illegible]の[illegible]に
[illegible]がお[illegible]は[illegible]
誕の問屋だから的にならねえ。」こび「[illegible]、[illegible]しく申してくんねえ。大[illegible]文。是れ許りは正直だ。」[illegible]「[illegible]
ヤイヤ飛八さんの[illegible]はいつも鐵砲だ[illegible]」[illegible]併しなかしくていいネ。」ト、いふ所へ勇肌の男入り来る人にて、渾名を鐵砲作と云ふ人。これも名うてのうそばなしをする
作「イヤア噂をすれば影とやらだ。鐵砲先生御光来[illegible]」作「なんだ。人のことを鐵砲だの何のと。」こび「鐵砲とは飛八が事、作公[illegible]筒だ。」こび「おいやアがれ。」作「とんだ所へ浮騰がかゝるもんだぜ。」ぼんとう「作さん、昨日のいさくさはどうなりました。[illegible]」
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]間の[illegible]お先[illegible]に、[illegible]がはしッこい[illegible]来て居るから、どつちともむ[illegible]がかしい[illegible]いつも勇み
だ[illegible]が八寸角[illegible]上げて、[illegible]の[illegible]
二本ぶらに[illegible]つたつけが、其の足で[illegible]

アんと中つて、頭が眞二つ。」むだ「コウ〳〵大篇々々、能い加減に譃をつきな。蟲の毒だ。」隹「なぜ。」むだ「鼬岩には今朝逢つたが、頭は割れやアしねえ。」隹「ナニサ、あれほど割れたものを、おらアしかも中人だアな。」むだ「中人の目には割れたと見えるか知らねえが、おいらが様な上人の目にはさつぱり無疵。」甘「そしてサ、四十貫目といふ礫が何所にあらうぞ。」隹「ハテさう詰されちやア貞勢がねえ。それぢやア夫れにもして置かうが、ただ、それから、岩の野郎が、やつきとして、打ち合つたが、彦と取組んで、彦が鼻を、啀めエ食ひ掻いたぜ。」むだ「こまたに、猿田彦が鼻を、鼬岩が食ひ掻いた。」隹「ふム、〳〵、作公。あんまりだぜ〳〵。主が譃をつくと、おれが外聞にかゝはらアナ。」隹「よく此ん徒は譃だといふぜエ。おれが濟みすましを付けたから、けちりんも間違は無え。其の跡を聽かつし。ハテ斯う云つちやア何だけれどナ、一つ鍋の物を食ひ合ふもんだから、兩方で相應なりやア、有や無やに行かうといふもんだス。そこでおれが貰つてナ、兩方から誤り證文を出させてス。しかしソレ和睦の濟んだ上には、杯の跡で證文はおれが貰つて、目の前でひつ裂いて終はうと云ふ理窟だから、ソレ側のまつ居るやうだやアねえか。雙方にも引絡んだ種は無えから、すつぱり極つたといふとこで、證文の一段といつもながら長代さんに種まうといふ所だが、珍らしくも無え諠嘩を、萬一に持つ行くでも無えから、おれが助言して、勝ぐいに書かせたア。」むだ「そいつは強氣だの。」隹「そこはソレ馴れ

居るもんだから、遣つた様なものさ。[illegible]ソレ、誤酒文之事[illegible]よ。[illegible]酒に
ハイ、その候上、口論を申しやけく。そこは能いがよ、おらアだれ、そこらと様と当つて云つたら、
様がいふには、貴殿が能いといふのよ。貴殿と云つちやア二本佩すやうで洒落臭えから、そこが塩梅
能た言、いろ〳〵に首を捻つたが、侍がな無えから、やつぱり貴殿で、能いかなといつて
よ「貴殿おやア此方等の口ではねへが、侍方で無えし」作ツコテ、貴殿御大切の御鼻たへ候段、一言之
申訳御座なく候。」みな〳〵大笑　作「トどをかしい。」甚「ハテ、鼻を食ひ掻いたおちやア無えか。」作「何
さ、すうふはねえさ。彼奴が悪いからよ。おつと、昨日食ひに行つた時だ。[illegible]大の虫を噛ました
ところを、それから又、貴殿御大切の御鼻、少を食べ付け候段と、それだから」甚「馬鹿で云やアそ
言の人柄が悪くなつた。[illegible]ただれちやア鼻を食つて、[illegible]
ぢやア酷い引裂く物だ。[illegible]上達の様に云つちやアはじまらねへ。[illegible]
でアそこは江戸ッ子だア。一[illegible]江戸ッ子[illegible]まじい。[illegible]唐人の[illegible]
おいらア[illegible]来るげ、[illegible]田[illegible]彦が[illegible]、悪い時来た[illegible]何時鼻を食つ[illegible]
の[illegible]作に[illegible]
嘘ッつき[illegible]「私も昨日の喧嘩は[illegible]人の間の[illegible]、作らを話し出して[illegible]
くまびので受け[illegible]

くて能い謔さ。アハヽヽヽ、ハイゞなたもおゆるり。」ト、抱へに立かゝる、其次はゆかたを 彦「おれが門口で小便しなが
ら立ち聴きをしてるた。縁宜でも無えことを製へるぜ。コウ作、髪結牀へ行くか。」作「ムヽ。」彦「一
緒に行くべい。」作「さう云つても髪公はよく結ふぜ。」彦「腕節が違はア。」作「たばねを結ふ中にも、
あの位手の利いた者は覚えねえ。」ト、いひながら両人はだかになり、作「ざつと一風呂這入るべい。」彦「おらア、淨湯ゥ
浴びる許りだ。」とだ「夏の内は行水が能いぜ。」作「最う秋だ。」なた「秋でもまだ暑い。」ゑび「それだから
暑い中は這入りつ人が少ねえ。」ゑ「これから湯も入りが出て来る。」作「ドッと込るぜエ。」彦「どつこ
いな。」ト、両人風呂へ入る。なだ「髪がはなしでおもひ出した。おいらもとこへ行かう。アイそんなら。」ト、出て行く。此
の浮世風呂の類は、浮世牀といふ髪結どこなり。此の髪結牀の噺は、御髪新話浮世床と名づけて、中本二冊、當年出
來うり出し申し候。御出入の貸本屋に御求め御一覽可被下候。おひ／＼二編三編とうち續き著述致し候間、最寄よろ
しき本屋にて、御もとめくだされ御評判よろしく奉願上候。以上。俳諧師と覚しき坊主入り来り、鬼角「ばんとうまだ暑いの。」ばんとう「ハイお出でなさり
ました。」鬼角「や飛八さんか。暑のおさゝはりも無くて。」ゑび「これは先生さん、ひさしくお見かけ申し
ませんね。まだ何処でお出でなさいましたか。」なた「アイサ、越後の方へ行つて、去年のくれから丁度一
年居ました。」ゑび「どんなに夕霧で御座いますネ。雪にお困りなすつたらう。」鬼「イヤハヤ、越路の雪許
りは、思つたよりも深い事さ。」ゑび「こゝに居る番頭も越後者だから、滅多な事は云はれませんが、
あれも所によつては、魚が澤山で直が安し、女が美しくて恰好といふもんで御座いますから、江戸か

ふが[illegible]は[illegible]、江戸へ[illegible]
[illegible]つかふといふ所で[illegible]がね[illegible]まし
たとき、[illegible]、わたし[illegible]一つ[illegible]
目に[illegible]」[illegible]の[illegible]もつと[illegible]

ト、いひながら、おひ手にならず風呂へ行く。 ぶび「番とうが證人。たつた今ござつた先生さんと御ぞんじだが、おれが雪の話をして聴かせよう。直兵衛さん聞きなせえの」 そばにすじみながら大欠で、足の爪をとりてゐたる男、[illegible]「ハテネ」 ト、まじめにうけてゐる。▲猿田の彦は、浮湯を使ひゐたりしが、とび八の方へ向ひて、握り拳の腕をのばして、鐵砲の見えになり、[illegible]ひすまして、 彦「イヨッドオン。」 ぶび「うこぎ[illegible]ア無えっ」 ト、まじめにつくろひ、「まづ、おれがおそれた事には[illegible]、越後の山家に五六十日も泊つて[illegible]たが、[illegible]ンカ斯うだにふつてト、霜月の下旬かであつたよ。雪に一面につもつて大屋上より高い[illegible]その間は、家毎に穴[illegible]あけて[illegible]いて通用する。マアそりやアよしよ。夫れから鄰の内へ用が有つて行かうとする。マヅ鄰といふ[illegible]三里もあ[illegible]きさ。其の時[illegible]つ四つ[illegible]て出て行くわ、サア雪が[illegible]には三尺位は忽ちつもる。ソコデ、三里もある所へ行く[illegible]、段々雪に積られて、二里も行くと最う[illegible]ハテ歩行くぜ。歩行いても歩き負せねえ。[illegible]

ると足が一尺五六寸づゝ隠れるから、其の足を抜いては歩行き、抜いては歩行きする中に、丁度足駄の歯へ雪の溜つた様に、股へ雪が挟まつて、ソレ辨慶立往生と来るわ。ソコデ、為方が無えから、彼の長竿を眞直に立てゝ、そこに居竦まると、到頭天窗の上へ二丈もつもる。」直兵「ハテ怖いネ。夫れでは死にませう。」こぶ「そこが妙ス。馴れた物さ。其の雪に埋つた中で、彼の握飯を食つてる。ソレ食があるから二日は大丈夫さ。」ぶた「ハテさて凍死に。」こぶ「イヽエサ、雪はつもつてから凍つては冷い物だが、降る間は暖いネ。」直「それでも息が詰りやせう。」こぶ「息のつまりさうな時は、彼の長竿を動かすと、上へ息出しの穴が明きやす。」男「夫れでもつもつた雪はおもたいから、動きますまい。」こぶ「ハテ、降りたてはほやほやといふ雪だから、まだ氷らず固まらぬ内は、自由になりやす。とんだ和かいものさ。ナヽ番頭。」ばんとう「ハイ、併し、丈もつもつてはどうで御座いませうか。」こぶ「コウコウ、越後者がそれおやア納まらねえ。貴様は越後に生まれてもそんな目に遭はねえのだ。話せねえ話せねえ。ソコで其の晩は一夜、雪の底で握飯を食つてゐると、降り立ての雪は風が通らねえからがうてきと暖い。爰にて寝るだらう。ソリヤ翌くる朝、宿から迎への人が来ると、彼の長竿がツイと出てゐるから、夫れを目印にして鍬で掘り起して、ハイお迎へに参じましたス。ナント手軽いぢやア無いかの。」直兵「どうやら實説らしくもあり、又虚らしい所もあるでナ。」こぶ「番頭が知らずば、今来た

先生さんに聞きなせえ。夫れよりまだ〳〵、手短な事があれ。夫れから迎への者と一緒に郷の内へ往つて、用を達して帰る。ざつと三里もある道法の所が、山も谷も雪でうまるもんだから、雪車といふ物に乗ると、する〳〵と辷り出して、三里の道を煙草一服の間に帰りやす。イエモウどうも實に雪のやうさネ。[illegible]鐵砲作風呂の中より出で来り「そりやアもし、飛込のいふに違へごぜえやせん。私も越後へは往きやしたが、其の大雪の降る間はいいが、凍つた後は寒くてたまりやせん。サア冷えるわと云つたらお話のやア無え。[illegible]居て小便をするに、其の小便を[illegible]うち、最う尖頭の方は冰りやす。夫れだから鋏刀をはなさず持つ居て、鋏子をはさむやうに、小便の尖頭を[illegible]〳〵と斬りながら小便爲や[illegible]
はんき[illegible]〳〵皆さま御用心なさい[illegible]作[illegible]八[illegible]
[illegible]作な、[illegible]だ[illegible]たま〳〵實說の事[illegible]請けて呉れね
[illegible]打遣つて置かつし[illegible]〳〵夫れよりか、[illegible]は雪[illegible]見た[illegible]
流行のお[illegible]も寒凍とした[illegible]幽霊[illegible]雪中の化物だア。」こび「大入道にでも[illegible]所を、
[illegible]とは色氣があるぜ」[illegible]そこには化物も愛嬌だ[illegible]何でも大雪の[illegible]つた寒い晩[illegible]
こしきで[illegible]があつて[illegible]、末始終江戸へ連れて来て、屁でも撒り合はうといふ。」こび「コウ〳〵、おめ
へ雪女と色事か。恐ろしい。」作「ナニサ、さういふ[illegible]の女が出来て、其の女が[illegible]傾城[illegible]

い聴きやうだ。」とび「悪い話しやうだ、俺ア又、江戸へ連れて來て、觀物にでもするのかと思つた。」作「篦棒云や。雪女を連れて來りやア、途中で解けて終はア。その女の所から歸りがけにナ、小武井嶺といふ嶺を一つ越すのだ。」とび「ム、、あれから古越村へ取著く間がわるく寒いぜ。」作「ぬしも知つ居るだらうが、すごい所だナア。」とび「凄いの何のと、あすこは虎や狼の巣で、晝は定九郎の立場だス。」直「モシ〳〵、雪の降る時は、獸が殘らず穴へ籠りますぜ。そしてお前虎は日本には住みませぬわさ。」作「其の住まねえ虎が住んで居る所だから凄いのス。」とび「其の證據には嶺から半道も下りると、千里が竹といふ竹藪があるなウ。」作「その竹藪の所で雪女に遇つた。」とび「腰から下は無えか。」作「無え。」とび「ハテナ。」作「なんでも天窗の髪毛から目鼻をかけて、總體がまつ白。」ト、鼻をしかめて小便になり「俺もぞつとしたぜ。ハテ今でこそ話せ、その時は命しようぶだ。ナニが氣も付かずにぶら〳〵行くと、すウつくりと立つて居たが、眞白にほんやりとして女の形たゞ只ぶる〳〵ぶる〳〵と傍へ居るものだよ。」とび「蒟蒻の幽靈だらう。」作「何さ、雪女に違へねえわな。おれも爰は一生懸命だと覺期をして、雪女にグツト抓みかゝると、其の冷えことが指が断れるやう、暫く取組んでゐたが、身が重くてしんまくにおへなんだを、漸う足を引つたふして、どさりと轉んだ所を、グイと睾丸を締めた。」直「モシ〳〵、お前今のお話では、雪女と被仰つたでは御座えませんか。」作「雪女さ。」とび「腰から下

は無いと言つたらう。」[illegible]雪女なら、いはゞ陰嚢は有りさうも無いものだ。」[illegible]「そこがばけ物だ。」少し
行きて、[illegible]「アヽ、腹ぎ、[illegible]夜だつけが、[illegible]居る間に、丈五六尺ばかりの[illegible]になつた
[illegible]よほど[illegible]そこでそれ、足も生えれば、陰嚢も出来ようぢやァねえか。それもの、[illegible]
の、[illegible]で聞いたら随分ある事だといつたよ。[illegible]を[illegible]、[illegible]
[illegible]、[illegible]目を[illegible]りさつし。[illegible]が[illegible]化物だ[illegible]なる[illegible]
[illegible]呆れかへらア。[illegible]聞いつし。[illegible]頭[illegible]の[illegible]して、[illegible]を見れば、一面
の松ばかり。[illegible]千里が竹藪だといふたな。[illegible]、[illegible]に化されました。
[illegible]「能く加減につつし。[illegible]そんな[illegible]事ぢやねえか。」[illegible]「其の[illegible]は、[illegible]
金つ[illegible]。」[illegible]、[illegible]ここらあたりで[illegible]つ[illegible]、[illegible]
の、[illegible]か、[illegible]、[illegible]の、[illegible]へ水[illegible]、[illegible]
頭でも入れて、四文がいだつし。」[illegible]、道明寺[illegible]、[illegible]道明寺といふ[illegible]
は、越後にもあるあまてつ。[illegible]お寺はあるか。[illegible]しかも[illegible]つたつ。」[illegible]、[illegible]面白くも
[illegible]御[illegible]をしてくどつたつ[illegible]あれもおでも[illegible]、[illegible]を忘れた[illegible]、二十[illegible]文
[illegible]つし。[illegible]米を飲むに三十二文かゝ[illegible]四文が水で、二十八文が髪結銭だ。」[illegible]

んな下直なおつむりおやア無え。ちよつとたばねが五十宛だ。サイ水や、そこにある砂糖をおもふさ
まぶちこんで一杯くだつし。三十二文やるべい。」水「ハイ／＼。」茶椀を盥にて搔き廻しながら中を見て生「此の砂
糖は糖でも交ぜやアしねえか。」水「本太白で御座ります。」生「譃をつくぜ。」事「此のみつ屋も作な仲
間だぜ。コレみつ屋さん、譃をつくなら此の男と、あすこに團扇ア持つ居るをとこと結交つてみな。」
水「へ、、、、。」ト笑ふ生「此の砂たうが本たいはくだやア、水やも下地があるわえ。」事「從、下輔
對が出來ましたネ。ハ、、、。」ト生「作がおや椀の中は、砂糖の中へ水を入れて飲むのだ。」生「荐まね
えか。」ト生「水は毒だ。」生「腹にあたる風か。」ト生「こつちは雲の上人だ。」事「素人では御座りませ
んか。」ト生「恐ろしい。」事「ヤ直兵衛さんも、だまりへしてゐる。可笑はならねえ。」事「一四文」ト水屋
に渡しト生「そりや三十二文よ。ヤ、たかい砂たうだ。」生「強氣とまうけるぜ。」生「おいらも本貫になる
べいに。」水ヤ「ハイ／＼お前さんがた、是れでもお天氣都合が悪いと、休みが勝ちますからネ、やつぱり
ひき合ひませんネ。ネンノ繦子をするやうな商で御座いますネ。」ト生「それ代に本錢はいらねえネ。荷は
借荷で損料は出すばかり。」生「さういふものもあるさうでございますが、私共は手前で製へましたよ。」
生「さうだらう。眞鍮の瀬が規帳面におゐまかつて、直径がおつりきに曲つたぜ。つれびだと銅の地
が悪い。」生「それでも此の白粉は、黄銅を摸つたのだから無え。」ト生「帽子の作事だ。」ト北方上寄に及

んだ。[illegible]を付ければいい[illegible]大[illegible]。」こび「竟は夜鷹が出る。」[illegible]「コウ水屋さん、早く持つて
往きねえ。[illegible]の[illegible]に[illegible]。」[illegible]三十[illegible]
[illegible]その[illegible]の手から出て[illegible]、[illegible]
[illegible]方な事を申し上げるぜエ。利を付けて[illegible]「利[illegible]、元金を忘れ[illegible]がいい。」
[illegible]金といふものはなぜ持てねえだらう。」ト、いふうしろに隠居[illegible]さま立つてゐたりしが[illegible]「おめへ[illegible]
「[illegible]晩[illegible]衛門さ[illegible]、最うおあがりでござえますか。」[illegible]「[illegible]をなした澤山[illegible]
右衛門さん[illegible]、[illegible]
げて往きます。奉公人を置けばとてその通りさ。主人が[illegible]
すれば、[illegible]のやうな[illegible]が失[illegible]
から、[illegible]の事、[illegible]の中に第一の寶だと思つて、大切に取扱ひ、[illegible]
とうもならぬといふ事に[illegible]使ふ[illegible]遣[illegible]
ば金の罰が[illegible]遣ふ[illegible]
ばれる[illegible]の事に、パッパと湯水の様に遣つては、[illegible]道理であるまいか。雪の日やあれも人
の子[illegible]、[illegible]何かある[illegible]我が子[illegible]の中[illegible]から[illegible]はぬと云

つて、奉公人をたゝきつかひ、雪をもいとはず想像が無ければ、忠臣もおのづから出來ぬ。漸う調市一人を使ふ身なりとも、よくあはれんで使へば、ありがたい主人だと思ふから、自然と忠義の心が起る。さすれば其の奉公人が律義に守つてくれるゆゑ、主の家も繁昌する。其のまた惠みによつて奉公人も末がめでたい。ナント解りましたか。して見れば、金銀も左の通りさ。金銀は神佛より利生が目前だ。神佛の御利生はよく〳〵信心したらあらうが、まづ目に見えぬが多い。何事も信心だから、金銀を信心したら金銀の利生が無くてはかなはぬ。お前方のは、浮虚信心だから、名ばかりの事。信心とは信の心と書いて、心を信やかにするが信心。俺が早い譬諭を云つて聴かせよう。隱居が又始まつたと思ふだらうが、身の藥だから聴きなさい。藥はとても苦い。さて神佛を信心するなでは無いよ、信心せねばならぬものだ。心を信にしてよいといふ事は、まづ親を信心して見なさい。親の利生が加はつて其の身も安樂。主人を信心すれば萬事主の意にかなふゆゑ出世する。兒を信心すれば憐んでくれる。弟を信心すれば、弟が自然と敬つてくれる。妻子を信心すれば、妻子がおのづと麁末にせず、貞孝を盡してくれる。奉公人も則ちその通り。其の證據の捷い所は、女郎を信心して見なさい、初めは振り詰めた女郎も、到頭眞實に惚れてくれる。其の御利生は家を失ひ身を傷る。夫れも又浮虛で買つて見なさい。御利生は無い。ハテ此方に信心の無いものに、惚れる癡呆が何有るものか。然らば

神佛の信心も其の通り、此方が淨信で拍手[illegible]して、[illegible]の立つても、小羽織の一つも御取出し、[illegible]ある御顔で[illegible]向いて聴くことではない。まして佛前に向つて、長念珠を[illegible]で、数珠を摺り鳴らうが、[illegible]の淨土では、佛さまも不承知だ。金が出したいと口でいふばかり、金を信心せねば金の御利益は無い道理で、遥々に来た金も、金をかひ出す家だ、此様な家に半日も居るのは否だと、出て往くから、ソリヤ背拍の銭には縁が無い。[illegible]酒を吞む者は[illegible]で無い。酒を信心すれば[illegible]、[illegible]となる時、此の御利生も身代を[illegible]か、[illegible]信心の目に見える[illegible]

神佛の御利生は有つて目に見えず、金銀の御利生は忽ち目下に顕はれる。[illegible]し給ふお役、神佛は此の世を救ひ給ふがお役。その大切な神佛[illegible]、金銀を[illegible]。ためしに見なさい、堂宮大破に及んで見なさる。何とやら大國神社[illegible]、何やら堂、建立だの再建だのと、氏子や檀方がいふものも、無縁法界[illegible]のために、一切衆生に[illegible]れて、[illegible]を[illegible]へて貰はつしやる。是が即ち、金銀の御利生を神佛も信心し給ふ所、して見れば凡夫においても、金銀を信心し奉るが第一に近道。[illegible]世の中、しかも富貴な[illegible]生まれ出た事を思ひなさい。日に[illegible]度[illegible]を三膳づゝ、頂いてゐるのは、[illegible]の[illegible]と思つてゐれば、

何も不足は無い。皆奢りが勝つから起る。金銀は澤山な世の中だ。アッアあり難い事だ。むかし頼朝公が南都の東大寺の奉加帳へ、金五十兩と御寄進遊ばした所が、其の年あやにくに旱魃で、其の御沙汰も無かつたト、東鑑に記いてある。賴朝樣でさへ、僅か五十兩の金が其の趣だ。狂言とはいひながらも、平假名盛衰記の梅が枝が、金ならタッタ三百兩と、ぬかした罰の當つた奴だ。ナントどう思ひなさる。今も聽いてるればゝ、冷水をあがるに他の錢を借りながら、三十二文で一杯とは勿體ない事だ。ア其の錢がさぞ歎いた事であらう。君の御馬前で討死を願ふは、主のお役に立ちたいと思ふ昔の武士。只今の錢なども、三十二文で、薪か味噌の足りにでもなりたいと心がけた所を、砂糖入れた冷水一杯が手に懸つては、誠の犬死だ。ハテ一文で呑むは、途中往來で不自由な時の事。安坐して譃話をしてゐる閒には、チヨイト井戸へ行けば、錢いらずの釣瓶から呑めます。それも面倒なら、アレ、あの水舟の水でも濟むわさ。冷水といへど寒暖僅かの相違で、水に熱水といふがあらうか。伊豆の熱海の外に熱水といふものは無い。水は皆冷つこいに規した物だ。サァ何ゥだナ。隱居が久しい物だといふだらうが、「金が溜らぬ。」の「持てぬ。」のといふから此の講釋だ。」作「イエもう誤り入りました。」虎「ちげへ御座えませんこ。」三「そりやァ百も承知さ。夫れだけれどこ。」虎「エ、コレ默つて居やなこ」鬼「か、、、まだ〳〵合點が行くまいテ、どうでおれがお談義は、しけ坊とやらの新内ぶしを聽くや

うて仕舞いのさ、ハ、、、、、」（此時番頭入り來る、古今亭志ん生が其前に…）
「喜ん助、小僧さ、一寸」（番頭「これはノ＼、御無事でお早う御座ります」「一寸御頼み申す」）
たこ一寸御仕やらを用で御座りまして、幽下御注往りまして御前様に御機嫌よろしう
こ御座りますと言ふ。ちつとも、お手透にお出でなさい」言「ハイ／＼ありがたう存じます。ハ、、、、、故
お遠ましい事で御座ります、ハイ／＼、お顔を見て御座る所を何よりで御座ります」
「私、其所から延びたう御座ります、ハ、、、、一寸お伺ひ當は彼處の知れぬのを、此れが能い
で一つすつかり冬季になると、一體夫れには迷惑ですよ」言「左樣で、一寸、何時で
御座りませう。イヤもう、能い所でお目にかゝりました。一寸と、伺ひたい事が御座ります。此
間中から東京の道の連中まで、一寸と御用取りにずん／＼と走つて參りましたが、夫から直に銀座
へでられましたので、ハ、、、」言「私は、品川邊まで用談あつて參じましたが。」言「ノウ。」言「此
只今の顔を見受けまして、なんぞ何かござりました事と存じましたが、いや、御無沙汰いたして、
たうとう高輪まで、やつと出來ましたよ」言「ハイ、其れは御ふうございましたことでござりますか」
あいそ、ハ、、、、ト斯う申しましたが、是れでもよいことで御座りませうか、ハ、、、」言「此間を取り替へ御有
「京ばんの」言「ア、左樣ですのに」言「ハ、、、あの、何處の揭けますの」言「ハイ、、、」

點「これで發句に相成りませうか。」兎「ハイ、ハイ、ずゐぶんよう御座えせう。」點「イエサ、私は下手の横好きで、兎角マア、あなたがたのやうな、俳諧とやら連歌とやら、歌は勿論、ホイ是れではお梅粂之助の淨瑠璃になりました。ハヽヽヽ。シタがさやうな慰みが好物で御座ります。どうぞ御腹藏なく被仰つて下さりませ。それが私の爲になります。」兎角「ハイ。」ト、ばかり困りきつて居る。京「京橋の鳶澤ひけり揚豆腐。」京「それは地口だネ。お待ちなさい、地口といふものでもない。雜俳の點者などに見せたら解りませう。タシカ、何とか唱へて左樣な口調があるやうだテ。地口といふものも發語の文字が同字なれば、冠と申して忌むげに御座る。是れは此方の關らぬ事なれども、只まづお話し申す。何の道にも式のあるもので、一寸なだくちにいふ地口なれども、點取地口となれば、冠つた文字は點にならぬと申す。夫れゆゑ、常にぶい／＼地口をいふ人も、點取ではいへませぬ。」京「ヘヽヽ、さやうなれば、堀江町の鰻鱺舖の亭主。」京「ヲ、山田庄藏かナ。何として／＼、あの男の地口でも、なか／＼點取はいけまいて。」點「能く庄藏を御存じで御座りますよ。ハヽヽヽ。」京「うなぎは能い魚なれども、地口は惡地口。」ト、こト戲作者の口調だて。戲作本には、語路の能く運つた地口は、可笑しく無いゆゑ用ゐぬ。各々その道々だネ。わざとこじ付けた地口を書くが、戲作本の意とする所。又行燈の地口は、繪地口と申して、あれは繪を表として、繪から拵へる地口でござす。これは歩行きながら兩側な

讀むもの故、字數を少なくして早く、解き易く、すつと口本で、可笑しく作り、本意を第一とする

鳥「ヘヱ、なるほど、さやうなら、私の申しましたのは俳諧になりませぬ、地口にあたります。左様なら雅俗

で御座りませうか」鬼「さやう〳〵、俳諧では無い……地口ですな」鳥「ヘヱ、さやう、それにつきましても

只の十七字さ」鳥「ハヽヽヽ、只の十七字、ハヽヽ」ト、小首をかたむけ「一體どうした趣意と申す所は、詩の

句だね」鬼「ヘヱ、道理と一緒に使ひます、其の何から」鬼「ホイ、寶晋齋一派は……」鳥「ナルホド、

うしろいの功さまの此口に「皇かはさうなるもの、寶井其角の句に」鳥「ヘヽ、さよう、其角の

通ひけり掲揚明、といふがごつて」鬼「南無三寶、はれるやうな……」

それを御存じでは、臺座後光しまひつけました。ハヽヽ、さやうなら近日」ト、あゝ「ゆるり乗ぶり

書六ヶに書いてある句さ」鬼「ト見通し、ト、御掲揚の通りさ」鳥「ハヽヽ、ヽヽヽ、ヽ」

諢話浮世風呂第四編巻之上　畢

諢話浮世風呂 第四編卷之中 「男湯の卷」

江戸戲作者　式亭三馬戲編

●ぬきあげたる額にて、髪は豆本田に結うたる男、もつとも近眼なり。鼓八、▲金持の息子、放蕩から若隱居させられたる男をつくづく見て、鼓「あなたはモシ、丸微さんではござえませんか。」丸「ヲヽ、おヽ鼓八公か。」鼓「イヤ是れはお珍らしい。」ト、御出に横手を打つ　丸「一別來だの。」鼓「モシまあ、どオうなさりました。きつい事でござえますネエ。私も先刻から何でも丸微さんだが、トぞんじましたけれど、御存じの近眼でござえますから、よつぽど思案いたしました。」丸「いつも若いぞ、おらア昔の俤もなし、當時おあごがひときてゐるから、はたせねえわな。錢が遣へねえので、據なく老實さ。」鼓「嗄しい。」丸「ハヽ、久しぶりで、貴公の嗄しいを聽いた。」鼓「アッハヽヽヽヽ。」トき二まあ、お噂ばかり致してをりました。貴方は一頃、浦賀の方へ御出でなすつたト」丸「さうさ、緣家が多いから、方々へ左遷されたのさ。」鼓「ソコデ、御本家の方へは。」丸「やつと一昨年から歸りやした。」鼓「お跡は弟御樣で、貴方はマアお若隱居。」丸「マアそんな趣さ。」鼓「併し野暮でねえネ、ホンニ御新造さんも御機嫌よう。ッシテ貴方が左遷の間は、御新造さんはどうな

ざいました、お宿におかへり、お里におかへり、土の中、米の中、おや[illegible]掛けまして、
どうもならねえ。[illegible]女房は、尼將軍の指圖で里へ預けたのまゝ、今更可哀さうだ、[illegible]
な遣つて、面白いおもひをなすつたから、いゝ分[illegible]、御精進[illegible]天下
只今は御本家から一切まかなひで、御家内お幾人、[illegible]下女、下男、小僧も入れて夫婦[illegible]人
結構だねえ、それで年中は御本家から仕送り。[illegible]小遣として[illegible]月々
々十兩、[illegible]結構な御身分だ[illegible]月日の下でお生まれなすつた、其上
にまだ御不足か[illegible]慾には頂なしだで[illegible]ハ、、、、[illegible]我
見ても久しくなりおかね、ハ、、、、[illegible]大に來りました[illegible]世の中に大概[illegible]
はございません、此の手古持ち[illegible]古く馴つたばかりは、古物の稽へ[illegible]書事[illegible]
内が勝利を得ます。何でも血氣盛りな時分は、お客の腹を[illegible]向構に[illegible]先
面白く馴つたものでございます、[illegible]投を目前に見えて、少しおかるく[illegible]
やがお客のお鶴になられ[illegible]とかなつて、客人もいいと云ふ氣になります[illegible]客人にも[illegible]
ろ奴でございます。ソシテまア、見た事聞く事が、萬事古くなつて、己が氣で何處が可笑しいかと、
おつに控へ目になつて參ります。爰でソレ、氣で氣を叱る樣になりますから、する事なす事、皆其の

やうにやァ參りませんわス。一寸お辭儀の百疋が、あはふく三座敷も重なると、てんと面白くでサッサト乗り出した物でごぜえましたが、今ぢやァモシ、お辭儀でもあると、まァ身上の足しにせうと思ひますシ、さうなるとお辭儀も無しネ、へ、、ふくした物でごぜえますヨ。イエサ、客人も其の通りでごぜえます『潮來を謳へ』とか、『廻り潮來にしろ』とかネ、『聲色がいゝ』の、『歌祭文が好きだ』のといふお客は、取りふりごぜえます。聲自慢で御自身に謳ふ客人などは、とつ摑まつた歌妓や、三絃ひきのみじめを見るばかり、拇開高で見物、ハ、、、、お前さんの前だが、最うモシ、お前さんがたや、穿里さんの様なお客おやァ、骨が折れますヨ。ハテ、おつなお話ばかりしてるのだから、取外すと寂しくなりますヨ、イエサ野帮間などと申すけれど、野帮間でも、勤めぬける事は難うごぜえますヨ。ハ、、、、」まつ「饅頭庵や、砂糖坊主にどうしたの。」ミ「此間久しく逢ひませんヨ。」たこ「息微ひ、お前さん一枚を、大勢の取卷で、通夜大飲といふ洒落が度々ごぜえましたつけネ。」よる「奢る者久しからずさ。今ぢやァ手も出ねえ。トキニ、けふは何所へ往くとつて此の湯へ來た。」ミ「宿酔で。」と、胸を叩き「爰が痛うごぜえますから、本町の方へ寄つて、金勢丸を會所めかうと存じましたが、不圖此の湯やが目に付きまして、汗とりに這入りました。」よる「爰であふも他生の縁だ。」ミ「悪縁だねえ。ごぜへませんかッ」よる「うまアねえ、一寸おらが内へ來な。直に此の横町だ。酒は相變らず樽酒だから

妙上ばかりの通人めかしいのじや[illegible]それは見くるしふございますたいてい此の辺[illegible]

ア、不粋通りなりが[illegible]イヱ、[illegible]あり、黒塗に蒔絵の巻煙管で、請負仕入の[illegible]一本、一体に

何にもなしの蘭繁、見通しの平骨で後ろ[illegible]の、煙管、[illegible]

そんなこと[illegible]二ア、あの[illegible]て居る[illegible]のうち[illegible]

も遠からずすむ[illegible]此間になつて、お前といふ[illegible]

人が前揃の股引を直裁で、綾羅の月見[illegible]ことごとく[illegible]

い。よ、あの時は、[illegible]で迫つて来た時だ。[illegible]

看板となりましたぜ。きついもんだ。[illegible]

ねえ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]て、[illegible]入れたと、[illegible]名にしおふ[illegible]

ねえうな事。[illegible]エサ、遣へ得る者一人も無し。[illegible]一番にお手際を見せ[illegible]た。[illegible]

玉どのを見るト、こゝが可笑しい、ソレ、何でござえさアス、白玉を一齊に入れた奴だから、一面にどろ〳〵して、一向箸にも懸らず。イヤどうもモウ、腹筋でござえました。イエあの時代は、肥腹な事がいけねえことでござえましたよ。」すみ「それが今おやア舟といふところが、二文で渡舟に乗るばかりさ、りやう國から施餓鬼船にでも乗りやせうか。」三「へやつかましい、墨微さん、どうもならねえ。」すみ「イヤ、ほんに跡月乗つたわエ。寺龍のをかこつけに、屋根舟で出やした。ひさしく向島へ行かねえから、舟を白髭へ著けさせて、寺島の鞠寺和尚が庵へ寄りやした。」三「エヽなるほど。新梅屋敷。」すみ「アイ梅が屋さ。」三「あの庭は大分よくなりましたネ。」よろ「和尚が丹精するから、園はよくさなはつた。四季ともに景物があるから、百花園と呼んでも悪くねえ。」三「私も春の梅時分に、和靖さんのお供で參つたが、茶碗を貰ひましたつけ。」よろ「ム、、椀中一はいに梅の輪で。」三「外に壜の内さまの納傘といふ字行で、銘がござえましたぜ。」よろ「ナニサ、隅田河花屋敷器々。」糸底のなかが、百花園梅屋菊塢。」三「大明何とやらトある所でござえますネ。」すみ「大明宣化年製かの。へ、、此間七草考といふものを持つて來て呉れやした。」三「へイ。なにか焚物でござえませう。」すみ「ナニ七草の考へさ。」三「ハテネ、どんな弁でござえませう、まだ時花り出しませんか。恐らく流行物なら、「わたくしどもが知らねといふ事は無い筈だがナ。」すみ「イ、エ、それおやアねえ。秋の七草の考へさ。

「ハヽヽ、秋もきつい、唐土の鳥に［illegible］昔あつたつけ［illegible］

七草、七種の七草［illegible］、其の種［illegible］

さ。」三「へ、エ、それはこつちの構には、チト遠通じ。ハヽヽヽ。」すこ「トキニ、［illegible］

う」［illegible］勿論［illegible］けふは肴があればいいが、魚類が来ぬ［illegible］

［illegible］ハヽヽヽ［illegible］

［illegible］

［illegible］

お下中［illegible］

［illegible］

［illegible］▲上方下り［illegible］由良の介［illegible］

拙者は五十年の月日を百年に［illegible］昼寝した［illegible］朝寝した［illegible］五十年の月日を［illegible］

［illegible］、顔合して見ると、二十五年にはかないわい。早起［illegible］五十年を百年の割に［illegible］

［illegible］、七十五年の年齢を延ばする様なもの［illegible］人の［illegible］浮世でやさかい［illegible］

留めた［illegible］いわい［illegible］お前に頼んで置く事があるが、別の事でもない［illegible］

る物奢らず。所帶の爲になる女子はあるまいか。私が嬶に持ちたい。其の代り只は使はぬ、鼻紙代として、錢五百づゝ月々に遣るわいな。ナント出來さうな相談ぢやがな、有つたら世話して下んせ。ヤモ獨夫もほつとするわい。まだマア宿這入りして、六十日そこらぢやが、あかん／＼。マア聞かんせや、朝マア起きるわ、能いか。ソコデ、お目覺めがあると、殿さまお手づから手桶を下げて、井戸邊へお出でがあるぢや。サア水汲んで來ても盥はなし、杓から片掌へ水を請けて、ごし／＼とお顏の摘み洗ひぢや。掛竿が一つぢやによつて、手巾と雜巾と取りちがへて、顏拭く事がなんぼも有るぢや。」はんとう「エ、きたな。」けち「それから闇がりで引窗明けるかい。まだ星あかりなら能いがナ、雨など降つて見やんせ、ひきまどに障子が無いさかい、傘を。」ト、手で仕かたして「上な方から窗へかぶせるわい。トツトマア、芝居で云ほなら闇試合の身振りして、ひうち箱探してナ、まづマア火い焚き付けるわい。恥いはにや理が聽えぬ、まだに茶釜も釜も買はぬ。天にも地にもかけがへない古鍋一つを賴みとするぢや。茶は土瓶 土瓶の瓶は清みこよみ給へ 一日三界餘る。こりやマア能いわ。サア汁ぢや。こりや又えらう好きぢやけどナ、勿論擂盆なし、又有つたて、獨身だけの味噌なりや、擂槌と擂盆へ皆付いて仕舞はい。ぢやによつてお汁の代りに、飯は味噌菜ぢや。ハテ味噌を嘗つて白湯を呑みや、はらの中で能え加減のお汁になるぞい。」はんとう「ハ、、、。」けち「マア焚く分は焚くにもせい、跡をとり始末するが

銭ないさかい、其のまゝ発たらかして、ナイト商ひおやいな、儲でけんと元りもせぬさかい、こちらも一人宿の[illegible]
たわいないこつちや、行く末が[illegible]も無けれやア、一寸元の[illegible]入れしたがりのうちに、なんの[illegible]直いま
戻りました、今日もまア[illegible]、隣の家へ挨拶いふて、預けて置いた鍵を請取りにこ
のあた鍵を預けるのと云うても、裏借屋は。ト、口を指「これまが、頃いわいナ。[illegible]
ふしは、あたりのある跡なら五ッか、ぐッとはずらば、[illegible]くわりの安う三十八文でも遣らんならん
「[illegible]「それがはずでかたつ」[illegible]「はずでもあるまいか。遣らいでも能い所へ遣るのがつゞかい、は
ずんだやア、又、人に施して悪うは報はれへ。向ひの嬶や隣の絲まで相手にして、阿房臭い
大きな寒さで、[illegible]気い付けてくれるわい。[illegible]
のといふて、本間に[illegible]わい、ハヽヽヽ、わたしは[illegible]
半推賃うたら遣方がない。餘つて犬にや遣られず、さうかというて、皆食た所が、没立たれ事[illegible]
大切な[illegible]一つ買うて、腹を悪してるのも、[illegible]
う噂喚びたい、ハヽ食物までは寛い。あまり蓮葉で悪い、じつとりとした女子が育つたら、世話
してくだんせ、御當地の女子は、言語の激しい故か、物事が荒う聞えると、可愛らしい口つきも、
髪たら、箆棒だの、いふ所見しや、私が[illegible]は、一見して[illegible]、[illegible]

に倦いた〳〵。」最初は其樣にも思やせなんだが、此の頃といふたら、聲を上げたわいの。ハヽヽヽヽ
ドリヤ、うちへ往て晝飯の支度などせうかい。」やゝ「能え所へ八百屋さんが見えた。オイ、コリヤ〳〵、
八百物屋さん、〳〵、ちよつと待つてくだんせ。」ト、呼べども聞えず。なんとう「そんな事をいはずと、荷のなかにあ
るものでお呼びなせえ。」まち「ハア、さうかい。ハテナ、おやでて、色々な物があるわいの。ハテ何を
呼ばうな。オヽあるわ〳〵、鴨瓜よ〳〵。」なんとう「鴨瓜といふ物は見えねえ。」まち「ハテあるわい
な。」なんとう「どの樣な瓜だね。」まち「青い色の丸い物で、白う粉のふいた物おや。」なんとう「ム、、そ
れは冬瓜だ。」まち「冬瓜かれ、アヽ、とうぐわんだがやあるまい、冬瓜でおますに。」なんとう「マア〳〵、そ
んなことを云つて居る間に、前栽物賣は往き過ぎてしまふ。」まち「ハア往き過ぎたら買はぬだけの德ぢ
や。」なんとう「ホイ〳〵、最うけへらねえ。今度から呼ぶなら、代物の名で呼びかけなさいまし、萬品
あつても、其の内の一種をよぶのさ。」まち「すツとみなまでいはんすな、込んでゐるに。人が所へ、又
まち「ヨツト來たぞや。コリヤ〳〵生姜よ〳〵。」青物うりやをうけて「アイ、わつちかね。」まち「ハテ、おまへ「ハこえ
らいよ、鶴の一聲おやつ。」なんとう「生姜を生姜が買ふかいなア。」まち「生姜とは、お前のやうな
若ねえ人を、生姜と申しますこ。」まち「又いふかい。」青物うり「アイ、何を上げやすね。」まち「ヨツト待
つたり。待ちなさいや。斯うおやにふつて、待つて下んせやといへば、青物の荷をおろして、商人まち「何

なト上ゲやす。生姜かえ。このやァお前、大束だァ。大束がなんだら、此の下に小束もありやす。皆お前、撰りだァ。孰にしなさる。」けち「イヤ〜〜、まあ生姜は置いて下んせ。」商人「白瓜はどうだネ。唐茄子、十六大角豆、冬瓜、越瓜、茄、茗荷、青唐辛子、その外見なさる通りだ、たんと買つてくんなせえ。けふは節供に、荷が勝つたから重たくつてならねえ。」けち「ドレ爰に荷へ置て下なせえ」商人「おかみさんを呼ぶのかえ。」けち「物食はお喚たら呼ぶ気だらう。」商人「おきやアがれ。何で待つ間が有たよ。」けち「イヤ一寸取つて来らア。」商人「置合か、のウ。」けち「イヤ〜〜。」商人「なんだネ。」けち「秤と算盤との江戸者の商人に言ふごとく、上方者の買人に言ふごとく、爰の家さんの、物置すの分る勘定は、買人と買人と取り違へるやうなりこ。」商人「秤や算盤で買つて居て開尺に合ふもんかエ、あてこともねえ。お前知れ切つたもんだわナ。能え加減に値を付けて買へなせえ。」けち「商人が秤と算盤で買ふに、誰が叱らうざい。」商「そりやァお前、上方の事た。前栽物を買ふに、そんな真似エしちやアゐられねえ。上方で買へなせえ。おらア売らねえ。」けち「コレ〜〜八百屋さん、其様に云うた物じやない。いかい何うしやや商ひは出来んわいの。そんなら能いわ、何なとマァ、御当地に馴つて秤も在るわ。摂文算盤も持たれわ。能いわえ。併しお直段はチト直切らにやならんぞい。」商「そりや、直切んなせえな。売物買物だア。」けち「サアサ能いわ、腹立たんすなえ。此の唐茄子何ぼ。」商「ネイ、是れになせえ、こ

りやア砂村だア。いつくらも持つて来るが、斯ういふなア無え。わつちらが持つて来るものは、本の事だが、出が違はア。」けふ「ハアハ、そりや知つ居るわいな。こゝな菊座の大きなが能いげなな。是れなんぼ。」商「ハイ夫れで、掛直のねえ所が、三十五文にして上げよう。」けふ「ヨカ。」ト、して愕り「えらいなえらいな。三十五文とはえらいぞ。」商「そんなに愕りする直ぢやアねえ。四ッ目へ往つて見ねえ。本つはやりで、からつきり買へつけられねえ。」けふ「四ッ目にさうぢやあるが、わしがはうの相場は、斯うぢやによつてト、十、八文。」商人物をいはず けふ「そないにびつくりする付けよぢやあるまい。四ッ目へ往て見やんせ。」商「へゝあきれらア。」ト、荷をかたげんとする けふ「ヨリヤ〳〵待つてくだんせ。八文にはゆかんかえ。」商「買へるなら何束でも買つてもれへてえ。」けふ「ハテそないに氣いみぢかくいはんすな。まだ相談があるわい。八文に引けさ九文かえ。」商「外を聴いて見るがいゝ。」けふ「外ぢやが快うない、お前のを貰ひたい。」商「是れでおりや〳〵が二十八文だ。夫れで氣に入つたら買ふがいゝ。あんまり賣りたくもねえ。」ト、行く けふ「コレ〳〵〳〵八百屋さん〳〵。まだまア相談がある。コレ〳〵待たんせ。」商人ふりかへり「夫れで買ひなはるか。」けふ「イヤサ、そこが御料簡物ぢや。モちつと御勘辨がありそな事ぢやぞや。お前も商人ぢやないかいな。賣る氣が無いなら宿にゐやんせ。賣る氣ぢやさかい此様に暑さもいとはず、重い荷を擔いで出るわ。ハテ、三十五文から二十八文に引い置く、そりやはや現

銀が有るなら、お前にはよからうけど、此方にはチト工合が悪い。サヽ思ひ切つて十丈[illegible]
に行き[illegible]▲[illegible]口[illegible]八日目[illegible]前掛で行
きや何所までも追はへて[illegible]因果[illegible]
の[illegible]十丈に手を打た[illegible]
のや[illegible]
に[illegible]高座[illegible]「[illegible]」
[illegible]「[illegible]」
「ヤ[illegible]」
口十丈になつて高い物を借り込んだが、[illegible]
[illegible]「サ、能いわいなア[illegible]お前、本が閑暇で六つに使い[illegible]
八丈にも登らねエ[illegible]行つて[illegible]
に買ひ言つたら、高々二丈だらう[illegible]世間並に負つた[illegible]十二丈[illegible]
[illegible]お前に而[illegible]三丈[illegible]
[illegible]気のどくだから[illegible]何ぞ買うて[illegible]

此の茄子はなんぼする。」商「最う後生だから離してくんねえ。商人だから賣りてえけれど、お前にかかつ居ると、外の商へたゞ爲損ふ。」けち「是れはきつい御挨拶ぢや。無錢でも貰ほと云やせまいし。私もお前に逢うて、先刻にから頭割らした、未だに心がドツキ／＼と云うて、腹な蟲めがグイ／＼ぬかすわい。」商「サアそんなら下から這つて直切るめえぞ。掛直は云はねえよ。」けち「サアいはんすな。何ぼ。」商「漬の方か。」けち「イヤ／＼、焚くのぢや。」商「焚く茄子も可笑しい。」けち「何ざいうてかい。焚いて食ふわいな。」商「江戸では煮て食ふと云ひやす。サア／＼漬へ茄子なら是れがいい。」けち「漬けるぢやないといふに。」商「漬へ茄子よ。」けち「漬へ茄子といふちや紛らしいわい。遣ひ茄子といはんせ。」商「何でもいい。早く極めねえ。これが三十五文だ。」けち「ヤ、又三十五文かいな、お前は三十五文が好きぢやナア。」商「それだつて三十五文だものを。其の代り十で其の直だ。」けち「ハ、ア、おおは唐茄子で三十五文、こりや茄子十で三十五文、きつい逆樣ナ。」商「掛直はいひやせん。サア／＼早くしねえ。晝前賣り損つちやア、此方の身上に係らア。」けち「ト先づ叱るかい。」商「叱るぢやアねえが、お前達に係つ居ちやあ日が暮れらアな。あて事もねえ。」けち「ハテそこが商ひぢやわいな。商ひは倦きないい樣にせいといふ理窟ぢやわいな。」商「サア／＼何でも能いから、否なら止すがいい。サアサア錢をくんなせえ、馬鹿々々しいわナ。途方も無え。物見遊山の慰み物ぢやアねえ。ほんの事よ。

何）呆れもの、賃銭でからむぢやアねへ、蟲をこすつて貰ふけれど、此方もまた、知恵同士の事で[illegible]
[illegible]は、貴様の様なつぽうやつにやア、何のつめに[illegible]で打造つて置く[illegible]
[illegible]いつに[illegible]流れ[illegible]の野暮な能[illegible]
此方にも[illegible]相応に[illegible]ト、頭を[illegible]こして、たきこつぞ[illegible]
うて[illegible]世に[illegible]一杯[illegible]一つの[illegible]
何のよ[illegible]
ともいはぬのい[illegible]
れ[illegible]
であ[illegible]
張[illegible]
よかれ[illegible]
た[illegible]三十[illegible]三十[illegible]
ん[illegible]いうた[illegible]何でも[illegible]
と、[illegible]ねへ[illegible]つけた[illegible]

イ傳公どうだ。」傳「オヽ、勝んべいおぢい、賣れるかイ。」勝「いかねえ。ヨウ聴かつし。先刻からナ、無躾ながら、此のぼくねんじんに捕まつて、みじめエ見るぜ。エヽ、途方も無え。」傳「お猿が守たナ。」勝「嘘アねえ、能い日な食ひ合はせたア。けふはあれんだ。」傳「何ある物か。川岸やア盤臺が土用ほしだア。ヘンいいくさだはけおやア無えか。」勝「けふら乾魚を賣つ居るやうぢやア、縮まりやアわりいナ。」傳「何も賣物が無えからナ、まんざら遊ぶもこけ／＼として居るシ、四日市まはつて、此様なものを買つて來たア。へ聴かつし、一昨日は鰹が頭で、たつかれた四百五十文、落ちイ行つて、やつこ(二百五十文)ぐれるなやつが、けふは頭でぱんどう(八百文)から上だ。落ちでもの字位よ。だれであたまの次を一寸ほど打遣らうといふやつだが、其のくせ羽が生えて飛ぶぜ。おつそろしい。」勝「下物も無えの。」傳「殻つ濕氣よ。下物賣ア、だこいといふ日だ。鯛を一かこ見當つたが、たかノヽ買へつけられねえ。能く勘定して見ると、是れア前しいやつが五枚手に付かアス。あたまで賣りやうが無え。」勝「なぶりは無えか。」傳「所在ねえ。けふは精進がためだから、本直になつてや出入場へ持つ行きてえが、無えにやア協はねえス。きのふ大津のなぶりを賣つたら、方々で持つて來いといふから、川岸イ往つて見るとお陀佛ス。銚子白里三浦岬が見えたつけが、高くて俺が手にはいらねえ。あいつも松葉いぶしの面の悪いやつはナアソレ。」勝「さうよ。大かた夕川岸が來べい。」傳「ちつと計り來た分に

やア、トキヤレの間にあイりだ。江戸前物は薬にしたくも無へ。」ぶた「盆はいつも腐気だよ。」ぶた「前栽
ものゝ、気骨が折れねへで。」よそ「こつちの台所の菜根みたいなものは、通り、とつは…の側に、ままよ
錢を出さねへとき、こおろから、がしずだらく。」ぶた「それならのさア。」ぶた「晴出しねへ。」ぶた「ヘヽ
ト、魚うりは、行かう　よそ「ヘヽ魚屋さん、その乾魚はなん程でござい。」ぶた「何十ついてゐる
といふ事をいへ。傳公、湯まへと終へねへぜ、めらの乾魚等、一生後ついても食へねへ徒だ。かも勝手行かつし、百姓
た。百姓だ。」ぶた「おひやくしやうか。」ぶた「へ、ちつと行　ぶた「ヘヽ待ちたへ。乾魚を買ふ
ぞい。」ぶた「マアを一昨日から極めなせへ。」ぶた「本町通へ往つて来やせう。」ぶた「ヘヽこなたも能いか
ハヽさて、御当世の商人しのはえらいぞへさア。」ぶた「そんなことて所詮お前たちに商は成たね
え。何んで立たんでいる。乾魚なら頭から骨まで、むりくいと咬みくだいて見しよ。其様な役にたん歯
なら無いわい。」ぶた「十二十錢づゝのことさ。」ぶた「なんの様な重でも、錢は変らんわい。」ぶた「ヘヽヽヽい
よいよ百姓だ。」ぶた「わしや商人ぢや。」ぶた「えんな間違だ。ヘアヽ、茄子なら。」ぶた「お前の話す
るうち、くんくと待つたさかい、直切つても大事ないす。へヘ待てよ。このやまうち十直切らん
ぞや。江戸子の物買ふやうに、大風に買うた所がと。」ト、小声で「半分直」ぶた「いゝ」ぶた「半分
直ぢやわいの、二十五文を二進が一十ぢや。」ト、江戸子は素足ちやみか、なまおかい、何のこ

んだ途方も無い。おきやがれヱ。」ト、上方言葉の江戸訛は、おつな所をひつぱりていふなり。商「ヘヽおそろしい。チヨツあんまり業腹だ。負けてやるべい。」けち「ヤ負けたヤァ〳〵、ヤァ〳〵、それやマアほんまかいやい、八百屋さん、おまへ實性が。テモさても直にならんしたナァ。サテト。」ト、暫く考へ「イヤ待てよ。直にならんしたは能いが、江戸子の聲色つかうたばかりに、高札で落した。ハツア情ない事ぢやナァ。わしが實正明白也といふ、實々ほんまのところは、七割引ぢや。」商「たま〳〵直が出來たら小便か。」けち「イヤイヤ買うて置く。なんぞいうてかい。君子二言なしぢや。」商「一百も算へやうがネ。」けち「ヤ。」ト、びつくり商「五十かヱ。」けち「ヱ。」ト、びつくり「そないに澤山買うてどうせうぞい。」商「ハテ安いもんだァ。此の茄子はお前、駒込だァ。ほんの事よ。山茄子だから種は無しか。」けち「コレ〳〵能う云うておかんせ。本所茄子持て來るとナ、種はあれど焚いて食たら、山方の能えといふわいの。お前方の口も自由なもんぢやナァ。」商「ハテさういひなはんな。山の手の甘え事は。」けち「サ、そんなら能いにもせいさ、マァ數の所ぢや。エ、ト、三十五文の二の段ぢやさかいに、ト、三十の十五に、五文の二文半で、十七もん半となるナ。ム、能えわ〳〵。」ト、かんがへて「一ごてしての數は。」商「いくつ。」けち「三つ。」商「エ、。」ト、餘りの事に惘りする。けち「なんで其樣に仰天しなさる。」商人、あきれて「二つか。」けち「ナイノ」商「たつた二つかヱ。」けち「されはいの。」商「二つばかり賣れるもんかネ。人を馬鹿にしなた。」けち「二つぢやとて賣れんとは

どうか[illegible]賽の目を合せて、其の前で[illegible]やらうとは、[illegible]

つて三つは己が[illegible]つて買へれ、[illegible]一の六賽を[illegible]

やれいつも[illegible]

かんなで[illegible]べらぼう[illegible]ひとあとつて[illegible]損が[illegible]

往[illegible]この賽のやうに[illegible]

い無惨かと思ふ[illegible]無駄だ世話、これや[illegible]其の中と、[illegible]

あ二つ下んで[illegible]能いわす、これや[illegible]

能う負けるつもり[illegible]お前にも、祈り毒性な事いはねばならぬ、一體の[illegible]

然し[illegible]無駄と取つてくれ、一、二、三、四、[illegible]

むさから、四四の十六文、ソレ能いかえ。[illegible]

驚く程も無いわい、半分[illegible]お前の[illegible]

が方にも後家には無いわい。[illegible]私に五分の徳があり、お前に五分の損であれど、これも[illegible]

自然の[illegible]お前に五寸な[illegible]十六[illegible]

それへお前のたくれハ、、、、、、能う負けさしんにす。[illegible]改めなされや。ひよつと[illegible]

交つて、掘り出したらお前の耳たぶ、ソレ、銹びたれども破損は無いぞや。」鳥「アイ。」ととり、錢を「ヤレヤレ／＼とんだ目に逢つたぜ。ばか／＼しい。」けち「何の飛ばうぞい。是れ程飛ばん事は無いに、ヤコレコレ其の籠の端にあるは何ぢやいナ。」鳥「是れかエ。こりやア何茸とかいふ物さ、ナ、それ／＼、舞茸とかいふ物を乾したのだッサ。こりやア前栽の籠にあつたのだから、錢は出さねえ。竟ぞ見た事はねえが、奇らしい茸だから遣らう思つて持つて來やした、お前欲しかア上げようッ。」けち「ナ、夫れ下んせ、無錢なら百でも貰て置くわいの。」鳥「サア見なせえ。おつな茸だぜ。しめじとも違ふが、椎茸でも無え。」けち「サ、舞茸ならちがふ筈ぢやわいの。コリヤ忝い。が八百屋さん、最そつと負けてくだんせ。」鳥「エ、。」ト、つくりスツパ「ハテお前、一つある物をたゞ遣つて、其の上に負けやうがあるもんか。」けち「サそこぢやテ。此の舞茸を貰うて遣るかはりに、そこな柚なと一つ負けに置いて往かんせ。」早速吸口と仕るぢや。」鳥「あきれもしねえ。」ト荷を擔ぎ行く、● けち助あとより大聲あげて、「八百屋さん忝い。能う負けてくだんした。コレ禮は云はぬぞエ。ナイ八百屋さん、心でをがんでゐるわいな。ハ、、、。」はんこう「けち助さん、大きな聲だネエ。私等が門首で怒鳴る聲が、二三町は響けやせう。八百屋だらうが、前栽賣だらうが、お前に捕まつてはいかねえ。どうしても上方者は細作ねえぜ、人をばこゐりとさせるネ。」けち「能うこゐりせうぞい。ノタが何事も氣い長うせにやゆかぬわい。コレ見やんせ。こ

[illegible]

イさやうなら。」

諢話浮世風呂第四編巻之中

諢話浮世風呂 第四編卷之下 〔一男湯之卷〕

江戸戲作者 式亭三馬戲編

初編に出でたる、よい〳〵病人ぶた七、汗じみたる白地の浴衣に、子供の腹掛をかけ、片ちんばの草履をはきて、意久地なき形に片手に精靈の備物を持ち、片手に盆の燈籠を提げて來る。ぶた七「婆樣だ婆樣だ。しよ、しよ、三途川の婆樣だッ。ヤどつこいナ。」ト、入口を跨ぎ、「番頭樣、どう〳〵、どうだ。大分大分あち暑いの。エヘエヘ、、、。昨日の樣だ、昨日の樣だなう。菖蒲湯、々々々。」ばんとう「何よ。」ぶた「速云ふ事よ。菖蒲湯、々々々。」ばんとう「寒いト。」ぶた「ナ、何、何、菖蒲湯よ。」番頭やう〳〵きゝわけて、「ムム菖蒲湯か。さうさ、速い物だよ。」ぶた「昨日、昨日、昨日樣だ。」番頭「さうさ、昨日の樣だつけ。最う盆前と爲つた。」ぶた「雛菖蒲に爲んな、直たまだ。」ばんとう「夫れよ。雛が菖蒲に爲るのは直さまさ。」ぶた「滅法だ〳〵。七夕樣の跡、跡、跡の祭。精靈、精靈、精靈樣だ。イヒ、イヒ、イヒ、、、、。」ばんとう「澤山貫ひ込んだの。」ぶた「後生願だ。ヒ、、是見たア、たまねえ〳〵。なんと妙法蓮華經〳〵。なむ、ほねぎよ〳〵。〳〵。お題目の書いてある燈籠だア。安かねえ。御祖師樣のお書き遊ばつたのだ。安かねえ。十二文だ。」ばん「お星樣の書いた蓮華なら、お月樣の書いた泥鼈が居るだらう。」ぶた「勿體

れ。[illegible]かならはんねんぞやう／＼／＼。お祖師様、／＼、御免被成まし、あんな者に[illegible]
とつな、諸法師だ／＼、お上人様さうおつしやった。謗法罪々々。」ばんとう「謗法罪いらつしやい。評判
で評判でっ」ぶた「勿體ねへ／＼。コヲ／＼番頭様、これ其所へ置て咲ねへ。勿體[illegible]
に勿體ねへなあおつけねへがいいぢや」二後生だ／＼」手元を[illegible]
ア、[illegible]大きにかく／＼。離すまい／＼。[illegible]お題目、ぴん／＼はねからの髭題目、お祖師
たまのお髭で、お書写遊ばつた、の、髭題目、ぴん／＼はね居る。」ばんとう「いまとの立てのお題目だ
からぴん／＼はね居る。」ぶた「勿體ねへ／＼。ばちがあたるぞ」「是れもはね[illegible]だ。」ト、あがつて來る
[illegible]ぞうだ色をとこ[illegible]ぶた、うれ「[illegible]、、、。色男、鯛ぞえんねへ[illegible]
う大鯛は[illegible]顔に小さい大鯛をいふから色氣がねへぞ。コウ[illegible]、此[illegible]これは
来たうに、日律も違つて來たぞ」ぶた「最能い／＼。御題目、百日の日課、日課だ[illegible]で、
な、さ、滴らし見やア、見やア、大丈夫なもんだ」[illegible]「ひさしいもんだ。又、[illegible]の
はよい／＼しおやアねえ。他の事だらう」[illegible]「よい／＼、[illegible]よい／＼おやねへ。[illegible]
[illegible]だよ」[illegible]「[illegible]だらう」ばんとう「[illegible]がやアねえか」[illegible]「[illegible]の／＼、おら氣[illegible]、おら氣が
やアの、色の消だ」[illegible]「[illegible]によ[illegible]氣がさがれ」[illegible]よい／＼

ではあるめえが、鼻毛をチトぬいて瞼を掃除すればいい。とてもの事に、洟を拭んで歯を磨いて貰ひてえナ。其のスウ／＼と吸り込む音が何分気障だ。」ばんとう「眞にさ。あつたら色男を最うちつと気をつけるといいネ。」ト、口上にしたがひぶた七は、眼瞼を袖で拭ひ、懐から塵がみを出して、洟をふき、生まじめで居る。ぶた「鼻毛ェ、伯母様にぬかせら。歯は鹽で、／＼、たはしを掛けて、の、の、よかろ。」唐「たはしにも及ばねえス。三馬が所の歯磨にするがいい。」ぶた「五十のか、／＼。」唐「さう為さつし。さうすりやア歯に玉だス。なう番頭、惜しい色男を遊ばせておくぜ。」ぶた「ほんに、惜しいか／＼俺も、惜しいと、思ふよ。サア／＼這入ろ這入ろ。」ト、よたり／＼しながら、石榴口に至り、入口に掴まつて屈みながら、石榴口のまいら戸は黒塗にて、ぴかぴか光る故、ふつと心づき、わが顔を写して暫く見てゐる。此の内の顔付いろ／＼様々にをかしみあり。ト、、仰向いて鼻の穴を透し見て、鼻毛を見る。唐助「豕公、大分見えばるの。水鏡といふはあるが、主のは塗板かゞみだ。」ぶた七ふり返りてにはかに気の毒になり「イヒ、、イヒ、、、。」ト、くゞりながら、「オイ御免ねえ。コウ／＼、しりい除けねえ。己が御免ねえ云たら、返答しねか、／＼。イヒ、、イヒ、、、。」[illegible]返答は十文で這入た。そ、そ、そりや錢湯ッ。」[illegible]「すや／＼ぶた公、上方唄か、たまらねえぜ。」ぶた「たまれ／＼。」[illegible]返答は十文で這入た。そ、そ、そりや錢湯ッ。」[illegible]錢湯はたかゐに居る。そりや番頭。」目八「番頭舟漕ぐ。そりや船頭。船頭は撞木杖、そりや撞木。」[illegible]「撞木は池に住む。そりや金魚。」目八「金魚食や若布る、そりや人魚。」[illegible]「人魚月並に會所で押すのが、そりや印形。」目八「印形樂[illegible]い、そりや

隠居「ム「隠居」、なる、それ、何ぞ、何とか、何とした」「隠居それでそりや致方」もまだ
一中節や金平浄瑠璃ふもと」それやから義太夫はどうなつたものと、それで、
ハヽヽ、おの、おの、おのへ諸やて、それから唄ふ時、流れ合点ですよ、ハヽヽ、
に、ほう、それは早いのに、宇治で「月八景」がたつた流行唄は、言ふ人のないのに
投げくすと、どうかしてすべて上方唄は品がいい。江戸は、半太夫、河東、此の二つは尤も
で、流行唄も諸国へいり込んだのが、下卑て田舎節が流行るやうになつたのさ。「語ざ」唄ひなさい流
行れては物になるまい長唄のめりやすなどは田舎の流行にならない、誰も目立つ物を
て、今の田舎唄は、唄で目に見えるやうだ。本来の端唄ふには、その心持でいふこと
テヽ、ツン、シヤン文句などに下卑をつけて、ヤアそれも事だらけだ。よそながらも、思ふ程
潮来節などといふものが、その外でも思ひもせぬが、廃りきに流行る、是れも一旦は流行りす
た人には何にもねえが、若い人の目先に見えぬ内に、まアうかれしかなけりやア小唄
来曲は気障だの、気障だといふ通の者も、若い時分に矢張りすいたのさ。詩作でも字をよい人
も、前髪のあつた時代は、唐詩選や明詩選を読んで、唐詩選や明詩選で詩を作り習つたもの。東坡だの
が絶だとか、奇絶だとかいふ人も、当時いつそ一句も上で出来た所だから、初手は気障な通も同じ事さ

さ。イヤ潮來曲といへば、此の頃も爰の湯で聽きましたが、近頃の文句は、冠辭のつく唄があるネ。」やゝ「冠辭とはエ。」且「冠辭と云つて、俗にいふ枕詞の事さ。」やゝ「ハエ、ハテネ。」且「傘の骨になるまで何とやらといふ詞を受けて、下の句に、離れ〳〵とかいふ事をいひましたつけ。ソレ、傘の下冠辭をおいて、骨と續けて、下の句に、離れ〳〵などといふ所が、イヤ恐れ入つた事さネ。眞淵さんが、今時ござつたら、朝來風とかいふ歌をあつめて、別に冠辭考が出來やせう。ハヽヽヽ」潮來は潮にあらず、朝なり、朝來なりと云々やゝこのこと根から悟らず「さやう〳〵。」ト、はかりうけてゐるところへ、おはいり〳〵のお俳助といふ呼名のある男、石榴口より入り來る。これは話しあひに甚だ丁寧をつくし、すべての事に、おの字と樣の字をつけてものいふ癖ありやゝ「ヤ俳助さん、おはやうございました。」俳、聞くにもおかまひなしはなを逆しみて「ヤ是れはく、闇雲屋の吉郎兵衛さん、おはやうござります。はやおけつこうなお日和さまでございます。お前さんはいつも御おやうぶ樣でお仕あはせ樣でござりますぞ。ハイ〳〵。此のお天氣の御都合はまうし分なしぢやが、お暑さはどういたしたものでござりませう。」やゝ「さやうでございますネ、兎角殘暑が强うございます。」俳「ハイ〳〵、さやうにござります。別してお前樣は、御肥滿でお出でなさるから、お暑さのお凌ぎはお大體樣ではござりますまい、ハイ〳〵。トきに、最早お盆が參じましたナ。お前さんではお人すくなで、さぞお取りこみ樣でござりませう、ハイ〳〵。イエモお大體樣ではござりませぬ、ハイ〳〵。私抔は、お得意樣のお蔭樣で、まづナ、お前さん、他人樣のお足

なとも遊ばせ申さず、ハイ／＼、丈外様へお揃ひを頂きに参らず、爰に上お前さん、ハイ／＼、お[illegible]句箇節ら申すでござります。ハ、、、、。」やみ「それは何より結うございますな。」[illegible]「ハイ／＼、[illegible]れと申すも御先祖さまのお陰様でござりまして、ハイ／＼、お有り難い事でござりまして[illegible]お前で石門がお入んなさるだらう。虎ども取りに遣はさいまし。ヤイ／＼、此方から持たせて上げよう。[illegible]ヱヽ／＼、どう致しまして。矢張お宿様へ差し置かれまし、イヤ、[illegible]様のお道具を御拝借致しまして、お蔭様でお構[illegible]様の御馳走を出来ます。ハイ／＼お[illegible]ハイ、お近の御客様でござお取りこみさとでござりませう、ハイ／＼。お[illegible]ヤ、お[illegible]様ではござりませぬ。[illegible]御馳走で存じ出しました。一昨日[illegible]に、[illegible]ござりまして、[illegible]お蔭様で、ハイ／＼、[illegible]を致した」と申して御[illegible]申しました。其の[illegible]種御馳走様になりまして。」やみ「何もうさつぱりお構ひ申しません。」はい「ハイ／＼、イヱもお有り難い儀でござります。ハイ／＼、[illegible]やうならば、近ごろお[illegible]から、石門も[illegible]おかくへ、お出しなされて差しおかれますやうに、お重のお方々へ、おつしやり置かれまして下さりますやうに、ハイ／＼。」やみ「ナニサ、持たせて上げませう。」はい「イヱ／＼、御勿體ない。どういたしてお前さん、アハ、、、、。イヤモウ、御意じまし、此のまゝ[illegible]を[illegible]しなすつた事は。これも

お有り難い、お米から分身致した物でござります。申さば菩薩様をかやうにまう、石榴口へまきちら
してお捨てなさるといふは、どうした御料簡のお人様でござりませう。お使ひなさる程なら、最そつ
との事で、あそこの細溝へお捨てなされば、こゝも穢しませぬ、湯の一流しも費えになりませぬナ」
やゝ「さやうさネエ」まゝ「イヤハヤ御もつ體ない。」ト、手を伸ばして石榴口の外にある小桶をとり、風呂の湯をくまんとするゆゑ やみ者「是れへつか
はさいましな。」はい「ハイ/\、是れは/\。」ト、小桶を出す。やゝ古うけ取つて、湯の中の湯をくみ出し、はいの手に渡す まゝ「ハイ/\、ハ
イハヽ、是れは/\おはゞかりさまでござります。」いしこむ。ト、湯を流す諸風呂の渦の方にて、い……男大吉に 新内ぶし「今日はと
りわけいろ/\と、いふ事さく事だんとある。その約束で今朝中うッ。」そばにゐる男「エヽ、畜生めて、新
内だナ。こてへられねえ。鶴吉婆さんが出たやうだ。」「あの婆さんはうまくやるぜヱナア。」「あれは鶴
賀新内の元祖の家だとよ。」「道理で品が上品だナア。」「やつはり富吉路だぜ。てめへ何か、コウ、
新内で女が迷はせようといふ腹か。」「最う迷つて居らア。」「へン蟲のいい。」「新内が又流行り出した
ナア。闇の晩にあるいて見や。新内と新内がつき當らア。」新内ぶし「右や左の旦那さん。」「おゝわれん。」
ト傍から囃「何も後生と思召し。」「……」「ついでに手拭のほうかぶりフフンり、……
……「ごう/\/\、此の畜生め。豆評食らつて屁評をやがる。」「酒評をくらつて備へる
から消えられねえ。」「是れは蒙古か金山の麓。」ト謠ふ折から、中腹の中六とい 中六「イ/\や

イこいつらア、とんだ奴ちやァねえかエ。[illegible]中は[illegible]會の[illegible]たと思つて[illegible]
ア、新内と豐後のはねがかゝるシ、こつちへ除きやア、謠だか淨瑠璃だか、腦[illegible]
かつた。[illegible]どいつでも出[illegible]おれ[illegible]ないとこで勝負しべい。」ト、いひ[illegible]
内の[illegible]野郎[illegible]先[illegible]出[illegible]思[illegible]。もうつぱらの中六さんだぞ。コレヤイ、
[illegible]金山も[illegible]へ出しやばれ。[illegible]は[illegible]い所であ[illegible]金山も[illegible]
[illegible]でも[illegible]つたら[illegible]何所だと思[illegible]
[illegible]中[illegible]に花火と川[illegible]、[illegible]、氣を[illegible]西[illegible]
うろ角や、馬[illegible]の[illegible]出ようもしれねえ。サア、どいつでもおれ様[illegible]
場の[illegible]
やれ[illegible]
か能過ぎら[illegible]片つぱしから[illegible]出して[illegible]
騒ぎやァがるぞ。[illegible]
らだらう。[illegible]小僧で打つくじ[illegible]
たすこともりゃ[illegible]開いたやア[illegible]ねえ。」[illegible]

こそ〳〵上へあがり、うろたへ廻って著物を著ながら、早足に逃け歸る。 中六「尻腰のねえ奴等だぜ。中へ這入りやア外へ出やアがる。」あほ「逃げやアがつても面は大概しれし居らア。しほおしの茄子を地獄落しへ掛けたといふひしやげた野郎と。」中六「大坂炒の家臺ぼねへ地震といふしやつつらが。」 あほ「なんだ菊面か。ハン、ぶてえへさはるぜ。」中六「ホイしめへつけた。」 雨人「ハ、、、、、。」是れにて面くわにもならず、笑ってしまふなり。▲大坂いりとは、きんらい法會などにみせをはる、まめいりのことなり。 幅助「オイ

十五六の山出し下女と覺しきもの、三歳ばかりの小兒をつれきたり、「旦那さんエ、お坊さんをお連れまうしてさんじました。」 幅助「オイ來たか。ア、邪魔なばうずめだ。おッかアと這入ればいいのに。」 山出し下女「御しん造さんには、今にちはお頭痛がなさいますし、乳母どんはおつとよ。」ト、いひかねてゐる。 幅助「サア〳〵著ものを脱がせやな。」 下女「ハイハイ、サア德松さんエ。お衣をお脱ぎなさいましよ。」 德「お湯へ這入ようよ。」 下女「ハイサお湯へネ、おとつさんとお這入りでございますからネ、お早くお衣を脱がせ申して、初がお上げ申しますのさ。そりやよし。ナツトお腹掛の紐が引つかゝりました。オヤ、能いのだネ。德さんは能いお腹掛をお持ちだネ。初にお呉れし。」 德「否。」 下女「お否かエ。緋縮緬のお紐で、錦栽の龜の甲で、黒びろうどのお腹掛、オヤ〳〵〳〵是れはしたり。お守袋をお踏みだよ。ソリヤ〳〵、サアよし〳〵。ふつ爰は斯うしておいて、おとつさん所へおつれ申しませう。サア お抱つこお爲。ドリヤよいとこさ。」ト、竹のすの子の所を跨ぎてつれゆく。幅助うけとり、「サアお湯だ〳〵。ソリヤ留桶の中へ。イヤぶく〳〵ぶく〳〵。ア、いいぞ〳〵。

ヽ、お湯だの。坊はお湯が好きだネ。ソレ手拭を貸してやりませう。ヽヽお顔を洗つてやりませう
ト、ハツ、一寸この桶へ湯を一杯汲んでくりやれ。」「ドレ〳〵〳〵。」ト、高くはしよつて小桶をもち、よび出
し、[illegible]
コリヤ、坊や、否々、お前さん一寸何うした物だ。[illegible]虫が起るな〳〵。[illegible]
ト、顔を洗つて「ホ、十上子々々。おとなしくなつたぞ。よくあらはせるぞ。けふはお行水のつもりで
中へはいれますまい。(留桶)の中でおので、すぐに上げましよう。最う遊ばせ[illegible]
しまひませう。なにさ、初手」「ハイ[illegible]浴衣[illegible]
あ、どうしたもの[illegible](角手拭)のお湯が[illegible]
あたしその上げたから[illegible]
ニ、御口濯い。泣きなさるな。[illegible]
たまらんだ。おとなしくして額に拭いて[illegible]
貰ライ。甘いお返答だぞ[illegible]
お弱ラ八、[illegible]
おたまつてなりますよ。[illegible]

婆「團扇。」[illegible]「[illegible]よく御存じだネ。是れは何。」婆「お守袋。」下女「迷子札さ。是れは何と書いてござ
いますネ。小判で能いネ。サアノ、何と書いてあつたか初は忘れましたが、お前さんは、お利口だか
らお覚えだらう。與太郎町。」婆「與太郎町。」下女「何丁目だえ。」婆「何丁目。」下女「ナア、與太郎
町何丁目か、知つてお出ではないかエ。」婆「與太郎町何丁目。」下女「三丁目さ。」婆「三丁目。」下女「そ
れ〱。[illegible]叶屋福助、倅、徳松。」下女「[illegible]よく御存じだぞ。[illegible]ノ、衣を召して、帯をお締め
て、是れから通町の方へ出て帰りませうネ。[illegible]ざいます〱。」[illegible]

[illegible]

一[illegible]京園[illegible]「ア、皆いそ〱、年の老つた所為か、皆さも寒い、人一倍だ[illegible]ご
ふ腹なさいサアと云つたら、今の一歳子供にも負けねえ気だが、[illegible]年はとる
[illegible]爺だといはれるも無理だが[illegible]頭で[illegible]「[illegible]お出でなせ
え。」[illegible]、中六か。早かつたネ。[illegible]達か」[illegible]
アニ、何でもねえのさ。」[illegible]「ヲウ、そん[illegible]身に勇んで、木葉喧嘩
はしやるなよ。コレ、お主達も聞いておきやれ。男といふものは、滅多な事に争論する物ぢやアねえ。
まかり間違へば[illegible]時にや、友子友達への面つくだ、[illegible]

もゝ今の若い者共は、達人たちの大の贔屓だのと骨頂を叩くが、おらが目から見ちやア、昔の劇者と黒れ、木の事よ。俺が若い時代の所作とは、雲泥萬里の違ひだアね。金神長五郎殿と、黒の白旗殿と顔見せたんぞとさたら、ハヽ、嘘のやうだ。あの時代の噺を聞いておきやれ。事だ。いゝかゝかな、時代な強い事だと思やア、其の文句をきくと、恐ろしく大当たりの一つ話だつけが、左衛門殿の子分に、半時市右衛門、その半時が子分に坂東長七とあつたけれど、それも〳〵男一匹だアな。其の話をして聞かせべいが、マア待ちやれ。ト、いふそばか義兵衛、こゞとを壹番目右衛門でなんぼいふひたすら通り、総ての事が昔は違ひます。芝居の狂言でも嗜みがなかつた、も、荒事が第一なもの、だつけ。今おやア、荒事師がりないか、当事を見る人も少ない。荒事師が一通ッと吹くと、ニ上人ばかりのはい〳〵役者が、揚幕の方へ吹きとばされる。イヤハヤ凄まじく勢ひで取つたもんさ。今時そんな事をしてみなさい。見物が黙つてはゐないよ。昔は男達などの出端には、つらねといふものが有つて、悪態を長々と云つたものさ。男達に限らず、総ての役につらねといふものが長たらしくいふを、見物耳を澄まして聞いて居たものだが、当時は其くらゐ人もないから、いふ役者もなし。兎角てきはきと、早手まはしな事がはやる世の中。夫だから納豊ノる、團扇のせりふの、煙草うりのせりふだの、朝比奈のつらね、対面のつらねなどいふものは廃り切つた。今時の対面の

つらねは、短くつまんだものさ。昔のやうに、面白い文句を長々とは云つてるぬわさ。」中六「昔は優長だから、つらねやせりふを掛けやつてるだらうが、今ぢやア流行遅れだ。」あほ兵「さうよ。其の暇にはだんまりの幕か何角で三人の出合ひ、小きびがいいぜ。」古左衛門「それだから今の衆は、對人にならぬ。役者が三人出て、だんまりとかがんばりとかで、何かわからず引つはり合つて幕をちよいとしめる。とんと壬生狂言を見るやうで、何のまねか根から解らぬ。」中六「あれがお前後の幕の條にならァ。」古「條になるといふが、こちとらには解せぬ事だらけ。今お前敵役も實事師も、出た所では解らぬわさ。私らが若い時分は、敵役の面が、藍隈とやらいつてネ、彼のソレ隈ふどりが。」あほ兵「へゝ隈取りといひなせえ。隈ふどりだけ古風で素つぽい。」古「ハアヽ、爰が正脈だわさ。ソコデ、藍隈でなければ赤つ面さ。それだから舞臺へ出るとすぐに敵役と知れやすい。扨又立役の荒事師は、赤い筋隈又は赤つ面。ソコデ、只の立役が目の縁へちよいと紅を付けたものさ。」中六「そりやア金魚隈といふのだが、今ぢやア目隈を入れる者はねえ。門之助や今の助高屋が若盛りの頃まででさ。わつちらがしつてまでも、蟠風廣右衛門や、天幸や、助左衛門などが、敵は藍隈でしやした。蟠風は癇癪隈といつて、青筋をチリ〳〵と縮らかして入れたものさ。大秀鶴も初めの内は、藍隈でしたさうだが、わつちらが覺えちやア、マア秀鶴あたりから白面になりやした。」古「それだから、今は敵も立役も、白い面

や薄肉とやらござる故、誰が誰やら解りませぬ。變つた事にならうのだ」「[illegible]これにまだ
ねえやうだ[illegible]お前さんな事もやァねえ。此方等が二歳つ子供の時代にや、大詰といふ物が有
つたが、近頃はそれは廢めた」「さやうさ[illegible]大詰といふものには[illegible]能い物[illegible]惣座中
の役者が殘らず出て、[illegible]大詰に揃つて、在宿に在る顔ぶれ」「[illegible]
兩方が睨み合ふやつ」「さう〳〵〳〵。此奴なん〳〵で不動のお見出しや、宇賀龍とか土蜘蛛とか[illegible]
[illegible]出し、[illegible]鼻やかましよいはう樣だつた」「お前はおらより見らや年下だが
ら知らねえのさ。大伯猿を見ねえつたか」「[illegible]大見えそのよ。[illegible]」「[illegible]
當だつたが、[illegible]大詰に、[illegible]若様に[illegible]ると、[illegible]中から
大詰覺へ[illegible]
顎へ當てて、白眼を睨めらのせり出した」「[illegible]今時そんな狂言を誰が見て居る物か
仕舞はそれだからいけねえ」「[illegible]聽きやれ。[illegible]狂言と言ふ物だわ。地と狂言との差別は[illegible]
[illegible]
名人だつたに[illegible]三で人形の所作をしたつけ[illegible]の真をした
のだの」「さうよ。坂東[illegible]の息子だ[illegible]は[illegible]といつてな

扠其の家橘がした時は、舞臺一面の寶船で、今お話しの通り總役者殘らず乘つ居て、せり上げになると、下から家橘が角鬘の荒事出たちで、兩手をぐつと伸ばして、彼の寶船を差上げながらのせり出しさ。してみれば、家橘が時分から最う餘程利發になりましたネ。」きぢ「狂言と地との差別が肝心だ。」㐂長「今ぢやァ水も本水を遣ひやす。飯も本當に食ひ、芋も本當の芋を洗つて鍋へ入れて、本當に煮て見せねえぢやァ、見物が合點しねえ。何も角も本眞本式でなくつちやァ、見ても面白くねえわな。」きぢ「それ見やれ。お主等が樣な人ばかり多いから、役者も骨が折れらァ。後には何うする心算だ。眞劍を拔いて敵役の首を本當に斬つて、濡事も本當に惚れたらば、女形は只の女がするやうになるだらう。時の鐘も銅鑼を叩いた物が、本鐘になる。鐵砲もはめなどんと叩いたつけが、今ぢやァ竹筒へ焔硝を籠めて、本鐵砲の音をさせる。萬事が自由にはなつたが、なか〳〵昔の役者の眞似はできねえ。」㐂「イエサ時の流俗とはいひながら、大三十日の天明に、扇子おふぎ〳〵ト賣つて來たが、アあの聲を聞くと春めいてはつきりしたつけ。二十年來さつぱり扇賣りなし。」きぢ「夫れよりかは元日の朝つはら、沙魚賣り、福壽草賣りなどが來て、さも〳〵元日めいた心もちだつけが、福壽草は今も少しはございやす。沙魚賣りの聲は、いつか世にも聞いた事がねえ。」中六「そのかはり拂扇箱を買ふものが四日目から行歩きやす。」㐂「拂扇箱はございゝトいふ聲が松の内から聞えるが、扇子々々は大き

お違ひ[illegible]事[illegible]は[illegible]

心得ること、近頃は八百屋物[illegible]

は、納豆々々ウの聲もしませぬ。イヤ、それについてお話がある。お江戸に生まれた有難さには、年中自由が足りる。初物に一番がけに食ふなり、又外遊物にまで、魚類に三、四季[illegible]種無いといふものがございません。[illegible]それだから、家職に精出してさまざまのごたくをつくすだ。」

ヰ「イエサ何なりと四季に絶えず、又孔方さへ出せば、一文の用も足す所故、お江戸に産まれた衆は、豆が何時出来る物やら、芋は何時が實の入る物やら、旬を知りませぬ。植ゑつけがいつ頃で、刈時がいつだといふ事もむちや助さ。お前、私が先達、ある所へ參つたが、其の國は魚がめつさうに不自由ネ。此の位ある、イヤほんに魚尺に取らぬ物だといふが、何でもひつ立てられねえ程の鰹が二十六文さ。ネお前、肝の潰れた話だネ。なかなか五人や十人で、食ひ切らぬ程の大鰹が、三十六文ときて、片身骨付の方を二拾で買つて、刺身にした。サ爰がまつさ。肝心の大根おろしといふ所が、大根が無い。ネ不自由だて。爰らの所を江戸の衆に聴かせたいねエ。」ヰ「中六もあれば民もよく聴きやれ。さういふ理窟だア。」ヰ「ネ、外の國は不自由だネ。それから大根を買ふには、道の六里も行かねば無いといふが、サア爰だて。ツイ人を雇つて買ひにやつた所が、其の日の間に合はず。又合つた[illegible]

銭の少くも百五十もやつて、大根の直が一本六十四文もせう。都合で二百二三十も出して、大根を買ふに、鰹は一本三十六文だ。ハ、、、、。否こんな相違な事も無い物さね。ぶり／＼する鰹が一節九文さ。それで其の土地が海へ僅か一里ある。どうも捌場がないから、自然と安く賣る。そこは又お江戸の有り難さには、海へ一里ある所で御覧じろ。江戸前だと云つてお直段が滅法貴いさ、ハ、、、。旅をして御覧じろ、たとひ銭金を積んで騒いでも、憂い辛いめを見るから身の薬さ。お前方は、大山参りに御神酒を納めに行くか、成田様への旅位が關の山だらう。歩いて見なさい、修行になることが大分ありますよ。」ト、いふをりから、風呂の中にて座頭の坊の聲と覺しく ● 十四經をとなへながら、八人藝の声色をつかふ。よほど氣の輕き座頭と見えたり。「手之三陰、從藏走至手、手之三陽、從手走至頭、足之三陽、從頭下走至足、足之三陰、從足上走入腹ッ。テコテントンテコ／＼テン／＼。」「コレ權助や、誰樣がお出でなすつたではないか。」「へ、ハアイ。」トン／＼／＼／＼／＼／＼ ト、是をりまねして、風呂の中の窓口をたゝき トン／＼／＼トトトン「ハイ隠居爺いが來ました。」「コレ、ダ隠居爺い、コレどうした物だ。あれ程言ひつけておくのに、ぞんざいな奴だ。御隠居さんがお出でなさりましたといふものだ。そりやアまアいいが、早くこゝへお通し申せ。」「御隠居さんお出でなさりまし。」ト隠居の聲にて「大分寒いの。」「お寒うござります。」「御いんきよさん、いたこの騒ぎはどうでござります。」ト隠居の聲にて「いたこ[illegible]ござれぎはよからう／＼と[illegible]「よからうよ

から[illegible]いたこ[illegible]でつえ、[illegible]なくなつて[illegible]小[illegible]い[illegible]いたこ[illegible]された
権助も来いつ。権助のどきこ[illegible]い「たこ[illegible]でわざ[illegible]、わしも頭[illegible]でう[illegible]のへも[illegible]た、[illegible]ミ」
でつちり[illegible]権助[illegible]うたふも[illegible]しい[illegible]隠居[illegible]い[illegible]と云つて叱られ[illegible]小僧だ[illegible]
[illegible]
うもな[illegible]天神[illegible]「[illegible]しやれる小僧だ[illegible]
テ[illegible]な[illegible]いノノノ[illegible]大[illegible]と云ふだ[illegible]小僧[illegible]「[illegible]
ヒ[illegible]天神[illegible]天満を[illegible]手[illegible]手[illegible]座[illegible]
起[illegible]指[illegible]手小[illegible]心中[illegible]指[illegible]
アこれかノノノノノノ[illegible]ドン[illegible]
なあ[illegible]湯の中で八人芸[illegible]をかしい[illegible]打造つておきやれ。心がけのいい[illegible]
これがその能いといへば、あの盲都ほど勘の能い者はあるめえ。[illegible]で探りながら月代を剃る
し、それから三つばかりの子を抱いて湯へ入れるが、[illegible]奇妙だ」[illegible]手巾を指に巻いて、目の中
を洗つて流る塩梅なんぞはうめえもんだ。目あきは叶はねえ」[illegible]盲目が京へ上つて、膝栗毛[illegible]
岐の金毘羅様へ、参つたが見ちやア、此ケ等はいゝおはねえぜ。[illegible]と性根玉を[illegible]
天明年中の狂歌に、[illegible]いたら[illegible]いただけに光るなる性根玉でも何の玉でも、[illegible]といふ狂歌があつた」

ト、いふ傍から、江戸風の俳諧歌をよむ男、俳諧亭歌よむとかいふ人、「なるほど寳珠をべつたりと書いて、性根玉の歌がござえやした。しかしあれは、上がたの狂歌で、ぐつと古風な體さネ。天明年中の歌でも、江戸はあゝぢやァござせん。別して當時、俳諧歌の調べ一面におこなはれるから、其の眼で見ちやァ小兒のたはむれ、一向取るに足らねネ。あの歌の返しに、相應な歌をよみやした。讀人はしりやせんが、寶丸は磨いたとても光なし、こんにやく玉と屁玉人だま〳〵。同字病はあるが、能い返歌だネ。狂歌といふものは、おそらく江戸に止まつたネ。近年ます〳〵開けて來たから、いよ〳〵高上になつて來やした。上方のさる御方の御歌だが、まことに甘心といふは、はいかい歌で、一つつきて間のあるは鐘つきも心ありあけの月や見るらん、サ、どうも妙だネ。兎角素人は、狂歌も落首も同じ様に心得るから、是れにてあやまる。儉約と吝嗇は、水仙と葱の如く、形は似て非なるもので、則ち狂歌落首その通りでござえす。中にも地口を交ぜて狂文を書いたり、狂歌を詠んだりする者があるから、初心のものに毒を流しやす」ト、いふをりから、風呂の中はます〳〵八人藝。[illegible]いふ「コリヤ〳〵〳〵〳〵朝來出島はさていゝどころ、アきた〳〵〳〵」

うたよむ「イヤ是れは殺風景だぞ。妓に俗事を談ずるより餘ほど上なるものだ」ト、いふ所へ、上がたもの、けら助、わらひながら入り來る。

けら「イヤァみなさんお揃ひだねやナァ。番頭さん一寸一杯湯を仰付けられませ。此の藥罐に半分ほど御無心ぢや。」ばんとう「又かわかしか。久しいものさ。」けら「ハテそないに云はんすな。なんぼも沸いて

おん湯をやかい。湯がうめで沸さずものなら六文が時はじゃあまいし。[illegible]流元
すうかい、なんぼもかゝらん。」ほんこう「イヽエなりやせん。」けち「えらい毒性なア。」トいひながら流元[illegible]
「南無三仕舞た。このやうな[illegible]所へは取られぬは」ト[illegible]湯をくみおけて持ちきたり[illegible]
の代に見やれ。今にこゝへ来うが。[illegible]私が[illegible]の[illegible]屋の[illegible]
最前の[illegible]倒して金は[illegible]つた。[illegible]最前の[illegible]を[illegible]にしたれ[illegible]
の酔め、[illegible]れて[illegible]たら、[illegible]て[illegible]。[illegible]
つとはつしまた」[illegible]▲[illegible]
けち助さん、おまへはいつの間にこゝへきなすつた。[illegible]酔つたぞ[illegible]
今は大きに御馳走。斯う能い心持に酔つた所で、湯へ入つてしまふは惜しいもんだ。[illegible]
か、今から一寸往く所がある。[illegible]此の手が[illegible]上へあがる。[illegible]
レアレ／＼、足が上つた。[illegible]こいつはどうした物だ。」ほんこう「お前の形は、[illegible]
お助踊ときてゐる。」[illegible]アレ／＼／＼、むしやうやたらと踊る。[illegible]
止めようと思つても、アレ／＼／＼どうも踊つてならねえ。[illegible]此様に踊るだらう。[illegible]
おれにも気がしれねえ。アレサ／＼、踊るまいと思ふ程、意地悪くアレ／＼／＼、手が／＼、[illegible]

「コリヤ〳〵どつこいさ。」ト、舞臺のきどく〳〵あらはれ、をどり出す。この舞臺を食うたる者は、必ず舞ひ踊りて後に正體を失ふよしいへり。▲此のをりふし風呂の中はあくいおが八人藝のはなし、めく「よい〳〵〳〵よい〳〵〳〵きた〳〵〳〵これはいさ。」權助の聲にて、「さア、さア〳〵〳〵〳〵、テコテントン、テコ〳〵テン〳〵。」ト、拍子につれて、にが九郎いよ〳〵踊る。にが「コリヤ〳〵〳〵〳〵どつこいさ。サア〳〵サア最う〳〵踊るぞ〳〵。今では段々面白くなつて來た。」めく「コリヤ〳〵〳〵〳〵。」にが「サアサアサア〳〵〳〵。」めく「よい〳〵〳〵、よい〳〵よい〳〵。」にが「きた〳〵〳〵これわいさ。」めく、にが「アコテントン、テコ〳〵テン〳〵。」めく、にが「手三陰は。」にが「これはいな。」めく「從藏走至手。」にが「とこまかしてよやさのさ。」めく「手三陽は。」にが「がつてんだ。」めく「手より走つて。」にが「よやまかさ。」めく「足の三陽。」にが「あれはさのさ、コリヤ合點だ。」めく「頭が走つて手が踊る。」にが「これから拍子でやつてくりよ。」めく「す、扨其邊は合點だ。足の三陰足元から。」にが「ひよこ〳〵踊つて腹に入る。ヨリヤお蔭で私は腹が減る。」めく「ソリヤおでゝこすてゝこおでゝこでん。」と唄ふも舞ふも乘地の二人、狂言綺語の戯れも、三編すでに御意に協ひ、是非四編目の御望みに、ホツトまかせの早合點、作者も倶に浮き立つて、机上に筆を踊らすのみ。

譚話浮世風呂第四編卷之下　大尾

浮世風呂四編跋

式亭主人は、郷中竹馬の友たり。幼年より編綴、生平の著書殊に夥し。故に人呼んで面白くなき人とし、且話のなき人とす。質朴にして雅人、野暮にして[illegible]、居は市中にありて自ら隠れ、身は俗間にありて自ら俗ならず。言語を通めかさず、妄りに陳腐を吐かず、形容を粋がらず、僕にも理窟をも論ぜず、ござりますの付合、敬して[illegible]、[illegible]への[illegible]、[illegible]して[illegible]らず。陰物たらず陽気ならずかた／＼よからずあしからず、[illegible]の好男子、[illegible]世にしたがへば、滑稽紙上に溢れ、[illegible]下に走る。[illegible]しやれたるかな。茂叔が胸中式亭の[illegible]、[illegible]

花川戸の隠士　金龍山人書

無而七癖

酩酊氣質

自序

劉伯倫、酒徳頌に管を捲いてより以降、倭漢の醉客、其の粕を食らつて譫言を吐く者、耳盥に勝げて計ふべからず。世の人ゲップゥの出る程承知なれば、彼の醉つて多辯なるは小人とかいへる唐の通人の意見に從つて爰に下らぬ酒反吐を吐かず、不佞ニ馬素より潯陽江の産まれにもあらず。地黄坊が孫にもあらねど、呑んでゆらるゝ由良殿の蹤蹟を引き、酒にあかさぬ夜半もなき醒醉の醫腹、夕に安寧湯と袖の梅とを吃し、朝に湯豆腐と豆花菜汁とを用ゐたる、腹の中の不同を思へば、人心同じからず吾が腹の如しと、頓に酩酊的の差別を考へ、無而七癖生醉氣質と題し、便ち發客の醉人に與ふ夫れ垂腹孫左衛門は、百藥の長八を傭つて玉帚に憂への煤を拂ひ、夢中作左衛門は、狂藥の十分六を頼んで、酒瓶に氣違ひ水を汲む。されど生醉本性違はず、醉つての中の無分別も醒めての後の御料簡も、餅好酒中の趣をしらず。饅頭那ぞ酴醿濃の心をしらん。しるもしらぬも呑まぬも呑むも頤を解く這の小冊、作者が庖廚の醜味は、敢て食巧者の腹を探らず。詰り箭の速いを自慢に、潮煮の即席料理、あつさりとしるすとしか云ふ。

酩酊氣質自序

文化丙寅春開鐫、實は乙丑十二月朔日、二日酔のあくる日より一晝夜の急作。

江戸戯作　式亭三馬書

凡例　　式亭三馬著

○自問自答の言語、所謂獨角觝の如し。されど、おのづから傍に人ありて應對するがごとく聞ゆ。御見物樣方、假字のつかひぶりを、克く心得て讀み給ふ時は、よみくせありて、醉人の情殊に深かるべし。

○此の書は獨り覽て、嬉笑を生じ頤を解く體文なれども、傍の人に讀みて聞かするには頗る物眞似の心なき人は醉客の情薄く、興少なき事もあるべし。しばらく宥し給へ。猶これに漏れたる癖は竊りて來春の後編とすべし。

○言語の内に○を印したるは少刻他人の詞あるとしるべし。ござりますは悉く戲場の正本に倣ひて、ムり升としるせり。餘は推してしり給へ。

○此の著作は素より一夕の漫戲にて、櫻川甚幸に與へしを、書肆の需めによりて小冊とせり。希はくば甚幸が身振にて見給へ、作意顯はれて含笑又讀むに勝る。彼の甚幸は慈悲成門人居芝西應寺町予が幼少の頃聞き及びし、一瓢、白兎、三樂に等しき、身振の達者物眞似の名人なり。余かれを愛する事久し。故に此の書を授くといふ。

無而七癖酩酊氣質品目

かつぎ上戸
惡たい上戸
おもしろくない上戸
くどくどなる上戸
こごと上戸
なき上戸

いけん上戸
ねる上戸
りくつ上戸
はらたち上戸
さわぎ上戸
しやべり上戸

無くて七癖 酩酊氣質 巻之上

江戸　式亭三馬著

〇かつぎ上戸

「何だ、又三吉門前の酔道白子屋四郎兵衛居酒屋の前に倒れて、付きまといつてる者はよく聞け、おれは不肖ながら酔漢はかつがれる、ぶて、酒に酔て醒つたら内のずはやたらにみな言ひつけにをにとうした物だ、割下す御酒は縄の事だれ、おれが名を晒されて、酔者とはいはれぬ、まんざとといふではないぞ、オヨレ御酒道ではない酔人をトきにらつしやいと、一寸取次をするにも、能くへきめへして聞やせで、よくじらぬやうにいへといふに、其のよかたはそうよた斬るや、おほよい酔漢のまん道よう不見上郎兵衛てまんゆんの御亭主申し入れませといふに、なんのですでもない事をおれがまれふみ、よらまの言分にはまだ可の様をもつてまふがいてさらゐするは何の規矩や。まんぢをまぜしてよら凌にたるまで、夫婦ともに家内よりかに酔きなといふまれな事にはないか、オヤ又それを言を称へ

とはいはせぬぞ、しゝとは死ぬこと、そん〲とは損に損が重なる故ぎえんが悪い。ナニ『つい間違つた。』『べらぼうめが初春早々から、物が間違つてすむものか。アノくそ癡めが。うぬ、ナニ、イヤ何だと』『モット小さく云へ。』『コレ此の人はゴレ御よんぞ、こなたまでがよ末の悪い事をいはッしやる。初春早々から、物を大きくするがほんたうの事。何處の國にか物を小さくしてすむものか。おれは酒を呑むと兎に角萬端氣にかゝつてならぬ。コレ家内の者コリヤもつと聲を大きくするぞ、なんでも百間開口ほどに聲を大きくする。ア、氣にかゝる、エ、氣ざはりな。しかりけつぱい鶴龜松竹千秋萬歳長生殿の裏には春秋富めり。不老門の外には日月遲しちゝんぷい〱御代はめでたの若松さまよ。えエだもそアかアえエてエ葉もしゆうけるおめでたや。南無年德神あきの方さま。伊勢神明天照皇大神宮さま。別して出世大黒天さま。えびす三郎左衛門どの。おんあびら、うんけんそはか、奇妙頂禮奇妙頂禮。ヘツ〱〱。ア、折角にぎやかにめでたく嬉しく心持よく祝酒をのんだものを、トントめでたくしをつた。コリヤ惠方にむかつてよら魚の吸物をこしらへろ。よん吉よふん板かはりましたはわるい。相かはらぬ古板の道中すご六を買つて來い、ぎえんなほしはめでたく福引々々。」

○あくたい上戸

[illegible]　何をつゞけてよむなり。

[illegible]二夜の八ツにはおでんしに[illegible]出たとこ〱〱〱とはやればはやるほど[illegible]つかけた[illegible]大黒おつたかい、こしかんで遠いとおもう[illegible]末さつとの[illegible]もねるが、[illegible]につぐ〳〵かけたお郭公[illegible]ア錦[illegible]ハヽ太郎さくやらしそれ、そこだに〱つと[illegible]、おれはつかの口をたゝかせて、なぜおしたまでで留やア[illegible]、おら[illegible]やしねえでもと、〱とはうもねえ、此のふんばのやアあにを見せくなつたがョ、[illegible]口あへ[illegible]、口あへ[illegible]て、口が八つで目だ、玉が六ツで鼻が三ツあるやア、とんだ[illegible]、いやみと言ふ[illegible]て、[illegible]先評もない、きさま[illegible]にしたくッてもねえ、役者附の[illegible]やアねえが是れ[illegible]も通りねエ[illegible]ア、此の[illegible]俺が[illegible]な男ぶりの[illegible]が出来るか、此の土地へはまだ[illegible]るめえ、[illegible]も[illegible]つてしまつたこと、べらぼうめ、そりやア福介だア。これェ、気をよくして[illegible]のやアいゝかと思つて、あはう言もねエたは言をつくが、抑是れに安置し奉る尊像は、もつたいなくも忝くも縁起御影は跡へ[illegible]して、正銘札付現金かけねなしの江戸つ子、大門通りの[illegible]さらやアねえが、大[illegible]ツト日方が進ふのだア。たとひ地元が[illegible]で、[illegible]頭が[illegible]、[illegible]川のおん[illegible]が防ぎやうし[illegible]、赤[illegible]

青鬼が、ちんからりんと鐵棒ひいて、十王十體が小額をくつ付けて、頭たのみやすと、渡りを付けようが、おれが、やつとこさとお神輿をするて、一ばんウンニャと、かぶりを振つちやア、しやッとでもいはせるこつちやアねエ。面ア見や、氣がきいてるか、辛子がきいたかしらねえが、くしやみをしたお茶椀菓子を燒繼へあてがつた樣に、膽つぶしなしやッ面だぜえ。何だ、ヘン人をつけへにした。むさし野のだしが夕立に逢つたといふ簪を、建前のかぶら矢の樣に、へんてこにつッさしたが、うぬが面で、ひよつとこを踊らざアお祭やア渡るめえ。ナニ。○しれたことよ、汝が面ア、祭が渡るから見るのだい。コレ前髪のぶら下つた柳の下へ、ふるまひ水を出して、はげッちやうの空地で、がらがら萬度、海鬼灯を賣らせる。ナンダト聞えねえとか、その筈だア骨がらみが、こふらアはいて瘡聾になりやアがつて、キイ橋の上で買つてもらつた金の耳搔が四文々々で、耳の穴をかつぼちつて、有りがたく聽聞しろ。せり出しの奧州が小屋へ落ちたといふざまで、なんだしごきか、押しの重てえ。緋縮緬か丹縮木綿か、太郎樣の納め幟おやアあんめえし、はぎ／＼もきざ過ぎらア。醉つていふおやアねえけれど惣領胸つ糞の惡い家臺骨だ。醉やアしねえぞ、醉ッたと思やアがると近日の楊弓ときて當が違ふべい。そんなあまちよろッこい酒呑おやアねえ。○ナニあいさつに來た、中人もへちまもとんちやかアねえ。こつちやア醉つていふ利窟もしつて居るが。○「ハテサおめへッちやア、うつちや

ても、そつくりと火の障りねえ場所へおいてくんねえ。不性猫のあまが口が過ぎるから起つた事でご
○一ヲイどうする事か、ようござりやす。キツト料簡ならねえが、すつぱりと水にして、ご免下さいに
致のやせう。ヲイの云込みやした。このヤアモシおやかましうござりやす、ドレゐんな体ねえんしよ
○一キツトもしえ、わつちが所へ来たら遊びながらよんなされしな。鶴松や、見物に行つて帰つてきな
ツんをつれて来やすから、ヲヤイすんならヒイア、かうてきと帳ツてきたつるかしら摘むぞ、キツト所一
所取つてくりや、中通りにおつ食はへへ、おヤんのこつた、ヲイヲリたひのやうなこ

面白くない上戸

○面白く無い上戸

〔上戸かた〕氣をおもく詞をしづかにつかいていふべし

亭主「エヘンエヘ。」「エヘン。」ト、○コホリ/\/\ウッフ/\/\/\コホ/\/\/\/\よい。」ト咳をはき「御免下さりませ。今晩はだいぶお賑かで御座り升な。イエ宿でも能く聞え升から、見物致したら又一トしほ面白からうと存じましてお邪魔に參じました。ヘイ/\おかまひ下さりますな。」ト、ため口でひよろつき「どつこいな/\まだ寐るには早いッ。エヘ、、、、、。」「ハ、ア隠居のお手傳か。おりや醉醉かいうの。イヤやつとこさの是れわいな。ウンやとまかしよ。」ト……隠居様は中座敷か。只今踊りなすつたは杵屋のお娘御か足音ばかり聞いても面白い事た。」ト御免なさい。ハ、ア夥しいお客だ。イヤやつとこさの是れわいな。」で座敷の入口から「ヘイ太左衛門で御座り升。ヘイ/\ヘイ/\先程はお事多いに私方まで。ヘイ/\イヤ、、、、、有り難う御座り升。イエ、、。」ト、挨拶をいひかねるくせあり「エ、何、あのお肴で今まで獨り樂しみました。宿でも宜しうヘイ。イエモウお構ひなさりますな。イヤやつとこさの是れわいな。」ト、下に居て腰の煙草入を探し懐へ手を入れ「ハテナどうしたしらん、ハ、アとり落して来たか。ヘイ/\左様なら一ッ服。」ト、亭主の煙草入をとり「ハアお物好す、是れは何と申す切レか皮かネ。ヘ、エ越川ハテネ、越川と申すはなめし革などとは又ぶんな物で。エ、/\聞

えゝへした。成程、さう仰しやれば是れはきれだ。越川仕入、ハ、ア聞えました。イエサ、只今は人が巧者になりましてアノおまへ、エ、紙たばこ入で切だか革だか見わからぬが出來ますてな。へエそんなら四日市の竹屋清藏と京橋の京屋傳藏がよいかな。ハテしらぬことゝ、イヤ是れは結構なお煙草だ。私は上州から葉で買つて手前で切つてたべますが、江戸で買ふ一斤八十位の煙草はおひ付きませぬ。イエ〳〵イエモシ必ずお構ひなさいますな、只今まで宿でたべて其の足で參じました。ハイ〳〵ハイさやうなら又一ツ戴け、是れは今はやり詞に申すエ、何とか、エ、アノソレ、ヱヱサ、アノよけいの仕事とやらで厶り升なイヒヒ、、、、、。」ト、ぐびり呑みて下へ置き肴をむしやり〳〵ト喰ふ、「トキニ米も餘程氣を持ツたげに厶り升。あなたのはどの位の相場か。不躾ながら先刻の御膳をたべましたが至極よう厶り升ナ。ヘエハテネ私も拂米を二臼舂かせましたが、お鄰の作藏さんのは地廻りで石六斗だと申し升、一ツぱい方違ッては大きいてネ。此の又酒もちと安く致したい。私どもが若い時分は一升百十六文出すと、油のやうな上酒が買へました。ホイお咄に浮れてお杯を忘れた。」ト、まじめで又ぐびりと呑み顔をしかめて亭主へさし「まづハヤ豐年でお互に暮し方もよし有りがたい事で厶り升。いや此のお天氣はどうした物で厶り升う。おしめりもえいかげんで厶り升、降るとサ出這入りが惡くて困り升。併し雪よりは跡が能う厶り升。イヤ夜前などは辻番を入れてさへ、ふくそつはうに臥せられません。寒はたしか十八日あたりだから其の筈さ。

ます寒餅は舂けるといふもんだ。ト、〳〵まう何は各別暑い時節は暑いがよし寒い時は寒いが順でござ
る升。近頃時候が不順だと人間のからだへ當る升。しかし河豚は必ずあたる升か。此間も噂をお聞なす
つたか。鐵砲洲邊の餅屋が、イヤわるさもわるい煤掃の日に食べたさうだが、てんでに當つた。皆
な入れて食つてもあたらぬ人もござり升が、酒に一日ひたして丁寧に料つても、時節がわるければあた
り升。いやもう身體はつひ父母に受けるとやらお經文にお説きなすつた通り、大切のからだを河豚で死
なしては成りませぬ。命がけで食ふ程な物でもない。夫れよりは三度の鯛を喰るがいゝ。ト、清元に
ニ、私はお前へ參ッたら申さうと存じて、はつたり失念致した。モシ、何でござり升でエ、田舎の親類
共から頼まれましたが大丈夫此の上なしの太織が、疋で二歩内で上り升が、其の賃と見て、
分二朱ござつて、おかけなさると、小紋に染めて、羽織と對に出來升。あれでもよいやうにおかけます。
○オヤ〳〵黒胡麻一袋に大豆の三袋も持つて來て、十日許りも泊つたお時々には、又こんな事を頼まれ
升。是れも彼のふけいの仕事とやらだイとヽ、、、、。イヤやつとこさの是れわいな。トナヤヽ
ヤレヤ、大分ひよみ付きます。ハテ揃ひらにお下に〳〵。ヲヽヨ直に又參り升。まだ歸るのではござ
りませぬ。こんな面白い事を捨ててどうして歸られませう。今やどりの中入ことを幸ひ。」ト立つて中戸口を出る。赤松
さかさまに立ててあるにつき當るとぽつたり倒るゝもしらず「オイ帯が落ちた。コレ虎どの。かけておかつしやい。外して置くと毛が切

れて忽ちわるくなる。ヤレモノ〳〵漕ぐわく〳〵おりんどのヤ、アレしちりんの口へ雑巾をかつておかつしやい、むだッ火だ。コレノ〳〵ながし元がすべるからノ、今度から帚の悪いので板目を横に使つて洗ふがいい。縄だはしで砂なら猶いいけれど、とてもさうはいくまい。イヤやつとこさの是れわいな。ウン、やとまかしよ。ホイ履物が違つたか、ア、見えました〳〵。イヤやつとこさの是れわいな。コレコレおりんどのヤ、引窓が明いて居るからしめさつしやい、不用心だぜ。ハイさやうなら。」トかべにつたはつてうら口をあけ、「イヤやつとこさの是れわいな。」ト表へ出で、「ハ、ア翌はお日和だらう、東の方はお星様が降る。」ト戸をたてると、戸についてあるなめくじりをべつたり、「ホイ。エ、汚い、誰が痰を吐きかけて置いた。ゴホリ〳〵ゴホ〳〵〳〵。」
「モシまだ盥が出てをりますよ。」

○くどい上戸

一よみ方一　一向したの廻らぬやうに御よみ可被成候。但シかなのふりやうに氣をつくべし。

「コレかゝァどん。き、聞かッせえ。に、人間僅か五十年。ナアよしか。い、一寸先は闇の夜にサ、なかぬ烏の聲きけばス。よしかナア、ァ、醉ッた。」ト手拍子をたたきながら、ヒヤウシ「ハァ呑まれぬ酒のウ腹ぞウさびしかりけるウ次第なりけりイ山ざくらかなッ。ナア歌よみだらう、百人一首の中へ入れてもいいス。ソレか、かゝァどん。き、聞かッし。人間、わ、僅か五十年ッ。ナァ、よ、よしか。其のごゝ五年イヤごゝ五十年よ、いいな、いいか、いいならいいといつたり。ソソレよしか。イヤ、ま、又そこにあるて。ハテそこもあれば、ふゝふたもありサ。エ、其の五十年の内に、タ、、樂しむ處は凡そ二二十年。ナア、カかゝァどん、ゞまうなぜといつて、見さつしやい。エ、ソレそこでもつてからに、ココゝでもつてエ、こゝでもつてが、ソ、そこでもつてだから、コ、こゝでもつてが、ソソそこでもつてだ。ナア、こはいもんだと、おもはつしやい。ソソレヲおれが講釋をして、キ、聞かせよう。エエ、ト、東西々々、まづマ、前の二十年、コ、こいつァさつぱりらちくちなしと。ア後十年、これも面白くないと。ナなぜといはつしやい、ソレ二十一の年から三十まで是れが十年、ヨよしか、ソレ三十一から四十まで、是れで二十年。ソレどうだ、そこで人間僅か五十年、樂しみ凡そ二十年と申し候

なれ、ナ、なんぼう悲しき物語にて候ッコ。それでわたし酒をのみ候ッコ。今日も三百五十文一升に三百六十四文の肴、ソ、惣じて三百五六十四文ほどトゝとられ候ッ。ハテたつきかつし。人間わづか五十年々楽しみ凡そ二十年。ナア酒でものまねばおやァ、御神ねえ、酒をのみでも、[illegible]まけますせェぬゥ引。酒でもむりにあがらすば是れまでお命やつゞきませんッ。ナア、わかゝでものコリヤかゝヤヒの。キきかつしゃれ。ハテ人間わづか五十年。々たのしみ凡そ二十年。とア、酒はのんでもなァまけますせェおゥ引。酒でもむりにあがらすば是れまでおいのち續きませんッ。[illegible]人間わづかご五十年たのしみ凡そ二十年。おらァの、か、ァきんや、おらァのコレわ、いならず燒餅なやかッしやんなこ。おらァの、コレ、わ、、かゝァさん、このたまのは酒が呑まいとッコい、飯のすいたおやわん酒ッ。デイ引ウップウ引。人間わづか五十年ソレ樂しみ凡そ二十年。ハテ酒はのむとも宿かえなこくさく／＼寺の一ッ家のばゝッコー引たつた五十年たァ、五十年のうちだもの酒でものまねえおやァ、まづ第一お身の害となります。そこでわたし、、酒をたべる。たべるでイ／＼ーイまた、今日は餘處の酒屋で三百六十四文のお肴、二百五十文一ッ升たべたで、イ／＼たとへ酒たべるとて恥すこしもなまけませぬゥッ。酒でもむりにあがらすば、是れまでおいのちもてぬさやァない人間わづか五十年たのしみわづか五十年、[illegible]ハァ酒にイあかァさァぬゥ五十年ッコ[illegible]／＼な

かァ左衛門尉どのそんなに、まじめで居給ふべからず。ハテ人間わづか五十年、たのしみ凡そ二十年
コレ〳〵かゝァどの、こちらむかしやんせ。うた エヽなァ、んウぢやァ、、いヒヒン〳〵な。ァ
アンァ、ン〳〵ッ。」

○小ごと上戸

よみ方一きり口上にかたく〳〵と御よみ可被成候こ

「コレハ〳〵皆さま、先刻からお待ち申しました。扨ハヤ何も致しませぬが例の通りえびす講のまねかたを致し升で厶り升。ヘエ、ひゐの内は皆さま御用も多う厶り升れば、御近所は夜分と申し上げました。グイッフウ能うこそお出で下さりました。相變らずヘイ〳〵ハイ〳〵ヘイ〳〵。エ、こりや三吉よ、お茶をお上げ申せ。ソレ〳〵お茶椀がまがつたわ、エ、ホンニいくぢのないやつぢや。コリヤコリヤらふそくの心をきれ、扨も〳〵ぶきような、しんをきらせれば消しをる。コレ誰ぞあかりを持つてこい。早く〳〵チョツやくにたたぬ。」ブツ〳〵ト口の内で「コリヤお坏臺があるぞソレ火鉢の灰がたつ。エ、疊ざはりの荒いやつぢや。われでは埒があかぬ、長松にかはれといへ。ソレ〳〵お膳をまつすぐに、グイップウ扨お吸ひ下さりませ、お加減がどう厶り升か。コリヤお盞をまがらぬやうにしろといふに、兎角なげやりのやつらだ、御免なさりませ。ナア〳〵、サアお吸ひグイ引下さりませ。トキニ御免を蒙ツて私から始めませう。扨お順に致して、まづ右の角見世にお居りなすつた三郎兵衛さんエ、まづ〳〵お取り上げ下さりませ。さやうな面倒な事は悪う厶り升。まづ〳〵トキニと、ヘエあなたお歯がおわるいから是れでも差上げませう。ヘイお肴な、扨お待遠でも厶り升うから、もう一ツの

お料理はお酌うからこしらへ、[illegible]とお通し下さりませ。[illegible]りの能い事かと感心人の[illegible]ませ／＼、イヽエさうではないわ、お料理といふ物は料理のお作にもあるが、[illegible]もあるかわ。[illegible]それでは夥しい數合はせではないか。エ、困つた奴ぢや。」ト客に向ひ「扨ハヤ何ぞあけるつもりで自身で河岸へ參つて見ましたが、あやにくしけでござりました。[illegible]／＼おまへ、魚尺は上もないものと申しますが、[illegible]て、「此の位のかれひが、勿論江戸ッ子でムりましたが[illegible]三百五十が負けませぬ。まづ此の節は定直段で納める魚屋ほどは大損でムりませう。[illegible]お能子を押付けるな。われがお酌は油さしから油をつぐ[illegible]にたゝぬ。[illegible]それではないわ、鉢肴を先へ出すのぢや。扨も／＼世話のやけた奴らぢや。[illegible]お富どの、[illegible]此方も[illegible]氣のかぬ人だ。此の肴は[illegible]の前に出す[illegible]だに、[illegible]取違へたに[illegible]、取違へた[illegible]するか[illegible]お膳が[illegible]い様子もや、[illegible]つぱり[illegible]又燕間にしてはおぞ[illegible]二階がいぶるぞよ。イエサとんとやくにたたぬやつらで世話がやけて[illegible]ぬ。[illegible]醉へ申しませう。お間もムりませぬ[illegible]しかしは一[illegible]致さ[illegible]爲に付いて居る、[illegible]つかりしたやつぢや[illegible]是れ、御付けられ、是れは[illegible]近頃恐れを[illegible]ト、、、[illegible]／＼。亭主八杯とやらで[illegible]から二たつお客が致しましたらば[illegible]

ましたて。此の御酒はお口に合ひますか、今朝口をつけましたがト八兩二歩替で取りました。ム、コレ酒から塵が出るわ、あれほど、よくすゝげと云ひ付けるに。ナニ、樽から、フム、コリヤ灰ふきを明けて來い。小口が塗つてあるから、へらへいとうに引ッこするとはげるぞ。トキニ傳六さん憚りながら戴きまするで厶り升が、持合はせましたから、イエサノ、イエノ／＼。」トかほをしかめ、「只今も申す通り、まう／＼。」ト、握りこぶしを口へ當て、ほら貝をふくやうにして「ザイ引ッップゥへイお肴をこれに。」トはさゝだけしを戴き、しかつべらしく、あたりをきよろ／＼見廻して、こゝとふたねをさがす。「イエサ構はぬ氣で厶り升が、何處でもと申す内にも一體に私共妻めが役に立たませぬから、折角お招き申しても甚だ不興。」ト、うなぢ小言の不興なるはえいゝすの蓋をこつくりとあけておき「コレお富どのに一寸來ていたゞかつしやれと、さう云へ。まアしばらく下は能いわ。コリヤ／＼さし身の種を猫にやらかされてはならぬぞ。ソレ口の下から茶碗を履きをる、足元の悪い。わがやうな役にたたぬやつは、と一人もあるまい。コレ槇がもえふさつたか、けむくてならぬ、釜の下の槇を引いて堅炭でもくべろと云へこ」ト自身にふきんをつかひ、ふろしき包みにて來りしはたをふき廻し、旦那あらはみ中にはひりたる手紙をかへて出せし「何だお手紙ドレ／＼」ト懐から目鏡を出して鼻へはさみ「エ、何々、ヽ、ヽ、ヽ。」ト前文は口の中にてよみ終り、「ハヽ、然ればトハア今晩蛭子講、ハ、今晩、蛭子講とハテナハ、ア蛭子講か、／＼相變らアすりや、／＼。」ト、跡は口の中にてよみ「コリヤ長閑よ、八右衛門樣に御念の入りましたお手紙を下され升、お添う厶り升。エ、折角お待ち申しましたお近頃

お残り多う厶り升。コレまだ[illegible]ひ切らぬ内に立たをる。それだから用向が辨じぬ、手をついて返詞をいへ。其そこでとつとこなた戴いたら吉兵衛さんに上げ申すがいい。コリヤ向うにある[illegible]杯をとりよせてこいよ。跡のお肴はどうおやぞ、其のソレお[illegible]の下にあるギヤマンの高脚杯を出すがいい。そつとしお割つてはならぬぞ。[illegible]藏[illegible]の[illegible]に八寸の箱が有るあの中に七合いりの杯がある筈だ、出してこいコリヤ〳〵さつよ、てまへの手が達かずば權介か八兵衛に下してもらへ。そゝくさして棚から落すな。何は、お蝶はまだお飯をたべやつたか、コリヤ〳〵其の[illegible]の[illegible]が持つて來て[illegible]に[illegible][illegible]りやれ。[illegible]は、一はりかへに[illegible]つたらなしい[illegible]だ[illegible]悪く[illegible]たか。[illegible]ら稽古[illegible]でもいい[illegible]根から身にしみませぬ。段數はおぼえても、[illegible]ふが大嫌ひで、[illegible]は[illegible]の[illegible]おソレきらへ[illegible]さらへと[illegible]ますと、さらひ[illegible]といふばかりで走り馬の[illegible]をたれるやうに、[illegible][illegible]わん〳〵ちよこ〳〵〳〵となぐり付けてハ、遊びたいで厶ります。[illegible]、、、、とうちやと度がいいか、よくば早く始めさつしやい。いつものソレ何がいいわ、[illegible]、[illegible]何よ、[illegible]、何[illegible]、[illegible]出さうでどう忘れをした。ソレ〳〵砂ふりよ、ソレ砂のふつた、[illegible]、信州の[illegible]と[illegible]盡しでなし、[illegible]、それ〳〵淺間山さ〳〵。[illegible]こいつあは其の淺間が得手物で厶り升。[illegible]絲がないこいつが[illegible]切つたか。チヨツわれがやうな物持の悪いながやりきんほうな者はない。[illegible]絲を買ひにやれ、[illegible]

早く行つてこい。ソレお銚子のおかはりよ。八介こつぶはどうぢや。さつヨ、七合入にはまだか。扠もいぶくてならぬ。アレおあかりがしめつたわ、コレえびすナニアノ三吉はやくおあかりを長松、コリヤ〳〵三吉ハおあかりよの。エ、やくにたたぬ。あくせくするから皆間違ふ。エ、やくにたたぬ、ホイ。」

上之卷　尾

江戸 式亭三馬 著

よみ方　こせ〳〵とこせつくあんばいに御よみわけ可被下候。

○啼上戸

すゝり泣「エヘツ、〳〵。グツフ〳〵。」トべそをつくり右の手で目と鼻を一ツにこすり「是れがマアおめへ、悲しくなくつてどうするもんだな。ちつとは私が心にもなつて見なさいやし。アレあの子がおめへ此の頃までをばさんをばさんとしたつてからに、赤い裁をねだつた者が、モウおめへ、あんな聟さんを貰ふやうになつたア、ノヤ。アそれにつけても死んだ子の年を算へるとやらだが、わたしらが中ッせへのおみきが達者で居ると、丁度あの子と同年になりやす。あの子とはホンニ中よしだつけノヤ。手習に行くにも毎日誘ひ合つて、朝習のお座ヲ出し合つたりお辨當もいつしよにしたり、三絃をさらふ、ソレ湯へ行く、ノヤ。夫れ私らがのは、早く死ぬせいかして器用でおめへ、アイサ覺えが能くツてノヤ、あれが亡つた當分はお師匠さんでも代けいこの仕人がなくつてこまると言ひなすつたアな。ノヤをばさん。」トじゆド

[illegible]出し「[illegible]わたしやァ大丹精を盡しやしたに、[illegible]端舌のがとつゝかず、今時に業やァして、利根の顔でも見し[illegible]内の氣休め[illegible]、[illegible]大風に[illegible]た様なむもあ[illegible]斯うして一日も存[illegible]、思[illegible]事[illegible]思ひ出して[illegible]す[illegible]〱〱〱〱」[illegible]叫び〕「アイ[illegible]お前是れも約束事よ。[illegible]」ト、およこを取上[illegible]馬鹿な事ッた思ひ出すめへと思つても、へ[illegible]酒でも存[illegible]、[illegible]のさ。[illegible]〱〱〱。」ト、大泣にオイ〱と泣出し、何だかくだら「ヤレ〱〱ヤレモ〱はや〱ァ、大きに取亂した。ヤレ〱猫さんお初におめにかゝつて、[illegible]な娑わが来とつたと思ひなさるだらう。[illegible]此の[illegible]に[illegible]それだから[illegible]に心易くしてくんなさるから、またしも夫れが樂しみで[illegible]堪忍しておくんなせへよ。[illegible]此の猪口はネ、お前の源八さんの秘藏だつけノヤ[illegible]此れを見ると又思ひ出しやす[illegible]、源八さんも達者な氣さくな[illegible]人だつけが、人間といふ者は[illegible]な[illegible]もんだ、[illegible]やがて[illegible]忌[illegible]ア[illegible]不常な[illegible]ぶ〱〱、[illegible]わたしも[illegible]一寸お[illegible]に、[illegible]お[illegible]に[illegible]ようと思つて久しい[illegible]で来てとんだ事をまひ出した。それでもおめへ、こんなに[illegible]さんを[illegible]嬉さんを死して行つたから、[illegible]も心強くもなし、[illegible]といふもやァね[illegible]氣[illegible]

たしを見なさいやし、總領どのはいまだにどらが止まずネ。二番目の勘七は餘所へ養子に遣りやしたが〇アイサおめへがたもしつて居なさる通り、そつくり世話なしにお役にたつやうにして遣つたものを追出してよこしやした。姪を娘にしてあれと一所にして内が納まつて能かつたが、ちやんと其の姪が亡つて、ヤレ血筋か絶えるの何だわ角だわと、親類が寄り合ッてたうとう突出しものになつたが、是れも尤もさねえ。わたしらでもお前、血筋が絶えちやア跡が頼もしくござりやせん。年よつて他人許りにつッ突き廻されちやア生き居る甲斐がねえわさ。わたしが勘七にもさういふ事さ一旦追出されるもやつぱり約束事だから、必ず人さまを恨みやんな。此の後心がけて今までの御親父の方に、何事でも有つたら人一倍骨を折つて上げろ。人といふものは一旦恩になつた事を忘れちやアすまねえ。」といつて聞かせやした。あれも成程と感心して居やすのさ。夫れにおめへ末子の妹はお屋敷へ上げて置きやすが、旦那さまがお二方で、もやひ遣ひさ。月に三番ヅヽ、お居風呂番が當るがチット大儀だといふけれど、御勝手が能いに、物事がふんだんだから、ヤア勤め能いけつこうなお屋敷さ。此の間おめへ初花が咲いたてつて、肝を潰してしらせてよこしやしたから、まつさらおつさら煮染と赤飯を持つて逢ひに行きやした。ヤレ滑つたは轉んだはと其の度に錢のいる事ばかりさ。勿體ないがお如來樣へ手を合はせる隙がござりやせん。ア、さぞお叱んなさるだらう。なんまいだぶ〳〵。トいたりおめ

へモウたんたりとおすゝあゝ御聴聞する事がならねえから後生はろくぢやァねえのさ。いつそ早くお
あふり／＼して詰らねえ物だと思へば、ヘゝ此とも早くアレお迎へが来ればしくて、ヽ死にたく／＼
なりやせん。ヽ死にたくつて／＼、ヽヽわたしやアこの死ぬのを待つて居やさアヽヽやア／＼
ドッハアハ／＼／＼／＼まア／＼となら「私が不断さういふ事さ。ヽ、この前世の約束が悪かつ
たらう、何たる業でこんなに苦労する事か、ヤレ／＼ハア浮世といふものは悲しいものさ、ヽ一苦
の辛抱だよ／＼ヤレ／＼／＼ヤレモ／＼／＼アヽいくら思つてもつきねえ事だ。ヽヽ
アひとつ上げよう、わたしばかりの呑んだ。ヽこもうアはうヽ念ヽお、たゝまア、たつた今、お
御堂さまの前で南無をたゝいたからおなかは能い。ヤレ／＼／＼、ア、なんまみだぶつ／＼」

ゐけん上戸

○意見上戸

一九の作

「ヱヽ己れが酒に酔ッたからいふぢやアねえが、貴公も若い内は酒を呑んで過ごすがいゝぜ。人は悪い事はいはねえものだ。おいらは若い時から相應に錢をつかつて見て、だらしなくもしつかりもした、酸いも甘いも呑込んだもんだから無理はいはねえ。○ト今時誰だの彼だのと言つても分るめえ。一人もねえわな。おいらが十八大通とよばれた人達と、つき合つて来たもんだ。それだから分限六にはてえ、心安くしたこつちやアねえ。今でこそ酒を呑むけれど、若い時は下戸だつけ、三十二三から呑み出したもんだ。なんぼ利口だの發明だの才子だの、目から鼻へ抜けるのと言はうが、二十までは血道が定まらねえ。三十か四十、五十位の年恰好から呑むと丁度に薬だ。ところが年になりやアいくら呑んでも間違ひがねえ。ハテ酒を呑むなら、なるたけ野暮な意見はしねえ。ヨウ酒もならのだ、才能いふ。しかしながら能く辨別して呑まつしやい。それが一の行儀だ。獨身なやアいゝから辛抱する氣でも、友が許さねえ。ところが若い者が町の通りで、辛抱しながらも辰巳や北へ、おもなくやうな物で、辛抱はいゝがねえものよ。オツト目が三角だの眉が顰つたの神が悪いの、何の面のと道樂をするのも若い内の事さ。ハテ氣にいつたか悟れいを持つた時が樂の川

柳點にあれ、その當座晝も簞笥の鐶が鳴りといふやうなもんで、半年も過ぎりやア珍らしくもなく、同じ心もちだ。能い女も惡い女も分はねえ。女房は置物だナ、といつて又先にも荒神様があるから、まんざらにもされねえと云つたやうなもんだ。マア女房を持つたら可愛がつてやるがよしさ。親の氣休め、コリヤア俺が意見だぜ。コレ聞かつし、まだ主たちに意見がある。ソノ此の頃もふく／＼見りやア羽織の紐のながいやつを胸高に引詰めて結ぶが、あれは見にくい容だ。羽織の襟の折返しが襟にたらぬ傷だ。とか何とか口のへらぬ事をいふが、惡い風だぜ。餘國の人に見せたくないもんだ。ソシテそんなの髪がどこやらの風とか云つて鬢指を長くして鬢をだらりと下げるが後の方から見ると、たひらぎを二ツ抱き合にしたやうで甚だ不様だ。上方では被を用ゐる、平人は丸綿をかぶるソレ人がらがいい。しかし今は藝者などが至極おとなしい形だ、夫れに引きかへて、れき／＼の女中がたひらぎのやうな髪かざりへ、手拭を冠るわさ、あて事もねえ。おいらが覺えてお高祖頭巾の外はかぶらねえものだ。近頃は堀の内へ行くにも太郎さまへ參るにも、りつぱな供を連れて、紅鳶だの丁子茶だの煤竹の縞縮緬のと、流行物を引つぱつてもウ黒繻子も古い、當世は黒繻子の帶だなどと、意氣も不意氣もわかつたも、しるもしらぬも黒繻子の帶としやれて、其の天窗が手拭だ。頭巾でも忘れたら仕かたもねえが、わざ／＼新しい手拭を買つて、けふの晴としてかぶるは嘆かはしいことだ。此の間も去る處で婚禮

があつて、仲人のかみさまが是非かいどりでなければならぬと極つて、損料物の[illegible]甲斐[illegible]て、生まれて初めてのかいどり褄うちかけ捌きで、トつまんで嫁の内へ行く處が天窗はやつぱり手拭、ナ。ト法外な沙汰ではねえか。まづ手拭をかぶるといふは掃除でもするか、又は田樂でも焼くといふ時にかぶつた物だ。さらば頭巾が能いわといつて、ちよつと田樂を焼くにも簞笥の引出から、頭巾を出すといふぢやアねえが、兎角今の人は心入が間違ふから、そこを意見するのだ。ア、醉つた、コレちよ杯をよこさつし。こりやアおれが意見だぜ、用ゐて貰はねえけりやア恨みだ。サア〳〵酒にしよ、酒にしよう。併しコレ意見に用ゐて下つし。些とづゝのむがいい、いゝ野暮な意見はいはねえ。サア早く杯をよこし給へ。モウおいらが年になつちやアいくら呑んでも能い。

○ねわ上戸

上方　[illegible]

ハイ此中に[illegible]ほしさにとおもふ〳〵、[illegible]がないとおもひ[illegible]、ハイ、孫左衛門様、ハイ孫左衛門様と[illegible]、孫左衛門様に、ハイ、孫左衛門様でございますか、お[illegible]申しとさう、はいはいたしましたか、一ツお上りいたしましたか。[illegible]にあまい。[illegible]にあまい。ハア是れは[illegible]のまい[illegible]是れに[illegible]の[illegible]が、[illegible]上つたと。[illegible]それは、小紋なか[illegible]衛門御酒のお相人に罷りなる。[illegible]、ト、はなと目でかはり「[illegible]お酒をお[illegible]だと、[illegible]お[illegible]なら[illegible]これでと、[illegible][illegible]の升[illegible]〳〵[illegible]とひお間にも致せ、[illegible]様のお手もと[illegible]つとまりまらぬと、お間をおつへしてお手もと申、[illegible]、相成[illegible]かいなから亀右衛門、御酒にたて酔つて[illegible]、是れは[illegible]又[illegible][illegible]の[illegible]が青い[illegible]兵衛様、[illegible]ますか、大盃をひかへその[illegible]を御存じでございました[illegible]相ならないでは[illegible]御存じだらう、御存じでございましたお[illegible]といつては

受取られまい。ナ、なんと思召す、ナア金兵衛様、物の道理がさうではあるまいか又あるか、あるまい。ナアそこですつぱりキウ引ツと見事に召上つた所を拜見致さねばゲイッ。」トおくびをみこみ、「小癪ながら龜右衛門御酒の前へ對しても男がたゝちませぬ。グイ引ウツプウナニノ＼何か大分そこらでお笑ひなさるが、ひやばかいながら龜右衛門笑はれる覺えはない。イヤ又眞の事たがお笑ひなさる筈は厶りませぬ。何がをかしいナニ何がをかしいのだ、をかしくはおかまの前やかましくは癪たかぶれ。」ト目をすゑてよだれをたらし、中をぎろ／＼見廻しに「唯一モシお笑ひなさらば小癪ながら鶴屋龜右衛門、ひやばかいたから相人になりませう。イヤ相人にならう。ナア、ほんの事たが又ひやばかいながら龜右衛門が相人になる人はあるまい。あるか、イヤあるかよ、あるならあると云へ。ナニあるものか、あるまい、ナ御亭主様。ナ、ト左様では厶りませぬか。ナ何レもさま、ヒヤ／＼ひややうでは厶りませぬか。」

○利屈上戸

「酒は百藥の長なりといつて、少しづゝ呑めば藥さ。多く食らへば命を斷つとエ、アノ、タシカ律義ではないヘエ引オ、ソレ〳〵、時珍とかいふ唐のお前、昔の聖人が云つて置かしつたさうさ。是れを天の美祿だと覺えて居るは間違だて。あれは夭の美祿と申して、夭とは夭と讀んで、夭の爲にはうまい食物だといふのだけな。ソレ天の字は二の字の上へかけて人といふ字を書く。又夭といふ字はソレ、チョイと點を左へはねて、大の字を書きます。そこでアレ天と夭と間ちがへるだ。かやうにお噺し申せば、どうやら博學大才のこ〳〵さい〳〵の趣に聞えますが、實は私もしらぬが、前かた私が鄰に聽取傍聞さまといふ物識が有つて、だいぶ面白い故事をききためて置きました。酒好まざらんは玉の杯の底なきが如くいとさう〴〵しいと、何とかやらいふお經文から引事をして、むかし平親王淸盛入道前關白太政大臣の弟宮に吉田の少將といふ人が有つて、その若君の石堂丸が倭宗太といふ人買のために殺されたを悲しんで出家した。ドイ是れはお噺がこんがらかつたがマアお聞きなさい。そこでソレ吉田の兼好法師となつた。その人が最初申す通り、お經文から引事をして、徒然草と申す草ヽお書きなすつたさうさ。アノエ、その草が田圃にでも有つたら拾はうと思ひますがとんと么

りますが、その[illegible]といはつむやうには、つれ／＼草をとくと味へて見ろ、どうもいへぬ物だと[illegible]しましたが、[illegible]でも[illegible]草でムり升。[illegible]との[illegible]は[illegible]の[illegible]を買ふとやらで、私も其のお方のお蔭で、[illegible]で、[illegible]だの[illegible]郎だのと[illegible]ひましたら[illegible]の[illegible]いこくなり、れいこくといふ[illegible]後からごらうじろ、能く似て居るものがある。則ちれいこく天と[illegible]能[illegible]、[illegible]れいこく天と申せども至つて深い譯があつて、[illegible]大國天と改めた。そんな[illegible]大黒天と名をつけたと申[illegible]今、甲子侍に當へる物はなんだ、[illegible]り、[illegible]天と書いて[illegible]天と[illegible]へたが、[illegible]の黒の字を取つて、アレ大黒天と書き來つたのだ。[illegible]に[illegible]人の禮だ、[illegible]申し入れます、是れ禮だ。[illegible]にはお拂ひ有りがたうムり升、是れ禮だ。こくとは[illegible]に[illegible]國といふ事、[illegible]禮儀三百、[illegible]三千、[illegible]兩まけて三兩と申して、此の國は禮で納ま

つて居る。其の國とは則ち何だといふに、天地けんがく、宇宙とう〳〵と申して、天地の間の事をいふ。天地があつて、人がなくては納まらぬから、そこであれ、いざらみあらゝぎの尊さまといふ神さまが出てかさゝぎの橋といふ橋の上で沓を落すと、下から張良が斧を持つて龍蛇に向ふと云ひながら、大音に呼ばはつて出ると、其の龍が忽ち玉子に化してその玉子が割れると中から鶺鴒がひよつくりと出ました。其の所へ素戔嗚尊でまが、エ、アノこはだ、アこはだではない、なんでも魚の名だつけ、ヲヽそれ〳〵稻田姫よ、稻田姫とふたりで其の鶺鴒を捕へて、八股の大蛇の尻から出た天國の寶劍をもつて、何でも角でも構ふことはねえぞ、豐吉原の隅から隅まで、ぐつ〳〵と祓つてくれと、祓ひ給へ清め給へと八ツの御耳をふり立てゝふり廻すと、聞きなさい、爰が神變不思議とやらで、鶺鴒忽ち國常立の尊さまと申す神になつた。そこで龍が鷄卵に變じた故、混沌として鷄の玉子の通しと神代の事をいふのさ。混沌とは今も大取込で、ごた〳〵する事を、どんちやんして大騷ぎだといふやうな物で、鷄になつたり人になつたり、龍だの玉子だのと大きにごたつく故、是れを神代では混沌、今の代ではどんちやんと云ひ升。チンと聞えましたか、まだ〳〵噺せば長いが御退屈だらう。さらばもう一杯呑みませう、ア、能い酒だ。清めるに奈つて上酒となり、精酒はのぼせて頭痛となり、濁りは下つて中汲となる。やつぱり神代のことが離れませぬ。ドヽ、その跡を申さうが、先づ今までの噺の夫婦

の始まり、天地あつて人なき時は此の國が納まらぬ。ソレ天地人の三才、是れを象つて松竹梅の三ツ組、サ聞えましたか。おつにくだいた物だてネ。すべて陰陽といふが離れてはすまぬ。夫は陽で婦は陰、お杯を受ける、是れが陰で、上からお銚子でつぐ、是れ即ち陽だ。ソレ御覽じろ、是れから考へ入ると面白い事がある。陰は靜かで陽は動くものだ。人も餘所へ行つて御覽じろ、内には不時といふ、ソリヤ不時は陰で靜か。サア内に居て用をたす、ソレ用で動く、ネヽ陰陽の道理わかりましたか。おまへがたのやうに耳の穴の明いた衆には、こんな噺も具合があつて能う分り升。萬事陰陽和合がついてまはる、臼が陰、杵が陽、雷盆が陰、雷槌が陽、[illegible]酒で人さんに酔ひが出た、是れ利酒だてネ。トレトレ、杯と銚子の陰陽天地はあるが、酒といふ人がない、ソレ銚子のあはりまア、利に落ちた[illegible]

○腹立上戸

「よみ方」ぺらり〳〵ぺら〳〵〳〵〳〵トまくり上げてよむなり。

[illegible]此の肴ばかりやすいのも、[illegible]でござりやす。甚兵衛さんも客は[illegible]藤兵衛さん[illegible]客[illegible]。[illegible]忽たがーレ、八右衛門さんが客なら傳八さんも客でござんす。[illegible]客[illegible]おもんゆう[illegible]客だつてねえか、客[illegible]客[illegible]にもや[illegible]大屋さんの店賃の通に右衛門さんが胴付だから、俺ら胴付だア。[illegible]此方も権右衛門さんも帳付[illegible]た[illegible]を持つて[illegible]なやうなお[illegible]なた、山[illegible]も上戸だのに。おもしろくもねえ。吸物も出さずにつて[illegible]理に[illegible]されたやア、あばら骨の[illegible]。[illegible]いやだい、面白くもねえわい。コレ見ろ[illegible]の酒の[illegible]へ[illegible]を[illegible]した[illegible]て、是れが直ではれる物かい。醤油が措しかァ、一合二十四文の割の強勢利くりを買つて[illegible]一人を[illegible]にした、是れでも[illegible]で[illegible]あたまを[illegible]に[illegible]、昨晩[illegible]引つこんでしまうたやで[illegible]。とてつもねえ、ごろはふんなやァねえか[illegible]もし[illegible]から[illegible]右衛門さんの顔でござりやすがね、マア聞いておくんねえし。[illegible]の中でふりやすが、[illegible]こちらもおめえさん無面目な。[illegible]つ子でもふりやせん。[illegible]断うたといふ[illegible]

で居やさア。昨日長屋番が廻つてサ、表に斯う／＼で嫁入が有つたから、是れ／＼をつかふッサこ壹
人前あたま割がいくら／＼と、ソレようごぜえすか、相應に付屆けをしてサ。承りやア、おめさんに
も御葬禮が厶りやしたさうだ。おめつたうごぜえすと云つたら、アノ藥罐爺めエ、何てつたと思ひな
ある。瓦町の井戸へ銀の簪を落したといふ面アして、ウイおかちやじけなう、ごじやいやす。ト
けんもほうろゝなあいさつだア。なんと思ひなある、是れおやア腹ア立つもむりおやアあんめえ。う
ぬ、はつつけぢゝいめ。是れエ、きう／＼す籠へナ、駄鳥を飼つた樣なごたくを吐えても、干物の
天窗をナ、黒つくすほりにおつ焦して、夜食の菜に取つ置くとはチツト違はア。うぬ、昨日ッから胸
にある事ッたぞ。ナニ歸りやす、とはうもねえ、ひらくの何のと小面倒だア、けへらア／＼おらア歸
らいこなアんの事たい　おかけのねえ、男ならどいつでも留めて見やアがれ。ほんの事たが是れん許
しも指でもさしやアがるとおれ樣があひてだア。○ナニサかまひなんな。ナニ酒エ、エ酒が呑みた
けりアや買つて呑みやす。伊勢屋でも山十でも、通でお取付けだア。錢の出ねえ酒エ呑むやうな安つ
ぼい兒いおやアねえ。金箔のくつ付いた東つ子だア。ハテサ酒は嫌だといふに、エ、しつつこい權右
衞門さんだア。○アイ、アイ、アイさんなら、けへりやすめエ。常不斷かゝアをたゝいたり、踏次を
たゝくかして、お世話にばつかりなる大屋さんの仰しやる事たア、要アは一ばんわつちだつても呑み

こまりますやアすみやせん、おつかさん、おかみさん方の前だが出入引きのやア一枚や二枚はまだ出て、わけのわからぬ聞いた上で、ネエ、そこやアお身様が心得違へだとか、但し己のしかた理窟だとか、ましんは少しづつの無理をいつても、済ましまして付けて、手を打つてしまふといふ物でごぜへます。○アイ／＼、ゴツムりやすよ。オツト、こぼれやす／＼。ヲンモだがれも気に障つたら不承しれんし、主性根だアナハ、、、、、ハ、、、ニ大屋さん、そこらは宜しくおたの申しやす。マアわつちも主商ちやア、気にやア何もムりやせんわナ。つい虫の居所が悪かつたから、あばら三枚へさはつたといふやつさ。ご免なんしアツハ、、、。」ト笑ひ「エ、へ、とんだ業いふ……」

さうざうし上戸

○さわぎ上戸

[illegible]

「一トツおあひ」[illegible]おあひ[illegible]、何でも有りさうなもんだ、おあひの[illegible]に御ひいき[illegible]おあひ日までわしや九十九まで、おあひ[illegible]の正月と思ふぜへ、ナ、おもしれ[illegible]おもしれへ。[illegible]「[illegible]なんでも俳ひ[illegible]面白い[illegible]ッたんだ、こいつらアおれが地口はみんな古いなどと上がうちに下卑にとり撥ふが、おれが[illegible]まつほど新しい。俳しながら[illegible]の内から、ギャ〳〵[illegible]い者、その地口は古いといふもとい[illegible]でもない。其の時に[illegible]れ、こゝに[illegible]んで居る[illegible]共に[illegible]しやくにさはつて御[illegible]にいれの[illegible]こゝや日本や[illegible]音ではわからぬ、ハヽきくかきかぬか、まづ口をきかせてもらはにやならぬ[illegible]ヤーの[illegible]ナ〳〵此の度のハナがナるわざはア[illegible]の[illegible]、是れを[illegible]、[illegible]厚大[illegible]の[illegible]ではなるまいぬ、ハヽトヽ〳〵ここで指されとへとほめたね、[illegible]くたびれた、ギャ〳〵[illegible]を[illegible]やたらと[illegible]面白い[illegible]そうなア[illegible]方へか、まだ早い〳〵、[illegible]いつでも[illegible]が[illegible]いと云つたな。コレ[illegible]つても耳は[illegible]はねえ。おれも[illegible]の長いのと、[illegible]が[illegible]洒蛙は今始まつた事ぢやアねえ、何處でも通つたもんだ。そんな耳つこすりをするより、ナア、座敷を

引つばるぞ。サア／＼是れから夜明し藝者と首引き始まりさやう引。コレ／＼／＼コレ／＼／＼／＼お角かお百かお今は居ねえか、銚子を替へてくれ。アレサ拳で立つといふ奴も古い／＼。誰ぞ居ねえか。女子共は居らぬか。銚子もて銚子もてやい。」ト、うしが笹色にて立ち上り、羽織の片袖ぬぎて由良之助の見えになり、浄るりのうちはおてぶりの狂言にて、義太夫ぶしにて處九におとすところへかけにをどり出すなり。上るり「あたり見廻しゆらの介、つり燈籠のあかりをてらし、よむ長文はみだいよりかたきの様子こま／″＼と、女の文の跡や先／＼で、じん／＼ばかどらずウ引チヤラ／＼チヤンラチヤンラチヤ／＼チヤンチヤ／＼チヤン。ハア引色がしよん出來たよ、梅干にしその葉チヤ／＼チヤンチヤ／＼チヤン。をどりソレ／＼／＼／＼一夜のたのしみ十日のくるしみ、二十日のやりくり三十日の書出し、おらやだ／＼／＼トウ引。」

○しやべり上戸

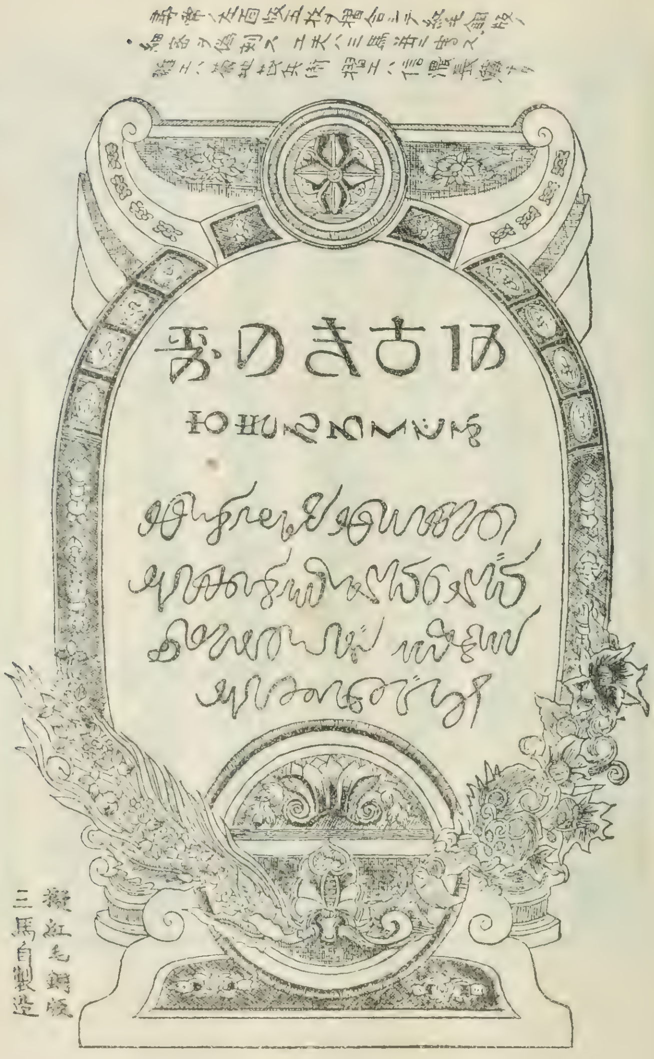
一上よみ方 かみそりのはのごとくべら〳〵べら〳〵〳〵トよむなり。

「コリヤ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵お歌さん〳〵又逃げるか、此の子は俺が酒に醉つて來ると逃げる。なぜ逃げるもんがァ引」氣色になり「コレお歌坊ャなぜそんなに逃げの伊久だ、公は恨みだの。逃げるなら俺と一しよに逃げ給へ。すぐに小石川の段だェヘ〳〵ェヘ〳〵ェヘン大酒下り酒本吞太夫一銚子出語り始まり引てん〳〵〳〵〳〵てれてんてヘてんつるつんとん〳〵イヨ三絲づりますッ「左七はつもるうき戀のうきが中なるうきせたい、うと〳〵戻る我が家の內、ちらりと見るより走り出で、ォ、戻らしやんしたか、待ち兼ねた、今まで何して居やしやんした、遲かつた案じたと」ァ、テン。「女房顏してちとばかり。世帯めかすもかあいらし」ヅヽトン〳〵〳〵〳〵イヨ〳〵。油屋に八丁堀に、俺、たつた三人外にはないぞや。大將さまやつちやえらいぞ。ホンー黑いもんだらう。テツのねえ所が奇妙ちやうらいやの若旦那ありがたいのみそすで一杯吞みかけ山のいもとはまめで大きうなり田の不動妙でこぜすの干物でお茶漬さらさの風呂敷包。奇妙希代不思議、ごんめうごてれつ希有けちりんだらう。ナンダ、「下手だ。」チト待ち給へあるぞ〳〵そんなら木琴にしようか、かんするかんするに致さうか。オヤ私はモウどう致さうの、誠に〳〵感心だの。眞にかえ〳〵ャ〳〵〳〵

けしからねえ。わつちやアいやお前なんざア、お父さんにさう申しました。是れにもたまア、わたしはアの
義治よろしく三絃申しますだよ。ハイ〳〵ハイ〳〵はははいのはい、ハイ〳〵ヘいはいのはい、
二ッ合はせてはヘヘは、はヘヘいの、ヘははいゝ二ッ返して、ヘは〳〵〳〵ヘいの、ヘはへい、エ
口が酔くなつた、中休みに、ちよつぴり字餘の端来らうか。ナトふるいが聞き捨へ、ヲヽ貞子ぢやア
て貰ひてえのサッドよしの木滑の太さるすべり、おれが聲は調子が變つてお間に合ふまいじやあるまいか
東西〳〵大きな濁で聲をいための筋、エヘン〳〵エッヘンッ一心つくして送りし文ふみ　ぬしはうは氣でねつからまるでまりあうにもせずに
しかし此方で、貧樂をいふやうにいへども一ッいうた、親の仕置が又はやぶりつ直さるゝ
も、身嗜の眼つしかる手によつてきたいまでは申しまする。
いやさア〳〵本はござりいのみの音でさ、いやらしやれ〳〵、かんでつやらしやれ。ヤアヤア元さしや
ねツヨイ〳〵、さうでござるなお袂この此の聲のあだな所は惚れる氣なしかナ。もし御用ならば此の
間にお惚れなさい。ヤアコリヤ大願成あつたかい下戸のたてたる藏はなし。上戸の建てたる藏が見た
くは新川新堀深川へ行きやれ、酒藏あれども酒藏なし。しかし文酒と酒とを一つに食ふは、いまうの
やうかん有見の蔭、名代のわるい盗人上戸。いかがわるいか、お手に取つて御覽じろ。運平のお手に
は柄のあいろが分らぬ。百貫の鯉に爺いつかない。こふした所つてはなぞね仕馬に軽文、牛の耳に風、
頭の尻にさいつちたら、燈臺元暗しはヤ、ハリ燈臺を暗しでござればなア、二千疫の、半町の道が大な

ほえる。川向ふの喧嘩両成敗、鶏に小判鶴の真似して色の黒いにはにくまれぬが、烏勘左衛門うぬが内は焼棒杭火が付き安い。早く行つて水かけ論、両方聞いて下知をなせ。子どもの事に親が出る長いものにはまか般若腹を立つても叶やせん。小糠三合持つたらばいり聟なんぞは止めなさい。かご屋の太郎兵衛頼みやす。一筆啓上啓達なり。とごまかしてよいとこなり酒に酔つたで厶りやす。酔へばしやべるとおつしやるが尤も至極で厶りやす。しやべらぬ気でになりやすが、酔ふとむやみにしやべりたい。それゆゑやたらとしやべりやすで、厶りやするで厶りやす。厶りやするから厶りやす。こゝらでめでたく止めやせうで、厶りやするで厶りやす。是れからあとの生酔は、又来春の後編へ、しつかり穿つで厶りやす。厶りやするで厶りやすとめでたし〳〵。

無而七癖 酩酊気質巻之下 大尾



擬紅毛銅版
三馬自製造

阿漕物語序

今茲丙寅春三月吾友式亭三馬罹祝融氏之愁而寓我柳齋數月每夜挑燈登樓迨深寂若無人只聞晴々有呻吟之聲而已余不知其何爲者一時忽悟徐言通宵候足下之動止豈得無有

所編輯乎嘗曰讀燕語燕郎把
一套之稿本欲與而如有所遜逃也
乎强奪之主刻被覓則題曰阿漕
物語構思精絕固其分也何待稱
譽焉予幸看照乎之式而生乎東
海之濱二十三年于茲矣而插插
於產業而正覓雲煙之過眼也

雖偶來暇隙而屬自二三之冊子
徒偷巻度綿亘數年碌碌殆如
沙礫也不及于彼盾販曲師之名
于一世也遠矣今臨足之下有此盛擧
心窃有慚葉敬借巻端而一言述
吾意也不知許否武夷彰過笑
回諾唯命是聽遂為序于時

文化三歳次丙寅夏六月中浣
枰齋野客灑毫于佐原之
小築

江戸　式亭三馬醉書

流轉數回阿古義物語述意

○這ノ稗史ハ時代ヲ東鑑ニ據ルト雖モ、素ヨリ作リ物語ナレバ、虚誕ヲ交ヘテ空談ニ近キモノナリ。然レドモ忠孝義信、節操貞烈ノ偉ヲ故ヲ記シテ、勧善ノ一端トシ、奸佞邪曲、悖戻兇悪ノ事蹟ヲ顕ハシテ、懲悪ノ一助トナシ、尚因位果、究ニ應報アル故ヲ示シテ、天羅地網遁ク漏ラサザル理ヲ覚得ナシム。

○文ハ和漢ノ雅俗ヲ混シ、晝ニ古今ノ變態ヲ管ハザルハ、邇來小説ノ通例トイヘドモ、這ノ稗史ハ雅俗ヲ混雑スル事他ニ倍セリ。試ミニ其ノ一二ヲ云ハヽ、貴顕ノ言ニ、足下、閣下、俺等ヲ以テシ、野人ノ言ニ、老爺、老婆、吾御前、其方等ヲ以テス。汝、我、吾君、他、和殿、在下、拙者、吾儕ノ如キ、凡テ猛烈ナル丈夫ノ言ハ俗ニ從ヒ、艶冶タル婦女ノ言ハ雅ニ從フ。是レ乃チ其ノ人ヲ其ノ推トニ由リテ、人情移リ易キヲ專ラトスル所以ナリ。仍リテ文體定マラズ、句調モ整ハズ。這レハ是レ勾欄ノ演劇、每齣ニ、脚色ト介科ノ革ルニ齊シク、開場ト第三回ト、趣向ノ行違アルモ、雅ナラヌモノナリ。且婦女子ノ讀ムニ倦マズ、傍人ノ聽クニ解シ易キヲ慮ヘバナリ。是レ余ガ一家ノ口調ナレドモ、句々備ハラズ、字々選マズ、固ヨリ文章ト云フベキモノニアラズ。戯レニ[illegible]所ハ、戯場ノ語リヲ聞ミテ、假做聲口技的ト云フ類ナルベシ。且一頭流布ノ小言ニ喩ヘバ、[illegible]ク

英ノゴトク、胴ハ雨月西山ノ如ク、尾ハ八文字舍本ニ齊シクシテ、鳴ク聲鵺ニアラザレドモ讀聲傀儡院本ニ似タリケリ。

○虛ヲ以テ毫ニ傳フル事、和漢小説家ノ本意トスレドモ、年代季月ヲ訂シ、子孫苗裔ヲ索リテ、事ヲ實錄ニ擬スル屬ヒ、頗ル正史ヲ妨ゲ、俗耳ニ毒ヲ流スノ罪アリ。仍リテ余ガ著作ノ小説ハ、強チ系譜ヲ拾ハズ、日時ヲ委シウセズ、又瑣細ノ事ヲ述ベズ。

○文化三年ノ春、北總ニ遊ブ頃、這ノ書開場ヨリ肇メテ、第三回ニ至ルマデ稿成リシガ、例ノ懶クテ放下ケルヲ、書肆ノ責ムル事頻リナレバ、再ビ二之卷第四齣ヨリ毫ヲ起シテ、竟ニ發市ニ及ブ、故ニ柳齋ガ序文ハ、這ノ書初卷ヲ編メル頃ノ作ナリ。

○這ノ書編述未ダ稿ヲ畢ラズ、全部八卷、先ヅ半バヲ裂キテ世ニ廣クス、後帙四本、開市ノ日ヲ俟チテ高覽アラバ、余ガ幸ヒ甚シカラン。

文化六歳在己巳十二月上浣　式亭三馬欽曰

舊本阿漕草紙　全

あこぎのさうし

なき世がたりの色々に、あはれびさしき事ながら、あこぎが浦に住みける下﨟なれ、もとは伊勢平氏なりけるが、もののふの心ざしなくて、いましめをたのむ網を下して、今の代々まで渡りきたあしを引かれ侍ることそ物うきわざなれ。やつがれ伊勢のほとり山にとゞむ人の族でまかりけるついで、観音堂にまゐるとて、あこぎが津にさまよふことの侍りて、むかし思ひ出でてあはれ廻し、所の翁に聞きける事を都のつとにとてしるしけるも、をこがましきわざになむ聞え侍る。つらつら事のやうを尋ね見るに、此の海原は大神宮の贄とるかぎりにて、なかなか人のまゝならぬ所なるを、一志郡鎌田のぬし、もとは左京進盛光の子なりける、平の長之允貞光とて、世にしられたるものゝふなりける家に生まれ、伊勢少掾に任じ、やゝよせおもかりけるまゝに、よこしまの行ひ多く、またまたこの浦に人を出して網ひかせ、あまさへ後は事ひろごりて、贄の料までからはにさまたげけるまゝに、あこぎの長、にへの浦に、古より、みたけなるおほやけの御せごと侍りて、いらひかなはぬよしさます

まにこたへけれども、やはかもちゐばこそ長さへなごめて、いよ〳〵張行しけるよしを神宮にしり侍れば、宮司らやがて公に告しけるを、例にまかせよと官の仰せきびしかりけるを、よの例にせよやとて十の禰宜奉行しけり。次盛此のおもむき聞えければ、むかしよりこゝはわが任の國なり、一浦など心にまかせざらむや、ひとりなど魚とりたるとて、神膳のたらざるにはいたるまじものを、やをら宮司等が公に告せし事こそ安からね、此の上は一族等催して贄どめせよやとて、國の平家百二十騎揃へて塔世の橋をきり、粟が原より多門の渚にみちて、あはびとる贄のあまをさまたげける。十の禰宜すべきわざなうて、國司の衙に告しけるゆゑ、守うち聞きて、かねて官符もありける物とて、つはものそろへて軍に及びける。なじかはこらふべけむ、次盛打ちまけてとらはれにけり。のこる平家等は國をはらひ、張本なればとてほのずまにまかせて、いきながらふしづけにつけけり。けふよりのことつゝしまむと俄にさけびけれども、法にせよや例にせよやとて、打ちかゝり打ちとりつひに沈めぬ。この浦にはあのの明神まし〳〵て、贄のまもりし給ふなれば、とがめいちじるしかりける。そののち次盛が靈にて癘はびこり、人のうする事ありければ、僧の行鎮塚に候ひて、後の世の事ねもごろにしけれども、猶やまざりければ、みやすの友盛といへる平氏なりける神つかさ、ぬさかけて祠にいはひなだめ侍り。今は人もおろかにてまことなうしなひ、貞盛のいはれしは八幡ぞとまをす事に

はなりき。建長年中の造りかへの輪蔵に、まさしく平氏八幡の社[illegible]とよむ[illegible]ける。其の
輪蔵は[illegible]寺にありしとなむ、なにとこ[illegible]の風にはあることにやられおほつかなし[illegible]いまの[illegible]
[illegible]の歌、いにしへよりおほくまをす事なり。此のふしは[illegible]、山内[illegible]かさりしけるまゝ
くとほり書いて、京にかへりけるまゝ歌よみて、右府の[illegible]にみせける。
伊勢の[illegible]くは[illegible]るべきやあらざるか[illegible]の道のうてなは
[illegible]

明徳二年十一月三日

[illegible]之[illegible]

右一冊借用中井東家本而写之[illegible]

丙午孟春上旬

兵部少輔[illegible]

[illegible]中原[illegible]

[illegible]政[illegible]

勢州阿漕浦事蹟竝地名考證

日本書紀、萬葉集、大系圖、古今六帖、勢陽雜記、宮川日記、洞津考、參詣記、名寄歌枕、兩伊隨筆、その他くさ〴〵の書をあつめてこゝに掲出す。

阿漕が浦は伊勢國鈴鹿郡の海濱なり。今は津の城下なる岩田橋より巽にあれども、古所詳かならず。坂上佛が參詣記に云く、○安濃津を出てあこぎが浦を過ぎ行くほどに、鹽屋の畑心ぼそく、うはのそらに旅たつおもひたそへ云々。往昔のありさまこれによりてしるべし。凡て兩宮の祭禮には、干鯛をもて御饌とせり、これを御幣鯛或はゆふけ鯛、又誤りていぶき鯛ともいふよしを聞けり。毎年の例にて尾張國智多郡篠島の神主より奉る。これを神供として、其の餘りは正員の徒、三祭の翌日宿館にて拜味するなり。其の魚を採る時は、長官より幕二張を船に張りて、一日に採り置くこととなん。或説に、いにしへはこれを阿漕浦にて釣りしといへり。鯛は八十八夜の頃に至れば、所々の海に浮きあがる、これを九州にては浮鯛といふ。されども海中悉く浮く物にあらず、國中一二箇所に限りて會まる。此の兩宮近き海より多しといへども、阿漕浦をもて鯛の會まる所とす。年を經て其の所

を更ふる事あり、故に往古に此の浦にて他漁を禁めしといへり。されど密かに漁する者のありて、度重なれば竟にあらはれ、罪せらるゝ事など、間々其のならひもあるよしをいへり。こゝをもて古今六帖に鯛の題にて、

あふことを阿漕の島にひく鯛のたびかさならば人しりぬべみ

○この歌を按ずるに、阿漕は地名にて、むかしは一つの島にてありしものか。其の歌を翻して、

伊勢の海阿漕が浦にひく網のたびかさなればあらはれにけり

と世俗に誤りを傳へしなり。阿漕の文字は〔阿古義〕安古木等書けり。按ずるに濃の字を濃と訓みて安濃浦を安濃と誤りたるものか、今いふ津は安濃津といふべきを、いつとなく津とのみいひならひたるなるべし。こゝを津といふ事は、宿昔船着海濱の水門にてありしゆゑなり。むかし伊勢津彦の供奉の神に、饒雄彦といへるあり。此の神こゝを領せしより年を歴て、桓武天皇十代の後胤、出羽守平正衡の三男、安濃津三郎平貞衡より、平氏数代の住居なり、これを伊勢平氏といふ。又東鑑に三日平氏の名あり。○此の後明應三年五月七日、同じく七年六月十一日、兩度の大地震に安濃津十八九町沈沒せるによりて、今の地へ移さる。○其の後文祿年間、今の安濃津へ細野九郎左衛門尉藤敦、城を築きて住めり。天正十一年より織田上野介信包城主となりて、堀石垣等を結構

す。又天正十八年より富田家城主となる。しかしてのち慶長の頃に至りて、城下廣大になれりと云云。

○安濃津○安濃の松原○安濃の湊田○安濃の河原○安濃の板橋

これ等をおもひあはするに、安濃をアコキと訓めりしを、後にいたりて木をも義と濁りしものなるべし一説に、あことは海子の事にて、きとは木なるべしといへり。これは鹽木をこゝに積みたる事の多きによりて、海子木といひたるにや。○あこの諸歌は萬葉集三の卷に、大宮の内まできこゆあびきすと、あことゝなふるあまのよびごゑ云々。○鹽木は此の浦に古歌多し、新後拾遺集に、崇全法師のよめる、

わすれなよ度を重ねて鹽木つむあこぎが浦になれし月かけ

おなじく按察使公敏の歌に、いかにせんあこぎが浦に袖ぬれて、つむや鹽木のからき思ひを。此の説據あれども甚だ迂遠し。恐らくはキ字清濁の誤りなるべし。

○阿漕の平次といへるは人の名にあらず、前にも演ぶるごとく、平家の本國は阿濃郡なれば、平氏を平次と誤りて、伊勢平氏を阿濃平次に呼び來りしものなり。

○安濃津のこと因にいふ、前亞相親房卿の撰み給ひし洞津考といへる書は、此の津の物語にて、こ

こをいにしへは洞津といひしとの文なり、其の畧意をしるす。○この津の名もとより舊かりければ格式の文にもあり、代々の和歌にも多かりき。伊勢守[illegible]が記には、洞津と書けり。其の[illegible]りけん、かの國の人の[illegible]時に、伊勢に洞津[illegible]とぞ。安濃の[illegible]に安濃として侍り、これは國の圖帳して、民の司にまゐらせしにも、傍爾の塚とのみ書き載せぬ。今尋ぬるに其の形ばかりもなし。平家のむかし此の國にひそまりける時は、八幡の宮として祝ひけるも絶えて、今安濃の傍爾とて、田にわかれたる中に木の見ゆるは、華表にてあるなり。又左衛門塚とて礎の侍るものは、社の跡なり[illegible]。安濃の傍爾は、當世の東川岸に在て、[illegible]の杜とぞ申し傳へ[illegible]。其の左にあこたきの社、おき[illegible]の氏神ふたつ並びしも、今は[illegible]の音さへ絶えぬ。此の二社は安濃の柱宮なりと、かたがたおろそかならぬやうにあらんかし云々。

○或人の云ふ、洞を穴と訓む例のあれば、洞津の訓はアナツなるべし、ナノ五音相通云々。

○阿漕塚は、往還阿漕町より東の方、海濱に古墳あり、松一株を植ゑたり、世にこれを[illegible]といふ。余伊勢の國人にたよりて、阿漕のことを聞くに、阿漕塚より僅かに二町餘を隔てて一塊の土饅頭あり、これを平次が舍弟の塚といふ由。按ずるに、これ又土人の誤り來たる説なるべし。彼の阿漕塚は、毎歲七月十六日、盂蘭盆會の供養とて、牡丹[illegible]、家毎に切紙[illegible]を作りて、

彼處に携へ行き、塚の周圍に掛け列ねて靈を祭る事の由、文化の當時に至れども絕えず此の祭祀あり。最も阿漕町に限るといふ。

○因に云ふ、阿漕の謠曲はあまねく人のしる所なり、狂言綺語といへども、能く勸懲の意にかなへり。凡そ天地の間に人ほど貴き物なし、しかれども古より、法は重し人は輕しとす。夫れ法は大小厚薄其の品限りなし、小法といへども其の重き事泰山の如し。故に貴き人なりとも、重き法には及ばざる所なり。彼の謠の意を考ふるに、法の重きをしりつゝも、夜深けて竊かに魚を捕る、もとより深夜のことなれば、人はしらじとおもへども、惡事千里の習俗にて、竟には海底に沈めらる。されば度を過す物をさして、阿漕なりといふ辭は、これよりぞ始まりけり。貧富尊卑は天命の定まる所にして、人力の及ばざる事なれば、たとひ貧困餓死の場に臨むとも、少しの法をも犯すべからず。彼の小山田高家が軍法を背きて、青麥を刈りし事は、武勇の爲に許さるゝ所なり。これを軌範として、小法なりとも犯すものは、虎を畫きて猫に類するものなるべし。此の謠曲を聽く人は、小法なりとも犯さざれとの教示なりけり、云爾。

考證畢る。

阿古義物語前編標目

巻之一　益亭三友校

〔開場〕懐レ恨江島ニ語

巻之二　古今亭三鳥校

〔第一齣〕奪ニ媚珠一醸レ禍　〔第二齣〕老狐操ニ竜人一

〔第三齣〕蜂王結ニ赤縄一　〔第四齣〕暁レ危木像涙

巻之三　徳亭三孝校

〔第五齣〕管ニ鋼隠形術　〔第六齣〕抱ニ忠棄ニ愛子

〔第七齣〕妬婦活陥鼠　〔第八齣〕登ニ天城一練レ術

巻之四　樂亭三[illegible]校

〔第九齣〕邪魔顕怪異　〔第十齣〕蓋ニ棺弟子浦

〔第十一齣〕貴奸妄執蛇　〔第十二齣〕惹ニ[illegible]無頭鼠

通計十二齣　前帙標目尽

流轉
數回

阿古義物語

江戸　式亭三馬著編

前編　卷之一

○開場　懷恨江島船

土御門院の御宇、正治元年正月二十六日宣下ありて、征夷大將軍從二位行左衛門督源朝臣頼家公御父頼朝公の遺蹟を續ぎ給ひ、萬機の政務を執り、天下を補佐し給ふ。此の年あらたに沙汰ありて、大夫屬入道善信に事を執らしめ、問注所を郭外にぞ建てられける。しかるに秋の上旬、三河國より脚力を以て訴へけるは、「室平四郎重廣といふ者、強竊の賊徒許多を率ゐて、大きに本國の驛を閙がしめ候、いそぎ搦め捕りたまはずば、國中靜まるべからず。」とぞ告しける。「これ太だ易からぬ事なり、誰をか使節として重廣が横法を糺斷すべき。」と、各位商議ありしが漸く一決して、安達彌九郎景盛に定まりぬ。此の景盛往ぬる春の頃、洛陽より一個の美女をまねきけるが、彼が美貌に煩みて晝夜傍を離れ得ず、仍りて當般の使節は心裏喜ばずといへども、既に三河國は父藤九郎入道蓮西が奉行

たる國なれば、遁るゝに方術なく、遂には進發したりけり。こゝに頼家公は日来好色人にましましければ、彼の景盛が妾の容、色艶といふ事を風に聽き及ばれ、[illegible]にあくがれ[illegible]、數回懸想文を贈りたまへども、更にしたがひまゐらせねば、すべなくて[illegible]をすごし給ひけり。しかるに此の度景盛が三河國へ赴きしは[illegible]の時なりとて、中野五郎能成に命せて、彼の女を密かに奪ひとらしめ、石壺なる北向御所といへるに居ゑ置かれ、殊に寵愛深かりしとかや。[illegible]景盛は三河國に[illegible]、[illegible]分散して[illegible]、[illegible]行する所々を捜れども、[illegible]相模國に立ち[illegible]て、日南山の深谷に匿れ居りければ、其の[illegible]べからず。景盛手を空しく鎌倉に歸りて、しかなく[illegible]の由告げたりしに、頼家もつての外不興なるのみならず、[illegible]思右想と[illegible]、鬱々として日をおくりぬ。しかるを愛[illegible]らみ奉るの由、讒者の舌を塞とし給ひ、羽林深く[illegible]、景盛を誅すべき[illegible]執権の家に押寄せ、其の騒動おほかたならず、[illegible]ほして、羽林を[illegible]給ひければ、[illegible]て、忠勤を[illegible]たりけるが、[illegible]に離れて[illegible]心[illegible]として頼します。一頭には景時が讒言を悪み、一頭には能成が[illegible]、且不興の[illegible]、宗平門郎重廣を擒へざりしより發れり。いかにし

てか重廣が蹤跡を索ぬべきと、日夜肝心をぞ碎きける。頃は正治二年九月の中旬、江島辨財天に詣でばやと、譜代の郎從僅かに二三人を將て、腰越より小舟にとり乘り、やがて海上に乘り出すに、時しも風靜かに浪和かなりければ、兼日の鬱散こゝにありとて、舟より四面を眺むれば、空には一片の雲さへなく、天氣快く晴れたれば、佳境ひとしほに興まさりつ。向上ぐれば芙蓉峯、霞にかくろひて高く、向背れば由比濱、浪につゝまれて長し。遠く波上を眺めば運船數百艘、往返漾ろを劈きて虎の趨るがごとく、近く海岸を望めば家屋幾千軒、簷甍を並べて龍の臥すに似たり。山水に心を養ひ奇觀娯しむに足る。唯見盡し足らぬものは、遙かの山に翠を疊み、遠き水に青きを積むの風情なるのみ。程なく金龜山に到るにぞ、舟を窟下にとゞめ、龍女窟にいりて少刻拜しをはり、歸路を海莊に促して既に漕ぎ出す所に、忽然一艘の樓船を視る。主從これを見やるに、荒々しき男十人あまり、各酒餚ひきちらして、杯盤狼藉いふべくもあらず。舷にすがりて呼々と戲くあれば、碇にもたれて呵々と笑ふもあり。山猿の如くに醉ひたるは、船頭に上りて風をや慕ふらん、海蟹の如くに醒めたるは、船尾に下りて水をや好むらん。かかる撒撥なる中に舞妓と覺しくて、破瓜あまりの嬌艷なる少女が、圓座に竝み居る中央に坐せし光景、茨がもとに芍藥の花一輪、咲き出でたらん風情にこそと、他ながら打見やれば、彼の少女は傍なる壯夫が膝に凭りて、金箔もて泥みたる舞扇手ま探りて、我こそ麗はし

といはぬ許りの面想して居たるが、琵琶法師が琵琶掻き鳴らして、今様の曲乙調に奏でければ、醉心に浮れ立ちて、しどろ拍子に舞ふ形相、船中の人々興にいりて、船も覆へる許りに噪めかれたりぬ。それが中にも魁首ある荒夫、坐席は傍に踏みにじり、甚く醉ひにきと覺えて蘇芳染の手巾、鉢斜にて眼包に垂れかゝる許り抹額したるが、揭手に杯とりてこなたの舟を直下し、鼻の孔のをこめき居たり。これはこれ誰ぞといはば、先だつて三河國を逃れ去りし、室平四郎重廣といふ賊長なり。彼が世を忍ぶ一名を白波雲平と呼びて、市井に交はる時は無頼を從へ、金銀を惡黨の如く蒔きちらすにぞ、當時徘徊する俠客の徒まで、悉く雲平が言を背かず、おのづから伏しければ、誰れ一人重廣としる者なかりけり。かかりしかば手下の小賊、ひそかに俠客といつはり、號けて婆羅門黨と呼べり。今日同船の荒男は、便ち婆羅門黨の惡棍にて、礒の泥太郎、雁飛治團太、猿桃西九郎、蟹股波三太、獅子の覺兵衞、おひやりこ傳平なンど、おの〳〵異名を名告る中にも、鼻柱頑八、眼玉阿武內の二人は視眼嗅鼻にたとへて、雲平が左右の手下なり。此の雲平密かに大磯の章臺に通ひて、長が家なる名に高き娼妓、愛壽といへるに深く馴れ染め、たがひに情意をなげうちぬ。されど雲平は安達景盛とは露ばかりもしらず、且景盛も室平重廣とはいさゝか思はねば、只傍若無人なる擧動、傍痛しとばかりいうて、咎目して漕ぎ別れんとす。しかるに船中より一個の大漢子、泰然ひとふ流眄しけるが、

景盛が舟なる船師の面貌へ、したゝかに吐きかけたり。彼の男詫びする氣色もなく、却りて冷笑うて入りければ、水師は頰ふくらめて呟き居けるが、やがて艪を盪し歸し、彼首の船にひた〳〵と漕ぎ寄せ「やをら粕奴、汝吾が面に液して、など一言の詫びをもせざるや。吾賤しとて汝等が液を嘗る者にあらず、頓かに三拜して吾が犢鼻褌をかぶり、吾が股をくゞりて陽物を嘗れ。」と、あくまでに雜言しければ彼の荒男船艙より跳り出で「汝いしくも惡聲しつるよ、いで〳〵犢鼻を嘗るべきぞ。」と舷に跪き、蘖々と毛の生ひたる腕を、揭手にさし出すよと見えたるが、何の苦もなく舟師を搔抓み、轉々と掉り轉したる勢ひ、畫ける鍾馗といふものの嬰鬼抓みたらんも、斯くやとぞ想はれける。やがて一震して水中に投げ込みければ「今日の遊興これに止めたり。」と、一座笑ひ罵りぬ。此の大漢子は則ち眼玉阿武内とぞいふなる。しかして舷に立ちあがり、景盛が舟を斜に見て、大音に呼ばはりけるは「爾等吾黨を誰とか思ふぞ、虎狼と恐怖るゝ婆羅門黨の俠士、天竺浪人の開山忌、今日此の船に大會を設けしなり。信心の徒有緣無緣をえらばず、目前施餓鬼につくべきぞ、御廻向々々。」と呼ばはれば、船中同音に「南無提婆佛、南无提婆佛。」と唱へつゝ、舟長に指揮して疾く船を漕ぎ去らしむ。彼の水師は水中を游ぎ上りて、此方の舟に上りけるが、景盛主從この殺風景を憤り、無賴の奴原いかになしてんと齗齒して居たりしに、郎從の内一人色白く肥え太りて、膚雪の如く顏色溫潤

の壮士、最前より這の始末を静まりて視居たりしが、徐々と[illegible]を[illegible]て[illegible]を傍に[illegible]て、[illegible]歩て景盛に向ひ、「御公少刻待たせ給へ、麾下に告すべき旨あり。」といひもあへず、[illegible]になりて水中に跳り入り、濶々たる浪を潜りて忽ち見えずなりぬ。人々いかにと目[illegible]れもすでまもの[illegible]に、喊音の楼船はますく\こなたを見て同音に笑ひ罵り、且口に指をさしいれて声を出すあれば、[illegible]ひき揚りて尻うち扑くもありて、「汝等は腰の立たざるか、其の舟はいはくす舟よな。」と譏りしが、僅かに三段計り隔てたれば、手に採る様に聞えたり。扨も彼の壮士は漲る碧浪をかき分け、辛うじて楼船に[illegible]り、偏舵にとりつきて首ばかりをさし出し、船中の動静を窺ひ、舵を傳うて船に上れり、後[illegible]へし者共、「こは何者ぞ。」と狼狽へて立ちかゝるを、鐵拳ふりあげて[illegible]に打ち[illegible]し、即便中[illegible]りいり、他の者には目もやらず、阿武内が膝もたげんとするを飛び蹴り、やにはに[illegible]んで[illegible]にうち込んだり。あはやと見る内に己もつゞいて海に入り、軀を翻して景盛が舟に[illegible]着き、身[illegible]嚙かさで船頭に跳り、大音にていへらく、「それなる舟にあるとあらゆるものは、[illegible]名告る事を[illegible]け。そもく\是れは[illegible]の忠臣、[illegible]郎景盛が部下にあつて、[illegible]の数度の戦場に[illegible]名を轟かせし、鳴戸[illegible]内芳實といふ者なり。[illegible]門の[illegible]、[illegible]けても、未[illegible]をあたへざるや、提婆の利害はあらざるか。」と高らかに呼ばはり、猶身構へして居た

りしが、白波雲平が方にては、「提婆の敵の釋迦佛なれば、おそろし／＼。」とて鳴をしづめて居たりけり。「嗚呼勇ましいかな鳴戸橘内、一刀をも佩びず樓船に游ぎ到り、一人の敵を志して益なき人を傷らず、素より水師が水に投げられしより發れば、又阿武内を水に投じ、戈を回らさずして無事に憤りを休めしは、天晴英傑なり。」とて感賞淺からず。程なく海莊にぞ歸りける。此の橘内に大磯の娼門に通ひ、いつの程よりかこれも又愛壽に心を蕩かしぬ。されば雲平が名は章臺にて聽き及びしが、謁見る事は今日初回なり。然れども本名室平四郎なる事は更にしらず、且雲平は景盛と聽くのみならず、兼て愛壽が戀を競ふ橘内に初めて謁え、且駭き且慌てて、心中地天と混亂しけるが、辛うじて阿武内が溺るゝをば扶けてけり。當時に至りて阿武内が十二分の醉ひ、忽ち夢の寤めたる如く、水を吐き衣を更へて船艙に坐しけるが、只吾にもあらぬ貌してぞ屈み居たる。かかりしかば音止み鳴靜まりて、更に一言を吐く者なし。正にこれ霹靂止んで痕に白日を視るが如く、一日の興は空しく一時に竭き、忙然として歸路を促せり。これより後鳴戸橘内、白波雲平、倶に愛壽が色に迷ひ心中呉越をなして、竟には終身を謬つに至る、これ箇の一回は小說の發端なれば、看官眼を留めて微しく讀み給ふべし。

前編　卷之二

第一齣　奪二[illegible]一[illegible]

爰に大磯の娼街に、愛壽といへる遊君あり。往時金吾の君（實朝公の幼名、初號千幡丸、）相模川の[illegible]において、狩獵の御遊ありしが、其の夜は大磯に止宿あり、許多の花媛を會へて、終夜酒宴し給ひしに、同伴の妓女等、愛壽が顏色世に越えて麗はしく、生平嫖客の絶えざるを妬みければ、其の夜さの彼が名ざしを漏らして、宴の席に省きぬ。愛壽これを深くうらみ、「金吾の君邂逅渡らせ給ひて、娼妓の殘り參りつどひたるに、妾ひとり其の席に闕けたるはいと口惜し。この後人にまみゆるとも、何の顏かあらん。」というて、即便綠の髮をおし切り、俺に[illegible]の形容を、[illegible]。金吾の君後にこれを聞召し、殊に惜しみ給ひて若干の[illegible]。何にかすべきことゝて、高麗寺の佛陀に施入して、[illegible]方もしらずなりしとなん。されば此の事人口に傳はりて、後の談柄に殘りぬ。斯くてより後、後嗣の愛壽出で來にたるが、容色嬋娟として妖嬌たる舊の愛壽にまさりはすとも、よも劣るまじき形樣なれば、當世の壯夫等金を運び貌を擲ちて、愛壽が爲に罪を得る者數多なれど、只願くは此の君にまみえんとて、日をあらそうて到るにぞ、愛壽が坐には丈

戸萬涎を垂らし小戸千杯を飲む。彼的が花面を視れば、旁の粉面皆黒しといひはやせり。しかるに此の愛壽は才色秀でたるに似もやらず、心仇々しく態體と行狀とは雲と泥との如し。搖錢樹ありと見れば、すゝまぬ人にも佛の如き顏を獻り、聚寶盤竭きぬと思へば、忽ち變じて鬼の如き心を現はす、其の薄情譬ふるに物なし。されば鳴戸橘内芳實、初めのほどは好色の腸を探らんとばかり思ひしも、いつしか容色に心すゞろぎて、月には背き星には探り、雨に雪に身の勞をもいとはで通ひつめけるほどに、黃金夜々に撒漫し、嚢中日々に空乏して、今ははや一個の秋風客となりければ、愛壽が愛想は次第に衰へ、鴇婆が笑面も漸々に變りぬ。橘内素より柔和の生性なれば、愛壽が針ある言をも激するさまなく、いよ／＼言語やはらかにありしかば、心ねぢけたる愛壽も計らふべき術なくて只澀き面して過ぎゆきぬ。されば月に雲、花に嵐と常言にいへるも宜なるかな、黃金ちらす客にも情人といふ妨害ありて、柳巷の風俗密た狂ひせざるものを、たはけなどいうて野しむ事となん。斯くまでも掠めとりて今惡しざまにもてなすは、一個の情人にする業なり。其の意中の人として眞肝をあらはす人は、他のものにあらず賊首室平四郎重廣、僞名して白波雲平にぞありける。雲平は素下總國の人氏、室平三郎重國が嫡子なり。父重國歿り、後惡行日夜に募り、竟には家を破りて強盜の魁首とまで成りにけり。資性貪慾奸智、こゝろは剛なれども匹夫の勇なり、面は正鐵と黑く、身は強大に肥え

て、あくまでもたえくつけたる形相、薩内が衣裙の衽襟にとり出ごては、花の一方の深山木なるべし、されど嬪を忘れ嬉をおのが好める心なれば、雲平が上達下の軒き鳥味し鳴のやうにあはれは、皆の興を心も雪のやうにきえて、雲とさる暮は更け過ぎ、棹かかつけ、雨とさる日は明け渡る鶏すらぬ、営業の余には平點の未だ動かで、比翼の枕に連理の濃き潤はて、懸中川白東人いよよ志甫世あはせてか、かかる赤縄なく結び給ひけん、すべて賢きも愚かなるも、色情には迷ふ習俗なれば、薩内、雲平が靡の姿に情をとして、常に一字の寵字を做し、たがひに色をいとみけるに、この生国川の辺事も、斷くもと世出でらるるに、白菊雲平に、住吉江山において薩内に添はれりしが、心中の情るといへども、歳月に向ひて景盛の家を恐れて、しばらく身を潜み居たるが、頃は承応二年、井の年改まりて建仁元年の冬の初旬、へれやこのあまり、密かに愛着ことて、かよはれたり、只一人日南山の隠家を覗いで、山越に大磯に到らんとて、間道を歩みけるに、天色已に晩れなんとすること[illegible]、松柏陰々たる木陰に人のむかに云ふ崖間に[illegible]けれは、奇怪とおもひて見るに、これは二[illegible]人に[illegible]、雨筒の毛皮にこそありける。年[illegible]るものと見えて、白く長き毛の斑に生ひたるが、一株の枯木に集れて、夜光珠とも謂つべき一顆の玉を掌にささげ、雌雄の狐たがひに拝して他念なく、かつ嘯きかつ喚びて玉を弄しつつ彩游なるにぞ、雲平耳をそばだてて息を[illegible]て聴き居たるに、原来[illegible]年の

語、更に呂律はわからねども、「只々御なつかしくおぼえ候」といふ結句僅かにきこえたり。されは玄中記に、狐五十歳にして能く變化す、百歳にして美女となり丈夫となる、千歳にして能く千里の外をしる、則ちこれを天狐といふと記せり。思ふに彼いまだ白狐ならねど、斯く人の如くものいふは、恐らく百餘歳のものにして、彼の玉は世に所謂髑珠なるべし。いかなるものぞ、いで試みに奪ひとらばやとて、常に携へもつ所の二つの手裏劍をとり出し、曳といふて打ち寬けしに、彼の毛團は一心不亂に玉を愛し、林の外に人の窺ひ看るともしらで、點頭き耳き居たりしが、此の聲に驚きて首を回らさんとする所に、手裏劍狹くも飛び到りて、雄狐が左の眼にはつしと立つ。何かは以て堪ふべき、嗚というて玉を棄て、痛手を負うて逃げ去りける。跡に殘りし一疋の雌狐、慌忙きて立ちながら、地に落せし玉を拾はんとて立ちかゝるを、又一發の手裏劍に、左の眼を打ち中てければ、これも同じくこう／＼と大きに叫び、四足を放いて飛び去りぬ。雲平難なく彼の玉を奪うて、つら／＼これを見るに、水晶をもて製作したる如く、潔らかなる事いはんかたなし。「是れ昔か趙の夜明珠なり、十五城に換へかしても、はからずも得たりしは、僥倖々々」と懷にをさめ卸便大儀にぞ急ぎける。

第二齣　老狐讎二寃人一

かくて雲平は長が後堂に愛壽を迎へて、酒宴既に半ばなる頃、忽ち庭に聲ありていふ、「二惡首はこゝに居給ふや、雲羅門徒南無裡婆佛の行者、通刺より御來迎を待ち申したり、」とて一株の樹を携へ給へ」と、一間よりゆるぎ出づるを觀るに、雲平が黨徒眼玉阿武内にぞありける。しかも左に世の襤褸袖をもて左の眼を遮へ、痛みの堪へかたき體に見えければ、雲平怪しみて其故を問ふに、阿武内かしこまらく「物すべて命長なきにあらず、在下が諢名を眼玉阿武内と號け給ひしは太だ不吉なり。今宵にすも小傳の堂にて、雨商の毛團に出で遇ひしが、彼奴を奪へんとして足もとをうしなひ、暫く眼を傷めたり、此の恨みは狐になくして燒けたる魁首にあり、如何に眼玉あふなき事に及ぼすや、」と引つて坐しければ、雲平これを聞きて「吾も今日しか〳〵の所にて、其の如く毛團に遇ひつることなれば、」阿武内聞いて「魁首何とて見逃したまひしぞ。」「否擒へたらんも益なし、彼の毛團林の中にありて、白き玉を携へしゆゑ、吾手裏劍を打ちかけしが、あやまたず兩商の狐が眼と腕とに打ち中てて、玉は吾が手に奪ひ取りぬ」と、事の始終を審かにものがたれば、阿武内苦々しき顔色して「それこそ魁首の虛誕ならめ、野珠といふ物は俗にいふ白狐の玉にして、世に稀なる寶と聞けり、人誰をたすけその狐にして、玉を棄つべきいはれなし。おそらくは贋物にて、野狐の爲に欺かれ給ひしならん、あら笑止さよ。」いで贋物か眞のものか、阿武内が此の片目の照魔鏡に照らして、兎も角も鑑定め申さん」とて、座

を立ちて雲平が傍に倚りければ、雲平「さらば。」とて杯を廢て、乃ち懐中より彼の玉を取り出さんとて、手もいまだ袖に至らざるに、愛壽が丫鬟年紀五六歳なるが、後房より走り出でて、小童の眼睜も阿武内の形體を見るより、「あな怕ろし年經る狐の妖けたるが、眼より血を流していつのまにかこゝにあり、あれ追ひやりて。」と啼聲にて指さしければ、雲平きくより乃ち悟り、「扨はこやつ最前の雄狐なるよ。」と、長劍をぬく手も見せず、眞額を望に斬りつくれば、こはいかに阿武内が身體、蹴鞠の如くころ〳〵と飜り、忽ち本相を露はし、こう〳〵と高啼きして、築垣をひらりと飛び越え、外面にむかひて逃げ出でしを、何首までもと追ひすがりて、路程三町ばかりも追ひゆきしが、冥々たる暗夜なれば踪蹟を見失ひ、四面を睨んで立つたりしに、遙かの後より人追ひ來り、漸くちかづきていふやう「殿樣且くとゞまり給へ、彼は畜生の事なれば、對手にとりて長なき業なり。疾く〳〵廢ておきて歸り給へ、去來伴ひまゐらせん。」とて、手を採りしはうかれ女愛壽にて、雲平が蹟をしたひ來れるなり。雲平牙を咬み齒切して恐れども、覓むるに術なければ、愛壽が言にしたがひ、既に立ち歸らんとする所に、只聞く聒喇と音響き、一團の火の塊まろび落つるとひとしく、前路一面に炎となり、往衢を塞ぎたり。雲平睜れて怎生何の所爲なるやと、愛壽に面を對はすれば、こはいかに、左の腮の邊血にまみれ、彼の疵痕を指さして寃爾と笑うて立ち居たり。「扨は此的も過刻の雌狐なりしか、

あな口惜しやといひ様、携へたる刀をふり上ぐれば、翻々と身をかはし、尻を打ちて北へ出ると見ゆる間に、忽ち狐の形を變じ、風の如くに身を飛ばして、只走りに走り行く。雲平一體大きに驚き、「憎くき老狐め、何處へ走るぞ、いでいで物見せてくれんず」と、猶も跡を追ひかけしが、これも又跡影なし。ますます怒氣心頭に發りて、西よ東よと尋ねめぐるに、乞食の癩病人、村はづれの軒下に佇めるを見ければ、「いかに汝この所へ狐の走り來たるを見ずや」と問ふに、彼の乞食指ざして東の方を教へければ、此の言に從ひて東の方へ追ひかけ行き、僅かに五七步を過ぎざるに、背の方より癩病人大きに叫びて、「いかにや雲平、汝が追へる狐は爰にはあらざるか、此の顏をよく見よ」とて、忽ち身を變じて雄狐となりければ、雲平怒りて忽ち討たんとしたりしに、又後に聲ありて「雲平いかに、汝が尋ぬる狐は爰にてはあらざりしか、いかにいかに」と高らかに呼ばりしが、これも同じく雌狐となりけれ、前後よりさし挾みて口々に罵りぬ。雲平兩頭に心を配り、彼方を追へば此方に叫び、こゝを追へば彼しこに呼ばはり、散々に惱まされしが、狐は頓て四蹄を放ち、飛ぶが如くに走り去りぬ。雲平はあくまで狐に操られ、身體泥の如くに勞れしが、辛うじて長が家に立ち歸りければ、妻の愛情面で迎へて閨房に誘ひ、且つ勞れを慰めていふやう、「今宵の始末を考ふるに、彼の狐は惡しといへども、自ら招きたる災禍なれば、恨むべき事に侍らず。一旦の怒りは宜なれども、彼が性命は赦し給へ。總て狐は

奸巧するものなれば、又もや謀をもて玉をとり戻しに來りなん、今より後人來る事あらば、究めて狐の業と思ひ給へ。」雲平これを聞きて「吾もさこそ心得たれ、凡そ狐を避けんとするには、犀角を以て穴に置けば、狐敢て歸り來らずと聞けり。此の後犀の角を此の玉に添へ置かば、此奴いかほどの術ありとも、奪ひ去る事難かるべし。」とて、兩人枕に著き既に睡らんとするに、早くも三更の自鳴鐘響き、野寺の鐘耳を驚かして、頻りに物凄くおぼえ、閨房少刻寂寞たる時こそあれ、又もや狐の來たると思しく、外邊に物音してとほそをほと〳〵と打ち叩き、いと悲しげなる聲ざましていふやう、「今はさて何をかつゝむべき、我々は此の近き邊なる、袖師浦の賢兵衛が家に養はれ、幾年經りし雌雄の毛團にて候。吾が親狐は武藏國の彌三左衞門といふ者にて、大和國の源九郎、近江國の小左衞門に等しき、千歳の靈狐にて候ひしが、千歳の古木を穢せし失ちより、彼の靈夜な〳〵現はれ出で、吾が親狐を苦しめければ、父にて候彌三左衞門、奇を出し術を盡し、千變萬化と威を爭ひしが、なかなか以て敵しがたし、凡そ千歳の老狐なりとも、千年の古木を焚きて照らす時は、術くじけて眞の容をあらはすとかや、かかる奇特の老樹なれば、天に通ぜし吾が父も、竟には彼に折かれて、性命を亡ひ候ひしぞや。臨終の期の枕邊に、我々夫婦を近く招き、『汝等此の後心を合はせ、我が仇敵なる千歳の老樹を亡ぼし、畜生道の苦患を助け、修羅の妄執はらさせよ。』とて、記念に賜ひし彼の玉は、父

金魄とぞなりし、尾頭に籠めたる神珠にて、儂ぞかく申す御前には、□三左衛門が一子三郎狐、又これなるは其の小女郎狐といふ者なり。また子狐の頭よりも母狐に死別れ、親なしと思ひし女狐を非業の死を遂げたれば、倉稲魂の御使と叶はず、尋常の野干とまでになりさがりしに、父の仇に狙はれ、人間の術なり。されば世間の人々には[illegible]の獸と野狐として、憎まるゝ身をばつかしめられ、其の遺恨やむ時なし。畜生の此の身は[illegible]てましくも、親の敵は忘れもやらず、[illegible]かわくひまだになく、思ひつゞけて待へども、河水を塞きて水を渡り、北斗を拜して物に變ずる、奇術は疎りてあらねど、千年の古木を亡ぼす術はなく、むなしく月日を送りて候。さればこそ父祖にしき時節には、記念の珠を取り出して、昔を問ひ今を答へ、或は嘆き或は笑ひ、在すが如くに御魂を慰めて、不孝の罪を謝ふるを思へば、語るも涙の種なるぞや。我等夫婦が幾年月患苦を嘗むるを想像り、憂き身の上を憐み給はば、過刻の玉を返させ給へ。君の許に祕め藏かるゝとも、瓦石にひとしく益もなし。吾黨が身にありては重山の名玉よりも、遙かにまさりし寶なり。過刻君を魅し、奪ひ返さんとしたりしは吾黨が誤りなり。罪をば赦けて饒し給ひ、玉を返して給はるべし。さらば後来好き事をもて酬いまうさん。若し又否みて返さずば、後必ず災禍あらん。其の時悔み給ふな。」と、首を叩きて罪を謝し、聲を張りて叫ぶ音、恰も嬰兒の啼くがごとく、或は壺を敲くに似て、怒りつ哀へつ物狂はしくきこゆるにぞ、愛

壽は便なき事に思ひ、「其の玉は有りて益なし、早く彼的に返し給へ。」と、傍より勸むれども、元來彼に誑されしを憤りければ、此の言を耳にも容れず、衣を被きて身を起し、長劍を密かに拔き持ち、彼の門首を探り見るに、はやくも鎖を封めたり。雲平つく〴〵思ふに、「今此の門扉を開かんとせば、必定狐は逃げ去るべし。さらば一度ならず再び人の謗りをうけん、不若此の儘に捨て置かんには、來日復理會やあらん。」と、房にいりて睡りけり。兩箇の毛團は少刻叫びて居たれども、雲平が許容れざるをいきどほり、「今は早せん術なし。汝雲平、見よ〳〵此の恨みいつの程にか思ひしらさん、あな恨めしき雲平よ、心なき擧動かな。偶人界に生を受けながら、畜生にもおとりしものぞ。」と口口に罵りて、何首ともなく走り去りぬ。不レ聽二好人言一必有二悽惶淚一、雲平老狐の神通廣大なる事を知らずして、益なき珠を惜しみ、後果して誑きとられ、剩へ己が身を亡ぼす事、自ら凶事を招くにあらずや。且つ卷末を讀みてしり給へ。

「說文。」狐は妖獸なり、鬼の乘ずる所なり云々。

「白虎通。」狐に三德あり、其の色中和小前大後、死すときは首を邱うす、これを三德といふ云々。

「遠征記。」盟津寒きときは冰厚きこと數丈、しかれども車馬未だ過らず、狐の行くをまつといふ。此の物善く冰を聽く、冰下水聲無きを聽きて乃ち過る、人狐の行く方を見て渡る云々。今按ずるに

本邦信州諏訪の湖氷るとき、狐わたりそめて後、人馬氷の上を通路す、狐又氷を踏たれば往來とゞまると云々。此の類なるべし。

「本草綱目」狐の性疑ひ多しと云々。

「博物志」「萬歳の狐に明珠あり」と謂へりと云々。狐老いて[illegible]し、變化す、其の妖を[illegible]と云々。[illegible]「[illegible]」千年の狐は婬婦を雌とし[illegible]を雄とす。五百年の狐は[illegible]と云々。

「抱朴子」[illegible]陽公神と稱すこれは狐なりと云々。按ずるに、本邦[illegible]國[illegible]狐あり、伊賀國上野なる[illegible]寺に[illegible]あり、和泉國[illegible]の[illegible]狐、下總國[illegible]、江戸[illegible]川に[illegible]あり、[illegible]に[illegible]狐あり、京都に宗旦狐あり、近江國に小左衞門狐、伊勢國に[illegible]狐なと、其の他枚擧しがたし、これらのたぐひを思ふに、[illegible]を雄とし、[illegible]を雌とするの說も、さもありぬべし。

「淮南子」「[illegible]角狐を驚かす、[illegible]角を以て狐穴中に置けば狐歸らず」云々。

「玄中記」「[illegible]の精變じて狐狸と爲る」云々。

「格物總論」江東に狐なしと云々。按ずるに、本邦佐渡國に狐なきを思へば、[illegible]なりし。佐渡國には狐なくて貉あり、其の名を[illegible]と[illegible]事は[illegible]らくことゝにいはず、

「酉陽雜俎。」野狐を紫と名づく、夜尾を撃つて火を出す、將に怪をなさんとするに、必ず髑髏をいたゞき北斗を拜す、髑髏墜ちざるときは化して人と爲る云々。

「朝野僉載。」唐初已來百姓おほく狐神に事へり、房中に祭祀して以て恩をこふ、飲食人と同じからず。當時に諺あり、曰く、狐魅無ければ村を成さず云々。以上格致鏡原の要を摘んでこゝに抄出す。不用の辨とはいへども、此の一張の書面を助けて、空紙を塞ぐべき業なりかし。

○狐の異名は○まよはし鳥とあり。兼載簇日集に、よるひるをかけてあだちが原中にまよはし鳥のつりのまを見よ。

○いがたうめともいふ。河海抄云、刀女は狐なり。

○齋宮寮刀女。これ狐の事なり。

一說に、伊賀伊勢國には白狐をたうめ御前といふ云々。新猿樂記に、○野干坂之伊賀專女男祭と云云。又○きつともいふ。教長集に狐のなくをきゝて、きく人のさかゆときけば夜を寒みなくなるきつをあはれとぞきく。

又古今集戀の歌に、夜があけばきつにはめなんくだかけの云々。これらのたぐひはもて證とすべきにこそ。

第三回　蜂王蕩子赤繩

嶋子橘内芳龍は、温良の武士にて弓馬劍法に徹しく、一人の老母東世に仕ふる事至孝なれば、これは景光の鍛えし鋭く、重代の名劍白鳩丸、並に稲田谷の別業をば賜はりける。然れども、いにしへより勇猛英傑の壯士も、[illegible]の色には心を飛ばし、聰明伶俐の婦人も、[illegible]の情には肝を潤すの類、枚擧へがたし。此の橘内はうかれ女愛着か情なき舉動をもいとはで、夜毎となく通ひしが、いつも雪中在宿集會て、動もすれば橘内に無禮を働き、すまじき驕慢を行ひしかども、いつも[illegible]の者とかなはねば、昔なる身をいとひて通ひゆきぬ。こゝに橘内が一人の妹に蘭葉といへるは、はやくより父に後れて母親に育てられ、破瓜の年は過ぐせども、十八公の色をかへず、閉月羞花の容艶にして、沈魚落鴈の雙び世に絶えて麗はしく、加之萬の伎に妙なりければ、見る者心を動かさぬはなかりき。爰に又奥州秀衡の部下金剛三郎にて吉勝が舍弟に、門部吉春といふ者あり。年紀二十三四、目清く眉秀で邊鄙には生長ちたれども容儀賤しからねば、京家の武士も恥づる許り、閑雅なる壯士なりけり。生得文事に賢く武事に疎く、只管和歌の道に心を寄せければ、これ武の家を繼ぐべきものにあらずと、兄吉勝が計らひにて洛陽に寄し、何某の卿に給仕させけるが、幾程なく秀衡滅亡の刻、吉勝も陣殁して、當

副の家も空しく絶えければ、吉香白身となりて猶仕へ居けるに、些細の事ありて不興を蒙り、浪々漂漂として此の鎌倉に呻吟ひ來り、篠目谷の邊に膝容るゝばかりの庵を結び、書を講じ歌を論ひ、手習ふ業などを敎ふる間に、猶需むる人あれば遊藝をも諭し導くをなりはひとして、立ち上る煙さへいと幽閑にぞくらしける。此の吉香が家は橘内が東家にて、僅かに牆一重あなたは、蘭葉が生平居室とする子亭なり。かかりしかば折節に垣間見けるが、互に風流俊雅なるを懸想して、あはれ此の世に生まれたらん甲斐には、かかる美人にこそ偕老をも契るべけれと、旦暮おもひわづらひけり。すべて眷戀の心發れば、醜きも麗はしく見ゆる習俗なるに、孰れを孰れ一對の好男美女、こゝに桃李の艶色あれば、かしこに芙蓉の嬌態あり、されば依々戀々として忘るゝひまなきは宜なるかな。天上の月老地下の冰人も、相思の情をや感じけん、いつしか凝りたる想ひを解き深き縁となりければ、庭面の連理木も羞ぢらひて枝を垂れ、水面の比翼鳥も深き契りを羨む許り、假初ならぬ中とはなりぬ。此の蘭葉は常に許多の蜂を飼ひて、居室の軒檐に巣を營み、酒壺を緣の側端にさしおきて、蜂の隨意酒飲むを見て、獨り心を慰めけり。往ぬる年春のするにやありけん、庭なる桃櫻池水にちりしきて、ひとしほの風情なれば、炙背しながら居たるに、かしこの木の下より蜘蛛絲ながく引きて、池邊の小草に續けしを遙かに見て、吾が背子が來べき兆の絲とやよみけん、奇しく巧みなるふるまひよなど

思ひやりをりから、兼て手飼の蜂とんで來り、甚しく罵にかゝりゐし「阿那」といひさへも終に遂に、一つの蜘蛛いそがはしく這ひ渡りて、彼の蜂を十重二十重に卷きければ、園葉やるかたなく思うて、蔦よりつたひ走り下り、旁なる枯枝とりて、蜘蛛をば彼面に追ひやりて、土邊に蜂を掻き落し遣り、蜂はさたもの纏ひうちて甚くなへ、漸うに蜘羅を掻き去り、辛うじて命助けてけり。次日昨ひと二の飛び來り、首を地にさしつけ、恩を報ふ形にて、ふりきて嘆き去りければ、おなじほどなる蜂三日ばかり、幾度と來びめぐり、蜘羅の邊を呻吟ひ、池邊を舞ひありきて、蜘蛛を窺ぬるさまなりしが、中頃には何萬の蜂皆飛び去りぬ。園葉これを思へらに、はやう彼がれたる蜂のおのれに恩を報ひ、蜘に仇を報ほんとて來りしか、蜘はかかる事ことしりて、早くも隠れしものならんと、其の謀のほどをみるに、蜘はふつに見えざれば、池の小草を掻き分くるに、千々の針もて貫きたる如く、囲もなく棄てたりけり。さて彼の蜘は茂りたる水草の下に、下葉迄垂れ敷きたる裏につきて、水際に下りてこそありけれ。されば許多の蜂にも見えあたらで、飛び去りしものなり。これを思ふに微細なる蟲なれども、蜂の恩報いに來べきとしりて、斯くまで身を竄る命存へしに有り難し。されど蜂その友を携て來り、仇を報いし恩をまもふ蜂の心をいと愛でたしとて、園葉いよ／＼寵愛しけるに、それが中にも雌の蜂と雄しく、形三寸ばかりの雌雄の蜂ありけるを、雄のかたに波羅に騎の蜂とて、雌のかたは福風に雌[illegible]と名

づけ、蜂の異名を其のまゝに稱號とはなしつ。しかしてより後は、「蠓螉よすがるよ。」と呼べば、ふゝと唸きて飛び出づるほどにぞ馴れにける。一日吉香が許へ文を贈らんと思へども、幸ひの傳分なければ、いかになしてんと停立みしが、不圖蜂の巣を見て思ひけるは、斯く手馴らしたる蜂なれば、彼首に使する事もやあらん、且づこゝろ見んとて巣の許に立ち倚り、人にもの言ふ如く、「いかに蠓螉やある、すがるやおはす、おんみ等心あらば此の文をもて往ねよかし。彼面よりの囘文あらば、又妾がもとへ携て來。」といふてさし出せば、蜂あまた飛び出でて、文にひしととりつきけるが、雌雄の蜂は文の前後にすがりて、遙かの空にひら〳〵と舞ひ上り、看る〳〵吉香が家のあたりに落ちけり。しばらくありて彼方よりの囘文、かたの如くもて來りて、蘭葉が膝の許に置き、斯くておのれが巣の内にいりぬ。蘭葉は嬉しとも何いはん樣なくて、巣の方にさし向ひ、「これひとへに月老氷人の神使なるか。あな尊。」とばかりにて、伏し拜みてぞ居たりける。かゝりしかば後には常の事となりて、互の文の交加は、這の蜂の媒をたのみぬ。往昔京極大相國宗輔卿、つねに蜂を飼はれけるを、時の人益なき業と謗みけるが、一日鳥羽殿において蜂の巣卒に落ちければ、主上をはじめ各位立ち騷ぎしを、相國御前にありける枇杷一總をとり、琴爪にて皮を去りて捧げけるに、蜂あるかぎりとりつきて散らざりければ、卽使座を立ちて供人に賜ひけり。院も賢く宗輔が侍ひてと感ぜさせ給ひしとなん。これはそ

れには異なれども、蜂の兒を人をものたるは、いと奇らしき事にこそ。且同後村が蜂蜜の記に、□□口傳ヘ云好信通、為花評品東風、といへりしもおもひ出でられて、情ある蜂□□まれけんたぐひはあらざりき。

○蠓螉の名。揚子方言云、蜂燕趙之間謂之蠓螉、或謂之蚴蜕、蜂の□□□名□□□□□あればしば□□□□□

○蜾蠃の名。八雲御抄に、鹿をすがると云ひ、蜂をもすがるといふといへども、只鹿を以て正説とす云云。今按ずるに、契沖法師の云く、萬葉集九之卷に腰細のすがるなどよめれども、同じくしも□に存すればすがるなる野ともよめり。すがるは蜾蠃にて蜂のたぐひなり。傍□□に云ふ、爰□□□、人名也、此ヲ云ニ須我云々。古今集に萩とよみ合はせたるによりて、すがるは蜂の類なることを勘へず、鹿とせしは甚だ謬れり。花には蜾蜂のたぐひ香を追うて、群れ来ることつねのならひなり。されば□□□師の匡房卿も、鹿と心得られけるにや。堀河院百首に、

すがる臥す野中の草や深からむゆきかふ人の笠の見えぬは

とよまれたりと云々。

げに蜂といふこそ正説なるべけれ。しかれども八雲御抄前のごとくなれば、人の詠するをば難ずべ

からず、おのれ辨知してひがごとせずば足りぬべし。もつとも顯昭、日本書紀萬葉集をも引きて、ものの異名ふたつにわたるはつねのことなりといへり。しからば鹿をもすがるといふところ得べし。

○蜘蛛と蜂との事、陳藏器が本草に云く、諸〱の飛蟲蜘蛛の網に著すれば、皆脱るゝこと能はず、たゞ蜂のみ蜘蛛を畏れず、反つて蜘蛛を捕へてこれを食らふ云々。

第四齣　曉危木像涙

それはさて置きこゝに又、大礒袖師浦に萬の賈ひして世を營む賢兵衛といふ者ありけり。齡六十に挺けれども性質健かに、あらゆる神佛をかしこみて、正直律義のものなりければ、里の人等が渾名して、正直老爺とは稱び做しつ。彼が祖父は鹿島賢太夫廣有とて、橘内が先祖に仕へて勳功ある者なりしが、賢兵衛が代となりてより、弓とる業の懶しとて、竟には仕へを辭し去りて、身を賈人となしつるが、貴徳の餘計もて、富有といふにこそあらね、今は些しの金をも貯へつ。妻は先だつて身罷り、後妻逢兒を迎へて、日暮の事を執らしめ、己は商ひの閒々に、後世を願うて過ぎ行きける。後妻逢兒といへるは、鼻柱頑八の姉なるが、少き時は大礒の草臺に、舞倡女の萬御前とて、身は川竹の果て

なりければ、年は四十に餘れども、いにしへの花の香ありて、色好みの女にてありけるが、しかのみならず心のおかみて、又なき愚癡の性なる故、これかも陰に諢名して、慳貪者といひあへり。世に適めし妻の腹に、女兒ひとりを持てりしを、母の記念の前巻と呼びて、ことし三五の月の前、花の顔清らにて、雪の肌の麗はしきを、彼の染殿の大后若く坐しける時、御容すぐれて麗はしき、撫子の御と申せしにも、なぞらへて劣らぬ艶色なれば、あかず見はやす親心、唐國にもあらまほしく、あたら撫子野に咲きて、鬼の薮草に咲き交るを、父が心に慢りつゝ、「鍾愛抽衆草、故得名撫子、艶色粧千年、故因常夏」とありし、舊き辭をおもひよりけん、二なく美しみけり。素より心素直にて行跡罕なりしかば、繼母の隔もなく、いと信々しく仕ふれども、蓬生が素性卑しくて、動もすれば非道をふるまひ、さまぐの無理いうて、早晩苛くもてなしぬ。さなきだに繼母は、心鬼しき物のやうに、なべての人はいふ習做なるが、是は世に越えて邪智深き性なれば、身を落窪の姫となせる撫子、心の裏、推量られて不便なり。扨又此の家に傳はれる一軀の木像あり。これは橘内が祖先なる、昔阿部五郎芳貫が、自らの像を自ら刻める眞像なり。芳貫は東下野國の人氏なりしが、故ありて一家亡び、その子芳直、藤九郎盛長に仕へてより、今橘内まで二十代の忠臣なりけり。此の木像、芳貫死期に及びて賢太夫廣有へ、記念に見よとて賜ひければ、主人の歿後に至りても、猶此の像に仕ふる事、恒に在す

が如くして、寐ぬるにこれを後にせず、寤むれば疾くこれに謁え、晝夜心の及ばん程は、靈をなごめ祭りける。さるほどに人の敬ふによりて、神の威を益すとやらん、信徳などか空しかるべき。漸うさまざまの不思議ある中にも、嗚戸の家に災禍あらん時は、木像必ず汗を流せり。これ究めて兆ありければ、ます／＼其の德をかしこみて、「吾亡からん後なりとも、疎かにすべからず」と遺條ありて、今賢兵衛まで三世の代を經れども、むかしにかはらず守護しける。一年さりがたき事ありて洛に登りけるが、或夜の夢に木像怒れる顔色にて枕上に立ち給ひ、「やをら賢兵衛、とく歸國せよ、汝家にあらざれば、留守せる妻の我に疎し」とばかりありて夢は寤めぬ。賢兵衛忙はしく歸國して、まづ木像を拜まんとて廚子の扉を推し開くに、夢の御告け果せるかな、神前一塊の塵塚となりて蜘蛛は所得貌に網を張り、蚰蜒なんどは脱殼となりて、こゝかしこに羅りければ、蜘の絲もて一張の戸帳を製りぬ。こは恐れありとて、塵うち拂ひ、蛛絲の繁きが本を、燒鎌の敏鎌をもて打掃ふ事のごとく、塵拂ひもて淸めてければ、殘れる罪はあらじとおもへど、後の戒めにもなれへければ、夢の始末語らんと、一一蓬兒に聞えければ、八ッの御耳何小男鹿の、つのあだなる蓬兒が心は、科戸の風の天の八重雲を吹き放つ事の如く、朝の御霧夕の御霧を、朝風夕風の吹き掃ふことの如く、更に耳にもいれずして、かへつて夫に罵りけるに、「あら姦しき世迷言よ、吾御郎が洛に上りし後は、内外の事に鬪りて、拍つ

も篠ふも北の人なれば、木像までには手も及ばず、さればとて貴物を捨て置きて、木像のみなるも止り、ところ、疑ひかに表具の竈くまで腹をも肥すべきものにて、又た神力にはまさるまじ。猫にわせ看板を捕へ、犬ならで表門を護れぞ、何ぞ一つ穿をなさ木偶人を飼ひ置きて、物食らはする事なるも、とさまで貴む物なるを、今より吾郎が肩に擔ひ、兩個子とも身を散しね」とはいへ家の総にて、古来傷人のみ、こゝかく/\は、まだ旗本より鼈を産れて、親子の者が跡を附り、さて覺悟して其の蜥へ難儀を置きと聞も所にて、前の神ここを祈りこけり。と實寄にいひ敗り、拐杖して當確なさぬつ、蟲嘯きて居たりける。蓬兄が悪緒、流石に一抱兵衛と、ならで雷ねてありけるが、本より舌頭のにる性の人、烈火轟轟を點すことも蓬見が舌に但義なかれく、多念佛に覧みをさせて、潰もつ、被それあゝ此の兼兵衛が後園に、いつのほどよりか雌雄の狐住ひけるが、誰いふとなく三助狐と女郎狐とよびてはやしければ、父子も愛でたがりて、もの食など食はせ撫で翫びけるにしたがひて、此の狐ことの外に馴れむつれけり。然るに此のほど三助狐がひだりの眼と、女郎狐が右の前足に、いつの程か怪我を負ひ來りて、賢兵衛が前に啼き叫び、いと苦し氣に悶えしかば、賢兵衛忙てて手裏剣を抜き取り、よく薬を用ゐて扶育しければ、疵も角して今は寝口も癒えぬ。さて彼の手裏剣を改むれば、下總國住人宅半四郎重廣と銘けたり。二道は是れ猿首にて、往年安達家に命せ下り、討手として搦め捕も三河國

に向はれしが、彼奴逃げ去りしと聞きつるに、さては此のほど此のあたりを徘徊するとおぼえたり。此の手裏劔橘内君にまゐらせなば、在所を覓むる端ともなりて、擒へ得ば忠義も立つ、また一頭には狐が恨みも報ふの理なり。」と、まづ手裏劔をば藏め置きぬ。こゝにまた人買客の愚六といふ者あり。恒にさまぐ\の奸謀しければ、あしこゝにて追拂はれ、四季人神の五體をめぐるに等しく、身の置き所を定めざりけり。彼が妻に麻子といへるは、年紀四十餘歲、愚六が壯さに比ぶれば、五つが程も齡はまさりぬ。此の麻子幼き時、失ちて圍爐裏に落ちしとて、灼傷は紫色に痕りて、髮海松を戴き、眼左に釣り右に垂れて、鼻はいづこにや在りけん。口は耳に睦みて片頰に歪み、其の醜きこと無鹽板額が烈に越えて、再睇と視るべうもあらず。いかなれば斯かる醜女を妻にしつるといふに、凡て支離なる子は愛尙增るとかいへる、世間の常言に似て、人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道には迷ふ物から、若し娶らんといふ人あらば、強ち尊卑をも選ばず、調度のほかは金百兩を贈らんとありければ、素より強慾の愚六なり。百兩の金欲しさに心にもなき情を運びて、戀の重荷の數積める、片輪車を引き入れしなり。此の愚六其のむかしは、鶴御前と淺からず契りし中なりしが、仇なる花の移ろひ易くて、後はたがひに打絶えけるを、邇頃より賢眞衛が家に寓居しければ、彼的が後妻となりしを見て、ひとたび消えたる木も再び火の移り易き習俗なれば、素より色好みの逢見なり、か

つ愚六も妻の嘆きを憐みてければ、互に關守る人目を忍びて、密かに意を通したりけり。女兒瞿麥はは
やくより斯々とは曉り得つれども、此の由父に聞えなば、由々しき大事と想ひければ、深く包みてさ
て止みぬ。まして愚六が妻麻子は、頃日の夫が行跡、吾に辛きのみならず、逆兒に親しむを怪しみ、
よそながら心を用ゐて、其の動靜をぞ窺ひける。扨又賢兵衛は或日手裏劍を取り出し、明日こそ鎌倉
に立ち越えて、[illegible]物語らんと思ひければ、宵の程より準備して、まづ[illegible]、
[illegible]彼の木像、涌き出づる[illegible]身に[illegible]、賢兵衛これを[illegible]、
是はいかに、いぶかしや。神靈奇瑞の[illegible]すらば、鎌倉の御家に變事こそ出で來たんなれ。よしさ
らば片時も捨て置かれじ、今より直に馳せ行かんことて、取る物をも取りあへず、供さへ具せで急ぎ
ける。さて其の事は暫くおきつ。こゝに大礒の[illegible]にては、萬壽の[illegible]が[illegible]、
總角が事さまざまの傳あり、年毎の靈祭には、文月一日といふ日より、おもひおもひの燈籠を門々に
しばらくこゝにいはず。
列ねて、其の賑ひたとへんかたなし。花ある娼妓は玉を碎き、金を鏤りたる鳳釵、[illegible]
たりを照らし、綾錦の羅綺、唐和の美をつくして輝きわたり、おのがさまざま粧ひを競らして、こゝ
かしこの妓樓に交加ふを看れば、世界の財貨は此の曲中に會まるかとおもふばかり、吾も他もこれを
見んとて、大路せましと立ちつどひ、五月蠅なす嫖客の中には、鼻下長とも渾號すべき男が、烏帽子

のためやう衣紋のかゝり、すべて六波羅様に打扮ちたるが、中啓の扇さし覆うて、鼻のあたり鳴呼めかすもあれば、坂東太夫とも呼ぶべき男が、直衣の著ざま布袴のくゝりやう、鎌倉武士の荒々しき樣して、娼在行といはぬばかりに、口かしこう囀るもあり。やごとなき御方の九重の霞をわけて、娼児んと打ちひそまりてわたらせ給ふあれば、しもざまのねぢけ人の、おのが通ひ來るをいかめしき事に思ひて、聲高に利口するもあり。いづれ風月の爲に役せられて、其の趣はしぬぶしぬばぬの際にあるならまし。此の日橘内も羣る中に立ち交はりてありけるが、遙かのあなたより丫鬟あまたにかしづかれて、徐々とねり來るは誰畬と看てあるに、これ乃ち橘内が眼に西施を出せる愛壽にてありけり。やをらちかづくまゝに目せき笠かなぐりて、愛壽が袂をひかふるに、隔たりし胸の恨みは且づ涙ぞさきだちける。さるを愛壽は看向きもせで、猶ねり行かんとする所を、橘内しかと推し止めて、腰なる燧嚢より一文の錢を拿り出していふやう、「いかにや愛壽、そのむかし虎御前は曾我殿原に馴れ染めけるに、祐成やゝ落魄れて後、人繁き途中にて錢一穴與へしを、情やかにおし戴き、其の儘懐にせしと聞きけるが、果して後貞操はありにき。今の吾が身の一錢は其の昔の千金とも思へり　凡て情を商ふ女は情篤く、俠氣とやらんを磨くとこそ聞け、御許に斯く迷うたるものを、せめては便なしとも思はば、これ收めよ。」といひつゝ、錢一文をさし出せば、鴇婆つと出でて彼の錢を打ち落し、「こは

覺れたる人の紫辯なれ、貧世の面影、一錢二錢の細布切は、道なるを奮らすべき、狂人に狂はされて不狂人も狂ふとやらん、愛壽君は彼奴めに誑され給ふぞと推し隔て眼を輝らし、あれはいかにと久三に目くばせすれば、提灯もてる彼夫の立ちかゝりて、いかに風の神と申しめせ、今宵居が花嫁は愛壽御前の夫君にて、例の綾帷に天降りましますなり、もし内陣を穢されたくば古借錢を拂ひ清めて、さて綾帷へ來られよ、われ等は先生の狂人やと、愛壽を中に押圍みて、綾帷をさして急ぎゆきぬ。橘内大きに呆れつゝ、人目恥らひある所に、揚屋の裏より二人の男出で來り、慇懃に告しけるは、吾等は猿桃西九郎、鶴膝渡三といふ者にて候が、白濱雲平足下に見參申したく、酒をもさゝげたきとの事にて、これまで御迎へに參り候と演べければ、橘内思ふに、これぞかの江島の遺恨すべき心構へなるべし、遮莫何程の事やあらんと、乃ち兩人と打連れゆくに、かの綾帷の正面には白濱雲平、愛壽を横懷に抱きて、左手に大杯をとり、左右には許多の壯士道者と覺し會ひ、中に舞子歌法師なんど打交りて、「蓬萊山には千歳經る、萬歳千秋重なれり、松の枝には鶴巣食ひ、巖の上には龜遊ぶ」と同音に歌ひ澄ましければ、鯛鳥の音和かに、仙女の舞妙なりやと、酒の一曲ひ興に入りぬ。爰ありて、橘内雲平と謁見をはり、種々手を盡して款待しければ、興闌にはなれども、橘内が心さらに嬉しまず、此の恨みをはるけんには、黃金なくしてせん術なしと、只顧むねをそ痛め

ける。又折からの朗詠に、

たぐふべき方も渚のうつせ貝くだけて君を思ふとをしれ

と謳うて舞ひければ雲平うち咲みて「いと戯呼、吾が身の上をこそ舞ひつれ。」とて、金あまたを撒らして、あらゆる者にぞあたへける。此の歌は花山院左大臣兼雅公の詠歌なり。相國清盛に御娘八人おはしけるが、一人は櫻町中納言成範卿の相具し給ひし程に、彼の卿下野や室の八島へ流されて後、花山院左大臣兼雅の御臺盤所に成りたまへり。實は成範卿と左大臣家とは、兄弟の契りにて内外なき中なりけり。左大臣の北の方も坐せで、二三年男上人にて常は心を澄まし、萬倦氣なるありさまなりければ、いかにも仔細在すにこそと、人皆怪しみをなしぬるに、大臣、或時御乳人の三位局に御物語あり、「去々年の春成範の女房を、雲上にて風に見たりしより、心くるしき思ひあり、男の習ひは后をも盗み奉り、國の騒ぎともなるぞかし。況んやこれは左も右も謀り出して、思ひをはるべけれども、中納言の爲に後闇き事はあるまじ。兄弟の契りながら相思ひの情淺からず、縱ひ我が思ひの女なりとも所望せば慰むべし。只餘所ながら由なくも、見そめし事の辛しと思へば、色に出でて汝にさへ心苦しき思ひを付くることこそ不便なれ。」なんど忍びの御物語あり。三位局これを聞きて、大臣は由々しき大事の病はつき給ひぬと打歎きけり。一日中納言殿の仰せに、「大臣殿の御景氣は、いかにも人を戀ひ給

ふとみえたり。いかなる人に思ひを残し給ふやらん、あはれ成範が妻ならば、奉りなん。隔てなく申し睦び奉る詮には、これこそ實の志なれ」と仰せられし、かばかり思ひ奉るとはよも思ひ給はじと、御心くるしげにありければ、三位局しかじかの旨を聞えしに「隔てなく斯く聞え侍る事返す返す神妙にこそ。さりとて離別と申したらば、我が志にはあらじ、いかにも奉公のためには、悲しき別れをせんずるに」とて、中納言北の方に此の由告されけり。女房は事に觸れて、我を捨てんと覺すにこそ、かかる様やあるべき」と、限りなく涙に咽び給ひければ、中納言も袖を絞りて、「此の世には隔てなく志の色を顯はし、後の世には繫念無量劫とかやの罪をも遁れ給へかしと、我が爲人の爲かく思ひ侍るにぞ、愚かの御事にはあらず」と、さまざま誓言を申し給へば、其の上には力及ばず」とて、心ならぬ別れをなし給ひけるこそいとほしけれ。此の由かくと披露ありければ、三位局の許にて迎へ取り給ひしが、大臣は並ならずとぞ思はれける。中納言は流石に飽かぬ別れの道なれば、忍びの涙を流し給ひしとなん。彼の朱門が妻を避けし志、管寧が席を斷ちし情も、斯くやとおぼえて最やさし。其の後三位局大臣に斯うと申しければ、大きに驚き給ひて、彼の歌をば懐に納め給へるが、中納言此の歌を見て、さては御心にかなひけるよと、歎きの中にも悦び給ひければ、世に例なき情なり」と人申しけり。成範中納言の北の方、花山院の御臺盤所になり給ひしと世に聞えければ、何者の詠み

たりけん四足の柱に、

花の山高き梢と聞きしかど蜑の子かとよふるめひろふは

と落首したりしとなん。此の時の歌をとりいでて舞ひければ、「雲平吾が身を花山院に比し、橘内を成範に擬へて、彼は成範の妻を所望し、吾は橘内が馴れ染めたる、愛壽を所望したり。」というて、一座喊叫み渡りければ、橘内口惜しさいはん方なく、「彼の成範情あればとて、假にも兄弟の契りある者に吾が妻を贈りし事は又なき空氣物語よ。よしそれはさもあれ、こは素より金の爲に身をまかす、一夜妻の習ひなれば、人に奪はるといふにはあらねど、弓とる者の意地を想へば、彼がしたり貌見て、餘所に過ぎなんも口惜し、且愛壽が動止も傍痛し、いかになすべき。」と切齒して居る所に、壯士等は圖に乘りて、「愛壽どのきこしめせ、橘内を廢てて雲平どのに睦まれしは、げにそれよ瓦石を廢てて玉を得たるに等し、いかにも一雙の美人にて、内裏雛もけおされつべし。橘内主あれ看給はずや、鴛鴦の水に遊び、胡蝶の花に戯る、形勢、和殿は口惜しくおぼさずや、羨ましくはあらざるか。これ皆黄金の光にて、墨をも雪と見なせるなり。和殿が衣服は垢染みて、黑鐵の光こそあれ、無垢世界にはなかなかに至らじ。其の編笠の蓮葉に、芋殼のやうなる兩刀を帶びたれば、瓜茄子の牛馬にか跨りなば天晴武者風よき餓鬼大將かな。生面人に晒さんよりは、自滅して生まれ變らば、又よき造化もありぬ

べし」といへば、「何此奴は恥しらぬ畜獣よ。四句の偈の旗幡をもて、西太郎畑一遍ひ、なせそ」魁首
と愛寿どのは、且くしばらく閨房に入りて、雲となり雨となり、臼ともなり杵ともなり給へ」など、
口々に罵れて皆一齊に一室へ入りぬ。楠内かく差しめる得て、怒氣心頭に發り、堪忍もはや是ま
でぞと、一室を睨んで立ち上り、袴のそば高くとり、刀の下緒を引き結んで、襷する間も鯉口くつろ
げ、既に駆け入らんとする所に、最前の笹二枚、雙手に行燈を引提げて、「一間所へ來つゝ、「廊下に
物のこぼれしは、酒客の穢したるにや、誰曾あるかあれ清めよ。いざたなき童も、燈火を一見て
れば、はや眠る事かは。もし品玉とれ六行道成ではないほど、猿眼しつかりに、千寿は疾く駆還夫ま
やて、萬壽は角盥持て往ねかし、久三は落ちありはふ紙屑拾ひね、汝一にて、なる器物さけよ。又も
又打ちたる破いぞ。あら心痛の鸞生や、吾ながら歌はぬばかりの猿曳にこそ」と、苦笑ひして行けるが、
自然と蟲のしらしたりけん、敗の後の気吹き出づる念佛をさへ、「南無阿彌陀佛」と咳きつゝ、楠内に
行き逢うたり。「こは盗人猛々し、備は夜合歓の値も遣さで、彼奴にかなる様やはある。吾あらむ收禁む
べし、さなくば面皮ひき裂かばや。」と、立ちながらに罵りければ、楠内嚇と回答も早く、「うぬ来ぬかた
さん請けよや。」とて、躍り上りて斬りかけければ、首は宙にぞ打ち落しける。三尺八寸氷の如き太刀
なれば、水も溜らず打ち落しけるが、彼の老婆が不敵心の、首にや留まりけん、屍は扶地と倒れしが

ども、首は落ちざま跳り上りて、二つ三つ介歯しつゝ、行燈にぞ咬み著きける。まづ血祭心地よしと刃を振つて進む所に、下男の久三何心なく出で來りて、白刃を見るよりこは懼ろしと、身を翻して逃げゆくを、「最前の惡口おぼえあらん。」と、後袈裟に切り割りけるが、刀は元來利き上にも、場數に馴れし業物なり、斬人は數ヶ度の武功ありて、劍法手練の者なりければ、居物斬りにぞしたりける。久三は斬られしとも覺えねば、「人殺しは橘内主ぞ、貧鬼の怒りに觸れて、既に失ちすべかりつるに、障らぬ神の祟りはなくて、危くも脫れたり。人々謬ちなせそ、彼奴は覺えある剛兵ぞ。」と、高らかに呼ばひつゝ、家裏を蒐け遶りしが、吽と一聲哦くと等しく、兩端に別れて死したりけり。この物音に驚きて、龜の泥太郎、鳶飛治團太、何ほどのことかあらんと、左右より打つてかゝるを、得たりや應と切り結び、二打三打戰ひけるに、首は忽ち鳶飛が、治團太踏んで倒れしかば、これはと逃げゆく龜をも、押へて首をご搔いたりける。獅子の角兵衛これを見て、忿瞋の怒りをなし、おひやり子傳平諸共に、透間を見て組みついたり。「しや物々しき擧動よ。」と、三間投げのくれば、素より身輕の角兵衛なれば、宙より翻りて飛びかゝるを、「眼眩暗しき邪魔外道めこと、捨てたる刀を採るより速く横なぐりに拂ひければ、耳の側まで口を割られて、さながら獅子の角兵衛は、頭うち振り身を震はして、卽便轉輪と倒れけり。傳平これに躓きけん、獅子が上に轉びうちて仰向に倒れしかば、橘内透か

ちを飽せ侍つて、傳平が上に跨り、胸に刃を推當てて、柄も通れと刺したりければ、下なる婦子も諸共に、胸膸を貫かれて、息も通はぬおひやうに傳平、ひい〳〵いうてぞ亡せにける。橘内烈しくかけ廻りて、「雲平は何處に在りや、婆羅門組に仕伏したり、出でて勝負報はずや。」と、八方に眼を配りて、「對ふ敵京都で有りぞ。」と、嘲り猛く罵りたるに、欄間の際に怪しき形容の見えければ、太刀振らしてよく見れば、犬には名を得し猿にの、「御意悪。」とわぶる鳴音の、きやつがいのちも酉九郎、「最前の返報うけよ。」とて、踊り上りて撃つ太刀に、見ば脊骨血に染みて、はつ〳〵と此の世を去る魂の、末から落ちてぞ死したりける。これにおそれて無體者どもに、中に名ある長持なる、小目の下に、つゞいけるを、膝に擁へたる梃に刃り、利き劍もて刺しければ、泡を吹く間に死してけり。されば婆羅門組六人まで討たせしが、鼻柱頑八は折りしく出の合はさず、手に覺りしは眼目鬼武内なり。東は叔くより橘内が手段におそれて出で合はず。且雲平は世をしのぶ身なるゆゑ、間もなく遁れんと、小暗き一室に竊み居れり。橘内は雲平を討ち漏らさじと、隈々を覓むる所に、阿武内が運の究めにやありけん、端なくも出で合うたり。されども剛の者なりければ、上段下段と渡りあひ、暫し支へて見えけるが、拜擊に斬り付けられ、血に香みたる眼目、あぶなき命の際とは成りぬ。然るに眼の前なる、遊女愛壽走り出で、「橘内君よ、侍ち給へ、唯一言きこえたき事侍り。」とて、刀も擢れず立ち隔るを、橘内見

るより眼を荒らげ聲尙怒らし、「やをれ傀儡女、たとへん形なき人非人、今更に何をか聞かん」と、云ひさま刀を振り上げしが、横車にぞ斬つたりける。橘内やがて立ち倚りて、愛壽が髮毛を弓手に掴み首搔き斬つて突立つをりから、曳とかけたる聲の下より、目前に飛び來る手裏劍を、持つたる首にて丁と受けとめ、またもや來ると窺へども、主はそれぞと白波の、行方定めぬ雲平は、跡を霞めて落ち失せけり。時に怪しきことこそあれ、目今うけとめたる手裏劍、愛壽が眉間に立つとひとしく、一陣の暴風起り、一團の心火燃えて、宙をまろぶと見えけるが、女の聲とおぼしくて、「阿那冤めしの愛壽や。」と、一聲高く叫ぶ下より、吻と魂斷る聲音して、虛空を遙かに飛び去りけり。橘内何の緣故をしらねば、呆れて眺やるばかりなり。

○此の心火は是れ乃ち雲平が妻に、沖津といふ者の生靈なるが、彼常に嫉妬の念深かりしかば、竟には愛壽を呪詛ひ害せるなり。此の緣故は第三之卷を讀みてしるべし。

扨雲平を討ち漏らせしは殘念なれど、此の日頃つらかりし、愛壽を討ちしぞ心地よきとて、彼が首を地に擲ち、踏みにじり蹴ちらしていふやう、「汝此の幾日われに辛かりし酬いのほど、今こそは思ひしるらめ。なべて娼婦が心は、實なきものとはいへれど、人面獸心とは汝なるべし、如是畜生發菩提心。吁思へば迷ひの夢なりけり。」と、愛壽が面に液吐して、口惜淚をはら〳〵と流し、なほ睨みてあ

りけるが、何やらん嘆へ居ること不思議なれと、彼が口より引き出せば、是れ乃ち書き殘せし一通なり、橘内いそがはしく讀み畢り、しばらく呆れて居たりしが、「扨は此の遺書の旨を含むに、自ら下色に溺れてより、家をも身をも思はざる不行跡なるを、怒り給はず、御恩慈深き同人の、忍びて曲中に逗留あり、密かに愛露を頼みきこえ、向後橘内が身を想はば、よそにつらく款待しくれよ、さらば今より三年も過ぎなば、金を整へ躬を贖うて、私婦ともなしぬべし。今は左右の衛なければ、暫しが程な過げくれよ」と、飽かね中をも引き分くるは、恩愛切なる母の詞、義理と情に責まりて、暫く昧前くももてなせしよ」。さまでの心としらざりしかば、恨みの刃に掛きて、再び三途の川何ともし、身を徹せしこそ便なけれ」と、思ひはいとゞ丈夫たが、涙流れの身を波みて、袖に時雨を伏ぎけり。殺又貝が家内にては、手負死人夥しく、上を下へと騒動しけるが、誰近よらん者もなく、家を捨てて逃げ去りける。此の時しも討手と覺しく、人馬の音喧しく、衛門首に近づきければ、橘内今は是れまでなり、人を害めて助かるべき道理なしと、氷なす刃を含めて腹に合破と突き立て、きり〳〵と引き廻はす所へ、橘内が株健の臣に、阿濟半二次盛といふ壯たゞ、賢兵衛とうちつれて、唯々としてかけ來り、遠の光景を視るよりも、「こはしなしたり遲かりし」と拳を握りて坐しければ、橘内苦しき息をつぎて、前後詳かに物語る。兩人たゞ歎息するばかりなりし。半二やがて告しけるは、「かねて御家の重寶白蝦

の名劍、明日未明に恆例の如く、本館において御内覽との命せあれば、今宵書院に飾り置きて、在下守護し在りつるに、何とやらん怔忡のいたせしゆゑ、守護は父に讓りおき、これまで御迎へに參りつれば、案にたがはず此の爲體、駭き入つては候へど、所詮悔みて反らざれば、只此の上は御最期正しきをねがひ候。」と、涙にくれて告しければ、賢兵衛も進み出で、「最前木像の兆を見るより、尊宅へと馳せつるに、思ひもかけざる曲中の騷動、喧嘩の對人は御主人と聽くよりも、途中より轉歩せしが聽くと見るとに兩度の駭き、流石に壯氣と申しながら、扨も思慮なき次第や。」と、只管涙にむせびけり。時に平二は側なる愛壽が頸を視て、這の眉間に打つたる手裏劍こそ、後の證據なんめれとて、忙ぎ拔きとりて熟覽るに、下總國の住人室平四郎重廣と鐫けたり。「扨は白波雲平とは假の名にて、寔は室平四郎にてありけるよ。」と、此の時、初めて賊長なることを曉り得ければ、主從面を見あはして、再び驚くばかりなり。賢兵衛これを聞きて、また二筋の手裏劍を懷中より取りいだし、「箇樣々々の次第にて、吾が許にも所持あり。」とて、彼の二疋の狐が事を始めに、兼て心におきてたる事まで、詳かに語りければ、兩人猶口惜しさぞ增りぬ。平二重ねていふやう、「しかるうへは彼の重廣、當の敵は更にもいはず、かつ御館の爲にも遺恨少なからず。さいつころ討手にむかひ給ひし後、羽林の不興を蒙られし、御鬱憤の病根なれば、重ね〳〵の讐敵なり。在下忠を勵まして彼奴を討たば、主人の

幽魂を慰すのみならず、御館の爲には主人歿後の忠ともなりなん。さらば一たびお家は滅するとも枯樹重ねて花咲く事侍ふべし。御心易うおぼして、御最期清う遊ばし侍へ」と、忠義の赤心おもてに顕はれ見えければ、橘内苦痛をわすれて快氣に打笑ひ、「今に至りてなほ忠臣の、この志をおもふにさへなほ頼もしき我が上かな」といはれざる色に逼りて、不忠不孝に身を果すも、宿業のなす所となし。猶この上は母と妹が介抱を、吾に代りて頼むぞとよ。賢兵衛も諸共に、力を合はしてくれよかしぞ」と、いふ息さへも迫り来る、断末魔の苦しみに、「平二はや介錯せよ。甲斐なき討手に死際を取られて、恥を後に見んよりは、疾く討れ度く〳〵」とありければ、「今は是非に候ふ」と、泣く〳〵後に立ち廻りて、「南無八幡照覧させ給へ」と、刀を上ぐると見えけるが、首は前に落ちにけり。あに是れ三寸氣在千般用、一日無常萬事休、可惜むべき壮士なりけり。往昔晉由に孝敷といふ者あり。若うして父に後れて母と共に住りけるが、後園に廬を造りて、寡なる母を居らしめ養ひ置に、母徒然を慰まんとて、竊びて男に通ひつゝ、年月を送りしが、園の内に深き塹を掘り、常に密かに往返しければ、其孝敷、母が志を知るゆゑに、往返の心易からん事を思ひて、彼の塹に橋を渡しぬ。しかれば母が爲には孝子といふべきに、子のしる事を深く恥ぢて、密かに自害したりしかば、子を不孝とぞいへりける。又糜保といふ者ありき。家貧しうして父を養ひけるが、飢饉の年にあひて、父をも扶けか

たかりければ、父子ともに鄰國に往きて、他の財を劫し、竊かに奪ひ去らんとせしに、追人きびしく追ひすがりて、鼠の猫に合ふが如し。子は壯の年なれば先だちて逃ぐれども、父は衰へし悲しさには、走る事の遲かりければ、牆をくゞりて逃げんとせしに、牆の中に頭を出して、足をば追人に捕へられたり。荊保囘身りて、父が恥見ん事を悲しみ、即便頭を討ち落して、吾が家に持ち歸りぬ。浩かりしかば時の人、孝養の子とよびしとなん。彼の石橋山の戰ひに、工藤介茂光自害せしを、其の子狩野五郎親光は、恩愛の悲しさに介錯もせで猶豫ひしを、孫にてありける田代冠者信綱、祖父が首をかき落して、「其れ孝養し給へ。」とて、伯父の五郎に與へしといへり。彼此の事共を思ひ合はせし平二が介錯、世にたぐひなき忠臣なりけり。かくて時刻を移せしかば、追々に人寄せ來るにぞ、平二は死屍の袖ひき斷りて、主人と愛壽の首級を包み、賢兵衞は橘内が兩刀を身に帶びて、屋根傳ひに逃れ出でしが、橘内が軀をば、古井の底に沈めつゝ、裏路より逸散に、家路をさしてぞ急ぎける。此の夜舞鶴の長が家には、手負許多ありけれども、死亡せし人々には、愛壽、鴇婆、久三の三人、其の他婆羅門組の惡棍には、鳶飛治團太、鼈の泥太郎、獅子の角兵衞、おひやりこ傳平、猿桃内九郎、蟹股波三太、眼玉阿武内の七人なり、都て十人の死亡なりければ、此の頃の人これを呼んで、大磯の十人斬ともてはやしけるが、耳癖あるものゝ記憶りて、竟には後世の談柄に殘りぬ。

遠き慮りなきものは、必ず近き患へあり。嗚呼備内一朝の奢侈を縦にし、一期の栄華を衰へつこと、暗愚浅智言ふに足らず、凡て此の後を戒むる者は、淫乱放蕩を禁しむる教示なる事を道寄りて、淫に耽り色に溺るゝ事なかれ。古より聖賢の生涯を誤てるは、概ね色欲にあり、されば自ら慎むべきは此の惑ひなり、畢竟離るべし戒むべし。

又曰ふ、彼の業平四郎が顔か、白波雲平と仮名しつるは、白波緑林の賊に標準へ、且は水や空や次なるの意をとりて、雲平とは名告りけん。後的山に在る時は山賊の首領となり、海に在る時は海賊の張本となりて、白波緑林水や空の意に協へる事、未曾詳かに読みすしるべし。鴨長明無名抄を詠みたる歌に、はや過ぎよ人の心は横田山、緑のはやし陰にかくるゝ、古今著聞集に、盗賊を詠まれし見の詠みける歌に、白波の立ちくるまゝに玉櫛笥、ふたみのうらは見る方なかりにき。又彼の名高き津と呼べりしは、伊勢物語に、男の河内通ひとゞまりしとある歌に、風吹けば沖つ白波たつた山、夜半にや君がひとり越ゆらん、と、詠めりしをも思ひ據りてなるにこそ。

流転数回　阿古義物語前編巻之二　終

第五齣　奪劔隱形術

爰に橘内が母床世といへるは、年紀六十に近し。其の先め江島辨財天の告子にて、巳年巳月巳日巳刻の生誕なりければ、靈夢に授かりし天女の尊像、一寸八分ありけるをば守護佛として肌身離さず。まして己巳といふ日には、供養の事怠らざりけり。此の夜も例の巳の日にあたりければ、昨夜のほど巳待して通夜睡らざれば、家内の者も勞れぬとて、例よりは疾く寐ねてけり。されど橘内家に在らざれば、歸宅の程俟たばやとて、床世は閨房にいりけれど、未だ眠りにも著かでありぬ。さるうへに翌の未明には、白鳩丸の御劔内覽あるべきとの事なれば、書院の方には阿濃平二が番代として、父平太左衛門只一人、上段には名劔を飾り置き、目もまじろかで護り居れり。こゝにまた娘園葉は此の程より、人目の關に隔たりて、蜂の使も思ふにまかせず、只鬱々と過せし中にも、いつしか情を身に懷しけん、腹のあたりふくよかに覺えつるも、きのふと過ぎけふと暮れ、袖に掩まん月立ちて、いとゞさへ心を痛めにける。しかるに此の晝のほど、吉香が許より使ありて、一枚の短冊を持て來りければ、心ならず披き視るに、たゞ何とはなくて、むさし野にありといふなる逃水の、といへる古歌の、上の

何ばかりを記したる。是はこれ俊頼朝臣の詠歌にて、しかも世の人のしる所なるを、今更ら事新しう書いつけ給へる上の心しらひは、什麼いかなる備へやらんなど、暫し評議に沈みてありけるが、聊か掌を丁と拍ち、あな嬉し此の謎すでに解けぬ。想ふにこれは妾が今の身の覺えず、人には解きといはた燃、むすびて後のすべなさに、主のしるべもありと聞けば、武藏國に逃水の、誘ふ心としられたり。よしやよし何者の心を解き誤へりとも、心に浮みたることを、無下にきこえざらんもいと口惜しと、おなじく筆とりて彼の上句につけて、逃げかくれても世をすごすかな。とありし下の句書きて、また例の蜂もて使はしければ、又彼者よりも歌の結句を、ごばやと三字替き直して、末の方にはいといとめでたし。今宵こそと返詞しければ、菖蒲ふたゝび吟ずるに、いかさし皆にありといふなる逃水の逃げかくれても世をすごばや。とありければ、菖蒲は謎の解き得たるを嬉しけるが、また思ひ回らせば、妾落ち行きなん後は母公の御歎き、兄上の御怒りはいかばかりなるべきと、さすがに心のかされて、忍び涙を催しけり。されとてもいかにせん、不孝の罪は悔ゆともかへらじ、ある時は浮き、あるひは沈むうたかたの、水の流れと人の行く末、たゞさだまらぬ習俗なるか、心弱くてかなはじとて、ひそかに落ち行く準備して、日の晩るゝを、待ち居たる。さて、又こゝに要羅門黨の悪漢鼻柱の頑八は、白波雲平が指揮にしたがひ、ひそかに橘内が邸宅にしのび入り、白鳩丸を奪はんとて、背に

より隠れ居たりしかば、今宵大磯において人斬の騒動ありしをば、露ばかりもしらでありぬ。怎生這の悪計いかにとなれば、この家に預る所の白鳩丸を奪ひ取り、其の越度によりて、橘内を自滅させんと謀りたる、雲平が巧みなりけり。すでに其の夜も子の刻の頃、實副四郎吉香は、兼てより行李の準備はなしつ、今は心易しとて、橘内が邸宅の邊をさまよひ、築墻の下に竊び倚れば、向うの方にも人影あやしく見えけれど、名にしおふ鎌倉山の星月夜も、晝より微雨降りて、宵ほど僅かに霽みたれば、空は朦に雲蓋ひ、薄暗夜の事なれば潦そこゝと拾足して窺ひ寄り、やをら鼻合はすばかりにさし對へば、此の人はこれ他にはあらで、疾くも園葉が忍び出でたるなり。たがひに嬉しといひもあへず、ひしと抱き合ひけるが、左右の辭も今更に、只管涙の雨催ひぞせられぬ。さて吉香は行李を肩にかけつゝ、「いふべき事も心せけば、疾くこゝを逃れ出でゝ、彼首に船あるところまで急ぐべし。時刻延びなば互の身のため悪しかりなん、去來々々と、そゝのかせど、園葉はおもひ捨てがたき、母兄の別れを惜しみて、いとゞ涙はせきあへず、旅の衣もしとゞ濡れ、やゝ佇みてありけるが、「これ今生の別れとなりもやせん、さりとも盡きせぬ縁あらば、またこそ謁えたてまつらめ。吾が躬の上はいとはねど、老いさらぼひし母公の、妾がことを苦に病みて、重き病となり給はゞ、いかばかりの悲しみぞや。また一つには兄上の、然こそは怒り給ふらめ。想像るさへおやかくと、吾が身に

おぼえ難きのほど、そこおそれしことばかりにて、不慮の禍にくれけるが、吉凶いづれともいはず、「又あふことのあるものを、心細くも言かな、」更に思ひあぐむのみなりしを、かゝる詞に出来なくも、「只来よ」とて手に手をとりかはせど、又かへり見る後影、跡に心をひかされて、幹に消えて出で行きける。それはさておき鼻住の頭八は、先刻より家内の動静を窺ふところに、夜半の鐘の声響きて後、漸くに人静まり、寝息の生る音、軒の響きの聞えければ、時こそ来たれと竊に出で、兼て練熟の忍術を以て、書院の扉を押し開き、内の光景を見てあれば、閑清平太左衛門たゞ一人、燈をかゝげつゝ、欣然と坐し居たり。頭八これを看て竊かに喜び、且つ昔の術を試みばやとて、密かに平太左衛門が耳根へ、面をつとさし出して、目を張り舌を吐し、醜女面してうかゞひしに、更に怯る気もなし。頭八これをとくと再び澄まし、わが隱形の幻術、思ふまゝに熟したりと大きに喜び、やがて上段の床に到りて、難なく名刀を盗みとり、小脇にかゝへて立ちのかんとする時に、奇しいかな上段より、白鳩一羽忽然と顕はれ、座上に翔つて舞ひ翻るを、平太左衛門屹と見れば、こは不思議や、今までありつる白鳩丸の一腰、影も形も見えざるにぞ、慌忙しく身を起し、床の間をさして進み寄る。頭八この體を見るよりも、仕損じたりと思ひけん、腰なる一刀を抜き放し、平太左衛門が背後より大袈裟に斬り着くれば、あはれむべし平太左衛門、右の肩より左の乳下まで斬りつけられ、眼に

りてぞ倒れける。されども家内靜まりて、人音なきこそ僥倖なれと、いそがはしく刀を納めて、平太左衞門が佩いたりし三條小鍛冶宗近の刀、三疋獅子の金目貫に、南蠻鐵の鐔打つたる海老鞘卷の一腰をも奪ひ取つて腰に帶び、飛鳥の如く身を飛ばして、塀の外にぞ下り立ちける。かかるところへ阿漕平二次盛は、今宵の變事を告げんとて、賢兵衞をば大磯に殘し置き、おのれ一人橘内と愛壽とが、二つの首級を携へて、息をもつかず馳せ來り、旣に門前に近づくときに、夜もはや四更に向んとして、草木も睡るころほひなるに、あやしいかな一羽の白鳩、築垣の上より翔つて出で、みる／＼かしこに飛び去らんとす。平二物陰に身をひそめて、彼の鳩のやうを見るに、また松が枝の木を傳うて、翩々とひらめく物あり。目をとゞめてこれを見れば、錦の嚢樣の物、空に上らず地にも下らず、宙にひらめく光景は、夜目にもいかでか見まがふべき、白鳩丸の一腰なり。さては忍術を得たりし者、ひそかに奪うて立ち退くと覺えたり、縱令其の身は隱すとも、隱し難きは名劍の威德にて、劍ばかりは斯く形を現はすならん、所詮彼の名劍を目的とするにしかじ、」とて、一刀を拔き持つて小陰より跳り出で曳というて斬りつくれば、あやまたずも手答へして、一聲あつと叫ぶと齊しく、雲霧朦朧とあたりを蓋ひ、只一塊の團となりて、卽便そこに消え失せたり。これ乃ち頑八が練磨する所の隱形影の幻術なり。そも／＼隱形影といへるは、俗にいふ目くらましのたぐひにして、形容を隱すの術なり。繩を

飛揚て雲の梯となし、帯を廣げして龍となり、或は鼠となりて[illegible]、または鳥となりて[illegible]
和漢に稀代にて計へがたし。頭八さぎかりの奥妙は究めざれども、容身を隠す[illegible]を習得たり。此の時
一声の下に霹靂と物音して、雲霧跡なく霽れたりしかば、さては剣を投げ下せしにと、平二郎が[illegible]
ひ見るに、白鳩丸の一羽にして、鮮血滴る腕にてありければ、一仕にしたり残念やると、狼狽[illegible]
怒れども、はやくも鳩は飛び去りて、目にさへぎるもののあらざれば、是非なく腕を提げ、四方を
を睨んでひかへたり。此のとき[illegible]、月影を[illegible]、[illegible]しけるに、[illegible]
お右の腕や、二の腕かけて切り落せしなり。平二あれたと、山門を[illegible]二度[illegible]と叩く
ばはりよばれば、[illegible]、と回答へて、扉を[illegible]開る心[illegible]、[illegible]に[illegible]の[illegible]に
と入れば、[illegible]なるかな[illegible]は、[illegible]へて[illegible]」といひつ[illegible]すれば、
室に道は高名は疾く失せたり。此の物音に驚きて、[illegible]を[illegible]、平二が[illegible]といふ
もの、おなじく周章てかけ出でけるが、此の體を見て後へ騒ぎ、「平二[illegible]」と[illegible]
いふやう、今日はこれいかなる悪日なるぞ、[illegible]の[illegible]一時に通り来て、[illegible]の[illegible]なるか
まう御心を痛められ、仔細をきこしめされよ」とて、[illegible]二つの首を、[illegible]に[illegible]し、今
宵大饑に於て斯様々の騒動ありしことと、事の始末をつまんで[illegible]、[illegible]を[illegible]へ

す、二つの首に拿り著きしが、餘りの事に呆れ果て、吽とばかりに悶絶す。平二驚き呼び甦して、さまざまと介抱しければ、床世やう〳〵に息出でて、二つの首を右と左にかき抱き、雨々とかき口說きけるは、「さても〳〵、情なや、かかる歎きに逢はんとは、夢にだもしらざりし、此のほど妾が術計にて、愛壽に無理なるたのみ事も、橘內が身の放埒を止めん爲の業なりしに、女の智慧の淺はかに、末の事まで左や右と、量りし事は裏表、爲を思ふも不爲となりて、一人ならず二人まで、水の出端の若者を、非業の刃にかけたるは、皆此の母が誤りぞや。分說もなき此の始末、許してくれよ二人の者、母も後に存命へ居て、何面目のあるべきぞ。倶に死なん。」とばかりにて、悶え歎くぞ理なる。刈藻も倶に泣きくづをれ、「御主人といひ舅公まで、思ひもかけぬこの災難、いかなる惡しき因果ぞ。」と、舅の死骸をゆり立てて、わつと叫べば一間より、「何、爺樣が斬られて。」とや、何者の所爲ぞ。」と、探り足して立ち出づるは、平二と刈藻が中に出できし一人の男、今年八歲なる平作が、疱瘡ゆゑの盲目人、よろぼひ出でて取り縋れば、「道理々々。」とかき抱き、「これ平作、御老爺樣許りでなく、三代相恩の相公も、今宵に逼つて不慮の御最後、それのみならず御劍まで、紛失したる一時の難儀、主家破滅の時なるか、あら情なや悲しや。」と、刈藻が歎きに平作も、見えぬ眼をひき開け、「せめて今生の御別れに、華面が一目拜みたや。生平御情篤き相公、昨日までも今日までも、御傍放れず召仕はれ、眼の

見えぬ目あるに、立ち居の度に手を取つて、御不便がられし有りがたさ、旦那さまは私が眼を、一日なりとも開けてやりたいこと、明暮苦労の甲斐もなく、たゞ先へ死なしやつた。倅が此の眼が片目なりと、開かぬ間は殺しはせぬ。孫よといふうに今一度、生きかへつてはくださらぬか。此の平作が老耄すまは、人に斬られて死ぬ様な、弱いのぢやない強いのぢや。欺して斬つたる卑怯者、本の様にして帰せ、聴きたかつたでござらうぞ、捕へて下され老爺さまと、涙にいとゞ喉みつゝ、見えぬ眼珠も飛び出るばかり、おし拭ひおし剝り、大聲上げて泣き口説けば、己が四方の憂き涙、平次が眼に溢れて、胸は大河と湛へしが、歎きを見せじと目を瞑き、ここには見ぐるしき両人が歎きかな、御老体の御嘆歎を、諫めんとはおもはずして、愁へを彌增す未練の挙動、假令千萬歎くとも、帰らぬ一昨日の變事。それはともあれ最前より、園葉君はいづれにおはすぞ、かかる歎きの折も折、見え給はぬは訝しし。家内の騒動しらせ給はぬ事やはある。」と、聲をはげまし呼ばはれば、床世もはじめて心づき、「げにそれよ、不慮の難儀に前後を忘れ娘が事をば思はざりし、園葉はいかに、婢等、それ〳〵」とありければ、手に〳〵燭携へて、家の隈々残りなく尋ぬれども、園葉は影も形もなし。「是は什麼いかに」と床世が顚倒、ふたゝび驚くばかりなり。かかる所へ婢女一人、周章しく走り出で、「園葉御室の枕邊に、此の品落ち散りて侍りし」とて、床世が前にさし出せば、採る手も遅しと披き見るに、人目

を忍ぶ密通、懐妊の身のすべなさに、今宵吉香ともろともに、立ち退く、とある遺書一通、又一枚の短冊には、二人が手して書きたるとおぼしくて、

　むさし野にありといふなる逃水の逃げかくれても世をすごすかな

世を過さばや、いと／＼めでたく今宵こそ、と記したり。三人目と目を視合はして、瞠呆れて詞もなかりしが、床世はいとゞ胸潰れ、「想ひ回せば妾ほど、世に廢てられし者はなし。老い行く末の樂しみにと、生ふし立てたる二人の子を、一夜の内に生死の別れ、それのみならず愛壻まで、後世今生の同行二人、死出の旅路も世の旅も、たとへの節の可愛子を、さきだてまじき親の身は、後に後れし末の露、もとの雫や逃水の、ありとはいへど定めなき、憂き世の中をすごすとも、しるべだになき武藏野の、旅は道づれひきかへて、世は情勿の身の上よ。母はこがれて死ねとてか、心強き我が子や」と、右に遺書左には、二級の首を搔抱き、合破と臥してぞ泣き沈む。此の體を見て刈藻をはじめ、並み居る男女も諸ともに、涙の袖をしぼるのみ。平二次盛初めより、默然として坐し居けるが、掌を丁と拍ち、席に進みていひけるは、「在下熟事のやうを按ずるに、實嗣四郎吉香とやらんは、由緒しれざる武士の浪人、けふは漂ふ薩摩潟、あすは呻吟ふ陸奥の、末の松山すゑかけて、所を定めぬ漂泊人。おそらくは今宵の始末も、實情とはおもはれず。其の緣故いかにとなれば、白鳩丸の御劍を、書院に

飾り置きたる事、他人のしるべきやうもなし。又世の常の盗人ならば、外の品こそ奪ふべけれ、思ふに彼奴、身を商賈に構ふるものか、一重には[illegible]に事寄せ、幽斎郎等を勾引して、同類に[illegible]上下こゝろあるべし、一つには蜜蔵を盗み取り、窃かに市上に代なして、路の[illegible]費にあて、且[illegible]往かんと計るものか、此の疑ひの内一つは孰れか適中せざらんや。加之[illegible]家重代の小鍛冶が刀、疋田師の金目貫に、南蛮鉄の鍔打つたる、一腰を奪ひ取りしは、重ね重ねの仇敵なり。されど某は計らずも、彼が腕を打ち落せしに、武運に叶ひし身の冥加、天幸の賞罰明らかなるかな。たとひ一旦は網を漏るとも、必ず報はれて[illegible]、拳を握り[illegible]天地を睨んで罵りける。[illegible]をはじめ附随ふ人々も、平二郎が殺害[illegible]、其[illegible]上に[illegible]罪あり。かつ非なりと思ふ者も、当然の理に惑うて、心に痛む許りなれば「されどまづ左右[illegible]て、急ぎ追人をかけよ」とて、心利きたる男を択みつ、又一党には此山の[illegible]へ[illegible]、上を下へと騒動しける。さて又こゝに旗頭の頑八は、平田左衛門を説得して[illegible]、白歯とある[illegible]この刀を奪ひ取り、十分に首尾よしと思ひの外、阿古平次に出で合うて、右の腕を打ち落されしかば俄の事に度間暗れけれ、抜き合はする隙もなく、漸く木隠の闇に[illegible]、命からぐに[illegible]るゝ、始めのほどは現つゝもなきからに、腕の痛みも覚えざりしが、次第くに痛み出でて、歯[illegible]

難儀に及べども、元來したゝか者なりければ、事ともせずして大磯へと志しぬ。扠時の間に大磯に到りければ、吾が速足の妙を慢りて、尙雲平が褒美を得んと、したり顏して進み行くに、案の外なる騷動あり。今宵舞鶴屋が家內には、箇樣々々の變事出で來て、婆羅門黨の俠客等、鳴戶橘內が一刀のもとに、十人斬の風說巷街に喧しく、曲中は出口の門を閉して、家々の提灯縱橫に馳せ違ひ、不寐番が割竹、きもきらず、御用心が太鼓撃ちも止まず、許多の人々羣集して、入らん入れじと揉み合うたり。中にも口々に噂しけるは、「婆羅門黨の惡棍ばら、日ごろ不法を働きつるが、人の念ひの通じけん、怨行客が堤の團粉か、丫鬟の欲しがる鬼燈の樣に、首を轉々十人斬とは心地よし。されど雲平めを討ち漏らせしは、南無提婆彿しまうたり。」といへば、傍より「されば候、吾下等兵法は、蘊奥を極めてあれば、謀は他の才にめぐらし、勝つ事は逃げての上にこそ定むれ、まして口先揃へて鐵砲を放し、又よく尻馬に乘る事の達者にて候。吾ながら遁業修練の弱者なるを、橘內が助勢するぞならば、念なう討ち漏らすまじき」なんど利口しつゝ、透あらば門に入らんと窺ひさま、あたりの古溝に落ち入りければ、後の方よりこれを見て、「やよいかに、板金剛を溝にざぶと打ち入れ給ふは、怨行の大將軍とこそ見たてまつれ。あさなくも溝へは入らせたまふものかな、這ひ上りて立たせ給へや。斯く申すは日本第一の鬪の者、熊谷次郎直實には所緣もなき、馬飼の太郎四郎等閑の者にはあら

すと、常言吐きつゝ、四下の人撥きわけて、「や、源九、平五、藤六、和仁達同じ西面を名告りながら、橘内には遥かに劣りて、此の門ひとつを越え兼ねけるまゝ、あはれ年二十だに壮くなば、此の馬にはだ生まれぬ前なれば、昔し高生は騎射にて名有りけん、朝夷名にてやありけん、さる時は此の門壁もに間なるとも、滅羅々々と踏み砕き、瓦落々々と押し破るはいと易きことなるに、今は膂力及ばず」なぞ、頭を口惜くいきへ、頭八は底気味わるく、若し此の處に長居せば、罪を加へて十一人斬とならんずとて、逃足疾く狐鼠々々と、曲輪の裏道を傳ひ行くに、耳にしたいに高声なれば、背を恐れて、「あら痛や、〳〵」と呻きつゝ走りしが、傍に消えたる裸體也行の際よりて其の背に頭八をや、頭八倒てつゝと聲かけければ、「やれ橘内どの恕し給へ、十人斬つても未だ足らずや、南無阿彌陀佛」此の時は、南無阿彌陀佛々々々と、働くものは目口のみ、足は縮みて動きも得ず、大地に両手を衝きいて、憐れみのゝき詰たりけり。其の時行燈の蔭より白眼雲半、しのびやかに出で来り、いかにや頭八、我は橘内にはあらざるぞ」といふ聲に、頭八拳のあたる如く、既に首をめにてか、二つなき肝を既に冥途へ飛ばさんとしたりしことて、まつ互に雙方の模様を語り、さて在りし事中に、白鳩丸を受け納め、かつ頭八が犠牲の贈物、ならびに今宵の褒美として、金百両をあたへしかば、頭八、生の間は、しばらくまつ此の處を立ち去りて、本國伊勢へ赴くべしことあらければ、頭八は心得顔に

とて押しいたゞき、彼の小鍛治宗近の刀を携へ、密かに隱家をいひ合はせて、伊勢國鈴鹿山へぞ立ち退きける。これより後隱形影の名は絕えて、賊徒の諢名には、手棒といふべきを訛りて、隻腕頑八とぞ稱しける。又白波雲平は白鳩丸を腰間に佩び、夜に紛れて落ち失せけるが、日南山の隱家には妻の沖津をはじめて、附屬の小賊等殘り在れども、所詮本所へは歸られじと、妻をも其の儘捨て置きて、われ一人伊豆國、天城山へと落ち行きぬ。こゝに又一件の話あり。此の夜落ち行きたりし寶副四郎吉香は、薗葉をともなひて六浦金澤の方へと赴きけるが、薗葉は常に雅びたる事にのみかゝづらひて、羅綺にだもたへざる手弱女なるを、まして懷妊の身の自由ならぬに、鎌倉山の山道を、あゆみも馴れぬ素足にて、かしこに躓きこゝに倒れて、漸うにたどるにぞ、足は破れて血は淋り、後よ先よとこゝろを痛むるありさまは、春の初花風に散り這ふ如く、秋の小草の野分にいためる風情なり。吉香は道はかどらぬに心せき「斯くては追人に捕へらるべきぞ、心にこゝろをはげまして疾くあゆみね。」と促しつゝ、手を携へていそぎけるに、ゆき〳〵て朝夷名切通しの山はづれなる、地藏尊の前にぞたどり著きぬ。權く且つ道の勞れをやすめばやと、御佛の御膝のもとに憩ひけるが、やがて額を突きてまうしけるは「南無地藏大菩薩、六道能化の本願力を垂れ給ひて、今われ〳〵が落ち行く後より、追人の者の來りなば、道をたがへて六道の街に迷はしめ給へ。」と、おのが心に欲するまゝを、高らかにね

ぎごとしければ、怪しい[illegible]、[illegible]の[illegible]して[illegible]、[illegible]して、[illegible]
る[illegible]を二[illegible]て[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]
串[illegible]はじと思へども、汝必ず言ふ[illegible]と、左右に二所[illegible]は[illegible]立
し、ふり仰いでこれを[illegible]るに、小[illegible]の[illegible]、[illegible]の仁王が[illegible]左右の
[illegible]に、[illegible]、[illegible]二人[illegible]、[illegible]
ば、こ[illegible]は消えも入るべき心[illegible]にて、[illegible]、[illegible]ひ[illegible]
りと飛び下りて、二人を[illegible]にさし挟み、目をむき出して[illegible]けるは「いで[illegible]に汝等、われ[illegible]ば誰と
かおもふぞ、[illegible]ねどしる[illegible]蜘網絞[illegible]、この街道に羅を張りて、往来を[illegible]張る野臥に、[illegible]の見六鷹
目の[illegible]太といふものなり。汝等が[illegible]、一定落人と見たりしゆゑ、先へ[illegible]つて待ち受けつるに、日令
の世迷言、我はいはねどおのれから、[illegible]に[illegible]を[illegible]れば、[illegible]の[illegible]、[illegible]な事を[illegible]
[illegible]らしたか、いずれ[illegible]に[illegible]を[illegible]して、[illegible]にな[illegible]、[illegible]りければ、
かさ[illegible]ども、[illegible]ここに[illegible]ば、弱味を見せじと心を[illegible]、刀の柄に手をかけ
つゝ、「いで[illegible]る[illegible]荒言を吐きつるよ。足[illegible]連れたる夜の路、おぼえなくて通るべきかは。
然ま[illegible]しける[illegible]なれば、[illegible]に[illegible]で[illegible]れ[illegible]と、[illegible]後に[illegible]て、[illegible]

き放ち、侍らば斬らんと身構へたり。二人の野獣呵々と打咲ひ「飛んで火に入る夏の蟲、蚊の臑を打振つて、蟷心をつかはんとや。毛二歳めを遣るな。」と罵り、棍棒とつて立ちかゝる。吉香も得たりと身を飛ばし、二人を對的に働きけるが、野獣は大兵なり、殊には二人が透間もなくつけ入りて、棒すくめになさんとす。吉香は流石に風流士なれば、打物業は心に任せず、既にあやふく見えたりしに、傍邊なる制札場の陰より、一人の大男あらはれ出で、やにはに二人の野獣を、掻い掴んで頭顚倒、右と左に投げ倒して、すつくと立つたる光景は、面こそしらねど地獄にて、金仙に逢ひしが如くなり。二人の野獣等ふ／＼に身を起し「何奴なれば妨げなすぞ、只此の上は討つてとれ。」と、怯まず去らず打ち蒐るを、彼の大男は小兒を扱ふ如くにして、散々に打擲しければ、二人の野獣敵しがたく、蹟をも見ずして逃げ散つたり。扨彼の男ようしけるは、「在下も旅人にて侍ひつるが、今宵所用ありて此の所を通りかゝり、恰好くも危難を救ひそうしたり。幸ひ在下が乘りたる船は、六浦の岸に繋ぎ置けり、今宵は彼の船に一夜を明して、天明けなば落ちのび給ふべし。只今の野獣ども一般は追ひ攘へど、ふたゝび黨をあつめて來らば、防がんに方術なからん。去來給へとく／＼。」とありければ、兩人かの男の情ある言を喜び「然らば東も西も。」とてつと／＼に勞を謝しつゝ、男が往く方に從ふ所に、はやくも六浦の岸に到れば、果して一艘の苫船あり。その時彼の男聲かけて「今宵は客人を伴ひ申せり。其

の船侍せよ。」とありければ、船中より應と回答へつゝ、頓て岸邊に着さしよせ、三仮を渡す程に、まづ兩人を先だちて乘らしめ、男も續いて飛び乘りければ、船はもとの所へ着さしぬ。扨彼の男のいふやう、「和主たちは戀に迷ひし落人よなと、疾くより我が眼にて看定めつるが、よも僻目にはあらじ。あだし仇浪よせてはかへる波枕、この苫船に一夜を明すも、淺屋舟の淺からで、深き契りにやあらむ。我が栖の由だしなく、心をおかで熟寐し給へ。」と聞ゆるにぞ、二樹の蔭一河の流れも、他生の緣とこそ聞きつれ、想はざる御情にて、一夜の宿りを給はる事、恵み忘れはおかじ。」と回答て、苫掛けたる内に這ひ入れば、想はざりき五七人の荒男、或は頭髮長くの伸て、熊の皮を頂ける如く、あるひは頬髭ならくと生ひて、栗の樸に等しき惡僧なんど、車座に居ならび、古き丸瓦に燈火かゝげて、博打して居たるが、彼の惡僧輩が面想、桃李芙蓉の懶める風姿を見て、「扨も美しき女性よ、和女嬬は怎生、海中出現の辯財天女か、然なくば嫦娥とやらんが月の宮より天降りしか、顏情菩薩日の極樂、ねがはくば淸僧が此の平形數珠をもて、開眼の導師となりなん。」といへば、否僕て木菟入道、あの佛はわれ〳〵が疾くより願ひし本尊なれば、和尚の說法無益々々。」といひつゝ、人をおしのけて面をあらはし、「いかにや戀人など遲かりしぞ。」といふを見れば是はいかに、最前逃げたると思ひし、二人の野臥にてありければ、こなたの二人は顔見合はして、呆れ驚くばかりなり。ひとたび虎の難を逃

れて、再び虎穴に墮ちいりしごとく、薗葉は吉香にとりつきて、齒根もあはすをのゝき居る。彼の男に謀られしは、口惜しとおもへども、吉香ものがれん方術なく、たゞこの上は斬死せばやと、覺悟をきはめ居る所に、やがて二三人立ちかゝりて、薗葉が手を携へて引きたて行かんとす。吉香もはや是れまでぞと、刀を拔かんとする所に、二人の壯士背後よりをりかさなり、吉香をとらへて働かせず。「こは口惜し。」と身をもかけど、大力に挫がれたれば、蒼蠅くばかりなり。その時大男は薗葉をしかと捉へつゝ、「青串童めは水食らはせよ。それ／＼。」と下知するにぞ、二三人の荒男、吉香を宙に引提げて、漫々たる水中へ、「曳。」といひさま投げ込みける。素より吉香は水心をもしらざりければ、なじかはもてたまるべき、浮きぬ沈みぬ流れしは、哀れをしらぬ此の擧動、無慚といふも餘りあり。薗葉はかくと見るよりも、「あなや。」と叫びて打臥しけるが、あまりの事に仰天して、少刻正氣もつかざりつるに、藥よ水よと介抱しければ、方纔に息出でけるが、さるにても吉香が事の悲しくて、恨涙の聲ふりたて、「噫嘻痛はしや悲しやな、世に情なき人々よ。戀しき人と諸共に、妾をも殺しはせで、憂きめを見するか鬼よ蛇よ、情をしらばひと思ひに、妾も殺せ疾く沈めよ。甲斐なき命をながらへて、生恥を晒さんよりは、此のまゝ水に身を投げて、夫の屍と諸ともに、魚の餌食とならば、せめてものおもひ出ぞよ。疾く殺さぬか害してたべ、慈悲よ情。」と狂氣のごとく、あなたこなたに身を劘り著

日、聲を放ちて泣き叫べば、目も當てられぬ哀れなり。されども非道の[illegible]張等、一[illegible]所の[illegible]れは下手過ぎたる輩へうち、右の土臺の朽つるまで二三、梟首うたれて[illegible]の兩手をしかと[illegible]へて、身の[illegible]へしぜしと備へたり。[illegible]の大[illegible]下は誰ぞといふに、是れ乃ち大磯之人買人[illegible]なりけり。[illegible]的[illegible]多くの人を勾引して、世をわたる者のよに、今宵も[illegible]なし[illegible]、斯くは謀りしものなりけり。此の時鄰なる船中より、「愚六どの十分に[illegible]しといひつゝ、[illegible]し[illegible]は是も又[illegible]一[illegible]の人買人に、下總國[illegible]上[illegible]六八、地震の動八といふ者なり。動八[illegible]船に[illegible]て、泣き沈み居る[illegible]葉が顏を、哀れ氣もなくうち守り、[illegible]手足の指を、熟く[illegible]といふやう、「此の貨物足の大指は[illegible]、反りつ、且刃[illegible]の[illegible]もあらじとおもへば、先[illegible]は、夫れ掌を拍て。」と[illegible]ひかゝるに、愚六頭を打振りて、「否それは無[illegible]なり、[illegible]に[illegible]は、[illegible]の筋のと故障つけて、前年[illegible]て、[illegible]は其の上は[illegible]次第、日來[illegible]に[illegible]とも、[illegible]は、吾が[illegible]の算盤により、下[illegible]び止めて出直せ／＼」といひつゝ、[illegible]が[illegible]に手[illegible]の[illegible]障[illegible]なと[illegible]て、[illegible]葉が[illegible]のやる方なさ[illegible]は、[illegible]に耳にも入れず、其[illegible]の[illegible]するがごとく、互に頭を爭ひけるが、[illegible]には四百貫の[illegible]に[illegible]へて、[illegible]葉を動八が[illegible]ゐ。其の時動八は[illegible]葉が舌を咬まん事を[illegible]れて、口を手巾に割りて[illegible]

りて苫の裏にぞ居ゑ置きける。かかりしかば愚六が船よりは「喜酒飲めや。」とて、陶器に醍醐盛りてさしければ、動八つと飲み干して頭を抃き、「あら甘や苫の内なる酒にて、一入の興はあり、鮫肌の擔物い、六指の鑒損じなども、今宵の利徳に入れあはしたり。再こそ會はめ。」と別れを告げて、船は左右に行く水の、あはれを添ふる叢雨、なく音も通ふ苫の内に、とり殘されし孀鳥、憂へをかさぬる薗葉が想ひは、推量られてあはれなり。

○薗葉此の末にいたりて、千難萬辛することは、後編の卷々を讀みてしるべし。吉香薗葉の二人、おのれが罪をおのれを責む。一旦の色に染みて、洪恩の親を廢て、竟には不孝の罪によりて、天の罰を蒙れり。世間の婦女子、よく〳〵心に會得して、愼むべし懼るべし。

第六齣　擲忠廢愛子

扨も鳴戸樹内は、私の意趣によりて其の身を亡ぼし、しかのみならず恩賜の重寶白鳩丸を奪はれしこと、其の罪輕からずとありて、本館の怒りつよく、家財は沒收の上、のこる者どもは皆追放と定まりぬ。まことに是非もなき事なれば、平二次盛はむなしき骸をそれ〳〵に葬りて、追善かたの如く執り行ひ、扨準備の金乏しければ計るべき手術もなし、殊には妻の刈萱、懐胎の身の自由ならねば、

進退こゝにせまりて、迷惑する事かぎりなし。されど君父の讐には倶に天を戴かざるの本文、且つうへは恨あるかさなる白浪雲平、本名宗平四郎を尋ねいだし、首討つて差出さば、本館の宿寃を散じ、主人綱内が修羅の妄執も晴れなん。且一頭には實副四郎吉香を覓ねて父の仇を酬い、薗葉君の行方をも探らばやと、心は千々に碎けども、足弱多きに貯へ乏しく、苦辛逼りて見えにけり。しかのみならず一子平作は、盲ひたる身なれば、武の家は繼がされじとて、往時より琵琶法師風雅勾當の弟子となしつるが、此の平作素より伶俐の性質なりければ、平家語る事は更にもいはず、讃語祭文をさへ讀み覺えて、虎經節はすぐれて妙なりけり。しかも勾當の心にかなひければ、平作を養子にせん事を頻りに懇望しけれども、流石に[illegible]情に、一子を他に手離し兼ねて、今まではうけひかざりき。平二つら／＼考ふるに、「君父の為には愛子をも廢つる事は、和漢其の例すくなからず。僥倖なるかな風雅勾當、我が子平作を望むに任せて、此の度彼的が方へあづけ置き、一人なりとも足手纏ひを減らして御老母の御介抱まうさんとて、夫婦商議の上、平作をば勾當にあづけおき、主人の老母床世をいざなひ、平二夫婦只二人、住み馴れたる條目谷を蹟になして、的なき旅にぞ赴きける。彼の平作は風雅勾當の家にありて、其の名を布留都とあらため、専ら藝道をはげみぬ。

第七齣　妒婦活墮獄

爰に白波雲平が妻沖津といへるは、眉目麗はしきにひきかへて、嫉妬深き性なりければ、夫雲平が愛壽に馴れ睦れし動靜を見て、胸の火の謐まる時なく、わが心から心おだしからぬ擧動、さながら狂人の如くなり。されば日南山の隱家には、小賊わづかにしたがへて住ひけるが、此の程雲平は大磯のほとりを呻吟ひ、假に任俠と僞りて、此の隱家には歸り來ず。沖津一人むなしく巢守に殘されしを、いと口惜しく且妬ましく思ひければ、此の上は愛壽を呪詛ひ害さばやとて、密かに藁人形一軀を製りて、假に愛壽が身となして、一間所に壇を飾り、調伏の幣を裁りかけ、荒薦敷きたる壇上には、交合の狗の首、ならびに猫の頭を斬りて生贄に備へ、又容兒の鏡には、妻戀ふ鹿の生血をしぼりて濡ぎかけたり。十九の燈明三十三の蠟燭は、厄年の數に表して立て竝ぶれば、其の光照子に映じて物凄し。まして常闇の岩窟なれば、火の光或は青く或は赤くして、おそろしなんどいふべからず。また一幅の掛物には、愛壽が畫像を畫かしめて、逆にこれをかけ、藁人形と互違へに、五寸釘をぞ打つたりける。沖津が怒れる光景を見るに、顏色火のごとく、寃みの眼は逆立ちて、執念の牙を嚙み、長なる黑髮おどろ〳〵しう振り亂し、彼の容兒の鏡に對ひて、額髮をさつ〳〵と振りわけ、角のかたちに束

ね、胸には一面の鏡をかけ、馬の骨もて束ねたる、竜頭の火燭には、中なるを三つ口に咥へ、さてそれより四面に三度讀誦し、あらゆる諸神の寳號を唱へて、これら神よしの靈驗を、なさしめ給へといひつゝ、妻愛寿が雉子の牝鶏を、生ながらに喰ひ裂きて、滴る血汐に胸なる鏡に、うち吹きかけたる其の有様、身の毛もよだちて恐ろしし。かくて石槌を打振りて、五寸釘を打つ毎に一七夜なれけるが、満ずる七日の時に至りて、最早満願の刻来れりと、逆なる影像をとりて、「あな恨めしの愛寿よ、今こそ憂み報ふなれ、思ひしれや」といひつゝ、其の様、眉間のあたりに釘を打つよと見てけるが、不思議なるかな彼の肖像、一声「あつ」と叫ぶと等しく、眉間より血汐ほとばしり、冲津が面にさつとかゝりて、そのまゝ鬼女の形となりし。この時一団の陰火閃々と燃え上り、虚空に飛び去りければ、冲津は心神悩乱して、そのまゝ、仆はと伏しけるが、少刻ありて夢の覚めたる如く、只茫然としてゐたりけり。後にこれを考ふるに、冲津が眉間に打つたる釘は満願の時なれば、自然と愛寿が身にこたへて、執念の通じけん、雲平が打ちかけし手裏剣を、愛寿が眉間にうけたりしも、其の時刻違はざりしぞおそろしき。また想ひ合はすれば、人斬の場に於て、橘内が目にさへ、ぎらりと一団の陰火は、冲津が調伏したる其の間に、魔魂大概まで纏りしなるべし。世に怖るべきは女の執念なりけり。

これよりさき雲平が属徒に、立山九郎といふ小賊、用ありて箱根の小地獄を通りけるに、後の方に

女の泣き叫ぶ聲きこえければ、不審しみて顧みるに、黒煙天を焦し、猛火炎々と燃え立つ中に、一人の女長なる髪をふり亂して、おなじ年紀の女を引つたて、宙に抓んであゆみ來れり。彼の抓まれたる女は、聲をかぎりに泣き叫ぶ。其の聲あはれに物悲しく、只「ゆるし給へ助けたまへ。」と聽えたり。立山九郎これを看て、おそろしさいはんかたなく、傍に立ち倚りみれば、こは甚麼ぞや、賊長雲平が妻なりし、沖津にてありければ、「こは何等の罪ありてか、かくは呵責にあふ事よ。」と、囁ひ／＼見てあれば、沖津疾くも九郎を見とめて、「それなるは立山九郎よ、あさましき嫉妬の念にて、妾は只今阿鼻地獄に墮ち行くなり、所詮救ふとも助かり難し。妾が手箱のうちに黄金三十兩を匿し置けり、これにて跡を弔ひ與れよ。妾を擒へし此の女は、大磯の娼妓にて愛壽といふものなるぞ。阿那苦しや堪へ難や。」と、引立てられつゝ苦しむ形勢、身の毛彌立ちておそろし。かくする内に彼の愛壽が首、碌々と轉び落ちけるが、首なき軀は猶素の如く、沖津をとらへて進み行く。九郎遙かに見送れども、地獄谷の底にかくれて、竟には聲も聞えずなりぬ。九郎不思議のおもひをなして、いそぎ日南山へと馳せけるが、道すがらの風聞をきくに、賊長雲平は天城山に身をのがれ、かつ同僚の者共は阿武内をはじめて、其の數七人まで斬り害され、橘内が爲に愛壽も討たれし由聞くよりも、彼の地獄谷の怪事をも想ひあはして、いよ／＼沖津が事こゝろならず。左右して日南山へ到りけるに、沖津はたのしま

ざる面躰して、手頭拱拱りてありしかば、九郎は阿律がことなき體を見て、涙のほかと狂喜へぞく、縣び地獄谷の事ども思ひ出でて、忽ち褒立ちて覺えけるか、ふつ心をおし靜め、さてもありし事ども一より十まで、詳かに語りければ、阿律大きに驚きたる面色にて、「さては然ありつるか、我もそら夢くの夢みたり。よしさりとても痛みて返らず、人を究竟に陷すべつ揃れとは、良が家でよりの覺悟なり。されど師まよそちは俗かたよ。妾が此の山に捨て置きて、其の身はかれを丈夫衆山に連れんとは情なきふるまひかな。然まで情氣を鎮みなば、いよいよ嫉妬を深くして、いつこまでも附きまとひ、助けなきであるべきかこと、身を慄はして立つつ居つ、面色たちまち血の、血を浴ぶる下部の姿態、「阿部口惜しや怨めしや」と、喚き叫びてつく息は、炎を吐くが如くなり。立山九郎は其の體を見て驚き果れ、ここは狂氣やし給ひつらん、其の怨みはうべなれども、ふつ倫く心をしつめて、元氣を養ひ給へ」といひつつ、押しとどむる手をふり拂ひ、傍なる手箱の裏より、金三十兩をつかみ出し、「此の金汝に與ふるとも、錢帛ふ事はおほつかなし。斯迄本來はうかまぬ宿業、高濱にはは舞よと言るまか執念。夫の行方を見屆るまでは、肌身はなさぬ準備の金ぞ」と、財布を奪つて懐中し、急ぎ身ひて驅せ出づるを、「是は情なき擧動よ」と、背後よりしかと組めば、「しや面倒なる小冠者かな、妨げては曲祭ぞ」とて、手を指延べて前に引き寄せ、立山九郎が咽喉を一振りふつて喰ひ斷りければ、二聲三聲と叫

びて死したりけり。此の物音に駭きて、屬徒の小賊蒐け會まり、四方よりとり巻きて、沖津が狂氣を靜めんとひしめけば、沖津ます／＼怒り烈しく、八方に眼を配りて、あたるをさいはひ人礫となし、踏み越え投げ除け蹴ちらして、天城山へと狂ひゆく、嫉妒の念こそおそろしけれ。

第八齣　登二天城一練レ術

さても白波雲平は、夜に紛れて大磯を逃れ去り、日數二日といふ暮におよびて、天城山の麓を通るに、年紀十五六歲ばかりなる女童、その形容淸らかなるが、たゞ一人進み行くあり。雲平やがて袖をひかへて、「斯く暮におよび倶したる人もなく、何地へかおはすやらん。」といふに、「妾は此のあたりに給仕し侍る者にこそ。」と答ふる形相、思ひくだすべき品にはあらじと、「在下は天城の山越えする者なるが、道の便りあしからずば、伴ひまゐらせん。」といふに、童いなむ色なく、さま／＼物語しもて行くに、路の程十町あまりも登りしとおぼしき頃、松杉の一村茂れるほとりに、あやしの編扉ひきつくろひたる許にて、「これこそ妾が給仕まゐらす方なれ、道の勞れをもはらし給ひてんや。」と、いひ捨てて裏面に入りぬ。雲平も、「主はいかなる人やらん。」と、外面より見いれたるに、よしある人の隱家とおぼえて、庭の景色もおのづからなる風情にて、尾花葛花露ちり、遣水に紅葉うづもれ、霜にうつろ

ひたる翁の蓬一重を隔てて、荒れたる軒なからに蔓草なかば垂れて、燈火幽にきらめき、琴の音ほのかに聞ゆるにぞ、いとゞ其の名のなしくなりやすらひたるに、先の女童出で来りていふやう、「主の御方に聞え進らせたれば、『何かは苦しかるべき、こなたへ入らせ給へ』と侍り、疾く〳〵」といふに、雲平喜びて内に入るに、六十ばかりと覚しき老女出でて、奥の殿にいざなひければ、雲平いなむ事なく、席に着けば、折敷に菓子盛りきて、菓物様のもの、うづ高く盛り出でし置きすゑ、いと〳〵なみならぬ人の隠家、さては高家の人の思ひものを、斯くはしつらひ置きたまふやらん、さるにても此の年月、数回往反のするに、かかる住居ありしたに、しらぬことの不審しさよとおもひゐたるうちに、女房居住りていふやう、「御身は正しく雲平何某の殿にてはおはさずや」とありければ、雲平何者と指さして心にきに喜び、かつ想ひもかけざることなれば、驚きたる風情を答て女らうち笑ひ、「世にいふこころせかれて、あらましをもきこえ侍らねば、不審しみ給ふもことわりなり。御兆のあたりを折々往還ひたまふを、妾が傅きたる姫君、いつの程にか垣間見給ひ、夜昼となく、恋しく思ひわづらひ給ふ事の、やるかたなきに折もあらば、人傳ならできこえまゐらせんと思ふに甲斐なくて、女童はからずも伴ひまゐらせしこそ、出雲の神の結ばせ給ひけん縁なるらめ。かかる侘しき住居なりとも厭はせ給はず、姫君の心をも慰めたまはせなんや」と、懇に語るにぞ、「在下はからずも斯く世をしのびやかに隠し給ふ

御隱家をおどろかし奉る、其の罪をも問ひ給はず、淺からぬ御志、などか固辭みまゐらせん、傀倖未だ定まる妻とても侍はず、久米の岩橋かけてだに給はらば、渡らでやあるべき。」といふに、老女喜びて奥に入り、少刻ありていざなひ進らする上﨟の、照り輝くばかりの粧ひ、楊柳の黒髮春の風に靡き、桃花の脣朝の露に濕ひて、喜悦の色まなじりには餘れど、少しは恥ぢらひ給ふ景色、春の夜の朧に霞む月影の風情あるに、雲平目くれこゝろ飛んで、しらず月の宮人、天の河原の織女ならずやと心まどふに、再び老女がいふやう、「かねてより戀しとおほし給ひし殿の、はからずも來り給ひて、花の下紐解く春に逢ふ嬉しさ、育てまゐらせし妾が喜び、老が身の癖とて淚こぼるゝまでよ。」とて、酒餚調へて假に婚儀を催しけり。雲平おぼえず數杯を傾けて後、うちくつろぎていひけるは、「かかる山里に斯くおはする君は、いかなる御方の世を忍びましますにや、聽かまほしさよ。」といふに、老女面に愁へを含みて、「とてもつゝみ果つべき事にもあらねば、明らかに聞えまゐらせん。これこそ出羽奧州の太守、泰衡公のわすれがたみの君にて、其の名を耶魔姫君と申すなり。」といふに、雲平はじめてこれを悟り、「さては前の鎭守府將軍、陸奧守秀衡公の御孫君にてましませしか」と、猶その詳かなる事を問へば、老女淚をおさへていふやう、「御身もなどか忘れ給ふべき、扨も過ぎぬる文治二年の冬の霜と、故秀衡公もろくも消えさせ給ひしこそ、暗き夜に燈うち消したる心地して、安き心もな

き内に、朝廷より制止ありしを從はで、鎌倉より兵夥しく、責め下るといふ程こそあれ、高館の軍勢三手に分ちて、まづ東山道よりは畠山重忠を先陣として、頼朝自ら進發す。北陸道より責め寄するは比企能員、東海道より寄せ向ふは八田知家、千葉介常胤とこそ聞えたれ。其の時我が君泰衡は、平泉の御館を離れて、國分が原に陣をとり、阿津賀志山に城を構へて、さまざま防ぎ戰ひ給へど、脆く運こそ是非なけれ。敵はおひおひ重なりて、二十八萬四千餘騎、打てども射れどもひるまばこそ、遂には平泉に火をかけて、一門のかたがたもそこはかとなく迷ひ出で給ひ、しばし御山に逃げ入り給へと頼み覺したる兵も、山の井の淺きは人の心にて、かはり行く世のさまを御覽に、奥の千島に遁れんとて、御一門殘りなく、秋の木の葉の散りぢりにならせ給ひし中にも、一とは心憂きは我が君にて、御心も猛く勇み給ひ、御一門の御身の果てをも見たまひ、又一頭には後殿をし、覺し給ひし甲斐もなく、不忠不義なる河田次郎、勿體なくも御主人を、討ち奉つて敵に降れり。御供に侍ひし兵も、さる人心の折なれば、餘所の時雨に見なしまゐらせて、遂にはおのおの降參せしこそ、今更に心苦しくて、涙に顏もふたがれ侍り。頃しも姫君はいまだ二つにならせ給ふを、麥懷きまゐらせ、北の方もろともに、こゝかしこに隱れ住みて、いつしか兵退き、白波靜まりて、愛でたく古郷に歸らせ給ふやらんと、心は遥か陸奥の、十符の菅薦三符に寐て、七符をあけて待つ甲斐も、亡き身とならせ給ひしれ

らまし、聞くに夢とも現とも、わき難き憂き身の果て。さるにても世の憂さをしろしめす、神の誓ひもおはさば、今一度の見參もと、思ふに甲斐なき御運の末、思ししらぬ罪をかづきて、憂きを見たまふ世の盛衰。北の方もそれがために、程なく亡しくならせ給ふ、黄泉の御宮仕とおもへども、此の君をかしづき進らする人とても侍らねば、惜しからぬ命を深山邊に、ならの葉葺きわたす草の庵、誰とへとてか呼子鳥、涙の雨にかきくれて、やうやうあかしくらす内に、斯く生長ちたまふにつけても、あはれ昔の世なりせば、いかなる公達をもむこがねにと、昔を忍ぶ其の内に、偏と宿世の契り絶えもせで、切に戀ひさせ給ふ甲斐ありて、斯く見え給ふ事になん侍り。」と、奥齒聲漏る物語に、姫君もそぞろに涙にくれたまへば、雲平もおぼえず感傷に絶えずぞありける。老女やがて涙をとゞめ「かかる愛でたき折からに、賤の苧環くり返すべき事ならぬを、よしなき老が長物語に、姫君のさぞ心なしとやおぼし給ふらん。年來の暗路を照らす春の日に、思ひの氷打解け給へ。」と戯れて、老女は一間に退きぬ。雲平耶魔姫の手をとりて閨房に入れば、そら炷の薫ならず、いと清らかに飾りたる文臺草紙うちみだりの箱、蔓綸にて蒔きたる黒がひの箱なんど、取り揃へたる傍に詠草とおぼしくて、

うちもねであふと見る夜の夢もがなうつゝの牀はひとりわぶとも

雲平素よりむくつけき素性なれど、流石に和歌の志やありけん、やさしくも硯ひきよせて、

露ことも眠こそたえれ翳衣がさねさへあれる夜半の枕を
恥ぢ繋ぐれ流れ時だて、みづからとても連理、断る逢ひくる朝尾花、染めつる色のやにもやくもとをきて
ゆゑにぞ「さるにても昔いつしか見初め結びしにやといふに、瞬うち笑ひて「君はまことにしも結
ふまじ、過ぎし頃琵琶なきものに見せられて、旦暮寺に詣でたりしに、君は我くまの俗道にまはせ
む、互に見れと見ればは見もし給むで、峨手の山の端つゝじ、下も咲るおもひは旅所に逢へあれば、心
置くも誘はれて、見実ひこえられしより、霜忘もる暇もなく、君は世を離れ給へども、我が身まよふ
はもとの身にして、咲ひの煙たゆることなく、幾年月を重ねたりしを哀れとも見たまふことさてに、
雲井と、言語世上の契りし昔まいこと、はやくも名誉か事をわすれ、いとゞあはれにおぼえて、晴天相を
安すとすれに、八聲の鳥にうち驚かされぬるに、老女の聲として山本の神ならすとも、晝迄にてもり
あれ、夜こそ又も契の結べこそ我といふて、雲平を一間所に伴ひ入れて、我が腰もとにさしおきて、谷く
れと覚悟しけれ。斯くて二三四日が程を過しけるに、ある夜の事なりしが耶蘇娘、雲平に對ひていふや
う、「一たびかゝる交りをなすからは、つゝむべきにあらねば、自然にきこえ侍る。
素女の身ながらも、父上の仇を報い、亡き魂をいかにもして弔はしたく思へども、思ふにまかせ
ぬ憂き身なれば、他に月日をすごしつるに、今斯く心置きなしき君にまみえし、みづから心の本望、

何にたとへんかたもなし。此の上は君心をはげまして妾が力となり給ひ、怨みある鎌倉殿を亡ぼしてたまはるべし。さりとも無勢にては力及ばじ、僥倖一つの助勢こそはべれ。妾此の山に住ふうち一人の異人にまみえて、自在の仙術を得てはべり。此の術を施すときは、軍用金心のまゝに集まり、且勘合の印はあらずとも、軍勢催促おのづから思ふに任せり、まづ試みに一つ二つを見せまゐらせん。君常にのぞみ思ひ給ふことあらば、妾にきこえたまへ、目今にかなへまゐらせん」とありければ、雲平不審しみつゝ、「さらば何彼」というて欲する品々をいふに、耶魔姫しばらく天地を禮拝し、口にはなにやらん祕文を唱ふると齊しく、雲起り雨降り、震動雷電おびたゞしく、天地も今や覆らんと思ふばかり、肝心も身にそはでありけるが、やがて天霽れわたり、地震止みてあたりを視るに、果して雲平がのぞみ思ふもの、忽然と前にあり。たとへば其の物數百里を隔てし名器なりとも、立地に飛び來る事、まことに不測の仙術なりければ、素より慾惡の雲平、其の自在なるを見て、かつ駭きかつ喜びて、妙術を甘心し、「いかにもして其の奇術を、我にも授け給はれ」と、強ちにこひければ、耶魔姫答へて、「いかにもいと易き事なり。されど何事によらず、妾がするまゝに從ひ給ひ、忍び難き苦痛をも、克く堪へ忍び給はば、つゝます教へまゐらすべし。」といふ。雲平「いかなる堪へがたき事なりとも、在下が不負魂もて、克く忍びまうさん。」と切にこひければ、「しからば妾がするにまかせて、克く

忍び給へよ」とて、別間に誘ひけるが、まづ雲平を裸體にして、高手に縛め、廊下の天井に繋ぎ、釣り上げ、走馬燈の如くくる〳〵と回しつゝ、藤蔓巻きたる堅木の杵にて、力にまかせて撃つ程に、雲平痛み堪へ難く、あまりの苦しさに、「ゆるし給へ」と叫びければ、耶魔姫莞爾とうち咲みて、「さらば術を授けがたし」とあるに、雲平やむ事を得ず堪へ居れば、撃つ事五十杖に及び、皮裂けて肉をあらはし、眼眩きて悶絶せり。其の時丹薬をあたへてひとたび甦らしめ、再び撃つ事五十杖に到れば、またはじめの如く息絶えたり。斯くする事三百杖にして、雲平泥のごとくになり、さらに人事を辨へず。再び丹薬をあたへければ、雲平甦りて素のごとし。かつ身體に一點の疵をおぼえず、健かなる事はじめにまさりて覺えけるにぞ、いよ〳〵仙術の奇特あることを悟りぬ。耶魔姫又いひけるは、「それ〳〵此の仙術は蝦蟇仙人の法にて、天竺蝦靈仙に傳はりしを、妾また異人によりて傳はり得しなり。此の上は常に用ゐるべき仙丹あり、彼の仙丹に千歳經りし蝦蟇の脂を加ふ。これを王芝脂あるひは肉芝脂といひて、各白蝦蟇なり。又一味は嫉妬に逼りし女をとらへて、怒氣溢れたる生血をしぼりとり、これに調じて服する時は、忽ち自在の身となるなり。いで〳〵妾が術をもつて嫉妬の女をよびよせて見せまうさん」と、又もや祕文を唱ふれば、不思議なるかな耶魔姫が口の裏より、許多の小蝦蟇あらはれ出でしが、白氣と共に立ちのぼり、虚空はるかに飛びさつたり。さてありて耶魔姫は、「御酒一獻

すゝめまうさん、景よき所に氈敷かせよ。夫れ〳〵。」とありければ、許多の婢女婦童、左右に陪従して、山海の珍味所せきまで積みかさね、數回杯ながれて、興闌に及びける。折しも外面の方忽劇しくて、「狂人よ〳〵。」といふ聲風にきこえけるが、漸々に近よるにしたがひて、婢女等さわぎ立ち、「すは〳〵狂人の來りしぞとよ、御館へまゐるわ。是はいかにせん。」などひしめくを、耶魔姫ひとり自若として、駭く風情もなく、杯とりてぞ居たりける。扨も雲平が妻沖津は、嫉妬の一念をもて鬼こもる、石窟までも覓ねゆかでやはあるべきと、山を越え谷を渡り、木根をつたひ蔦かづらにとりつきて、峨々たる嶮道をあゆみしかば、膝を劇り爪を離ち、血は流れて裾をひたし、辛うじて天城の山奥に上り著き、只今此の所まで來りけるが、遙かに此の光景を見るよりも、心の火はいよ〳〵燃えたち、怒りに怒りし執念の聲ふり立て、「あら面憎の我が夫よ、怨めしきは那の醜女よ。妾を日南山に捨て置くからは、一定斯くあらんと思ひつるに、妾が推量は違はざりき。薄情にも程こそあれ、愛寵を呪詛ひ害せし後、未だ汗だに乾かぬ間なるに、再もや爰に匿婦のありけるよ。是婦に見換へられし、怨みのほどをおもひしらさん。汝等おもひしれよかし。」と、あれにあれて跳り上り、抓み著かんとしたりけるが、是も又耶魔姫が奇術なりけん、五體すくみて働かず。沖津いよ〳〵たまり兼ねて、樣々に身をもがけど、働くものは目口のみにて、骸は木をもて製りし如く、只癪氣張りてぞ衝立ちける。

このとき蟇口を開いて侯ちければ、四山の水へ蓬虚空より飛び下りて、悉く口中に入りぬ。[illegible]くて雲平が膝に凭れて、杯をとり、「[illegible]」と飲みたる半[illegible]を分ちて雲平に飲ましめ、「[illegible]なし、」細く清らかなる聲音にて、[illegible]吹出でつゝ、あくまでも媚を獻ずる爲體、よそ目にさへも見るに忍びざるを、まして淋津が[illegible]は[illegible]にもれぬ。雲平は[illegible]より、淋津が[illegible]いれず、心の[illegible]には、これまでよびよせたる[illegible]を、[illegible]して見るのみなり。さて雲平[illegible]にまかせて、二尺八寸[illegible]の刀を引き拔きもち、直に立ち上らんとする時、[illegible]押しとゞめて、[illegible]なる[illegible]などとり、[illegible]にのせたし、[illegible]それが生血をしぼり入れて、雲平が前に[illegible]、[illegible]に、[illegible]らくみたる淋津が[illegible]、忽ち自[illegible]んすにて、[illegible]して叫び入るを、雲平抜き持ちたる刀を[illegible]、[illegible]より[illegible]、ば[illegible]すんと[illegible]下ければ、[illegible]と叫ぶ聲の下より、[illegible]まとはしり、あたりに[illegible]流れけるを、又一刀[illegible]に、「[illegible]」と[illegible]、白刃を[illegible]、[illegible]在りそこ妻なるを、三世の契も[illegible]として、[illegible]の[illegible]にかくるよな。[illegible]さば[illegible]此の[illegible]ふは、生きながら死にかはり、六道四生に[illegible]となり、[illegible]はでやはるべきか。」と、[illegible]る聲

音も裏枯れし、さも物凄き惡女の形相。雲平は言をも出さず、空嘯いて居たりしが、尻目に見やりて冷笑ひ、「や、言をかしき寃み呼ばはりきく耳あらず。馬耳の東風牛に經文、益なきこととはおもへども、耳の孔を穿ちて聞け。天子に后十二人、諸侯庶人それ〴〵に、妻と妾の定めあり。我世に落魄れたればこそ、儞が如き匹婦をも、假に妻とは定めつれ、しかればなんぞ汝一人を守るべきや。我が妻と呼ぶものは、いとも艶なるあの耶麼姫、せめては死ぬ日に拜みてしれ。かたじけなくも我はこれ、下總國住人宗平四郎重廣といふ一城主、今日よりは鎭守府將軍、奥州秀衡の後主たりし秦衡の花聟君とはしらざるか。今儞が生血を我が仙藥に用ゐらるゝは、世にありがたき事と思ひて、頓かに成佛せよ。」といひさま、白刃を引き拔けば、指は一度にばら〳〵と、地上に落つる血の涙、寃みの涙をふり拂ひ、「扨はしかありつるか。假令よしある人にもせよ、一旦誓ひし夫婦なれば、苦樂をともに計るべきに、其の身ばかりを榮耀せんとは、道しらずよ義理しらず。」と、罵るさへも舌もつれて、漸に苦しむ七轉八倒、苦痛の體を否向きもやらず、仰向に顛倒して、無慙なるかな臟を十文字に掻き破り、臟腑を片手に掴み出せば、なじかは以てたまるべき、「あつ」とばかりに息絶えたり、噫嘻いたむべし。都て此の件の模樣を觀るに、容顏美麗の活閻羅生面にましませば、黄頭川の老女あり、冥官の婢女あり、かつ雲平が行ひは、惡鬼羅刹といふとも、いまだ及ぶべからず。雲平さまでの強惡なりとも、

かかる行ひはあるまじきに、これひとへに愛寵を呪詛ひたる悪報にして、活きながら陰鬼の苦患を得たるも、彼の地獄谷の前表に露たがはず、愛寵が怨魂したひ来り、雲平が手をもて害しられたるに疑ひなし。斯くて雲平は沖津が生血をとりて、伴に加ふれば、彼の鼠妾の生命と共に、消えんがるその形勢、組みつほぐれつ争ふものの形容に似たり。されども霊氣の雲平なれば、大杵を引つかけて竟には丹薬を飲みほしけり。しかるに不審しきことこそあれ、最前沖津が生血をしぼりし折から、沖津が胸間より煙の如き白氣引いて、傍に捨て置きたる鼠妾の死骸に、かゝると見えたりしが、彼の鼠妾忽ち甦りて、庭の内を飛びめぐる、人々これを見て、あれはいかにことといふ間に、いづちともなく形は失せぬ。後これを考ふるに、嫉妬深き沖津が執念、ゐたしく生命を交へたれば、鼠妾に運著するものとしられたり。かかりしかば邪魔鬼は、仙薬の成りしを喜び、かつ雲平ものぞみ足りてければ、これよりますます淫事を恣にして、たがひに奇術を施しけり。

「作者欽曰」これより後沖津が執著心、白披雲平に附きまとひ、他の眼には見えざれども、雲平が眼にさへぎり、昼夜苦しむるのみならず、鼠妾と運著して、さまざまの妨をなすことと、かつ雲平墓噴といへる奇疾をうれへて、其身腐り爛れ、後に病治して妖術を折かれ、つひに身を亡はすことともりたゞひ、すべて〳〵妻沖津と二疋の狐が執念たる由は、後編にくはしく記せり。

第九齣　耶魔姫の怪異

かくて雲平は天城山にとゞまり、耶魔姫が仙術を受けてより日夜心を潛めて、術の奥妙をきはめん事をもとめ、やうやく其の粗を得て心に猶足らずとし、ます／＼おこたらずはげみけり。耶魔姫これを視ていふやうは、「吾が仙術の至重、なか／＼麁心にしては至り難し。御こゝろざしすゝむといへども、用心いまだあらく、しかのみならず術を試み、業を責るの念急なり。しばらく妾にしたがうて、猶山奥に來給へかし。心氣を靜かにし餘念を消して、そののち妙所を傳へまうさん。」とて、雲平を將て山深く入り、ます／＼心術を精練せさしめて後、もとの館へたち歸りけるが、扠雲平申しけるは、「あはれ此の術をもて軍を催さば、日頃の宿志は果して遂げなん。もとより御におよばざることは論なし。此の後奥妙を得る時をまたば、死灰となりて、何の益かあらん。」と、頻りに謀叛の企てをすゝめければ、耶魔姫重ねてとゞめず、まづ其の心にしたがひぬ。ある時耶魔姫一人窗の下に書を披きて見ゐたりしを、雲平竊かに思ひけるは、これきはめて仙術奥秘の書なるべし、いかにもして奪ひとらばやとおもひければ、かねて練りたる術を施し、印を結び文を唱へてまつところに、許多の蝦蟇おも

分るものは必に打ねば出じ、或は逃れて生平が手に落る事なれ、其のうちのきまでにまゐりなむと、殿下には目指しまゐらせつゝ、よまく欲をあぐらせきこえ、殿堂はひたもの申び書して、其の戦略ほどなれば、いかゞはすべきと思ひなやみたまひには、本国の平和を待つの所以の一策を覚ゆて、いかにも世代を保し、それを何事に盛あらざれ、此の聖明をば有はるべきや、たとひ死去となりとても、事情を言る時なるでは、此の極志はかたつれど、今日既に其の術を殺し遂ずはみるべしと、空論としてはもあらん。さすがの身をもなげきとて、すべなければ、浅茅での一日あかして、ひたすらいふべきをくるの世のまゝ雨曚雲はかしつめに文を掌て、「これは日本の主ならんとするなり」と、其の誠を見ればとくとてひろまり、鳴きと一齊に走する下に、雷を受の災害に順らざれ、かき消すことぞ先にける。「雨不まれ所申の雲を消に起し、竹を抜きて卵を産しければ、卵生変作って頭のみなる。これより後ますく、曚のまよ以ばんとすなりし、隠しおかし居たりしが、其中の翁とふに、妖の卵変ふし世に出でたれ、或は泰然の仙翁(せんにん)は白日(はくじつ)の焦水ならぬゝ、ひとすに彼(かれ)を滅して、後(のち)の禍(わざはひ)を払(はら)はんとて此(こ)の所(ところ)は、人にもなれば、天が下に留るゝ所なし。しかのみならず諸国の妖異をあらて、一旦を亡さんとしと、一この悪意を言しければ、あるとき帝雲が前に見えまし、ゆゑに力を抜かんとする時、加ひはやゝる積ゐけれ、忽ち身を背ばたて、道たる長石の上にまたがり、白石として坐しるたり。こ

の形勢を見るよりも、老女をはじめ許多の侍女、婦童に至るまで、手に手に得物を引提げて、ばらばらと走り出で、雲平を追取り巻きて、のがさじものをとひしめきぬ。雲平かくと見てければ、さては我が謀計またも悟られけるよと、たゞ呆れに呆るゝばかりなり。耶魔姫はるかに雲平を直下していふやう、「いかに雲平、汝しらずや我は是れ、奥州泰衡が女耶魔姫とは根なし事よ。寔は天竺摩迦陀國、柯葉林に穴居する、玉芝道人といふものなり。我に等しき唐山の魔道士、蝦蟇仙と心をあはせ、蝦蟇仙人の仙術なりといつはりて、竊かに蝦蟇の妖術を施せり。年來練磨の法を修して、普天の下、率土の濱、わが魔道にひきいれんと計れども、科戸の風に吹き攘はれ、此の國にはとゞまりがたし。素この術は唐土毛山にある所の、石撞といふ大蝦蟇、又一種には益州の北、平山なる玉芝といへる白蝦蟇を捕へて、其の生血を食らひし故、蝦蟇の性心我が胸間にとゞまる、さるから許多の蝦蟇を使ふことは、我がおもひに任せたり。我が眷屬たる鈎注赤蝦蟇をはじめとして、青城山の肉芝、あるひは蜦蝦蟇、蛤魚、田夫、あるひは陰蟲、鼓造、苦蠪または蟾蜍、または金背、しう甫等にいたるまで、本相を見すべし。」とありければ、「心得て候。」とこゝ傍なる老女、忽ち一箇の大蝦蟇と變じけるが、是れ乃ち鈎注赤蝦蟇となのりて、赤き色の老蝦蟇なりけり。かかりしかば山林動搖して、あまたの蝦蟇あらはれ出でたるが、あるひは赤く又は白く、或は青く又は斑なると、各耶魔姫を圍繞して、眼を

怒らしひかへたり。肝太なる雲平も、此の光景には驚き畏れ、此の場いかにと案ずる所に、聲かさねていふやうは「汝たゞ今われをひそかに害せんと謀りしも、素神國の素性なれば、八百萬神の徳にて、自然と神の導きに、汝が手をもて我を亡ぼさんとする所なり。されど汝はわが妖術を受けたれば、我に敵することあたはず。假令その身は萬物の靈長ながらも、心は魔道の部下となりしのみ、所謂正路にはいたり難し。授かる所の幻術を、忘れんとすれど忘られねば、わが眼裏の奇術にして、八萬四千の悪魔外道、十恒河沙の悪鬼羅刹が、刹那の間も身を離れず、汝を守護しあるなれば、魂は魔界を走れり。我そも／＼此の國にとゞまり、魔王やしなふ身に、汝を此の所にまねきよせ、幻術の法をのこりなく思ふものから、汝が女色におぼれ、心を奪ひ、其の好む所によりて、嬋娟たる少女と變じ、色をもつて魔道に陥し入れたるは、下総道人が密計なり。されど竊かに汝が中堂を窺ふに、其の器小さくして、魔界になすべき腸胃にあらず。此の後賊将となりて世を過すとも、眞堂の術を人になしへて、魔道へと導くべし。若し惜しみて傳へずあらば、かならず眞堂の降伏によりて、忽には其の身を亡ぼすべし。汝是れより本國下總に立ちこえ、外川浦より海上へ、突き出でたる巌窟に籠れ。彼の岩窟は往年わが寓せし跡なりとて、今は仙が窟と稱するよし、風に其の説を聞けり。後に山をあて、前には海をひかへたれば、進退自由といひ、殊には要害堅固の窟なるぞ。汝は此の後彼者

にありて富貴をたのしめ、我は天竺に歸りて、素の石室に心やすうせん。いでさらば我が本相を現はして、石室に籠るを見すべし。」とて、すつくと立つよと見えけるが、手にかざしたる檜扇は、汗れ古びし羽扇となり、身に纏うたる五衣の、錦繡綾羅と見えつるも、破れちぎれたる鶴の毳と變り、嬋娟たる容色は、たちまち鬼神の如くに變じて、眼は磨ける鏡の如く、針を植ゑたるに齊しき白髮を振り亂し、虎鬚左右にさつとわかれて、忿然たる其の形相、恐ろしなんどおろかなり。雲平おもはず地上にひれふし、「扨は然ありつるか、さはしらずして只今まで、秦衡が息女と心得しこそ愚かなれ。此のうへはいよ〳〵師弟の因を結びて、奥祕を傳へ給はれかし。」と、恭しく演べければ、玉芝道人かうべをうち振り、「否々汝に傳へて益なし、謁見ることも是れまでぞ。」と、彼の坐し居たりし巖石の二丈四方もあるべきを拳をもつて丁と打てば、其の石たちまち二つに分れて、玉芝道人する〳〵と中に入るよと見てあれば、石は合して原の如し。しかるに道人の像は、鏡に影のうつるがごとく、石中に潛める形容、四面に透き徹りて見えけるが、やがて石面より首を顯はし、「汝わが旨を克く護れ、我はこれより支那震旦に横行すれば、汝が累ひとなるの日あらんや。のちの患へをかへりみずして、疾く山を下れ。」と示し、かつ許多の蝦蟇にむかひて、「爾等は吾に先だつて天竺へ飛び行くべし、それそれ。」と言の下より、一條の虹となりて虛空を遙かに飛び行きけり。雲平慌忙きて、「且つ權く。」と留

われとも、旦主道人耳にもかけず、一陣颯々くなるをもつて言に、供に[illegible]と共に、霊神を空に飛ぶがごとく、翩々として飛び去りぬ。雲平は目前に茫然としてゐたりしに、一陣の[illegible]風吹き[illegible]り、[illegible]震動し、[illegible]倒し、[illegible]車輛を[illegible]けれは、[illegible]間近く[illegible]たるに、是[illegible]かにぞ、今まであつつる殿営も、古りたる[illegible]たる古[illegible]の[illegible]、[illegible]。[illegible]に傾きて、幾年ここに古寺の、茅の軒も荒れ果てたれ、[illegible]、此の[illegible]響[illegible]腰[illegible]、[illegible]はまらもの[illegible]、或は旧び朽ちたる木像の、[illegible]善神[illegible]、[illegible]仁王阿羅漢[illegible]、眼耳[illegible]もかけ損じ、五[illegible]不具[illegible]の古仏の、[illegible]の[illegible]れたるに[illegible]、或は[illegible]にありて、[illegible]草[illegible]、[illegible]は[illegible]の[illegible]、[illegible]は、[illegible]見るとても、夜は蛍の光を[illegible]、是れ皆旦主道人の妖術なれば、雲平[illegible]を感じて舌を捲くほかなかりけり。

〇こゝにまた後雲平は、旦主道人の言にしたがひ、下総国[illegible]原[illegible]なる仙[illegible]に住み、山海の[illegible]主となりて、小賊千騎を部下に従へ、栄耀に誇り歓楽に長じ、[illegible]ぞ、かつ二疋の狐と妻[illegible]にまかせて、禍を得る事のたぐひ、都て[illegible]、[illegible]

に委しう記せり。

第十節　蓋棺袖師浦

さても大磯袖師浦の賢兵衛は、主家の滅亡を歎くといへども、素より時運の然らしむる所なれば力およばず。此のうへは老の餘世を我が家に養はんとせしかども、阿古平二郎は既に東國をはじめ宗族を具して、復讐に趣きければ、賢兵衛もすべなくて、心ばかりの餞別して、おのれは家にぞとどまりける。然るに慳貪婆蓬兒は、兼てより人質人愚六と密通してけるが、此のほどは思ひいよゝまさりて、又ひとつの惡計を巧みぬ。されど此の家に祕藏する祖先の木像、動もすれば汗を流して惡兆を曉す事、一つの妨害なれば、まづ邪魔を除かばやとて、竊かに木像を盗み出して、前なる海にぞ沈めける。斯くとはしらで賢兵衛は、木像の失せたるを見て大きに驚き、「斯く奇瑞ある木像なれば、此のたび主家の斷絶を歎きたまひ、自然と形容を隱せるものか。よしさもあれ祖父より傳はりし木像を吾が代となり失ひしは、先祖へ對けて越度なり」とて、日晩これを勞めけり。こゝに人質人愚六は過日議内が妹の葉を勾引してより、多くの金を得つれども、好める道の博奕して、今ははや直平日半も手に殘らず、一升買の薪藁、一杯の酒だにも、飲み得ならざる貧の活世帶、いふにいはれぬ内

昔は、館につゝむ腰壁、遠州灘の波戸を、もれて吹込む小夜嵐、寒さを凌ぐ料までは、障子一重を襖とも、又褥とも妹が添臥、うきに人目のいぶせさも、こゝに哀れを止めし日、汁にも米にも窮にも、七夜の巣を出でし腹の子の身の上なり。夜の帳の背にとて、破れ衣の袷と、袂に、紙衣の布子に身を包め、百八十の孔々となれば、たれか素より汁茶とも、あらはれたる白黄金の花も、心なきとはしりつゝも、見るに忍びぬばかりなり。其人馬にも好き文とやらん、賢兵衛を参る間を隙ねうて、友垣ひそかに忍び来り、愚六が家を窺ふに、浅子は大里へ往にけるとあつて、今宵は家に在らざれば、昨夜旧交に入りの、二人しばらく密会しけるが、夜半雲ともに喚出して、後、友垣いふやう、一寸まの恩風我とも彼とて、密かに語らふへせとも、人目の関の繁ければ、終に顕はるゝは一定なり、さるから吾儕も人の中に過去し、先んずるときは人を制すとやらん、物の本に読みしなり。此の日頃に憎しと思ふ夫婦の娘をも、を、今宵外に誘ひ出して、御身の手に渡すべし、御身は謀りて給へ。彼かつは三郎の杖に留めても、十人並に勝れたり。遊女に売らば金高くは売れたりとも、次第、売主のこゝろにあるべし。こればかりにぞとあらなければ、素より悪心満ちたる愚六なれば、ほくほくとうち頷き、早たる下に此の朝せを計ふとは此の事よ。我が足元に落ち在る金をしらざりし。催日の里の遊君の五百目より此を試しきことゝて、三島の駅に泊りとりて来ますなれば、今宵密かに引きして、是より三島の泊

へ誘引ふべし、首尾よくまるらば金の山割、親判請判肝煎判、此の愚六一人なれば、山割といふ内にも、六分は我等が獲物なり。疾くこのひまに連れ來れ。」と、いきり切つて見えければ、逢見打笑ひて「早くも慾欲り給ふか、其の慾心いまだ小さし。假令少女一人勾引したりとて、俺と妾とが生涯を、過る程の徳は得つかじ。先づ瞿麥を售つたる上に、又一つの謀あり。俺が妻の麻子と、吾が夫の皺老爺を、人しらず毒殺すれば、跡は野の宮高砂の、尉と姥までかはらぬ女夫。さらば俺を後夫として那の家は奪ふべし、心ありやいかに。」といへば、愚六聽きあへず「擬巧んだり面白し、此の上は片時も早く瞿麥を誘へかし。」謀は密かなるを好しとする、壁に耳あり垣に目あり、聲の高砂尉と姥、かはらぬ戀人去來給へ。」と、利口しつゝも門首へ出づる所に、大事は障子の破間より、始終の動靜を垣間見けん、妻の麻子物陰より趨り出でて、二人が袂をしかと捉へ、寃み重なる溜め涙「吻。」と叫びて聲震はしいふやう「おんみら二人が此の頃の爲體、極めて斯くあるべきと思へども、慥かに夫れとの證據もなければ、今まではいはざりしが、今宵親里より歸りて見れば、裏には男女の呼く物音、仔細ぞあらんと思ひしゆゑ、忍び倚りて窺ふ所に、案に違はぬ密事、しかのみならず大膽なる惡計、怕ろしとも悲しとも呆れて涙も出でざりしぞや。たとひ妾は嫌はれて、他婦に見かへらるとも、人並ならぬ支離の身なれば、憂きをましらよ苦猿よと、責め債らるゝつらさを思へば、せめて毒死もましなら

みゆ様は素牢人とは云へども、賢兵衛との調子好くて、云ふべきことも思慮は、ありもせねと立との隔たれな
し。悪口限いは立ちに、御夫婦二人が行く末、何安穏にありつべきかいこ愚六どの差出ごゝ、浮世の義理
をよしも給へ、只知をしらぬ人なりすまと、武士道を伏し再び、彼みの為には哀くくも、其の身を
捨てたる浪宮の心根、人を動かす偏武の、眼は痛く存まる、とも、心中安ごとは言じけれ、二人は心は
らく言をもいはであのけるが、遠見は愚六に目くばしして、呼話へたり愚六どの、見在御恩に連れ
みた、御身に迷惑の迷惑身、甚き心に存まする、此の一心、肝に銘する心で御恩顧、しゐよと
身に蔵へて嬉し涙に言葉に出でず、朝夕の悲しみる差し込みに、譬へ歌にも詠み入ッし節に、御
りと此の浮世も、武士の嬉子の心に外れて、今日は僕は心を込め、是れまでの事を思ひ出しに
恩なき昔者と思ひ切り、朝子殿の心は唯だ思ひ給ひ、是く気の毒、是れと、目くばして
ると振舞はで、朝子は以前の如くあれ、二人は思ひ切り給ふか、あら勿体なやと寸を合はして見しかた
背後よりいふ声にもおもひ寄って涙れること、前に在り言ふ言打ち返へ、涕を拭いつゝしと顔を
朝子は一族しと叫びつゝ、朝子に肌脱ぐ、事ともすして立ち進み、言に朝子にさきんとか、太刀
にてあり申すか、かくまで妾が偽りあかし、事なれば利をせぬで、勇める言を言はず、身の一言
にかくるよ立、酬やつれなや恨みなやと、夫の目を見て誠ふれ、自ら申さば言まで有ると、継を

抓んで引きよせ、ぐいと一縊七轉八倒、即便息は絶えにけり。呼あはれむべし身を棄て、浮む瀬もなき癩子が終身、げにも便なき事どもなり。さてありて逢兄と倶に、癩子が死骸をかき抱き、「南無阿彌陀佛。」と諸聲に、古井の裏に投げ墜し、寛爾と嗤うて居る所に、此の物音に驚きて、賢兵衛が娘瞿麥、何事やらんと紙燭を携へ出で來り、「母さまはいづこにおはすぞ、物音の氣づかはしさよ、母さま母樣。」と呼びつゝ、脊門首に歩み來るを、愚六大きに喜んで、「此方よりまゐるべきに、御來臨とは忝し。」と、背後よりかき抱けば、「こは何者ぞ悲しや。」と、聲を放ちて泣き叫ぶを、逢兄眼をむき出して、「やれ恩しし下司女郎め、繼母の情にて、命を遊女に賣り渡せば、綾錦の絹布に包まれ、榮華の身となるなれば、しらで、泣面の見苦しさよ。」と、手速く手巾ひつとりて、假に猿轡となしたれば、瞿麥は悲しさやるかたなく、叫ばんにも聲立たず、只身をもがくばかりなり。愚六は此の間に山越の用意せんとて、兼て覺えの弓一張に、矢二筋を取り添へて身輕に打扮ち、既に瞿麥を小脇に抱へて、出で去らんとする所に、不思議なるかな古井の内より、炎はつと燃え立つと齊しく、卒に水勢涌きのぼり、閻浮を蕩ふ癩子が形容、髣髴と現はれたり。強悪不敵の二人なれば、事ともせずして行かんとする。妄執の雲晴れやらぬ、寃みの一念附纏ひ、進めば退き歩めば引かるゝ後髪、くるり／＼くる／＼と、引き回されて目眩き、さしもの逢兄も身體疲れて合破と伏す。愚六も倶にたぢ／＼とよろめきつ

り踏み止まりたる力足、ひかれながらに出で去りけり。さて〳〵愚六は撫子を誘ひて、足柄越にさしかかり、其の夜は山中にあかして、つぐる朝千石原といふ所に到る。此の所は往来もなき間道にし、尚木繁りし松原なれば、物寂しさいはんかたなし。さして撫子は屠所の羊の想ひにて、歩み悩めるその形容、目は泣き腫らして色青ざめ、憂ひに沈む胸の中、一つには父を慕ひ、一つには恥を含み、ふる止まれば、歩めとて、杖に打たるゝ悲しさは、奈落に堕つる罪人の、鬼に引かるゝ苦痛も、かくやと許り哀れなりけるを、いかに愚六とて、所詮遁るゝとも遁しもやせじ、走りたりとて走られぬ、憂き身の様をあきらめたれば、人得畜類に堕らるゝとも、さて〳〵にいとはねど、掌の安からねば、言ふまの身の上なれ、駕引されしと聞きたまはず、あゝかれ死にやしたまひたると、思へば跡にひかさるゝ、足弱車巡り、めぐる因果の浅ましや。御情を知るならば、童を近くに寄り渡して、逢ふ境は終るしてたへ。生ある内に今一度、父さまの御顔拝ませたし、是非に情と此の一條は、是非にかなへて給はれしと、雨々とかき口説き、只伏し沈む許りなり。流石に強欲の愚六も、恩愛親子の哀情を思ひ遣り、すこしは心たゆみたるが、なほ心をはげましていひけるは、今は何をか包むべき、今度御事を浅井に売らんとする發端は、御身が親賢兵衛、さる方に借りありし、白の金に詰りて、御身を売るに究めたり。されど御事が歎かん事の不便さに、其の夜は家に在り合はさで、我々をたのみて斯くは計らはせし

ものなるぞ。されば賢兵衛も跡より覓ねて往くなるべし。此の事深くつゝむべき筈なれど、儞が孝心見るにしのびず、今白地に聞ゆるなり。」と僞しければ、瞿麥寔とこゝろ得て「扨は然ありけるよな。然はしらで歎きつる不孝といひ、母を恨みし繼しき心根、儞のおもはん所さへ恥かしさよ。」といひつつも、涙を拂ひ面を直して「今はさてこゝろにかゝる雲もなし。」とて、愚六に先だち歩みける、孝心の程ぞ健氣なる。左右して行程十町餘りも過ぎたるに、一人旅とおぼしき旅客、柳籠を肩に掛けたるが、木の根に尻かけて憩ひ居たり。愚六も足を休めばやとて、瞿麥と倶に傍に尻かけて、しばし憩ひ居たるに、彼の旅客愚六に對ひていふやう「和殿は何方より何國をさして、通り給ふや。」とありければ、愚六答へて「在下は大磯の邊に住ふ者なるが、是れなる娘の多病なるによりて、姥子の温泉に浴みさせんと思へば、斯くともなうて候。」と回答へければ、彼の男も己が往く方など物語りて、互に旅の道連ほしさに、談しもて行きけるが、彼の男愚六の携へたる弓矢を見ていひけるは「在下兼て射る業を嗜みたれば、名だたる弓箭おほかたは藏めたれど、陸奥の安達の眞弓は、古歌にもよく詠みつれども、未だ貯へ申さず。過刻より見まもらするに、和殿の携へ給へるこそ、疑ひもなき安達の眞弓なるべけれ。在下が帶びたる此の一腰は、無銘ながらも覺えの業物なり、率爾の告言なれども、此の一腰と其の弓箭とを交易して給ひなんや。さらば和殿にも益あり、在下も兼ての望み足りぬれば

此の上の喜びなし。枉げて矢引ひ給はれにと、遮らに需めければ、愚六素より慾深き性といひ、かつは日頃より古□□□なれば、白眼すばかりの品に換へて、彼の業物を得んこそ造化なれと、心に思惟しければ、快氣に諾ひぬ。彼の男□□□□□に、一張を愚六に與へて、□□弓矢を取るより疾く、あら／＼と素挽してけるが、やがて□と觸さし番うて、きり／＼と□□し□□、愚六が胸に指當てて、「汝の□□□に、矢一筋をもらせん。」と聞えければ、愚六始めて欺かれしと□□□るといへども、今更にせんすべなく、面色土のごとくに變じて、身を縮め聲を震はし、「只助け給へ／＼」と泣き詫たり。□□□□と見るよりも、愚六□□□□□□□□□□□□□□□六を□□でいふやう、「汝は□□するに他の□□を勾引す、人買ひといはれたり。□□□□□□□一匹を代に□せ□」と□□ければ、愚六泣く／＼一張をさし出して前に置く。彼の男□□を取つて□□□、□□□を□□れに□□□」とありければ、愚六命の惜しければ、□□に□□□□を抑しいだして、□□□に□伏し居れり。其の時□□が手をとりて傍に居ゑ置き、猶弓矢を離さで、愚六が□□□しければ、□□□□□□□□、愚六は命の助かりたるに、始末を□□□白状しける。□□□□□□□□□打ちむかひ、□□□□心□かれ、進ふ□が時に外れたる、此の人勾引の古強盗□□、□を取る□□□なれども、□□□□助けおくなり。所詮□は遊君となるべき身なれば、□より□□□□に□うて

在下が娘となし、慈愛しみてとらすべし。さらば阿曾比に賣られんよりも、いか程か造化ならずや。」
また此奴は俺の讎なれども、我がためには功あるゆゑ、命ばかりは助くるなり。」とて、愚六を宙に引
提げて、傍なる並木の松に縛りつけ、「若し夜に入りて狼に出で會はば、夫れを末期と觀念せよ、
運あらば往反の人に依ち著けて、此の繩解きてもらふべし。犬骨折りて鷹の餌食となりぬとも、命代
りとあきらめよ。」とて、瞿麥を小脇に抱へて、飛ぶが如くに失せたりける。此の旅客は何者なるぞ、
是れは盜賊の張本、白波雲平が實弟に、宗平左郎重網といふ者なり。京の片山里に寓みて、高家貴族
を驚かして、強惡を行ふ始末、かつ瞿麥前門に狼を送りて、後門虎を迎ふるが如き光景、此の後に
至りてさま〴〵の艱苦ある事、後篇に委しく記せり。それはさておき大磯にては、娘瞿麥が踪蹟しれ
ざれば、賢兵衛驚く事おほかたならず、蓬兒は吾が惡計を蓋はん爲に、倉卒に狼狽へたる氣色を現は
し、出でもやらぬ空涙、流れ兼ぬるを漸うに流しつゝ、「夫の留守しながら、秘藏の娘を失ひては、
分疏も立ち難ければ、妾は自害すべき。」など打歎きて、狂氣の如く立ち騷ぎければ、近鄰の人々も誑
りとは露しらで、蓬兒をさま〴〵となだめて、まづ自害をばとゞめにける。されども賢兵衛は瞿麥
が事忘るゝ間なく、早晩尋ね覓めけるが、今宵しも二里あなたの山里に、些しの知已ありたるまゝ、
手提灯引提げて出で行かんとする時、蓬兒いふやうは、「老人の夜道おぼつかなし、此の握飯持て往き

たまへ」とて、信やかにきこゆるにぞ、賢兵衛うなづきて心づきたることとて、彼の濁酒を徳利にして出で行きたり。かくて路の程十四五町も歩み行と思ふ頃、傍なる堤の陰に、蒲鉾小屋かけて非人の小家ありけるが、彼の小家の内より、年頃五十ばかりと覚しき乞食女、飢ゑに疲れし面持にて、菰垂よりの顔を出はし、賢兵衛を見て云ひけるは、「此の四五日飯に餓ゑて、今は玉の緒も絶ゆべく侍り。あはれ御情を垂れ給ひて、食物あらば施し給はれ」と、愁きく這ひ出でければ、賢兵衛不便に覚えて、懐中何なる濁酒をとり出し、暖らず彼女に与へければ、女はさも嬉し気に押頂き、僅て一口飲みも果て、只一口に食らふと齎しく、忽ち全身震ひ出して、血を吐く事夥しく、賢兵衛此れを見て大きに驚き、「こはいかに想ひもかけざる過ちしけるよ」と、薬を用る水を与へて、さまざまに介抱すれども、更に其の験もなし。素より此の濁酒は、悪婦蓬見が悪計にて、窃かに賢兵衛を毒殺せん為、附子といへる毒を調じて、此の酒に加へたるゆゑ、暫く人命を失ふなり。されば毒気いよいよ廻りて、九臓六腑を痛むるにぞ、総身紫色に変じて、遂には狂死に死したりける。賢兵衛残りたる濁酒を見るに、いかにも怪しき物とおぼしく、其の色黄ばみて見えければ、はじめて蓬見が悪計なる事を悟り、此の上は蓬見を捕へて糺問すべし、且つ此の証拠は後に論ひ得させんにと、即便道を転じて、我が家へと急ぎける。さても悪婦蓬見は、留妻を勾引してより、早五日といふ夜なりければ、勇六が留宅の留

きを待ち侘び、「今宵は是非に歸りなん、さらば瞿麥が身の代に溫まり、しかのみならず握飯の毒の中りて、澁紙老爺が露の命は、今宵の中に果すべし。然る上は愚六どのを夫に定めて、永く浮世を樂しまん、且つ喜び酒に鷄卵を調じて、戀人の歸宿るを俟たばや。」と、獨り含咲みて居る所に、いつの間にか歸りけん、主の賢兵衞、動靜を殘らず立聽きして、「澁紙老爺の露の命は、今宵の中には果さざりき。」と聲怒らして納戸よりかけ出づれば、蓬兒は大きに慌忙き、「吻。」というて座を立ちながらも、傍なる火桶を拿つて、眼潰しに投げかけつゝ、背門首へと迯げ出でたり。賢兵衞こゝろはやたけにはやれども、眼に灰入りければ、狼狽ふる其の間に、蓬兒は裏路に走り出でゝ、彼の癡子を沈めたる古井の中に、大きなる石を投げ落し、「吻。」と一聲叫びて、入水の體にもてなし、扨裏路より迯れけるが、所詮こゝには止まり難し。さらば古郷に赴かんとて、本國伊勢へとこゝろざしける。扨又賢兵衞は遙か後れて裏路へ出でけるに、蓬兒は古井の底に身を沈めし體なれば、介錯して貰りぬ。「されば且つ死骸を引き上げよ。」とて、近鄰の人々を招きて、繩を下し碇にかけて曳き上げけるに、蓬兒が死骸にはあらで、鄰家の愚六が妻なる、癡子にてありければ、「案の外なる事よ。」とて、呆れ駭く許りなり。人々其の屍を檢むるに、四五日の日數經りたると覺しくて、五體は水腫れに腫れ滿ちて、臭氣鼻を穿ち、再瞳と見るべうもあらず。「且つ愚六に告げよ。」とて、愚六が家に人を馳すれば、主はあやに

くに春の合はず、御役方を右と左に申して、上を下へと騒動す。されど大賀人着に、四郎を預ける
るのみなりき。已に百軒の絵の如く縛られたりしが、辛うじて命を助かり、有様を細にとゞめるの
て、且つ春見が動静を問ふに、豊国諸氏は汗て遂電したる由なれば、蘭く郡代にもて殺すを要めぬ
すべて察しやる術もなかりけるが、これの上に賢兵衛に無面をいひやり、野狐人の代りにとて、有紙を宗ら
ん、とて、又それとつき付けをあぐらもしけれども、陰かなる路種もあらざれば、既すく打てもれ散る話
めで、よの放下つる六十ぞし者は、押しつゝみて提出ぬ。こゝに又賢兵衛は、其の夜の穴■人に
小宗に馳せ訴りて、權守が死骸を守り置きけんとおもふ時に、幽霊たゝしくにはれるで、致極の屍
よこたはりてありければ、近寄りて相見るに、此ぞまさる小女郎狐が死骸なり。賢兵衛は、あたを
らばと思して、こゝに其の狐の死骸を頭に廻ぎ帰りたるで、■にぞ在の如し化けて、彼の湯殿に■えたる霊
れず、寂か死を救はんで、私の宮命を捨ててゐよ、かかる命まで絶へ任し■を采して、■には晋へ
つるものを、人とはまれたる雑炊が行跡、誠に遅かりし死かな、を逝いて為すのに、本■等うてたる贈
葉を倫びしたるも、賢兵が同書に定まれり、するにても此の狐が、不便の死をば貰はれけるこそ、進
骸の前にくれけるが、よう狐が骸を抱きて、わが宮にたち帰りければ、貴て斯うとや■りけん、一跡
狐腹でまの下、小女郎狐が亡魂に手向のつぎ、■を立ちて呼ぶく腹、目もあてられぬ有様なり。賢

兵衛は三助狐が愁傷を想像れば、いとゞ不便いや増りて、「此のうへはよきに葬り得さすべし。」とて、人のごとく柩にをさめ、閼伽を汲み香花を手向け、僧をまねきて讀經しつゝも、後の園にぞ埋めにける。此の時三助狐には、人をも畏れずつき添ひ來りて、穴の傍に蹲踞り、こう／＼と泣き叫びて、妻の別れを悲しむ風情に、あるとある人々も、感涙をぞ催しける。さて一塊の塚を築きて、其の名を小女郎塚、あるひは狐塚とも呼べりしが、今に大磯の片邊に標の塚は殘りしとなん。かくて後四十九日といふ夜にあたりて、小女郎狐が靈魂、賢兵衛が枕上に立ちていふやう「素われ／＼夫婦のものは、父の敵千歳の老樹を寃むものなるが、時到らずして月日を空しう過し侍り。されど狐の通力をもて、未來記を探り見るに、儞親子再びめぐりあふ時來らば、必ず其の餘慶によりて、われ／＼が仇をも報ふべし。只今儞の命に代りし妾が善因、後果して善果となりて、再び儞の師恩をもて、老樹を亡ぼす時あるべし。天理彰照善惡かならず應報あり、娘瞿麥が生別れは、前世の業因とあきらめ給へ。假令一度別るゝとも、父子のちなみ深ければ、再會の時來りなん。ゆめ／＼疑ひ給ふな。」とて、睡りの夢は醒めにけり。賢兵衛つら／＼觀ずるに、「生者必滅會者定離、夢幻泡沫の浮世の中、思へばはかなき娑婆の光景、今年の花は變らねども、去年の人は同じからず。抑々橘内が自滅より、主家の人々寒苦に呻吟ひ、且寵愛の瞿麥は、行方もしらぬのみならず、後妻が奸計にて、小女郎狐が亡びし事まで、

皆是れわが身の業因なり。忽然念起の無明によりて、本有常住の都を牢落し、十二[illegible]の[illegible]、苦集滅道糧乏しうして、煩惱業苦の坂をこえ、漸く三界に流轉して、作る罪こそ積もりけれ。東[illegible]西[illegible]國が一歳の命も、[illegible]昔語りに傳はるのみ、[illegible]界[illegible]快樂の天、報いあれば衰退の悲しみあり、生死の[illegible]には會ひて離れ難く、[illegible]には離れて會ひ難しと聞く。おなじからば[illegible]、[illegible]蓮の臺に上らんとて、[illegible]ふつと切り捨て、鎌倉[illegible]なる藥上坊、[illegible]禪師の弟子となる。其名を西念と[illegible]、[illegible]の[illegible]寺に[illegible]けるが、これより[illegible]を捨て、行衛[illegible]かけて、諸國の靈場を巡拜せばやと、[illegible]身となりぬ。

[illegible]に入りて西念と法號し、廻國修行の後、三郎兵[illegible]手引によりて、再び[illegible]にかへり[illegible]、[illegible]出で[illegible]。[illegible]六白[illegible]して後、[illegible]が執念の小蛇[illegible]る事、[illegible]と[illegible]、[illegible]に[illegible]を[illegible]いてのち、安達[illegible]が慈愛によりて主家を起し、[illegible]身[illegible]の[illegible]を[illegible]つて、[illegible]を報はしむるの[illegible]、[illegible]たる[illegible]は、[illegible]に[illegible]しうらむ[illegible]。

第十一齣　責奸妄執蛇

當日は佛縁の深き日なりけん、行ひ善惡に分れて、家も善惡に鄰り、亦善惡に仍つて道心發りしぞいと奇しかりける。その縁故いかなれば、小女郎狐が七々の忌日は、麻子が爲にも、葬りし日よりは七々に中れり。さる程に兇惡の愚六も、此のほど麻子を害してより以來、何とやらん寐覺あしくて、ひとり寢の物凄くおぼえければ、せめては佛事作善して、麻子が修羅の苦患をたすけ、自己も現世の惡報をのがれんとて、近鄰の人を招き、みづから庖厨とりて、汁酢和物の類も、地方に名だたる鼠大根、あるひは防風松露の類を、闕皿に盛り出でて、例の惡棍一班をも會めければ、各坏に陶器とりて、おの／＼酴醾醁に咽を鳴らし、異口同音に泥聲發げて、念佛百萬遍を修行しけるが、やがて念佛も半ばに終へて、「願以此功德又翌の夜は、大磯浮津鯛か、御前岩の鮑など些と膾く饗應し給へ。」と、口々に戲れて、法事の場も差別はなく、世帶佛法腹念佛と、各家路に立ち歸りければ、跡には愚六一人殘り居て、こゝろ細き事限りなく、住み馴れたる身ながらも、家の隈々うち見られて、頻りに物凄くおぼゆるにぞ、出でもやらぬ咳拂ひ高々としつゝ、腕をさすり臂を張り、眼を瞠りて坐す所に、一陣の風おとづれて、佛壇の鈴の音一聲、鈴と響きければ、ふり仰ぎて屹と見るに、燈火の光ぱつと立ちてはぱつと消え、あるひは明くあるひは暗く、消えんとしては消え難なり。時は丑三の刻なれば、交加ふ人は前後に絶え、鄰れる家も寢靜まり、陰氣逼りて寂寞たる折こそあれ、靈前の位牌轉

けると共に、一團の陰火頭と二つに分れし中より、蛇子が形忽ぞ現はれける。さなきだに窶れし面色に、恨みの色ぞ重なれば、鬢髪も逆立て睨みし有様、身の毛もよだつておそろしく、さしもに不敵の蛇穴なれども、一物にとばかりに蹲つて、詫びんとすれど舌動かず、一遍の念佛だにも、口の開かぬぞ不思議なる。されば蛇子の靈魂は、一言だに言はずして、ただ睨み詰めてありけるが、今もや夜明けたらん頃なるに、いと細く上擦れたる聲を顫はし、蛇穴に對ひていひけるは、汝よくわが怨恨のほどを思ひしらずや、よくおもひしれかし。現世を去りし我が魂は、閻王の膝に泣きよるとも、怨執の一念は永く冥府にとどまりて、汝に苦痛を見すべきぞと、口を開いて笑ふと見しけるが、忽と吸すれる息の下より、左右の袂より小蛇のかたち、ひら〳〵と浮き出でたるが、やがて蛇穴の面前にふら〳〵と前を踏みければ、蛇穴今にたえかね下に一跳せんとして、ふせぎとどまるに身を憩ふ。斯くて蛇子の姿消けば、蛇子が幽靈浮浪々々と身を動かし、早くも見えなくなりて、二筋も、蛇と倶に消え失せけり。少刻ありて蛇穴が神體、龍の旋けたるが如く、白花に轉び出でければ、はじめて夢の醒めたる思ひをなし、四邊を眺めてたつ所に、一同が香の煙をとして、忍びがたく顏をはすれば、襟元を觀るに、小蛇いまだ纏はれ下して、ゆるやかに首を擡げたり。聲を合はすれば藻音をもたけ、顏を背ければ堅く纏はれて離れねば、素より剛氣の蛇穴なれば、小刀を抜き出し切つて捨てんとしたりしが、押せども刺れども、只纏

か水を切る如く、煙か影を突くに等し。流石に強悪の愚六も、後悔の涙とゞめ難く、「善悪の業報今ぞ知る。此の上は菩提の道に入つて、嘘子が後世を助くべし、さらば吾が悪業も少しは滅する事もやあらん。此くあさましき容となりては、人に面も合はされじ。いざさらば高野山に分け登りて、出家堅固に遂げばや。」とて、夜に紛れてぞ出で去りける。抑々高野山は郷里を去る事遠くして、寂寞たる無人城、晴嵐梢を鳴らして、夕日の影も閑かなり、金剛八葉の峯の上、秘密瑜伽の道場なり。一度詣づる輩は、永く三途の苦しみを離る。十三大會の聖衆には、肩をならべて隔てなし。三十七尊の聖容は、心の中にぞ坐し給ふ。八の尾八の谷は、衆生本覺の心にして、乃ち蓮華を像れり。峨々として高き山、渺々として遠き峯、靄霧の底に花綻び、尾上の霜に鐘響き、嵐に紛ふ鈴の聲、雲居に上る香の煙、とりどりにこそ尊けれ。かかる殊勝の山なれば、承和の往古弘法大師は、肉身に三昧を證して、慈氏の下生を待つとありて、彼の摩訶迦葉の雞足洞に籠りて、氏頭の春風を期し給ふが如く、此の山に入定し給ひ、五十六億七千萬歳、三衣の曉、慈尊出世を待ち給ふ、無比の靈地と聞えたり。さる程に愚六は、高野山に登山して、女人堂の前を過ぐとて、僅かに一足も越えたらんとおぼしきに、忽ち心情淨におぼえて、[illegible]き香も失するとおもへば、首なる小蛇身を離れて、麓の方へぞ落ち失せける。愚六喜ぶこと限りなく、「是れ皆發心出家の徳ならん、よくもおもひつきたりな、賢くも登山を

志しけるよ。」と、登れば程なく御影堂、三鈷の松、枝道に、多宝塔を伏し拝み、諸堂一々順禮するに、足に雲を[illegible]に[illegible]して、星宿[illegible]、[illegible]峨々高聳、嵐[illegible]慈悲[illegible]、流水清流浪滌塵埃垢。かかる[illegible]なれば、或は坐禅の[illegible]あり、或は念仏三昧の[illegible]あり、[illegible]果[illegible]思ひに浮世を[illegible]、[illegible]ここにあるを忘れして、各修行ましましけり。忠六は諸堂を順行しての[illegible]、清浄心院に[illegible]、しかじかの趣旨を告げして、剃髪の事を願ひければ、[illegible]の大[illegible]比丘、[illegible]のこらず[illegible]、かかる悪行の人、[illegible]べきとも[illegible]、[illegible]の山には[illegible]もがたし。しかはあれど一念の小蛇身を[illegible]、[illegible]なく[illegible]、[illegible]になかひて[illegible]心[illegible]し、[illegible]に[illegible]心を[illegible]へ[illegible]と、[illegible]あかければ、[illegible]して、[illegible]の坊に[illegible]しが、[illegible]には剃髪を許されて、[illegible]に、[illegible]坊と[illegible]告りける。抑彼の[illegible]子が[illegible]念の小蛇、女人堂より身を離れしことは、発心の徳にあらずや、抑高野山は女人禁制の地といひ、且は大師の[illegible]のなす所なり。假令三世業障、煩悩の蛇に身を纏はるとも、本願智信の山に入れば、三世の業障みながら必ずはなれて、心身[illegible]なること[illegible]なり。[illegible]女人[illegible]界の[illegible]は、[illegible]笠に七百[illegible]箇所、[illegible]土は七十五箇所、日本は四十八箇所といへり。

まづ比叡山は伝教大師、延暦年間に開きて、三塔九院女人禁制する事あたはず、高野山は、[illegible]にも

いへるがごとし、往昔宇治關白頼通公の北の方、「高野へ婦のかなはぬとは、賤しき地下の事なるべし。自は一の人の北の方なれば、自餘の男子よりは位あり、さらば登る事容易し。」とありて、六月の炎天に神谷川を越えて、不動坂へさしかゝり給へば、卒地に山荒れ黑雲蓋ひて、大雨車軸を流しければ、神谷へ歸り上の小袖を脱ぎて、打敷となしたまひ、奥の院に納めたまひぬ。其の時の御歌に、

のぼるべきたよりなければ高野山兼てしきおく法の小筵

斯く詠じ給ひしとなん。其の他諸國に名だたる山々嶽々は、不二山を始めとして、女人禁制の地尠なからず。

かくて愚六道心は、高野山にとゞまる事、凡そ三年が程を過しけるが、前世の業因いまだ滅するの時到らざりけん。一旦小蛇の禍災を免れて、大師利益の應驗を受けながらも、咽下過ぐれば熱氣忘るるとかいへる常言のごとく、一念發起の日を重ぬれば、念珠の數も月に減りゆき、今ははや道心もやや折けて、破戒の僧となりければ、素性の惡念きざして、古郷のかたなつかしく、常に馴れたる惡友等も、頃日はいかにありけんなど、往時未來を思ひつゞくれば、頻りに下山の念起りて、山にとては一日もとゞまり難し、此の上は山を下るにしかじとて、或曉の鐘と共に、清淨心院を忍び出で、行

衣を樹に掛けつゝ、ひきぐの草鞋踏みしめて女人堂まで下りけるに、颯と吹きくる朝嵐につれて、俄雪に山閉ぢ谷埋もれ、常木一時に鳴し鳴る、よと思ふばかり、日も冥れ心消えて、物侘しさいはんかたなく、辛うじて女人堂まで上りつき、軒下に半ば身を寄せけるが、間もなく霽れなんとす。少時ありて空晴れわたり、心もはればれとなりければ、漸うに起きたれば、其の身濡れたゞのこと、自然暴き音つにて、さては如何なる執着心、再び吾を惱ますぞと、襟下を探り見れば、案に違はず宗禮の小蛇、鱗甲をいたゞけて、血走る雨の眼を怒らし、舌の閃き吐かば、ひらくと翻して、睨み詰めたる顔の徳相、身の毛も弥立つばかりなり。思六に思はず身を退けて二あはれむべき執念よ、三界流轉の輪廻にて、捕れしを悔しと怨に思ひつゝも、今に到るまで此の所に留を受けて、纏ひつきしかあさましや。さりとて何の功徳もなし、生前の作りし罪業の、報を受くる所なれ。今生すら斯くあれば、未来の罪らそを悲しと、天地に愧ぢ悔ゆれども、今更に甲斐なし、思六つらくし思ふやうは、一昼一日大師の利益を蒙りて、我が身上なほつれなば、他力の功用もたのむ、大師の霊力を信ずべきに、熱念に囚はれ道心浅き佛語と聞えたり。これより再び心を改め、後を期して修行すべし、あなうしや、と嘆きつゝ、女人堂を立ち出でんとする際に、罪障のなせる所か、彼の蛇首を擡げて、思六の咽喉のあたりにしがくと纏ひつければ、息も絶えだえに覺えたり。あら苦しやといひさま、元の所へたち歸

れば咽を緩め、又登山と進みゆけば、咽をいたく締むる事、以前の如くにありければ、上らんとすれば息絶ゆべく、下らんとすれば蛇纏へり。せんすべなくて嚏と坐し、默然として居たりけるが、「吁悔むべきは罪業、怖るべきは執念なり。一旦佛門に入りつゝも、再び迷ひし娑婆の苦患、よし此の上は心を定めて、諸國の靈場を順拜し、襟に卷きたる小蛇の形をも、道往く人に見せもせば、罪障懺悔の種となりなん。自業自得果、是非もなき惡因や。」と、淚ながらに下山しけり。これより後日に三度、夜に三度づゝ小蛇怒りを發して、愚六が咽を締めけるとなん。されば人呼んで蛇坊主、あるひは蛇卷道心、愚六坊とぞのゝしりける。此の末にいたりて愚六が行狀、善なるか且惡なるか、後編を俟ちてしり給ふべし。

第十二齣　惹レ黨無頭鼠

それはさておき實部四郎吉香は、愚六に誑されて金澤の海中に沈められしが、いまだ運や盡きざりけん、一箇の巨木流れ來るに拿りつきて、漂々として水上に漂ひけるが、次早に到りて漸く岸邊にかかりければ、辛うじて命助かり、且つ其の邊の納屋に入りて、しか〳〵の由を物語り、「さて此の所は何國なるぞ。」と尋ぬるに、「これは相州三浦の岬なり。」といふて、彼の漁する人々會まり來りて、吉

胥が諸衣を燥かし、食物を進めてさまぐ\と介抱しければ、おもはざる人の情にて危きを助かり、且ぶことおほかたならず。熟考ふるに、汨水下に投されし後は、園葉も共に身を流やしやらん、且は盗賊の巣に誘はれしか、若し遊行とも身をなしなば、再遇ふ事もあるべきものを、縁あれば千里の道も近く、縁なければ一重の壁も遠し。さもあれ己が悪しきにおもひ比ぶれば、また彼のもとにも担をや慕ふらんなど、そゞろに涙を催しつゝ、惜しからざる身ながらも、命だにあらでたがひは、西上ひみんこともやとて、所の人に別れを告げて、一旦奥州へ下りけるが、秀衡逝亡の後は、一族も散り散りになりゆきて、些しの所縁あるかたさへ、世を隔て時代のかはれば、たのむ木の下も雨漏りて、ある陰らん陰だになく、所定めずさすらひけるが、又都の方もなつかしくおぼえけるにぞ、古郷を舞にとして、東海道へと志しける。されば口に糊する業もなければ、詩作り歌詠む人々の家を尋ねて、こゝかしこと一夜二夜をあかしけるが、世の中騒がしければ、それさへもはかばかしからず、暫しつゝ、日を経る内に、はやくも伊勢路にさしかゝり、的なき旅の心易さは、道すがらの名所のこらなく見遍り、今日しも鈴鹿山にて到りける。当時の鈴鹿山といへるは、今の街道を離れて南北に路あり、且か数八百八谷といふて、長嶺を越え麓に出づる細道あり、布留の中道といへり。彼の斎宮家駐跸、

鈴鹿山ふるの中道作よりもきならすにこそあくれかたけれ

と詠みけん、四面に樹木生ひ茂りて、晝も小暗き所なれば、山魅木客の栖、白波綠林の隱るゝも、空言とは思はれず。往古平城天皇大同二年、逆賊鈴鹿に籠りて、旅人を惱ます事、禁廷に訴へければ、敕によりて田村丸これを誅す。又弘仁年中に上皇を此に遮る。其の後延喜七年九月、鈴鹿山の群盗其の張本十六人を誅すとありしも宜なるかなと、思ひめぐらして嶺にのぼれば、坂上將軍の靈を祭りし田村の社あり。木の間に見ゆる伊勢の海、いせをの海士の捨衣、鹽なれたりと詠みけん、古歌をさへ想ひ出でられて、此の所の眺望繪にも文にもつくしがたければ、遙かに筆捨山を打見やりて、猶嶺より下りゆけば、こゝにいかなる神の鎭まり坐すやらん、華表の笠木は地に倒れ、風博經木も雨露に朽ちて、僅かに形ばかり殘りたるに、茅萱も扶疎に打傾き、月もるばかりの神社は、雨風の宮にもあらねば、不葺合尊の遷坐在しけん跡なるかも。暫く且つ憩まばやとて、階の下に尻かけて、神のお前を見てあれば、いと古びたる板壁には、様々の落書して、憚りもなく穢したるが、中にも奇怪しきものこそあれ。亙三尺ばかりとおぼしくて、大きなる鼠の形容を畫きたるが、しかも首はなくて、四足より尾にいたるまでは、全く備はれり。心ある者の畫きしと見えて、畫法よく整ひ、筆勢も拙からず。吉香熟おもふやう、かかる精畫にありながら、なにとて首をば畫かざりけん、且何人の所爲なるや、何にまれ尋常の鳴呼業とはかはりて、緣故あることにこそ。然もあれ此の光景を見つゝも、唯

に止みたんに黒下に日描しくて、腰なる矢串より筆揮の出し、本との時ある畫の書かれぞてうらう
ると出きて、売に土首を書き添へたれ、吉者は在下に筆揮の下、其の文を偏嗣はれたる事を聞き、時こ
れにて心足れり。」といふて、既に筆を納めんとする所に、後の古机の小隅より、一人の荒男あらはれ
出で、雷の如き聲を出して、いかにも吉仮しや、今月今日いかなる吉日なるや、此の両月續てつるか
かなひて、一個の大將を得たり。今より後は在下が法師となり給へ、其本なれ〳〵と手を取りければ、
吉智大いに驚き、彼の男の打扮を視るに、頭には菅草編みたる頭巾を戴き、身には闇の布の衣ひれ
たる袖攣衣を穿ち、腰帶にて縛りたる毛綿の脚絆を纏ひて、一刀の山賊刀を帶びたり。面貌はいかにも兇
悪なるが、右手は懐にして、左の手をさし出し、吉智が襟を引つかんと欲しければ、吉智は驚きに打たれて、
一言をも出さでありければ、彼の男、吉者を促していひけるは、「御身、必ず驚き給ふことなかれ。さて誓ふ
ることにはあらず。在下は箱根の山陰に住む者にて、天宝寅八と呼ばるを存じ、見崎ことごとく使ひ
ければ、世の害なへき業すへかなはず。なおしく山賊に住み渡る。両方人の身の迷てれりぬるを
在下も思ふ事あるのみ、斯くの如く首なき鼠を書けり、若し此の首を書き得る人ありせば、其
方隱家へ誘ひようさんと、兼て思慮する事なれば、日頃に此の紙に鼠の首を、行違の人を待ち受けしに、
に、今日はからずも御身が手して、此の鼠頭を書き添へ給ひしかば、在下が自ら望み給ふ委細

は後に語り申さん、且つ隠里へ去來給へ。俺も武士の浪人とおぼえたれば、雙方の造化のみならず、吾が住家に滯留り給はば、始終榮花の身となり申さん。疾く〳〵。」と勸めつゝ、吉香が辭するをも許さざりければ、吉香も是非なく諾ひけるにぞ、頑八「さらば。」とて前に進み、扨彼の古社の裏面にいざなひて、板疊一枚を「曳。」といふに擧上けつゝ、「いざ此方へ。」と前に入りぬ。吉香此の體を見て訝しおもへども、今更に術なければ、同じく續きて飛び入りけるに、椽の下おぐれて明らかにて、忽ち一條の道路を開けり。素より這の社は山神の古廟にて、手下頑八が隠家への閒道なり。吉香はかくともしらざれば、頑八に從ひて猶進み往く所に、路の程五七町も歩みたるとおぼしきに、「これより前は道嶮しく、殊に小暗き所なれば、暫く待ち給へ。」と云ひつゝ、頑八兼て貯へ置ける、腰燧打鳴らして迷松明に火を移して、尚往く事十餘町、或は上りあるひは下り、凸凹なる路を越えて、漸く一箇の石門に到りければ、頑八後を顧みて、「乃ち此の所は在下が窟家なり。今は何をかつゝむべき、這れは是れ過ぎつる頃、判官義經殿の部下に加はり、武名を世にあらはせし、伊勢三郎義盛が舊宅なり。彼が強盗を働きて、多くの人を惱ませし事は、世以てしる所なれば更にもいはず、其の後此の宅に蟹坊丸といふ者住ひたりしも、便り悪しかりけん所を移して、竟には其の身も亡びけるが、今いふ蟹が坂といふ地名は、彼の蟹坊が古跡なり。かくいふ在下も最前狩人といひしは詐り、寔は隱形影の頑八とて、屬

徒だになき小賊なり。且つこなたへ入の拾へ[illegible]ときこえければ、吉香は[illegible]盗賊なる事をしりて、心中大きに駭けり。其の時石門を打ち拝き、「頑八戻りしぞ、今日は鼠の首を擧げたる、總大將も御供申せり。」とよばはりければ、「應。」といへば、さそ小賊二十人あまり、ばらばらと走り出で、裏面より石門をさつと開き、皆蹲踞つてひかへたり。頑八は吉香を前に立てて入り、[illegible]まで上座に進めければ、吉香は面色土の如くになり、胸轟き冷汗出でて、溜息をつくのみ[illegible]左右に列なる赤賊は、牛のごとく、熊のごとき形容して、さながら羅刹に等しき者共、おのおの手には[illegible]おたる[illegible]物を構へて、眼を[illegible]の形勢、[illegible]かたなく、[illegible]畏りしかと、肝心も身にそはず。其のとき頑八座を進みて申しけるは、「素吾黨が頭領として從ふは、下總國千騎窟へ隠れ住める、巌窟大王俗稱は白波雲平、寔は蜜平四郎重廣に候ひつれども、距隔たりて遠き境は、其の部下といふのみにて、所々の一班に班頭といふものを立て置けり。さるによつて萬事は、班頭の指揮に從ひ、生平の事を計らふ。這の箱陀の班頭は、前にも[illegible]せし如く、蟹坊丸が頭りなりしに、さきの年伊勢平氏の亂に加はり、いはれざる加勢して、三日平氏と諸共に、その身を亡ぼしてよりこのかた、未だ班頭とよぶ者なく、かつ其の任に當るものなし。皆一般の小賊なれば、掟も立たず法も[illegible]だれて、山寨何に穩かならず。夫れ常言にも國に賊[illegible]、家に鼠[illegible]

からば我々は鼠に齊しき行跡ながらも、おの〳〵鼠輩の小鼠にて、舊鼠といふべき親鼠もあらず。這の寨中の一班に、班頭なき事を譬はば、首のなき鼠に似たり。若し首なき時は、手足をいかほど働かすとも、はか〴〵しき功もなく、空しく小盗して世を送るなり。こゝに班頭といふ者ありて、我々に謀を授け、その器に應じて指揮あらば、思はぬ獲物をもなしつるなり。さればこそ山神の古社に、首なき鼠の形を畫き、その首を嗣ぐ人あらば、我が小鼠の首とたのまんと、斯くは慮ひを構へたれ。俑盗賊を賤しむ事なかれ、小賊といへども五常の道はしれり。且づ試みにいはば、獲物を分つ時均かなるは仁なり、出づる時他より後るゝは義なり、班頭に從ふは禮なり、透を見て竊び入るは智なり、入る事先だつは信なり且勇なり。さればおのづから智仁勇備はれり。此の道理を悟り給はば、我々が望みを叶へて、これより後此の山寨に留まり、小賊等が謀師となりて、妙策を施し給へ、さらば鼠王を崇めて、かしづき參らせん。假令固辭み給ふとも、一旦這の寨へ伴ひし上からは、是非に許さず。強ちに固辭まば、彼的が攜へたる所の段平刀を以て、立地に亡ふべし。各いかに。」と顧みれば、列座の小賊一齊に聲をそろへて、「いかにも然り。若し否とあらば、舌も引かざる閒に首を刎ねん。」と、睨まへて詰め寄せければ、吉香ます〳〵驚き怖れ、「且づ權く。」と制しつゝ、心中つら〳〵考ふるに、今斯く賊寨に墮るからは、所詮悔みてかへらず。是れも又命だにめでたくば、竟には逃るゝ時もやあ

らん、且つ謂ふにしかじと、斯う言を出しけるは、「御筆の[illegible]言[illegible]理あり[illegible]在下[illegible]との
その器にあらねば、王猫が[illegible]も過ぎ、東坡が[illegible]、[illegible]、假に座を[illegible]の
て、此の[illegible]にとゞまり、[illegible]を[illegible]あつめて、[illegible]ある事を[illegible]、[illegible]一社に[illegible]て、そ
もそも鼠は四[illegible]を[illegible]て[illegible]年、[illegible]在下[illegible]、[illegible]
[illegible]なき業なれば、事を兩端に[illegible]、仍て首鼠する事此に[illegible]。鼠は小獣にして[illegible]
いはれし、在下鼠らの[illegible]業をもしらで、日本人の[illegible]を[illegible]、[illegible]
此の[illegible]の王となられし事は、[illegible]
ねば、[illegible]、[illegible]。[illegible]、列座の小[illegible]どもおほくに[illegible]、「[illegible]
入ことして、[illegible]の[illegible]を[illegible]き、[illegible]
[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]で[illegible]、[illegible]
りて、「[illegible]」とて、一同[illegible]を見るに、[illegible]
を[illegible]し、縫ものたる[illegible]、幾重ともなく[illegible]、「[illegible]」[illegible]品や、[illegible]取り[illegible]
りければ、左右は目もあやに心をまどはして、[illegible]として[illegible]ありけるが、其の中には[illegible]品を選
み取りて、[illegible]したら、[illegible]に[illegible]、[illegible]を[illegible]、[illegible]

大將かなと、小賊一同は喝采せり。其の時頑八は一腰の刀を携へ出で、吉香に與へて告しけるは、「這の一刀は年來在下が重寶なれども、只今御に進らすなり。銘は三條小鍛冶宗近が打つたる業物、數度試みたる斬味なれば、大將の佩刀となし給へ」とありければ、吉香押頂きてこれを見るに、二尺獅子の金目貫は、南蠻鐵の鐔打つたる、海老鞘卷の一腰なり。刀柄はいふにたがはず、天晴の名作なりければ、「多謝」と一禮畢り、再び杯を回らしけるが、既に其の日も晚れて、興酣に及びける頃、一人の小賊庭火の周りを立ち回り樣、「在下猿樂仕らん」とて、陰囊を提へて東面西面に走りあぐり、さも寒氣なる聲して、「よふり／＼に夜の更けて、さり／＼に寒さに、ふりちふふぐりを、ありちふあぶらん」というて、庭火を十二三返舞ひ廻りければ、滿座いよ／＼興に入りて、「賊の変はり頼みある中の酒宴かな」とぞ喊叫みける。吉香徑の男が猿樂がましく舞ひ出でたるを見て、「夫は堀河院の御宇、内侍所の御神樂の夜、職事家綱を召して、『今宵珍らしからん申樂仕れ』と宣旨ありしに、家綱が弟なる行綱といふ者、裾を股まで褰げ、細脛をあらはして、今の如舞ひめぐりしと聞けり」といへば、傍なる小賊等、「さては彼奴がおもひ設けしにはあらざりつるか、己が製りたる風情にもてなして、我々を賺きけるよ」とて、日々に嘲りければ、彼の男がいふやうは、「在下素より申樂の業に疎きばかりもしらず、只賊の業に闌けたれば、今のごとく行綱が、申樂をも盜みたり。是れ乃ち偸盜

する業には、賢くならずや。」とおのみ色なく申しければ、「實にも。」とて一座の人々、[illegible]ける。

これより[illegible]四郎は、[illegible]なく[illegible]にて、[illegible]の賊首となり、[illegible]しぬ。又[illegible]の手代[illegible]八が[illegible]たる、小篠[illegible]宗近の一刀は、[illegible]、[illegible]門を[illegible]し、其の[illegible]たる[illegible]代の一腰なり。這の一刀より起りて、[illegible]。日[illegible]八が[illegible]、しばらく[illegible]て、前編[illegible]に[illegible]。

草木花ありて後に實あり、[illegible]の[illegible]史も亦然り。這の書前編凡て一花を以てし、[illegible]實を以て結ぶ。[illegible]の官宦婦女、愁歎の件を好み給はば、[illegible]。まづ[illegible]ば、花實相對せず、[illegible]事を解せずと云爾。

阿古義物語撮引書目 除其表出ニ不レ掲之第一

日本書紀　萬葉集　古今集　古今六帖

勢陽雜記　宮川日記　洞津考　阿漕草紙

謡曲阿漕　坂士佛參宮記　名寄歌枕　兩伊麗雀

榊巷談苑　新後拾遺集　東鑑　源平盛衰記

和名類聚鈔　王代一覽　狂詩選　宋詩鈔

元詩鈔　後選集　宇治拾遺　舊本今昔物語

古今著聞集　玄中記　三才圖會　説文

白虎通　述征記　諸國里人談　水經注

埤雅　抱朴子　玄覽　淮南子

格物總論　法華經　西陽雜俎　朝野僉載

格致鏡原　篠しのゝめ集　新猿樂記　教長家集

揚子方言　八雲御抄　萬葉代匠記　堀河院百首

[illegible]本草　古事談　續古事談　中將八部[illegible]

大鏡　梁塵愚案抄　合璧事類　南[illegible]志

李時珍本草　錄[illegible]　因果物語　今古奇觀

醒世通言　醒世恒言　高野物語　通計六十三部

右ニ擧ル所ノ書ハ、阿古義物語編述ノ間、引キ用ヰシトコロナリ。目擊スル所僅ニ十ガ一ニ過ギズ[illegible]其ノ他抜引ノ書目ヲ錄セシハ、世ニ所謂讀本俗腸ノ屬ニシテ、自ラ其ノ醜ヲ顯ルニ似タリ。看官某知ノ戲作者心、元ヨリ胸ニ蓄ヘハ、錦ノ嚢ニ石ヲ包ムニ同ク、不學ヲ蔽ヒテ博物ノ招牌ヲ打タザレバ、發客忽チ拙文人ト詈リ、一年ノ著述自ラ[illegible]ス。仍テ抜引ノ書ヲ出[illegible]、制[illegible]氏ニ時ハ、事モハナリモ名ヲ賣リ作者利ヲ得ル書肆ノ時招牌ニ專[illegible]

遊[illegible]道人戲記

伏稟

發客　鶴屋喜右衛門
同　金助

乍憚四方御得意樣方へ、御披露且は御禮のため、口上を以て奉二申上一候。先づ以て各樣方益御機嫌克く被レ爲レ遊二御座一、恐悦至極奉レ存候。隨而此の度開板の小說、阿古義物語全部八卷先達より賣り出し可レ申候處、作者式亭主人、畫工豐國主人、例のずるけにて一向筆を下し不レ申、兎や角やと催促仕り候内、時光過ぎ易く早くも五箇年の延引に相成り候段、御賢慮之程奉二恐入一候。然る處去る巳年八月朔日より、二之卷の著述に取りかゝり、又々延引仕り候て、去る巳の極月朔日より當午の正月七日までに、第三第四之卷だら〳〵急に出來仕り候に付き、早速取り急ぎ上木仕り、當春之賣出しに相成り申し候。然れども豐國主人甚だ繁多にて、なか〳〵早急の間に合ひかぬべき旨にて無據斷りに付き、作者相談の上名代の畫工、即ち豐國門人歌川國貞主人に相たのみ候て、首尾能く出版仕り候。元來此の册子は、文化三年に、第三回目まで著述出來有レ之候間、第四回目よりは此の度の編述に御座候。發端より三回目までは、五年跡の趣向故、文段竝に繪組等も別して拙く、流行にも後れ候て、嘸々御目だるき事と奉レ察、二馬豐國兩主人、はなはだ後悔いたし居られ候。此の儀は別けて御吹聽申上候間、一之卷二之卷の體裁、當時の讀

未發行に迄ひ候所は、[illegible]御用捨被ㇾ下、五年も跡のことぢやもの、[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]候。當年は作者畫工殊の外心進み居候間、[illegible]
[illegible]
でも、宜しく御評判被ㇾ下候て、後編御待兼の[illegible]
[illegible]

第一之卷

○卷首畫
○紅毛銅版の圖　　式亭三馬編
○大礒十八輪の圖　　歌川國貞畫
○[illegible]の圖　　同

○善人出家する功徳によりて諸神諸佛來迎し給ふ圖　同

○耶魔姫變形の圖　歌川豐國畫

同じく邪神守護の體薄墨　歌川國貞畫

○巖窟大王の圖より阿漕平二に至るまで肖像十一面　歌川豐國畫

○江の島遊覽の圖　同

○第二之卷

○雲平狐の玉を奪ふ圖　歌川豐國畫

○大磯揚屋樓上の圖　同

同じく背面　同

雲平狐を追ふ圖并に狐の形　同

○狐火の圖　歌川國貞畫

○吉香文臺に對うて蜂の飛ぶを見る圖　同

○これより末四之卷滿尾に至るまで　歌川國貞畫

畫人名目 尾

右之通に御座候。別して申し上げ候は、作者三馬[illegible]、[illegible]御取立ての程奉二願上一候。いまだ年齢二十才餘の未熟者共に御座候間、文盲にて、[illegible]おほけなくも、既に[illegible]に御座候へども、[illegible]思召、御評判被二下置一候様、偏に奉二願上一候。

扨又、私儀も[illegible]之儀、數年來書物類に錦繪草紙類、商賣いたし來り候處、御贔屓様方御蔭を以て[illegible]日々に相増り、年々に繁昌仕候。[illegible]仕合奉レ存候。右錦繪之儀も文化大新吟味仕り、[illegible]版尤も上品に仕立候て[illegible]格別に相勵み候。別而近來[illegible]、並に合卷錦[illegible]紙等不レ殘取揃へ、[illegible]仕り候て、[illegible]商賣仕り候間、家不二相替一御用向仰付被二下置一候様、不レ限二多少一奉二願上一候。以上。

午正月

流轉數回　阿古義物語前編　序

阿古義物語後編序

文魁主人謂二南柚子一曰、式亭翁著阿漕物語四卷。盛行二于世一。固有レ志三乎爲二之後編一。不レ果病没。非三特翁不幸一也。實亦僕不幸也。予故從レ翁游レ意者。開二翁志一者。當今之時舍レ予其誰也。吾下偷二少閑一爲續二述之一。使三事善惡得二應結束一。觀者無二遺憾一焉。且使下僕得中射二利其間一乎。南柚子感然曰。吾豈敢。夫翁之於二稗官一也。妙二通世態一。深合二人情一。架空鑿實。巧寓二勸懲一。古人云。善二戲謔一兮不レ爲レ虐兮。翁之謂歟。故無レ論二男女老少賢者不肖一讀レ之。貪戀持レ德。若三佩者享二甘旨一。夏之日不レ能レ釋レ卷。能使三午枕履倦一。冬之夜爲レ之挑レ燈。不レ覺二曉柝忽報一。此豈吾輩所二能企一者乎哉。夫文人相輕。自レ古以然。業二乎斯一者。夫人自謂二金聖歎復起一。不下易二吾言一。是以陽善而陰相嫉。曰。彼惡能賽レ我哉。是常態已。然至レ翁則獨不レ然。皆自親欲然。因囑三若于後一。謂不レ可レ赫遂一矣。此非二私言一。自有二公論一。而使三德澤從二是擧一。拌乃貂不レ足二狗尾續一者乎。主人弗レ聽曰。如レ僕者生二長于市井間一。悻々然唯利之視。不レ知二其它一。然得レ之與レ不レ得。有レ時繫レ命焉。願應レ所レ需請強爲レ之。假令予材思不レ能レ及レ翁。世人弃而弗レ顧。僕之折レ貲也已。何損二於子一。於レ是把レ筆。數月脱稿。持以見示。徵二序於予一。因爲二一閱一。既而歎曰。嗚呼奇作也。夫役除レ陳。新巧畢出。以レ予觀レ之。若下不レ愧二于師一。足中以接レ

武此之意者。然吾恐其畫世之圖也否。果亦有僞如古乎。吾將以為補其所以評云。吾將有待也之

日。然後定其言之幾。

文政九年丙戌七月

白　井　誠

阿古義物語後編目錄

巻之一

〔第一齣〕千騎窟聚レ賊　〔第二齣〕阿漕浦忘貝

巻之二

〔第三齣〕木像代ニ危難一　〔第四齣〕錢掛松來由

巻之三

〔第五齣〕怨魂殺ニ奸夫一　〔第六齣〕夫婦闇奇遇

巻之四

〔第七齣〕惡瘡詰ニ庸醫一　〔第八齣〕餌レ金釣ニ美人一

巻之五

〔第九齣〕貞婦沉ニ煙花一

巻之六

〔第十齣〕外川浦復レ讎

流轉數回 阿古義物語

江戸　式亭三馬遺稿
江戸　南仙笑楚満人補綴

後篇　卷之一

第一齣　下關嶺聚窟

人衆んなるときは天に勝ち、天定まつて人に勝つと。自然の天命には道人が敵ふにはあらず、下關に近き隣り、背の小川瀬なる岩窟へいたり視るに、有理道人が言の如く、其は人跡絶えたる高嶺へ、突き出でたる岩室にて、後には高山巍々と聳えて、鳥も通ひ難く、前には渺茫たる青海原遙々として、漁舟釣ぶねも近づくこと能はず。斯かる天然要害の所なれば、窟中は大きに構ひ二層造の間に竈まれたるら斯くまでに、身を忍ぶによき地位あることをしらず。是れまでに諸々方々と、中吟ひしぞすからね。」と、忽地例の妖術をもつて、近國の野武士山賊をかたらひければ、頃日に其の數百有餘におよびければ、今は心易しと寨を構へ、要の門を補へ、玄關書院客間臥房廚、都て是れ備はらざると云ふ事な

し。又部下の小賊に分付けて、近國より美面うるはしき女とさへ聞く時は、人の妻娘の嫌ひなく、強奪し來りて臥房の伽をなさしめ、飽く時は或は殺しあるひは海に沈め、又は其の胸を割きて人膽を取り、許多の黄金に換へなど、更に人の行ひならず、自ら尊號して岩窟大王と呼び做し、殆と人民を惱ますといへども、亂れる世の悲しさは、官府も軍事に暇なきものから、強ひてこれを制する事なく、只其の儘に打捨ておきしかば、次第に近國他國の強盜、まねかずして爰に聚ひ、其の數今一千餘騎にあまりければ、猶々其の勢ひ廣大にして、仙が窟を更めて、誰いふともなく千騎が窟の岩窟大王と、おぢ恐れざる者もなかりける。爰に亦彼の勾引愚六が手より、菌葉を詐び奪りたる地震の動八は、菌葉が面麗にしきに、搖錢樹を得たる心地しつ、忽ちこれを浦川の湊なる、何某といへる遊君長へ售り遞與せしに、菌葉はあるにもあられず、晝夜となく日となく泣きくらして、透間もあらば自害せんとしけるほどに、長も殆ともてあまし、云々のよしをいひて、動八がかたへ戻しければ、動八も甚だ迷惑し、彼方此方へ賣りかふれど、何れの所にても同じ事なりければ、許多の典身錢を出して詐ひたる代物を、其の儘にして置くべきにもあらねば、左やせまし右やせましと、萬般思ひ回らしけるに、此の程聞けば千騎が窟にて、美人を尋ぬるよし。渠が部下の小賊のいふあるに、動八も從來勾引の事なれば、直に外川浦の岩屋に尋ねゆき、相識れる小賊について、大王に斯くと言上し、菌葉を見せける

に、雲平は一目[illegible]、[illegible]八に[illegible]、巣窟に留め心にしたがはせんと、
いろ〳〵さま〴〵と口說けども、蘭葉は豫て覺悟を[illegible]れば、更に[illegible]、[illegible]
まらば舌を喰ひ切りて、死せんといふに[illegible]、其の心の[illegible]
は、部下の小賊等を聚め、大いに酒燕を[illegible]、[illegible]に[illegible]
なるにおよんで、[illegible]其場を[illegible]出しいふやう、「汝[illegible]
さま[illegible]に心に[illegible]
神通を得たれば、[illegible]
と、心[illegible]
事か[illegible]
目に[illegible]
「さらば[illegible]
さし心得て[illegible]
思へば、[illegible]
でて、[illegible]

恰も畫圖のごとく、房總の山々遠く聳え、絶景いはんかたもなしといへど、身の憂さに更に目にもとまらず、磯際にたゝずみて、さらば汐を汲むべしと、桶を横さましにて汐の來るを俟つに、打ち寄する波にあなやと見る間に、引き汐諸共桶を遙かの沖中へとられ、「這は何とせん悲しやな、豫て亡き身と覺悟はきはめつれども、せめて母上や兄上に、今一度遇うて不幸の言譯して、その後兎も角もと思ひしに、言付けられたる汐をば得汲まず、剩へ桶をさへ失ひて還らば、いかなる憂き目にやあふべき。死せざる時に死せざれば、死に勝る恥辱ありとかや、夫に別れ獨り生き存命へてありとても、何の樂しみかあらん。初め遊君に賣られし砌、死すべかりしを未練にも、今日まで生き延ばはりしゆゑ、斯かる憂苦にあふなるべし。今は是れまでなり」と西に向ひて合掌し、「南無阿彌陀佛」と唱ふる聲と共侶に、既に身を躍らして、海底へ入らんとするに、忽地後に人ありて、背よりしかと抱き留むるを、誰ならんと顧みれば、是れ別人にあらず、日外六浦の沖にて、惡漢がために海の中へうち込まれて、今は世になき人と思ひし夫、實朝門部吉香にてありければ、一遭は驚き一度は歡び、吉香に向つていへりけるは、「君はすでに六浦の海の底の、水屑となり給ひしとのみ思ひ居たるに、奈何にしてか今まで命を全うして、爰へは來り給ひしぞ、最不審しことたづぬれば、吉香はやゝなら言葉が背をかいなでつゝ、「吾が荊妻克くこそ貞操を守りて、千辛萬苦をたへしのび給ひしよ、吾儕從來水心を得

すといへども、情ある人の袖に助けられ、辛うじて本國へたち還りし所に、這は仙の巖に要害を張本斷頭ゐよし、すみやかに退治すべしとて、公の命によつて、當族の打手に向ひたり。御身にもまたく、吾曾て武道に疎しといへども、また頗る孫呉の秘書を讀めり。故に公より數千の官兵を、吾等にさづけて賊をうたしむ。思ふに御身はただ一人にて、賊塞の案内を委しく知りつらんに、吾等を導いて棚負く、賊首を撃たしめ給はば、其の功大いなるべしといふに、御葉は聞いて、是れぞはじめて易しと諾に吉香を導いて巖窟へかへり、ひそかに岩窟より窺ひ見るに、賊首はいまだ歸らずと見えて、男女の笑ひて、かく聲するにぞ、御葉は吉香に低さゝやき、彼の甲庫のしとねの上に坐したる者こそ、巖窟の大王なりと說きしおすを聞いて、吉香打點き、携へたる弓に箭を番ひて、よつぴきてひやうと放てば、這の大箭を聞くよりも、巖窟大王は、忽地身をかはして、射て來る箭をはしと摑へ、己は何者擊たんとする官兵の仕業、何程の事あらんや、假令項羽が勇あつて、張良が智を兼ぬるとも恐れんや、にたらず。來つて我をおどろかすは、汝の首をなでんと嘲するが如しと、一口にいはんとするにて、帳外に飛び出で、吉香を睨めて大いに怒り、今我を遠矢にて射落さんとせしは汝なるべしと、刀を拔いて四郎が首を打ち落すに、御葉はあるにもあられずその首を掻き抱き、わつとばかりに泣きしづむに、一座どよめきわたる聲に、はじめて心づきて四下をかへり見れば、是れ正に南柯の一夢に

して、酒宴未だはてず。雲平は此の爲體に一笑を催して、さも快げに杯を擧げて、女們に酌をとらせてをれり。波の爲に遥かの洋中へとられしと思ひし汐汲桶も、二つながら那所にあり。又吉香が首級なりしと見しも、錦を以て作りし括枕なりければ、あな淺ましと駭きて、茫然たる許りなり。當時雲平は微笑みながら、蘭葉に向ひ「汝今夢の裏に、夫に會せしと見しは、皆我が幻術のなす所にして、奈何にいなむとも我が心にしたがはしめんこと、俗の物をさぐるがごとしといへども、それにては面白からざるによつて、汝が心のとけて眞實をかたむけて、枕席をすゝむるを俟つ事、これ又戀路の娯しみなり。疾く志をあらためて、閨の伽をなすべし。」と、詞を和めていひきこゆるに、蘭葉はとかうの應へなく、潸然として涙雨の如し。大王この行狀を見て大きに怒り「吾斯くまで情をもつて汝を口說くに、汝却つて無情なるは何事ぞや。落花心あれば流水又情あり、人われに強面ければ、吾また人につらしとやらん。今より第三日を限りて、從ふとも從はざるとも、心を究めて應答せよ。倘し愈心に從はじとならば、千尋の海原にしづめて、鮫魚の腹を肥すべし。」とて、小賊に命じて、蘭葉を一つの岩窟の裏に、高手小手に縛めてつながしむ。抑も此の岩窟は人を屠る所にして、枯骨累累として、臭氣鼻をうがつ。或は雲平が寵おとろへし女、又は人膽を奪らんとて、其の沽人を俟つ人なんど、居所の羊にことならず。今にも命を失はれんかと、易き心もなく、秋の夕に弱りゆく、蟲の

音に彷彿として、陰々啾々と更に冥途の如し。其處は愛に繋がれて、魂を失ひ胸を冷し、如何にせんと躊躇しが、信と云ふ魂を定め、「這の上にも生ながら死なんとせば、かへつて恥かしの渇ゑべし。速かに舌を嚙みきつて、死なんにしかず」と吾に問ひ、吾に答へて數回、佛の御名を唱へ、瞑目て居たり。既にかうよと見えけるに、忽地一個の老翁は出で、其處に向ひて「御身何なれば、やよ何ぞ給ふ事なかれ。文王は羑里に囚はれ、孔子は陳蔡に窮しみられ給ふ、是れ天命の然らしむるところにして、人力の及ぶ所にあらず。暫く其の運を待ちたまはば、再び花咲く春に逢ひ給ふ事あるべし、死は一時にして易く、生は難しといふ事を忘れ給ふか。抑も然の六足らず御身方にたゞ給ひし賺へれば、細り給ふたけれど、兄君左衛門稲士は、大義に於て受諾ひ、手にかけ、其の左右運平ら将も部下の悪者等、謀て十人の者を殺し、其の身も腹かき切つて相果て給ひぬ。亦來と共の為に給ひし吉賀稲士も、討に遠の世にましませば、必ずしも短氣を起し給ふべからず。故宮部入王と同國の郡を止そ世を忍ぶ假名にして、実は前に安達藤九郎盛長ぬも、繋人に向ひ給ひし室平四郎重職が、實は弟方の面りたまひたる、其の白旗も、彼が部下頭八なる者に守付けて盗ませ、吾が腕力をもて常に腰をはなさず、其の余の如家の老臣阿漕平太左衛門は、頭八の為に害され給ひたり。吾れは御身吉賀上館を忍び出で給ひたるぞ、嗚呼是れ一つ夜の星霜なれば、當陣の思ひも叶はぬ時を得せし、全く

吉香が業なめりと、平二はじめ思ひ居れば、彼の刀を奪ひかへし給はずしては、吉香どのの濡衣をいつかは乾しあへんや。儞這の岩窟にとらへられ給ひしこそ僥倖、假に從ふさまにもてなし、彼の銘劍を奪ひかへし給へかし。」と、掌をさすがごとく說き示せば、薗葉は初めて兄が最期、平太左衛門が横死の蹺蹊、白鳩丸が紛失の由を聞きて、驚くことおほかたならず。吉香が未だ此の世にありといふに、且哀しみ且歡びしが、たちまち思ふやう、是れも亦岩窟大王が妖術にして、妾が心を惑はしむる計策にはあらざるや、と疑うて、更に答へをもなさざりしに、彼の翁又いへらく、「儞今吾が告ぐる事を、雲平が幻術にやと不審しみ給ふべけれど、全く左にあらず。吾寔は人間ならず、鳴戸家の舊臣たりし細師が浦の賢兵衛が後園に、住居する所の三助狐とよべる、幾歲經りし老狐なり。過年白波雲平が爲に、吾が持たりし媚珠を奪ひとられ、さまぐ\誑きて取りかへさんとせしかども、渠が強勇に立ち寄りがたく、是れまで默止せしが、渠今は玉芝道人の妖術を學び得たるのみか、白鳩丸の一腰を帶するがゆゑに、銘劍の威德に恐れて、彌もつて立ち寄る事あたはず。彼の一腰だになきときは、譬へ蝦蟇の術を行ふとも、渠も邪術なれば恐るゝにたらず。儞何卒渠に近より、白鳩丸を奪ひ返し給はるべしと教ふるにぞ、薗葉は委細承諾しけるよしを應へければ、老翁が姿は其の儘消え失せぬ。都て老翁が姿も、這の兩個が物語も、傍の人の目にも見えず、薗葉が目にのみ見えけるとなり。斯く

て其の次の日、食物を持ち來りし小賊に向ひ「これまでの失禮を詫びて、大王の御心に從ふべきあきた、命を助け給はるべし。」といひければ、小賊は怡び早速期此々の由を雲本に告げければ、雲本は日頃の望みたりぬとて、頓に阿菊を招きよせ、淸らかなる衣服を着せかへ、御前を導ひて座を取りあはさしなどするに、天然の美質あらはれ、夜光玉人の手を經たるが如く、又太眞が驪山の溫泉に浴したるに異ならず。雲の行雲に雲本は、蛙の鬼を解ふるも覺えず、忽地圓なる眼を細めてにたにたと笑に見やり、怡ぶ事大かたならず。小賊に命じて山海の珍味を調進さして、大杯を傾くるに、阿菊は又意中に物あれば、頻りに酒を勸じ、杯をとりて讀み飮むにぞ、雲本はいたく沈醉して、眼を睡むくと更に起つ精神も見えず、阿菊が手を牽つて閨に入らんとするに、彼の白鳩丸の一振阿菊が側に阿菊連に鳥鶴を見て、「君何とて閨房に入り給ふまで刀を帶し給ふや。妾深閨に成長るのみならず、稚幼稚き頃よりの臆病の病ありて、刀劍を帶せし人の邊へよる時は、必ず其の精おこる。倚し腕刀を遠く帳外へ置き給はずば、如何に宣ふとも從ふまじ。」と、賢しやかに南ふるにぞ、雲本は聞くとなく阿菊が艶色をめづるものから、日頃の嗜みを忘れ、遂に白鳩丸を屏風の外に置き、阿菊を誘うて帳中に入りけるが、十分の醉ひを發し、忽地仰様に倒れ臥して、鼾雷の如し。阿菊は這の體を見て大きに歡び、竊かに床を脫けいでて、屏風の外にある銘劍を盜みとり、岩窟を遁れいで、濱邊をさして迪りし

に、三助狐が通力にや、狐火所々に燃え出で、晝を欺くが如くなるにぞ、斜ならず怡び、道を覓めて走り行くに、後の方より雲平は、阿修羅王の荒れたる勢ひにて追蒐けきたるに、蘭葉は濱邊へ走りつき、兎見れば船一艘もなかりければ、左やせん右やせんと、千々に心を碎く内に、既に雲平間近くなりければ、今は是れまでと、汀へざんぶと飛び込めば、誤りて太刀を海底へ落し、浮いつ沈みつ流れ行くに、誰とはしらず蘭葉が襟元を取つて、引き上ぐる樣に覺えて、漸て一艘の苫船に助け乘せられて、四下を視回すに、大勢の人立ちよりて、介抱する中に、一個の法師ありて、蘭葉が傍に立ちよりて、「何所いかなる御方にて、如何なる故ありて海中へ沈み給ひしや。」と、最懇に尋ぬるに、蘭葉は涙ながら衆人に向ひていへらく、「妾は原鎌倉の産まれなるが、幸なくて人買人の爲に勾引され、所所方々の遊君長に賣り遞與されしかど、貞操を守りて遊君になる事を好まず。よりて何處の所からも押し歸されし故、彼の勾引動八といふ者、這の岸窟に住居する、白波雲平とよべる盜賊の許に賣られし故、漸うの事にて其處を遁れ出でしが、跡より彼の雲平が追蒐けるに爲方なく、海底へ沈み侍りしなり。」と、聽いて耳を欹てて、「何鎌倉の産まれとや。」と、傍に立ち寄り克く〳〵見て大きに驚き、「主君橘内君の妹、蘭葉君に在さずや。」と、いふ顏を見れば是れ別人にあらず、袖師が浦の賢兵衞にてありければ、「こは〳〵いかに。」と呆れはてて、更に言もなかりける。當時賢兵衞は、定めし深き仔

歸るべしと思ひ、[illegible]の人の聞かん事の恐れ[illegible]、竊かに[illegible]

く、一旦[illegible]より[illegible]者なるが、[illegible]て、何とかして[illegible]

り、[illegible]、色々[illegible]を[illegible]が、不[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

閩清、浦の邊へうつり住みしのち、平二は漁夫となりて、其の日を[illegible]

が往方を探し留め、銘劍の在家を尋ぬるに、刈藻は月滿ちて易々と女兒を產み落し、是れを磯兒と號け、寵愛限りなきにつけても、昔の身にしあらば、おちや乳人と冊かせ、荒き風だに當てまじきに、今は鬱悒き埴生の住居、筵屏風の蝶つがひ、曲りなりには屈めども、寒さを凌ぐたつきにも、ならぬ苫屋のやせ世帶、涙の乾く暇もなく、泣き暮すこそ哀れなり。或日平二は漁りに出でて還るさ、一個の木像を攜へて來りければ、刈藻は怪しみて其の故をとふに、平二次盛語りていへらく、「吾が主君鳴戶の先祖、鳴戶阿波五郎芳嗣胤、自ら此像を彫み給ひしを、彼の細師が浦の賢兵衛が祖父たる、賢太夫廣有といふ人に賜ひたりければ、賢兵衛これを貴び、在すが如く仕へしかば、鳴戶の家はいふも更なり、其の身にさへ危き事ある時は、件の木像全身に汗を流して、其の凶變を告ぐるよし聞ける事あり。今日しも網にいと重やかなる物のかゝりしゆゑ、巨魚ならむと悦びて引き上げしに、案に違ひて這の木像なり。吾儕等故鄕を離るゝ折節まで、賢兵衛大切に守り奉りし靈像を、奈何なる故ありて海へ漂はせしや、氣づかはしきの第一なり。加之遠き相州より、はるけき這の伊勢の浦邊まで流れきたり、人も多かるに鳴戶家の臣たる、吾が網にかゝるといふは、最不審しき事ならずや。倘しや賢兵衛親子が身の上に、凶事ありしにはあらざるやと、思へばこれも心魂にかゝれり、何は兎もあれ主君の御先祖の木像、疎かにすべきにあらず。」とて、棚の隅の塵うち拂ひつゝ、これを据ゑ置き、

來世にも[illegible]の由を聞いたから、[illegible]ずか[illegible]住一[illegible]去る秋に來世に、[illegible]門に[illegible]に別れ、[illegible]
こは住を別れ、夜と云ふ晝と云はず歎きかなしみしが、終に兩眼を泣きつぶし、更に闇々暗々と日下、
聞かうしなければ、平二は又一所の豐富を期して、[illegible]しきなかにも藥師をまねき、こと[illegible]治
療を盡すといへども、敢て二つ験だになかりければ、痛く愁へて、何卒これを癒すべき妙藥もがなと
醫師と[illegible]にも[illegible]ひしに、[illegible]を傾けて考へつゝ、平二に[illegible]ひいへりけるは二[illegible]の眼を[illegible]
しこ[illegible]人、日[illegible]の奇藥[illegible]でこれを用ゐる時は、萬に一つも過る事なし。されど得がたき品な
れば、語りおくもいとも益なきことゝいふに、平二は膝を進めて、其の品は如何なる藥にて候ぞ、其
藥を[illegible]のが聞きて、其の品を聞かざるは心にかゝれり、何卒聞かせ給はれかしといふに、藥
の醫師は[illegible]いて、こそ[illegible]は語り聞かすべけれど、[illegible]眼の爲に第一の藥といふは眞珠なり、眞珠の[illegible]
論にて、所謂眞珠と[illegible]を吐く[illegible]とき、[illegible]幾年[illegible]の[illegible]の珠こそ[illegible]、[illegible]も[illegible]れを得るなれば、
其の黄金に[illegible]ことなれど、[illegible]得がたき品なれ、[illegible]は[illegible]國に[illegible]、[illegible]と見え
て、[illegible]の[illegible]には[illegible]、彼の海[illegible]ありとぞ、其の[illegible]の在る所は、[illegible]に至れば[illegible]
とのん、[illegible]の眞[illegible]に見えはべれど、未だこ[illegible]たる事なし、おかれば[illegible]
語るとも詮なしといひしは愛の事なり[illegible]、[illegible]て[illegible]。[illegible]平二は[illegible]

にもして床世の眼病を愈さんと、神にねぎ佛に祈りて、さまぐ\心を盡せども、更に其の甲斐なかりけるとぞ。そも這の阿漕が浦は、常に殺生禁斷なり。そはいかなる故にかといふに、伊勢兩宮の祭禮には、干鯛をもて御饌とせり。これを御幣鯛あるはゆふげ鯛といふ。ゆふげ鯛は夕飯鯛か、又は訛りていぶき鯛ともいふよし。鯛は八十八夜の頃にいたれば、所々の海に浮き上る、是れを九州にては浮鯛といふ。されども海中普く浮くものにあらず、國中一二箇所にかぎりて會まる。此の兩宮ちかき海も多しといへども、阿漕が浦を以て鯛の會まる所とす。よりて常には他獵を禁む、倘し制禁を犯して、密かに網をくだすもののある時は、生きながら簀づけの刑に行ふ事、所の風俗なり。しかるに此の程阿漕が浦の沖中に、夜々光りもののありと、人毎に言ひ罵るに、一犬形に吼えて萬犬聲に吼ゆる諺の如く、「或は世に稀なる寶物の、海へ沈みしならん。」といふもあれば、「又は尊き御佛の靈像、守屋が如き惡人の爲に、海中へ入れられ給ひしならん。」などいふうはさ、囂々として街に滿ち／＼たり。平二是れを聞いて想へらく、此の程阿漕が洋中に光赫々として、あたりを照らすといへば、日外醫師が辭を思ひあはするに、是れ全く大蛤なるべし。然らんにはその光明のする所へ網を下さば、眞珠を得る事もやと思へど、彼の浦は殺生禁斷なれば、倘しあらはるれば、ふしづけの刑に行はるべきと、左思右想と案じ煩ひけれど、時の用には鼻もそぐと諺の如く、深更に至りて網を下さば、知るもの

ふあるべからず、元より私欲の為にこれとにはあらず、忠義の為にする所なれば、[illegible]
みなたれとまにてもれ、深夜におよび網をおろして、こゝろおぼやと心をまだ、一夜[illegible]に[illegible]し
所へ、網を打つに甚く上卿の聞え、簑笠に面を包む、網を携へ例の[illegible]に[illegible]、[illegible]こ
出し、見れば卿に上の噂と聞しにたがはず、海中より光明赫々として、四下[illegible]
[illegible]あるもの、[illegible]て[illegible]へして、[illegible]に、[illegible]となして[illegible]心に[illegible]、[illegible]
[illegible]引きけるに案に相違して、是れ錦の袋に入れし剣なり。平二是の[illegible]、大きに驚き、思ひ
に是れ名剣の類ひなるべしと、袋を開きて改めなどし、[illegible]おいへ[illegible]、[illegible]
[illegible]、[illegible]日[illegible]へ忍びて、[illegible]、[illegible]の所に[illegible]、[illegible]
のなるべし。我が年来の誠忠をあはれみて、神の我に是れを授け給ひしならんと悦び、[illegible]
せ、急ぎ我が家へ帰らんとす。其時天色朦朧として、闇夜に異ならず。天の助へと平二は[illegible]
の[illegible]に[illegible]し、浜辺をたどりに向うのかたより、これも漁夫とおぼしく、同じく簑笠に面をかくしし[illegible]
の[illegible]、其処に平二と摺ちがふに、怪しくや思ひけん、[illegible]る笠に手をかけて[illegible]
じと争ふほどに、あなたへ引き、こなたへ引く、[illegible]に[illegible]、[illegible]
の[illegible]、又もや[illegible]に手をかくるに、平二は[illegible]の[illegible]、[illegible]出[illegible]の[illegible]、平二は[illegible]、

至りて吾が家へかへり、竊かに妻刈藻に云々の由を告ぐるに、刈藻は殺生禁斷の場に網を打ちしと聞き、一たびは驚き、又不慮く寶劍手に入りしといふに、一たびは怡びながら、途中にて何者にか出で會ひて、蓑笠をとられしと聞きて、更に易き心もなく、奈何はせんと案じに胸を痛めける。扨も主平二次盛は、昨夜の勞れに一間にうち入りて、とろ／＼と眠まんとするに、刈藻は今年產まれし礒兒を肌に脊負ひつゝ、濡れたる網を干さんとて門邊に彳めるに、早くも午の貝ふく頃になりつゝ浩かる所に月代は熊の毛の如く延びて眼中するどく、身には海松のごとき單衣を、著したる上に蓑笠を戴き、右の手を懷にせし、怪しげなる大漢子、刈藻が邊近く步みより、左の手して笠を拿り、小腰をかゞめていへらく、「漁夫平二どのゝ家は何方にや」と訪ふに、刈藻は一向心得ぬながら、彼の大漢子に向ひ、「平二といふは則ち妾が夫にして、これなるはすなはち吾が家なり。[illegible]は何方より何等の用事ありて、來り給ふや」といふを聞いて彼の大漢子、「否とよ吾儕は頑八と呼べるものなるが、平二主に得りたき物ありて、故意々／＼爰に來りしなり。宿に居合はせ給はゞ、苦しからぬ者なれば逢はし給へ」と聞いて刈藻は眉を顰め、「夫は卽今宿にあらねど、[illegible]が得らんとのたまふものは、如何なるものかは知りはべらねど、朝夕の煙さへ幽けくくらす身にしあれば、いかでか物を需むることを得べき、かつ其の得らんと宣ふ物は、何物なるや」と問ふに、彼の漢子は是れを聞いて、再び刈藻に向ひ、「是れは若

國の黄金になるものなれば、縱し讃岐の國内へ持て行なば、[illegible]に價ひて請ふ者もありなんと、都の市にな

くてかなはぬ物なれば、[illegible]といふとも仁心なうて、[illegible]へ獻じたり、かつ[illegible]に入れて價をと語ふ

べし。」といふに、刈藻は心中に、「昔しや眞珠とやらんを賣らんとて、取りしにはあらざるや」と思ひ

惑ひ、「さらば我が家に入りて兎も角も、委しく聞きはべりてん。」とて、頑なる漁夫を家内に入れ、座定ま

れば漁夫は四下を見回し、聲を低めていへらく、「吾儕が售らんといふ品は、[illegible]の稱なるが、[illegible]

これなる[illegible]、漁夫のなくて叶はぬ物、沽ひ置き給へ。」といふを聞いて、刈藻は呵々と打笑ひ、

「售らん〳〵と宣ふ故、彼の竹取の翁が娘の望みたりし、火鼠の皮衣、或は玉の枝、龍の頸のたまな

んど、得がたき品にやと思ひしに、隱簑隱笠とやらんかはしらねど、さまでことかはりて聞ゆる品

ともあらぬを、幾くの價にて售り給ふ。」と、詰り問はれて漁夫は[illegible]にあのこ

は何の益にもあらねど、夏の夜にあらん人には、七寶高價の寶にもいやまさんて、[illegible]なるこ

れを得つるは當國の阿漕が浦の濱邊なり。彼所の浦は昔より、漁ることを禁ずるを、[illegible]網を

おろしたるは、此の程ヶ所の沖中に、夜な〳〵光り輝くは、世にも稀なる靈寶か、又は[illegible]など

の、海底に沈みあるに疑ひなしとは、人毎にいふめれど、從來殺生禁斷の場所へ網をおろしなば、

重き刑に行はれん事を恐れて、誰も言ひ罵るのみにて、網をおろす者もなし。されば昨夕闇にまぎ

彼の沖中に網をおろし、奈何なる物を得つるかはしらねど、忽地海中の光は休みて、一個の漁夫船を汀に漕ぎ寄せて、蓑笠に面を打覆ひ、立ち歸らんとする體に、吾儕其處へ行きかゝり、怪しと思ひてその笠に、手をかけんとする所を、彼の漢子は引きはづして、逃げんとするを、尙やらじとゞめしに、蓑笠を殘して、何處へか逃げ行きたり。これを持ち歸り燈下によく〳〵あらたむるに、笠のうちにあり〳〵と、阿漕平二の數ヶ字あり。よりて故意もて來り侍らんといふは、我が無越情心のなす業なり。價は則ち小判で百兩、半錢もまからぬ現金賣、かひ給はずば外へ售らん。主公が留守とあるならば、内儀が留めた餘力金にて、かひ給はずばなるまじ。」と、星をさされて刈藻は何と、應へんすべもなく〳〵に、涙先だつ許りなり。頑八は刈藻が躊躇する爲體を見て、もどかしとや思ひけん、物をもいはずずんと立つて、蓑笠を携へて、外の方へ走り去らんとするに、刈藻は慌忙きてこれをとゞめ「こは血相をかへて何方へ、行き給ふや。」といふに、頑八は阿々と笑ひ「莚屏風に寐胡座一枚、あらはれたる此の貧家に、百兩の事は扨おきつ、錢百だに有りとしも見えず、斯かる人にかゝづらひて、可惜口に風をひかせんより、懸守の館へ持ち行きて、右から左猿が餅、賣らんより外分別なし。其處はなしね。」と突き飛ばし、行かんとするを一間より、平二は出でて頑八に對ひ「吾儕今外より還り來り、背戸より入つて最前より、一五一十の動靜は委しく聞きつ。奈何にも其の蓑笠、百金にて覓

むべし、縦令百両貴しくとも、暫時の猶豫にしたて給はゞ、まゝ黄金十束の元あるに、暮六つの鐘を打つまで、狭き納戸の内にいつて、娘を待たせ給へと聞いて、嶺八は面をてらし、暫時る品を賣買するに、暫時にわれ待つといふ事はあらねど、何處の浦にても問ひに出せ、物は是なれば、すこしの間は待つてもよけれ、損も儲けも薄くあるならば、眞の事をしに聞かせ、あいて盗賊に打たせ、鐘にかふるなり、福島殿へ給ふことも言ふ體の事は、僧に折し解、暇ぬ事のやりてまとふると、君と前と家へて、眼の一間に入りにける。司馬は夏と傍へ立ち寄り、「今來かし頭へとやら、人が面魂、只者ならず上見ゆるに、彼いつ何れ下を言にこし胸を脊へ、靑山に心得をにし、主に告申し、自らの面を探ひ、問曲の膝の間に衿の落しけいり、御よ其時の盗賊に似たらぬか、よくも心をつけて見給へ」と、いふに皆ニ打ち聞きて、皆も面をあげ互に、われも暮六つまで時刻をのばせしは、其の前後を考へんと思へばなり。さては今一日のうちに金を持て來らば、必ず其の盗賊なるべし、彼れ盗人ならば何とかすべし。兩の間へうかがひ、龍の頭で身ても何でもかなはぬ時は、彼の虎の威を借りて身をもかくさんとする、のがれさる三十六計の中逃るを上計とすとやらん。彼人の詞は此の間なり、必ず此上に何にか謀ありなん」と、夫婦額をあはせて祝ひて、頼める外の方に人の來る音はひとして、撞しく戸口の戸を引開くる者あり。夫婦は驚きつこれを見れば、過の夕ぐれの盗賊に似たるもの

なり。當時脚六は平二に向ひいへらく、予て俺等も知り給ふ如く、阿漕が浦は常に漁ることをかたく禁ず。倘しあやまつて彼處へ網をくだすものある時は、生きながら簀卷の刑に行ふ事所の風俗なり。それを知りつゝ、何者か、昨夜網をおろせりとぞ。是れによりて縣令より、國中の漁師をめして吟味し給はんとなり。俺も漁夫をもて世を渡りたまへば、疾く縣令の館へいたり給へ。是れ村長どのの云付なり。」と、説き終りて又いそがはしく走り去りぬ。

阿古義物語後編卷之一 終

後編　巻之二

第三齣　木偶代の危難

平二は邑の水主が告げを聞くに、心中大きに驚くと雖も、何がこの時は恥つて容しめもせんと、別
妻に向ひていへらく、「吾儕昨夜の緒を図るものは、良に頑八のみなるらんと思ひしに、豈計らんや
天網る貫知るの所の一番、早くも誰か鯨台の館に告げたるなるべし。さばかり証拠なけれ
ば、言ひ解くに何の難き事かあるらん。若殿守の邸内に到り、頓に言を聞えて縄を掛けて一番、必ず彼の
頑八とやらんを、走らし捕ふなさんと値言すて、平二は門を立ち出で、馳せて館に到り、百姓直事
を案じ煩ひ、ずたはさま思ひけるなし、胸をいためて伏し臥たる、夜更る所しも…の方に…
げて、「爰に哀れなとふらし候、若蔵の判官政氏が、忘れたるの御兄弟、…国に名ある…、…は
夫に買ひとられ、聞かも聞けば下…、姉は鴻渡、弟は、…のかへたるゝ。…るはとき
に、昔の頑奉ら鎌倉にて行はるゝ、…の…にして、…なるに、その…
何とやらん、聞えたる寓に聞えければ、…心に、…の聞えは…ければ、是れ…を…
吾が子平作の有智部にてありければ、…はあれにもあられを…て、ゝ不…部ふ、と

いはんとせしが、俟て誓し、吾が夫制禁を犯し、阿漕が浦へ網をおろし給ひたれば、今にもあれいかなる罰を蒙らんもはかり難し。殊更奥には頑八とやらんいふ悪漢も居れば、愁ひに吾が子といはば、却つて平作がためあしからんと、故意と刈藻は餘所々々しく、作り聲していへらく「今語りたまひしは、三莊太夫の、濱邊の段とやらんと聞きつ。妾鎌倉へいたりし時、これを聞きて面白く覺えしが、斯かる邊鄙にはさせる風流の伎をたしむ人なく、何卒今一度聞きたきものと思ひしが、年來の望み足りて歡ばしき事限りなし。是れを御に參らせんに、草鞋錢の足しになりとし給へ。」と、小朱提一箇取りいだして與ふれば、布留都は首を打搖りて、其の朱提を手にだに取らず、「いかでちとばかりの説經を語りしとて、かばかりの金を賜はらんは最多かり。從來其の業拙くして、聞き苦しき事のみならんに、何條斯かる惠みを受けんや。只一錢か二錢の孔方を賜ひて可なり。加之金といふものは、國をいづる砌より財布に入れて多く貯へたり、これ見給へ。」といひかけて、首にかけたる紐を拿らんとするを、刈藻は慌てて是れを止め、「道中には胡麻の蠅とか稱ふる盜賊多く、年長けたる人さへ貯へある者と見れば、欺きて取ると聞くに、況して幼稚き盲人の御、貯へありとしるならば、やはか其の儘通すべき。必ず／＼此の後金ありなんどといひ給ふな。見參らすれば這の邊の產れとも見えぬが、何處の產れにて、何方へ志して行きたまふや。思ふに都へ官位とやらんを、とりに登り給ふか。」

上、態とさしも山家ぶりして問ひぬれば、古市は見えぬ目をしばたゝき、優しくも問ひ給ふものかな、吾儕は元鎌倉の生れなるが、仔細ありて父母も故郷も離れ、行方定めぬ旅路におはす、吾儕はさる師の許に居たりしが、這の程其の師匠なる人、風の心地と打臥して、遂に亡せ給ひしかば、頼む木の下陰も失せて、故郷の住居もならぬ身となりて、この身となり、斯かる離散は世の常なれど、一度は見ばやと、女子にて其処に止まりて、思ひ出づる事ははて、何時にもかうして居給ふかと、こゝは永く住みなれたる、と鮭を肴へ酒を飲はせ、又は一夜を明かする情深きもあり、或は冷たき人に遇ふときは、宮目より、口さがなく罵られ、追ひ立てらるゝ事もあり、いはでも臭し、覚ゆるは、所々の出入ある、宿りかさねて、北空や南小路を、かり、松吹く風や、獣の、叫ぶる音に、冷に驚き、ては、石なご印地打などの、戯れごとして遊ぶなるに、吾儕はいかなる因果にて、盲目となるのみならずして、父母に生き別れ、兄弟と離れて、師匠には死に別れ、知らぬ旅路に彷徨ひて、斯くの艱苦をうくることは、と、悲しき事と、思へば、

る心はなし、淵川へなど身を投げて、死なんと思ふはいくそたびぞ。さはいへ吾儕が死んだりと、聞き給ひなばさぞかしに、歎き給ふなるべしと、心よわくて死ぬにも死なれず、殊に嬶さまは持病もちなるに、只ならぬ身にてありしが、産は生死の境とやら、儻し萬一の事ありて、今頃は黄泉の客となりはし給はぬか。斯く國所を隔て、音信不通に暮すなれば、命日忌日も知らずして、精進さへも得せいで、過す事の[illegible]ましやこと、現在己が母ごとも、しらぬが實鬼々しく、忠義の爲とはいひながら、まだいはけなき稚兒を、棄てて遁けき此の國に、住ひするとも子はしらで、親をしたうて盲目の、杖一本を力とし、尋ね來りし孝心を、ほむる事さへならぬとは、奈何なる過去の業因ぞと、門の柱にしがみつき、聲をも立てず泣きしづむ。動靜に布留都首をかたげ「最前より何とやら、聞き馴れたることき聲音なりと思ひしに、吾が身の上を聞きて歎き給ふは、嬶さまにてはあらぬか」と、いふを聞いて刈藻はおどろき「此の兒は何事をかいふ、妾も數ふれば丁ど儕と、同じ年ばいなる子のはべるが、仔細ありて今は違に音耗もせず、疎々しく暮すなれば、方今の噂も餘所事のやうには聞かず、思はずなみだをこぼせしなり。そを母ならんなどとはいと無禮なり、然早々々爰を出で行きねこと、さもあらけなく言ひはなてば、布留都はしやくりあげつゝ「いかなる宿世の契りにや、今初めて逢ひまゐらせし御身ながら、何とやらん嬶さまのやうに思はれて、漫に愛がはなれともなきは最いぶかしこと、

蟲がしらする血筋の縁、母達はこれを聞くよりも、いかに忠義といひながら、斯くまで親を慕ふ子に現在對ひあひながらも、名乘らでかへすといふはしらず、心弱くて叶はじと、再び武雄を去らしめて、良人の留守に斯かる無益の絆をなさしは我が誤りなり、且苦しき[illegible]同じことなら後方に、殊更良人は物堅き性なれば、御身が爲にもよろしからず。老早々かへり給へかしと、[illegible]たつれば武雄は、泣く泣く別れしもの、[illegible]長居すれば、母の歎きもますと聞いては、片時もとゞまり難しと、暇を[illegible]し給へかし、[illegible]もや尋ね進らすべし、叔父さまや嫂さまの御行方のしれぬ時に、[illegible]、心の[illegible]み、[illegible]見送りて、今にも良人の還りなば、この事を明白に告げ[illegible]か、否々愁ひ告ぐるなら、[illegible]心強くとも、親子の愛に溺れ給ひて、未練な[illegible]事よ、水の泡となりはせなんと、[illegible]し、夜の悪漢の頭八は、[illegible]軽業が[illegible]泣きもし笑ひもしつるにど、[illegible]頭八は、[illegible]心の中に思ふやう、這[illegible]金多く貯へしといふからは、定めて官金とやらんなるべし、[illegible]て奪ひ取らんと、背戸の方より抜けいでて、裾引[illegible]

事風前の燈の如し。夫れは扨おき平二は、縣令の衙内に至り、漸う言ひぬけて立ち歸るを、刈藻は俟ち兼ねて平二に向ひ、布留都が來りし一五一十を語り、故意と親子ともなのらず歸せしといふに、平二は聞くより「扨は布留都が來りしとな、師にも別れ父母を慕ひ、遙々尋ね吟行ふを、其の儘にして歸せしは無情なり。名乘るとも何の障りかあらん、遠くは往かじ追付いて。」と、既に蒐け出さんとする所に、縣令の組子等、手々に十手打搖りておつ取りまき「最前故意と還せしは、心を許さしめんがためなればなり。禁制の地所と知りながら、網をおろせし漁夫の平二、訴人あつて明白なり。掟通り簀卷の刑に行ふべし。」と、いひつゝ大勢立ちかゝり、手どり足どり縛むるに、刈藻は悲しくて、「喃俟つて。」と、取りつきすがるを突き退け蹴退け、曳き立ててこそ出でて行く。這の騷動に床世は一間を、探りいでつゝ刈藻に向ひ、「何事なるか大勢の人音、氣遣はしや。」とたづぬれば、刈藻は涙の聲うるみ、「床世さま聞いてたべ、定は夫平二、あなたの御目を愈すには、なくてかなはぬ眞珠とやら、阿漕が浦に光明の、さすにもしやと禁斷と、知りつゝ網を下せしに、それにはあらで御家の寶、白鳩丸の寶劍を、得つるは却つて僥倖と、よろこぶまもなく、縣令へ訴へし故、今組子の大勢が、夫平二どのをば、高手にいましめて連れ行きぬ。」と、聞くより床世も打驚き、「こは奈何にせん哀しやな、橘内には死に別れ、胡葉には生き別れ、力にしたる平二さへ、妾が病を治さんと、よしなきことより其

の弟子に、類なき箭術の、とりわけ遠くに何事を一と、身を賭けよしと教えしのみ、第二を報を
の新しうた、納戸の裏に半二を堅く閉籠らしと尋ね來れば、それより去らず夫なれば、以前に異まこ
はげたち一令縣令の組子等に吩せてわが行衛をせしと、思ひたる居からの、前の裏にありしとこ
と、類は爰すに倚まゐり、己身反に連び來て、爰であらばまるものなるかいと、前に於聞けば流は答ず
こ、不幸にかはらる不二の行衛、明聴は何のたかふて一輪にる組子等に問ぬけ、間の見物あり
けれ乳育ひしとそれを、こは近に断ず不審しことといへば、下二より引を暮めつる以前といふ、今昔を
組子の等を建置行するとは、屋の四いでこしと、新任は弱く入るれをりしと、前日の裏に奉
しるし言ひしかは、組子を連れる行うたに、身をともなく中とるしゆ犬塚の本物、早く罷ま申計
給ふに、はじめてむづきたりと、併しつ木像の身代りなんどに、たたせ給ふもしるべからず。と、一冊
の奥に隱ける身で、見れば不思議や木像の、安置したる所になし。扨こそ吾が身代りにたたせ給ひし
ものならん、こは勿體なし系しこと、天地を拜しまうこどいふ折柄に、庭に外の方聞了しきは、
目今の組子がある身かしとそのしきに、家來は返事を聞にむると、納戸の裏にかこのた、縣令の組子
等は、曩置を拘へ來り、「不二をいだせ」くことひいしるにぞ、明聴は組子こうもむかひ、「吾が不二
に隱し候か、請めて連れ行き給へ。」其の他にいかで不二のあるべきやといへば、組子は猶偵あ

らく、「汝等はいかなる術をや得つる、最前引き立て行きし平二は、木にて彫みし木偶なり」。そは如何にして知れりといふに、海へ沈めにかけたりしに、簀巻海を浮き歩くに、不審しと引きあげて、簀巻をとけば木偶なり。怪しき事はかぎりなけれど、故こそあらめと簀巻のまゝ、又もや是へもちかへせし。これ見給へ」といひかけて、苞を解けばこは如何に、木像ならぬ真の平次、水に濡れたる姿の儘、茫然として轉びいづれば、「暗丈人よう無事で」と、すがる刑藻をとつて突き退け、「拙道には無拠仙人とやらんが術をや學べる。最前苞をほどきしに、平二にあらぬ木像なりしに、今又見れば真の平二、それなれば遁されず」と、大勢よつて原のごとく、簀巻にしつゝ肩にかけ、濱邊をさして急ぎ行く。跡見送りて納戸より、出づる平二は一體分身、容貌より物ごしまで、露違はざる有様に、刑藻は再び驚きて、「傳へ聞く世には離魂病とて、一個の姿が二個となるも、なきにしもあらずとかや、それは病の業なるに、これはたそれには引きかへて、忠義の心魂を御先祖の、亡き霊力をそへ給ひて、命にかはらせ給ふとは、あら有り難や尊や」と、かなたこなたをふし拝めば、平二は感涙むせびあへず、一説に唐土の丁蘭といふ人は、幼くて親に孝心深かりしかば、母の死後其の姿を木もて刻み、朝夕これに仕ふること、在すがごとくなりけるが、丁蘭が妻木像をおろそかにせしかば、木像より血流れいでしとかや。この木像の汗を出して、凶変を告げ給ふも、和漢同日の談とやいはん。さ

はさりながら小子が如き[illegible]に、御先祖たる[illegible]、[illegible]
あり、[illegible]、[illegible]茫然として居たりけり。刈藻は[illegible]
[illegible]早く床[illegible]
しくべからず。老早々準備し給へ。」と、いそがし立つれば平二[illegible]頭き「[illegible]、去りな
がら[illegible]頑八が、[illegible]動をしらず顔して、居るは心得難し。」と、[illegible]
[illegible]と隈々を、索し覓むるといへ[illegible]最前[illegible]の組
子等[illegible]
[illegible]一刻も早く立ち退くべし」
と、[illegible]
に負ひ、おの〱笠を深くし吾が家を忍び出て、[illegible]

第四節　[illegible]

下[illegible]頑八は、[illegible]中に[illegible]あるは、世に[illegible]
一、[illegible]を下さばやと、夜に[illegible]て忍び行きしに、吾より先に一[illegible]をおろして、一物を引きあ

ぐるよと見えしに、忽地光休みて、船を岸に漕ぎ寄せ、走り去らんとするを遠目に見て、其の行くさきをさゝへ、蓑笠を奪ひとりしに、阿濃の平二とあり／＼としるしありければ、これを證據に平二が方へ入り込みしかど、從來貧家の事なれば、金のあるべうとも覺えず、一間のうちに佇つうちに、布留都が金を貯へたりといふを聞いて、官金ならんには百兩もあるべしと、跡を慕うて行きけるが、道や違ひけん頓には追さつかず、漸う四田の松原には追ひ付きぬ。頑八は物をもいはず後より、手を懷へさしいれ、財布の紐を取らんとするに、布留都はおどろき、兩の手にて懷をおさへ、「賊あり」と號べど、爰は人家に遠く、只兩邊巨樹森々たる松林なれば、松吹く風の音のみにして、更に往來もまれなれば、誰有つて出會ふものなし。布留都は涙の聲ふるはしつゝ、「吾儕が財布に入れしは、全く黄金には侍らず、些の心願に依りて、天照大神へ納めんとて、文錢若干を貯へおきたるなり、されば重やかには見ゆれど、黄金にはあらねば赦し給へ」と、又も透を見合はせて、逃げ出さんとするに頑八はいかり「汝いかほど巧を誑き逃げんとするとも、いかでか逃すべき。最前平二が家にて、多く金を貯へし由をいへりしを、物陰にて聞けり。疾くいださずは目に物見せん」と、息卷荒く罵るにぞ、布留都は怕れをのゝき、「恕し給へ／＼」とさけぶのみ、更に又も逃げんとするにぞ、頑八は段平物を拔きいだし、逃すひやうしに追つて、肩さき深く斬りこんだり。布留都は「阿」と叫びて

[illegible]せに、頓八に刀を捨てて「這は不意き殺生しつ。南無[illegible]
入れ、[illegible]に、[illegible]て、[illegible]
て、こよしなき骨を折りし事よ」と、彼の錢を傍の松の枝へ掛けつゝ、「[illegible]の盲目めが大神宮へ獻げんと
て、一念籠りし錢なれば、[illegible]執念にて蛇とやならん。あな[illegible]いへ大神宮へさゝげんより、
生きたる道の大神宮へさゝぐる時は、忽地神酒の代とかへて、[illegible]の社へ備へん。吾物學びたる
事はなけれど、去る博識人に聞けることあり、神とは鏡の[illegible]語にて、鏡は原來空虛の物にして、赤
き[illegible]ば赤くうつり、白き[illegible]を寫せば白くうつる、萬象うつり[illegible]の如し。されば神は心なり、
心は神にし[illegible]に[illegible]見れば、額を高くぬきあぐるは、華表の形なり、
さすれば眼は神[illegible]にて、[illegible]
見ゆるか、蟲の食みて穴こそあれ。又神[illegible]いまする道具あり。舌出といふ鼓あれば、腹太鼓てふ太鼓
あり、[illegible]にはあれど[illegible]といふ撥もあり。かゝる徳をかねそなへたる吾儕が身なれば、天照神に
も異なるべし、いざ神酒の[illegible]受納せん」と、[illegible]枝に懸けたる繋錢を、取らんとするに這は如何に、
五尺あまりの蛇と變じ、[illegible]を怒らし[illegible]の舌をいだし、頓八に飛びかゝらんず勢ひなるに、有繫の
頓八も駭然として[illegible]、慌てふためき倒けつ轉びつしながら、一二[illegible]の金を拾ひ取り、止めをもささ

すはふくに其の所を去り、再び平二が方へ還りて、裏の碓を窺ふに、更に寂寞として音なし「扨ははや風を喰らつて逃げ失せしか。」と、戸を蹴破つて入りて見るに、案に違はず人一個もなし。頑八這の爲體に爲方なく、すご〳〵と鈴鹿山の山寨へ立ち歸りしかど、影護ければ這の縡は吉香をはじめ同類の盜賊等にも告げず、そしらぬふりにて居たりける。却説阿漕平二は、虎口をまぬかれて妻子を倶し、大神宮へ參詣して、復讎の事を祈らばやと、凹田の松原にさし寛るに、人の呻喚く聲するにぞ「何者にや。」と立ち倚りて見るに、是れ平作の布留都にてありければ「こは〳〵如何に。」と驚き、耳に口をよせて「平作々々」と呼びければ、漸う心づきて「左のたまふは何れの御方にや。」と、さも苦しげに問ひければ、刈藻は涙せきあへず「妾は儞が尋ぬる母の刈藻なり、嚮者に名乘るべう思ひしかど、故ありて默止したり、爰に殿さま平二どの、又常世様も在すなり。何人が斯くなしたらしく殺せし事よ、其の敵は何處へ行きし、我夫早く仇を打つて給はれかし。」と、平二を搖り動かし、狂氣の如く泣きさけぶに、布留都は苦しきなかにも、兼てより戀しと思ひし父母と聞き、さぐりよつて母にひしと、抱きつきつゝ聲ふるはせて「最前おまへの所にて、吾儕が金を持つて居ると言ひしを、誰か聞いて居て歸おつかけて爰へ來り『金を出せ。』といふ故に、父母に回り逢うた時、貧苦の助けと此の年頃、方々へ月待日待に雇はれて、貰うた金をためた物、むざ〳〵と盜賊に、とらるゝが口惜しさ。

透を窺ひ合はせ走せんとしたれば、刀をぬいて虺をこのやうに斬り倒し、金を取つて行きしなり」と、聞いて甲二は戦慄し、一丈といひ十丈といひ、丈に排り、非業の最後をとぐるとは、如何なる前世の業因にや」と思ふに、我の罪業を持ち来りし亀八とやら、一国に在つて布留部がいひし事を聞き、跡を慕ひ来り殺害に及び、金を奪ひしものなるべし、左ある時は仇は亀八なり、遠からず探し出し、恨みを晴らし得さすべしと、云ひつゝ、件の松枝に、許多の金の懸り居るを見て、「是の金は如何なる故ぞ」ととふに、布留部答へて、「是は亡者が年来、伊勢大神宮へ献げんとて貯へし金なり。さては是亀八とやられが、其道の松枝に懸けおきしものならんか、それにても不思議なるは、金を奪ふ其ものゝ、なから、なぞて金を捨しおけるにや、思ふに亀八吾等が止めおくに怖ぢて、松が枝に大いなる蛇が在りて、蛙をめがけて飛びかゝるぞや、あな恐ろしとうち捨て、前途へ飛びて走り去りしと、思ひしを考ふれば、大神宮へ献げんと貯へし金を、奪ひとらんと悪計して、盗み去らんとせしゆゑ、神慮の冥罰にて亀が眼には、金が蛇と見えしものなるべしといひつゝ、息は絶えにける。人々は奇異の思ひをなし、冥罰にまよひしも其の神慮の、自然なるを感じける。斯くて甲二は遠近き郷人をかたらひて、一五一十をものがたり、布留部が死骸を、さるべき寺院へ葬り、泣く泣く其處を立ち出で、件の金をば布留部が心願の如く、伊勢大神宮へおさめ、尚復讐の事を祈ぎ、それよりとつてかへし、東海道を下りけ

る。這の事傳へ聞くもの、天照大神の威徳をあふぎ、これよりして彼の松を、錢掛松となづけける。今以て窪田の松原に、其の名をとゞむるはこの由來なりとかや。それは扨おき下總外川浦なる千騎が窟には、白波雲平が惡行日々つのり、驕奢月々に盛んなるものから、天既に其の罪を罰し給ふときや至りけん、不圖風の心地と打臥せしが、或夜夢の裏に、在りし沖津が姿髣髴と顯はれ、怒りの面色おそろしげに、雲平をはたと睨まへ、「汝もはや運命盡きたれば、三歳が中には打たるべし」といふに、雲平も同じく怒り、生きてあるうちだに吾に及ばざるに、いかで死して吾に敵たふの事あたはんや。疾く消えてなくなるべし」とて、枕邊にありし刀をとつて、切りはらはんとするに、五體すくみてはたらかず。こは口惜しと思ひけれど、只眼の動くのみ、如何ともせんすべなし。沖津は這の行樣を見て、さも快げに打笑み、吻とつく息は火焔となりしが、彼の火のうちに許多の蟇あらはれいで、雲平が左の肩先へくらひつきければ、大きに駭きはらひのけんとすれど、齒をもつて緊められたるが如く、少しも働くことあたはず。その痛みたへがたく、あな苦しやと號ぶ聲にて、目覺めて見れば是れ南柯の一夢なり。全身に冷汗を生じ、肉動き胸轟きて、なほ沖津が顏色目さきに殘れり。加之何とやらん、肩先いたきやうにおぼえければ、肌をぬぎてこれを見れば、夢の裏に見たるがごとく、肩先に喰ひ付きたる跡ありて、血流れ出でゝ高くはれあがりてありけれど、從來強氣の漢子たればこ

ととして、打捨てて置きけるが、式部に窘れたれど、猶も讎敵を討し平げて[illegible]、猶[illegible]

つものなければ、式部に醫師を招きて見するに、醫師は大きに驚きて[illegible]とあるは、素より難儀

難しといふべし。それより我が家に秘する所の奇方ありといへり。これに加へて[illegible]

それに得る時は、忽ち治せん事疑ひなし。これはいかなる、は其の一策、もとは[illegible]運

平これを聞きて[illegible]凡三百の散々財宝はいふも更なり、我が心にまかすべし[illegible]

たゞ[illegible]下と[illegible]心にまかすべし、王侯の富貴とて[illegible]

たる事あらんや。醫師これにこたへて、其の望めがたき事といふ外ならず、みとしのつきのひ三日に、うた

[illegible]、[illegible]に[illegible]合して[illegible]は、[illegible]に[illegible]

[illegible]これを[illegible]一[illegible]部下[illegible]、

[illegible]部下と[illegible]数[illegible]これは是の由を傳へ[illegible]、[illegible]

[illegible]なきにし[illegible]、[illegible]

[illegible]に[illegible]、[illegible]

諸共東海道の下り、下總國に渡り、[illegible]かしこに[illegible]市街に[illegible]

世は、此の頃打續きて、夢見の悪きに卜筮をさはんといふに、平[illegible]同じ、[illegible]

身の上の吉凶を問ふ。卜者且つ其の生年生月生日を聞く。床世答へて「妾は江の島辨財天の告子にて、巳年巳月巳日巳刻の誕生なり。」といふに、卜者つばらに聞きて箸をとり卦を敷き、暫しかんがへさていへりけるは「御は心中に深き望みありと雖も、這の望みは頓にかなひ難く、心長閑けくし給はば、かなはずといふ事あらじ。」といふに、床世を始め平二も、其の辭の露違はざるを驚き、なほ行末の事など問ひ明らめ、卜者に厚く禮をのべ、錢を與へ其の所を去りぬ。平二等が後影を見送りて、彼の卜者は戴きし深編笠をとれば、月代は熊の毛の如く生ひて、相貌究めて兇悪なる大漢兒なり。これ何者ぞといふに、千騎が窟の賊主、雲平が部下に、雲霧の仁三太といふ不敵者なり。豫て雲平が下知によつて、這の十字街に卜筮の露店を開き、日毎に人の吉凶を占ふにことよせて、巳の年月日時の女をさがしもとめけるに、今日はからずも床世が、巳の年月そろひしといふを聞いて大きによろこび、直に店をかたづけて、跡を慕ひて行きけるが、平二が面魂只者ならずと見てければ、左右なく手をおろさば、必ず仕損ずべしと、日の暮るゝを待ちにけるに、斯くて平二等はあやにくと、其の日は宿を拿り損ひ、黄昏過ぐる頃小篠はらを、とほ／＼とたどり行くに、殊更此の夜は宵闇の、提灯の用意さへあらざりければ、星を燈に宿あるかたへ急がんとしけるに、忽地傍の藪の裏さら／＼と音して、手拭もて面をつゝみし、一個の大漢子現はれ出で、矢庭に床世に猿轡をはませ、肩に曳掛け足をはやめ

て、是の去らんとするに刈藻はおどろき、先に立つて歩み行く平二が跡につゞきぬ。平二も何事にやと走りすへる暇に、盗賊は刈藻を蹴倒し、逸散に走り去りぬ。平二は慌忙きて追掛けしかど、如法夜の事なれば、遂に其の姿を見うしなひければ、詮方なく／＼其の夜は宿に帰り、翌日よりく／＼捜しもとめて、やう／＼初夜過ぐる頃、怪しの賤が家に宿りぬ。この常世を奪掠せし者、即ち雲去仁三太にて、仁三太は常世を千賊が許へ伴ひ、此の邊の落葉こそ己の年月をおくりたるまゝにし、自ら日は出たれども、また卜なごうたる始末を委しく物がたるに、雲平は大きに悦び、且つ仁三太が悪を憎み、彼の人の骨を埋む塚穴のうちにさびしく、静のおまへに、下つかたは其の生死を問ふべしとて、一筆は立てされ、常世はすぐに仁三太に、讒奪せられし始めより、何の謂れといふことをしらず、我が身花園の身ならんには、遊びに出なるをたゝるべきか、老いさらぼひし者を寄せ連れ行きて、何にかするらんと心中に、いぶかしく思ひながら、前後もく、そが為に誘はれしに、見るもいぶせき岩窟の中に繋がれ、四下の窮まりはそなたの皆雪をとして、住家のをおほふに再び驚き、抑は伝へ聞きし鬼が窟とかいふ所にして、畜生の為に命を奪はるゝ事と心もなく、種生にのみの事はされど、命を惜しむにあらねども、雨露が仕死を非なり、早に負たる雲平をうち得ず、家の財宝をも見ずに非ずして死なんこと、黄泉の下なりとも何をいふ浮世を逃れ出で、平二や刈藻にも遇ひての後、鬼の所作とも成るべきもの、と心中に働き、凶悪と識らとい

へども、滔々たる岸打波の音、遙かに聞ゆるのみにて更に寂々たり。床世は信と心付きけるは、「吾か身は江の島の辨財天の告子にして、己の年月日時の産まれなり。されど年頃辨財天を信じ奉ること大方ならず。苦しき時の神恐みとやら、世の諺も思ひ出でて、一心に辨財天を念じ、江の島の方を遙拜して「何卒今の危難をまぬかれ、再び平二や刈藻に遇はせ給へ。」と祈りける。去る程に白波雲平は、蝦蟇瘡をいやすべき、妙藥とゝのひしと聞き、悅ぶ事斜ならず。直に殺人穴にこれを繫がせ、且歡び酒を汲みてしかして後、彼の醫師と倶に仁三太に燈を照らさし、塚穴のうちへ來るを、床世は窺ひ見て心中に驚き、奈何なる惡鬼羅刹かとおもひしに、案に違ひて美服を身にまとひて、一個の大漢子なりければ、これ定めて盜賊の類なるべきか、吾を捕へおきしは、何等の故にやあらんと、左さま右さま思ひ惑ふに、雲平は醫師と倶に床世に向ひ「雉も鳴かずばうたれじとやらん、汝口から己の年月日時の産まれなりといひしかば、却つて其の身の仇となり、如今命を失ふぞかし。さはれ汝はもはや六十餘とも見ゆれば、人生一期五十歳を定業と見る時は、既に十餘年生き延びたり。汝死して吾が疢痾治する事あらば、追善供養はよろしく營みてつかはすべし。」と、いひさま小賊に分付けて大俎板をとりよせ、其の上へ床世をおかはだかにして、のけさまに臥さしめ、俎板にくゝしつけ、さて雲平自ら明晃々たる白刃を拔き、床世が鳩尾へぐつとたつれば、阿と魂消る一聲と倶に、鮮血こんこ

久しく流れ出たる泪とゝもに、臍のあたりまで裂きて、懐に手をさしいれ、雑符をつかみ出し、これはこれ、これかあれかと問ひ問ひ、やがて撫でし、彼の判を入れ、口を洗て此の秘穴を押さわれ、驚くに雲平は吾が居間に立ち帰り、いざ薬を調じて人丹を服し、情をいやさんと、薬箱に雲母紙を開けば、過ぎ去りし時の内には、更に一物もなし。不審しきことかなとて、肉書は指示しはて、顔見合せて居たりしが、雲平は仁三太を招きよせ、右の袴の一枚の羅紙は狐狸妖怪の類か、又いかなる妙術を得たる仙女の類なるか。何はともあれ共に、彼の塚穴の内に往きて、その形体をあらためみんとて、二人等しく床世を伴いたる所に往きて見るに、彼の大なる板の上には、床世が死骸はあらずして、最貴なかなる弁財天の像ましますに、二人は驚くことかぎりなく、幸は道祖神の化現するかなるに、天女身代りにたたせ給ふか。此は天女の御霊験なりと、その像を海へ投げすて、三つくと彼の本の石垣へぞ立ち、ぬすむ彼らは二人を四方へ走らして、床世が踪跡をたづねしかど、つひに其のゆくへを知らず、かくてなほ世の窮屈を覚ておきぬ。

流轉數回　阿古義物語後篇卷之二　終

後編　巻之三

第五齣　怨魂殺ニ奸夫一

扨も平二夫婦は、大切なる主人の老母床世を、盗賊のために奪ひ去られ、奈何はせんと途方にくれしが、斯くてあるべきにもあらねば、其の夜は宿を覓め、翌日未明より起き出で、支度とゝのへて、いざや其の蹤蹟をさがさんと、人なき方に迷ひ入るに、兎ある濱邊のかたより來るものあり。夫婦はよく／＼これを視るに、豈はからんや是れ床世にてありければ、遽に怡びて其の故を問ふに、床世答へていへらく、「妾昨夕盗賊の爲に奪ひ去られ、何處かしらぬ荒磯の、岩窟の中へ繋がれし故、いかなる事にやと易き心もなく、ふるひをのゝきて居たりしに、稍て相貌究めて兇悪なる漢子、身には美服をまとひたるが、部下とおぼしき漢子に松ともさして、醫師めきたる四方髪と共侶に入り來り、藥にするとて妾が生肝を拿らんといふを、聞くに目もくれ心も迷ひ、いかゞはせんと身をあせれど、爲方なく涕涙を流し、心中に辨財天を信じ、何卒今の危難を救ひ給はれと、一心不亂に念じけるに、やがて大俎板を持ち出で、妾を其の上に縛り付け、明晃々たる劍を抜き出し、既に胸先に突き立てられしとおぼえし後は更に夢の心地にて、何事もおぼえず。只現の如く微妙の御聲うるはしく、「早く逃げよ

逝にまつりし霊ふと思へば、自然と六字自由になりたれ、足にまかせて逝け来り、とある前町の中なるに、蝉に肌身をはなされ葉な御、蝶等と光をはなれて、すでに、何の由を聞いはえのたまし、殿に手にとりわけて思ひけば、其に此の辺口野花川のさまに通ひて、既に近寄り走りにけれたる年の二十と、声高なる事あらずなく、他に通ひてかこひあへす、事の何の由に答ふる、東西をわかぬ三代めに追ひ手の荒らんことを恐れて、あの車のもとに落くして、御手た婦に寄りて道ひと事、微かに過ぎず。と、二五一十を物語るに、いま夫婦も動くと聞きて、日の霊験いちじるしきを感じいふやう、然には御先祖善贋公の木像、かしこくも我が身に代りたまひ、今又此の霊験にて夫婦を救ひ、我と共に是といひ、奇なる哉。その時の結果に入りたる蛇族は、いかなるものにあらん、われはいと深く疑ひ出この兆をあらはせば、速かに家事を恢ひ、目前我が父年を顕して御門が侍、四部当番が例、三方間恨みを請はれしことは目前なるべし。必ずしも心にかけず、思召し給へかしと力を添へ、これとた取りて立たし、鎌倉のかたへぞ赴きける。夫れより其人蛇道心と号し、四国遍路の旅にて、伊勢国白子観音の門前にありて、鉦をならし念仏を唱へ、蛇を其の所に庇ひ置きけるが、或日頓八に逢ひけるに、従来悪縁なれば、一つ鍋の飯を分け食ひたる、むにの朋友なればは追ひに続き、互かに心なきかたへ語らひ、頓八は箱に仕立てたる蛇の縁起を聞けば、それは又

隻腕となりし來由を尋ね、遂に奇異の思ひをなしにけるが、當時頑八は聲をひくうしていへらく、二世の諺にも毒を喰らはば皿を舐れといふ事あり。俺も吾も齊しく、斯く世の癡人となりしうへは、今更惡念をひるがへしたりとも、奈何ほどの益かあらん、不若一日たりとも樂しみを極めたらんこそ、生前の本意ならずや。さはいへ兎に角貧乏しくては、何事も心にまかせず、最前より吾儕がこゝらわたりを吟行ふは、外の事にあらず、六十餘りの法師、二十許りの美麗しき婦を誘ふを見たり、其の娘の容儀なかなか田舍質樸などの、日向くさき類にあらず。これを勾引して遊君に賣らば、許多の金を得つべし。併しながら吾儕ひとりにては、彼是と手がまはらず、折惡しく仲間の惡堀も此のほとりにはなし、さりとて素人にかたらはれず。昔拿つたる杵柄とやらん、御相槌ならうてだに給はらば、這の事極めて首尾すべし。と、聞いて愚六は呵々と笑ひ、愚僧も今は絶えて久しく、さしせる惡使儀には遠ざかり居つれば、定めて勝手もたがひて、萬不束の事のみ多かめれど、素人にはますかたもあらんかし。假令蛇が首に卷きついたりとも、腹の脹るゝたしにもならず、この程は酒も快くは飲ます、斯くてあらんには、死するかたこそ遙かに勝れりと、遉に昔の夢はしかりしに、さる宜き仕事のあるを、いかで徒に見のがさんや。と、下地は好きなり御意はよし、早速遂に承諾へば、頑八もおほきに悦び、尚額を突き合はして、閑談數刻に及び、二個は東西へ別れさりぬ。彼の頑八が愚六に低言き

し、六十餘りの法師といふは、賢兵衛入道西念にして、娘といふは園生にて、傍輩は下總の方への使
野路を言して、本二本松の西寺が行方を尋ね佗けり、今日しも何十の觀音に詣で、歸路の事なりし時
り、其黄昏近く觀音をいでて、泣々の松原にかゝりしに、兼て期したる事なれば、其に頑八は左右
の木陰よりいでて、頑八は西念を、ふるひまに、貴六は園生を小脇にかいこみ、[illegible]
[illegible]なる蛇、きり/\と引きしむるに、眼眩きて悶絶しぬ。かかる折から下總に二十町を
[illegible]ならで、通りかゝる一個の武士、園生を見つけ仔細を問ふに、園生は[illegible]の者ならで、[illegible]に
に何引されんとせしところに、如何なる故にや急に悶絶せしと、いふを聞いて彼の武士、[illegible]
[illegible]せて[illegible]見るに、[illegible]も[illegible]を見て大きに驚き、[illegible]
ふべうもあらぬ其の[illegible]、[illegible]にて[illegible]引せし時に[illegible]
なる故かはしらずやといふに、彼の武士[illegible]を聞いて、[illegible]
も神ね給へかし。」と言ひ了つて、何處の方へか伴ひ行きぬ。這の人は是れ何人なるや、こは今[illegible]
きあかしるし。貴六は[illegible]りて、[illegible]に入りて、心ある[illegible]を見まはせば、[illegible]
猿をとして、松吹く風のみなりければ、扨は頑八早くも跡を追て來り、娘を連れ行きしものならん、
[illegible]骨折の一條に[illegible]られし事ともと、獨りぶつ/\[illegible]、[illegible]

にて、賢兵衛道心をやり過し、愚六が跡を慕ひ來り、迭にそれとすかし見て「其處へ來るは愚六ならずや。」「頑八か。」と互にその無事を祝しぬ。其の時頑八は愚六に向ひ「汝早くも彼の娘を何處へか侍渡て、黄金を得つると見ゆるに、約束通り分前を遞與すべし。」といへば、愚六は冷笑ひ「汝こそ却つて吾が跡をつけ來り、悶絶なしたる間に、はや黄金にかへて、己獨りこれを得んと、吾にむかつて去る言掛をいふなるべし。首に蛇こそまきつきたれ、汝等ごとき小賊に、割を喰ひては場尺にあはず、老早出さずば左の腕をも打ち落し、頭を梨割になして、釘貫といふものになしてん」と敦圍けば、頑八もおほきに怒り、互に言ひつのりて挑み合ひしが、左右の手あればいかでか愚六に及ばん、終に愚六は頑八をとつておさへ、首をしめんとなしけるに、俄に一陣の暴風さつと落し來り、一團の陰火えんえんと燃え上るとひとしく、過し麻子が容姿髣髴とあらはれ、愚六を後のかたへ引きもどすと見えしが、忽ちころ／＼とこけて、遙かあなたの草井戸の中へ、眞さかさまにおちいり死にぬ。其のさま麻子が臨終に、露たがはぬも不思議なり。頑八は這の爲體を見て爲方なく、彼の草井戸をさし覗くに、底さへしれぬ古井戸にして、草茫々と生ひ茂りたるうちなれば、定かにそれとも見えわかねば、倘しや渠が懐中に、娘を售代なしたる典身金を、貯へしかとはおもへど、拿り得べき手段もなければ、むなしく山寨へ立ち歸りぬ。されど麻子が怨恨は、只愚六が眼にのみ見えしなれば、頑八は更にそれと

にむつかす、行違つて息ないゝ市井へこけしと思ひけるとこそ、成、元の評定所西念に、両角を前に寄せ
とられ、轉へ一個の箱物をさげ、東奥のはなれば、距離の暇ゝ其裏又を戸し行けれに、着物向うとの壁
をなき、走り来る一個の旅客あり、西念は此の旅客に在て飛出ていへる、一囲寄へ十八年はおわす
る間を、人の連れ行くを見咎にすやことといふに、彼の旅客こたへて、奈何にも家の道を取りたる曲り
し途中にて、一散の鏡が逆う人るを、引立てゝ行く者に逢へり、其に違へはで行くまゝ、返す物はて
ば追付きいへし」と、聞くよりも西念は、其の旅こそ罪に相違なし、いで追付いて奪還さんと遅着
に顔をのへ、足を早めていそぎ行くに、兩時頃に東京近く、人家もほの見ゆるにぞ、向うを見とよれ
ば、山林の辻名に、旅姿はませし女か、又一個の若衆いと親はなく、打揃ふる黒髪を、奪ふに
見ゆるの戀んでかゝり、彼の若衆が結髪のかんで、二三間見たりのけ、亦も奇つて彼の髪の形へ
解き、旅衣の事のよくく濡れば、是れ確なにはあらで、三葉日前に現在も我が娘の行方をなりけれ
ば、うこはくく如何にと驚き、暫時は物もいはず、さるもゝなり、されたる若衆は、肩に痛を押て立ち
つゝ起き上り、一度娘なればや年なや、用捨もなくしたるかに、慄々し我と、云ふさま、西念と顏
見合ふを大うに驚き、逃げんとするを引捕へて、よくくその顔を見るに、是れも昔の弟子の後見に
ありければ、西念大に驚き「是遁り若受理よくも一度ならず二度三度、又切なる罪を言引させんとせし

こそ易からね」と、瞿麥を絆めたる繩を拿つて、傍の柱へきびしくくゝしつけ、再び瞿麥にむかひ、「這の年月さぞかし艱難苦勞しつらんが、いかなる所にか日を送りし。」と問ふに、なでしこは涙にくれながら、「愚六に誘はれし道、足柄越の千石原にて、室平左郎重綱といふ、盜賊に強奪せられ、既に渠がために恥かしめられんとせしに、三助狐忽然として容をあらはし、妾に一箇の皮裘を與へり。この皮裘は奇代の物にして、倘し漢子ありて亂りに犯しはづかしめんとする時は、彼の毛針のごとくになりて、傍へよる事かなはず、また遠ざかるときは毛原のごとく和かになるなり、これ千歳の老狐の裘なるよし。これをあたへしゆゑ常に服したれば、重綱も其の奇怪を恐れて妾をはづかしめず。さるがゆゑに此の年月操をやぶらず、盜賊の爲に汙されず。此の程重綱は下總國なる、千騎が窟とやらんの岩窟大王といふ、東海の賊主のまねきに應じて家にあらざるゆゑ、ひそかに隱家を忍び出でしに、また三助狐に遇へり。よりて裘をば渠にかへしあたへ、獨り東の方へくだらんとする道にて、無二無三に引捕へ絆められて、爰まで連れ來られしゆゑ、嚊々さまなりとは心づかざりけるが、今に悪しき心の直り給はず、斯かる邪の行狀を、なし給ふこそ淺ましけれ。」と、涙と共に物語るにぞ、西念聞いて「吾儕も備が蹤蹟はしれず、小女郎狐は如此々々の縁にして横死を遂げ、世を恨み身をかこち、剃髮染衣と姿をかへ、諸國の靈場を順拜なさば、少しの罪をも亡ぼさんと、探しも斯く抖擻の

身となれりと云ふ、伊豆下総国利川浦にて、是れも三助狐の手引にて、姫君さまの御難をすくひまゐら
せ、縄をも一して命を頂きしも、皆日向子の罪滅の供養にて候ひとられ、そこまで気を晴しおかれしに、
姫君がしてや遂にも、数々の御賞に預て言葉を賜り、母君は妬みと思ひ煩ひ給ひて候ひし、悪にす
縁に寄存せしを、神仏の引合せ、一つには三助狐が手引に吾べしつまいひ、其の画筆を見て、いまった
ふ端へしと云ふ、邪の道に小蛇こそ知るといへば、無しくは逢坂山に傾りてやあらひつる、旅の輩
に行きし、且つ丹後の国の一件以来の事にあって、如何なる悪巧みをもせしや、翌朝に御城ずべし」と、猿の表山
出を折る摩り、伊予の国にいれて、其のおり、翌日に帰して仕り、悪しき了日状と付るは、
「妾は固より伊予国の産なりしゆゑ、故郷へかへりて本城の雌狐を開きて、託宣ある斯ぜんとぞ思ひ、
本州のなんへ妾は四国へ渡りて、正しき雌狐つくりせしの、何にならずも託へ（）を限ぬむきは山、あるは又
あなを何引て、遊戯に此しこもありし者の、誰いふとなく、三同雌狐と名付り、それ三雌狐のと
なりとの呼出に他に言ふ事にて、何者か昔の忘れ物にて遊ひたる、
助け給ふことを念すにて、流石にいとはしく思ひ、邪念に向ひ、今に仏に御奉公は
は、憎むべしといへども、君子は其の罪を悪みて、其の人を悪まずとかや。最初に妾が為には、
同じ主といふ名のあれば、日頃命をうしなはん、と見るに忍びず。只上も今は断り、仏の御弟子と

なり給ひし身の、人命をうしなはんこと、しかるべからずことゞむるにぞ、西念も尤もと思ひ、漫頭婆蓬兒にむかひ「汝斯く悪行をなせしものを助けんは、天にそむくに似たれど、出家の身なれば其の儘にして赦すべし。情ある人の來るを俟ちて、縛めを解きて貰ふべし。」とて、瞿婆を誘ひて其の所をさりぬ。爰は山の半腹にして、往來の旅客もまれなる所なりければ、蓬兒は縛められたる儘にて、三日ばかり在りければ、今は飢渇にたへかね、いかゞはせんと身もだえしたる折柄、傍の草叢より一疋の蛇、するすると這ひ出でて鎌首をもたげ、蓬兒がほとりを二三遍、さもこゝろよげに打ちめぐりしと覺えしが、忽地蓬兒が皮肉を喰ひ破りしかば、「阿。」と叫んで七轉八倒、虚空をつかんで狂ひ死せしは、心地よかりし有樣なり。これも又麻子が妄執のなす業なるべし。天網恢々疎にしてもらさず、嗚呼おそるべし謹むべし。

第六齣　夫婦闇奇遇

彼の萬葉を誘ひ行きし武士を、奈何なる者ぞといふに、當國の郷士にして一個の富人に、濱荻左門といふ者なり。這の左門は年來白子の觀世音を信じ、日毎に歩みをはこびしが、這の日は障る事ありて、夜に入り參詣せしが、思はずも萬葉を助け歸り、委細の樣子を聞くに、よるべなき身なれば殊に

不便に思ひ、これ迄の誼通世盛の頃に結びしこゝろあはせ、難儀なるを見捨て得ず、齢既に半百におよべるとも、さなき事なれば、吾子娘ともならばやつことして、私かに妻妾にも吾がおもふ旨を述べしかど、時をいつくしみけれど、細夢とをたゞ門大根の交山の如く、思ひ寄らぬ事を、こぼ大方ならず身を腹から痛めずして、かゝる美しき女を得ること、高の裏に赫夜姫を得し、讃岐の宮奴が心地ありして、掌中の珠玉簪の花と愛でいつくしみ、深窓にやしなひけれど、間もなく年頃に、吉野の事も忘れやらず、彼の二代目助左衛門の世に在らぬありといふを頼みにして、妻と、悩し果花のいてうらやして、今の世には遅れ、睦まじく、藁の事のほとも、思ひ割しも、なかりけん、継子四郎吉は、心なしとの、果なく流浪となり、忘るゝの譬への如く、萬心の儘なるに不義とはせねど、頃八が意匠にあたはざる事をぞ、指摘しつる事も多かりけるを、なく、黄金白銀に、一世の、椀久は、此道の家を、若し黄金を得べしと、吉野に、吉野を打擲

かんより、一拳にしかずとやらん、小盗をなさんより、さる大きなる事を催さんこそ、かへつて快けれ」とて、山寨の人数手配なして、大凡其の勢都合百騎ばかり、吉香を大將として、威儀堂々威風凛々として、濱荻が莊院へおしよせ、頑八は例の隱形の術をもつて、門内に忍びいり、貫木を外し扉を八の字にひらき、大勢こみ入りけれど、從來左門が家は用心きびしく、殊更家隷にも、をさ／＼劍法に熟したる者もありければ、爰彼處にて防ぎ鬪ひけるにぞ、頑八等も一生懸命と、火花をちらして挑みあひぬ。爰に主人左門は事ともせず、盜賊如きに刃に血をぬらさんは、拙きに似たりとて木刀を提げて、立ち顯はれ見れば大勢の仲に、一個の大將と見えたる漢子、牀几に尻かけて指揮する體に、這奴を打ち奪らば餘の者は、皆烏合の草賊ならんに、恐るゝに足らずと眞一文字に、彼の大將を目がけて打つてかゝれば、大將の左右に侍したる小嘍囉等、齊しくこれをさゝへて斬つてかゝるを、忽地右左へ薙ぎ仆し、尙木劍をひらめかして、大將が眞向微塵と打つてかゝれば、爲方なくやありけん身をかはして、腰なる太刀を拔きそばめ、二打三打うち合はせしが、左門いらつて彼の大將が、右の腕をしたゝかに打ちければ、何の苦もなく刀を打ち落され、身をひるがへして逃げんとするを、左門は猿臂をのばして、襟髮をとつて後へ引き倒し、忽地これを縛め、大音聲を發し、「家内の者驚くべからず、盜賊の大將は今すでに捕めとれり」と呼ばはりければ、大將うたれて殘黨まつたからずの譬への

固く、混じて、鞋を打つ装束なれば、吾もかくして生捕られけるに、頭人も斯かる所に来るべしとて、必ず生捕らるべしと、又隠形の術を以てすがたをかくし、山寨へと帰りけるに、斯くて左門は彼の生捕れし大将と見ゆる、若武者を引立つて浮かぬ者に来て、定めし悍悪なる面相ならんと、燭を差出して之を見るに、案に相違して色白く眉秀で、目清く、唇紅にして、これ一個の好男子なり。左門は、心中大きに怪しみ、人心はかくの如き事其の面の如しと、心を捻ぢけたる人にも、面の美しき者あり、又恐ろしげなる顔したる人にも善人あり。されば孔夫子の聖賢にても、陽虎といふ悪人に類似しといへられ給ひし事あるとかや。これは斯かる美貌の人に、如何なる悪党の心あらんも測りかねど、此の人の立振舞、極めて盗賊となるべき者にあらず、こは定めて深き仔細のあることならんと、其の故を問ふに、若者は慙面ながらいひけるは、一昨年頃の比か、縲紲の恥かしめを受けて、今更語るも恥かしき限りなれど、一通り聞いて給はれかし。小子は奥州の者にして、秀衡が部下に、佐藤三郎といへる勝といふものの舎弟に、四郎吉晴とよばるゝ者なるが、[illegible]秀衡の[illegible]に、[illegible]けく世をはかなきものとこそ、[illegible]家の愛子、幽華と云へる妻を伴ひて、[illegible]六浦の濱にて盗賊の為めに、吾が[illegible]は[illegible]られ、[illegible]倚が運の盡きなりけん、情ある人に助けられ、[illegible]

古社にて、鼠頭を畫きつぎてより、頑八等がためにそゝのかされ、固辭まば忽地命をうしなはるべきと思ひ、心よわくも衆人の望みに任せ、昨日と過ぎ今日と暮せしを僂ふれば、はや三年の春秋を經たり。豬を抱いて臭きを忘るとやら、竟に山寨をいでずして、今日のはづかしめを得ること、是れ己が罪己を攻むる所以にして、奈何とも爲術なし。早く吾儕を官府に訴へて、其の罪を糺し給はれかし。」と、言ひ了つて涙雨のごとし。當時一室の裏より走りいでて、吉香にすがりつきよゝと泣く女あり。吉香駭いてこれを見れば、是れ別れて久しき園葉にてありければ、吉香は思ひかけざる事なれば、「這は如何にして御邊の所に、居給ふや。」とはいひながら、又若しや左門が變姿なんどになりもやしつると、心の裏に疑ひ惑ひ、更に其の緣故をしらず、茫然として居たりけるが、園葉は吉香にむかひ、「儞にわかれまゐらせ、人買人の手にわたり、若干の艱難辛苦を經て、漸う此のほどこれなる家の主、左門ぬしの情にて、心安堵たる事を得たり。其の始めをいへば云々なり、終りをかたれば箇樣々々」と動八が手にわたり、彼所愛の遊君に售りかへられしことより、外川浦なる岩窟にいたりしこと、三助狐が告げにて、賢兵衞道心にめぐりあひし事など、落ちもなくものかたるに、吉香も其の奇遇を感ずるといへども、今盗賊となりて這の家を趾ひたる事なれば、園葉が思はん程も影護く、さしうつむきて居たりける。當時左門は容をあらため、言語を正しくしていへりけるは、「昔はとまれかくまれ、

[illegible]

悦び、「夢なりせば只いつまでもさめされかし。」と、言ひつゝ其の故を問ふに、吉香が曰く、「濱荻ぬしは寔に吾が爲には再生の恩人なり。彼の人豫て縣令の下司何某とは、傾蓋の交はりあれば、私かに吾が身の上の一五一十を語り、獄屋に似たる罪人あるを幸ひ、首をはねて鈴鹿の賊主なりとて、二兒が浦にて梟木にかけ、扨吾儕には一包の黄金を與へ、『薗葉と偕老の契りを結びし人なれば、吾が婿にもなして家を讓りたくは思へど、奈何にせん內外の者もしりたれば、今はかなひがたし。此の黄金にて二個とも、何處へなりとも身を忍び、時節を俟ちて一箇の功を立て來るべし。』と、最懇に說き示し給ひ、箇樣々に計らへば、暫時が間這の葛籠の裏に忍び、聲を出す事勿れ。」と教へ給ひたれば、扨こそ最前より聲をもなさず居たるなり。」と、聞いて薗葉は左門が仁心を感激し、「母床世平二等が蹤蹟を搜さん。」と諸ともに、これも當なき旅路に赴きぬ。這の時尚吉香は頑八が與へたる、阿漕重代の三條小鍛冶宗近の刀をば、帶し居たりけるとぞ。去る程に吉香は再び鎌倉極樂が谷のほとりへ來り、以前の如く手習素讀の指南し、薗葉は女兒に絲竹の業を教へなどして、些の謝物を乞ひ得て、昔にかはりいと幽に世をわたれど、思ひ合うたるなかなれば、貧しき世帶を憂しとも思はず、實睦まじく暮しける。爰にまた平二夫婦床世等は、寶劍は日外手に入りしかど、怨敵雲平の室平四郎を打ち取らねば、安達家へ訴へ出づるとも詮なしと、那裏這裏にしのび、雲平が行がかつ父平太左衛門が仇をさがし覓

めけるが、藤堂元明を譬へもあれば、三年[illegible]普く國々を尋ねしかど、[illegible]足元を
る、鎌倉近[illegible]にはらんも計り難しとて、這の[illegible]は又相州[illegible]村が崎の片隅に[illegible]り隠れすみ、日毎に平二
次盛は編笠を深くして、鎌倉の市中を徘徊し、白波[illegible]行衛を[illegible]求めける。然るに或日油堤
を通りしに、これも武士の[illegible]とおぼしく二腰をよこたへ、編笠に面をつゝみ、向うより來るを瑳跌
ふさに、眼をとめ一見く見るに、彼の武士の帯したる刀こそ、[illegible]が最期の[illegible]しに
る、[illegible]
吉[illegible]ならんか[illegible]
やめなば、ゆゝしき大事なれとて、竊かに[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]御主人の[illegible]
[illegible]
註し、[illegible]と[illegible]たり。今[illegible]刀こそ、其の[illegible]代の一腰

なり、さはいへ不思議なるは、汝が腕は左右とも克くあり。思ふに汝何者にか分付けて、刀を奪はせ吾が父を殺せしものか。そは左まれ右まれ南葉さまをそゝのかして、誘引ひ出せしは全く遊君に侍らんとなるべし、老早々々白状なすべし。」と、敦圉あらくのゝしるにぞ、吉香は甚だ迷惑し、「其の疑ひは理ながら、われ決して白鳩丸とやらんを盗み、人を殺害あし覚えなし。さはれ南葉どのとは人しれず語らひ、連れ退きしに相違なければ、此の一條に於ては言ひ釋くに詞なしといへど、其の他の辞はあづかり知る所にあらず。」と、誠心面にあらはるれど、平二は些とも油断せず、呵々と冷笑ひ、「汝人を惑みて白鳩丸を奪はせ、吾が父を殺害なさしめ、小鍛冶宗近の刀まで掠め取つて、己が賜料とするなれば、盗賊たる事疑ひなし。老早罪に伏せよ。」と云ふに、吉香は再び次盛に向ひ、「これには千般萬般の深き仔細ありて、一朝一夕に說き盡すべうもあらず。吾儕も武士の端くれなれば、爭で僞をやいふべき。逃げも隱れもせんとにはあらず。何はともあれ且づ吾が家に來り、南葉にも對面して、其の實否をしり給へ。」といふに、平二も半ばは信じ半ばは疑ひ、吉香が後に從ひて梅が谷に來り、南葉にも逢ひ互に其の無事を祝せば、南葉は先づ床世が安穩なる由を聞き、些しは心おち居て、たれよ り三助狐が通力にて、危きをまぬがれし一五一十を物がたれば、吉香も又宗近の刀を得つる、縁故を具に說きあかすにぞ、平二次盛もはじめて疑念を晴らし、御先祖芳貫公の木像、吾が身に代らせ給ひ

し事よりして、白鳩丸再び手に入りし事、床[illegible]も、辨財天の加護にて、其の急難をたすかり給ひしなど、辭[illegible]くかた[illegible]そ、[illegible]騎が窟の賊主、岩窟大王といふものこそ、彼の白波雲平にして、定[illegible]室平[illegible]にわかり、[illegible]太[illegible]衛門を撃つて白鳩丸を奪ひしは、雲平が部下の小賊、鼻[illegible]八[illegible]、[illegible]事分明なりければ、[illegible]父が仇倅が敵頑[illegible]、やはか其[illegible]にして置く[illegible]、[illegible]八や撃た[illegible]、[illegible]騎が窟に到りて、雲平を[illegible]せん[illegible]、評議まちまちなるにぞ、[illegible]

[illegible]

ほろぼす事容易からず。[illegible]彼の手[illegible]八と、吉[illegible]既に刑せられ給ひしと思ひしゆゑ、[illegible]して、か[illegible]しこに向ひ給はんは、[illegible]危きのかぎりなれば、尚三歳を待ち給へ。然[illegible]

なり、頑八もろともに首を授けんこと目前なり。努々うたがうて不覺をとり給ふ事あるべからず」と、懇にときしめすと思へば、是れ南柯の一夢なりければ、今に始めぬ三助狐が、信やかなる志を感じ、暫く復讐の思ひを絶ちて、專ら劍法を熟練しぬ。こゝにまた宗平五郎重綱は、都の邊は詮議きびしきゆゑ、兄重廣が住居する、下總千崎が窟へ來り、其の手にくははり一方の大將となりぬ。頑八もまた三助狐が言に違はず、外川浦へ立ち越えて、これも一つになりけるほどに、宗平が威勢ますます強大にして、官府も制する事かなはざりけるとぞ。

流轉數回 阿古義物語後編卷之三 終

後編　巻之四

第七回　[illegible]

天のなせる禍はなほ避くべし、自らなせる禍はのがるべからずと宜なるかな、[illegible]執念、[illegible]に遷著するものから、[illegible]いよ〳〵痛み[illegible]て、[illegible]日に[illegible]を[illegible]後に[illegible]つゝも[illegible]の面の如く、眼を怒らし口を開き、[illegible]の舌を出し[illegible]なること、[illegible]に少しもかはりたる事なし。其の痛み[illegible]時にいたり、[illegible]を喰らふ事、更に[illegible]の有様に一毫たがはず。又或時は[illegible]の如く、[illegible]物いふ[illegible]、然りの辞をふりたて、「如何に雲平、汝[illegible]と[illegible]の契りを結びながら、[illegible]に[illegible]情なくも[illegible]其の[illegible]、いつの世に[illegible]部下を従へ、[illegible]を極め、[illegible]の富貴といふとも及び難く、萬心にまかせ[illegible]事にて、酒池肉林の奢りをなすといへども、天数既に尽きたれば三年をまたず、忠臣[illegible]の為に、命を[illegible]し[illegible]と、[illegible]いふ事あり。又は[illegible]、[illegible]狐となりはてたる口惜しさ。恩を受けて恩を忘るゝを[illegible]に[illegible]、[illegible]

も、尚魂魄は此の土にとゞまり、恩人阿漕一族の影身に付きそひ、汝に仇をむくゆるなり。」と、いふは正しく小女郎狐が亡き魂か。或は怒りあるは怨み、一見よく三年をすごさず、吾々が修羅の亡執をはらすべし。」と罵るにぞ、さしもが強氣の雲平も恐ろしく、奈何にもして這の惡瘡を治さんと、又例の神醫安田道全といふ者を招きて商議するに、安田暫し頭をかたむけて考へけるが、稍ありて雲平に向ひいへらく、「這の病を治せんには、嚮に告せし巳の年月日時揃ひし女子の生肝と、別に一種の奇劑を調じ、これを用ゐるより外に絶えて治方なし、是れ蛇の蝦蟇をのむの理にして、すみやかに治せん事疑ひなしといへども、其の外に治方ある事を見ず。さはいへ醫は意なりと、爰に一つの工夫あり。そは奈何にといふに、荘子には貝母の人面瘡を治せしことをしるし、又或書に唐土趙の國に、文仲子といふ名醫あり。時に應聲蟲といふ病をわづらふ者あり、這の病は口に物をいふ時は、腹中にも聲有つて、同じ事をいふ病なり、これ究めて難治の症なり。當時文仲子本草を開きて、諸の藥名を其の病人に誦せしむるに、藍と雷丸にいたりて、口にこれを誦する事三度におよべど、腹中に答ふることなし。これによつて頓に藍と雷丸の二味を服さするに、忽地治せしとなり。這の説荒唐として信じ難しといへども、又據りどころなきにしもあらず。さればいまこゝろみに種々の藥種を取りよせて、是れを蝦蟇瘡の口におしあてがひ、倘し口をひらいて受けざる物は、是れ究めて瘡が嫌ふものなれば、そ

れし理を泥ずむる事あるべからず。これ則ち天然自然の道理なりことかや。王仁、酒を好きは熱ひ論に御恩は當世の者達皆偏に直言なりけりと聞にけたゝして、甲乗本草に口せける、あるといふ心學本性い、いかなる人も、許多の藥ことごとくあつて、一つ／＼是れを嗜口に奇しめ、此ことある者で、悉く下打して是れを嗜むに、道在を選ばれて、其時の事なるであけれ。當時書籍に南蠻の藥と見開き、其陪讒を荏に韮を見て、ひとりおろか陽醫用の藥を知りたりしうして、霊平に併ひ繭やかさつて、悪草を系下心は、含糞を咎、おたけれ為めなりと其れ此に陰に仁術なり、これを故人の宰相とする事縁はて、良醫となれといへり。國の宰相と並びて、廣く民衆の仁政を行ふ事を得ずとも、良醫となりては人の病をつて人の病苦を救ふことは、宰相の仁政を施すことに劣ることなし

ばかり　這の雲平が蝦蟇瘡はしからず、妾が一念蝦蟇に還着するのみか、多年の積悪一時に報い来つて、斯かる悪瘡をやめること、自らなせるわざはひなり。さはいへ是れ吾のみがなせるにあらず、妾が一念に蝦蟇の執着、かつは小女郎狐の怨恨、三方四方のうらみの念、汝がよわみの霊につけ込み、障礙をなさんとするものから、或時は妾が聲のやうにも聞え、又は小女郎狐が魂うつり、其の外汝が為に命をうしなはれし許多の人々、汝が運命盡くるに及んで、萬般の禍をなすなり。何ぞ思邈仲景が如き名醫、再来して来るとも、這の病を治せん事思ひもよらず」と冷笑ふにぞ、道全雲平も更に答ふる事あたはず、其の儘にして打捨ておきぬ。斯かりし後は頼みの綱も切れはてて、いかゞはせんと晝夜案じ煩ひけるが、不圖思ひけるは、「吾そのかみ妖術を授かりし玉芝道人は、現に今天竺にありと聞けば、彼の人は神通無量にして、心の欲する所一個としてかなはずといふ事なし。倘し爰にあらば吾が奇疾も愁ふ所なし。何卒道人愚弟を憐み給はば、遥かの天竺より這の土に飛び来り給ひて、吾が這の悪瘡をいやし給はれかし」と一心を籠め、西の方を再拜して祈りけるに、不思議や一陣の旋風と共に、白雲庭前にくだるとひとしく、ありし邪魔姫の姿忽然とあらはれいで、「珍らしや室平四郎、吾が傳へし幻術をほどこして、近國の強盗を集め、千有餘騎の魁首とあがめらるゝ事、是れ全く吾が賜なり。しかるに汝が悪行日々に増長して、天誅の時既に近きにあり。されど吾と汝と一旦師弟の

契約をなしたれば汝にも、遂に過ぎし日に来り、其の奇術を施し與へんと思ふなり。よしや汝は其の性淫欲深く、とかくすれば酒色に惑溺して、大義をわすれたる。此の後とも淫欲をつゝしむと言ば、遂に其の身を亡ぼすべし。世にも又天命の然らしむる所にして、檜山の檜木のおのが身より火を出して、己が身を焼くに異ならず。よく〳〵謹むべしといふに、雲平は恰ぶ事限りなく、何ぞ今師の教へに背きて、我の徳は暫く欲情をつゝしみ申すべしとて、天に向ひて誓ひを立てければ、邪魔姫はいたく喜びて、個の日に呪文を唱へ、手に印相を結び、暫くありて檜扇を以て、其の肩を叩きけり。妖術を三遍まで通得ければ、不思議や風に雲を起し地に霧を起し、嵐を起しえぬ。雲平は今は心中に道人の神通の程を感じ、頓首していへらく、何分道人の御恩のほどは、肝に銘じて忘れて、尚も妖術の奥義を示し給はれかしといふに、邪魔姫は首を打振り、汝を導くに、汝は其の器にあらずして、日本を魔界となさんこと思ひもよらず、されば此の奥技を伝へ難し、其の幻術を以て人民を迷はし、金銀をかすめとりて、一箇の富貴を極めなば、其れこそ汝が本望に叶ふべき事ならずや、終には妖術をいだかれ、其の身を亡ぼすにいたるべし、我は汝を本の天竺の宿室に帰り、悪魔を勧むる事、是れ我が望む所なり、相見ん事もこれ限りなれ、さらば、と言ひかけば、又忽ち東門方より白雲覆ひ重なり、見る〳〵邪魔姫が姿を包みつゝんで、西天へと帰り去りけん

雲平は跡打眺めて、怡ぶ事斜ならず、早速弟五郎重綱はじめ、頑八等を聚へて、奇疾の頓に愈えたる綷を語り、玉芝道人の神通不可思議なる始末を説きて、漫に道人の仙術を稱ふるにぞ、部下の小賊等も、其の奇々妙々たるを感じけゐ。去る程に雲平は、玉芝道人が神通にて、奇疾頓に愈えたるを怡び、其の當座は道人が教へを守り、淫情を遠ざけしが、いつしか又好色の心增長して、原のごとく美貌女とさへ聞けば、人の妻娘の嫌ひなく強奪して、頻りに淫慾をほしいまゝにしけれど、尚飽かずやありけん、不圖心の裏に思ふやう、吾今斯く千有餘騎の盜賊の首領となりて、金銀財寶はいふもさらなり、文君薛史衣通小町が如き美人と雖も、平人の妻娘ならんには、吾が物と異ならず、これを手に入れん事、俘の鼠とるより易し、さはれ只心にまかせざるは内裏女臈なり。我往年都に横行せしをりから數々見て、何卒彼の内裏女臈を吾が物として樂しみを極めば、生涯の望み既に足れりと思ひしかど、其の頃は浮浪の身なりし故、空しく心に思ふのみにてやみぬ。されど今斯く何事も自由の身となりたれば、往年の素懷を達したき物と思へど、大内は八百萬神の守護し給へば、吾が妖術をほどこす事あたはず、奈何にもして本望をとげんものと、左さま右さま思ひめぐらしけゐ。怎生道の雲平が行ふ術は、蝦蟇仙人の妖術なれば、月の内に巳の日一日のみは、其の術を行ひがたし。斯くて其の月巳の日にもなりしかば、殊更に身を謹み一室にこもりて、前程往時のことなど、思ひつゞけ居たるを

けんし、南方へ押し出したる物見の小勢、慌しく走り来つて告げて[illegible]沖の方に[illegible]艘の船
に、日月の旗をひるがへして、其の勢[illegible]ばかりと見えて、こなたに向けて来る様子、官軍の討手と
見えはべる[illegible]外に続く舟も見えはべらず[illegible]心得難く思ひ候ふ[illegible]
なり[illegible]。聞いて雲台は莞爾と笑ひ、たとひ官軍百万騎にて[illegible]
騎や三百騎の小勢にて寄せ来るとは、虎の鬚を撫でんとするに[illegible]
[illegible]
[illegible]一騎の武者[illegible]
[illegible]物見の小勢[illegible]
[illegible]其の由を告ぐるに、雲平は一向心得がたく思ひながら[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]鎌倉将軍[illegible]亡ぼし[illegible]天下一統の[illegible]
[illegible]

べきよし。かつ又重廣卿に老狐の媚珠といへる類まれなる名玉を持てるとのことと、遠く大内へ聞えし
れをもきゝけなば、ひそかに關白の位をくだし給はり、天下の政事を主らせんとの綸旨持參せし、
禁庭よりの敕使なりしとの文體なるに、雲平は大きによろこび、早速弟五郎に命じて、敕使を招じけ
れば、敕使唐橋中納言綾重卿、其の外北面の諸武士陸にあがり、岩窟に入り給ひ「先づ權に下總介に
任じ、追つて重き官職を下し給ふべき綸命なり」と聞いて、天へも登る心地して、ありがたきよし
を御承け申しけるにぞ、綾重卿は彼の媚珠を請取り、歸らんことを宣ふに、雲平いへらく「這は敕諚
を背くに似たれど、玉は亂賊の前と引きかへならでは、獻りがたし」といふに、敕使も尤もと思召
しけん「然らば卽刻都に歸り吉日をえらんで、亂賊の前婚姻の義をとり結ぶべし。其の間に重廣には
這の外川浦に一城を築き、鎌倉勢をふせぐべき、設けをなすべし」とありければ、重廣は委細承諾し
て、敕使其の外の者を數日岩窟の中に留め、種々款待して都に歸しぬ。斯くて重廣は急に部下の小賊
に令を傳へ、外川浦の要害の地に一城をきづきけるに、日ならずして成就なしければ、雲平はまた名
たゝる畫工をして襖に畫かせ、萬淸らを盡して、壯觀目を驚かすばかりなりけるにぞ、部下の者共も
今までのごとく不骨にしては、都人に笑はるべしとて、急に諸禮を學ばしめ、名もそれ〳〵に百官名に
あらためさし、恒に烏帽子大紋を着さし、言語應答まで悉くあらためさせんとするに、昨日まで禮儀

とすべき事は、春に一ト年なる[illegible]、いかなかりしを[illegible]にたへん[illegible]の[illegible]にして冠せ
し[illegible]、又は[illegible]に[illegible]をうたし[illegible]の首に[illegible]たり[illegible]に[illegible]事ありといへども、[illegible]
[illegible]をわすれて、[illegible]、[illegible]は[illegible]出たる[illegible]にて、左右へわか
るゝ有り、或は[illegible]に[illegible]、[illegible]するあれば、陣中にて[illegible]たりし行く人の、
[illegible]をふまへて、[illegible]に[illegible]ある[illegible]に目を[illegible]、[illegible]の前を[illegible]こされしかば、
[illegible]を[illegible]、[illegible]の年[illegible]、[illegible]けれは、[illegible]の[illegible]へかへり
給ふ[illegible]、[illegible]に[illegible]、[illegible]たるにて、[illegible]人[illegible]、
[illegible]用ゐるに見らりと、ついに[illegible]の心[illegible]、[illegible]に執り、[illegible]はものかは、
[illegible]に楽しみ[illegible]、更に鎌倉[illegible]ふせ[illegible]けるを、然るに[illegible]の[illegible]
見、周章て[illegible]、[illegible]のには、[illegible]に見べきのしに、[illegible]
さまりてはじめて陣中を見るに、忽ち数百[illegible]の兵[illegible]現はれ、[illegible]にしたる[illegible]に
是れ鎌倉の[illegible]、[illegible]を防戦[illegible]、いふ[illegible]に、[illegible]に
うち鳴らし、[illegible]の表門[illegible]とするに、[illegible]
酒いまだ醒めず、[illegible]を[illegible]、[illegible]は[illegible]、[illegible]

る馬をひけ〳〵」と、高聲によばはるといへども、誰ありて出會ふものなし。重廣しきりに氣をあせり、「五郎重綱はなきや、頑八は何國へ行きし。」とよべど叫べど、更に城内ひそまりかへつて音もなきは、早鎌倉の打手と聞き、落ちうせしものなりければ、雲平は齒がみをなし、如何にせんとしたる折しも、弟五郎は深手數ヶ所を負ひつゝ、體にたてる箭は蓑のごとく、朱に染みて刀を杖に突きたてつつ、よろめきながら立ちかへり、兄重廣にむかひ、「鎌倉の打手後の山の後門にもまはり、此の城を十重二十重にとりまきたれば、遁れんに道なし、疾く〳〵生害し給へ。」といふに、重廣は無念に思へど爲術なく、亂菊の前を只一刀にさしとほし、「今は是れまでなり。」と刀を逆手にとり直し、左手の脇腹へぐさと突き立つるよと思ひしが、はじめて夢の覺めたるごとく、心付きて四下を見れば、いままで吾が城郭と見えしは、外川浦の濱邊なる、磯馴松の木陰に、茫然として坐しゐたり。這は淺ましと吾が姿をかへり見れば、髮おどろにみだれて薄尾花の如し。さしも淸らなる衣裳は裂けちぎれ土にけがれて、見るもなか〳〵いぶせきさまなるにぞ、呆れ惑ふこと大方ならず。ふたゝび瞳を定めて倩く見れば、今吾が手にかけしと思ひし亂菊の前と見しも、鳥おどし案山子にて、あたりにありあふ調度も、金銀珠玉をちりばめたるとおもひしに、さはなくして苔むして、或は端の缺け損じたる履器の類にして、皆是れ塵塚より持て來つる物とおぼしきに、益〻呆れはてゝ、何の所爲なる事をわきまへし

らず、詮方なければ空しく止み、足にまかせて心あてに、岩窟の方に行くに、乙左衛門秋八の輩十余人、ここの松林の中の岩間に彷徨ひ疲れたるなり。何れも皆衣服も引裂かれ、顔も泥にまみれたりて、浅ましきこと限りなし。雲平は是れを見て、愈々慌てふためき、呼びさますに、執達官八等に漸くの事にて人心地つきて、胡乱なるあたりを見まはし、雲平が姿を見、かつ吾が輩の有様を見て、驚くことおほかたならず。ひたと呆れて言葉なく、当時雲平人々に向ひていへるは、「始め官職をわれ昔に官職をさづけられ、年頃日の恩を受け、微衷をたてまつりたるに、乱賊の潮を鎮ふべき勅命にて、遥の外川浦へ策を定め、此の年月の栄耀も、今更思へば皆山に在る狸の術に惑はされしとおぼしく、われ吾も又頗る神通を得たる身の、ゆめゆめ野干の為に、誑かされしこそ不審しけれ」と、暫く思案せしが、良あつて、横手をはたと拍ち、「吾が常に行ふ所の幻術は、霊芝仙人の秘訣にして、己の日一日のみ法術をほどこし難し。倩く思へば今日は官使の剣のしは己の日なる、老狐よくこれを知りて、吾をたぶらかせしものなるべし。しからば人には此の年月、許多の日日を費さしと思ひしも、実は僅か四五箇日を過ぐしたるなり。彼の蘆原に伏せる間の出来事なるべし」と、左十郎の言を夢見たりしには引きかへて、重広ほどの武士が、畜生の為にあざむかれ、年頃ひの栄をとりかへされしこそ、返す返すも口惜しけれと、歯を噛みて嘆くといへども詮方なく、歯も畏こく倒れ伏

しゐたる、小賊等をよびさますに、其の勢百騎にはすぎず。殘る數百の小賊等は、海へや沈められけん、又何所へ往きたりや、かいくれ見えず。斯くて雲平は重綱頑八等と共に、吾が岩窟へいたりて見るに、さしも結構に建てつらねたる岩窟は、獸の足蹟に穢れ、紙門障子のたゞひは、喰ひ裂きたりと見えて、見るも鬱悒き光景なるにぞ、是れも又彼の老狐が所爲なるべしと、口惜しき事いふべうもあらねど、今更に爲方なく、殘兵をあつめて尙爰に住みぬ。

第八齣　餌レ金釣二美人一

却說賀副四郎吉香は、蘭葉共侶仲睦まじく暮し居たるに、吉香不圖風の心地とうち臥せしが、次第に病重りけるに、日々の藥の代朝夕の煙に、如何はせんと蘭葉は心をいため、何とぞ夫の病本服するやうにと、長谷の觀世音へ祈誓をかけ、日毎に步みをはこびける。爰にまた雲平が弟五郎重綱は、此の程より鎌倉に來り、退糧の姿に窶し、編笠を深くし遠近を徘徊して、金銀を貯蓄ふる家の[illegible]蹊を窺ひおき、忍びこみて強奪すること數をしらず。されば何の活業もなく、有德に暮しけるが、或日長谷の觀音へ參詣せしに、頃しも彌生の半ばにして、鎌倉山の八重九重、咲きもそろはず散りもはじめぬ風景譬へんにものなく、重綱は殆ど興にいり、そこよ爰よと打眺め、稍て石坂を登り舞臺に至るに、

こゝに莚を敷きならべ茶を煎じ、参詣の人々を待つ老婆あり。この老婆が傍に、一個の遠目鏡を立て置け[illegible]
[illegible]人に售して、茶をきつする[illegible]へんとす。車鋼も彼の老婆が店の床几に腰をかけ、一
個の澁茶を乞ひうけて、四方の風景をながめつゝ、不圖遠目鏡を覗きけるに、是はいと興ある業なりと
と、近江より遠目鏡を覗くに、眼下に見ゆる八幡宮の鳥居より、雪の下の町かけて、鎌倉中の家々町々、
七里が濱浦引する漁師が有様まで、手にとる如く見ゆるにぞ、車鋼は猶も興に入り、目もはなさずに見
たるに、忽見向ふの方より[illegible]来る、一個の若き女あり。年齢は二十路あまりと覚しく、[illegible]家の妻
とおぼしく、[illegible]したる針目衣を只一重着て、髪もいつとなく[illegible]、[illegible]
こ[illegible]なる面色にて、こゝまで来れども、[illegible]
西海流ける娘氏、平家の末を帯びたるに異ならず、元来色好みの[illegible]、車鋼[illegible]
一見わなゝく、鎌倉山に咲き乱れたる、八重九重の桜も物かは、今日の花見に来たる者の、[illegible]
めをさしつ、去るにても何處の人にて何處へか行くならん、問はまほしと[illegible]
の老婆に打笑ひ、遠目鏡もて見給へ[illegible]、近く見ひ給ふに[illegible]人を
問はんと、其處をいでたらんには、はや人は何處へか[illegible]、よしなき事に[illegible]
浅茅が原に居たるに、車鋼も、一言にも[illegible]、既に帰路に赴かんとする折柄、[illegible]

五郎は這の人を見るに豈計らんや、今遠目鏡にて眷戀せし美人にてありければ、重綱はよろこぶ事斜ならず、近づくまゝによく〳〵見るに、目鏡にて見たるより近まさりして、其の美麗しき事いはんかたなし。這の女は何者にやいふに、是れ別人にあらず吉香が妻の園葉なり。園葉はやがて石坂を登り觀世音の靈前に額づきて、暫時が間念じ終り、茶屋の老婆に最懇に挨拶して、又靜かに石坂を下り歸りぬ。重綱は後影の見ゆるまで見送り、茫然として居たりけるが、吻と吐息つきていへらく、「老婆はかねてより知己とおぼしきが、吾儕が今日目鏡にて見たる、美人といふは彼の女なり。怎生渠は何處奈何なる人の妻なるにや、縁故を詳に語り給はれかし。這は餘りに輕微にはべれど、今日の茶價に受けをさめ給へ。」と、ちとの朱提をとり出し、紙にひねりて與ふるに、老婆は忽ち滿面に笑みを含み、疎なる歯をあらはして呵々と笑ひ「相公何と思し給ひて、所縁もなき老婆に、斯く多くの朱提を惠み給ふにや、宣ふごとく今の婦女は、老婆が同じ郷に住める、實副何がしとかいふ進糧の妻なるが、頃日其の夫病におかされて打臥しあれば、夫の病氣全快を祈らんとて、日毎に這の觀音へ詣ではべるなり。」と、聞いて重綱は再び老婆に打向ひ「緒倉主には似たれども、奈何なる因果にや今の女を見て荐りに煩惱の犬追へども去らず、老婆よろしく吾が爲に、冰人をなして給はらば、生涯その恩をわするまじ。」と、聽いて老婆は眉を顰め「こは易き事に似て易きことならじ。夫なきものならば、い

[illegible]

表向、裏[illegible]住居の身貧な[illegible]婦、黄金だに多くいだし給はば、縁ならぬまでも語らうて見はべりなん」

地獄の沙汰も金とやらん。其の代りには縁ならば、老婆には一廉の骨折代を給はらんや。」と、慾気は微塵もなき歯をあらはし、呵々と打笑へば、重綱も打微笑み、「そは[illegible]ふまでに侍るべき、道の戀だに叶ひなば、吾が貯へもてるだけの黄金を盡して、老婆をねぎらひ侍りてん。志のおよばんほどに、かたらひ見て給はれかし。」と、切に頼み聞え、その日はわかれて還りけり。抑道の茶店の老婆は、諢名は熊鷹老婆とよばれて、最慾深き性なれば、道ならぬとしりながら、重綱が頼みを承諾ひて、平生には音信することもなき、吉香が許に至れば、折しも蘭葉は薬を煎じ居たりしが、兼て心よからぬ熊鷹が来りしは、いかさま事にはあらじかし、疾くいねかしと思ふにぞ、物をもいはず居たりしかば、熊鷹はつ[illegible]れと、元来かかる鐵面皮の老婆なれば、これを縁ともせず、「蘭葉刀自よ日頃から、訪ひ侍りたくは思へども、兎に角に活業のいそがしく、近郷には居はべれど、心におもふのみにして、

今日まではおこたれり、ゆるしてたびね」と言ひかけて、上りがまちに尻かくるにぞ、蘭葉はこれを歡ばねどいなともいはれず、「いかでさる事のはべるべき、其處は餘りに端近し、こなたへ上がり給へかし」と、いひつゝ煙草吸付けて、出す朱羅宇の長煙管、長き夫の病氣に、窶れもはてたる痩世帶、胸の煙も朝夕の、煙とともにほそ〴〵と、あらはれわたる貧家の體、熊鷹も營に聲をひそめ、「實に貞女とやらん賢女とやらんいふ女、物の本にては見はべりしかど、たゞ遠き唐土や、見ぬ昔の事とのみ思ひしに、目前にある蘭葉御寮、御身ごとき貞女あらじ、夫の永の病の看病といひ、日毎に觀世音へ足をはこび給ふ信心といひ、其の精力のみにても、心快くなり給ふべきなれども、時節が來らねば今快はなり給はじ、さはれ神や佛もいかでかこれを餘所に見給ふべき。日ならずして全快し給ふべし、必ずよく〳〵と思ひて、共に病み給はゞ、誰か看病する者あらんや。よく〳〵心をつけて、身を大切に持ち給へ」と、平生にかはりて懇の詞に、蘭葉不審しけれども、只よき程に應へして、疾く歸れかし去ねかしと、思へど歸るけしきもなく、徐々上りて傍へより、「坐して喰らへば山も空しとやらん、斯く夫婦して何の活業もなく、安閑として居給はゞ、終には饑に望むべし。人の施を頭痛とやらん、いらざる世話な事ながら、そこが隣家の實心、案じ過しも老の癖、必ず惡しくな聞き給ひそ。吾儕平生に御事の眞心の痛はしさに、何かな力とも思へども、吾儕とても貧しき身の、如何ともせんすべ

なく、心にあるもこのみなり。今日聞にても我との縁を断ち用て、何これを君に給ふべきや否や、といふに、翁は聞いて、我黒白も無きをいふ哉、よきことにはあらじと思ひながら、いかなりもいはれず。ことは奈何なることはしりはべらねど、恵み深く聞かせ給へかし、其の[illegible]も南无」と應へければ、熊谷若者は前世に、しか八寸ほど、いひたれば、心中に笑みを含みつゝ、金鼓を鳴うしていふやう、「上下の者ある人に解する斯をいふは道ならねど、近うは我の[illegible]となん、直に笠を捨てて清盛に、受けしものならん、斯く孫次の[illegible]るに、[illegible]などさして、真なるものかといはさらんや、それとことは違へども、[illegible]の人道を五冊目、何のにのくがれ千々の黄金にかへても[illegible]にかゝへまつりしといふ人なり。[illegible]には、香川竹の流れに流れ、夜毎[illegible]に[illegible]をなす[illegible]、[illegible]しき[illegible]。これは[illegible]職しからぬ、武家なれば恥かしからむと[illegible]これを表引きで[illegible]ば、[illegible]の身の[illegible]老婆が身の[illegible]ひたり、[illegible]心を[illegible]給へこと、[illegible]は、[illegible]香に聞えなば、[illegible]ひなりと、[illegible]し、病人に聞かせまいと[illegible]心[illegible]、[illegible]の[illegible]しつゝ、耳もとにて、いはるゝつらき[illegible]だたしず、幽霊はとかうの[illegible]もせず、[illegible]として[illegible]たりしが、[illegible]しめされて、やう[illegible]ていい

へりけるは、吉香ぬしも妾ゆゑには、千般萬般の苦勞をし給ひ、妾もまた吉香ぬしゆゑには種々の艱難を經て、斯く貧しくとも夫婦共倡に、暮すを樂しみに、たがひに憂苦をかたりあひて、それをせめての心やりとするに、假令潘安宋玉は物かは、源氏の君か業平のごとき好き男子、又黄金白銀を多く貯へ給ふ人にもせよ、いかでか小夜の衣を重ぬべき。さる由なき事は、再び言ひ出で給はるな。」と、最はら立たしげなる面色にて、せはしくあふぐ七輪に、胸の炎と共倡に、沸き返りたる藥鍋、蓋はとれどもそれごとは、明けていはれぬ心の中、案に相違の熊鷹老婆、胸の工みの齟齬へば面膨らしつゝ、「吾儕は吾儕と思ひて、飢死されんが可憐しさに、福を與へんとする福の神の心を違背くは、窮鬼の守らせ給ふ故なるべし。最笑止なる事なりかし。」と、喃々喋々つぶやき立ち歸りぬ。吉香は熊鷹が來りし始めより、寐入りたる面色にて居たりしが、薗葉が貞心を感激し打咳けば、薗葉は夫が目さめたりと見てければ、藥を茶椀にうつしいれ、病牀へもて來り夫にむかひ「藥は最前煎じあがりしかど、餘りに快く寐入りたまひたれば、起しまゐらせんも心なしと、それがまゝに打捨て置ければ、はや少し醒めたらんが、熱きも却つて呑みにくけれ、先づこゝろみに一口飲んで見給へ。」と、いと信々しくいふ顏を、吉香は熟々打眺め、誰有らん領家卿の御内にて、人も知つたる安達藤九郎盛長ぬしの出頭たる、鳴戸橘内どのゝ妹ともいはれし身の、よしなき這の身に繋がれて、這の年月の艱

輝きて、たれを讀むともおもはずなりし、彼しきやうに此の時よりぞ、昔時の譽れ中にはいがたし。以て能する心ならつる、師匠を寄り申しより、法どいかぞることにいふと、故意に音入りしさまにもでたる時ければ、是に恐れて間をすゝめて、更にこれをいふし、何にも彼を存じ備へよ、やとは思へども、簡貫に他人をよせ、其嗜には更に讀み、されれば、此の事を讀りばやと、衛もなく知りし事らに、聞いてはじめて嘆き、威し讀まるる時ゆゑ、こゝろがけるなる彼の身を、ませしに思うてくれよ、音を説らぬ事とは知ぞで、且の所業に醒しければ、相談もこともなき理ず、況んや宗家の流の時、おそくとも下るべくとも恩はれず、心許無く見ゆればなし、術の人すらが所業にかへ、ましく、音にこそといふぞう、これは、わざと知らずしてそれの皆伸なれば、片ずるる他をして國の名を下、いふ迄もなくなる時にて、此の受害にはあらねど、云ひ行つて、説明のことなし、謹慎にこれを聞かもおへず、[illegible]は言ひ平常にを日を論ふものなし、よしや音は違法にありて、[illegible]繼はるゝとも、その新しきにいふべきや、いのたる[illegible]けて聞にかくる、[illegible]令いふにはふとて、體身を捨てまゐらせて、[illegible]

快くなしまゐらすべきに、必ず〳〵これらの事を心とせず、はやく全快し給ふやう、心をうき〳〵と持ち給へ」と、いさむる詞に吉香もいとゞ、其の誠心に感じける。

流轉數回　阿古義物語後編卷之四　終

後編　巻之五

第九齣　貞婦沈河化

其葉は吉香が違へ、賺をよせて、其代いふやう、[illegible]上[illegible]染めて[illegible]のこの[illegible]た、[illegible]の[illegible]ん のぎ、今宵[illegible]となり、朝夕一つになりし得れば、假令いかなる貧苦も、[illegible]はせ、[illegible]の[illegible]に[illegible]には、[illegible]高き[illegible]を用ゐずば、いかでか[illegible]する事はあらじ。[illegible]て今の老婆がいひをしへし、由緒しれざる浮浪人の、嬖妾とならんは最口惜しからずや。よりて猶思ふに、妾はこれまで幾度か、盗賊の手に落ち入り、遊女とならんとせしかど、僥倖にしてその危難を遁れたれど、親夫のために煙花の流れに沈むは、世になき例にもあらねば、妾大磯の化粧坂の長が許へ身を賣り、その典身錢を以て、儞が今の貧苦を助け、價の高き藥を選ばず用ゐんには、遠からず本復し給はんか、枉げて這の辭をゆるし給へかし。」といふに、吉香は尚も頭を打掉りて、「否々是れまで吾儕と別れたる時だにも、郭の勤めをせざりしを、如何に吾病に臥せばとて、儞を川竹の流れにたたせては、過ぎ去り給ひし[illegible]内[illegible]、世に在す家世君へ對して面なき[illegible]し。縱令此の儘死するとも、死生は天の命にして、草根木皮のあづかる時にあらず、只打捨ておかれかし。」と、[illegible]雨の如くなるに、

蘭葉は夫が詞を聞き、枕邊にありし腰刀とるよりはやく拔きはなし、既に咽へ突き立てんとする體に、吉香は慌忙きながら其の手に縋り「是は狂氣ばしゝたるにや、何故の生害ぞ」と、止むる夫の顏ながめ「何故とは胴慾な、三千世界に目の前で、夫の病の旦夕に、迫るを其の儘打捨て、知らぬ顏してゐる女子が、列女傳といふ書籍に、あるかはしらず侍らねど、這の日本にはたえてなかりき。存命へて苦に苦を重ね、憂き日を見んよりいさぎよく、死して清き誠心を表はし侍らんに、放して殺して給はれ」と、いふに吉香はなほ放さず「什麼そなたの詞にまかせ、勤めをゆるすべければ、死をとゞまり大磯へゆきて、吾儕が今の病苦を救ひくれなば、生涯その恩澤をばわするまじ」と、聞いて蘭葉は漸うと、白刃をさやにをさむれば、吉香は稍て文書したゝめて、大磯のほとりなる、知己の方へ音信れ、蘭葉を郭へ傳らんことをかたらひけるに、從來美麗しき生まれなれば、忽ちふみの返しに大磯なる、舞鶴屋とかよべる長が許へ、典身百金にて售られけれど、彼の口入したる者、心よからぬ者にて、吉香が方へは其の半ばを與へて、己其の半ばの金を掠めとりしとぞ。これも克く聞くに、愚六が類の破落戸にして、雲平の部下の小賊なりしとぞ。斯くて吉香は五十金にて、名だたる醫師をたねき、藥を飮ませ藥を求めて服しければ、貞婦が眞心を神の憐ませ給ひしにや、又は藥のよはしにや、日を經るにしたがひて、只薄紙をへがすが如く、次第に快くなり行きて、今にはや元のごとく、精

合ひ扶けず、左右は[illegible]一つの[illegible]しき[illegible]
て、置酒を手にかけし後は、其の名に繋ぐべき才色両全の技なかりしかば、暫く[illegible]
ことなれ、道の[illegible]葉が[illegible]しきといひ、やつ其の時節に[illegible]にまので、大[illegible]
高[illegible]し、[illegible]代の[illegible]名妓の絶[illegible]本[illegible]にて、[illegible]を[illegible]国[illegible]処[illegible]しければ、[illegible]
[illegible]上[illegible]もの[illegible]其の端に、故郷近き大磯の宿にて、遊女となるを[illegible]るに、兄の手にかけ[illegible]
の名をうたひ[illegible]、心にかゝらぬ日なき、[illegible]に宿世の約束なりけるぞ、[illegible]のことな[illegible]
[illegible]ば[illegible]其の日[illegible]
[illegible]日に[illegible]愛[illegible]の顔[illegible]た、其の妓[illegible]の[illegible]もの[illegible]程に[illegible]郎は、
[illegible]を[illegible]とは[illegible]ねし[illegible]、いかなる[illegible]と、[illegible]
好みの往にければ、一々大磯へいれて見るに、兄[illegible]の[illegible]にて、わが[illegible]
であり[illegible]ければ、斜ならず悦び、頓に[illegible]にいふ[illegible]黄金[illegible]
[illegible]六の[illegible]は五郎[illegible]となく[illegible]思[illegible]見て、[illegible]かたならず、[illegible]
[illegible]を遊へ[illegible]り[illegible]、[illegible]
れば、更に心もとなけれ共、その夜は空しくかへしければ、五郎重綱はいよいよ思ひに絶えかね、しき

りにかよひて黄金を湯水のごとくつかひすてければ、雜戸の者は山吹大盡ともてはやして、吾が佛と尊みける。却說吉香は、病も全く愈えければ、久々にて蘭葉に逢はばやと、編笠に顏隱し、大磯にいたり密かに客となりて、蘭葉に對面し、よろこぶことかぎりなく、其の夜はいとしめやかにかたらひける。其の後も數度愛壽が方へ通ひけるほどに、從來させる活業もなき吉香なれば、忽ち貯禄盡きて、愛壽が許へ行く事かなはず、清う密かに格子にて、低言き歸るのみなりけれど、たれこへ後々には長が耳にいりて、堅く戒められければ、今は互に顏見ることさへ叶はず、吉香は鬱々として樂しまず、人にものをしふる事も懶く、只衣引きかづきて打臥し、其の薄命を歎じける。爰に口外より吉香が家の邊に立つて、往來の人の人相手理を看て、其の身の上の吉凶を斷る、一個の賣卜先生あり。何處の人にして何方に居をトむるや、只日毎に來り、暮れに及びて歸るのみなり。されどトをこひあるひは觀相をこふものは、彼の人のいふ所神の如く、響の物に應ずるがごとしとて、市をなして歸る者多し。されど吉香は書を讀み、易道をば畧しるといへど、斯かることを信ぜざれば、心にもかけずゐたりしが、一日俄に村雨ふりきたりて、往來の人も東西南北へ走りければ、彼の賣卜先生もいそがはしく、吉香が軒の下に入りて、雨を避けてゐたるにぞ、吉香は氣の毒におもひ「暫しこなたへ入り給ひて、憩ひ給へ」と懇にいふに、卜者は「忝し」と應へて、上り口に尻かけて、扨吉香が行

主の道すがらいふ。「主人には心地よしと見え給ふから、薬にても用ゐ給ふにや」と問はれて、吉香は、「これは仁義、禮に智信の程りの氣禮にや、かへすがへす思ひ氣結ばれて、胸苦しく侍る」といへば、下僕は聞きて吉香が顔を左見右見て、「今の俗物の病根を克くしれり、古く氣欝の相せるにもありなん」と微笑みて、「謹思遣も未だしからず、千山万山に遣はれたる心も、それ心吾我を見、其の方を知れとこそ、かの名ぞ欲しかは取りたて、此の世の中にて徳やらん時を下におき、この文字を手にかへに、一同の上欲いかなる事か出来るぞと、心中に思ひながら、前へ見れば一人の、すすれば、吉香は[illegible]にあらずして、前を掲げして[illegible]、ぬ、主人の為には給ふ事なかれ、吾道の病を癒さんことに、早く小さき石を持ちて[illegible]といふに、吉香は意中の機密を言ひあてられし事なれば、彼の翁がいふがままに、庭の隅より小石一つ二つをもち来れば、彼の翁「これなり」とて、懐中より一箇の黒く光れる石を取り出し、何やら口の中に呪文を唱へ、黒き石を以て彼の吉香の拾ひ来れる石を、三度撫でると見えしが、これは不思議や忽地見るみる黄金となりければ、貴下は是れを吉香に贈り、「早くこれを市に持ち行き、両金に代へなば数十金を得べし」と其の家にて聖人の許へ往き給ひて[illegible]一錠の品。吉香は夢の心地にて、彼の翁のかたよりの市町に持ち行き、恐るおそる黄金に替へたり

望みなれば、知る人ありて、これは金の無垢なれば」とて、五十金にかへけるにぞ、恰も拾ひたるな
らず、足も空に大磯へいたり、古きおびめあつてゝのひなどして、亦久々にて愛妻に逢ひ、貴卜翁の事
を語り、奇異の思ひをなしぬ。斯くて夜明けければ、吉香は家にかへり、さるにても不思議の福もあ
るものかなと、右さま左さま案じ居たる所へ、籬を押しあけて入り来る人あり。吉香は誰ぞと見れ
ば、徒弟となりて在りけるが、這は物音に驚きて、首を擧げて其の人を見るに、是れ賢人なりし年月
吉香に金をとらへて遣瀬なし、貴卜の賢人なりければ、吉香は頓に賢人を上座に招じ、貴に昔の恩
に、絶えて久しき僑人に逢ひて、歡びこの上なし」と、低頭平身して其の恩を謝す。賢人は敢てこ
れに答へず、心にかゝる行様もなく、只常の如く、衙門の邊に立ちて、卜を賣る事昨日に變らず。斯く
て久に及びて立ち歸らんとする樣に、吉香はひとの酒肴をとゝのへて、賢人を招きいれて、酒をすゝ
めるに、賢人も始めの程は固辭みしかど、歡待はれて清う酒を呑み、曝く盃を重ねて醉ひぬ。吉香
は愛妻が風情にひかれ、聴をとしてこれを禁じがたく、其の妻も丈夫識にいたれり。愛若頻に入りて
私語こまやかなり。義母常にして左へば由も無しとやらん、雑といふ言葉もなく、我は同情に文案へ
通ひつめ、宝平五郎に賭り合ひて、愛籍を買ふ程に、彼の五十金は忽ちに、鼬に消ゆる霜のごとく、
旬日をいでずして、一錢もなくなりければ、吉香又彼の卜者を訪うて、其の謂をたづね、「今五十金を

いと才覺なり、珠はわれかしこといふに、異人は迷惑げに見えけれど、殊勝なる面色にて、黒にはとう言
ことありけるに、又日外のほどの小石を拾ひきたり給へ」といふに、吉賀その心を得て、ふところより
たりいだすを見るに、小石を拾ひ來たれり。異人はまた懐より、例の黒き光る石を取りいでて、小石
を入口の沓脱なる石の上にのせて、上より右の黒石にて、暫しさすると見えしが、又たちまちに
黄金になりぬ。傳へ聞く、北國には、化石溪といへる所ありて、何にても此の處に置けば、石と
なると聞けど、又何の金になるといへる事、異國にも聞きたることなけれど、目前この不思議を見
て、益々驚き懇ろに禮を述べて、直ちに市に行き、又黄金を[illegible]に、一[illegible]の如く大いに
喜び急ぎ行きけるに、またも其の金も又用ゐつくしければ、又異人に逢はんと、異人[illegible]
目前のことせんとて、五十金を[illegible]に、二度の[illegible]
こゝ大いに陰德を損ずるのみ、ただこの外に行ひなれしといへど、吾余りに[illegible]
のために、一度ならず三度まで施して、既に百五十金を[illegible]
とも、[illegible]その時居を恨み給ひて、[illegible]再び[illegible]れども、吉賀[illegible]
あらねば、何が[illegible]はいかに鐵面皮なればとて、[illegible]縁なき[illegible]に對して、恩ふたたび金を求むる、[illegible]
くはつまでかはるべき、且は誓つて斷ることをいふなり」と、五十金を出して、これも[illegible]

壽がもとへ入りあけぬ。吉香從來武事には疎く、太刀拔く技をばよくせずといへど、頗る文學をばあきらめぬ。聖人の書を讀み仁義の道をわきまふれば、いかに愛壽が愛におほるゝとも、斯くまでに放蕩けたるおこなひはあるまじきに、肝心の復讎の事も忘れ、日毎夜毎に遊里にあそび、色と酒とに酣後をわきまへぬは、菖蒲が兄たる橘内が手にかけし、先の愛壽が怨恨執念、深くも青葉が吾が名を纏ぎしによつて、吉香と兩個が胸間にいりて、戀慕の情をおこさするものか、いとあやしむべし。爰に又五郎重綱の山吹太夫は、雨の降る夜もいとひなく、頻りに通へどいつも吉香が來り居れば、空しく獨り夜を明し歸るのみにして、つひに一度も實の情にあづかる事なかりければ、いよいよ怒り身をあがなひて、下總へ連れかへらんと、長が許へ斯くと相談すると、聞くより愛壽はあるにもあられず、頓に這の由を文にしたゝめて、吉香が許へ送りければ、吉香はとる手も遲しと開き見るに「君もかねて知らせ給ふ山吹太夫、妾が心に從はぬを怒り、身を購ひて故郷へ誘ふよし、とてもかくても君にわかれなるならせては、所詮存命へある心はなし。何はともあれ疾く疾く來り給へ」と書いたるにぞ、吉香は慌忙き、密に大磯へ來り、愛壽に對面するに、愛壽は彼の山吹太夫が、身受せんといふ一條の物語して、いかゞはすべきことといふに、吉香も兎角の答へなく、默然としてゐたりしが、漸う顏をあげていへらく、一體に何にもきこえつる如く、吾一錢の貯へもなかりしが、不圖吾が家の傍に

皆[illegible]して、卜を賣る世人の幻術によつて、[illegible]多くの黄金を[illegible]て、[illegible]
[illegible]有り。[illegible]外世人が國に、[illegible]道の遺[illegible]りにて、[illegible]の面[illegible]をいへれど、[illegible]
聞に[illegible]して、[illegible]、一兩箇日を[illegible]、[illegible]
の由を語り、[illegible]

「儞は聖賢の書を讀み、畧仁義を辨へたらん人と思ひしに、左はなくして漫なる辭をいふものかな。我が施す所の術は、黄初平か石をうつて羊とするが如き、一旦人の眼をくらます幻術ならねば、人の爲に益あるに似て、また害をなす事もあり。されば太上老君、みだりに這の術を行ふ事を戒め給ふといへども、儞が餘りにいたはしさに、三遍までこれをほどこせしに、又もや一三百金といふ大金を調へよ。」なとは思ひもよらず。」と、更に承引く行雑なきに、吉香は心中大きにもだえ苦しみ、いかにもして三百金をとゝのへ、藺薬を身儘にせざる時は、床世の刀白平二夫婦へ對して言譯なしと、心もそゞろなる折柄なれば、這奴をしゐて術をほどこさゞると覺えたり。おどしてくれんと傍なる刀を引寄せ、「汝呑が家のほとりに在つて、毎日の渡世をしながら、かばかりの術を施すを惜しむこそ奇怪なれ、いまゝ術をほどこさじとならば、目にもの見せてくれんず。」と、白刃を拔いて切りつくれば、異人が容は消[illegible]うせて、軒に訪ふ[illegible]の[illegible]にして、目にさへぎるものなし。吉[illegible]はひたとあきれ、實に

彼の異人は謫仙の類か、吾慾にまなこ晦みて、かりにも斯かる尊き人を、殺さんとまでしたる鈍ましさよ」と、頻りに後悔すれども爲術なし。さりとて調へざればならぬ金なれば、兎も角もせばやと、次の日未明より家をいでて、其處よ這處よと吟行ひありきて、金をとゝのへんともとむれども、更に一錢だにも得ず。奈何はせんと長谷の觀音の、門前まで來にける頃、日は西の山の端に傾かんとして、人の影の細く長く見ゆるに、不圖傍所を見れば、彼の異人がもたりし黒く光る石落ちてあり。吉香は豫て見覺えある石なれば、怡び拾ひあげて見るに、まがふかたなき彼の石にてありければ、天へも登る心地して、足を漫に家に歸り、手ごろの石をもち來りて石盤の上へのせ、彼の黒石にて力にまかせてこすれども、黄金はおろか銅にもならず、こは呪文をしらざればなるべしと、さまざまにすれど其の甲斐なし。されど今更捨てんも本意なしと、深く秘めおきけり。斯くてその夜さり更闌けて、ほとほと門の戸をたゝく者あり、吉香は起き出でて、「何方よりぞ」といふに、「常に門邊に彳める卜者なり、こゝあけて給はれかし。一言かたらふべき事ありて來れり」といふ。吉香心中に、「さては這奴、大切なる石をおとしたれば、其れを取りかへしに來りたるなるべし」と大きに怡び、頓に門の戸を引きあくれば、異人は内に入り吉香にむかひ、「昨日は金を調へん事をいなみしかど、爾もなくてかなはぬ金ならんに、二百金の半ばをとゝのへてまゐらすべきほどに、何卒長谷の觀音まへにて、拾ひし石

をさへ見拔はれなし、働が方にありしとて、肝心の變ずる祕文をしらざれば詮なしといふに、賢者はこれを聞きて「尤にさもある事なり、さりながら百兩千金を費すとも、天に賭はるまじ、如何にも其の黒石をは還らすべしといふに、異人も悦び「然らば例の如くに、小石を拾ひ來り玉へ」と教ふるに、賢者はその心を得て、手頃なる石を搜し求めて持ち來れば、異人はこれを石盤の上に置きて、賢者に與へたる呪符をもて、口の中に呪文を唱へながら、其の石をこすりけるに、不思議や小石はまた黄金とぞなりけり。異人は賢者に向ひて言ひけるやう、「是見よ、石塊をこすりしかば、石塊は黄金に化せる黄金となりけるにぞ、異人はこの體態を見てはなはだ後悔し「我等つて大切の石を、失ひしはあるまじき事なり」と、またふかく吐息の半分をとりのこし、それにも増して金を出しゐたるこれなる石塊を黄金にとしたれば、今更に惜しと、御身これを市に持ち行き玉はゞ、幾萬金といふ事しるべからず、その金にて望みのごとく、愛樂のかぎりをつくし、何れも金を以て一萬人に施しなし給はゞ、其の善根にて御夫婦はいふも更なり、一族悉く富貴の身となるべし。今は何をか包むべき、我は無爲界のものなるが、いさゝかの罪によつて、大上老君のとがめをかうむり、此の下界に謫せられたりしものなれば、一個の功なるときは、原の仙界へかへるなり。返すがへすも一萬人に、施しを忘れ給ふな」と言ひ了つて、瓢を杖として其の座をたちて去りけるにぞ、賢者は懺悔後悔して、頭をも

吉凶を問はんとするに、異人は首を打掉りて「否々詳かに説かんは、天機を漏らすのおそれあり、後自ら知るべし。」とて、袖を拂つて去りぬ。吉香は異人の教へにしたがひ、彼の石盤を市に持ち行きしに、案にたがはず若干の黄金になりければ、歡ぶ事限りなく、頓に大儀へ到り、長が望みの如く、愛壽が典身をあたへて身をあがなひ、朋輩の遊女へもそれ／＼に物をおくり、直に轎に打乘せて、八丁堤にさしかゝるにぞ、並木の松の小陰より、山吹大盡の宗平五郎、部下の破落戸四五個をしたがへ顯はれ出で「貧乏神の髑首と思ひし、痩浪人の實副四郎とやらん、いかゞして俄に金持となりしぞ心得ね。察する所這奴盜賊をはたらきしなるべし。今這の處においてすみやかに、愛壽を遞與し縛めをうけよ。」と、呼ばはりつゝ斬つてかゝるに、吉香は爲術なく是れと渡り合ひ、二打三打鬪ひしが、寡は衆に敵せざるの諺、いかでか非力の吉香にさゝへらるべきや。既にあやふく見えたる所へ、一個の武士走り來り、這の體を見るより、無二無三に刀を閃かして、重綱にきつてかゝるに、吉香もこれに力を得て、踏み込み／＼たゝかひければ、さしもの重綱あしらひかね、逃げんとして松根につまづき、倒るゝ所をたゝみかけて、切り倒しけるにぞ、其の餘の破落戸は、皆散り／＼に逃げ失せぬ。這の時はじめて加勢をなしたる人を見るに、是れ別人にあらず阿濃平二にてありければ、互によろこぶ事大かたならず。當下平二は吉香にむかひ「存の外より假初の病にて、久しく備が許へも至ら

額へ従、吉が家をいでて御の許へいたらんとする道すがら、一個の悪人にあへりしに、悪人吾に教ふるは、今夜吉香は不慮き事にて、許多の黄金を得て、陸奥守を訪はんとて大磯へ往けり。汝之をら途中にて追剥に逢ふべし、汝早く大磯へ趣きて、吉香を補助すべしといふに、我れ中途に捗疑ひながら来りしに、案に違はず途に彼奴等の体なるに、一人の曲者にあまさず、力をそへ敵を討ちとめたり。然るに最前の悪人は何人にして、是等の始末を詳にしれるにや、と疑念はれるなりける。こゝにおいて吉香は、始めの悪人が高聴を語りて、不慮く今日の金子を[illegible]ことよりして、山吹大盡の事なんど、詞はしく物語るに、平三五郎に非道の異心をおもひし事、平ひ吉香に向ひ、斯の山吹大盡とやらん、素性しれざる浪人ながら、今日あなさにこれを救しくれしは、要合演むる事まで、はやく聞知したるを語りて、財への子細をのへ、[illegible]いふに、吉香も尤もと園業諸共、是を志さんとする折から、木陰よりあらはれいづる人あり。二個はりは代官所の打手ならんと、身がまへひするに、左はなくして是れ一個の法師、若き衣を纏したるがりければ、少し心おちゐる。已に其の人を見るに、[illegible]を纏へて久しき、[illegible]の翁にてありければ、三国[illegible]とあきれ、且つ其の無事を祝しけるに、賢兵衛法師[illegible]は、[illegible]をとりなひ[illegible]

憶く、瞿麥を得たることよりして、蓬見が事愚六が始末なれど、落ちもなくものがたり、さていへらく、「今儞等が手にかけ給ひしこれなる退糧は、宗平五郎重綱といふ盗賊の張本にして、彼の白波雲平が弟なり。吾儕が娘瞿麥渠がために捕へられて、苦しめられし事あれば克く見しれり。されば吾々が爲には敵の片割にして、今茲において打ち取り給ひしは、不圖其の仇をむくいたるなれば、何の憚る事やあらん。盗賊の證據になるべきもの、定めて懐中にあるべし。且つ其の懐を探り見給へ。」といふに、吉香平二等は心得て、重綱が懐中を見るに、果して盗賊の割符ありて、尚何國にても這の割符をもつて、印とすべきよしの文書あり。扨こそと、吉香平二賢兵衛は、薗葉瞿麥を將て隱家へ立ち歸り、床世に對面し、ありし事ども物がたり、其の夜はもろともに眠りにつきぬ。斯くて其の夜個々の夢に、三助狐あらはれいで告げていへらく、「今こそ雲平が命數盡きて、首を授くる時いたれり。早く千騎が窟へ至り、多年の恨みをはらし給へ。」と敎へければ、皆々は起きいでて、互に夢合して、今にはじめぬ三助狐が深實をよろこび、「しからば直ぐさま仇討の用意せん。」とて、吉香平二賢兵衛は、薗葉瞿麥をともなひ、密かに旅の仕度とゝのへて、床世に暇乞して、下總へと發足しぬ。斯くて這の個人個人は下總へ下り、外川浦近くなりしかば、平二吉香に向ひ、「什麼なる計畧を以て岩窟に近より、雲平をほろぼすべき。」といふに、薗葉いへらく、「それにこそよき計策あり、妾暫時が程も、這の岩窟に

[illegible]ば、よくその案内はしりつ。彼處の[illegible]
[illegible]よぎる旅客の、[illegible]
[illegible]、其の[illegible]ひ、[illegible]
儞と平二郎は雲平どのの弟、[illegible]五郎重綱ぬしの部下なりといつはりて、酒肆へ到り給はば、酒肆の
主の小賊、疑ふ事なく岩窟へ[illegible]べし。その時奈何にも[illegible]雲平が、[illegible]とり近くへだたらば、討ち
取らん事[illegible]かるべし、さは[illegible]蝦蟇の幻術をおこなへば、容易に近より難し。これ[illegible]豫て聞ける事
あり、己巳の日一日のみ、[illegible]術をほどこす事ならじ[illegible]なん。幸ひ[illegible]るかな明日は、己巳の日に當
れば、雲平が術のおこなはれざる日なり、はやく準備[illegible]へ。」といふに、吉香平二郎兵衞等[illegible]、其
[illegible]をかんじ、をしへの如く兩個[illegible]に[illegible]て、[illegible]
り、且つ[illegible]
ふ小賊に[illegible]
りしなり。」といひて、彼の割符を出し遞與しければ、彼の酒肆の主人は、ちとも疑ふ氣色なく、兩個
の[illegible]大きによろこび、[illegible]
より心に[illegible]、[illegible]寂しくおはし[illegible]に、かかる美人を[illegible]給ふ事、さぞく悦び

給ふべし、折悪しく今宵は他行し給ひて、岩窟に居給はず、且今宵一夜爰にとまり、翌ゆる〳〵岩窟へいたり給へかしと、酒肴を出して吉香平二等を款待すにぞ、両個はしすましたりと心中によろこび、其の夜は快く主人の小賤等と、酒汲かはし臥したりしが、又賢兵衛道心は旅亭にありつゝ、専ら其の安否をぞ待ちにける。

流轉數回　阿古義物語後編卷之五　畢

後編　巻之六

第十齣　外山[illegible]

[illegible]の[illegible]は、[illegible]人々[illegible]
にいたり、[illegible]外の方に[illegible]まで、[illegible]に[illegible]し、[illegible]
わる、雲平は[illegible]に[illegible]され、年頃[illegible]おける[illegible]は[illegible]
[illegible]として[illegible]たる[illegible]、[illegible]の[illegible]人を[illegible]
ならぬ、且[illegible]に、一個は先年[illegible]の方にて、白鳩丸[illegible]に一[illegible]
た[illegible]のなれば、[illegible]一弟[illegible]部下[illegible]部下[illegible]
しけるといふに、[illegible]客[illegible]
の[illegible]と心得、[illegible]しく酒宴を[illegible]け、両個[illegible]に、[illegible]
て、雲平にいはせけるに、[illegible]
ましく、白鳩丸と[illegible]ありしかど、[illegible]
も[illegible]しが、[illegible]

處へ捕はれ來りしは、これ又怪しき縁なれば、先の日の罪をゆるし給はゞ、こたびはつかへ侍らん。」と、瞿麥もひとなげき訴ふるに、雲平が運盡きて亡ぼさるべき時いたりしにや、玉芝道人がいましめを打忘れ、「しからば。」とて這の席に列ねて、酌をとらせければ、兩個の女はそゞろに目をもて、情を通はせなどするにぞ、雲平はつひに沈醉して、薗葉が膝を枕とし、前後もしらず寐入りけり。這の時頑八は他國して居合はさず、誰あつて平二吉香等を見知る者なかりければ、時分はよしと平二は雲平が上に騰り、白刃を胸先に押當て大音を揚げ、「奈何に雲平慥かに聞け、汝が爲に無念の死をとげたる、鳴戸橘内が家隷阿濃平二次盛、これなるは則ち橘内君の妹に、薗葉とよばるゝ御方なり。汝が爲に幾くの艱苦を受け給ひしのみか、御母床世君も日外、既に活體をとられ給はんとせしかど、これも辨財天の加護によりて、危き命を拾ひ給へり。一度ならず二度三度、恨みかさなる室平四郎、いざ來尋常に立ち上つて、勝負せよ。」といふに、雲平も、漸う目覺めて立ち上り、枕邊にありあふ刀おつ取り、拔きはなし平二にわたりあふに、吉香薗葉瞿麥も、各々拔き連れて打つてかゝりければ、雲平は阿修羅王の荒れたるごとく、四人を相手に挑み鬪ふにぞ、部下の小賊は這の體を見て、一同に雲平を助けんと立ち騷ぐに、何國よりかは來りけん、甲冑に身をかためたる兵數百騎、てんでに刀劔を携へ亂入して、小賊を四方八面になぎたふすに、何かはもつてたまるべき、上を下へと混雜するに、暴

風さつと吹きおろして砂を飛ばせ、面もむくべうもあらねば、端艇を出して海に入り、或は岩上を踏みはづしたるとして、死するもの數をしらず。かかりけるうちに吉香・小三郎等は、志こう軍を斷り状を首を遠き滯し、ふみこふ事限りなし。さても千種が謀に、泥歌組の恐るることとなりし荷流大下も、忠臣孝子の爲に、首をさらしけるこそ心地よき。吉香は小三を顧みて、いく、一心刻をたきは郡を奉と顧ふるに、同國のかは甲冑に身をかためたる兵共あらはれいで、小吉等を迎ひしのぞけしが、汝人なるよいといぶかしがれ。何はともあれ斯く本意を遂げたるは、暫時も爰に留まるべきにあらずとて、海賊等が貯蓄へたる金銀財寶をまとむるに、軍艦都下に積はせ入れ、愛も何日を暮したる補なれば、人々の前に來り涙を流し、本邦へ歸らんことをこふに、祖國都のみの事につきされて不便に思ひ、共に國に歸り行かん事を欲するに、吉香小三等もとも喜し、皆々苗にて歸途につかんとせしが、此の時日漸く暮れて、夜色闇をとざし、東西をわきまへかたく、如何せんと躊躇ふしに、不思議や海上に許多の火、或は沖に出でて黒雲を照らし、あたかも白晝に異ならず。吉香益の驚歎を見て、いへりけるは、『近來の海上には不知火といふことあると聞けど、愛憎わたりにこうるためしあることを聞かず、最前の一兵といひ、今海上に消奉の火あらはれ出でて、行く先を照らすも、これ全く三助孤な事業なるべし。禽獸すら一旦の恩をわすれず、数回吾等をたすくる、人として

恩をしらずんば、禽獸にも劣るべし。」と、我が身の先非を悔み、人々共侶賢兵衛が旅宿に立ち還り、首尾よく本意を遂げたることをかたり、尚三助狐が友を將て兵と變じ、雲平が部下をさゝへたること、狐火を照らして道の案内せしことなんど、詳にものがたるに、賢兵衛も且歡び且驚き、一刻も早く此の由を床世君に告げたてまつりて、安堵させ進らせん。」とて、こゝより彼の誘ひ來りし女どもをば、それ／＼に故郷へ歸し、次の日未明より宿をいでゝ、鎌倉をさして急がんとする道すがら、とある松原にて暫時憩ひ居たる所に、忽地松の樹陰より、各位手に白刃を引提げたる、大漢子現はれ出づるに、吉香平二等は駭きて、且つ其の人を看るに一個の大漢、而も右の腕は懐にしたるが、雷の如き聲をはつし、吉香を白眼まへ「汝は實副四郎ならずや、奈何に手棒頭八を見忘れしか。吾一旦汝がよるべなきをあはれみ、軍師と崇めしに、忽地濱荻が家に込み入るに及んで、女々しくも虜にせられし故、渠が爲に命をうしなはるべきと思ひしに、奈何しけん今まで生き延ばはりしぞ不思議なれ。今一個は阿漕平二ならずや、汝も觸に殺生禁斷の場所へ、網をおろしたる罪人なれば、早速往進して褒美の金を得べかりしかど、汝が一子布留部とやらんが、官金をたくはへもちたるべしと思ひあやまり、跡を追うて斬り殺したれど、案に相違して只纔かの錢のみにして、骨折りたるかひもなかりしゆゑ、これとても口惜しく思ひしなり。然るに吾が黨の頭首とあがめおきし、白波雲平殿をうち取つた

るによつて、其の他をなくいんとて密かに先に逃れ、仲間の小者等も逃げたりし、敵をさへ事欠に久しう甲八首を遁頭すへしと言、罵りたから斬つてかゝれば、平七は吾が手の敵のがさじと、頭八と渡りあふに、頭八は左の手にて刀をとつてかちならで戦ふうち、吉香賢兵衛はうしろにまはりて、腿の小股と斬れしか、平七は終に頭八をしとめ、首を打切つて、其の外の小賊は迯散るを見て、搦敵くに逃れ先せぬ。吉香賢兵衛は遁ひて聞かきし日の暮にして頭八の首と、平七が首を一つにして、奥の宮の内にかくし、霜所へとどけ、家世の門の事にて、末宮を退し隣りなん由を聞きて、組立事のなし、平七満作の雨中に、甲斐は、共に討取たしければ、賢兵衛は又一個の首をそへ、敵なから油断の者と、甲ぐこれを称め、斯くて平七次郎は、安達景盛に詰め、宗本四郎を取り、百城丸を寄せしよしを途中に聞きあけ、何事も家を起したる由を、其頭に辞ふこと、家を、いたくをしまで言給ひたる事なれば、早速許容したまひて、吉香をもつて喧嘩の家を継せ、四郎吉香と名をあらためさせ、たは賞を授として、むつまじく、床世に事はりをすへしと命ぜられければ、上下よろこびの口を開き、はじめて安堵の思ひをなしぬ。又賢兵衛親子が、操を賞讃し給ひ、一家中にて由緒ある人の子を妻に妻合せ、これに家督を譲られて、賢兵

衛が家をたて給ひければ、一同に其の仁心を感佩しぬ。誠や積善の家に餘慶あり。積惡の家に餘殃ありと宜なるかな。吉香平二等は百折千磨の艱苦を經て、竟に昔時の身の上に立ち還りしかば、吉香はさらに行ひを謹み、彼の異人の辭をわすれず、專ら善根を好み、人に施すことを勤めければ、ますます家富み榮え、めでたき事のみ打續きぬ。去るほどに園葉は、先年大恩をうけし、伊勢國なる濱荻左門が許を訪らひたき由吉香に願ふに、吉香も「一方ならぬ恩を蒙りし、濱荻主の事なれば、疾くにも至りて恩を謝すべかりしかど、公私の暇なくて默止したるこそ易からね。さはいへ小戸鳴戸の家を建いでより、いくほどもなく私の事にて、遙々伊勢國におもむかんは、公へ對して恐れあり。翌くる年の其月其日は、故橘内君の七回の忌にあたれば、阿漕の浦において千僧の供養し、橘内君を初め先の愛壽、又敵ながら雲平、沖津、宅平五郎、愚六、蓬兒、頑八等、其の外小女郎狐布留都なんど、都て這の一條のことにかゝはりし人の追善をいとなみ、其の序をもて一萬人へ施しをなさばやと思へば、それまで待つべし」といふに、園葉もさもと思ひて、月日のたつを樂しみける。斯くて又光陰矢よりも早く其の年も暮れて、新玉の春を迎へけるが、今年將軍賴家卿梅が谷の別莊へ、一つの臺をきづき給はんとて、その天井板になるべき神代杉を、もとめ給はん事を欲し給ひけるが、知る人ありて賴家卿に言上しけるは、伊勢國鈴鹿山には、千歲の老樹あるよし「誰か克く伊勢國の地理を知つて、

との由を細々申し来るべきや」と宣ふ時、安達景盛といひけるは、「此者が家門に寄る播磨といへるものにへるが、文學に通達して且地理にくはしく、伊勢國には久しく住めるよし、稀に斯る者はありしにとあり。彼に仰せつけられ、ことさらは有り難し」と言上、謹んで言上しければ、頼家卿、あなたの所に給ひしから國一刻も早く、其の播間郎とやらんを召すべし」とありければ、景盛は面目を施し、早速在所が家へ立ち歸り、云々のよしを吉香に傳ふるに、吉香は是れ幸ひなりと御受けまうすにぞ、やがて鎌倉に赴き、[illegible]、賴家卿の御前に出でければ、[illegible]を見れけれ、旅人として之れを伐らせ、歸るべき由命じ給ふに、吉香は此の序に兼ねて[illegible]、古き浦に千余年を供養して、人々の追善をいとなみたきことあれば、妻子を倶して其の事を[illegible]はるべきよしを乞ふに、是れとても元より其の事なれば、景盛も早速申さるゝ給ひけるに、吉香は悦びて此の[illegible]んにものなし、日ならずして準備全くとゝのひければ、平二夫婦、床世、萌黄、賢兵衛[illegible]ひ、鎌倉を發足して、伊勢國へと志したり。斯くて吉香主從は、伊勢國へ到着しければ、[illegible]菩提を弔ひ、千餘萬枚の[illegible]を、一個の[illegible]、[illegible]りぞことを、左門は[illegible]出でて觀るに、[illegible]と吉香にてありければ、[illegible]へ通し仔細を問ふに、吉香はありし事どもを詳に語り、本懐を達し、今は何[illegible]

全く大人の賜物なり。」と、身を謙退りて禮をのべけるに、左門は委細を聞きて大きに怡び、「扱はさるいみじき身の上になり給ひしと聞けば、吾儕が怡び何事にかしくべき。且つ〳〵寛々と逗留し給へ。」と、酒肴を調じて夫婦を款待すにぞ、吉香薗葉も稍心安堵て、快く酒くみかはしぬ。當時吉香は左門にむかひ、「小子達の度當國へ登りしことは、全く私の事にあらず、武將家の命を蒙り、神代杉を得んがためなり。吾儕賊寨におちいり、鈴鹿山に住ひしかど、頑八等が逃げ出でんことを懼れて、山中を逍遙する事をゆるさゞりしゆゑ、山寨の外へ出でたることなし。加之老樹森々として、枝をまじへ幹をつらねたれば、いづれか千歳を經たる神代杉なるや、殆んど見わけがたし。あらぬ物を伐つて後、若しそれにあらずとしれなば、却つて罪を重ぬる道理、みだりにいづれと定め難し。こは奈何して然るべきや。」といふに、左門も頭をかたむけ、暫時思案して居たりしが、稍あつて吉香にむかひ、「吾儕祖父の代より當國に住めれば、畧山中の案内をもしれり、奈何にも鈴鹿山には老杉多くありと聞きつ。且翌にいたらば共侶に、國中の杣を催促して、山深くわけいりてこゝろむべし。」といふに、吉香もそれに力を得て、薗葉をともなひて旅宿にかへりぬ。かくて次の日にいたりければ、吉香は支度とゝのへて、平二を從へ左門がもとへ來るに、左門も辭なれたる木樵四五輩を將て、鈴鹿山にわけのぼり、そこらの姿よと尋ねもとむるといへども、一枚の板になして、天井を張るべきと思ふほどの大

其の國なり。其神こそあれと村の山をさすめれ、これぞと仰ぐべき所樹も見あたらざるに、案じ煩ひ居りしところに、其の夜に山中の若き山鬼に入りて、齎したる乾飯をとり出て、枯蛙をあつめて焚火をなし、斧の頭を棒にして木の割くなきを作つけざるに、蛇の殺ぎるほどの松風をきゝて、両膝をつきて、彼の喰ひたる事渡に黙さて、恐らんとはんかたなし、されど晝の疲れに、いつともなしに眠れるに、夢になく三頭鳳と云ふ神の家に變じて、吉香に告げけるは、神小に若木の苗を遊かし、背はを拝べ返しよ、よ、汝の首途に、日も暮れ、彼れ言葉を教へよと仰せられ、近き見ゆる所の神に霊を屋けて、天神へ告げたる事取の樹はいけしことを、過ぎにし歳を、その相のとを縁ひし樹に、この神の宮居の前に立たる、松の枝に衣を掛けしに、是に霊を翼て仰ぎける所の神の歩めて、明日はやく出で、宮をいれ給へ、彼の樹を見て崇に祈さくら得いたれなどと告ぐる故、吉香はよろこび祈禱の奥を、さに霊み祈り、心を尽すに、三頭鳳は、この宿の末に、今一度の守神あるべしと、言ひすてたるに、夢にさめて見え、吉香の鳥、吉香は夢の一四下を見るに、果東も白みて、雲近く見ゆるに、其は白く神を暗り起こし、多の霊の形を祭るに、二本の老樹の在りところと見えたるは、聖なる霊をとたたへ給ふ由を祈禱すにぞ、汝は老魔道不可思議なるを驚きて、此の松に五度し、やがて木陰を尋ね祈して、神にも樹の在りどころしれし事を告げて、其間に神事を終へ行き、眠を致へし霊魂を歎ねしに、雲に鶴の霊

に下り、畦を傳ひ尾上を攀ぢ、蔦葛にとりつきて許多の道を經て、漸う一箇の谷に出でたり。爰は木樵柴人も通はざる深谷にして、木の葉道を埋み、巨樹蔽ひかさなりて、森々闇々として、日の光さへいとかすかなり。斯かる幽僻の地なれば、彼の老杉千歳の壽を保ちしも宜なりける。都て千歳の老樹は、狐の仇とする事、什麼なることといふに、千歳を經たる狐は、刀劍の類も身に立つことなし。只千歳の老樹をもつて木劍を造り、これをもて向ふ時は、通力もほどこしがたく、竟に命を落すとなん。昔唐土殷の紂王、白面金毛九尾の妖狐の爲に、たぶらかされ給ひし折節、終南山の雲仲子といふ道士、千歳の老樹を木劍に作り、帝に奉りて妖狐をしりぞけんことを欲せしかど、帝妲己が容色にまどはされ給ひて、雲仲子が辭をもちゐ給はざりしかば、妖狐怪をなして、殷の代竟に亡びたり。思ふにこれらの類の事によりて、三助狐は老樹を仇とせしなるべし。吉香左門等は爰にいたりて見るに、枝をまじへ梢を竝べたる巨樹のなかに、一箇の杉の大木、わけて老樹と見ゆるに、これなめりと木樵等に、さしゝめして斧をいるゝに、千歳の古木も終に伐らるべき時節到來せしにや、枝葉をおろし伐りたふせど、神の祟りもなく、實にも賴家卿の望み給ふ、天井板ともなるべく、其の木目の麗はしきこと、類あるべうもあらねば、歡ぶことかぎりなく、これを溪に流して麓へ下し、吉香左門等は木樵を將て旅宿に立かへり、薗葉以下の人々に、云々のよしを語り聞かせ、早速書翰をしたゝめて鎌

倉へ、ただし、権僧都が浦において、大施餓鬼を執り行はんとて、其の導師をもとめられしに、最勝智
兵衛が師栄西禅師、当国へ杖を曳き給ひしかば、吉宣は自らあゆみをはこびて、禅師が許へいたり、千
部供養の事を頼みまゐらせしに、禅師は委細承引して、吉宣が志を感じ、頓に承諾したまひ、早速
書札をしたゝめて、近国の法輪へ、此の旨を告げしらせしかば、当時道徳の聞え高き、栄西禅師のよ
き給ふことなれば、千日精進の名僧知識あつまりて、千人に余りけるほどに、吉宣はこれを聞きて、
千部の数は足りぬとて、同浦が浦に於て七日が間、大般若を読誦し、又其の賀下先生の祠に、一万人
に施し、施しせよといへりしかど、千断く檀行の身となりて、何くらかなれも年く寒人の来るれば、
一万人をかぎりて、まびたゞしき米銭を散らして、名僧をことごとく招きしければ、これを聞きて数万の老若
あつまりて、おのおの施行を得て、怡ぶこと限りなし。斯くて大施餓鬼は、七日の満日にあたりけれ
ば、衆僧は尚ら声を凝らし、高らかに大般若を読誦しけるにぞ、聞く人心耳を清まし、随喜の涙すゝみ
あへず、奈何なる悪霊も得脱すべく覚えける。斯て禅師は座を立つて水面にむかひ、渚名焼香三遍
賀、蝦蟇道人、並六が妻童子、敵ながら、蜘蛛車見事、犬輔において討たれし諸霊の、霊、
六、違見、頭八、布留都、小女郎狐、すべて這の一件のことに預りし、有縁無縁の諸生霊、出離頓
生仏果菩提、南無阿弥陀仏と唱名数遍唱へ給へば、大空に紫雲たなびき、虚空に花降り音楽聞えて、

倍も彼の大聖世尊、祇園精舎において、御母摩耶夫人の追善を營み給ひしも、斯くやと思ふばかりなり。斯かる所に遙かの彼方より、こなたへ漂ひ来るものあり。衆人はこれを見て、何物かと近づくままによく／＼見るに、是れ先年平二が身に、危急の難に代らせ給ひて、這の阿漕の浦に沈みし、鳴戸の先祖阿波五郎芳貫公の木像にてありければ、平二は遽はしくこれを拿りあげ、一實に繫つ頃吾が危急の難に代らせ給ひしは嬉しけれど、吾故に御先祖の傳來し給ひし木像を失ひしを、遺憾しく思ひゐたるに、今歸りたまひしは、吾儕が歡び何事かこれにしかん」とて、早速これを洗ひ清めて尊みける。吉香夫婦は年頃の本意とげて、はじめて喜悦の眉を開き、榮西禪師には黄金許多を布施物とし、其の外の僧徒へも、みなそれ／＼に布施物をあたへ、其の勞を謝し、且高野山へも祠堂金若干を納めて、雲平以下の人々の菩提を弔ひぬ。去る程に吉香は其の夜より旅宿に在つて、獨り燈下に往時のことを思ひつゞけ居たる折柄、忽然として彼の異人あらはれ出で、最とおだやかなる面色にて吉香にむかひ、「儂一度色に耽り、吾をすかして若干の金をとゝのへしめ給ふことは、頗る德を損ずるに似たりといへども、又我が一萬人と教へしを、却つて三萬人に施行し、千僧を供養し、善根を修し給ひし功德によりて、吾儕も太上老君のみゆるしを得て、謫居を免されて今將天上へ歸るなり。いよゝ昔時を忘れず、平生に善種を植ゑ給はゞ、子孫永く榮え、いみじき位に昇り、人の鑑となり給ふべし。必ず／＼忘れ給

ふたり」と、いと懇にいひをしふるに、吉香は異人が滿に難澀して、此の商賣にかゝる論儀にておはしますことを下、既に通ひ情にふけりて、不正の罪をしつるを深くいとかの公にて、今日の歡樂を得ること、ひとへに他人の恩澤によることなり。男分を失はんは何をのせんとも、打ちたてておるべからず」と、誠心誠にあらはれて、數回ふしたるに、異人は先に脛をうちあるみて、「爾は吾が事情によりて本意をとげ、皆はまた他の名根によりて、早く世の名聲の諸氏をふるされつるは、是れ遂のさいはひなり。汝らが上は此上にあれど、長く世によみゆることあるべからず」と、[illegible]に可て縮を繕つてなたんとするに、吉香は無情しと、かれと思ふはたに、異人が家は漸く失てあ。吉香は[illegible]の武にうるし、將七帆につきみて、斯くて町の日文合門が許へおとづれて、專初の事を告し、その間の弊を發し。

「さて吉次は本意とげたる上は、めでたく名をあぐべくもあらずとして、姿にを[illegible]、人舛に導く識をの商業をもしてなる陣の中、かる世に吉香は彼の色紋をたてまつりて、有りし商賣を繕へるなく繋ぎけ結び、名に示る豪臣に命じて、商か旨に別館を營み給ひ、其の不盡を許せる臣庵の栞を取て其井となし、其の外の畫工をして、樂に瀬朝六以來の功臣の古像を畫かしめ、[illegible]、これを臣開とおり結び、それが記を書かせて、不朽に傳すよほしく思ひ[illegible]に長じたる者は多しと雖も、文に長けたる人なし。[illegible]

長じ、經國の業にたくみなりければ、景盛は斯くと頼家卿に言げ上りしに、則ち彼の功臣閣の記を吉香に命じ給ふほどに、吉香も身のほまれと、日頃の文才をあらはし記を綴りしに、彼の相如が上林子虚の賦にましして、錦に花を添へたるが如き文詞なるにぞ、頼家卿もなのめならず怡びたまひ、祿あまた賜はりて、其の功をねぎらひ給ひぬ。斯くて又吉香園葉が中に、男女の子あまたいできければ、次男に實副の家をつがしめ、これを儒官になをらしめて、其の志をはたし、また賢兵衛入道西念は、吉香と聟の情にて、小袋坂へ一個の草庵をしつらひ、念佛三昧にしていとやすらかに世を送り、藜の羹麻の衣、一鉢の外にもとめず、おこなひすましてゐたりしが、或夜の夢に橘内愛壽等をはじめ、此の一件にあづかれる人々、吉香が千僧供養の功力にて、安樂國へ生をかへて、舊怨をさんずるよしを夢見しかば、扨は日外の追善によりて、人々佛果を得たりしならんと、此のよし吉香夫婦、平二が妻子にも聞え知らしけるとなん。都て此の草紙は、多田南嶺子が舊本の趣を、いさゝか種として、あこぎが浦にひく網の、たびをかさねし後篇の趣向は、いさゝか前編編者の遺意にもとづけど、又編者の意にもとづくことも多からんか。左はれ、萍のはなしごとを據として、狂言綺語に書きつゞりたれば、其の猥雑鄙陋をゆるし給ひて、意味深長の勸善をとらば、卷をひらくの稚蒙において、小補なきにしもあらじ。

江戸　作者　本町庵三馬遺稿

江戸　作者　狂訓亭楚満人儆綴

江戸　畫師　歌川國安筆畫

滑稽教訓阿古義物語大尾

柳髪新話浮世床

柳髪新話自序

尺も短く、寸も長きあるは、各〻物によりて用ゐる利あればなり。唐山の剃頭店、日本の髪結床、和漢唱への替るのみにて、人情すべて同じけれど、世とおし移る髪の風、芥子坊主の毛が薄くて、雅だと喜ぶ毛唐人、嬶様達の毛が厚くて、俗だと否がる日本人と、思ひ〳〵の和漢の學問、近頃も或儒先生、髪の神秘の唐贔屓に大清中華と崇むるの餘り、いふさへ髪の貨を算へて、他の國の大きい自慢の唐詩の白髪三千丈、廣いに縁つて個くの如く、髪髪までが長いであると、見て來た様な國字解。いかに人まで大きくいふとて、大體程もあるべきに、額の広が一尺で、眉間尺と呼ぶなれば、鬢が四間で閔子騫歟と訊問ねたれば、先生これには默して止みぬ。其の傍に國學者の在りけるが、彼の髪長媛から引き出して、我が大御國の古事來歴、お市が髪髪、金山が七巻許り引巻いたる、童謡をさへ考へ訂して、論ふかと思ひの外、聴耳を聳して居たるは、流石に雄々しき日本心、吾が皇國の國風とはしられたり。されど、これにも、考へたたる事ありて、國學の大人示していはく、「かみひどん」とは、髪結殿の訛れるにて、これをしも「ひつじ。」と呼べるを、羊のかみをすくといふより、稱へ來ると覺えたるは、例の漢籍に泥める說か。今按ずるに、ひは日なり。日髪に結ふに據る物ぞ。

つまり月の下略、是れは月花に留めて、故に[illegible]何処、じ[illegible]是れ[illegible]に、[illegible]す、[illegible]は道へ[illegible]、日蔓月[illegible]客多くて、朝から晩まで、立詰に[illegible]、[illegible]の無い者は[illegible]にかゝる、これに因つてひつかゝるとへいふ、又一説に、業のしの字といへり。油[illegible]、一日[illegible]、[illegible]是れは[illegible]、其の[illegible]と[illegible]て、[illegible]、[illegible]一[illegible]人[illegible]孔、各[illegible]所[illegible]、浮世の人情[illegible]、[illegible]人の[illegible]、[illegible]きあり、蓮懸本田の短きあり、尺も短く、寸も長し。各其の利に[illegible]て用ゐある所を、一個待つ間の腰掛にて、思ひついたる[illegible]向の一端。人の長短情譚に、通音をとりて咲は下に、[illegible]じの作者の心。在下が短き才をもて、長物語の[illegible]小冊、禿びたる毫の毛をしめして、先づ[illegible]刀を[illegible]と思ふ。維時文化八年辛未[illegible]日、[illegible]に[illegible]屈の間、本町延寿[illegible]に[illegible]の[illegible]の[illegible]

式亭三馬戯題

柳髮新話浮世床 初編卷之上

東京戯作者　式亭三馬戯編

大道直うして、髮結床必ず十字街にあるが中にも、浮世風呂に鄰れる家は、浮世床と名を稱びて、連牆の梳結鋪、間口二間に、建列なる腰高の油障子、油で口に粘するも、浮世と書きたる筆法は、無理な所に飛帛を付けて、蝕字とやらん號けたる、提灯屋の永字八法、其の一方は、大長家の路地口を控へたり。且つ入口の模樣をいはば、大峯山の小先達、懺悔々々の梵天は、雨にしやれても、御丹精を遺し、小松川の大束賈、冬菜々々の斧は、霜にもまけぬ無掛直をあらはす。されども不知半分價、お花三文謊八百、輕庵口の口入所は、緣談の世話、印判の墨、孰れを孰れ地口の如く、御町便小使無用、孰れを孰れ謬誤なるべし。尺蠖の屈めるは、伸びんが爲の九尺二間に、寓舍と書きたる宋朝樣は、當世風の小儒先生、渴しても盜泉の水屋に汲ませず、勝母の里にあらなくも、親子喧嘩の鄰を移すは、易に所謂山雷頤の、卦象と中てたる占やさんが、十有八變と筆太に見しらせたるは、轉宅の數をいへるか。本道外科と劄つて書いたる、デモ醫者の表札は、和樣に丗頭も想はれ、造作附賣居あ

めと、いつたり書いたる腰障子は、大尊さまの[illegible]傳、或は[illegible]に[illegible]を[illegible]られ[illegible]書したる[illegible]、ひめのやあみの[illegible]は[illegible]めて[illegible]し、或は四角の大[illegible]、或[illegible]角の[illegible]、[illegible]三[illegible]の[illegible]あれば、鳴る尺八の指南所、士農工商[illegible]て、八百八町の相[illegible]、[illegible]に[illegible]、[illegible]原に三十日の大祓を苦に病み、[illegible]氏は如是我聞、長家並の定規を守るかと、差覗く一目は、げにも長々の浪人者、[illegible]、[illegible]地[illegible]と倶に[illegible]列してより、[illegible]いつまでか生の松、[illegible]るもたる[illegible]の名を一[illegible]て[illegible]に、[illegible]の[illegible]、[illegible]に[illegible]せ、[illegible]の[illegible]、[illegible]の[illegible]に幾代を[illegible]經ぬらん。榮枯貧福さま〴〵なる中にも、樂隱居と見えたる老人、紙衣羽織に[illegible]頭巾して、大路地より出て來り、浮世床の門首に[illegible]立み、隱居▲「[illegible]〳〵〳〵」ト、叩きながら、「サア〳〵起きねえか起きねえか、遲いぞ〳〵。あてこともねえ、朝寐も程があつたものだ。髪結床といふものは、はやく起きるはずだに、馬鹿〳〵しい[illegible]、[illegible]起きねえか」ト[illegible]方にて、[illegible]●「[illegible]〳〵」

▲「サア起きたり〳〵。」見世に寐てゐるとおぼしき下[illegible]子[illegible]「留や、起きねえか。ヤイ、エ、べらぼうめが、あやかたが[illegible]坊[illegible]に、[illegible]野郎まで[illegible]寐[illegible]て[illegible]ト、つぶやき居るうちに、弟子の留吉[illegible]ト、大きた聲し[illegible]、[illegible]戸を明け

●隱居、びつくりして飛び退き、「エ、此の野郎め、おれには[illegible]させをつた。恩を[illegible]とは此の事だ。」[illegible]ねつから恩なとこはござりやせん。こつちは眠くつてならねえ。隱居さんこそ[illegible]なはるから、夜の明けるの

を待ち兼ねなはるけれど、わつちらは、寐たうちばかりが命の洗濯だア。」隠「何こいつが口巧者な、命の洗濯よりは、褌の洗濯でもしろ。紺縮緬か緋縮緬でも締めれば能いに、働きのねえ。しろ木綿が、今流行る茶返しのやうな色に成つて、蟲はうよ／＼所か、ぞろ／＼と群集する様子だ。そこらへおとすな、エ、穢ねえ。」留「久しいものさ。」隠「コレ、夫れは能いが、親方はまだ起きねえか、埒の明かねえ。あんまり夫婦中の能いのも困つたものだ。山城国にて頭二ッある子を産むと、年代記にありさうな身で寐てるるだらう。あのまたかゝしもかゝしだ。コレ早く起きなせえと云へ。」留「隠居さん、きつい苦労性だね。」隠「知れたことよ。老ると物事が苦労になるわ。コレ留、そこらをきり掃いて、湯を沸して置きや。おれは行つて来て剃るぞ。ドリヤ湯へ一はい這入つてと。コレ、誰が来てもおれが一番だぞ。外の者を先へ廻すな。」ト、出て行く 留「それでもお前さん、こゝに付いてお出でなさりやア能いが、湯のあとへお客が来りやア、待たしちやア置けやせん。一番へまはしやすぜ。」隠「ウンニヤならねえ。」留「そんな無理ばつかし。」隠「夫れよりか早くおこしておけ。」留「モシ／＼。」隠「ウンニヤたらねえ。」留「モシ／＼。」隠「なんだ喧しい。」留「何だか落ちやした。」隠「ナニ落ちた。何も落すものはねえ筈だが。」留「頭の附鬢が。」隠「べらぼうめ、頭巾を冠つて居るわい。」「アハ、、ハ。」ト、湯屋へ行く。此の内髪五郎も起き出る。

▲[illegible]の男、年八十[illegible]と見えて、[illegible]の[illegible]下[illegible]を[illegible]て、[illegible]
[illegible]の[illegible]下[illegible]つと見を入れて[illegible]
[illegible]

[illegible]ねと呼ぶ者は、[illegible]
そ、[illegible]
の風俗も又[illegible]きか。

▲[illegible]を叱いて「[illegible]早いの。」[illegible]「ヲイ勇さん、早かつたの。三日[illegible]仕事がなくつてぶら[illegible]見物[illegible]の。」いふ「仕事なら能いけれど、ハヽヽ、人をつけにした。先一昨日、幽霊[illegible]の[illegible]ずて、おいつが暇へかつくらはしたとおもひねえ。」「ヲヽ何所へ」いふ「ヲレ、よてよ、この市川を[illegible]した女よ。[illegible]で[illegible]しやくつ[illegible]とは手[illegible]「ム、、御[illegible]のかの[illegible]か。そしていつ[illegible]つた」いふ「昨日の[illegible]つたよ。[illegible]て方[illegible]る[illegible]ナ。さうすると山の神[illegible]も、[illegible]なら一本十六文宛もしべいといふ角な三本[illegible]しやがつて、いき

なりに胸ぐらよ。不斷ならばり挫いて、ギウの音も出させねえこだが、此方が不始末といふもんだから、死つた晴を見るやうに、だアまつ居たらば、齋日の精靈ぢやアあんめえし、こゝぞとおちつたさうで、日頃の羽つばたきを一時にしやアがつて、小言の候の、ヘン、選り取つて十三文、すてきと並べやアがつた。人をつけにして、能い福の神ぢやアねえか。」ゼニ「アハヽヽヽ、そいつは小言八百に利を食つたといふ洒落だの。併し長く居なさんな。息子株ぢやアあるめえし、流せば迚も程があらアな。これが又、ほんの事たが、尻の掃除をして吳れる親があるといふもんぢやアなし、とゞの詰りは、己の身が痛し痒しだ。」ナウ「さうぢやアねえか、おめへツちやア譯が分つて居ながら、つまらねえ者だぜ。」いさ「そりやア二文も承知だがの、一體酒が惡いわな。」斯う云つて、可愛さうに酒に咎をなするこぢやアねえが、つい一斤きめると、野郎めエ、浮いて來るもんだから、梯子とならアス。ソレ翌くる日は天窗が重てえとか、お頭痛が遊ばすとか云つてぶん流すか、ノ、ふしか、己が内でも敷居が高くなるといふもんだから、能いわ、一寸切られるも二寸斬られるもと云つた奴が、そちこち三寸となるやつだアな。」ア、モウ詰らねえぜ。酒は翌つから斷酒だ。」ゼニ「久しいものよ。」いさ「よく罰もあたらねえぜなア。金毘羅さまも成田さまも、幾度だまかしたか知れねえ。」びん「そりやア其の筈よ、神佛は見通しだ。又瞞しにうせたなト、頭で請けねえから罰もあてねえのさ。」いさ「嘘アねえ、

よかりやア、お讃岐申しやすねう　の湯へ行つたかし」「ア一寸來ました」と行つて來い。イヤ、ほんに、何は素ねまア、野の節は一　と來るへに」と云來る。あの野郎で逢つたのはお流だけれど、見ればまた面の皮で引いて喰れといい。此中流通をして行けからの、聞きねえ、今、あが衣装を脱いでいた上にア、お前がサレ、週間皆やの一での買つた帶は、いと、お前も知つて居らア。鼠節が此方四日に買いた衣れを、この分の風分病來で引き取つて、急に金が入つたもんだから、此家節を上へ持に賣つたトト　トニ、コウ／＼　種を「書かと」いうから、ふいつて是を向こので、聞くあつはこ能いわたはあの帶と、そのあが衣装を、他所行をこ枚、こいつが雨に断じ頼と、三枚引返して、網裏は紅の裏もい綺よ、開帳參りも着し、あれが姉の娘の室に暇で、よ・・三度しきやアの晴れなしねてと言て目るから、これは構かねえと云つて、そのこれが[illegible]そいつをおれが顔で着を口説いて、白二枚と名目にすはねれ、顔にれけりの通をたる暇るといふはずが、けふで一月になるが音沙で、トあるお頭大がない。るやアねえとは[illegible]ひとすれよっ」「ひといはこうも同じ言論だ」[illegible]

守を、顔に月代[illegible]して、高慢を吐くは、素讀指南の先生、祉罡をかけ[illegible]▲[illegible]

[illegible]なる口[illegible]、[illegible]人、[illegible]

者、[illegible]學の[illegible]になりし、[illegible]

びん「ヤこれは先生さん、お早うございます。」ト、先生といふては、なめげにきこゆると先生さんと様を付けていふなり。　孔「おれは清貧を樂しむ氣だから、早く起きる氣もないが、家鹿の爲に起された。ヤあたけてくどうもならぬ。」　びん「嘉六が酒にでも醉つて來やしたかネ。」　孔「此の男は何をいふ。鼠が酒に醉つてたまるものか。ハヽヽハ。」　びん「ヘヽ、わつちは又筋向うの嘉六が、例の生醉であたけたかと思ひやした。」　孔「何さ、家鹿とは鼠の異名さ。」　びん「ヘエ、鼠にも表徳がございやすかネ。」　孔「表徳かは知らぬが、社君だの、家兎だのと種々異名があるて。」　傍からちう口出し　ちう「左官だの壁だのとつけるも尤もだネ。あいつが壁へ穴を明けちや左官さわぎだ。」　びん「べらぼうめ、だまつて居ろ。」　ちう「アイ。」ト、へこんで門口を掃除してゐる　孔「獨居して居ると、鼠までが馬鹿に仕をる。一屋無猫老鼠走白晝と左傳にもある通り、おれを侮つてどうもならぬ。王肅が逐鼠丸でも欲しいものだテ。」　ちう「逐鼠丸とは、京傳の本に書いてありやす。直さま買へやすわな。」　びん「馬鹿ア、ヘヽ、あれは讀書丸だわ。」　ちう「ホンニさうだつけ。」　孔「ドリヤ一つ剃つて、もらはうか。」ト、腰かけたらひへ湯を汲み、月代をもらひにかゝる　びん「コレ留、セツト敷居の隣を能く掃けエ。いけぞんぜえなべらぼうだ。いくら云つても掃きおとしやアがる。」　ちう「アイ。」　孔「箒千里、惟留が掃かざる所なりだ。アハヽヽヽ、留は奥を潤し、床は身を潤すといふから、髪結床の隙には、奥の用をたして水でも汲むがいい。」　ちう「きついお世話さ。閑子衒あエ。」　孔「ナンダ閑子衒だア。黄白には富みたい

ものだナ」[illegible]でおれをやすんじてるる。ハテ残念閔子騫。」[illegible]「オットまづ一つ閔子騫。」
三「ハ、、、、、[illegible]孔子、[illegible]ある寄せ「ハ、ア竹本祖太夫鶴
澤蟻鳳。ハテおつなことがあるの。[illegible]には賈に大夫といふも有つたれど、日本には[illegible]
[illegible]の[illegible]が、[illegible]、竹に祖太夫の官をやつた古事も[illegible]
いて、蟻鳳と竹を取つた心はどういふ意であらう[illegible]、あの書いたものは[illegible]
[illegible]」[illegible]あれ「ト、指[illegible]「あれは座敷浄瑠璃さ。祖太夫に蟻鳳だから、夕べもここ[illegible]
りやした」[illegible]。[illegible]ハテナ、あれは[illegible]
[illegible]、[illegible]、[illegible]ハテナ、[illegible]八人[illegible]
はいはゆる季氏が[illegible]と見えるわ。此の季氏も[illegible]の[illegible]たて。[illegible]は[illegible]八つ、諸
侯は六つ、大夫は四つ、士は二つ、佾する[illegible]に、人数[illegible]の數の如し。」[illegible]
數でござりやす[illegible]。」[illegible]是れは八佾と云つて舞の數だ[illegible]。[illegible]は又、おつ[illegible]
ハ、、、[illegible]はそんな[illegible]がたいもんだ[illegible]ござりやせん、八人藝と云つて、一人で八人の藝をする
盲人さ」[illegible]ハテナ、盲人ですら八人の藝をするに、おれらは兩つの眼を持つてるて、一人の[illegible]
つとまらぬとは、ハテ残念閔子騫。」[illegible]「ござりやす[illegible]」[illegible]ハ、、、[illegible]はどうかな。

今と云ふ字の書いてあるのは。」びん「ム、あれは今昔物語さ。朝寝房夢羅久、林屋正蔵、こつちらのはうが圓生さ。どれも上手な咄家さネ。」ト話してゐる所へ、でんぼふ一人ずつと来て立つてゐる。びん「おはやいの。」でこ「アイ其のつぎか。」びん「まだ隠居さんが一つある。」びん「よし。」丑「コレ主人咄家とはどうしたものだ。」びん「落話をする手合さ。」丑「ム、笑話か、笑話は漢が面白い。山中一夕話のことを、開巻一笑ともいふが、又各別だて。笑々道人が作つたものだ。まだ遊戯主人が笑林廣記、和本にも聞白駒が譯した開口新語、或は笑府の類。イヤどうも漢は違つたものだて。あの趣向をきやつ等に教へてやりたい。」（などと、いなたかるもあなり、漢の話を日本に譯し、或は翻案してある事は知らず、こゝが村學究のもち前なり。）びん「唐にも落咄がありますかネ。」丑「あるともあるとも日本のやうな事ではない。甚だ巧みなものだ。」でんそばから口を出して「唐はどうだか知らねえが、江戸の咄家はどれも上手だぜえ。夢羅久が咄すのは、眞の咄だぜなう。」びん「さうさ。林屋がのも面白えよ。」でこ「俺ア圓生が可笑しくて能い。」びん「始終可笑しいの。」でこ「夢羅久のは地が能い。どうも情合を旨くいふぜえ。」びん「可楽は一世一代をしたぢやアねえか。」でこ「夫れでもスケに出らア。」びん「助高屋だの。一世一代をした跡が、又若がへるものよ。」丑「コレ〳〵足下の一世一代といふは誤りだ、それでは重言になるて。あれは一世一度といふものだ。咄家々々と、何でも家の字さへ付ければよいことと思ふが、咄家と云つては湯桶訓だ、咄は訓なり、家は漢音だ。呉音では家とよむでな。

すべて、器財は漢音、国字は呉音で讀むが、又佛氏のかなことは呉音で讀む。それは各類、宗旨家とか、或は落句に可笑味を取るゆゑ、落話家といへばよいに、噺家とはナゼいはぬ。實に雑沓[illegible]、、、、也に古今家は漢の音、一種家萬家は呉音で讀へる。これらの事を辨へぬとは、いへ[illegible]譲り」「与それなら噺家をやめて、笑話家といひやせうね」「[illegible]今いふたが、何でも家の字を付けるがよい」「口を能くしやべる者を多辯家、物を多くたべる者は食乱家、或は飽食家」「上戸はよく飲む者を飲家と云つちやア、夏頃があるやうだの」「それが即ち湯婆則だ、酒を呑む者を酒客、酒屋を酒家」「ドレハ、酒家が酒家ならば、豆腐屋は豆腐家だの」「サウサ、提灯屋が提灯家で、煎餅屋が煎餅家」「ナント馬によく乗る人を馬鹿と云つちや、腹が立つだらう」「ハテ香を嗅ぐ人を香家と云つちや穢らしいぜ」「ナニさういはれて堪らぬ。ことに香を嗅ぐ花を挿すもの詞は昔いけれど、よつ花を活ける者は聞くといふが、俗例で耳がたねてす」「ナニ香は鼻で嗅ぐだからこそ「香を聞く」といふ言が有るぜ」「ソリヤ耳で聞くものだが、香を聞くといふが能いけれど、鼻だから嗅いがよからうぜ」「ソリヤさうよ、鼻で聞いて耳で嗅がう物なら、目から物を言つて口で見物だらう」「一言う良ると足で[illegible]かして[illegible]へ踏舞の用心だ」「[illegible]足下のやうにものを云つては舌が下ない」「[illegible]、困つたものだ。是れだから聖人も、口は禍の[illegible]といふも尤もだ」

ツア夷狄に素しては夷狄を行ひ、鄉に入つては鄉に隨ふだ。ア情ない、實に嘆息するのみだ。衆人濁酒を飲まば、われも共に飲まねばならぬかい。」びん「實に痰嗽をするなら、濁酒は毒だらうネ。それはお止めなせえ。」孔「イヤサもう對人にならぬて。」でん「モシ〳〵もうちつとお講釋を聞きてえネ。」孔「イヤ〳〵、愚人と論は無益なり。イヤしからば。」ト、歸るに引き違へて隱居來る。びん「ヤ、隱居さんお湯かネ。」いんきよ「アイサ、朝湯は綺麗で能いが、ヤこむぞ〳〵。湯へ這入るなら默つて這入れば能いことを、兎角鼻唄だナ。イヤ御免なさい。」ト、敷居を跨ぎながら、「ヤアこゝも大入りだ。コレ留、なぜおれを先にしねえ。」とめ「それだつても、お前さん遲かつたものを。其の代り直にこゝへお出でなせえ。」いんきよ「篦棒奴、我に剃つてもらふほどなら、何も急ぎやアしねえ。我がのは剃るのぢやアねえ。」留「撫でるのかネ。」いんきよ「ウンニヤ、引んめくるのだ。此の年になるが、月代を引んめくつたり、天窗を張り倒したりするものは見た事がねえ。」ト、いひながら腰をかける。とめ「よく揉んでお出でなせえ。」いんきよ「ナニ揉む毛があるものか。揉む程の毛があれば隱居しては居ねえ、夫れこそ色事で日を廻すわ。コレ夫れよりは付鬢を揉みくちやにするな。ソシテもつと丁寧にしやれ。今朝も枕頭に落ちてあつた。」でんほふ「寢るときにはづして置くがいい、エ、人をつけえにした。褌ちやアあんめえし。」いんきよ「アハヽヽヽ。」でん「コウ今歸つた朴念仁も、大きな屎擴呆たせなア。」びん「誰。ム、孔の字か。」いんきよ「ム、放屁儒者

か。彼奴が何を知つて。まだ不思議に唇を排る道で[illegible]物よつ[illegible]が
は、鼯鼠博識な者だと思つたら、一向し[illegible]ちん[illegible]かん[illegible]んだとう[illegible]首う
竹つて後に御拝され[illegible]高楼[illegible]、
[illegible]に
わい能いわいっ」[illegible]「あいつはお前、孔子の道だかの何つても、脇道へ切れると[illegible]流れる者の
さ。」[illegible]「孔子の道に[illegible]めえ。」[illegible]て、
元の事に疎いのだの、悪い者にとつ付かれた。あの人は博識ぢやァ無くつて、平人よりは不足だよ。」
でん「そしてあの態を見ねえな。郎下へ転ぶとすぐに雑巾だ。」びん「うさァねえ。あの人が内に居る時
を見せて[illegible]古[illegible]見栄を張つて、[illegible]ながら講釈するが、[illegible]
門出[illegible]」[illegible]分[illegible]よ」[illegible]、能く[illegible]
を知られ[illegible]だらう」[illegible]は何か。[illegible]
ますると[illegible]に、はるか左のかたに[illegible]へをおいてまん[illegible]には、[illegible]
立者の影打つたる五枚じころの、冑をきつくと着なし、[illegible]」[illegible]
どうした〳〵。」[illegible]ハ、、、、」[illegible]でふうんにやよ、あの[illegible]か

すだらう。」 びん「ナアニそりやア軍書の講釋だ。あつちのは立がちがはア。」 いんきよ「大學朱熹章句。」
びん「御亭主の曰くさ。」 でん「ム、山高きが故に貴からずか。」 びん「馬鹿アいひねえ。ありやア大學ぢやア無え、今川だア。」 でん「とんだ事をいふぜ。今川は大てん違へだ。夜鷹小便を好み、親子が殺生を樂しむ事ス。おらア能く覺えて居らア。主がのが間違だア。」 びん「ナアニ、よく考へて見ねえ。俺も子耳に聞き挾んだ事だから、忘れておたまりがあるものか。ソレ今川兩親不足申ぬき、どこの兩親も不足をいふ物と見えたぜ。今川の本にさへ兩親不足と教へてあらア。」 でん「待ちねえよ。ありやア愚息だぜ。」 びん「ナニ不だよ。」 でん「ナニサ不ぢやア無え。」 びん「不でなくは爲つたのだ。」 でん「ナンダ爲金か。おきやアがれ。とんだ將棊だ。」 ト、隱居の方にむかひ 「ネエ隱居さん、はゞかりながらわつちがいふのがほんたうだらう。此の亭主が情を張つても、山高きが大學だネエ。」 びん「ナアニ、大學ぢやアござえせんネエ。」 ト、兩方から訊かれて、隱居もとより大學を知らぬゆゑ、大きに迷惑、 いんきよ「ム、、なに、なにさ、おれも年が老つたから記憶が惡くて、夫れに根が薄くなつたから、うろ覺えだテ。イヤ〳〵、いまのは兩方ながら大學に有る有る。」 びん「それ見ねえ。」 でん「エ、こつちもいはねえ事か。」 びん「太郎兵衛歩びやれだ。モシ隱居さん、嬰兒の時分覺えた事は忘れねえものさネ。」 いんきよ「さうよ。エ、、今の何は、何さ、山高きが故に貴からず、河深きが故に立つて遊ぶ。」 びん「さう〳〵。そんな事がありました。」 いんきよ「其

の川端に、夜鷹が出て居るといふ都合だつけ」ト　ム「構つた」（鬢を撫て）「川端にから、夜鷹小便を結ゑこ」ト「成程、川端へ小便をさせやア、目利だの目高だのといふものが、小便の礎となつて生きるツム、一寸だ」ト「そこで殺生に成るわな」ト「理窟だな」ト「うつかり／＼、お前解らねえ事があるな」ト「そんなら親子が殺生を楽しむ事といふだらう」ト「そりやア偉うんだ。手前でも有るめえ。ハア夜鷹といふものは、ぱじく／＼した姿もあれば、いく／＼たる君の皆恋もあらア」ト「ソレ、爰にて親方といはうぢやアねえか。先づさ、物の道理が」ト「ふう、成程、そう聞いて見りやア噺は通つ居るといふものだ」ト「隠居さん」ト「そうさ」ト「なぜ又さんなしよはつかしい事を言つたもんだらう」ト「ふたたび／＼、お前方は狭い」ト「是れが何ふ因果の道理を覚へさせる為で、その役人にも、仕て能い事と悪い事がある。既に其内、自然の悪人に、何とかいふ悪人の息子で、何と云ふ人がむつての、是れが此の親孝行よ、其の親が家の内に鰻を食ひたいといふ。サア其時が了度冬だ所が、大雪は降るし、鰻はすつぽり、氷に閉ぢられて、どうも取りやうが無い」ト「取らずともの事さやアなえかに」ト「ト寒取出しやア、素敵な鰻が貫み」ト「ハア其の孝ならは何もいふ事は無い、金の無い所で苦労するから親孝行だ」ト「オいらア一年中金が無くて苦労するから、是れも親孝行の内だらうな」ト「それとは訳がちがふ。お前達のは、これ」ト「に違ふから無いの

だ。」びん「東西々々咄の道を切るめえ。ソレカラ。」いんきよ「扨其の大雪の中をかき分けて、池の端へ行つて見た所が、一面に厚氷が張り詰めてあるといふもんだから、爰だと、親の爲には命も物かはだト。」でん「夫ゆゑには石に爲つたる例もあり。」びん「東西々々。」いんきよ「先づ何かなしに眞裸になつて、其の氷の上に寢轉んで居た。」でん「そりやアどういふ料簡だ。」びん「果報は寢て待つといふ氣だらう。」いんきよ「何さ〳〵、さういふ淺はかな事ぢやア無え。ソレ、自分の體の温まりで氷が解ける、ノソレ、解けた所で鯉を取らうといふ腹だ。ナント親孝行ぢやア無えか。」びん「ア、悪い腹だ。氷が解けてひよつと落ちたらどうする。」いんきよ「親の爲に命は惜しまぬ所さ。」びん「親の爲に命は惜しまねえなら料簡せうが、もし其處で落ちて死んだ時には鯉も取らず、其の上にたつた一人の親が路頭に迷はうぢやアあるめえか。おらが料簡ぢやア、まづ不料簡に聞えるわエ。まづ第一氷がうまく解けた所が鯉が居ずばどうしたもんだ。」いんきよ「それは居る事を承知さ。」びん「たれでも鯉が氷の下へばかり隱れて居たら仕方があるめえ。」いんきよ「そこが親孝行の德だ。ハテ天道さまが見て御座るから、無駄にはさせねえわさ。自然と感應して、鯉がひとりでに飛び上つて、氷の上で捕まるといふが、孝行の德だわな。」びん「それはまア孝行にもして遣らうが、唐人は智慧が無えぜ。おいらならマア斯うする。『ナニカ、かゝさん、鯉が食ひてえ、アイ百も承知だ、待つて居な。』ト云つて半を持つて驅け出す

れ「夫れはもう矢玉はおろか槍が降らうが、負惜は無え。料理茶屋へ行つて六十四文か、鱚を百出しやア、鱚の御吸物ツサ。お上もなさけなしだ。いかに貧乏でも、百位な銭にあらうちやア有んめえがこいつはヘボ〳〵、お前達はそれだからいかねえ。假令百の銭が有つても、料理茶屋が無くつちやアどうしたられた「サア其所だ。どこでも料理茶屋があらうぢやアねえか。一山家とさては、江戸近在でも魚類は不自由だから、こゝの所を三里踏み出して見なさい。場所によつて生魚は見る事もならず、鯵の干物をしたやつの、お客人に一口もいけねえのを、大根をいれて煮て食ふわな。纔か三里違つても、所に依るとさうだによつてお前さん達は、有がたいお江戸ばかり拝んで居れたから、ういつらい事を知らねえ「さうだそれはさうだらうが、また有るもんだ。其の氷の上へ、夜鷹を連れてつて、小便をさせたらどうだ。「ナニ、其の熱田の氷が溶けるか、イヤサソレ、鯉がひよくりでる。どうだ、此の智恵はおそろしかろう「そこでこそ夜鷹が便を好み、鯉子が殺生を楽しむ事だ「ハヽヽ、、いやはや呆れたもんだ「だが殺生といふ内にも、今の魚釣が鯉を取るなとは、殺生でも頭にならぬ二三の文句にある殺生をするのは偶の野郎だ。コレ先づ居ろ。今朝よく顔を出しやアがつたナ「外に斯うした人も居れば、…すこし熊公がにこつしよ「ヲイどうだ鬢公、早いの「コレ聞かつし、此の傳野郎の、よんべ二町目の曲門でひよつくり逢つたからのにさ、今コレヤ〳〵、此んでならば、乙竹気ねえ、實へ来でしやべる事があ

るもんかエ。」熊「能いやい、おれが口だア、熊さんの御口中が曇らぬ鏡ッ。」でん「鬢公聞かつし。此の野郎ナ、大道賣りの砂糖漬を常住嘗めつけて居やアがるから、言語はくろいもんだ。」熊「コレ、よくてめへ寐ごかしにゐたナ。」でん「べらぼうめエ、うぬが氣がきかねえからだア。鬢こう聞かつし、よんべナ、手拭を一すぢ餘所の女がとこからへいつけて來やアがつてナ。」熊「コレ／＼、それをいはれておたまりがあるもんか。」ト、後から傳が口を塞ぐ。びん「よせエ、よせエ、コレヤイ。息がつまらア。」ト、熊が手を放す。でん著物の前を合はせながら「吉ッ子と二ア人でナ、格子へぶつ突かりやアがつたはいいが、業にお屁をはたきやアがつた。」熊「コレそねむナ。謔名はじやんこ熊でも、そこへ行つちやア源之助だア。全體あの女が。」びん「オツト／＼、東西々々。おらが内でそんなはなしは出來ねえ。氣障氣なはなしはやめたり／＼。」熊「なぜ。」びん「ハテお前達の駄味噌を請け居るがつらい。それとも請け太刀をして呉れるなら、請け賃にやアなんぞ奢るが能い。オイ傳さんサア來たり。」ト此の内、隱居の天窓結なしまひ、傳矢伸をしながら、月代をもみて已うけを持つ。作者曰、これより以下は大客あるとも、月代をそり髪を結ひ、順々に下剃にまはる事など委しく書くべけれど、煩はしければいちいち／＼に記さず。さまざま／＼の物語ある中に、それ／＼髪剃り／＼に髪月代する事と思ひ給ふべし。かの休みずして話に來る人もあり、或は毎日遊び所として入り來る人もあるべし。その顔一々にはしるさず、字數の委しき御見物、必ず咎め給ふな。でん「ほんによ。能え加減に欺されて居ろ。友達の顔が汙れらア。」熊「へ、屎でもくんべい團扇、此方が騙してやるのだア。」でん「又突き出されて青く

なからうと思つて[illegible]、[illegible]のあは人形で落をとらッ[illegible]のあとは口なら高野[illegible]いふ事に、

[illegible]「[illegible]

能い元氣だなう。羨ましい。[illegible]今二十だに若くんば、お對手といふ[illegible]、[illegible]

ねえ[illegible]、是れから色の所へ行つて遊つて來ませう。[illegible]花は[illegible]花に[illegible]」

どん「何處へお出で

を出し「是れ〳〵よ。」[illegible]、お寺參りか、お前さんの花は、[illegible]だ

なけるよ。ところ[illegible]に[illegible]、[illegible]が能うと[illegible]、[illegible]花が[illegible]本

買つて、四文錢七文置く風だ[illegible]「[illegible]惡く[illegible]、[illegible]

せるよ。今年も本堂も家根が痛んだから、[illegible]中を廻つて[illegible]化して[illegible]

いたばかりで、[illegible]は出すだらう[illegible]「それで承知するもの[illegible]

ヤァいかねえわ[illegible]「[illegible]なや[illegible]ねえ、[illegible]のだ[illegible]

三「それおやす[illegible]たたんだ」[illegible]「なんでも能い。おれ一人を守つてくれた[illegible]

爺に成つ[illegible]「[illegible]樂さんになつて亡くなつた[illegible]は、力も[illegible]

年老つて見ねえから心持が解るめえ。何たつても[illegible]もの[illegible]」[illegible]

るだらう[illegible]「[illegible]思ひ出すとよ。其の[illegible]、おもろ[illegible]息子殿などは、お上下を[illegible]、仲人

に謠をうたはして持つたわ、ノ。おらが御婚禮は、下女の引越の樣にして、仲人が葛籠を脊負つて、左の手に鐵漿壺を提げて、右の手に酒を一升提げて來たわ。イヤまた恥をいはねえぢやア理が聞えねえ。ソコデ、おれは商ひから歸つて、今に大方花嫁が來るだらうと思ふから、豆腐を小半挺買つて來て、鰹節をかい居る所へ御輿入よ。夫れから仲人が指圖して、すぐに花嫁が茶釜の下へ焚き付ける。仲人が味噌を擂る、ソコデ仲人の懷から出した三枚の鰑を燒いて、三々九度よ。ナントどうだ。夫れから辛苦して取り立てた身上だから、あの婆どのも能く骨を折つて呉れた人さ。南無阿彌。ホイ是れはしたり、我しらずお念佛が出た、ハ、、、、。ドリヤそろ／＼支度して參りませう。跡月參らねえから色が待つて居るだらう。」びん「よく拜んでお上げなせえ。」いんきよ「またからかはうと思つて。ヤどなたもおゆるりと。コレ留、けふは大分剃鹽梅が能いわい。土産を持つて來るから待つ居やれ。」留「へ、椎實一ふくろタッタ四文。」いんきよ「四文でも見やれ。二十八文の天窗が三十二文に付くわ。」留「へ、今どき二十八文持つて來る人は、隠居さんばかりだ。」いんきよ「やかましい。最う止める。」ト出て行く 鬼「氣の能い隠居うだな。」びん「けつこうだ。」鬼「息子が仕合だぜ。」でん「あの息子もよく稼いで利口者だから、身上は大丈夫だ。」鬼「親子ながら仕合といふのだの。」でん「どうもさくくて能い。」でん「あれでも若いときには、金を遣つたらうか。」びん「ナァニそりやア無えのさ。」鬼「たゞ口ばかり

サ。」一「日には何がいられえ。たゞ其れだから利口だわな。」ぶた「通人だの通り者だのといふ名目が、ざん
ぎり野暮だぜ。其の面様には、皆身上茶々むちやくちやだ。」ぶた「野暮な／＼といふ人は、身上を無くし
て人にも笑はれる。間には貧乏な奴を救つて遣つたり何角かする。おらア其の方が通り者だらうと思
ふ。」ヨ「おれも其の気で通の者でもないが」ト、ぶた「てうぬが何国に通の者だ。」ト、てうつゆつ人、せ
りむくれのよい／＼といふのだ。」熊「コレ先刻から默つ

ぶつ／＼、切つたら宜からうな
てゐりや能いかと思つて。」紅色に「殴う料簡か。」ト、鬢押
まだみの此様なおせまの一ツや二ツ、出来合に幾らも有らア。かゝあたぼれに、皿でも大分付けて三
十八文。」ト今度は、御説、何の天窓だア。」鬢「親父や昌吉に、最つと能く説へなはとやつた。鬢
が天窓も、凸凹のある、忌々しい形だナア。」ぶつ「じやアとこのは罪が軽いっ」ト「あいが悪らね
えが、髪結には罪が重てえぜ。コレ見ねえし、剃刀の遣へねえところがあらア。名所旧跡ひつかゝりだ。」
二十四輩はこれが天窓だはるると、「ときうせき」は悩むぜ。」「どうぞよ、アレんや。たまく／＼
云やア、あんな毛をぬかさア、御霊膝だ、鳳林寺、稀有過ぎるアあんめえし、土肥端だ」ば「へ一ぽ
んきめたナ。こつちは宗旨が違はア。」ぶ「トトきに何宗だ。」鬢「宗旨は代々山王さま宗。」ト「鳥鹿
ア云やな。其れは産神さまだア。」鬢「何でも構はねえ。山王さまはおれが贔屓だから、おれが宗旨に

して置かア。南無阿彌陀佛や南無妙法蓮華經ぢやア威勢がねえ。コウ、俺ア何にも願へは無えがナ。おれがマア、二三百年も過ぎて [illegible] の様に拵へさせてナ、そいつを牛車に載せて馬鹿囃子よ。死んだら、輿を人形屋へ誂へて [illegible] ヨシカ、施主や店受には、赤熊で面をかぶつて「ひよつとこ」を踊つて貰はアス。さうしたら、親分も音頭を取つて呉れようから、友子友達が、手木前で眞遣をやらかして呉れよう物なら、おらアうかむぜ。ホンニヨ、今つから遺言にして置かア。若し間違ふと幽靈になつてとつ付かア。」「手前の面で、幽靈はたまらねえ。」「あれは音羽やの様に、好い男で無くちやア笑えねえ。」「チヨツ、何でもけち付けだア。そんなら仕方がねえ、化物で出て呉れべい。」「丁度能い、野暮が化物に爲つて出りやア、箱根から先だ。」「所謂江戸ッ子にやアとつ付けねえス。」「なんの江戸ッ子まがひめた。こんな野郎があるから、江戸ッ子の評判記がわりい。」入り來るは、すてき熊といふ綽名のある人、何事にもすてき〳〵といふ口癖あるゆゑなり。「サア〳〵敵は大軍となつて來たぜ。」「其の時熊さん少しも騒がずサ。」「なんのだらしも無えくせに、しだらがないトいふ事を「だらし」がないなどいふたぐひ、下俗の方言なり。何でも四文と出たがるから不便だ。」「コウ大分大人しいの。」「何さ、何乍居ても「ひいひいたもれ」だ。まだ鬼渡や草履隱をする仲間だわな、紺地利面の褌を締めれば見せたがる手合だ。エ、途方も無え。何程する物だ、高が一分か壹分二朱ヨ。直打の知れた奴を大層らしく見せたがるの

は、見て、よやけ時間にかゝはらず「一寸」声色で「此の熊さんの御誕生、そやつことまれたは江戸繁昌の
朝、三馬が町の江戸の水を産湯に浴びて、下村松本[illegible]、[illegible]の[illegible]、[illegible]ト[illegible]
る色男。」「ヅレ[illegible]くく、[illegible]くく。悪い時気が違つた[illegible]、[illegible]
何だら、[illegible]の[illegible]は、[illegible]。」[illegible]今[illegible]
とあやまらせる色男だ」[illegible]手前の面を見ろやい、誰でも[illegible]
ねえかい、[illegible]の[illegible]が[illegible]の札を出すものだがとうだ」[illegible]
ニャ札を出したよれはきついかへ[illegible]、[illegible]には[illegible]
昌「小[illegible]めらが[illegible]を[illegible]るな[illegible]一[illegible]に道[illegible]」[illegible]
を[illegible]になんぞ。」ト、いふうしろからまた一人、そつと[illegible]「誰だくく。古風な事をするな。」[illegible]
見きつし[illegible]「こいつ[illegible]」[illegible]たら幾何[illegible]」[illegible]非力なこと[illegible]

て持て指で[illegible]、小指に[illegible]の丸の格好を[illegible]つ居る奴だ[illegible]、魚板に[illegible]
知れ[illegible]、[illegible]、知れたくく。ハ[illegible]「[illegible]」[illegible]
大名めらが喧しい。」[illegible]「ひつてんな所ばかり[illegible]が[illegible]
んな所が。」熊「待てくく喧しい。アイタくく、目をきつくするな。痛えわい。」「知れまい。」ト、手をはなすと、熊

が出入り場の旦那なり。熊ぎよつとして「これやア旦那、御免なせえまし。私は又、外の者だと思つて、大きにお慮外申しました。旦那とは思ひも付かねえ。おめさん、今日アどつちイお出でなさりやす。」旦「ハ、、、、一寸近所まで。」熊「コウよく怠るぜ、ちつと精を出さつし。けふか明日は出来上らうと思つたに。ハ、、、何か、何か、又、何所か行つた歸りだの。」熊「イエ何旦那、とんだ事を被仰らア。」長「旦那モシ、ちつとお叱んなさいまし。聲色ばかり使つて居りますぜ。」熊「コレ止せ。」ト、目を赤くして「あいらアろくなことは申しません。エヘ、、、。」トにがわらひ。旦「どうもモシ、困つたなまけ者でごぜえすネエ。ハ、、、ハ、。ハイどなたも。」ト、行き過ぎる。熊「ハイさやうなら。」ト、まじめになる。でん「熊めエ、毒氣を抜かれたア。」熊「手前ッちやア早く氣を付けて呉れりやア能いに、おらア夫れとは知らすに、いけぞんぜえなもの言ひをした。」ト、いふ所へ又一人かけこ來しなに、頭きて片足の下駄ひつくりかへる。熊「トツトきたりナ、俺かはつて猫となり、下駄ひつくりかへつて素足となる。ヨイ〳〵。」ト、手拍子をうつ。でん「雷門の後へ出て居ればいい。」長「どうだ熊公。」熊「色男どうだ。」長「龜さん傳さんおはやいの。」鬢さんどうだ、まだ跡があるか。」びん「まだ左つありやす。」長「そいつは大變だ、行つて來よう。」熊「また新道か。」長「なんのおめへぢやア有るめえし。」ト、ゆき過ぎる。びん「新道とは。」熊「鯨人がうちよ。」びん「鯨人とはなんだ。」熊「知れねえか。知れずは煤掃まで待たつし。」びん「背のことだわナ。」でん「ム、仇文字か。」熊「さう云つて

も結構と言だせに、青ちの野郎、此の頃血道をあげ居るせい、土竈もこに掛けて土中だかなニ
寺からう、ふなと見物するぞこに「鬢五郎に、ニウイヤ大きにお世話だらう」雨よくに言はせず
碁文字に聞いて見や、碁さんの話は稽古あつていつて言いつて、一番さらつてと言はせず、一節
お説に論じ込んで、通話へ座つたから話しにしかならねえに「どうで又、こうとこが世話すれば
つまり、音の利の頭のかんにやすなるんだ。それでも合ひあめや、熊さん一枚お世話役さんも、
といつでもぬいこるこでやすんねえ。こ」と言ひ当り「何の世話するこ」と大方小手廻しへ帰つたら
うこ一」旦那に幇間へ行つてやるかいこ」と黒衣や深川へ行つて語る時の、彦八への三味線とこ
語りたる、あいつはなやうだと聲だ。こいつア可笑しかつたらうに、あの又いふ、又いふ、前自
くよ噂ふこ一と浄瑠璃を語る噺が、先生褒めねぇときてるるから、御日本の座をかいつて、「〇〇や、いあ
いふた頭のすけそして聞えたといふ話だ。ふしなあ、ちよつと中席へ行つて、先生の目を盗つて太夫が頼もの
つ倍ゐ内に、彦八兵衛が三味線を弾きかける、それをまあと四五枚ほねて知らぬ顔で見物されも知ら
ないよ、中席を一番やつて往来へ、鉢のやつやを見こ　伊勢屋が右衛門様といふ男が出て
ことして、目をぱつちり開くと、小寺町二丁目中の傳通　るるかに、肝を潰して、爰に一枚
一枚開けて見ようとする内、彦八兵衛が意地悪に、掛聲をして三味線を弾きかける。こちらはとちり切

つてまごまご狼狽へる、夫是するうち、聴人は毒を云ひ出すかエ。」熊「コウ〳〵、コウ〳〵能え加減にしさつしナ。詰らねえことをいふぜエ。」トこりとなり、表を見てに「すヤ〳〵、きてれつ〳〵。」熊「なんだエ。」熊「へえ、お大事の物。」でん「何だといへばサ。」熊「へ、噂をすればサ。」びん「誰だ〳〵。」熊「彦ん兵衛かエ。」熊「へ影がさすッ。」ト、いふ所へ此の浮世風呂女中湯の障子を開けて、あだ文字といふ婦人、十四五の弟子娘に浴衣をもたせ、湯あがりの姿にて通る。▲熊はおどろいたさまにて障子をあけて立つてゐる。でん「モット障子を開けやナ。」熊「すイ〳〵おつな點だ。」ト、少しあはてて、此の声にて、あだ文字心づき、あだ文字振りかへりて「すイ、熊さん。」熊「あださんどうだネ、一ぷく呑んで往ねえ。がうぎとはや起きだの、たつたいま、閂が鳴つたアエ。」あだもじ「すヤほんにかえ。」ト、立ち寄りて、「すヤ〳〵おそろひだネ、鬢さん。」でん「こなひだは。」あだもじ「ハイすきと。」ト、愛嬌をくれて「モシお吉さんはどうなさつたエ。さつぱりお目にかゝられませんネ。なにかは、藤さんはどうしなすつた。この中敎へて上げた御符を頂きなすつたかエ。」でん「アイおかたじけ。あのお蔭で、大きに能くなりやした。ほんにまだお禮にも行かねえ。」あだもじ「なんのお禮所かネ、、、。」ト、こちらを見て、「すヤ〳〵、どなたかとおもつた。鬢さん、きついお見限りだネエ。さうなさるがいいのさ。」熊「きつい痛めやうだ。此のごろは慾張りきつ居らアナ。」あだもじ「慾張りは第一だけれど、とんだ所へ慾張んなはるだらう。」熊「そりやア無えのさ。」あだもじ「熊さんお前夕べお出でないネ。母親がいつそ待つ居たつけ。」でん「熊はゆうべあつちのかよ。」あだもじ「すヤほんにかえ。傳さん、お前も

一緒だらう。道理でお隣ぢやうなお顔だ。ほんに噂さん、かつて[illegible]
お隣だた三人寄つたら、また面白い趣向が[illegible]ことぢやが、忘れたか。[illegible]
え申した事は聞に合ひましたよ。後に言出でよ。噂さんも、[illegible]一緒にお[illegible]
し。」[illegible]、こしを「[illegible]、又化物などなしにお出でや。
ハヽヽ[illegible]
になさいましョ。ハイあばよ。」ト、ふり返りて、小じよくの方を一寸見てずつと行く。後か 小じよ「[illegible]
よい／＼、[illegible]の馬鹿や[illegible]
うて二足三足かけ出す。 あをなじ「何だ此の子はどうけなさんなといふこと」ト、眉毛に八の字をあらはしたる
わた[illegible]
ぢんて「うまくいふぜこなア。」 ぢんて「あの子は全體世事が能い。[illegible]別して[illegible]世事が[illegible]だ。」[illegible]
れだからはやる事を見ねえな。第一座敷が上手だに、[illegible]が能いときてゐるに、面がよいといふ[illegible]
だから、鬼に鐵棒、佛に蓮華だ。」 ぢんて「[illegible]見さうし、能い年増が通つた[illegible]剃刀をま[illegible]
[illegible]
能いわい。[illegible]
年増だら」[illegible]そんな子持になつたぜ。[illegible]

ぜ。」熊「妹の態ア見や。姉御とはすてんきう違つ居らア。鼻筋が内へ通つて、目の玉が兩花道へ引つ込んだ。」でつち「鬘は髪結と見えて、天窗は氣が利い居るが、裾にしまりの無え風だ。」でつち「腰から下は明けばなしとは、そこをいふのだ。」熊「面と胴とはべつ／＼だナ。」熊「啼く聲鵺に似たりけりツ。」でつち「そして見や。無けなしの襟足を剃刀で剃り込んで拵へたぜ。あとが眞青で居るから、いくら白粉をひんなすつても、女形の髭といふもんだ。」でつち「あれよりは坊主襟で能いから、本地の儘でおけば能い事よ。」熊「イヤ又首筋のきつ立つた奴は、さアつはりして能いぜ。」熊「只の女がいくら作り磨いたつて、ほんの事たが又、江戸饒舌にかなふものか。十人寄せても髪の風は同じ事だぜ。意氣で人柄がよくて、マア下卑た事と云つたら、是れん許も無えわさ。それだからおれが。」熊「箆棒奴、又仇文字か。」熊「きつい先つくゞりだぜ。只贔屓だといふことよ。可笑しくもねえ。」ト、頬をふくらす。でつち「能いよ能いよ、腹ア立ちなんな。今お菓子が來たら買つてやらう。大人しくしておいで。今に美い姉さんがお出でだよ。」熊「アレ／＼、お菓子が來た／＼。こりやアいい。妙だ／＼。」ト、いふ所へ、日傘をさして高く組上げたる菓子箱を肩に擔ぎて賣り來る。此の菓子賣江戸に四五人あるゆゑ方角によりて人物違へり。菓子うり「紅毛羊羹、本羊羹、最中饅頭に、羽二重餅。」熊「すイ／＼菓子を買ふべい。」でつち「ハイ／＼。」でつち「そこに居るお坊さんに上げてくんナ。」菓子うり「ハイ／＼。」ト、笑つ 亀「ナア熊公食はつし。」熊「菓子は氣が無え。」でつち「いかつしナ。おらア下戸だから迎餅とこある。

せう」[illegible]「おりや今朝[illegible]する気もなかつた。[illegible]は前休に酔つたせう」[illegible]
くらだ」[illegible]「ハイそこの所は三十二文、こゝが二十四文、其の中の四文八文に[illegible]
何だ」[illegible]「[illegible]」[illegible]「エ贔屓だぜ」[illegible]「そんなら是れは[illegible]
程な商人が出来たぜ。ぬしが毎日呼びあるくことを、そこでやつて見さつし」[illegible]「ハイ、こゝ
[illegible]「云ふがいい、[illegible]」[illegible]「ハイ」[illegible]「紅毛[illegible]、[illegible]
に、[illegible]、いさごか[illegible]、[illegible]、[illegible]、鳥羽[illegible]、かすてら、[illegible]、南京[illegible]
に水仙餅、ちうか、いが餅、鶯餅、薄雪饅頭に、あこかはちら、咽のあくまで[illegible]
するのか山椒餅、[illegible]に、翔餅、[illegible]のちよいとおあんころ餅」[illegible]
さつし」ト、[illegible]二三人[illegible]「[illegible]」[illegible]
なさい。」[illegible]「アイ今日は」[illegible]「大分お揃ひでございますネ」[illegible]
どうだ」[illegible]「[illegible]さん[illegible]さん」[illegible]此の間は[illegible]
此の門[illegible]「[illegible]」[illegible]「[illegible]」[illegible]
買つたぜ」[illegible]「おれらは[illegible]
[illegible]お前ひとりで行かうとは、あんまりつれない胴欲な。私も共に行かれいにやと、男の膝に[illegible]

ひ付き、わんとばかりに泣き沈む、ワワンワン〳〵〳〵。」熊「恐ろしい文句だの。その面で啼かれちやア。蜜柑船の地震だ。」熊「能いよ。打遣つてお置き。私は一人で参るよ。コウ、そりやアいいが、ア、悪い腹鼓梅だ。コウ皆がつき合はねえか、腹直しをしてえ。」びん「何所へ。」熊「何所でも能いわナ、そこは熊さんの手形だア。」熊「行くべい〳〵。」ト、びん五郎に向ひ「オイおさらば。」びん「行つて来ねえ。サア旦那直に。」熊「すや能い間に来たの。」びん「まだ間に二ツ三ツ御座いましたが、お出でなさんねえから能う御座います。留、今の内飯を食へ。」留「アイお前さんおあかんなせえ。」びん「マア手前行きやナ。」留「アイ。」徳「まだ朝飯前か。」びん「ハイ今朝は朝寝を致しました。」徳「そんならマア食つて来なせえ。」ト、いふ時、奥より女房お吉出で来り、お吉「どなたさまも能う御出でなさりました。けしからん御寒い事でございます。」ト、腰をかゞめて挨拶をはり、びん五郎が方へ向いて、「モシエ、旦那があゝ仰有るから、一寸おあがんなせえ、お寒からう。」びん「オイ。」ト、此方へ挨拶。「そんなら御免なさいまし、朝飯を食べねえうちは、仕事をするにもぞく〳〵致します。」徳「そのはずさ。サア〳〵構はずと、たんとおあがんなさい。」びん「サア留来や。」留「アイ。」ト、奥へ入る。▲折から萌黄の風呂敷を背負たる男、股引草鞋にて、門口よりさしのぞき、「鬢さんおさむう。」ト、奥より答へて、びん「アイ権八さんお出で。」権八「今日はよろしう。」びん「アイけふは先づ。」権「ハイ、この中の唐椎はどうで御座いました。」びん「アイまだ遣ひやせん。」権八「ホイ、あの儘か。ハイさやうなら。」ト、跡しさりに敷居を跨ぐ

[illegible]殺て「キャン。」柳八「オツト堪忍しろ。」トいふ後から、小僧と盲「どうぞおねがア、ひ。」
[illegible]む。
柳八[illegible]「ホイ。」

巳刻の鐘聲　ゴオン。

柳髪新話浮世床初編巻之上　畢

柳髪新話浮世床　初編巻之中

東京戯作者　式亭三馬戯編

聖吉「コレ〱夕の玉章を見せてえ。おれにどうも分らねえ事がある。」ト、いひながら懐中より文を取出し、要文の所を出して見せる「爰はまつよしと、ソレ爰よ。おといふは、御やくそくの黄金五片サ。これはソレ讀本の文句にあるから、大概覺えてゐる。」けん義「金五兩だの。」徳太郎「そりやァ御無心か。」聖「無の字さ。」けん「ヤ恐れるぜ。よく遣つたなう。」聖「そこは不便だから、露の情をかけて遣はさるだ。」徳「ありがてえ。」聖「ソコデ爰を聞きねえ。早速御いやを申したく存じ候へども、昨日は風の心地にて、役所をもひきをりしままツサ。爰だての。五兩無心を云つてよこしながら、早速御いやとはどういふ氣だらう。いやなら云つてよこさねえがいい。それとも又おれが御いやとも云はずに、早速遣つたといふ事か。」徳「コウコウ足下でもねえぜ。それだから、ちつとは文字の方へも這入つて見ろといふ事よ。」せい「何、豊後節を語れば、此の詞が分るか。」徳「何さ、少しは本の端をも讀むと分ると云ふことさ。其の中に書いたいやといふ事は、和文にいふ禮の事サ。勿論禮義の禮を和訓ではゐやと訓ませる。そいつを讀本など

にも誤つて、禮をいふ事と思つて、「お禮申すといふ所へ、いやを申してなどと遣つてあるから、矢張能い事と思つて、誤り傳へるのよ。早速御禮といふ心いきだらうが、可哀さうに、その時人に習はねえ。此の手本を書いたやつが悪い。」せう「ハヽヽ、それで分つた。」たゞ「全體文の手本を書いてゐるものがわるいのさ。」はち「あるとも〳〵、狂歌や俳諧を四文ばかりもする人や、讀本樣をこしらへる人などが手本を書いて賣らあな。」せう「それで分り〳〵。」「コレ見な、お定まりの文だけれども、思ふ古いといふ氣だらうて、この中の文にはながしこやらかしたが、此の文には文をねも書損つたかしこ候もなしさ。是れみねえ、いづれ近きに御けんのふしをねがひまゐらせ候などといつては、ねずにたゞぬを拜むやうだわな。」せう「分るめえが」「見分らねえのさ」「コレ〳〵、足下達は、不調法、不書法だぜ。それだから清濁だといふ事さ。あとの禮ねえ。最うちつと論をしつて讀まねえもんだあな。」「さうさ、それだつて、何所へでも頼んで書いた時に、書いたが能いわさ。是れおやぢ、己などは案外で先へ讀らねえ。此の位なら自筆をまとしなが書かに居したでな」「それは讀みやうが悪い。ねがひまつるになるといふ事だけれど、ゐの字を逆さに書いてつの字の縦ばかりが悪いから、まゐらせ讀める。一體ねがひまつるといふ事は、御けんのふしをねがひ申してゐるといふ事さ。」「ナルホド、それをねがひまつるといふ事だに、」『まつらすとものはねたに、まつ

るとは、奉るトいふ事で、男文字ならば、奉ㇾ願候といふ心さ。」せい「こんなにむづかしく書かずともだの。」けん「やつぱりまち入りたゝとか、御まち申し上げたゝとか書いて、めでたくかしこやらかした方が、俗に落ちるの。」せい「さうさ〳〵、その癖あいつらが何を知つて居るものか。讀めねえ人よりは、書く人が分るめえと思ふから、それが不便だ。」徳「近頃は、文の手本を書く人が、古學の間に合ひをするからさ。」せい「古學とはなんだ。」徳「萬葉家の眞似をするからよ。」せい「萬葉家とはおつな名の唐人だの。」徳「コレどうもならねえぞ。萬葉家とは古ぶりと云つて、むかしの歌の風さ。」けん「昔の歌の風なら、楓江か露友の風だの。」せい「今の千蔵や芳村とは歌ひ様が違ふだらうの。」徳「コレアどうもその様に事を解さねえぢやア、唐人と話をするやうだ。」せい「その筈さ。こつちはじやがたらの紀の國屋、紅毛の音羽屋といふ色男だ。」けん「どうで日本では、色男とはいはれねえ。ソリヤ御覧じろ。じやがたらのこんはんやは、紅毛の出張にござい。遠見の番所の體、松の木が二本、あね様が三人まで、このやうな些さな箱の中にしかけてある。ソレ、立つたる唐人、脇から挨拶する體、楓の木ぶり、松の木の太いこと、トントどうだや。お前も見なされ。目鏡は、紅毛の千里見。」徳「コレサコレサ〳〵どうした〳〵。」けん「これはお前達は知るめえ、お前は昔の萬葉家とやらは、知つ居るだらうが、此の聲色は知れめえ。」徳「何また、そんな事は知らねえともの事だ。」せい「おれは隨分知

つ居るテ」「それは通町へ立つて居て、色々な目鏡を見せた人だっけ」「ふむ、よく知つて居る。お前は
まだ物知りだが、なんでも萬葉家を知つて居ても、時代違ひには分らねえだろ」[illegible]お
つな事で褒められるの」「ナニ最う十四五年も跡まではは、見かけたが、故人になつたか近頃は見
えねえの」「ナニさうさ其の十四五年も跡の事を時代違でしらねえ癖に、萬葉家とやらの大昔の事を
など知つて居るだらう」「どうも物知とは云はれねえぜ。何も角も知つて居るから、物知と云つてもよけれ
ど」「イヤ何さく萬葉家も何も入つた事おやアねえ」「さういはれては論なしだが、しかし足下
もおれが意見について、ちつとは物學びをしな世え」「ナニさうさ物まねかし」[illegible]
をよみ」「ナニ、論語讀みの論語しらずよりか、論語よまずの論語しらずの方が[illegible]」[illegible]字
は知らずとも、金さへ持てばいいわな」「字を知るばかり學問ではねえ。[illegible]
せう」「それでもまア字ほかの知るよ。學問をして本當の事持らな人は[illegible]ない」[illegible]字を知
るよりか、三絃を習つて[illegible]を引くがいい。むつかしい字をしる稽古がいくかと思ふ[illegible]
昔さまの昔の字が見ねえ。やさしく書けば七百といふ字だが、むつかしく書くと、八百といふ字だ
してみれば、古切[illegible]の萬葉といふ癖で、手習いが達者でツとよしかの。ツと、七百まで[illegible]
書いて見ても、ソリヤ、むつかしく書くと六百[illegible]と見たか、是れ、ちよつとしても百損がいく[illegible]
する。

レサ、どうも足下たちは度しがたい。〈なんともいへねえから思召し次第。」せい「それでもあの機關をしらねえ癖に、大昔の萬葉家。」ぜん「これさ〈捨てて置きねえ。物知つたり物知らなんだり、物知り物知らずさ。」せい「ム、いい〈。」ト、いふところへ、左五郎留雨人出て來り、びん「これはお待ち遠でございました。」熊「がうぎと早飯だの。アレ〈表を〈。」ト、指す。皆々其の方を見る、せい「ハ、アあざやかに浮んだり。」

「美い女だの。」せい「萬葉家ぢやアねえ。」「饅頭家だ。」「晴しい。」せい「ハ、ア、素紺縮に帯が八國おり。」「よく衣裳づけを見るなう。おいらア顔ばかり見るから、外までは目が及ばねえ。」「そこはちつと違ふ。頭の上がざつと三十兩、櫛がばらふで、笄が今風一本、後挿が少し流行に遅れたれど、甲が結構。」「目が二つまで満足に付いて、鼻筋足の爪頭まで通り。」「口は耳の脇まで割けて、歯は亂杭歯。」「親の因果が子に報うッ。」せい「おきやアがれ。なにを云はつしやる。」熊「しかし美い女だ。」「男好きのする風だ。」せい「亭主持ちだらうの。」せい「アノ婆さまが、跡の方からにこ〈して行くから、あれは質の様だぜ。」熊「きつい〈違ひあるめえ。」せい「嫁だと是非跡へ下つて、姑婆が先へ立つて歩行くやつさ。」「あれ〈又來た。ハ、アお屋敷だの。」熊「紅裏の惣模様、きりゝちやんとして又好いの。」「どうだ。今のと是れとはどつちを見立てる。」せい「そりやア見立ての利く奴は先の婦人さ。女房に持つなら此の方がおとなしやかだ。第一家の爲になるわ

なこ「先のおやァ、さぞ嬉くだらうのう。」ばう「嬉く代のに居てやるだらう。」ナニ何でも女房は、
野暮な不器量がいいぜ。斯う云つて、おれがよくたを持つたから、負け惜しみをいふぢやァねえが、
焼きもちやくすべもしらず、どんな嘘をついても、真に受けるし、其の間に外でだいぶやかまし
いふよ」ばう「まづ内が静かでいい。」ナレ「うぬが女房は不器量でもいいから、ぶうぶと野暮でおとなし
て、亭主を大切にして、しまつ者で内を締めるのがよし。女達の女房は小意気で達者で、居着悪りの
鯨舎あがりで、酒でも飲んだり三味線でも弾いたり、ナヤおまはん何でありますと、ふうたらいだと
きつい洒落で、なぞといふ浮気者がいい。」ばう「そのうち面でもあらう」ナレ「すんまの暮ら好かるに
それもかしおれがやうな、むさい女房を持つ居る者も損だよ」ナレ「それには又、されたほうのお
あてがひがあるわな。」ナレ「さうかと思へば、亭主が為に美しい女房を持ちながら、ひとかい女を
つまむ奴もあるの。」ばう「あれはさうだいひなさんな。常住鯛ばかり食つて居ると、そんまめすし
物も、一日いく奴だわな。」とめ「さうだけれど、おまへ達は傍で見て居て、気の毒なのは瀬公だぜ。干店
へ数年して居た治郎左衛門といふ女房だが、なぜあの女にのろくなつたらう。その瀬公は好男だに
ナレ「あの女には過ぎ者だわな、一體瀬公が気がいいからよ。」ナニ何時行つて見ても、水茶屋の屋へ
二人並んであたつて居るが、瀬公が居の所へ、女房がべたりと寄り添つて、ナニいふ事でわかつて居

るが、何分見る目が氣の毒だ。瀛公も發明な人だから、氣のつかねえ筈もなし。入らざるお世話だがあれは止めさせてえ。」せい「火鉢を離れると、火燵へ一緒にあたるよ。」けん「火燵をはなれたら、雲隱へ一緒に行くだらう。」徳「偕老同穴の契り淺からすとはいふが、チト餘りあるの。」せい「慾庵が能いのを云つたよ。火燵から出て相引の絲を引くと、鳥の羽の縫ひになるッ。」鬼「鴛鴦の精靈か。ム、いいいい。」けん「引きぬきで鳥になると、女房は家鴨の精靈だらう。」せい「獨吟のけんちよ節で、所作をお助踊で見てえ。」けん「しかし家鴨までもいくめえ、薩摩芋の精靈さ。」鬼「とんだ前きやう言だ。」せい「ちよつと湯へ往くにも、友達と一緒には出さねえ。あんなに燒くなら、大福餅でも賣らせればいい。」けん「流行の八里半がいいのさ。」鬼「おの〳〵あの婦人の得意なものだ。內へばかり買ふ事だらう。何れ七去の內、漏れる事なしだの。」せい「七去はおろか、腎虛の內をも漏れめえ。」鬼「喧しい。」

ト、いふ所へ上方もの、商人體のをとこ入り來りて 商 作「どうぢや鬢さん。」びん「ヤお出でなさい。作兵衞さん昨日は何所へお出でなすつた。」作「ハ、きのふは北國へ。」びん「お飛脚にか。」作「なんぞいうてかい。それや寺岡平右衞門ぢやわいの。わしぢやてて北國へ行かいでわいの。阿呆いはんすな。」びん「どつちが阿呆云ふかしれねえ。」作「ぢやてておんまりおやがな、昨日はえらうさむかつたによつてナ、河豚汁焚いて一杯せうといふ所ぢやが、酒がいかんさかいナ、飯なと食をとおもうたが、イヤ〳〵屋敷の掛取に往ぬるか

か、とつと晴して[illegible]と料簡しやアがれ。下谷で[illegible]因果の[illegible]
昔、おこし売も遠れいでゐる。慾をしいゝへこ蛸り。七歳な時はいつその腐れだから、[illegible]な二銭で
も、ぜひ三両の金[illegible]て、ヨウ[illegible]と置いて[illegible]
て、どこいら[illegible]見て[illegible]、よ悲しく身分にかゝるわいの。そこ一両が、[illegible]
[illegible]其の身分[illegible]
[illegible]家を[illegible]に持つて、[illegible]
[illegible]
[illegible]
い上方[illegible]
[illegible]仕入物でも無けにや、[illegible]
一種、[illegible]
一か現銀掛直なしぢややら、[illegible]王の小さい[illegible]
さつて、相場がないわいの。[illegible]
ずこ相模が江戸に[illegible]

ん、一寸橋詰まで出て貰をかい。』ト、いふとの▲片ツ方の對手めが、同じく氣が長いだ。『何ぢや私が事てごんすか。』『オ、いかにもこなんの事てごんす。』『ナ、そりやマア安い事ぢやが、己やひだるうなつたによつて、内へ往んで茶漬一ぜん食て來る間、先へ往て待つて居い。』『オ、そりや互ぢや。俺もその間に飯食て來る程に、かならず迯ぐるなよ。』『ヘ、何で迯げうぞい。おのれ其の日忘れたか。』『ヘ、何で忘れうぞい。』『えいか。』『えいわ。』『早う往ね。』『此の茶漬飯は、我から食ふか俺から食ふか。』『かき込みやうの。』『早いと遲いが。』『互の性根。』『庄兵衛。』『忠右衛門。』『後にあはう。』▲ト云つて兩方へ別れて、それから子分子方を兩方から引連れて、橋詰へ二人並ぶと、大勢の子分めらは、角力の立合を見る氣になつて、コ、偉い〳〵なぞと見物してゐるのさ。智慧のねえ奴等があアねえか。江戸で何合點する物か。さうすると二人がの、徐々と初めるわい。『ヤ庄兵衛ちよと下に居て貰をかい。』『オ、下に居たが何でおりやる。』『われや飯の食ひ立てですつなうはないかよ。』『おれ聞かうより、汝すつなかないかい。』『イヤおりや術なかないわい。』『そんなら俺もすつなうないわい。』『そんなら云はうかい。又跡の月の晦日の晩、髪場で貸した蕎麥の代錢三十六文、而も其の内角錢が一文交つたさかい、俺も男ぢや。そりや取るまい。差引き殘つて三十五文の錢、今爰で受取らうかい。』『すオわりやマア強情い事ばおすな。其方に髪場の出入りがあれば、此方も出入りがあるわい。橋詰の

はつたい茶。」「ト何杯とのました代錢俺も爰で取らうかい。」「ム、さう云や伯上のはつたい茶。」「我と俺とが出入りと出入りの口。」「差引き勘定。」「どうして取らうと思ふぞい。」「ヲヽ、斯うして取るさ」▲ト胸ぐらを摑まへんと、所を斯うしてさ」▲ト又こつちからも手を出し、鼠こつこ鼬こつこをするやうな手つきをして、「是ならそれ／＼、萬歳といふ身で立ち上る俺だから摑み合ふまでは惡口さ出る。それだから氣の短い見物は、終ひまで見た事がねえ。」「それから比べては江戸ッ子の早さ。何でも目前ない樣だ。此の鐵砲といふ奴が遲いか、擲か拳で腦天をポンとくらはす。何だ此奴はといふ隙に、合點をポキリト擲折られず。出刃庖丁は任侠の魂だ」「ト、コレ／＼それが間違ひの元。出刃庖丁で人をあやめれば、人にも難儀させ、面々も迷惑するではあるまいか。先づ第一には、主持なら主人へ不忠、親があらば親御達へ不孝の天罰なし。馬鹿者とも不孝ものとも恥へやうのない不埒者ぞえ。」「それでも立入となつては」「ま、いはんすな。そこがそれ、そりや立入なら、とかいふ…ト人横入おやま。眞箇に男を立てるといふものは、堪忍に日間いて…の理詰にし、得心させ…それで得心ないならば、云うでも敵がないてかい、トット放つて置くがいいわいの。そりや此馬鹿者ぞと思うて、ハテ負けたが能いわ。堪忍五兩負けて三兩の勝利もや。對手にならぬだけ嬉しいもの…人の口の端にもかゝらず、面々の身も無事に納まる。それでこそ男達といはれもすれ。今のやうな

しては、短氣者の大ごくだう、軍書でいはば猪武者ぢやによつて、世の中は化物は怖ないが、馬鹿者が怖いといふ。そこぢやて、江戸の親達が男の子持つたら、餘程嚴しう育てにや役たたぬ。自慢ぢやないが、上方にはそないな馬鹿者は出來ぬぢや。大坂の人氣が荒いというても、そんなぢやない。京都は別して王城の地ぢやさかい、男も女子のやうで、萬事がやさがたに優ぢやわいの。」びん「京の著倒れがなにをしつて。おれが去々年上方へ上つた時、京の愛宕山へ登つて居たら、何方ともなしにざわ〱ざわ〱と音がするから、海の鳴るのでもなし、あの震動は何だと聞いたら、傍に居る人がいふには、あれは京中で茶粥をすゝる音が、ごつちやになつて響く音ぢやと云つたが、おれもあの時は肝を潰したツけ。」作「又あばずれ云ふかいの。爰の亭主の口というたら、トツト叶はん。佛の御器ぢや。」びん「それはしれた事さ。お前がどんなに力身なすつても、江戸は繁花の地だ。江戸でなくては荷のはける所がねえから、毎年下んなさるぢやァねえか。江戸ッ子の金をお前方がむしり取つて行くのだ。してみれば、江戸は諸國の爲には、大切な御得意樣だから、江戸の方へ足を向けては、江戸の罰が當りやす。男なら江戸へ下らずに他の國へ商ひをして、金持ちになつて見なせえ。そりやァ出來めえ。江戸のお蔭で金が出來るのだ。」作「成程是れはどうやら尤もらしいわい。さういふ所に氣が付かれては、上方者閉口ぢや。なる程あちでも、下へ下す荷が大分有るやうぢやけど、トツト御當地

の四宝分も無いナァ。こりや踏つた癖目をなァ。節倹め細つてをるぞ。さりとりお江戸といふ所に、此の上らねい雲衆の見で、金設けが日の前にぶらつく。否やにまつて、文章に気が詰りくて、早う掃へ早う儲けいと云ぱあはかりもや、江戸子は其の金を設ける事が下手なやわい。先う第一お気が麁ひと見えるわいな。「それは頓着元祖しとやら、あんまり様に居ては見てゐられまへ、宝にの人に婚にはもる雅さこ。「お文といふおひやて、せないな事で。云はにやならまい。それ。もつとあるまいかいな」「ナアニ東西、只今の両方は可能の置きとすこしまう。ナァ、これはお前しようとかすか。御免下さりましナ。我な贅六めは、「武い」見りやア斧ひでござりまする、、、お前さんがたへお気は申すやないか、上方で生まれた私はそれやれ、一緒に両方達のお人様は義理うて、ナァ一人前のめとしいよ。それゆゑ私しともう好きやでござります。これや東うほんとの事でござりますナ。」これまた相話せうと思つて、上方者はどうしても顔在ねえ」「ホイノこればかりは御免やア。贅六さまの事ぢやア、ホホ、まだまア此ありがた遊つて来るに、やつと間か入るな。おまと往て来い。か。是の読み人教て聞いて下んせ」「ホ、又明日にへりますで。」「此ナァだんない。ナァ、節を」ずん也聞ぼいかナ。此頭へ行のが事やらや。月代剃る間も上手で能しいわい。何く、御見より二十八文出して、「それやア二十八文ヨ。現銀といふ事にも、こちのは高値なやきかい。一割も引かずにや不合に戻る由。ヤナ。

錢相場が安うて、的さんも引合ふまいと思ふさかい。こちから負けてやるぢや。」びん「おまへの天窗はよつぽど大あたまだから、三割增しをかけねえきやァ合ひません。」作「又ぬかすかい。駕籠かきには御器量增しをとられて、髮結に大あたま增しを出しては、一向ひき合はんナ。」びん「ナンノ、つひぞ江戸の駕籠に乘んなすつた事はあるめえ。道中駕籠にも乘れねえ筈だ。マア皆さんお聞きなさい。作兵衞さんが每年の道中に、連になる人がねえと申しやす。其の筈さ。下り上りを、二分二朱で上けるといふひどいのだ。お前さん方は、一寸江の島へお出でなすつても、安あがりにして五兩と十兩はお使ひなさらアス。百三十里の道中を往來で二分二朱さ。おそろしい人もあるもんだネ。」作「コレコレ好[illegible]駕籠にも乘るけどナ、忌々しいことがあるわい。三まえ竝で乘つて來るわナ。えいか、ソコテ雷門のあたりまでは、キャツ〳〵と掛聲しくさるがナ、それから跡といふたら啞の駕籠かきぢやモ。マア、ぎやともスゥともいひをらいで走るわい。其の上に跡から來る駕めはナ、さつさと驅け拔けるぢやないか。其の忌々しさが堪つたもんぢやないわい。私もあんまりぢやさかい「駕籠の衆掛聲をせんかいな」というたら、跡な奴めがナ「掛聲して能けりやこちでする。いらぬ左平次ぢや」といふ樣な事いうたわい。最う私も堪らんさかい「そんなら掛聲せいでもだんないが、なぜに跡な駕籠に乘り越されたのぢや」というたら「あれや三枚ぢや」といふさかい「私も三枚ぢや」というたら、お前のは

三枚並びやア、[illegible]三枚並びで掛聲してかけられる事か、お前達へ出ていて見なさるな」ト、並いて居る[illegible]
できるをつたによつて、懸らしゆつと消えて仕舞た」と皆々笑。「作兵衛さんは[illegible]」「ほんとん
ほう持ちで能いのだ」「[illegible]留めがへしぶりで日用したそうだ」ト[illegible]が十つ並んで[illegible]
寺へ持つて往かうといふ身で、だんまりで擔いだのだ」。ハ、、、、○「傍にゐる短八といふ人、さいぜんに
[illegible]で思ひ出したが、先へ行く[illegible]を[illegible]時は、「若い衆[illegible]」と[illegible]をつけ
て來る[illegible]、ふん、手拭を肩にかけ[illegible]さうさ、あれは靈儀と見[illegible]
だつけか」[illegible]氣がつかねえ」[illegible]には最一度[illegible]往く時に
やつたが、「早う逆つて下んせ」南鐐おやこといふたら、「[illegible]」と、[illegible]其の
五六丁も往たと思ふと、俄に逆うなつて、ゆるりくとかきなるさかい「[illegible]」[illegible]
代りに南鐐おやわいの。早うやらんせ」トいうたら、又掛聲してさつさとかけたはいいが、九丁程も
往たら、又緩々とかきをる。ソコデ私も氣がせくさかい、「コレどうおやい、南鐐おやおやす。何で遲い
ぞいの。急いでくれたら南鐐やる。遲けりや否おや」「南鐐おや」といふたら、又なりきるはい」を
おこおして土手へ下した所で、「ソレ、南鐐」と一片出してやると、[illegible]が、きよろりとして居
くさると思はんせ。えいか、「ハテ南鐐でよかろがの」ト行かうとすると[illegible]

『何ぢや。』というたら『最前の約束が南鐐三片ぢや。』といふわい『イヤこちは一片の筈ぢや。』といふたら『イヤ〳〵南鐐やるといふ事を三度いうたさかい、一分二朱ぢや。』と云ひくさつて、邪でも非でもうけをらぬに依つて、是非なうわけたてゝ百疋。ヤモえらい目に度々出遇うた。」「アハヽヽヽ。」皆々笑ふ作「私がはたきがまだあるはい。アノナ、初めて下つた折に、どこやらの家へ娼妓買ひに往た。まづえいナ、何や角が濟んで仕舞て牀へ往たわ。えいか、私一人つき離されて、勝手が知れんぢやあるまいか。所で蒲團が三ツ重ねてあるわ。えいか、ハヽア、これは何でも、此の上な蒲團を著て寐る事ぢやと思うてナ、今思へば推が惡いわい。ソコデ上な蒲團を持ち上げて、ト二枚の蒲團の上へそつと這入つて、蒲團著て寐てゐると、サア娼妓が來て見て肝を潰さん事か。『惡チヤリすな。』の『あばずれぢや。』のと、ぼやき〳〵、つウいと何所やら往て仕舞た。ハテ面妖な事ぢやがナ、己や何もあばずれした覺えはないがと思うてゐると、引舟が來てナ、先づ『起きい。』といふさかい起きたらナ『お前さん寐なますなら、爰な上へ寐なませ。』というて、蒲團三ツの上へ寐さして呉れたわい。ハツト思うて能うみたれば、えらう綿の入つた錦の夜著がナ、蒲團の裾の方に有つたわい。私や又惡い推を遣つてナ、娼妓の衣裳を積んだのぢやと思うたわいの。ハヽヽヽ。今思うて見れば、あほらしうて其の戯さが堪らんわい。」「ハヽヽヽヽ。」作「ヤ、最う往の〳〵。兎に角噺が長なつてならんワ。然らば

イヤ皆さんこれにや」ゾコ「最う蛙とお咄なせえ」鬢「イヤ〳〵居たてであかんわいの」行、出て鬢「鵺
業の口上といふ男だのに」鬢「桃色の肩衣を羽織つて、ちやるめらを吹かうといふ人だらう」ゾコ「鬼の觸
いお方さ」鬢「長六、手めへ懐に何を入れて居る」長「神道の八百屋から猫を貰つて来た」鬢「小猫
か」長「ム、何とか名を附けようと思ふが、虎だの猫だのといふも古いから、何ぞすてきに強い名を
工面するが、どうも無えよ」鬢「猫魔とはどうだ」長「猫魔でもあんめえよ」ゾコ「そんなら酒顚童子と
附けな、ナニ碁を打れて鉄拐と附けるがいゝ」長「猫が鉄拐では馴染がねえ」鬢「ムウ待てよ、巴御前はど
うだ」長「呼び悪いや」鬢「オツ呼んで見よう、チヨ〳〵〳〵〳〵、巴御前来い〳〵〳〵、呼悪は
悪い、諸猫の呼ばれねえ物を」長「巴と云はつしやい」鬢「巴来い〳〵〳〵、巴をチヨ〳〵と云つ
ても呼び悪いに」鬢「そんなら坂額さ」長「坂額来い〳〵、坂額チヨ〳〵〳〵」鬢「坂東武者と聞えるの」
と悪い〳〵」長「待たつしよ。ドレ俺が猫の名附親になつてやらう」ゾコ「ムヽ強いものと、ハテ何だらう
ナニ、ヲツトあるぞ〳〵。虎と附けさつしな、虎ほど強い獣はねえ」鬢「あの時もねえ、虎
は成程強いが、龍虎梅竹といふから、龍の方が上だぜ」ゾコ「成程それもさうかの、丸で虎と龍と雲ふ
と、龍は飛び行く事が自由だから虎は叶ふめえ」長「そんなら龍と附けうか」鬢「龍来い〳〵」鬢「小
の川に谷風といひさうだのに」鬢「どこい〳〵か、ヤ、悪い」長「しかし龍も雲がなくては飛ばれね

ぜ。」無「なるほど雲には叶はねえの。」長「雲とつけようか。」無「またつし〳〵。」長「雲も風には吹き拂はれるの。そんなら風か。」無「さうさの。其の風も障子といふものを閉てると、滅多に吹き込む事はならねえ。」長「風よりは障子が強いの。チヨツ、いつそ障子と號けようか。」無「待ちねえよ。障子も鼠には嚙られる。」長「さうさ〳〵鼠と號けよう。」無「イヤ〳〵鼠も猫には叶はねえ。」長「ム、なるほど鼠よりは猫が強い。」無「そんなら苦勞する事はねえ。」長「なぜ。」無「やつはり猫と呼ぶがいゝ。」長「おきやァがれ、大きに苦勞したぜ。」ト、いふ時、ふところに猫、「ニヤア。」ト、なく 長「何だ。ニヤアだ。古風に泣くぜ。あんまりお定まりだ。ワンとでも泣いてくれりやァ、見せ物師に賣つてお釜を起すに。」無「うさァねえ。いつその事ニヤンと號けるがいい。」長「ウムこいつアいい。ニヤンとせう。」無「ニヤンとせうでは、五大力のやうだ。」ト、いふ所へ六十餘りのぢいさま來りて 中右衛門「長さん、俺が野郎をしらねえか。」長「イ、エ。」中「憎い奴だ。何所へ這入り込んでうしやァがるか。影も形も見せねえ。」長「今朝出たのかエ。」中「今朝なら能いけれど、一昨日の朝出た儘だ。今に歸らねえ。」長「又はじまつたネ。何を聞きなすつたか、横町の戀屋を。」中「何あすこにも居ねえ。惡い癖な野郎さ。いつまでも馬鹿が止まねえわな。己が目の黒い内は能いが、今にも目をねむつて見なせえ。内は闇だ。」長「さうさ、お前の目が白く爲つては後悔さ せめて黒い内に料簡をつければ能いのさ。」中「病目で目の赤い内はどうだらう。」長「馬

鹿ア云やなこ」長「好運があかるくなれば内は闇だ。こゝつたもんだの。」長「ヤアきまりねえ。あいつが尻を拭ふばかりも何度だかしれねえぜ。」長「お前が尻を拭ふから悪いはな。今度から構はずにおきねえがいゝ。」長「どうもさうはならねえよ。一體あいつを留め置いて貸すやつが悪いわな。ア、困つた奴だ。」長「前方のやうに、商賣を精出して眷属を養ふものは、其の身も始終がよし、親達も老入がいい。兩方の仕合だ。おらが所の野郎がやうに、世話をやかせる奴は、親が苦勞する罪ばかりでも、立行は碌でねえのさ。親は子が可愛いから、罰を當てる氣は無けれど、天道様が見てござるから、終には罰が當ります。ほんの事さ。お前方も今の分ならいいが、てんぐに用心しなせえ。老人といふものは悪い事にはいはねえものだ。ドリヤ往きませう。」長「何所へ往きなさる。」長「地藏さまへ往つて來ねえきやアならねエ。アイそんなら。」ト、いぬる。びん「中右衛門さんも、あの息子では大きに苦勞するの。」鬢「さうよ。」長「困つた子だぜ。」びん「ひとりつ子と云ふものは、兎角あまやかすから役に立たねえ。」長「何體子も悪いけれど、親が優しいから悪いのよ。」鬢「小兒の時から云ひなり次第に育てると、ナア、ななるやつよ。」長「此の頃はおつな所へはまつて、血道をぶちあけて騒いでゐるが、今に見ねえよ、なけなしの金を捨てて、ちつとばかりの株家督を、他の手に渡してしまふだ。」鬢「ほんにあれもあゝなると他の意見も耳には這入らねえわな。」長「能い事を云つて遣つても、右の耳から左の耳へ拔け通しにな

つて居るからはじまらねえ。あの子は十八九の年までは、評判のおとなし者だつけが、いつの間にあんな放蕩者に成つたか。」　びん「人も三十越して、道楽になつたのはむつかしいよ。其の筈だ、見る程の事きく程の事が皆珍らしいから、爰で堪らねえわな。」長「遊びといふ物は、面白いづくしにして、金を遣はねばならぬやうにしかけた物だから、手前から料簡つけて、よつぽど勘辨せねばならねえ。」生「うかりとすると落し穴へはまるよ。三十越してからはまつたものは、これほど面白い事を、今まで知らなんだが残念、などとつかひかけるから、矢も楯もたまらぬテ。」ト、いひながら、煙管の火だまを膝の上へおとす「熱ツ、ツ、、こいつ矢も楯も所か、鉄砲玉だ。」長「二百下る。」生「身上々々。」

柳髪新話浮世床初編卷之中　畢

柳髪新話浮世床　初編巻之下

東都戯作者　式亭三馬戯編

▲そりやア世の中に、人間の癖と云ふ女郎が、通人とは粋で通人らしい人を通人と云ふ的顔に指をさす[illegible]もうひいた者は、遅かれ速かれ身代を潰すから、野暮だと云ふにならうだが、悟つて見ればそんなもんぢやアねえ、一里不通だらう」▲角屋敷には野暮の手に渡りと、川柳点にあるが、これは又一ツの通だの、通の者だのといはれて、身代を潰すよりも、野暮と云はれて、金をためたは、よい利方だなう」▲それを知りつゝ迷ふ奴さ。」ぴん「あれも些と迷つて見るがいいのさ。若い内にちつと修行して見て、早く足を洗ふがいゝ。上手になれば成るほど金が入る。」▲そりやア何時まで遊んでも同じ事だな。」ぴん「馬鹿にされるで面白いのだが、馬鹿にされると気がついちやア最うお仕舞だ。」▲どつち道でも修行に精出して見ねえ。親もにこにこすれば、[illegible]やさ餅はやかずか、物前にも苦楽はうすくて自業自得の遊びの様だ」▲さうよ、其の証拠には、行きと戻りとの心持ちを見ねえな。」▲と一緒もあり後へは苦しみが来るとはあすこだ[illegible]平生苦しんで見さうし三十日をなかなか安楽だ」ぴん[illegible]

くてもお前達のやうに、早く心づくと大丈夫だが、とかく若えものは、さう行かねえものさ。ハイ。」ト、指なかを指にてちよいとつく。德太郎「ア、さつぱりとした、サア〳〵聖公賢公行ばつし。」三人「アイさんなら。」びん「ハイ明日」ト、三人は歸る。長「おれが番か、ありがたい。やつとのことでお鉢が廻つて來た。」鬢「留、てめへ又疵をつけめえぞ。」とめ「そりやア違ひやす。よくもみなせえ。」長「鬢さん、けふはちつと油をつけてもらはうぜ、水髪にばかり結ふと毛が切れるといふから。」びん「切れてもいいぢやアねえか。」長「それでも見つともねえわな。おれだつても、ちつとは色氣があらうぢやアねえか。」鬢「食氣の方が勝つて居らア、其の顏で色氣があられちやア黄色だ。」長「おらア路考茶といふ色で、はやらせるつもりだ。むごくいふぜ。」ト、いふところへ年ごろ十二三の丁稚入り來り、でつち「鬢さん、最ういくつほどある。」長「まだ百五六十ある。コレ内へ歸つてさう云へ、旦那に透を待つ居ちやア一日埓あ明かねえから、こつちへ來て待つてお出でなせえと。」でつち「なんの人をつけにした。百五六十も凄まじい。」鬢「本當だ。」でつち「何うそだ。コウ鬢さんほんたうに幾人だよ。」ト、いひながら、唾を指の先へ付けて、床地鼠色の障子へ、のしこし山を書いてゐる。びん「ヤイ〳〵よさねえか。此の調市はよく悪戯をしやアがる。」でつち「よく悪戯をするなら叱りなさんな。悪く悪戯をするなら叱るがいい。」びん「口のへらねえがきだ。夫れ見ろ、あんまり悪戯をするから、着物は鍵裂だらけだ。」長「燒穴を拵へたな。火鉢へあたつて居眠をするからだ。」鬢「口答へばつかりして動き啼きを

する野郎よ。旦那が氣が好いから濟んで通るが、他所へ出ては一日も勤まらねへぞ」ト又使に出すばおそしの、湯へいけば喧嘩して内へ屆けられる。一寸外へ出ると、[illegible]を買て食ひするかゝつた奴おやァねへ」「ナニいいのさ。お前の所へ奉公せうとはいはねへから」「[illegible]すれ、いふ日だ」「昨日さ、お客へ茶を出すとつて、袂から薩摩芋の食ひかけを落しやしたぜ」「ナニこの白雲天窓め。てめへも番太の權助が所で、お市やおかねを借りて食ふぢやァねへか」ト又も「昨日も錢を催促された」「てめへらはうめへ人が遣はァ」ト、はいへども、親方の手まへ氣の毒おもはくにて、顔を眞赤にしてゐる。「それ見たがいゝ。本當の事だから顔を眞赤にしてゐるアな」「この出つ尻は覺えてゐやアがれ、寢てもしねへ事をぬかしやアがる」「ソリヤ〳〵留、からかふない。默つて仕事をしろエ」トまた「ヲヽこはり叱られたんだらう」「ホイ此奴は終ひに何になるだらう。商人には小器用でなし、職人には下手でてうなり、ヤイ手習するか」「[illegible]」「何するものか。手習する暇はしねへに算盤を[illegible]算盤、」「ヘヽ算盤は二の段ぎりだ」「べらぼうめ、それは始まりだア。どれ、いつから習ふ」「ト、けふで五十日程になるが、天窓が痛くつてねつから覺えられねへ。俺が所の八兵衞さんは、闇と、ぶんのめすから、教へるよりかも打つ方がたんとだ。この段は始まりだといふが、お師匠は知るめへ。其の前に一の段を習へやアしたぜ」「ト「一の段といふがあるものか。九九だらう」[illegible]

ムそのことよ。おらア二の段でさへ天窗が痛えから、見一まで習はうとしたら、命がたまるめえと思ふからの、一昨日そつと内へ寄つて、かゝさんに話したらの「そんなに痛いめをするなら、奉公せずと、内へ逃げて來い。」と云つたア。算盤で命をとられちやア堪らねえから「今度教へよう。」トぬかすと直さま内へ逃げ往く積りだ。」長「てめへのお袋もべらぼうだナ。」寫「世の中にはそんな親が有るから、善人をも惡くする。情ねえ事たゝ。」でつち「ナアニおいらがかゝさんは、能いかゝさんだ奴よ。ワアイこいつはをかしい、ワアイ笑つて遣れエ。いらぬおせゝの樺燒やい。」ト、かけ出して行きしが、又たち戻り「オヤおらア肝心の用をきかなんだ。鬢さん洒落ぢやアねえ。幾人あるよ。」びん「最うお二人ありますから、直に來てお出でなさい。」ト、さうぬかせ。」でつち「ムウぬかす。うぬ又譃をぬかすト、おらが旦那が又小言をぬかすぞ。ヤイ爰にゐる奴ら、おれが事を惡くぬかして見ろ。うぬらは皆天窗をつかめへられてゐるから、骸を動かす事もならねえ。甘茶を嘗めさせようと、おれさまが好き次第だ。あやまつたか。」長「喧しい。」でつち「ナニ喧しい、口の減らねえ奴等だナ。わいらは終ひには何になるだらう。商人には卷舌でむかず、職人には手ぶつてうなり。ヤイ手習をするか。算盤をおくか。二の段か九々を覺えたか。べらぼうめ、命がつゞかずは内へ逃げてけへれ。ヤイ覺えてゐろ。留の白雲天窗の鄕在者のへちむくり野郎め、番太の錢を早く返せ。」ヒヨイト、つばきをはきて、「ワアイ。」ト、いひながらにげゆく。長「なる程惡戯な

悪所だから、流石遊ぶと、職兵衛さんの所へ見物事ちの寄いに一二歳ぐらいの者は言ひ甲斐が
主人も半分だんと道理をねんと、手前の頭にきたもの一寸人の身分の悪くなるのは、御手代様へ能かへ
それは道理だけ二」「隣ことに遠慮がねえ、皆背きねえ人を茶を持つて、上等のやうに振る舞ふまで」
「ナニサ」と思へば算手もよし、他ひとつ世話をされたい人が、一年間まで居るのもあるでせう
者をこそ世に出た。ともう何一つ心配ねえといふ内に、商売に身を入れて一心の眼を向かうとする
いてそうかおいらの身体も、先のうちから、はじめる気で、なかなかたまらねえ
はまで暮らし隠して、何年小半年も内には、家業をして立派に行き、又一年も経てば
たつて、元へのまへの道に居たかれ、又居候といふ日に困つてて、いふものに相談する
悟罷る。今から身が治らうかねえのさ。もする商能に通したとはいふものの、ちかくいは出来
一種も本来になかれえ、障子を備えの、常宿をするのがいい、時に相談をする、まあ、の人間で、
何所にも毛の三分不足なところがあつて、ようかの時の身にあたやつ、も精霊を仕様といふのか
料理人で本式が出来ず、出来たが塩梅が悪いから手際が悪いとあつて、ここといふ所にも行かれね
え。その時まんざら不出来さと思つても、世事だから褒めてみれば、当人は増長になつてまたうく慢
な顔なさるから、舞台めのを当こもつて、段々に下がつて来る、さう手を貸して、銭といふ事も、手軽一

通も人並には出來ねえ。其の癖己が氣では、いつぱし能書の心いきで、祐筆になりたいの物書に成りたいのと、ほらばかりふいてるるだ。」鳥「一體うぬが身を定めねえ程の奴だから、性根がすわらず、魂が迷つてるる故、爲る程の事がしつくりと落ち着かぬものよ。そして世間體は立派に見せ懸けて何所へ出しても、一杯つかひになるといふ男ぶりなものだ。」ぴん「内證へ廻つて見ると大すかまた。スハといふ時の一向役に立たず、それでも口は大層だ。あすこの内に俺が居ねえでは大てこずり、萬事おれ獨りで家内をくり廻してるるのさ。とか、物事おれに相談しねえでは埒明かねえ。などと、大きな役をぬかして、世間中ふれ歩くものさ。」鳥「あの居候といふものは變なものだよ。己がある家のことはせずに、他所の内でよく働くものさ。譬へば己が飯をもらつて食つ居る内では、水も汲まず居膳で居て、外の内へなまけに往くと、水を汲んで遣つたり飯を炊いたり、頼みもせぬ使に往つたり、外に仕人のあるをも、事を好んで態々己が仕たり、何でも早呑込みで、器用でよく用の足りる人だとおもはせて、一寸四百の時借や、又は行き所のない時居る心算ト、寢所に困る時、泊るあてに他所を稼ぐのさ。」ぴん「さうさ違へねえ。やゝともすれば昔の全盛を云ひ出して、不問語の身をひけらしての。」鳥「生質の善い者も、居候と染みると心がさもしく成るものさ。」鳥「居候根性とやらで、一體別なものよ。」ぴん「居候大首彩の餅を食ひ、トハ、よく云つたの。」鳥「川柳點にたくさんある者は居候さ。

居候一樣なくて子ほんなう。」 びん「多葉なしに粉ばかりのむが居候。」 聟「イヤ居候でおもひ當つた。おらが親父はお前達の知つて居る通り、涙もろい性だから、年中居候が絶えねえぜ。勿論中には頼もしい者もあるけれど、居候になるほどの者だから、大體は悪いと思ひねえ。居候數輩をはだかにしても、前同付にある通り、悪を知らぬものよ。先ヅ大かたは悪る酒で遊ぶ奴が多い。あれは惡い事でものではねえ。居る所くせの道理で、是非損を掛けるによ。」 ドウすぐく噂をすれば影がさした、「鐵右衛門さん師の飛助が來た。」 「ナニ、前にもつ宿のついた居候が來た」 「オれいつはあの年で、酒が僕をたれるさうだので」 「ニ大酒食らひの酒飲で、大飯食らひださうよ」 「そのはず、能く揃つた」 ト云ふ「ト默らう／＼」 ト鬢「ハ、ドウ」 ト、いふところへ、鐵右衛門が所の居候の飛助といふ人、酒にきつうこいせつこい。「何れも様御揃ひハ、ア奇の字／＼。」 「どうだ飛公。」 「どうは此の通り公、御機嫌よく、鐵右衛門方に御厄進はされ、相變らず居候なわけの由緒がな」 「分いい機嫌だの」 「いい機嫌、ヘ、悪い機嫌だ」 「知つていふおやァねえが聞いて下つた。鐵右衛門いかねえぜ、鐵右衛門それに又、かゝしがく、ト、どうもかうもいける奴ぢやァねえ。本の事たが、おれだから居て遣るのだ。飛助さんなればこそ居候にゐて遣はさるのよ。氣のきいた居候はおさらばだ。己も居たくはねえけれど、ツレの、お前ッちも知つて居る通り、おゝおれが居ねえ

ぢやア片時も納まらねえ。納まらねえ物だから、ソレの、不便だから居て遣らア。ホンニヨ。不便不便だアな。コウ聞いて下ッし。世が世ならばサ、のよしか、錢右衛門なんざア、俺、俺が内へ居候に置いてやるのだ。ホンニヨ醉つていふぢやアねえけれど、ホンニヨ。世が世なればこそおれが居てやるのだ。マア聞かつし。今朝六ツがボンと鳴る、ソレ起きるス。よしか、すぐに焚き付けて茶漬を食はせたり、のよしか、食つたりよ。それから雜司谷から堀の内へ廻つて今歸つたぜ今。ホンニヨ早からうが、最う何時だ。まだ九ツぢやアあんめえ。ソレこつちは、此の位に深切を盡して實つくでしてやるぜ。コウよしか、それでも内の奴等は不足ださうよ。ホンニヨ、うまるめえ。ホンニヨ、うまらねえぢやアあんめえか。マア何と思ふ。朝から晩まで骨を折りぬいて、内外のことをおれ獨りでしてヨ、それで不足に思はれちやア割にあはねえ。ホンニヨ錢右衛門大きな面をして、綿布にくるまつ居ても、常上綺羅の晴著なしだ。一寸出るとつてもあげさげヨ。ホンニヨ、一日置きに捨利をとられるばかりも大きいかな。おれが居てあちこちから算段してやるで通られるが、錢右衛門恩しらずだ。」びん「質を入める使はいつでも主か。」さぶ「ウ、。」びん「さぞ上借りをするだらうナ。」さぶ「ヘンそりやアねえ。そこにかけちやアしらくらなし。ハテこつちも他の世話に爲つ居るから、なりたけ爲になる事をしてやるけれど、錢右衛門一向わけが分らねえ。殼無面目と云ふ奴よ。ゲイ引、ア、いい心も

おだ、中臺が一人さ三四文、一合豆腐ときめたに、素敵に面白くなつたことじやアねへか。[illegible]「待ちな[illegible]」ト、かゝしめか[illegible]を[illegible]込んだ[illegible]」[illegible]ら中臺の[illegible]いのを貸つてくれとぬかす」ト又いひ出す[illegible]居候あたりめへの役[illegible]ヨ、お猫や[illegible]ねえ[illegible]甚交叛にやつて下つし。元服[illegible]頭[illegible]甲斐[illegible]せるぜ」[illegible]とくいふな[illegible]あれが[illegible]細工[illegible]猫事だらう。猫とでは、この猫を記させつし。懐によく寝てゐるぜ」[illegible]ト、出て[illegible]御座[illegible]しやして、いつまで居候に成つてゐるのだ」[illegible]甘酒を賣つて[illegible]渡世に[illegible]」「[illegible]幸なことといふ猫は、[illegible]であるものか[illegible]あれです[illegible]にとつて[illegible]かたい江戸にゐて、渡世の用[illegible]はいゝ[illegible]した」又[illegible]をするときも、[illegible]西へ出て[illegible]設けをする奴は、それ[illegible]だから、[illegible]するわさ。そこがお江戸のありがたい所だ」[illegible]た醫者[illegible]夜の[illegible]は知つて居るが、[illegible]といふは[illegible]とへば、[illegible]よ[illegible]来たりけ[illegible]来た[illegible]

を食らつて、日本橋まで行つたが今に歸らねえ。タッタ五町か六町ある所へ遣つても、半日餘も掛るから間尺に合はねへ。」長、日本橋ぢやアあるめえ。長「今朝早起をして、雑司谷から堀の内へ往つて來た。」と云つたぜ。」鬢「お株の嘘よ。彼奴がやうに嘘をつく奴もねえ者だ。ぬけぬけとした事をぶち上げるぜ。今朝起きたのは五ッが鳴つてから起きたわな。家内の者は朝飯を食つてしまつた跡だ。夫れに居膳で食らふも能いが、せめてうぬが食つた椀でも洗ふがいいわさ。一人殘つて食ふ時は、俺でもマア自身洗ふ氣になるに、そこは平氣な物だ。夕べも何所で飲んでうせたか、とろつぺきになつて來て内中の者につつ掛るだ。」兵「悪い酒だの。」長「困り者だぜ。」びん「今朝も最う酔つて來た。」兵「迎酒だらう、べらぼうめが。」鬢「おつにしやれるの。」長「錢右衛門さん叩き出してやれば能いに。」びん「そこが不便だから置いてやるのよ。おらが所を出されると早速にまごつくわな。」長「それでも錢のたち廻るがおつだよ。」長「ハテ其の筈だ。賣物買物の度は只は通さねえ。是非足駄を履く奴だ。しかしおらが内は顔みせの二番めといふ内だから、居候の絶えねえもいい。宵越の錢を持つた事がなし。おらが内へ来る金は、三日月金とも稲妻金ともいふ。何でもちらりと見たばかり直に出て行く。そのくせ奢りが強いときてゐるからがんぎだ。どうで金持になる氣はなし、旨い物を食つて一生をはるが徳さ。シタガ金持のこん性は別だによ。おらが隣のな布福屋を見ねえ。年中あたじけなくして、食ふも

のお金は直に金をためて、一生金銀の番太郎に抱へられた樣になつた。あんなに溜めた所が死ねば直い往く物、その跡では實子もなし。他人にそつくり遣るのだから、つまらねえ理窟だの」「人はあたじけないといふが、金持ほど大氣なものはねえ。なぜと云つて見なせへ。若隱して溜めた金を、他人に唾遣るのだから、是ほど大氣な事はあるめえ」長「なるほど其通りだの」といふ處へ、とひとりごとに、好い事が重なつて來るわな。あすこの内などは、伯母さまの死なすで千五百兩、お國の田地から形見分の地面が二ヶ所、これも沽券が千兩だの八百兩だのといふ噂だから、大層なものぢやアねえか。」長「役者の給金づけを讀むやうだぜ」「おいらは能い伯母でもか欲しい。おらが伯母なぞは不仕合で、寡身になつて居るから、おれが養ふのだ」「人の身になつては千九百兩も宛行の中でもこちとらが伯母御ときたら、小遣の二三百宛も、こつちから取られるのだ」「これは伯母御何で善い事さ。人事にしておけなせへ。奇特な事だ。ナニとかくあの年寄をば經たら」とんだ巫女だ」「巫女といふものは、おひさな顔を繕つて歩くぜ」ト「こう／＼」「長けの包み役けこの」「さうさ」「あれは變なくもんだに猫神には踊らといふ」「乘氣なた」「何の用るだらう」「出來はねえ」「ナニあれは裏の内で呼びにやつたのだ」「なぜ」「裏の變動するの所で、おふきさんの靈魂が悪いが、おほかた先妻のつきものだらうといふ評判だ」「裏はおきやする

のか。」びん「おほかたさうだらう。それに又鄰の甚太が所の爺さまが、神がくしに逢つたから、あれも一緒に口をよせるといふ沙汰だ。今日呼びに遣つたものさ。」錢「ドレ〳〵。」ト、路地口をのぞき「違へねえ違へねえ。」びん「違へなからう。何地へ這入つた。」錢「お前のうちの地尻へ這入つた。」びん「それぢやァ甚太が所だの。變助さんの内ぢやァ病氣に障るからだらう。」錢「あいつも不思議なものだよ。」長「虚らしいぜ。」短「何々、あれは弘法樣がおためしなすつたとあるから虚はねえのさ。」長「今に始まるだらう。」短「おめへの奥から聞えるだらう。」びん「小窗の所へ首を出すと、鄰の内は直に見える。」短「今に覗かうぜ。」長「こいつ面白し。」錢「おつりきにうなり出す奴よ。」錢「變助は全體しかたが悪いわな。爰での話だけれど、先の女房といふ者は苦勞したものよ。」びん「さうさ。ちつと苦勞が止むかと思ふと、今度の女を連れて來て、先妻をば二人でいびり出したぜ。」長「かはいさうに、あのかみさんは今どうした。」短「外へもかたづかずに里に居たさうだが、悔しい〳〵の一心で、ぶら〳〵とわづらひ付いたが、たうとうあつちの物になつた。」錢「なむあみだ佛。ァ、いたはしい。」長「そりやァ思ひがかゝる筈だ。おらァ聞いても業腹だ。」錢「今度のかゝァめは死靈でとり殺されるは明らかだ。又變助も行末が碌ぢやァねえのさ、人情にかけたことをして善い事があるものか。どうで直すなほにやアいくめえ。」びん「今流行る合卷の繪草紙に有りさうな條だ。」錢「違ひねえ。讀本なら京傳か三馬が

醉にめる苦だに「團十郎も、故高麗屋の親仁でござりましたが、團十郎が幽霊に乗せて、團十郎が顔面にかいてやらう」「そこらの顔であると鬼助は浮かれより。錦絵に出たら、仕度をしてすると利上の道理だよ」「お友達が見物をかけで、その狂言役者の咄をする」「そこで遣っても売りが能くなるのさ」「仕合が来た」「團十郎が高麗屋と伝える道化役者で、前から仕上に名人を見つけた」「その役は此の家の家芸で、近江屋の」「一流役者の強がり」「さて、口上も」さきにそうつけば上下だなう」「まだついこのさ」「そりゃ、三谷等も団扇では、奥役あとの大入で作つたっけ」「あらう忙しくて見物に」「今の若手は成田屋だ。昔の役者もさなければ、高名人上手といはれた役者を、今言葉にいけない見物が、若手の流行に舌は拾ていの時代が来え、困れたものさ。それで顔を勧めて手にするのか、古い評判をする人もいて、今時そんな事をしてあると、見巧者が合點しねもの。いや言は嘘に狂言といふものだ。今のは狂言ではない。舞踊で見物がこれをすれば悦ぶが、其の外は皆道具でするわな。裏手いくら十余の金でもあるまいから、十両五の顔役にとつてなといふ者のとつつ其の頃の人は、其の頃の事で済ましたが、今の世の中で千両役者が、十両五の給料にとつては見物が承知しねえ。それえに芸事につひややまい事業の役者、おもにはお千代も、年増の役者で今日は出来ればと、なるらふといつて合點しなくはなって、その上に若大将とされてるから、どうも是で叶はね

ねえ。役者に限らずすべての事が、若人の行はれる世界さ。ア併し、顔みせの二番目はいつも雪降りで、高麗屋の親仁が例の洒落、和田右衛門に築地の善公が居候、いつも變らぬ二番目の顔で、實に顔みせの様であつたよ。和田右衛門が中島國四郎と云つた時分から知つて居る。アノ高麗屋の爺様は、よく名を更へた人さ。築地の善次も、寶暦年中から久しい舞臺で、愛敬のある能く贔屓のある役者さ。是れぢやア築地へけへられねえト、いふが通句になつた。」びん「彦左衛門は舞臺を辭したさうだの。」長「むつかしくいふの、辭したへだ。」ト　びん「おらが旦那の口癖が移つたのだ。」長「善次から彦左衛門になつたばかりで、昔から善公かネ。」長「昔から善次さ。ホンニめでたい役者さ。」長「生花では大先生だの。」びん「これは誰しらぬ者もない。」隠「風流な事だネ。」長「が芝居繁昌で役者の器用になつたのは、當時程の事はあるめえ。」びん「昔と云つても、何として當時程ではないのさ。」長「しかし又昔は萬事の祖師だから、能い事は能いのさ。今の世の中は昔の事を踏臺にして、段々その上へ／＼と登つて往くかたち、人は賢くなつたに違へねえ。」びん「さうかと思へば、俺が裏に俳諧師の坊さまが有つたつけ、お前知つ居るだらう。」長「ム、高慢な和尚だつけ。」びん「やたらにちんぷんかんばかり云つて、苔をおごしてゐたが、あいつが大笑ひよ。」長「ハアどうしたの。」いけもしねえ俳諧で、芭蕉の眞似をして行脚に出たつけが。」びん「そいつがをかしいわな。芭蕉の氣どりでの、おつな頭巾を被つ

て、山伏のやうな形で、頭陀袋をヅツト首にかけて、如意とかいふ物を手にもつて出た所は能いかにも
鉄「まア、そこまでは御宗匠様だ。」びん「ところが越後のなかから何所とやらへ抜ける山道で、野宿をしたさうさ。」鉄「フム。」びん「その晩の内に狼に食はれ。」銭「エ。」長「狼に食はれた。」びん「さうよさ。」鉄「さとんだ事がある物だなア。」びん「そこだテ、昔の芭蕉は名人上手で、後の世に名を残す程のお人だから、野宿もしつし、山坂で難儀もして行脚もしつたらうが、徳が備はつてあるから、災をはらふさ。今時あの坊主なぞが、俳諧を仕候行脚に出で候と、形は芭蕉でも腹が芭蕉でねえから、狼に食はれるこつた。ハヽヽヽヽ。」皆々「アハヽヽヽ。」ト皆々笑「何をお笑ひだ。」ト、人のまへなれば、今井の家のお嬢さまの子守をするお乳母なり　びん「御乳母どんけふは遅かつたの。」乳母「今日は御新造様のお出でがあつた。」びん「ハア何所へ。」乳「芝居でございす。今月は大分遅いの。」びん「ことしは二度目程さ。」びん「なぜお供に行かねえの。」乳母「御新造様のお供おやア気がつまつて否だ。此のお子さまは嫌ひなり、行かねえきやア其の気で見たくもねえが、行けば見る気になるから、此のお子さんが窮屈になるわな。」長「御乳母どんは芝居よりは面白え事があるだらう。」乳「何があるもんかね。ナ、コレ／＼、お譲さんお危いよ。そこでおとなしくしな。乳母大しくじりだ。おつかさまのお留守にけがでもさせ申すと、それこそ扶持の食ひ上げだ。」ト[illegible]上りで[illegible]は悪いといふにさ。」長「ほんに、あがらう。」ト[illegible]女房出て[illegible]　長「コリヤ／＼お嬢さん、お出でなさいよ

したかエ。サア〳〵おあがりッ　おばあが能い物をのけて置きました。御乳母どん上がんなナッナニカ御新造さんは芝居か。」うは「アイけふはふきや町さ。」女房「宗十郎が御贔屓だの。」うは「何といふ事はねえ。氣が多いから時々ひいきが替りやす。」隠「情なしな御新造だの。」びん「役者で濟んだ物だ、御亭主が其の通りぢやァ大事だ。」女房「しかしお羨ましい事たぞ、代りめ〳〵に幾度も御らうじて。」びん「お茶屋は丸三か。」うは「イ、エ堺町の時は丸三さ。けふは新道の越長だらう。」びん「よし〳〵晩に早く仕舞つて、切を見に押しかけようス。併し御新造さんの時は、甘い物が少なからう。」長「どうで女といふものは、あたじけねえ物だから。」うは「イ、エ、私共の御新造様は、大の奢人さ。何でも御夫婦してお奢んなさるが、あれでもすむ事かしらん。おいらがやうな小さな氣ぢやァ傍で氣が痛む。」びん「昨夜旦那は早くお歸んなすつたか。」うは「アイ昨夜は四つ過ぎイヤ〳〵九ッ」ト、いふところへ、うるさくとりつき。連「ばゝあや今のをおくれよ。」うは「アイ昨夜丁度九ッさ。何でもしつかり醉つて。」連「ばゝあやヨウ。」うは「お部屋へ踊り込んで。」連「ばゝあや。」うは「御新造様も持ち扱つてお出でなすつた。それからまた御酒が初まつて。」連「ばゝあや今の物を。」うは「アイヨ夫れから八ツ過。」連「ばゝあや。」うは「アイヨ八ツ過に御寐なつた。」連「ばゝあヨウ。」うは「アイといふにさ。お前さんそんなにあがると腹が痛くなりますよ。これでお仕舞だヨ。」女房「ほんに上げるものが有つたつけ。ちやんと忘れ

たつた一ッペん最う漫言ますまい。又後に／＼」耳を引き、又、「ナント、向ふへ出まつたぜ」といつは面白い／＼。早く結つてくんな。」馬「ナァ／＼聞かうぜナァ／＼。」ト、いふところへ三人入口へ來て、わ輩さん分能いわ。「さア／＼十分ましよ。」馬「さてれつあの輩ゝ」馬「おれが先だ」馬「ならばうがつ、おれが先へ首を出した。」馬「おれが先へ敷居をまたいだ。」馬「首を先へ出した方が勝だよ。その足を出したって目があけねへ。首は先へ目をあけるわ。」馬「ごうはう首が出るものか。足が中から先へ去けはゑわ。股でも先へ來たものが勝だ。首でも、先へ這入る者はあるめへ。」馬「馬鹿な、去うなら、足は出すくわる先へ來たらうが、首が先へ出ねへ中は目が見ねへよ。」「おれは足で來て、來て、首を出してものをいつた。」馬「それなら足をも早く入れたが證いわさ。」「おいらは足を先へ入れて居いて、面さして後に目をさくめうさ。」馬「いやらしいことをいふな。面うしろの何のといふ聲をきかせめえし」馬「ぐらほうの、お前氣がそれな事をいふ二物か」馬「いはねしでもさうさの輩が、いはずと聞けてえにはして見せう。」馬「すゝれ見な、あゝいふ頭褐者だから、相手にならねへ。」馬「ナニ／＼兩人一緒に出るから能いわな。」馬「鬱さん、今此の様で顔をあけ口をきかせ屆るぜ。」其「ナニ此のわも何も宛え」其「おれもさう／＼へいいこ」馬「馬鹿だ」馬「馬鹿だ、實際が能いもい」「早くやらかんせへ下さい」ねでもいい。」其「其に四あたり當かう。」其「一番最中に」といはうとする。

そいつァ奇妙だ。ヘン太夫棧敷だナありがてえ。」竹「コレ〳〵松や、てめへもなんぞ寄せてみやな。」松「あの女でも寄せて見べいか。」竹「何とごたくをつくだらう。」松「たてひきのたゝまりを恨むだらうへ。」竹「おきやァがれ。」松「さもなけりやァ約束の間違だ。」竹「てめへ何を頼まれた。」松「猪を百目買つてやる筈だが、此中の晩も、だまを食はした。」竹「色氣のねえ婆だナア。」松「コウ生口をよせると、がうてきと眠くなるさうだぜ。」竹「あのあまは湯へ這入つて、今時分はとぶさつ居る最中だらう。」松「それおやァ太郎兵衛歩びやれだ。」竹「能い事があるぜ。コウ爰の壁に張つてある女郎の繪とナ、爰の金時の繪をひつへがして引縛らう。さうしておいて、口によせべいぢやァねえか。この女郎や金時がどういふ事を云ふだらう。」松「こいつァおつりきだ。やらかせ〳〵。」うば「おれも寄せて見るものがある。段々にせう。」竹「コウ御乳母さん、お前も田舍にゐる亭主でも寄せねえか。」うば「否、罪だといふから嫌な事かな。」松「罪よりか江戸で色男を拵へ居るから、亭主をよせたらばさぞ叱るだんべい。」うば「そんな事はねえ物さ。口はすゐいが心に錠をおろしてゐるわな。」竹「心は錠をおろして、腰から下は明け離しか。」うば「いやよ。」松「あんまり否でもあるめえ。サア皆が來ねえ〳〵。」鬢「サア〳〵行つて聽かうぜ。」鬢「よからう〳〵。」鬢「ドレおれも聽かうか。ヘンおとなげねえス。」女房「御乳母どんお前も聞きなナ。」うば「氣味が悪いやうだネ。」女房「何こはい事がある物か。」ごん「コ

レ手がへまた錢費な事をするなア」　一寸二寸私は寄せやアしやせん。」びん「ヘンおれが目では、一ばんがけによせるだらう。」松「是れより二編目一刻千金の春をまちませう。サアござりませい。ツ、すこし〳〵と一刻の口をくつせて、騷々さま〴〵いふをかしみは、まだしいふ事も一、來る巳の春一帙目に出し催し可申候。その節は御評判よろしく奉希候。

柳髮新話浮世床初編卷之下　終

浮世床後叙

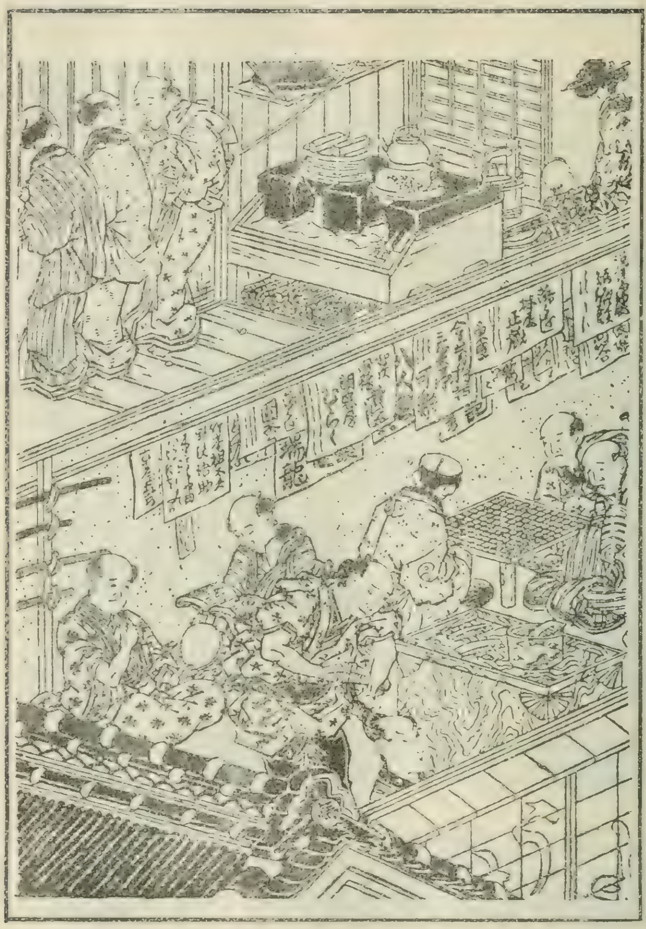
長き物、飛頭蠻の反吐とは、清女が筆めきたる物は附けの通り句なり。夫れよりまだ長いは、不佞三馬が安請合ひ、一寸出來ると思ひの外、此の柏屋の約束も、翌明々日と云ひ延べたるが、昨日と怠け今日とずるけ、いつしか四歳の星霜を經りぬ。宜なるかな、發客のお腹立ち。やつきとして怒つて曰く、ヤイ三馬の大癡漢、汝書賈のやりくりを知らずや。製本は製本の時節あり。發販は發市の氣候あり。汝が樣に怠けては、發市したくも製本が出來ず。半呑半吐のぬつぺらぼん、お蔭で書舗はすつぺらぼんなり。汝が如き戯作者を、先生とは職過ぎたり。大人などとの空拜みは、早く書いて貰ひたき、尻食觀音やら、吳音で先生とやらかすも、金が慾しさの尊稱なり。寔はドウダの冠辭を付けて、どうだ先生といふ奴にて、彼の川柳點に、先生と云つて煙器廢しさすると、いへりし屬に齊し。仍て陰ではめの字を添へて、三馬めがと人皆鄙しむ。此の後汝を後生と呼び小人と唱へて、作も賴まぬ。筆も廢け。と怒氣滿面に現はれて、慾心臍下に縮みたり。もとより重々御尤も、半句の言も出でざれば、倉卒に毫を採つて、分說の此の小冊、いつも長柄の人柱、人はし懸けたる讀本も、出しおくれたる誤證文依つて如件と爾云ふ。

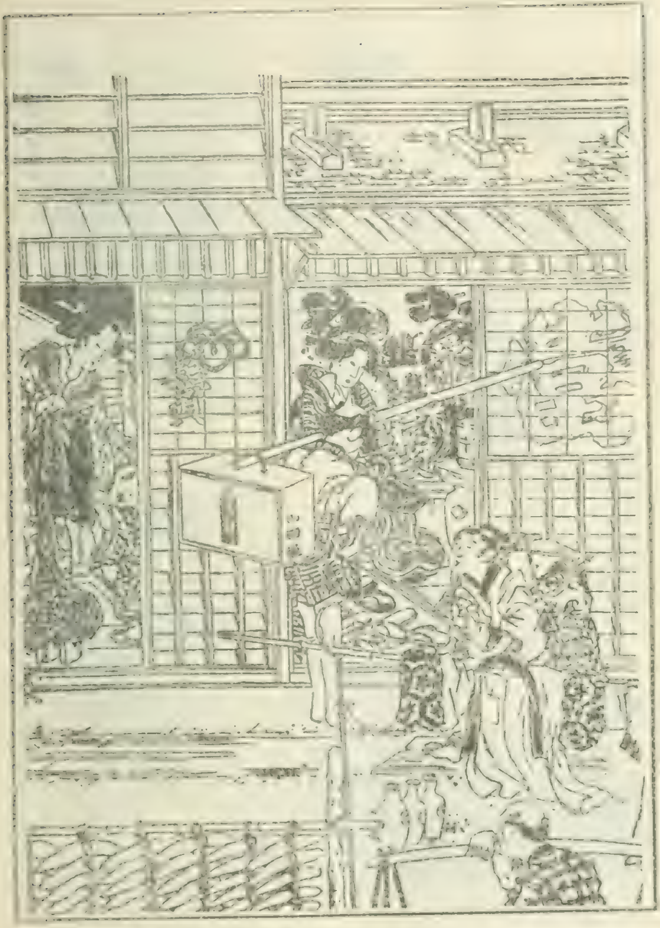
江戶前の市陣

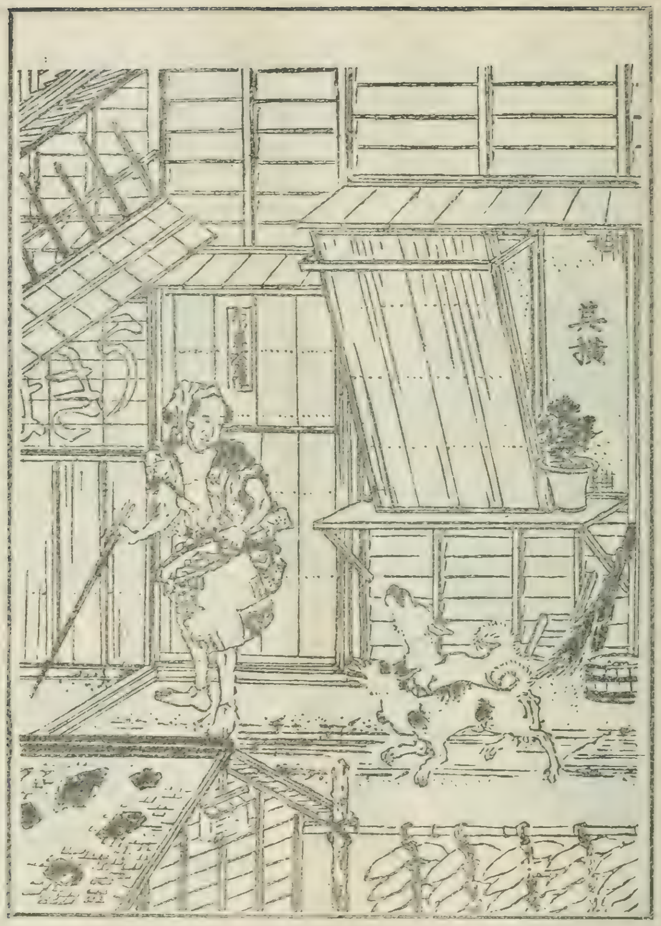
式亭三馬醉中誌

序

いつはりのなき世なりせばうそつきの、戯作者頼む人はあらじな、と出たための歌讀きて入り來るは柏屋の主なり。そらだのめなる明後日も、昨日と過して御催促、稿本は如何々々。前編嚮に發市してより、頻りに二編を俟ち給へり。僥倖にして喝采のお聲は、偏に先生の筆の輕業、讃と褒めたり誹つたり、さま／＼に責められても、無い物は金と趣向なり。素より虚誕を著はすを、戯作者の本意として、閻羅に拔かるゝ舌根を、自由自在に動かせども、邇來虚が拂底なれば、凝つては思案に能はずと、南鐐壹片の雲に乘じ、北方へ虚空に走れば、忽ち昇平の樂國に到る。頓に慾界の傀宮に登れば、三千の美女三歩に現はれ、五歩の魂二階に飛ばせり。酒醒め興竭きて皈り、熟〻扁舟の裏に臨めるに、夜前の實今朝の虚、去年の實は今年の虚なり。百折千磨の詐りを竝べて、千狀萬態、虚ならざるはなし。競つて虚を賣ひ、爭つて虚を買ふを想へば、世の上に虚ほど面白き物はあらじ。舟師の老兒艪を押しながら曰く、予は三馬大酒にあらずや。宿醉の酒いまだ醒めざるか。何がゆゑにかゝる譫言を吐く。呼小さいかな。夫れ曲中の虚に却つて招牌に詐りなし。虚の虚たることをしらんとならば、洪く天地の間を見よ。日月星辰はしばらくいはず、森羅萬象虚で圍めた世界ならずや。予は世界の大







国貞画

なる蟲を不測して蟲の小さきを捕ふ。其の果てる事甚し。余も句も出でず、肉間蟲下に潜む、
肉飾呼へ煙管を取つて、箭を敲いて去る。乃ち嗽つて曰く、
契情に實なきとは世の中の客の嘘より出ではじめけむ
客に鑑りて又復嘘の種を下し、筆を弄して竟に此の稿なりぬ

文化九年壬申中春、月中浣、本町の小家、慾心深き處に筆を採る
むかし所謂金平本の作者

式亭三馬題

柳髮新話浮世床 二編卷之上

東京 戯作者 式亭三馬 戯作

浮世床に會ひ居る人々、背門なる小窗より、鄰の家をさし覗けば、巫女は、市女笠上がり口にとりおきて正座になほり、裏包己が前に控へて、目を閉ぢ鼻うちかむ暇には、舌もて脣を嘗め廻し、梓弓ひきもきらず何やらん呟き居たり。昨夜の吉燈を喜び、今朝の愁鵲を氣に辛む類、愚癡で團めて多嘴の衣を覆けたる、御幣擔の嫉妬連中、或は眉に八字を作り、あるひは口をへの字になして、おのおの泣きに會る亡者の口々、怒つて頰を尖らすは、娑婆塞と呼ばれたる、じやうッぱりのかゝァ左衛門。笑つて頤を抱ふるは、後生樂と名にたちし、おちやッぴいのお嬶婆娘。お長屋並の一切衆生、六親眷屬有緣の徒、九尺二間は維摩が方丈、所狹きまで居並びたり。童子童女の寄り來るを進め、お鶴龜吉が覗くを退け、新靈、生靈、思ひ〳〵に口をかくれば、上つて來る大禪定門、代々院號ごたまぜに、三界萬靈の御詫を聽いて、無緣法界の棚下しを悟り、信士信女の安否を訪ひ、居士大姉の御機嫌伺ふをおもへば、十萬億土遠きにあらず、地獄の沙汰も錢次第なり。十二銅の淚は、水むけの茶

徳に淵なして、心からなる三途の川を現はし、百一升の歎きは、瞬きの丸…に積りて、願ひかね
なる死出の山をなせり。煩悩なければ菩提なし、娑婆あればこそ冥土もあれ。欲悪煩悩の瞋恚…、
女の教誡に脱かるゝ者、若し此の意味を現在に悟らば、亭主を尻に敷く浮気…の女房も、身…、
からき世渡りする事を覚えて、留守事の無駄遣を慎しみ、嫁をいぢる偏屈…の拗者も、…、寒さ
寒さに人を厭ひて、慳貪邪見の角を折らば、是れも一つの済度なるべし。南無阿弥陀仏を泣き下しに
して、座を退く世話女房あれば、克く寄らしやれと座に進む、六十有余の年…は、時代狂言の老母役
者、寄らぬ先から涙と倶に、まづ汲み換ふる閼伽の手向、一…の樒動きて後、またうなり出す巫女の
聲、神おろし「天清浄地清浄、内外清浄六根清浄、上は梵天帝釈四大天王、下は閻魔…五道の冥
官、天の神、地の神、家の内には井の神、庭の神、竈の神、伊勢の國には天照皇太神宮、…の國に
は金毘羅大権現、攝津の國には住吉大明神、大和の國には春日大明神、山城の國には祇園牛頭天王、
下總の國には鹿島香取の大神、別して當國の一の宮氷川大明神、日吉山王大権現、神田大明神、…
稲荷の神、王子稲荷の神、三社大権現、日本六十餘州、すべての神の政所、出雲の國の大社、神の數
は九萬八千七社の御神、佛の數は一萬三千四百の霊場、普く冥道を驚かし奉る、あらたなや此の時
に、萬の事を願ひなく、教へ給へや情の神、六親眷属有縁無縁、先祖代々一切の精霊、過去と前の

つがひの親、一郎どのより三郎どの、人も變れ水も變れ、變らぬ物は五尺の弓、一打うてば寺々の、佛壇に響くなり。ウ、、、引。」ト、目を眠りて唸りゐる。暫くありて、くちよせ「寄り來るやア〳〵ア梓の弓のよせ口に、引かれ誘はれ、冥加はなけれど寄り來たわいなう。いとし可愛と思ひ子の、烏帽子寶ではなアけれどナ、軒を離れぬ寵愛の、祕藏烏帽子が來たわいなう。」ぉ二「ャ、〳〵可哀や可哀や、斑犬か〳〵。ホ、〳〵よく寄つて吳れたぞよ。懷かしかつた、〳〵。ホンニ〳〵、談義まゐりをしてもノヤ。勿體ない事ながら、お如來樣はさもなけれどノヤ、和尙樣やお所化の貌までも、みんな主の樣に見えてノヤ、常香もる間も忘れかねて、ホンニ〳〵泣かぬ間はなかつた。あんまりの悲しさに、百出して葬つて貰つて、檀那寺へお願ひ申してノヤ、斑犬といふ戒名まで付けて、石塔も建ててやつたぞよ。」くちよせ「ヲ、〳〵、それはよく泣かしやつて下さつたよなう。おウれこも緣の下アで生まれてエから、每日の餘り物、ぶちンよ〳〵と可愛がられてこナ、何も角もおれこが御器にばかり下さつたァから、おウれこも嬉しさにこナ、しなアだれてエ尻尾もゥ振つたり、手をこもウ吳れたりィしたアけれエどナ、裏の肴屋めがァ慈悲心がなくてよ、打鍵やァ出刃庖丁のむね打でエ度々こなう疵とがこあ、其の時にやア大豆を煮て食はせて下さつたりナ、樣々の介抱嬉しうござるぞや。おウれこも今やなど死なうとは思はなんだがなう、角の家で、鰹を片身盗んだ罰でナ、ごぜらァよ。

りはそないて助の亦爺が抜けたによつて、おウれンも怪しいとはおもつても、おはなた打つたら
う上黙つてさ、用心してるたふなう、棒を後手で隠してゐる様子も見えず、扨又更と打違つても、
向は暖の前がないから、おらが口は下あがるなう。あんまりのむらだすにさ、かんぐりと食つた吝因
果、客の御、香末魔であつた。其の儘にころくり往生なりしたけれども、是れがほんの大死でござら
アふ。他な時にも溝へ落るしナ、泥だらけになればなう、最早病犬だといつて、町内の子供には抓き
散らされ、横町の黒犬と場消に寝てゐれば、酒屋の白と当家のが喧嘩をするよなう。両うの間で折
助さまのお情で、尻尾を摑んで手傳つて貰つても、思ひは晴らしたけれど、烏帽子どのが石打の下
り際に、見つかつて縁だらけにされたわなう。叔父呼ぶ聲のする時には、何ぞくれるかと思つて駆けて
行つて見れば、烏帽子殿の小便をやるのだわなう。表の夜店の仕舞をかけようとする、裏の三
めは目の明かねえ奴でなう、他所の者の放れた糞も、おれが業だと追て追つ掛けられ、さてく
いかい気兼をしましたわいなう。こなさまは可愛がつて下さつたけれど、神主殿はあたじけなさつた
わナ。遍くくれた物が大根の香物の食ひかけか、茶柄の茶滓のだから、嗅いで見たばかりでこいと往
けばなう、最早瘠つた畜生だといふわなう。此の身は上がと違つて、喫の裏が悪いから、大夜の
になつてナ、浮むことも成らねえわなう。極楽往生しても、個人がをくでナ、百味の温飩も間にあは

ぬから、佛の數ほどは物が廢らねえとよなう。立ちよらば大木の陰、犬になるとも大所の犬になれとナ、譬へにもいふ通りナ、おウれゝに如在はねえけれど、浮まぬから爲方もねえことよう。犬骨折つて鷹にとられたは娑婆での事よ。今の身は溝に流れる米粒を拾つてゐれどナ、みさき烏が皆食つておれが口へは這入らぬわいなう。さてもノヽ嬉しやノヽな。一杯の水の手向がナ、唐の鏡の屎をたべたよりも、嬉しくてノヽなう、腹の中から臍のあたりまで、染み渡つて嬉しやなう。おウれゝも早く寄りたかつたけれどナ、水は逆には流れねえわなう。御先祖衆が寄りたがつて、先へノヽと出るからナ、おれをば叱々と叱つて、後へと廻されたわなう。こなさまも年に不足もねえからナ、早く臨終往生急がつしやい。おゐれゝも草葉の陰えから待つて居るわよう。返すノヽも名殘は惜しや。みさき烏の事頼みましたぞや。みさき烏を除けて下されいなう。名殘やア惜しいけれどナ、いつまでもいつまでもウ、盡きぬ名殘だアから往きますぞう。克く水を手向けて下さつた。嬉しいぞやアノヽアこいつまアでンもう、つきンぬウ、なごウりイよウ。さアらばだア。ウ、、引」ト、唸り聲を引きて神あがる。「ヘッエ、ヘッエ。」ト、しやくりなきをしながら、「アッア、可哀やノヽ。ぶちヨノヽと、此の頃まで手飼にして愛した物を、畜生饂を食はせて殺すとは、さてもノヽ苦々しい。オ、ノヽ、さぞ恨めしくおもふであらうが、コレ、恨みを晴らして成佛しやれ、ヨ。みさき烏は除けをして貰つてやらうぞよ。アな

人さんだねへ」[illegible]「[illegible]〳〵、お婆さん、お前は誰かお寄せかと思つたら、死人が口をお寄せなさる」ば「さうさ。」娘「いかな事でもオホ、、、。」皆々笑ふ。

〔鄰の浮世床の小窗より覗きゐる人々〕

[illegible]「今のを聽いたかえ」[illegible]「人をつけにした」[illegible]「あの婆さんは大きな[illegible]五百羅漢で[illegible]たと思つたに」[illegible]「[illegible]はいいが、先へ寄せた婆助が女房は、怖ろしい事[illegible]な[illegible]、[illegible]なんだ〳〵」[illegible]「何が怖ろしい」[illegible]「イヤ上總さんを出[illegible]今寄せた[illegible]婆助が先妻の死靈は、よつぽど怖ろしがつた」[illegible]「ハヽヽヽ」[illegible]「[illegible]女の執念まで、氣の毒でならるぞ」[illegible]「そりや其の筈さ。死靈があり得るのだものを」[illegible]「ずいぶんと恨みを云つたぜ」[illegible]「とり殺すと云つたぜ」[illegible]「とり殺しても飽き足りねへとは、怖ろしや〳〵」[illegible]「とり殺すといふ死靈の[illegible]あのやうな薄情な男に、見せしめのために能いのさ」[illegible]「女房はむごくしなさんな[illegible]かいいぜ」[illegible]「おいらも其の氣で、山の神を可愛がつてくれない」[illegible]「ここにはい〳〵」[illegible]「[illegible]の毛もいよだつほかのにて、怖ろしながらもおかしかりし、[illegible]だのさ」[illegible]人、先ら封切は[illegible]を貰を故、ずつとのあきまでまつ人なり。此[illegible]「アノ枕添ひと云ふは何の事だらう」[illegible]「今云つたのの人達事に[illegible]今[illegible]には「夫の事[illegible]は[illegible]枕添ひといひ、男は[illegible]枕添ひといふの[illegible]」[illegible]、[illegible]

だネ。」竹「おれが樣に枕添のねえのが氣樂だ。三歩でも二歩でも、乃至二朱でも四百でも、放下し出しやァ直さま枕添が出來る。その代りには一夜限りだから、先妻の腹ァ立つ案じもねえス。」松「そりやァ百はおけ、五十でも二十四文でも枕添が出來らァ。」竹「馬鹿ァ云へ。そいつは束で賣る出來合への枕添だァ。」ト、いふ時、此の家の女房、竈元を仕舞ひて手をふきゐる。無「オイ爰の内の枕添どのどうだ。十二文出してお前も泣かねえか。」女房「否よ。氣味の惡い。」長「それでも枕添には違へねえス。」無「藤坊といふ立烏帽子まで育へたから、野暮ぢやァねえ。」女房「よしなヨ。氣障な、をかしくもねえ。」無「オット最う云はねえ。さァらばだァ。」ト、巫女の口 女房「オヽ、否な聲だ。最うよしなヨウ。夫れはさうと、變助さん所の先のお奈幾さんは、何云つたらうなう。」松「天窗から鹽をつけてかまう引と云つた。」女房「譃ばッかり。」竹「ホンニ〳〵取り殺すとヨ。」女房「とり殺す。オヤ能い氣ぜんだなう。全體がお奈幾さんは嫉妬深かつたから、自分から氣で氣を病んであゝ爲つたのさ。變助さんも好いとはいへねえけれど、あの子もおやきが過ぎたのよ。そりやァ勿論、亭主の尻癖が惡いとは云ひながら、變助さんが一寸用があつて出るにも、著物を著せかへては出さずか。些と歸りが遲いとむしりついての騷ぎだ。誘ひに來ても友達と一緒には出さずの。それだから、友達への顏色も惡いから、遠慮して來ねえわな。一晩泊つてでも歸らうものなら、それこそ大騷動、長屋中かゝつた上で媒人騷ぎさ。何でも當り合への物を

提げ買つて、上仙の巣には有りもしねえ物を差出して、三日前から[illegible]
ふやね。それだから[illegible]動かしても、[illegible]として[illegible]
へたのだ。あの子がそこへ、[illegible]入れるか[illegible]
「一國へて置いた」[illegible]二國[illegible]れたから、相模の付届なして預けて置いたのだ。[illegible]
れだから、とつさ[illegible]上[illegible]ここへいつてやつ、[illegible]好いと
う[illegible]見たか[illegible]その日に[illegible]はうだ。ヤア、[illegible]
何時何所へいく、[illegible]物を出せ。ハイ。羽織を出せ。ハイ。これは古い、新らしいのを出せ。ハイ。其
の羽織も古いのを著て、新らしいのは[illegible]、最後、大勘定。名跡、男といふ
ものは、新らしい着物が出来ると、ふるいのには目もくれねえ。何にも[illegible]
のつ[illegible]それから、[illegible]といふ[illegible]で、[illegible]、手拭、
頭巾、足袋、[illegible]へて、ハイ[illegible]いましよ、[illegible]
れな[illegible]でも小言をいふたなら」[illegible]位が、それだもの[illegible]やうなものであると、
忽[illegible]國さ、其の代[illegible]には、[illegible]
暇へ行つて、亭主の生霊に取りつかれるのだ[illegible]そのいはれには[illegible]情があるのか

女房「そこはどうだか。」錢「もし思召しがあらば御相談に乗りませう。」女房「錢右衛門さん久しいものさネホヽヽヽ。」土竜「しかしやきもちといふ奴は煩せえてネ。おらアやかれた覺えはないけれど。」長「あいつもわざ〳〵からかつてやつて貰ふ男があるよ。」鬢「芝居のやうに面白をかしくやいてくれたら、どうか色男のやうで嬉しからうテ。」長「狂言のやうにいきやアありがてえ。」土竜「色事は女の方から惚れてくるから愛で妙ス。大三十日に掛取りが来ると、直に鎌臺たぶれ倒して、他行のぶんでしらを切りの、元日にずつとせり出し、ナニトこいつは妙でござえせう。しかし婦人といふものは、兎角妬心のあるものさ。亭主が色事の所へ、夜々通ふ事を思つて、『風吹かば沖津しら浪たつた山よはにや君が獨り越ゆらむ。』ト、歌でみしらせたれば、流石に夫も女房の有り難き心を耻ぢて、思ひとまつたトありやす。まだ斯ういふ事がある。ものゝ本の中に、エヽ、何さ、私は諳記じてるやす。エヘン、『昔ある男、その妻に志うすらぎ、あらぬらしき女を呼びいれて、淺からず契りけり。此の妻いさゝめも心にかけず、恨みたる氣配もなく、日數經るまゝに、秋の夜の長きに寐もねられず。獨り燈火掲げてうちかたぶき居りけるに、鹿の音かすかに聞えければ、

我もしかなきてぞ人に戀ひられし今こそよそに聲はきけども

と、聲忍ばして詠じけるを、男聞きて限りなく哀れに覺え、今の女をば放ちやりて、もとの妻にふた

心なくして、いともめでたく達者にけり」ト、書いてある。」鬢「ハテよく覺えてゐなさるネエ」上「上總さんは記憶とやらがいいニヤ、いはれて大きに喜 上「ナニ此の位な事は上荷の時だ。わつちは論語といふ論語を諳誦じてゐるから、つい平生の事も、あの詞になつてどうもならねえ」鬢「ナニさつしやい、いかい事が揃つた」鬢「アリヤアノ〵お園まで出て來たぞ」竹「何を寄せるだらう」鬢「先の旦那を寄せるのさ」上「生口で目上にござんやすト、いふのだナ。」鏡「最う三十七八になるだらうなまだ眉毛をくつ付けてゐるナ。女が好いの美しいのと云つても、眉毛を落す時分に落さねえ奴だから片端だ。本の事さ。いはば化物の仲間だ。人間の交はりぢやァねえ。」土「併し美だネ。いやらし身たつぷり。あすこで逢はせようといふ洒落だ。」竹「悪い洒落だぜ。」土「沈魚落雁閉月羞花とでもいふか」土「手土「何落雁だか。岩おこし雁な粒な痘痕があるけれど、上背に下戴がかゝつたから見られねえ。」土「ナニ手間がかゝつちやア、紅白だと棟梁出來だ。」上「なる程轉色だ。色掛にすると、二ト鎧は丈夫にからう。しかし顔は好いが、胸轉を脹り出した。」是れは板木師摺物師の詞なる筋違に落ちにてさつはいおらず身仕舞へはしたけれど、ゆうべ氣で、遅く起きたといふ洒落かえ。」上「おつな洒落だの。」土「月に三兩づゝこつちへよこすなら、世話をしてやらう。」竹「トいふ洒落かの。」土「土龍が洞のすゑに「ト…口舞あり、枝に梁をはるの人、…」竹「あの女の泣く貌を、こゝで見りやア嬉しいもんだ。」…「鼠が穴籠へ籠つわさになるにいふなり。

て雪柱になるのさ。」長「しかし美い女は泣く面までが可愛らしい。」鬢「そりやア淨瑠璃の文句にもあるわさ。雨に萎れし海棠の花の。ア、何とか云つた。こりやア語らねえきやア出ねえ。」竹「後はしイらアないツ。」松「トいふ洒落かの。」錢「アレ／＼婆めが犬の事で目を泣き腫らした内がいい。」土龍「涙はふりてよゝと打歎く傍には、数珠さや／＼と摺り鳴らしつゝ、泥みたる聲音して、阿彌陀佛々々々々と唱ふる樣、目もあてられず哀れなり。外の方にかや／＼と音して入り来るは、何曾の者ぞ。只見れば軀には柹色染の鍼襷衣を穿ち、アレ見な、酒屋の小二め、何所からか凧を引摺つて来ながら覗きに来た。」竹「サア今度は甚太が處の爺さまだ。」松「神がくしだナ。こいつは面白いぞ。」長「こゝ一ばん聽き所だツ。」錢「あの爺樣は一體大坂生まれで、義太夫の三絃を彈いたり、人形をつかつたりして、田舍芝居を歩いた者さ。」鬢「それだから、操座の樂屋でつかふ隱語をば、よすく覺え居た。」錢「センボとかセンボウとかいふものだね。」土龍「サヽシコとも云ひやす。」

甚太が女房水むけをしながら「先跡月の晦日の日でござります。」いちこ「アイ／＼生口か死口かネ。」妻「生口でござりませう、神隱しになつたのでございますから、生死は分りません。占つて貰つたら、生き居るとはまうしましたが。」いちこ「アイ／＼目下かネ。」妻「イヽエ目上でございます。」いちこ「アイ。」ト、つるをならして、

くわゐ［illegible］「たり込ひやア〳〵ア、［illegible］弓にかけられこ、太棹の三絃の糸、［illegible］うれしいわいやい。［illegible］

いじ［illegible］の水の手向は、出語の瀬々ではなけれども、うれしいわいやい。［illegible］

なさ［illegible］、目の末［illegible］ながら、［illegible］う嬉しわいやい。」

［illegible］い言た［illegible］の［illegible］の［illegible］に［illegible］、［illegible］の事が、直に出て［illegible］

もの［illegible］の［illegible］ない［illegible］。［illegible］、［illegible］のことといふから、［illegible］

［illegible］さうだが、［illegible］はならねえ。［illegible］

がすぐに［illegible］に［illegible］つた。［illegible］事はならねえと［illegible］東西［illegible］に［illegible］

［illegible］といふ［illegible］が［illegible］たこい」［illegible］つつきい」［illegible］けした。、［illegible］

う、たはれごとないぞ。［illegible］

くわゐ「［illegible］の月の［illegible］日の［illegible］に「とうじやく」其「［illegible］で［illegible］」［illegible］

なう［illegible］其の日は、「しんだ」か「［illegible］」［illegible］い、「やつかい」に「［illegible］」［illegible］

たなこ［illegible］か「やつかい」［illegible］に［illegible］なつた［illegible］、［illegible］「［illegible］」まで［illegible］

［illegible］

「どうじゆく」は「うき」を「しこらへ」させて、「やんまひ」に、(女郎を「やん」といふ。買ふことを「舞ふ」と云ふ)「かまつた」なれど、「ぜめ」は「よりと」株ぢやによつて、「ぜかして」仕舞たわいなう。夫れからそこを「そり」出して宿へ「そり」込んだ所が、又「さいこほう」(西國の畧)「もちおり」たくなつたゆゑ、朝の「じんだい」のあまりと「きら」と「おしべすり」を「あて」にして、「ささき」か「かたこ」「のせ」たわいなう。それからナ、「ぶり」めが「むき」を帯枠へいと、やかましう云うたをかまはず、「べゝる」も其れなり、「すそく」のばして「ぜぶつた」わいやい。「ニ」か「さぶろう」のさめぎはで、「こつはり」締したれば、「せこ」が「ふかし」たうなつたゆゑ、戸口へ出たればナ、「じばし」が急おやさかい、小溝へ「じば」を飛ばしながら、目をつないだれば、「がんどまへぜき」を「がつれ」た「りやうたつ」の「びんこう」が「ぜけ」て、「ぜめ」が「えんこう」取つて此方へ「かまれ、かまれ。」と云うて、何かなしに「がつれ」て「そり」出したわいなう。扨それから、「やつかいに」「まぶい」所へ「かま」つたわいの。そこにゐるわろを「つない」だ所が、「しろざ」の「やつかいな」「しのき殿」や「ちく」の尖つた「しんでん」ばかり「ぜけ」て、「わこ」も無けにや「えご」も「ぜけん」「たしわこと」の様なものはないわい。おやによつて、「ぜめ」等が「ゆき」や「びんこう」の代りして働くのおちやれいなう。昨日も一寸使に往たが、東の愛宕で朝飯食て、筑紫の彦山へ往た戻りしなに、

「荒山へ立ち寄つて、晝前に歸へつたらばす、違ひ云て、まらうとうかれたわいなう。[illegible]
のき」なれど、熱鐵の熱湯を三度ヅッのせるに仍つて、「はんだ」な事ないわいそれ「しかた」出たと
「たける」事も無けにや、「まわり」も「ぜかご」さず、家根代の沙汰も無けにや、「大屋」が[illegible]
の「助四郎」や「つなぐ」といふ案じもなし。枕添もたゞ年「まつ」たに仍つて、[illegible]にた
る歎きも無けにや、立烏帽子にはそなたといふ枕添あてがうたらや、何の氣づかひもないわいそれ[illegible]
の上に「そゝかけ」が「ぜけ」るとも、言ふや「あんめ」に働きもやゝかい。[illegible]備うた事もや
ないわいなう。「つるかおり」や「手すり」へ廻つて、「こうさい」[illegible]
の上に「の四郎」したり「一掌握」したりする、「皮兵びんかう」を、[illegible]
な「しんぼ」のを引裂いて、木の股へかけるやら、おかしく[illegible]わいなう。烏帽子[illegible]
安堵して喫れ云て、此様に傳へてくりやいの。そなたもまた「こだ」[illegible]云ふ事とも、此の末は[illegible]
んでくだされ。うれしいぞや／＼。さりとてはかたじけない。[illegible]其の身の上は、信濃者が[illegible]
奉公に住んだやうで、「つぶけぬ」詞や何や角で、西も東もしらなんだが、此の頃は[illegible]深山幽
谷すッとまかせおや。今ではどないな山坂や、雲霞の中なりと、通ひ[illegible]手振つて[illegible]
の一人間界は穢らはしや。ずッしこらへのじふくらくすい、月あかり、徳もなく、二七の厄日、賭主の聲

いまはしや。怨靈ぜけてもなす目はなし、貧鬼の澀團扇で、あふがれて居た因緣か、今羽團扇の山おろし、思へば思ひまはすほど、羽が敵の雲の中ぢやよなア。さるにてもよろこばしや。「よりと」なりやこそ「えご」なればこそ、よう水むけて呉れたぞいやい。嬉しや〳〵嬉しやなう。杉葉の陰からまもる程に、此の後「ぜめ」をばよせてくれな。だうらく子息の中宿へ、頼むやうなせりふなれど、再びよせて呉れまいぞ。よせたら兩方のためにならぬ。出世のさまたげ不淨の穢れ、なごりはつきねどさアらばぢやア。」ト、神はあがらせ給ひけり。

長「コウいよ〳〵鼻高殿。」竹「ナ、怖ろしや〳〵。」長「あの爺樣は、センボをつかふことが平生の口癖だつけが、口寄にまでセンボをやらかした。あれは活口で、口が活き居るからあゝだらう。」錢「サア是れから、女郎の繪と金時の繪を縛つて口によせべい。」錢「ナニサ止すがいい。」竹「なぜ。」錢「前編にさう書いては置いたが、口よせばかり多くては、御見物がお倦きなさるだらう。」錢「それもさうかの。マアいつぷく呑まう。」竹「ナイ頭、煙草にせうぜエ。」長「よかんべい。」上戸「アイおかみさんお喧しう」女房「ハイ〳〵棧敷代が出ますよ。」竹「三十五匁かの。」上戸「本直だネ。」本直とは芝居の通言なり。上棧敷三十五匁、或は、土間二十五匁なぞのたぐひを本直といふ。　松「ア、素敵と立ち草臥れた。」竹「てめへ克くすてきといふぜ。」長「すてき

繁山田だに「此頃もやア、あんのをおつかぶせたらう」一寸はねえよ、[illegible]大事[illegible]、ほ
しやアしませうと遠ざかすつたが、そこを土龍さん、口寄で擲わすでもこそ止せよ。」「とつこい
妹のたかしくれたを聞ふ」と鬼の籠、天狗にするはねて後何事をかするうて、袖をちがひてはしの、
平信心鉢、且つ其下回り謝へ、二十五日御縁の串からへ、三日水のまつりに諦めたのに、是れ迄は
清浄だらう。」「上方は頭髪の色若衆、雲も下くも只風にわたしも望む事かいの。」「なアに、お洒落い
の、ト[illegible]の虫と頼せたらう、薩摩だらう。どうも公達はおつな句を出して、[illegible]くわかこんな
隣。[illegible]花の下に陣を張すう、娘達に逢ふ俗事で、[illegible]の際で、[illegible]い口調で[illegible]
、に帯しく母は殺風景だ。」トおたしなあだれかへ。「恐らいいふ洒落かの。」と思「こればいかな事、
[illegible]「柳が通る、植町のお嬢様が通る」「三二やさうだこそとすれい。お[illegible]はあの[illegible]」[illegible]
のくれるそらいをおはけて、あせ行ねえ真似をしたがる者も又あるらしい。」皆「下ツ腹に巳のぬる際に
やれとあしけたくし見せるよ」「与最うちたこう四十だの」「夫此の頃に迷ってこなた[illegible]一人になつたよ」
[illegible]あの[illegible]が能いのと云つたよ。」或晩に[illegible]に行つての、[illegible]人一緒に[illegible]うとすると、[illegible]
[illegible]を持つて、門まで道つて出やした。ソコデ下女が[illegible]を[illegible]すと、[illegible]の人が[illegible]見[illegible]
与貴方のお履物などの様なの。」「聞いたから、ヲハイ私のは、甚だお恥かしいが、冷飯草履でござり

ます。」ト、いふとあの女が、「コレ初や、金兵衛様のはお冷のお草履だとさ。」ト云つたら、各、ふき出さぬばかり。」鉄「ハ、、、、、お冷のお草履はいい。」ごん「兎角ありがたがるものさ。まんざら知りきつてる事をもしらぬ風で物を尋ねる。諸事あどけなく見せるを俗に葭藁言と云ひやす。」鉄「まだをかしいのがあつた。いつかの晩無盡が有つて、誘ひに寄つたらば、女房姫達に當つて大福餅を食つ居やした。スルト延公が、「コウお浮や、そこの用箪笥から金を出して下せへ。」トいふと、いくつ出しますえ。」「亭主も亭主よ、「二朱銀を十一くだせへ。」ト、まア十一もをかしいが出しやした。すると最う後に金がございませんよ。算へて見ようト、算へて後お姫様曰く、「モシ旦那エ、跡にはたつた七兩四分二朱ございます。」と云つたが、こりやア聴いてゐられめえ。」ごん「一度々々に首を振つて、甘えツたれた言語をするから面が憎い。イヤお姫様には斯ういふ事があつた。あすこのお初が、モシおかみさんエ、半鐘が鳴りますよと立騒ぐと、お姫様おちつき拂つて、コレ初や、よく聞きや、遠いのが火事、近いのが手失だよツ。」鉄「こいつはいい。」上ゝ「延公が屋敷から歸つて袴を脱ぎ放して置くと、「コレ初や、其のお袴を一寸袖疊にしておきや。」と云つたが、彼奴もをかしかつた。」鉄「爺端折もよかつたよ。」ごん「なんだえ。」鉄「ナニ、何さ、あすこの小僧が火鉢の火をふきたから、貧乏揺りをしてゐると、「コレ止しやよ。おいらはきつい嫌ひだよ。」といへど、小僧更に氣がつかず、「何を止めます

エ。」といふと「何を止める」と云つて、其のぢれ/\鬢折をさ。」と云つたが、一座皆道理に聞つた。「人の商事あどけない所や、おいらんでしてゐるからたまらねえ。」「ヤヽおいらんといへば、さる内の新造が能いのを云つた。りなで二階を止められた客が、その内へ来て、又何かいふやつで、二階を止められると、彼の新造が聴いて、ぬしは世事もよし、気の入る好いた人だが、なぜか階子段を有んなんせんッて」「ヱヽハヽヽヽヽヽ」「其の曲輪はあどけないので落ち取るのサ。おれが裏の年明が、今客に世話に成つて居るが、縫物が出来ねえから、月備のお針を置くのサ。ある日其の針と物言ひして、畳が云ひ募ると、お針が腹をたつて「なんの其様に、利口さうに口をきいても、縫物ひとつ出来ねえ癖にッちや、いつぱいにはりこまれて、年明までつと癖に障つたから、何でも一番やつて見せる気で、貌が綺麗からなさんへ話すには、こう聞きなせえまし。昼前針主がさう/\ていたから、いつそ腹が立つてもう/\くやしくてなりいせん。明日はおまへも四つから起きて縫ひなんらうッて」こいつはどうだ」「ハヽヽヽヽ」大笑ひ「其の商に感ずるな言葉が多くあるものさ。他の事ぢやアねえ。おれが壮年時分、十六文や二十四文は儘もつかつたから、酒肴同士、おつな事もありやした。六月時へ出た所が、折ふし職も過ぎた日で、ゆふになると、寒へるるやうになつて、綸の帷子などは、中々着て居られず、てん/\に給に着替へたり、単衣の事は寒いと

といふ中に、おれはその用意がなかつた。ソコデ縮のまゝで縮み上つて、絽の羽織有つても役にたたず。そちこちするうちに、堀へ著いて上つたのさ。夫れから大門を這入つて、馴染の茶屋へ往くト、茶屋の息子が大縞の浴衣で團扇を使ひながら「ヲマ是れは入らつしやいまし。どうなさいました。此間はお見限りでございます。」ト云ふと「ヲどうだ大分寒いの。」と云つたが、我ながら是等は落話に爲りさうだ。イヤまだをかしい事があつたのさ。俺が二十二の比、道樂で追出されて、伯父御の所へ預けられて居ると、サアどうも出たくてならねえから、或夜密かに、素一歩工面した所が、紙入の類みな取り上げられて手になし。一歩褌へ結び付けてもをかしし。仕方がなくて脇差の鞘の中へト、百疋を入れて、上から身を差し込んだから、まづ案じはいいぜ。トコロデ、御佩刀はきめるシ、形はりうトしてゐるから、なか〳〵素一歩のお客とは見えねえ。」土「野暮八人を以て通人一人に換ふト見えたらうネ。」錢「それだちやァ南鐐一片の旦那だ。ハヽヽヽヽ。勿論お茶屋は三年ふさがり、此の方に向つて一句も出ずといふ暦だから、據なく驅け上りとして、しらねえ内へ揚りやした。スルト若い者が出て、お定まりのお腰の物、お小柄がござりませんや何角で、すつと渡して階子をバタ〳〵〳〵ソレ酒が出る。まア飲む。こゝでかなしくも内藝者でも揚げようといふ場だが、其れ形けりですまして、チトお片付けとなつた。氣のきかねえ撫牛で、布團の上に煙草を呑ん居ると、若い者が來て「ヲへ

くお寂しうござりませうが、ソリヤお蹟のかすかな所で、脇差がねえので、それまでまつ
はァ忘れ置て、此の時に漸う思ひ当つた。ナニどうも何とも云へはしないが、大きにむかついたのさァ。
ト、若者先刻預けた脇差を一寸とこへ持つて来て貰ひてえ。直に帰すからトいつた脇差、若い者がイヤ
どうも脇差を二階へ上げる事はなりませぬ。ヲイヤ其処でちよいと見る許り、些と見たい事があるか
ら一寸かして下せへと、云へばいふほど不審が立つて、なんだか怪しい客だと、思ふも道理まづ
ヲイヤそれはいかな様におつしやつても、二階へお腰の物はなりませぬ。ヲイそれならよいと見た所の若い
に渡すことと、いろいろ押問答した内に遣手といふ者が出て来て、お前さん、なぜ又そこで見たいとおつし
やるのでござりますか。若し御覧じたくば二階の下で、下で御覧じて下さいまし。ヲヽどういふ思案した
の、どうかさしつかふるかと、一向論がひねりつ。最うおれも一生懸命だから、右の始末を白状に及ぶ
と、遣手も若い者も大笑ひとなつた。それから脇差を持つて来たから、御帯刀をすらりと抜いて、赤
非鏡光それから御覧じろといひながら、鞘をふり出すと、金一分ずつと飛び出した。そこで笑つた面々
のと、今ここを話せ、恥かしくもあり、をかしくもあり、誠に赤面であつた。それからその内が心
やすくなつて往くと、遂や角する内親許へもただ帰り、その内に駄染が重なつて、身貧込んだのが今の
女房さ。サアこの世の中といふものはおかなものさ、おやまあねえか。縁の糸が何所に引つぱつてあらうやら

しれねえの。シタが傾城には、はまるべからずだぜ。土龍さんなども女難の多い風だが、あれははまらずに買ふものさ。おらが女房の話で聴いたが、あるおいらんが指を切つてやつたら、其の客人大はまりになつて、ぐつと身請の相談にかゝる、其の噂を傍輩女郎が聞いて、アノ何さんは今度は切り中てさしつたッサ。」大ぜい「アハ、、、、。」

柳髪新話浮世床二編卷之上畢

柳髪新話浮世床　二編巻之下

東京戯作者　式亭三馬戯作

土「鬢盥下てのふは奇々怪々といふ事が、目下に有りやした。ヤこれはおさら、虚実だから、虚実する事だらう。怎生いづれの人ぞといふに、霧香道の人氏、姓は隅田、名は萬八、字は何とかいふか、号ははね者と呼び、俳名を馬陰といふ男さ。」鉄「ムゝ、何かへ。あの高慢気な人物で、所謂る渡面に有りさうな黄色なこゑの人かへ。」土「さやう〳〵、招牌つきは風流俊雅の才子と見えて、蒲黙河の如くだから、鉄面達者を見ちやア豪勢さ。看一看した人は吃驚されて、悩けしやす。鑿屋へ這入つて見ると何にもねえ男だ。ア詩人の半陰者が好いのを云つたす。馬陰は断の章書だ……と草書は、ミミ〳〵〳〵といふくらゐも引悼いて、右の方の筆跡が、ぢんと直ねてるやす。よしかェ、いふ心は売薬などの招牌に書いた所、どうやら一物ありさうで、見懸は立派だが、世人に解せず、たゞ嘘かした詐りで字体がはねものだと云つたが、チト迂遠な内らも詩人の筆端には最もだ。それから以来は馬陰が書名を、はねものといはずして、鉄毛假字といひやす。聞出体題、昨日聞素和簡も、

あの男と私ど三個で、岡山鳥が庵を訪らつたのさ。山鳥大の酒客で、頗るおもしろき男さネ。まづ寒暖終つて例の大酒となりやした。マアそこで話下不在さ。却説。裏門から退り出た所が、和尚酔ひしれて、泥みたる聲などで高やかに小唄を唄ひの、折々大きやかなる聲で、かや〳〵と笑つて、何か獨りでさえのめしの、踉々蹌々として歩いて來やした。話分兩頭。こゝに渾名を白と呼べる窈窕なる少女がありやす。白と號くるは、いかにとなれば、紅粉を粧ふ事大造だから、是れにて然號けきたれりさ。おつだネ。モシ御免なせい、私は話に實が入ると、好物の讀本風が出る。是れは癖だから許しツこ。彼の少女が家は、與太郎町から片側町へ出て、道の程半町あまり往くと、右側に、浪人者か醫者かといふ住居で、黑き出格子のある家さ。」びん「ム、知れやした、あの娘は名代さ。」松「ム、あれか。」土龍「ソレ柱がくしの女繪といふ身で、格子から半身見せて。」竹「往來の人を張つ居る娘だ。」長「いつでも立派な衣裳付けよ。」鳶「さうよ。金毛織の帶が押物だ。」「こいつは委しい。」鳶「白面金毛織九尾の娘ぢやアねえか。」松「男は隨分化し兼ねめえ。」土龍「彼の馬陰めは甚だ色好める男だけれど、花街では、女郎の背後に緣深いから、阿曾比嫌ひで、地者拵ぎの冠たる者さ。」長「ほろツ買ひらしい。」土龍「そりやア最う、湯灌場買と號していいネ。なんでも自惚といふ事は、此の人よりぞ始まりけるで、平生が見えたつぷり、縮れた髪の毛を一本づゝ揃へて鑷を離す間なし。齒磨を午睡のお目

寄にも使ひ、髪際から小鬢の脇を、[illegible]指で撫でるが手癖さ。其の手で襟を[illegible]いと合はせて、襟先をぐつと引つ張つて、膝をトントン払ひながら四角に坐る。此の時両手で羽織の折返しをチウイとしごいて、左右へヒラリト羽をつて、トキニモシといふが話の序開きさ。エヱサをかしい事がありやす。」目線を剝くと、[illegible]へうつる[illegible]を、傍眼に見ながら衣紋をつくろひ、[illegible]いて[illegible]見た風で、体の身振をなほし、襟を摘み、尻を撫でエエヤハヤ煩き事いはん方なし。」[illegible]「トキニ其[illegible]はどうしたエ」[illegible]「[illegible]、それはさておき、あの[illegible]は[illegible]通つても出て居る事を[illegible]に、[illegible]給へ。どうも[illegible]男子は煩せえよ。おれが通る時刻を考へて、いつでも首を出すが、あいつおれにはまた出時雨だよなどと、毎日はりかけるのさ。」[illegible]「そいつは酒落だらう。」[illegible]「ナニサそれが地鐡だからをかしいわな。ハテ女の事では楊枝隠でかなはぬ。」[illegible]「用もなくて通ふ奴かの。」[illegible]「色事師も骨が折れたものだ。」[illegible]「其の時にはわ中で[illegible]ものよ。」[illegible]「[illegible]といふ奴は、[illegible]しまふと[illegible]いふ[illegible]らう。金銭を出せば、好き次第の女が買へるのに、[illegible]事を好んだものだの。」[illegible]「[illegible]さ[illegible]、そこが色と恋との差別さよ。」女郎のは商事、地者のは恋路と云ふ[illegible]色恋と一緒に云ふけれど、色と恋とは商売と仕事さ。」松「真烏賊と鯣烏賊ほど違ふものは、[illegible]から風情の色恋だの。」竹「蓼南瓜と東瓜[illegible]違ふのは、[illegible]の色恋か。」長「コレサ〳〵話が立ち消えする。」[illegible]「しかし、あの

駄面で戀も氣障だ」長「面で戀はしねえ、心いきでするといふのス」土「却説、今云つた三人連で歸つて來ると、つき合つて呉れといふ何を出した。おれも其の光景が見たかつたから、和尚を無理に引張つて、態々そこの前を通るのさ」サアこゝがをかしい」馬陰は盆石の富士ときて、眞黒な丸面に鼻ばかり大きいが、背の低さ三尺何寸といふ裁下しで、あの如く小兵だ。夫れに引きかへ、酒樂は五尺ゆたかの大の法師、よしかネ、竝んで歩くと和尚が章門の麓にやつと頭がある位さ、ソコデ三人竝んで往くと、例の如く娘が出てゐる。チラリと見ると、馬陰が曰く、おれをば娘の方の端へ廻してくれと、態々溝端を歩いて格子の前へ往きかゝる。此の時和尚は、先刻の喫劇で十二分の醉を引き出し、些と心が惡くなつたと見えて、大喝一聲ワッといふ聲に驚き、馬陰が顧回く凸凹に、ゲイと云つて吐逆したが、彼の背低の馬陰が、頭からゾロ／＼／＼と、兩方の肩頭へかけたから、前後へたらだら／＼。ホイといひながら身を退いて、除けようとするとどぶのはただから、馬陰溝の中へ落ち」「ヤーイヤそれは大變ハ、、、、」土「深い溝でもないが、背が低いから丁度是れつ丈さ」ト、乳のあたりへ手でしかり長「イヤ見え坊も稽侍も出來らばこそ、三人たゞ肝ばかり潰して、暫く呆にとられてゐたが、往來の人だかりはする、見つともねえから曳き揚げようとするが、重くて揚らず、こつちは穢れあえと身をかばひながら、手をとるから猶あがらず、和尚は氣の毒がつて、ひよろ／＼しながら、手傳はうと

するとコレ／＼また落ちあはあ、お前は構ひなさんな」といへども、醉に乗じて柄が無いから更に聴きもいれず。漸う二人で揚げに揚げたが、まづ始末の悪さ。馬糞色頭青で、頭から心へかけて皮時にまり、乳の下より両足まで全身泥にまみれて、すつくりと立つてはゐたが、寒風膚を射るが如く、其の上水には浸るし、がた／＼／＼／＼／＼と、震ふばかり。狼狽に當惑を加味して、一言を出す者なし。あれまア人立ちがする故、辻番から棒を持つて来たを幸ひ、半町ほど向の辻番まで連れて行き、奥まりたる所へ潜めおいて、着物を脱がせたり何角と介抱する所が、袂からは真黒な水が袖口へ押し出して、博多の帯へ赤ぼうふらが取付い居たり、金唐革の煙草入に、蛞蝓がかじり付いて、打紐を欺くなどイヤハヤ」竜「さう／＼お詞の中だが、赤ぼうふらは冬向あるめえね。」松「どうしてか有りやした。まづおまけにもしろさ。夫れから顔を拭いて、頭の掃除をしたところが、慈鴨の慈や、串鼠の芹か、本田の髷節に引掛つてゐるからいいぢやァねえか」竜「ハヽヽ、蔵た。」竜「聞いてもおそれる」竜「そこちする内に、私らが所の出入の職人がとほつたから、それを頼んで着物やとりよせやした。其の内焚火にあてて、漸うじて寒を防がした。何でも溝の端から辻番まで、泥の足跡がついて、妖怪ならば蹴を繰つて退治すべき光景だつた。」竜「娘はどうしたね。」竜「娘はいつの間に引つこんだか、なかなか娘沙汰でなしさ。好男是れにて縁切。おつな事が縁切になるものだ。」竜「最うよもや擬りにはある

けめえ。」土龍「鐵面皮だからどうもしれねえよ。」錢「地者にけちつく奴は、根性のあつかましいものだから、絲瓜とも思ふめえ。」鬢『忘け者他所の障子を張つて遣り。』ト、いふ句の通り、うぬが内では横の物を竪にもしねえものが、娘を張りに往つて、他所の帳合までしてやつたり、買物を頼まれたり、使にまで歩くのがある。」熊「あるとも、八百屋の青右衛門の所の、お豆をはりに來る息子があるかナ、此中妹のお柚が死んだら、いいぢやァねえか、二親さへ寐たのに、通夜をしてナ、それもいいけれどナ、若い身そらで數珠を出しやァがつて拜んだアス。佛壇へ向つて鉦を鳴らしながら、ぶつぶつ〳〵念佛申してるやァがつた。それでもお豆が承知すりやァいいけれど、かたつきし煩さがり切つ居らァ。」松「只うめへ物でも驕らせて、食德として居るのだナ。」錢「色氣はねえ、食ひ氣よ。」竹「その食ひ氣も性が大の生姜だから、ろくそつぽうな事はしねえ。」松「錢も使はずに、使ふ風をして、きいた風ばかりきめ居るのがよくあるやつよ。」熊「葬の時なんざァ、べらぼうに世話アやきやァがつて、獨りで捌くもんだから、大屋さんにきめられてナ『コレ貴樣は何だ。あてこともねえ、親類に人もねえやうに。』などといはれてナ、きび助寂滅、ぎやはんきうといふ目に遇つた。それから跡でナ、戒名を見た所が、緣應信女と、タッタ二字戒名だッサ。何々ト二字あつて、緣應信女ならまだ好いが、たつた二字では投げ込みへやつた樣だト、其の上に、今までの佛は院號が付いて何とやら院

何々信士何々信女と、仰山らしく長い中に、今度のはなぜ短うござると、施主に相談したればさ、いふござると、うなづくもあり、成程と承知する者もあつて、和尚様に、ぶつつかつた所だ、和尚のいふには、今度の事は、たゞだから何も趣向がない。今までの佛達は、本山へも二度も參詣されい、あいかう宗體の功とやらがござるによつて、院號に致したと云つたさうな。それからあの野郎が在平「でも、御出家様は柔和忍辱袈裟をおつやくとやらでござりやすが、何と思ひなさる。素人といふものは」「是も素人といふがあるものか。在家とか檀家とか云つたらう」「ハイよ、それは事を言ひやす。在家でも戒名が附いと、まんざら安佛になるやうに思はれやすね。修行がなけりやアならねえけれど、今までの佛は六十七十になつて死んだから、本山へも往つたり功もあつたりしたらうが、今度のは高で十六になる娘だから、そこ所ぢやアござえやんねえ。是は一ばし柔和忍辱で、戒名を附もつとまけてさ、院號がならずば、せめて最う一字足してくんなせえ、質屋の番頭でもあるめえし、値はやアがつたら、和尚はおつとしたさうで、柔和忍辱としやれさうに云つてしまうるが、在俗忍辱でも、當寺でも、修行のねえ者に長い戒名はやられぬ寺法でござるといはれて、野郎も揃へて引込んだッとさ。」「其んな話を聽いたッけ。寺法とはいふが、そんな野暮なことしに、最う一字ふやしてやればいいに。さうすりやア、施主も嬉しがるから、法事なぞの御布施も快く納めて、和尚の實入りも澤山

になる理窟だ。お寺に大福帳といふ帳が、あるかないかはしらぬが、金銭にかゝはるが世の習俗、僧俗ともに身過ぎ世過ぎさ。早く云はうなら權助信士、お三信女でも事はすむ。お歴々の御身分は、いろいろの例式があるから、こちと等には分らぬことだが、平人が戒名に、代々院號、代々居士、代々大姉などと騒ぐは、やつはり驕りの沙汰さ。おいらは緣應信女と二字だらうが、何院大禪定門だらうが、貪惜なしだ。難かしい戒名を付けると、孫子の代には訓みやうもしれず。棚經の坊さまに尋ねても、さればでござる。何雪院、何々香花信士とござるが、首の字と三ばんめ四番目の字が、エヽ／＼とつかへながら、たれも負け惜しみで讀めませぬとは云へねえ、分りませんといふわナ。讀める坊様に讀んでもらつた所が、又忘れてしまふ故、孫や彥のこちとら組は、先祖の戒名をおぼえずに暮してひよつとして拜む時には、南無御先祖樣とか、十五日の佛樣とか云つて濟まして置くわな。ホイ今朝は精進日だつけ。南無三鰹節をやらかした。チヨツどうするものか。油揚でも買つて上げやな。ナニ最うお飯に手が付いたから、ホイそんならお供でも上げ置くさ。ハイ佛樣眞平御免なさい。今朝は忘れました。南無ト目をねぶつたばかりで、お飯をわんぐり。ヘン鰹節で精進を落ちちやア割に合はねえといふが、世間一同、こちとら組の習俗よ。ソレよしか、何院だらうが、へつたくれだらうが、お歴々の御身分の事、平人は死んだ時ばかりの名聞だ。生きてゐる內名利名聞をつくし、思ひれ驕つ

た事がまだ不見で、死んだ先までも、名利名聞の噺が極るのだ。いや院殿大居士でも、から樣うに長々と、法性寺入道見たやうに、一遍つゞけては唱へられねえ程が、千疊敷の蓮の上へ往生したといふ返詞を、菩提所へよこした噂もなし、縁應信女の名が短くて、まだ迷つてをりますと、幽靈が出た沙汰も聞かねえ。そんならば長くても短くても譯はなし、死んだ跡を構ふものか。そこを出て寺へ、今の間にどういふ事が有るか分らねえわさ。それで死んだ先が知れるものか。鉢兵衛信士、お三信女で埒明くけれど、鉢兵衛お三は活て居る間の名で、これは神道だ。死ねば佛道が引き取つてくれる。其の尊い神國の俗名を、死んで穢れた身につけておいては、此の國の神を穢すが勿體ねえから、佛道の法式をもつて、何やら信士とかなんとか法名を號けるのさ。長く付けてくれるも、短く付けてくれるも、坊樣の料簡次第。あつちに何か算談のある事だらうから、そんな事はとんと打ち捨てる事さ。ハテ地獄の沙汰も金次第。文覺の樣な氣の短い坊さまもあるから、おしなめて柔和とも云へねえ、又位づくで長い戒名がならずば、平人は皆縁應信女のやうに短くするがいい。出家の御身分だから所詮金づくではなるまいが、又修行づくや功づくで長く號けるなら、お歴々を構はず、町人の金持ちを構はず、夭をした者はみな短くするがいい。萬兩分限でも、町人風情か或は功のない者は、皆短いなら有り難い事だネ。なか〳〵さうでない。お歴々樣がた萬兩分限などの、佛道修行もない佛に、長い

とも長いとも、一息で云はれぬ程な戒名のあるを見ては、何だかチト空な物さ。」土龍「毎日の家業に追はれてゐる若い者が死ぬのだものを。功も修行も所詮ある筈がねえ。」錢「八百屋の娘のお柚は仕合な者だ、まづ第一短くて唱へ好いから、一番先へ拝むわさ。コウ己ア狂歌といふはしらねえが、是れでも狂歌にならうか。お柚が追善の爲浮んだ、たつた今出來たてのほや／＼だから、早いがお德。斯うもあらうかス。前書とか何とかいふことを一ツ、エ、何さ、オイちつと筆をかしな。ドレ／＼、エヘン、安くはねえ歌人だぜ。

十萬億土遠いと思へば遠し、又近いと思へば近し。
縁應信女短いと思へば短し、又長いと思へば長し。

サ。○此の又の字は消さう、不用ことだ。能いかの。チヨツこれで置かう。ナンノ、よけいな事をして消す奴さ。それから歌よ。エ、ト待つたり。オ、それ、よし／＼ト、書きをはりつ サア／＼みんなが聴聞しな。

戒名の長いもあれば短いもあるは八百屋の縁應信女

どうだ／＼、名歌か／＼。」土龍「俄ちや／＼といふ歌だ。錢右衛門さんもすみには置けねえぜ。」ぴく「こいつは妙だ。アハヽヽヽ。」ト、みな／＼笑ふ。錢「ヤがうぎと今日は油を賣つたわい。ドレ往か

うこ」 ひ「何所へぞ往き口かえ。」 卑「けふは西れ日だ。龍蔵が[illegible]して、[illegible]」
酊れる。これ、杯が冷めて来るのだ。」 ひ「ハ、おまへは飲みさうな顔で下戸だの。」 卑「[illegible]
の上に飲んだおやア身は持てねえ。」 ひ「婚礼でもあつたか。」 卑「ム、己が伯母御の子息が、[illegible]に来
てゐた娘と出来て、懐妊したもんだから、すぐに親許からもらつて夫婦にしたア。」 ひ「それは恋の
のこ」 卑「まア恋さ。」 ひ「船だらう。イヤおれも、帰らう同穴の契り浅からず。」 銭右衛門「ヤ
そこで一緒に往きやせう。」 卑「角から直に別れるのだ。」 [illegible]
買物を 銭「アイどなたも。」 内にゐる者「アイそんなら。」 ト、別れ 銭「さらばおいらも帰らう。」 長「長居
だよなア。」 卑「道へねえ。」 卑「おらも帰らう。」 ひ「帰り風が立つと皆な帰るぜ。[illegible]」
卑「松さん、竹さん、ナイすんだら。」 卑「まア帰るか。」 卑「もつと遊ばつしやえ。」 [illegible] ト立ち
卑「コウびんさん、銭右衛門も若い男だぜナア、おらが小児の時分から聞いてゐたぜ。」 [illegible]人魚町に
ゐた所為だ。」 卑「ふわるくしやれるぜ。」 卑「コウ大勢ゐる間に気がつかなんだが、[illegible]だ。」
ひ「買物にやつたこ」 卑「あの野郎は目あつはふに手頭が利いて来たぜ。ナア松。」 卑「ムヽ」 [illegible]よ
だ欲が出ねえかいかねえわな。」 卑「いくつだ。」 ひ「十六よ。」 卑「とんだをとなしい子だ。また
色気がねえの。」 ひ「ムヽ、さうよ。」 卑「おつつけ見や。面皰がふき出すやうになると、そろそろ始ま

らア。」松「好い業になるだんべい。」竹「しかし髪結も辛い職だなう。」びん「辛い所か、業の習時分には腰が痛くてからつきり伸せねえぜ。剃刀を持つた手が棒のやうになつて、櫛へ移る時手子摺り切るわナ。日がな一日腰を折つ居て、俯向いて許りゐるのだから、逆上せて目が眩むわナ。今の話ぢやァねえが、功を積んだから、今でこそよけれ、何でも馴れねえ事はいかねえよ。」竹「習はうより馴れろだ。」松「夏がいいか、冬がいいか。」びん「どつちをどうともいへねえ。夏は汗が固まつて出るシ、冬は冬で冷たくて手がかじかむか、夏の夜業は蚊が煩し。搔きたくつても油手なりか。」竹「そんな物だナ。渡世は恐ろしい。」松「何が怖い云つて渡世ほど怖いものはあんめえ。」びん「其のうへに髪結といふものは、場所をしようが床を預らうが、人の機嫌氣づまを取らねえきやァなりやせん。是れでも大勢の客の内には、むつかしい人があるわな。十人が十種をそれ〴〵にあしらつて、其の人の好きな事に連れて口を合はせようといふものス。女郎と同じ調子よ。此の商賣は別して内股膏藥がいいのさ。」竹「それが當世だ。」松「おらァ髪が上手だ云つて、澀面してゐるちやァ誰も來やァしねえ。」竹「世事が好いとか、ナア。」びん「男が好いとか。」松「ナニ男をいふもんか。」竹「ホンニヨ、すべての事が愛敬がなくッちやァいかねえぜ。」松「しかし何の業でも、お互長左衛門だけれど、こいつも年が老つちやァ出來ねえ。」びん「五十を越しちやァむつかしいわな。」竹「五十六十になつて手間取りをしてゐるも

出來ても奴だよの」五「そりやア何商賣でも盛期の悪いのさ」五「又流行したもんだから、てんでんで身じんまくをするがいいのさ」五「町内の廻りでも、床でも、代りとなるとまア今日はいいといふぜの」五「又場所がやア別してさ、床でもさうだわな。それだから休みの明日は、為事が有さうでめつは廻さねえ。兎角代りには結はせねえものよ。俺にしろ、勝手が違ふと氣持が悪いから、そこは尤もだ」五「まはりの髪結の上手な奴が、折角馴染んだと思ふと、無理無躰をして、又他所へ行くものよ」□「中には惜しいのがあるけれど、一ッ町内を久しくは廻らねえ」□「其前に町内に居た[illegible]」五「松さん、それにつけても此の親分は卸さねえよ。場所は五六町廻り、床は三ヶ所組つて若衆を出して置くし、云ひぶんはねえ。其の上に此の床は自身に手をおろして慾ばるから、そこでさア金がのこりくとうなるす」五「おほかた預つたといふも嘘だらう」五「他の名前にして内證は手めえが持つ居るのさ。女の事と慾ばりにやア五分も透かねえ」□「一ト月の上錢をつもつたもんだたらう」五「それだから床の立派な事を見ねえ」□「さうさ、おつゝけ出額が三錢、蠟燭、油、明箕の寄附七になりやすよ」□「イヤ又臥らが出い頭の髪結床は、きたねえ手前に水が溜んでゐて、しるつたれた小盥さ。表の障子が助廣治の紋所、ソレ魚葉が丸に仙の字、[illegible]が十をきたねを三つ出置に書いて、丹と藁墨とで別々に彩色いたものよ。其の障子に積した筋が、蛇腹ふせ木綿と[illegible]

中へ、立花の様な松を墨畫にして、薄墨を入れたのが縫箔屋の障子、さてまた表具屋の障子は、鄰の家を偷眼で睨ん居る達磨さ。今も折ふしは見かけるが、むかしほど澤山はない。床の障子も助廣治の外に役者の紋を付けるは、東 坂東又太郎 ◎ 市村龜藏のかへ紋、市村羽左衛門なり ◯ 瀬川二代目、王子路考 回 は江戸一面さ。其の中には素人繪の武者や役者、或はさまざまの見立物などが有つたけれど、彩色は丹に山梔に藍紙などを用ゐて、どうさの無い障子へ畫くから、墨書きの外へ藍がにじみ出すやら、目の中を青く彩るやら、丹の粕はこびりつくシ、山梔はみづと黄色とべつべつになつて、燒筆の痕がしつかり殘つて、イヤハヤ見られた物ぢやァねえ。近年は蝕とかいふ雙墨に、薄墨をさした油障子、看板書も提灯屋もおのおの立派なことさ。役者の似貌も、浮世繪師のお弟子が畫くやうになれば、極彩色の障子にさまざまのおもひつきが出來るシ、紺屋染の暖簾にも、むかしは大文字や裾模様であつたが、今ではいろいろの人物を彩色に畫かせたり、色わけに染め拔かせたり、まことに人は器用になりました。萬事痒い所へ手の屆くやうさネ。錢さへ出せば自由の足りる世の中。」ト、いふところへ鳥屋のちやぼ八といふ男入り來る。ちやぼ「蛸助さん、何を小言をいふ。鄰の縁に居て聞いたが、お前獨り多嘴つ居るぜ。」たこ「うんにやさ。ありがたい世の中だといふ事さ。」ちやぼ「お前今しつたか。遲いく。コウ青首が一羽殘つた。元直に賣るが買はねえか。」たこ「おいらには、かしはめん鳥が相應だ。」ちやぼ「あたじけない。爰かまはずと往け。ヤがつ

てんだ。」とい、視ひつましげ、キツクリとして、引込まる事を口そこらに御さいませんか。たつた一羽うりたい。御愛敬には三芝居役者聲色、立役は幸四郎、三津五郎、團十郎、梅助、これはまつはり出來ません。中二階はさ、萬屋に紀の國屋、三河屋に伊勢屋、八百屋に萬屋お好み次第、何でも出來ませぬ。只私の聲色が出かつかひます所が外に類と眞似事がない。まづ此の鴨をめしあがつて御覽じろ。芳しくて齒につかず、從弟同士の味が致す。北州の千年も甲斐の一時、當座の夢も九十年、一時の榮華にはすとせを延ぶる。千金萬金の出ます事ならば、御思案御分別もござらうが、是れは僅かに風前の塵だや。四百や五百はよしない事にもおつかひなさる。三朱や一分は棄れた穴にも御捨てなさる。誠に御當地は繁華の園、入船千艘あれば出船千艘、まだ御存じもない御方があつて、時は時さやうなお方樣には風味合ひといたして代が八百、一日あがつて古いとおつしやるとも、代を取つた後は此の方構はず。元朝より大三十日までお手にふれませうこゝもとが正眞、値が下直な手間なりとても御存じ、今日は爰に在つて明日は山の手へ參るなどと申す胡亂な者でござらねば、賣り間違ひと賣ひ損ひがない。イヤ／＼若い者さうでない、我がいふ事は憚りがましいとおつしやるまいものでもない。若しさやうな御仁さまは、コリヤ、此の通り記し置きましたる所書が證據ぢや。なれども我が商を悪いと申して斷ふ者一人もござらぬ。雪も鴫も食うてみねば其の味ひが知れぬ道理ぢやまつた山寺の

鐘よく鳴るといへども、法師來つて撞木をあてざれば其の音色がしれぬ。酒屋の門に三年三月お立ち遊ばさいても、飲らぬ酒には醉はぬ道理。いづれめしあげられまして、實にかは我が口上に逹はず。風味合ひよろしきと有つてお求め下されうならば、今日には限りませぬ。毎朝此所にて御披露仕りまする鳥屋ちやほ助。ア、口が酢くなつた。おかみさんお茶でもお湯でもおくれ。お茶臺には及ばぬ、お手で下さいまし。」皆々膽を潰してちやほ助が顏を見つめてゐたりしが。びん「なる程よく多嘴くるなう。」松「口から先へ生まれたとはこれが事た。」竹「香具師のいひぐさをよく覺えたぜ。」たこ「あきれもあきれたが感心も感心だ。」びん「讀賣や大道賣りのでんぼふをして諳に記えたのさ。」たこ「しかし出來ねえ事た。」ちやほ「どうしてどうして、お前達に此のまねが出來るもんか。」竹「出來た所がはじまらねえ。」松「上手になつて、てめへ位な働きだアス。」竹「コレもつとまけや。」ちやほ「いくらに。」竹「二百ス。」ちやほ「そんな二百やなことを云つちやァ納まらねえ。じようだんいはずに元直が六百だ。最うあまりだから、五十損をして五百五十にしてやらう。」ト、いふをりから、十二三歳なるごつちや、流行唄をうたつて來る。「五ッいやまの千本ざくら、六ッむらさき、七つ南天、八ッ山ざくらァ。」ト、唄ひさしてはひり、かみそり箱を出して、ごつちや「髮さんに御無心ながら、此の剃刀を研いでおくんなせえ。」と「御面倒でございませうが、おかみ様がお頼み申します。」ト。」びん「おかみ様の御無心なら、早速承知せずばなるめえ。些と待たつし。」ちやほ「コレ氣障な唄をうたふな。田舍節を有りが

たさうに、おへねえ猿だぜ。」トミ「お前の口ばかりねえ。」トミ「口の達者な調市だ。」トミ「お前に似てさ。」ト三「ホイ一言もねえ。先がもつともだ。」ト三「今此の小僧が唄つた唄はやたいと流行る所、あれは下越後あたりから出る瞽女の唄だの。」ぜ「さうさ。」ト「おつな唄だネ。」鬢「ろ[illegible]がねえぜ。」ト三「あの唄は、人の唄ふのは皆まちがつたんだの。おれが越後者から直傳の紛ひなしを聞つ習る。」ト三「いつそはおれに教へてくんねえ。」竹「兎角あんな事を覺えたがるナ。」ト三「今唄つた文句は、全體[illegible]のさ。江戸の者は殘らずの文句をしらずに、所々を切り拔いてうたつてゐるのだ。昨夜のうた[illegible]國傳[illegible]の眞面目は是れでござい だ。教へてやらうがいくら出す。」ト三「[illegible]もしい事をいふぜ[illegible]り聽いてからの値打さ。」竹「きかねえ内は相場がしれねえ。」[illegible]

の〽「千縮まじり、荒物町の〽染屋の娘、姉と妹を並べて見たら、姉は[illegible]の〽花、妹は[illegible]く白菊の〽花。姉にや少しも望みはないが、妹ほしさに御立願掛けて、一に岩船お地藏さまよ。二には新潟の白山さまよ。三に讃岐の金毘羅さまよ。四には信濃の善光寺さまよ。五には御天の若宮さまよ。六に六角の觀音さまよ。七つ七尾の天神さまよ。八つ八幡の八幡さまよ。九には熊野の權現さまよ。十で所の色神さまよ。掛けた願が叶はぬ時は、前の小川へ身を投げ捨てて、三十三尋の大蛇と爲りて、水を濁してくるのや[illegible]と宣うやれこや

んれェ。」「實か爺さん。呆けた婆さん、小桶で茶ァ呑め、姑が我を折る。」たこ「跡で囃すのさ。」

たこ「呆けた婆さん、小桶で茶ア呑めといふけれど、その前後のことは誰もしらねえ。今この小僧の唄つたのはこれよ。」

○「船の船頭に晒三尺貰うて、わしが冠るにや晒でもよォいが、殿さ冠るにや晒ぢやわアるい。何と染めよか染屋に聽いけば、一に橘、二にかきつゥばた、三にさァがり藤、四に獅子牡丹、五ッい山の千本櫻、六ッむらさき、七ッ南天、八ッ山櫻、九ッ小梅をちらしに染めて、十で殿樣の好きのよに染めた。ほんにさうよと氣がさ揉める。やんれエ。」

たこ「是れも時過ぎると、當時々々の風俗をしるによし。又後の人の慰みにもなる物だから俺は一冊に書留めておいた。まだ／＼いかい事あるが、たんと云ふと諄くなるから、最うよしにせう。」ふやほ「最うタッタ一ッ云つてくんねえ。俺は皆なおぼえた。」たこ「そんならタッタ一ッ、『俺が鄰』を敎へよう。」

○「おらが鄰ぢやよい婿とゥりて、石臼も切る、桶の箍掛ける。人が賴めば大工もなァさる。桶屋もなァさる、左官もなァさる、木挽もなァさる。小さい內から餌刺が好きで、紺の股引さし緒の草鞋、黐箱腰にさげ黐竿手に持ち、下の方から二丁目の、上の方から三丁目の、合はせて五丁目の眞中さ頃で、榎大木に小鳥が一羽。こいつ刺いて喫りやと黐竿取り替へ、黐竿短し小鳥は

高い、そこで小鳥が喧嘩をなさらア。おまへ鳥刺ごんか、わしや百舌の鳥。さうじやないでは
わしやなけれエども、御縁あるなら今度来て刺しやれ。やんれ〳〵」
「是アよく覚た」「一つに付き一歩づゝ締めて三両だけ驕つたぜ。此の外にまだ〳〵私も知つてゐるが、この
唄から初めていろ〳〵ある」「そりやア一冊が僅か八銭、上下揃へても小銅十六銭と御手に入れる。皆此
の唄ふは木の葉のお談義ばかり、ごやう〳〵、お声のよいお方がお唄ひなされば、一人のお慰みにもよし御
用とあらば、唄ひをする内にお求めなさい。紙代板行代が僅か小銅八銭」「さう〳〵呆れた口だぜ」
「人を茶かす男だぜ」「そりや茶かす筈だ。孝経開宗明義章第一だと、なんだか知れぬお講釈で人を
「ナニ、早くいはば馬鹿を教へるのだ」「其教は馬鹿もわかる」「そりや三つ目には博学も内証で
帯だ。真の事だが孔明提灯を持て、楠草紙を直すといふのだよ」「なに孔明といへば、大箱の上に通俗
三国志、コレ〳〵噂をいへば影がさすとは爰の事だ」「ハヽア平仮名付に写したのだな。今では新片かな
の本も写本に直すからいい。斯うするとだれにも読めるし、俺にも近付の字になつていい」「ヘウ口
の胆所がねえ」「へらへら〳〵へら〳〵とあぶら紙へ何とか書いただ」「それでもねめ〳〵、いやはや
うしたうきめはせまじぞ。ヲヽこの本は誰が置いて往た」「ヲヽ土龍様が置けて往つたさ」「あれか、
土龍か。高慢な口振だなう。何をいふか、唐人の寝言許りいつて居るぜ。あれがまア話をするとしたゞ

も同じ事た。ドレ〳〵土龍が本なら唾をつけて穴をあけてやらう。」びん「よさつし。貸本屋から借りたのだ。」ちやぼ「ホイお陀佛ほうちんたん。あやま針の療治、是れにも丸のの字、どう致しイせう。チウチウのチウ。」松「氣違だ。」竹「何れ本氣の沙汰ぢやアねえ。」たこ「滿更捨てた男でもないが。」びん「餘り拾つた男でもねえ。」ちやぼ「婀娜な潮來で迷はせる。」ト、こうたひ、震ひ聲に「アすてゝこ〳〵、すてゝこてんてこてんとん〳〵、アうは〳〵ッ。孔明七星壇に風を祈るッ。」ト、本を讀みてけろりとしてゐる。「デモ醫者の様に風を祈る事もねえス。」びん「馬鹿ア云はつし。」たこ「それでも本式に讀めたが不思議だ。」ちやぼ「讀んで見せうか。曹操横へて槊を賦す詩をス。」たこ「何の事だ。」ちやぼ「俺にも分らねえ。」たこ「棒讀にやらかしたのだ。曹操槊を横へて詩を賦すと讀むのだ。」ちやぼ「それ程知つ居るなら、俺をへこませる事はねえス、字が宙返りをしたり。ぎばを返つたりするから、こゝは讀みにくい。よみくせ徐庶命、徐庶命をウ受けエ、受け、てすで、てすでに、エ、受けて、すでにイ、兵を兵を引きイてエ、引きイてエ出でければア、エ、ければア、出でエけれエばア、曹操。何だ假名を落しやアがつたぜ。讀める者ぢやアねえ。エ、曹操、今はア都、都のウ、内心に、ウ、都の内、エ、心にイ、かゝるなア、エ、心にエエ心に懸る事う、ウ、ウ、なしとて大にイ大にイ、喜びみづウ、喜びみづト、ウ、ウ、自ら〳〵馬にイ乘りイてエ、まつ陸、まつ陸のウ、先づ陸のウ。」大ぜい「ハ、、、、アハ、、、、オホ、、、。」

ぼん「イヤどうもこたへられねえ」ト笑ふまいと思つてもふき出してならねえよ」ぼん「よせ〳〵」ト又早聞のわのいし」ちゃら「おれが読みやうはいいが、書きやうがわるいのよさ」ト又「まだ二百言はねえ」ちゃら「まアまア先づ陸の、エ、先づ陸のウ」ぼん「先刻の重安の様な顔だぜ」ちゃら「東西々々、先づ陸のウ、陣を見ニ、陣を見て、おへのイめへのイ」ぼん「コレ〳〵何をいふ、めつたな事をいふめえぞ」ちゃら「それでも斯う書いてある物を」ぼん「先から読み直して見やナ」ちゃら「大変な事をいふぞ。先から読みはへすには、又しらぬ人に逢つたやうだ。陣を見、陣を見ニ」ぼん「ドレ陣を見、陣を見、雲作物」ちゃら「東西々々。陣を見ニ」ぼん「陣を見廻りだわナ。大概推量して読む物だ」ちゃら「どうして推量が出来る物か。無理ばかりいふぜ」ぼん「俺が関羽と推量しても、字には徳と仮名がふつてある」ちゃら「自ら馬に乗つてトいふから、大方馬士といふ字だらうと思へば、先づ陸のト仮名が付いて居る。向うにも荒神様があるから、推量がうまくいくもんか。其の後〳〵イ」ちゃら「ソレ早からうお韋駄天が、自ら馬に乗つて小便をひよつるやうだ」ぼん「サア〳〵、早いぞ〳〵、推量だ〳〵」ちゃら「其の後は御めに懸け不申に」ぼん「イヤヤヤ、それや違つた、コレ見ねえ。するのやうが斯うちがふ。大々イ御業ヤ」ちゃら「でもない、大船だ、大船だ」ぼん「大船すみます、おひとりさま四文一合コリヤ又違つた。大船一艘、ホヽヽ、一艘馬鹿らしい」たニ「コヤ大船一艘だわナ。大きな船が一艘と云ふ事だ。そこを推量しねえナ」ちゃら「ナニよしねえ」

エ、中々エ、中。」びん「舌切雀ぢやァねえか。」ちやほ「エ、中央にイうかべエ、帥々のウ字イ、書きイたるウ、旗をウ立てさせ。」「こゝらは巧い物だぜ。左右もん祐經。ウンニヤ水塞だ。」「水塞ト、ウ、左右々々、皆ァ水塞に、そぶて、〳〵、傍うてエ、弩伏せ〳〵置き、自アらア。」「ソリヤ〳〵又自らだ、唐人の癖にいやらしく自ら〳〵とぬかすぜ。髭だらけなお姫様だらう。全體みづからトいふものは昆布の事だによ。お前達は上方へ行つた事がねえから知るめえ。俺は此のあと店の番頭さんの供で上つたから委しい。上方の芝居へ往つたとき、中賣の爺が、みづからあがらんか〳〵トいふのよ。ハテナあの爺が食はれもせず、なぜ、自ら上らんかだらう。但し茶が無いから、水から上らんかトいふのかと、種々考へてゐると、『オイみづから下んせ。』と買ふ人があるから、覗いて見たら、昆布を乙に結んだ物で、カリ〳〵嚙みつぶすと、中に山椒が這入つてあるわナ。それから傍の人に、『山椒が這入つてゐるネ。』と云つたら、『山椒が何で這入るぞい。江戸の山椒はあしがあつて這入るかは知らねど、こちの山椒は足がないさかい這入りはせん。昆布の中に山椒の入つてあるのぢや。』と咎められた。俺も一言もねえから默つて居たが、『なぜ又自らといふ。』と尋ねたれば、『ハテ自らぢやによつて、自らといふわいのッ。』いつまでいつても同じ事。ねつから分らねえ奴さ。」○「將臺のウ上にイ坐す、坐すウ、時にイ、建々。」竹「時に建々啼く許り。」ちやほ「東西々々、ア、もう止しにせう、お蔭で肩が

至つて來たか、今まで掛つて漸う六行讀んだ。「[illegible]には種々な癖が有る物だ。土師種は常に鼻が鳴本り樣で分らねえ。」「そりやア何助がお喋りなら本を讀んでは化るっ。」「奇妙なもんだ。其の氣で讀みなせえ。」「俺も讀みてえ、アヽ、腹筋がよつた。」「爺さんそれならお歸り。」「そんなら鳥渡[illegible]する。」「何いけねえ。」「おきやがれ。」「[illegible]は一人[illegible]小僧殿頼んだぜ。」「内へ往つて来るから、いはつし。おかみさんに、何ぞ美味い物が有るならば、押しかけのお客に參ります。」ト。」小僧「アイ。」ト門口を出ると、「ありやりやんりうとい、[illegible]、ぶちやアイおゝし。」引違へて風呂敷包を脊負たる若衆きたる。

[illegible]「[illegible]はましか[illegible]吉公だ[illegible]、[illegible]いられ[illegible]先刻[illegible]八[illegible]來た[illegible]の[illegible]買にねえ、またいらねえ[illegible]間[illegible]には[illegible]間曲[illegible]。」[illegible]間曲[illegible]買[illegible]い。[illegible]出[illegible]。」「これは[illegible]向[illegible]此様な[illegible]が他に[illegible]物が[illegible]た[illegible]百五十[illegible]百も凄まじい。」「[illegible]五十[illegible]て[illegible]二百五十の間曲とは[illegible]は[illegible]持つて往つし。[illegible]にせう。[illegible]年[illegible]に[illegible]使はれ[illegible]を[illegible]れるなら、[illegible]有の[illegible]い[illegible]に[illegible]「[illegible]だよ。[illegible]名前は[illegible]。[illegible]よ[illegible]、[illegible]ト、出て行く。引きもかへて[illegible]の[illegible]「[illegible]う[illegible]ます。」[illegible]お出で、[illegible]」「ハイ〳〵、左様なら、此の間に[illegible]ト、出て行きし[illegible]油の[illegible]と見まで、[illegible]を[illegible]。

▲又一人、ふとりのはおり股引尻はしよりにて、裏見廻りと覺しき箱を三ッ四ッならべて、銅助「此間は御無沙汰いたしました。御機嫌よろしう。是れは。」ト、許りにてさし出す。びん「相變らずおかたじけ。後の三ッは金樣、鐵樣、銀河樣ト、緣から落ちたお乳の人は俺だの。」銅助「ハ、、、。」びん「アイ慥かに屆けやせう。」銅「ハイ〳〵、每度御面倒ながらお願ひ申します。ハ、、、モシなまりやの銀吉さんはお見えなさいますか。」びん「此の頃はさつぱり來なさんねえ。」銅「ハテ困つた事かなだネ。そんなら憚りながら此の手紙を置いてまゐりませう。お出でなすつたら上げておくんなさいまし。もし又お見えなさらずばその儘さ。」いさみ「幕支と見えるテ。」銅「ハハアちと癪だネ。イヤ直に參じませう。」びん「マアいいわな。一ぷく吞んで往ねえ。」銅「今日はまだ山の手へのさねえきやァなりません。モシ些とお出でなさいまし。大分賑やかさ。霜枯の景氣だやァございません。ハ、、、。」びん「こつちは霜枯で冷えかたまつた。ハ、、、。」銅「ハイさやうなら。」びん「内へよく云つてくんな。」銅「ハイ〳〵。」ト、出て行く。何人なるか作者もしらず。御見物のおもひおもひに註をくだしたまはば、なほ興深かるべし。たこ助「ちやぼ公、今度は内證で讀んで居るの。」ちやぼ「あんまり惡口がひどいから默つて讀む。」たこ「音のしねえやうにくすねて食ふのだの。」ちやぼ「食ふといへば何ぞ食ひたくなつた。」びん「新見世の手打蕎麥が出來た。」ちやぼ「横町の木戸際か。拳で押付けよう。」ちやぼ「ム、よかんべい。」びん「又負けようと思つて。」たこ「じぶつくりなしだよ。」ちやぼ「お

前こそじぶくる奴さ。何だ／＼勝つた者が買ふのか」たこ「そんな法があるものか。負けた者が奢るのさ」ちやぼ「それぢやア些と勝手が悪いぜ」たこ「弱い音を出したナ」ちやぼ「ナニ蛸公に奢らせるが楽の寿よ」たこ「ハテ押しがおもてへでやア来たわ。三挙ばらひか」ちやぼ「反詰なく」たこ「一局お出かねえの三挙ばらひの三挙勝負」ちやぼ「よし」たこ「待つたの。鼻脂をひいてとられやすいとしてやらう」人「サア、さア、九、ト」ちやぼ「とうらい／＼」たこ「トといふ挙がある物か。無手とトは打たれぬ法の物だ」ちやぼ「ソリヤアじぶくの三年両八年、俺が法に構はねえから、ト無手何でも勝つ合つて当つたのを勝にするな」たこ「其様な不自由な挙なら否だ」ちやぼ「チヨツそんなら愚して遣れ」たこ「なんの愚されるや譯はねえ。サアこれからだよ」人「二、六、七、三、五、ヨツトあひこう。四、四、ヨツトあひこう。」「聲があはねえ。三。とつて九、五、一六とつて、擲ひます」たこ「ちよつと待つてくんな。おめへ最う擲つたのか。アヽ、挙先が悪い。なぜ斯うだらう。今度が勝負だの」ちやぼ「初発で足を掻くとはこの事だ」たこ「洒落つくせえ」ちやぼ「そんな挙道楽にねらひさま、何とぞ私が勝ちまして、嘲助に蕎麦を奢らせますやうに護らせ給へ」たこ「おんそろ／＼三杯食つたりそばか」ちやぼ「サア来い、これからは鬼に鉄棒、弁慶に薙刀、おれに女ときて、しつかり大丈夫だ。」人「七十、八十、二十、三十、五無手、四無手、六無手、、、両たうな、一は、、、一本も取らずに負けた。、、、、

ハ。」たこ「是れは御馳走でございます。サア〳〵蕎麥屋へ早く誂へて來い。コレ小僧道草を食ふな。そして代もすぐに拂つて來いよ。ア、われはいくぢのない奴だな、きり〳〵尻を端折つて往つて來い。」ちやぼ「チヨツいま〳〵しい。口から蕎麥屋とは此の事だ。」ト、いふところへ、ひとりで口をきき、長口上をべたり〳〵といふばあさま、門口より 袋「すヤ鬢五郎さん、さて〳〵お寒い事でございますネエ。御免なさいましョ。」びん「ホウこれはお袋さん、よくお出でなさりました。」ト、奥の方へ向ひ、「コレなにや、何がお出でなすつた。一寸來さつせへ。金鳴屋のお袋さんが。」奥より女房かけいで、女房「これは〳〵おめづらしい。ようこそお出でなさいました。サア〳〵まづこちらへお上んなさいまし。」袋「イエ〳〵もう必ずお構ひなさいますな。一寸まゐりたう存じましてもネエお前さん、日短かでせわ〳〵しう暮しますから、つい〳〵御無沙汰になりますよ。ネエお前さん。扨先づ、お前さんにもお揃ひなさいまして御機嫌よう。」女房「アイあなたにも、おさえ〳〵しう。」袋「ハイ〳〵ありがたうございます。別して當年はネエお前さん、いつもと申します内にも、とりわけお寒さが強うございますネエお前さん。夫れでもお寒さのおあたりもございませんで、なによりお嬉しう存じます。宿でも一寸お見舞に參りたがつてでございましたが、是れも又お前さんネ、お屋敷樣の御用がおひ〳〵重なりまして、イエサ誠に〳〵お前さんネ、三度〳〵のお飯さへネ、ろく〳〵落ちついてはくださいません程でございますのさネ。それでございますからネエお前さん、家内中がてん

てん辞を致しますてネ。私なぞも見てゐられませんから、女湯お店の方のお手傳ひを致してをりまする前ず
ん、錢湯へまゐる間もございません。イヤ最う誠に／＼、有り難い事ではございますけれども、草臥れ
ますから旦もお前さんネ、ほつ／＼と云つてでございます。夜前なぞもネお前さん、私がさう申す事
さ。此の樣に忙がしいは有り難い事だが、正月物を拵へたいにも暇がないと、かう嘆いた樣だネ
お前さん、ネヱソウいいわネ。何も是れが不自由といふではなし、洗濯物の仕立が間に合はねば、他所
行きの着類を借しまするに繕ふよう／＼と、私が申しましたればネお前さん、旦が申されますには、ヲヤ
着物なとに構はつしやるな。しまつて置くには及ばぬから、マアそつと着ておかまいとネ申しますの
さ。それだからネお前さん、洗濯を致した儘でそつくりと積んでございますのさ。イヤもう其れ故に
存じながらお連ねもまうしませず。何とか思召しもございませうか、存の間でございますから、必
ず必ずお惡く思召しませんやうに。ネエ、、、、今日もネお前さん、是れとて參りまする序に、ちやう
ど五軒御無沙汰を埋めました。是れからネ、お春が所へも久振りで參りまして、其の序には栄助さん
の所へもお寄り申さうと存じます。夫れにお前さん御親は千年、夏右衛門が孫がネお前さん、當夏で
久しうしくほくいたしてをりましたが、到頭はやあつものゝのになりましたさ。ヱヱサヤレ／＼それは
ほんにいかいお力落しで。」ヱイヤハヤ夏右衛門親子の者もがつかり致しまして、氣ぬけのやうにな

りましてネエお前様、お冬が總領娘のお霜ネ、あれがお前さん、相應な所がございましてかたづけまして、今日が里開でございますから、夏右衞門が所から是れへも顔出しを致したうございますシ、めでたい事や何や角やでネエお前さん、誠に／＼氣の休まる間がございません。ナヤほんに藤さんはお達者でございますか。」女房「ハイ有り難う、至極丈夫でございまして、只今まで何とも申しませぬのさ。」婆「ヤレ／＼それはほんにお仕合な事でございます。子供衆は何はおけ御丈夫樣が一番結構な事でございますよ。お屋敷のお妹御樣もおさえ／＼しうお勤めなさいますか。久しうお便りを承りませぬ。」女房「ハイ有り難う。」婆「お序に宜しうおつしやつて下さいまし。ホンニ／＼一寸參つてどうせうかうせうと歌に許り唄つて、漸う今日參じました。ハイさやうなら折角御機嫌よう。」ごん「まアよろしうございます。」婆「ハイ、いエもうさういたしちやアをられません。只今も申す通りネ、トホ、、、、。猶又來春おめでたく。」雨人「ハイ／＼、あなたにも、ハイ／＼、／＼／＼。」婆「ハイさやうなら。」雨人「ハイさやうなら。」ト、立ちかゝる。○たこ助ちやぼ八雨人、先刻より彼のばあさま一人にてしやべる事をきゝゐたりしが、たこ「コレ能く多嘴る婆さんだの。」ちやぼ「人に口をきかせずに、うぬ獨り口をきいてポイと歸つたぜ。」雨人「世話がなくていつそいいのス。」ちやぼ「何とやらでございましてネ、角とやらでございますからネエお前さん、オホ、、、、何とやらいたして、どうとやらいたしますからネエお前さんッ。」たこ「流石のちやぼ助

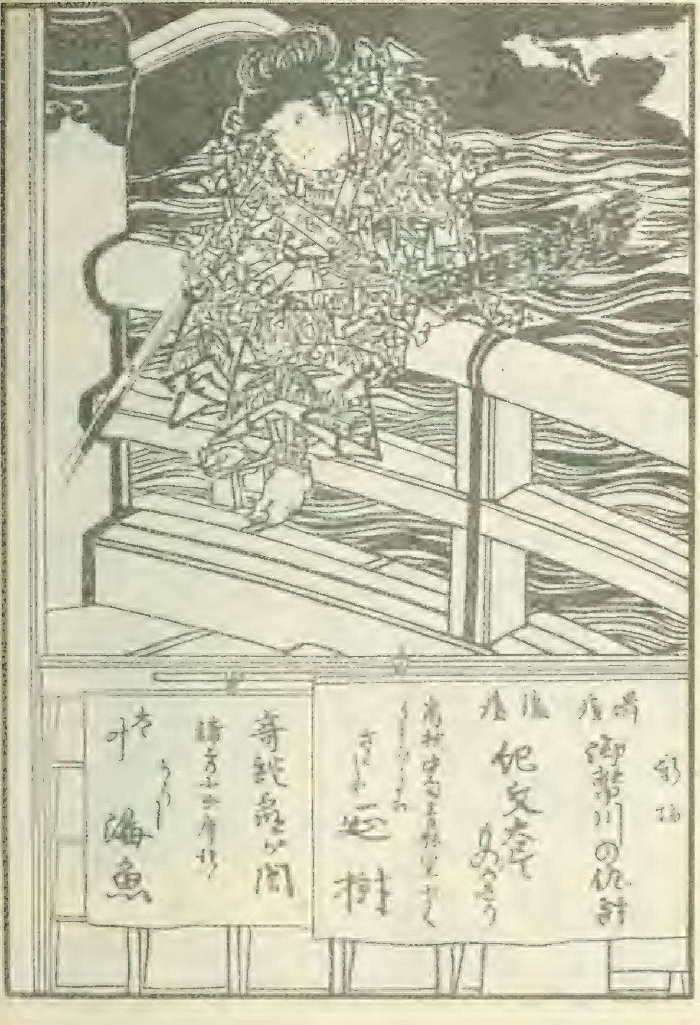
も、あの婆さんには閉口だ。」あやま「ネエお前さんノ＼。」

俗談平話のをかしみある事どもをひろひあつめ、人情のありさまをくはしくうがちて、來春嗣いで出す、式亭三馬の、叢市を俟たば幸甚々々

柳髮新話浮世床二編卷之下　終

文好む幼き人を心當てに、風雅でもなく洒落でもなく、繪師と作者と板元と、三人寄ればいつとても、正月心の新板三昧、久しい物と儕の、人さへ笑ふ門松も、東錦繪畫本の類、明ける春依他の軒より、春めく事の勝れりと思ふも己が好きの道、いらざる世話の口入れして、畫工と作者の取次ぎには、またしもの事板木の催促、作者へ仲人其の上に、摺りも仕立ても頼まれて、請け取る頃は夏の日の、永いを憑みに油斷して、何れ歳暮ぎ月見過ぎと、一日遁れの昨日今日、我が拙著の草稿だに、前後揃はぬ其の中へ、他の作者の著意けるとで、かてて加へて淺草の、兄貴にいつも泥くさり、觀音薩埵の利益を蒙つて、作料取つた其の跡では、本文すらも書くがうし、まして序文や跋文は、垣根の外の心地ぞするると、とつてもつかれぬ挨拶を、聞けば板元やつきとなり、忽ち腹を橘町、南仙笑が投遣りから、起つた事だと幾度か、無理な小言も朝夕に、叱れては易き串作者、文榮堂に頼まれて、柳髮新話の三編目を、本丁庵へ言ひ入れしは、三年已前の事なりしが、近年先生多病にして、風日の加減も未定ら、暫く筆を留め置くのみ、なんなら今年は下剃で、束ねて貰つて置き給へと、教へのまゝに筆採るは、瀧亭鯉丈が床預り、其の主人に置かれし、序次の一札卸作と、心に似寄りの花押を、曲りくねつて誌すものは、三馬先生の門下に連なり、三鷺と呼ばれしなまけもの、師匠の進めに隨ひて、未熟ながら二世楚滿人、本丁庵の硯をかりて、敎訓亭に筆を採る。

癸未の春　　　南仙笑



柳髪新話浮世床　三編上卷

瀧亭鯉丈輯

浮世は實に[illegible]の升をかれたるとは、昔八丈の昔風俗にして、今は[illegible]なる浮世床、人の來る人と出る人と、出家、侍、職人、通も不通も一ッたばね、頭髪と[illegible]て、おつう[illegible]結と人の心に合鏡の、かわく間もなき[illegible]は、あたりになる[illegible]の附合、[illegible]に結て[illegible]「今日は親方はどうした」[illegible]で出ました」[illegible]「ハヽ、そこで留が、獨吟か、[illegible]元結も[illegible]ねえのこ」[illegible]「そこらへ又類員様が」[illegible]身にもなって仕事してみろ、有ッ難い事だ、手前達がそりやらで此の床の清剃は、及びもねへ事だ」[illegible]髷があるかるには、[illegible]床の[illegible]に上橋があつてこそ、湯殿行者の[illegible]て、此の浮世床といふ所へ魚類十町の紋をば[illegible]で書いて、下り[illegible]の屋臺といふ障子でなけりやア、うつらねえ」[illegible]「其の土橋も、株主のかゝり[illegible]」[illegible]「其の日の[illegible]評判[illegible]仕事を、[illegible]

ツしやにするやうにしろ、ホンニサ、浮世といふ名代で、まがり形に、かはりも勤まる、人様も承知してくださるのだ、わがきりやうで、二十八文取ると思ふなよ。」留「そりやアあたほうサ、わたしの美顔でするのは、女の方許りサネ。」馬「ム、押しの強い、其のつらがきりやう所か飛龍のやうだわ。」留「飛龍でも、五雨でも、なぜか女がうれしがりまアす。」馬「コレ田舎婆アを見る様に、立ちはだかつて、たれやアがる、小ぎたねえべらぼうだ、ヤヤもう結つて仕舞つたか、でえぶながくつたナ。」ト、詰たいおつて見て「ム、今日は、氣があらたまつたかして、向疵一ツカ所で、外はぶ難だ、有りがてえ〳〵、イヤおつと根が左へ寄つたやうだぜ。」留「ヘン根は真中々々、なあきんサアござい〳〵ッ。」なあ七「イおれが番か。」馬「この小僧めえ、聞き取り学問でしやれるわ、ヘン辻寶引の止メになつたは、かれ是れさつちう歳からにならう、まだ留なぞは、めぐみもしねえ時代だア。」留「しらねえでサ正月のうちは、ていそう錢を、取られやした。」馬「手前何歳だ。」留「エ、今は取ツて十七だがね、此の前の世でさ。」なあ「ヘンとんだ三世相だア、其の時ボコボンを三つ盗み取つたるつみにより、現世にては、尻でボン〳〵音をさせて、たび〳〵はぢをかく事ありツ。」留「そんな事をいふと切りやすぜ。」なあ「キツト桑原々々。」隠「イヤ〳〵おれはもう一日、しんばうしよう、留が手にかゝるはおそれる。」留「どうぞさうしておくんなせえ、わたしもお前の天窗にはおそれる。」馬「べらぼうめエ。」留「それだとつて、

ミこの隅に、寝そうしたへ据いたり、前へかいたりする、又前もめぐらしいちやアねえか、[illegible]
寄アねえ、職工をやめた、其の代り、たば[illegible]の時は、置いて行つて、出来た時分か借どこ、取り
にきこされるのから調度だね」[illegible]なしいわえ縫つひりやりて[illegible]」にふらく[illegible]
も、[illegible]、明けては、[illegible]まだれるけつ[illegible]
に[illegible]
れたく[illegible]しようんなさつた」[illegible]、前てぞく[illegible]、戸に[illegible]
どろきこ
すこし[illegible]こさうく引きおこして内へいれる。[illegible]ここそ、したがはしなさら[illegible]
たんとも[illegible]どこがいたみ[illegible]
えう」[illegible]、[illegible]しか、なくこ[illegible]、、、[illegible]
ほんまで[illegible]、[illegible]はねえ、ここらが[illegible]早く[illegible]」トあせる故、[illegible]
[illegible]
見[illegible]なる事があるものか、[illegible]
しろ、[illegible]本統に、見ゆやせんぞ、[illegible]ある事はあるが、[illegible]
[illegible]したのだ」[illegible]はやく[illegible]見な[illegible]
ハ、、、、[illegible]真に[illegible]、ハ、、、、、、[illegible]酒落たらくしやうだ」[illegible]酒落だ、[illegible]」

ト、かた足おりて表をのぞき、「エ、いま／＼しい畜生だ、留、見てゐる事があるものか、おつ散らしてとつてくれ。ア、、、もうかなはぬ、ばら／＼にしをつた。チヨツ、なさけねえ事だ。」鬢「アハ、、、、。」長「ヤレ／＼今日は持髪にせうと思つて、大事にして置いたのに、おへねえ事だ、是非なく留が手にかゝるのかえ、コレ早く毛を見付けて、一ッ拵えてくれろよ。」鬢「今は忙がしいから、夜なべにでも、こせえておきやせう。」馬「馬鹿アいふな、晩まで、曲なしに居られるものか。」鬢「ぜんてえ、くさりでつないで、置きなされば、いいに。」長「べらぼうめ、天窓へくさりが、つく物か。」鬢「成程、天窓だッけ、わたしやア、薬罐の蓋のつもりだア、ハ、、、、」長「ときに鬢公はどうした。」鬢「今日は太郎買ハすナ」長「フン古風な御挨拶だ、トヤため公だの。がうぎと、あふむいてゐるから咽佛が鼻に見えて、妙な面の人だと思ッた。」「ホア、ノ、、むだを云ひッこなし、今が大難所だ、こゝで、ひつ掛られると、即死だ。」トッ、とりか、ヤレ／＼うれしや、先ア命に別條はねえ。」鬢「ソレ正面から御らうじろ、やつぱり妙な顔だらう。」ため「何だ此の野郎。イヤ妙といへば、惚公、案じはついたか、題はなんだつけノ。」鬢「おれは寅よ、お前は。」ため「おらア申だが、ちつともあんじが、つかねえ。」馬「なんだお前方は、おれは寅だノ、おれは申だノと、袴の裁ち賣りを買ふやうだが、なんの話だえ。」ため「何、茶番の題サ。」馬「ハ、ア聞えた、題は十二支と見えるナ、それは、お楽しみだナ。」

どこの隅に、[illegible]うしろへ据いたの、前へかいたのする、大師もめづらしいもやすね[illegible]
やすね、[illegible]もめた、其の代り、[illegible]の時は、置いて行つて、出来た時分小僧どもを、[illegible]
にまごつかれるから中買[illegible]ねエ」[illegible]しいわえ[illegible]ひりやす」ト[illegible]にもなく[illegible]
も、[illegible]より、ぐわらりと、明ければ、脊中ハはづれて、まをのけ　鬼太郎「エ、引だれどびつくりさせたナア」内に
[illegible]
[illegible]、[illegible]ぞ〳〵、[illegible]
[illegible]ここぞ、[illegible]はんなさらねえか、[illegible]
も[illegible]どもはし〳〵[illegible]　鬼「どこかいたのさ、[illegible]
よ「[illegible]〳〵[illegible]が、[illegible]しが、[illegible]　鬼ハ、、、、、[illegible]
は[illegible]びた」[illegible]ここではねえ、[illegible]早く〳〵」トあせる故、留吉は[illegible]
れ、[illegible]〳〵、[illegible]ふのつぶ[illegible]、[illegible]に[illegible]か、[illegible]には
見[illegible]」[illegible]ねえ事があるものか、隠するな」[illegible]こんな[illegible]し
てみなさる[illegible]本統に、見せやせんぜ、すて〳〵ある[illegible]、ある事はあるが、もういけねえ〳〵」
鳥[illegible]うしたのだ」[illegible]〳〵、はやく出して見な」[illegible]こんなにて、[illegible]
ハ、、、、」[illegible]真にすて、ハ、、、、、[illegible]洒落たるくしやうだ」[illegible]洒落だ、でしつ」

ト、かた足おりて表をのぞき、「エ、いま〳〵しい畜生だ、留、見てゐる事があるものか、おつ散らしてとつてくれ。ア、、、もうかなはぬ、ばら〳〵にしをつた。チヨツ、なさけねえ事だ。」鶴「アハ、、、、。」惣「アハ、、、、。」留「ヤレ〳〵今日は持髪にせうと思つて、大事にして置いたのに、おへねえ事だ、是非なく留が手にかゝるのかえ、コレ早く毛を見付けて、一寸捕へてくれろよ。」鬢「今は忙がしいから、夜なべにでも、こせえておきやせう。」長「馬鹿アいふな、晩まで、曲なしに居られるものか。」留「ぜんてえ、くさりでつないで、置きなさればいいに。」隠「べらぼうづら、天窓へくさりが、つく物か。」鬢「成程、天窓だツケ、わたしやア、薬罐の蓋のつもりだアハ、、、、。」惣「ときに髪公はどうした。」留「今日は女郎買いさ。」惣「フン古風な御挨拶だ、ドヤなめ公だの。がうぎと、あふむいてゐるから咽佛が鼻に見えて、妙な面の人だと思ツた。」長「ア、、ノ、むだを云ひッこなし、今が大難所だ、こゝで、ひつ掛かられると、即死だ。オツト、えりか、ヤレ〳〵うれしや、先づ命に別條はねえ。」留「ソレ正面から御らうじろ、やつぱり妙な顔だらう。」なめ「何だ此の野郎。イヤ妙といへば、惣公、案じはついたか、題はなんだつけノウ。」惣「おれは寅よ、お前は。」なめ「おらア申だが、ちつともかんじが、つかねえ。」隠「なんだお前方は、おれは寅だノ、おれは申だノと、鵺の裁ち賣りを買ふやうだが、なんの話だえ。」なめ「何、茶番の題サ。」隠「ハヽア聞えた、題は十二支と見えるナ、それは、お楽しみだナ。」

早句苦しみア、外にいゝやうもねへやうに、馬鹿々々しいのさ」「ナニサ、馬鹿々々しくてもいゝ、発句なぞで、苦しんでるよりやア、開達へかねえりそして、狂歌といふやつは、旨くいけばねへといふ、きたきゝかけからかつたり、絶句したり、まごつくのゝ可笑しくつてよし、とうちもいゝやつだこまへそのやうな道へねえ、隠居さんもお好きか」「イエサ好きでもねへが、若い時分には、狂歌と川と、雑俳の川柳のほてから、一体のはて、けんに流行中、いかほえ咄はといふやうさ」「モシ、そのやゝ丸言うすに好きだつ、隠居だが、御家へ出たやうだ」とおかやわたしの存じ、趣向どう聞いてみんなきます、どうもわたしの詩になうねえやうだ」「ヤ、こそうといふ家だネ」「しかし道中、題は十二支で、わたしが取つたのが、寅でございやす、所が、趣向様にて、発句の題を出すに、ざいまは、わたしとなあた隠居りや、そこで息子でなけば、いつはた宗匠で、俳名もとり、発句はさう上でもいゝといふ仲間で、これまでにとうとうおまへでもねへから、けふは、黙だ、皆で出すくらゐなら、いつも真似をするのかへ、四文か六文であげようといふ仲間で、皆少しやるが、ふうふ最後にけねへやうに、おもしろくと、こう旨くは、いかねへもんだ」「一ト」「ハヽヽヽヽ」「そこで発句はなた六十で、酒天の戦場の脇を一ト組出す満さ」「デハ」「そこで見よ、當るその日には、思ふんや、ふきやうや、何か、出鱈目に並べて、又毘沙門様とか、清正様とかへ願がけをした所が、

夢中にをしへがあつたとかいふ、古いせりふで、さる薬種屋へいつて、寶物にして有るのを、無心して来たとかいふ筋にして、扨をすとめすを、御覧に入れます。勿論めすの方は、澤山ござりますが、男はどうもふつていで、一匹しかござりません。それも皆、ばら／＼になつてをりますから、そつと集めて参りました。トいつて彼の駒の箱を出しやす。」鬢「フウ成ル。」鬢「そこで蓋を明けて虎と申すものは、承りおよんだ通り色は黄い物でござります。ト箱からぶちまけて見せて、先づこれが虎の王でござりますと、王將をだしやす。」鬢「なる／＼。」鬢「これは眼でござりますが、なる程眼は金將の樣でござりますと、見せやす、根爪でござります、爪は則ち銀でござります。と銀を出して見せて、しかし是れを並べて見ますと、つめはいろ／＼と、おもしろいのが出来ますネ。」鬢「ム、／＼いいわえ／＼。」鬢「扨また毛でござりますが、是れに餘程大きい歯と見えまして、毛がひどくのびまして、桂馬になりましたが、此の毛のうちにもいろ／＼、かういふ歩が澤山ござります。扨是れから、女でござりますが、わたくしは、女も虎とまうすかと存じましたら、めすは、兵だとまうすことでござります。トやらかすつもりだがどうでござりやせう。」鬢「なる程／＼、ア、いいあんじだ、感心々々、おらがわけえ時分より今の茶番は手輕くッて、趣向がたつぷりあつてどうも妙だ、後世恐るべし／＼だ。」鬢「何サどうでもいいといふ所はねえが、なんにしろ今夜の事を、今朝鬮を取ッたから、ゆきわた

る樣には出來ませんぜんで今では、聞傳一つへ、いろ／＼名を付ける事が流行やすが、それはとつはさむ「さうしてさう云ふ事でありやすか」「イヽエ、少し今のおまへの趣向は、マア其の節の若番だ、マア、いうもいい／＼」「ヘイ、、、、」「隱居さんが聞と、聲あこばかりのなさる事、外にもう一つ、何ぞいい趣向が有るなら、數へておくんなさいまし」「どうして／＼、此方およびもねえことだ」と少しとすもの事に、其の趣をよう／＼「たとへ、どうだらう」「さうやれば妙だらう」「その北の方へは、巳が朝を「へ、、、、こんでさう」「ヘン今わたしが言つて見ただけ、北國とかつてくれ」と前さんの正宮は通用為ねた」「ハ、、、、口の元へ行くと野郎だ、いま／＼しいことやすが、、、、ともいふ事にッけネ」「へ／＼、聞を、、、、ませんがいい事をいふ所さ」「ヘイ、、、」「何と云ふれるか」「それ、たわいもねえ、だとつてエ、、、云ふ評判もすはねえだと申す事で」「ヘイ、、、さう／＼、それとても、寂いい所でも、、、、お前は何でございますに、いふじやの貢がは好い／＼では、お屋敷にこの事はませんは、から、行燈されるなら
す、、若い人で云ひますと、、、、もう／＼、面白くなつて参じます、ひとつここにいますと、眞にこんなませんが、、、、此にはなる土中で事でございます」「とやつてはまうだらう」「私、、、、何時もで、、、これは有の體も／＼、、、二歳段に、いいい安楽になつた」「その御空るんですもんに、、、、断然して見るがいいぜ」と云ふ私やアまだもつとも事じゃないが、、、ほんどざりへておなんなせえまし」「ヘヽ、、、と云うして

己に、ろくな事が出来るものか、わしらが案じは流行におくれて、とても役には立たねえ。」なめ「どうして〳〵どうして、今落ちをつけなさつた鹽梅は、今風で妙だ。どうぞお願ひだ。」留「小僧と目くらか。」なめ「フンとんちきめえ。」留「ヘン私も一番やらかさうか、茶番位お茶のこだ。」鬢「ム、今夜あゆばつし、茶番と草履番の人がねえといふ事だ。」なめ「イヤ留がすると、景物いらずに十二支を獨りでするといいことが有りやす。マヅおやかたに居候といふもんだから「ねえうち」と二ツサ、そこでつらが寅で、目の赤い所が兎さ。」留「ヘンしつぽが蛇か。」鬢「仕ごとをして居る所がたつみさ。」鬢「ム、道具が馬で、ひつじはもちめへ。」なめ「智恵が猿で、エヽト何が鳥だらう。」鬢「鳥か、有りやす〳〵、取りにげをして内に犬か。」なめ「ム、イイ〳〵、そこでとり逃げといつた處が、百か二百の事だから詫言がすんで、歸ると犬と思つたら、猪でござりますはどうだハヽヽヽヽ。」鬢「ハヽヽヽヽ。」留「フン、てん〴〵の茶番せへ隱居さんにをしへて貰ひながら、人の事まで大きにお世話だ。」ト、いふ所へ障子を細目にあけてほゝかむりをした人、しわがれた聲にて「ごめんなせえ、まだつかへて居ますかネ。」留「ハイおいでなさい、モウ此の跡でござります。」畫「コレ其の跡はおれだらう。」留「おめへさんは、どうせ遊んでゐなさるだらう、そしてまだ毛を見付けねえでは、取りかゝられやせん。」畫「それだとつて、いつまで爰にゐられるものか。」畫「そんなら先へお歸んなせえ、出來るとあとから、とゞけてあげやせう。」長い人「わたしが届けてあげ

[illegible]

はれ眼縁になつて、ほろり／＼涙をながす様子だから、こいつはんべ夫婦喧嘩で、今朝追さゐけに里へかけ出しだらうと、先つぼしをつけやした。それから並び床の前を跡になり、先になり橋の中ごろまで行くと、欄干へ寄りかゝつて、川の中を見て、頻りに泣きながら拝みやす。わたしも一二間行き過ぎたけれど、どうもへんだから、立ち淀んで見てゐると、兩方の袂がぶらつく様子、どうもがつてんが行かねえから、立ち戻つて、そつと袂へさはつて見ると、兩方へ石がいれてある。こいつ見のがす所ではねえ、たかがこんな事、たしかに譯もねえ事で、不料簡を出したらうと。」三「ムヽ、違へねえ、氣の狭えもんだからな。」三「ム／＼そこでどうした、南無阿彌。」与「それからお聞きなせえ。わたしもこてへ兼ねたから、後からしつかり押へて、お前どういふわけか知らねえが、大きな料簡違へだ。マア此方へ来なせえナといふと、物もいはず頻りに身をふるはして、かむりを振つて、欄干へすがりついて、動かねえのサ。」三「なんまみだ。」隠「隠居さんはお談義を聞きなさるやうだ。」と女房も障子をあけてかほを出し、三「そこでマア、それから助けてやんなすつたかえ、早く仕舞が聞きたい。」与「サレバサ、おれもそのやう、ひや汗が出るやうだが、大方それまでにしたから、助けは助けたらうが。」「所で、助けねえかおをかしい。」与「コレハしたり、何をかしい事もねえ。なんまみ、そしてどうしたのだ、中は打抜いて仕舞を早く話さつせえナ。」与「ハ、、、、サア／＼御高座前へお詰めなさい。」三「講釋だと爰で

ンさふくか、明礬といふ處だネ。それならうまで話しやすう」と言かけ出し講釈といふもんだから引ッぱる口は□るめえ」と言葉は□□の隣で、□つて□聞きなさいよ、ッさそれがいまうしたよ」「ちぎる、いたこの隣りやうだ」と言ふそれから皆く出し合つて聞こうと、なんぼ聞いてもせで人立ち、三人たちたんく人立ちして来たから、是れまで外聞が惡いので、いふ事を聞いて内済ふて仕舞せえ」と言ふ、さう〳〵」と、今度は見世物のやうに見物にされねえ」と言、さう〳〵」と言ふりを聞いての上で、別に変はれえ事ならさ、無理には留めめえ」と言ふ「さう〳〵」と、お役人ん、威張がおちやした」と言、さう〳〵して」と言ふ、さう〳〵わやくわやくとい、昨から…「ンでアナ何自文面が下ッた」と言ふ「なんまふ、ノウそこで」と言ふ「そこで女はもの言はず、わく〳〵と泣き入ッて、ぉ其それやあ其の背中」ッと言かはいさうだネエ」と言ふ「側の人立ちがして、外聞が惡くって、こてへられねえから、わたしも少しこはなくれた、「ョッ傍のこはいな、あれがかう留め聞ッちやアこは」と言「どんな事か知つたの」と言「聞きたいネ、お聞きな」と言「近所隣見物のがす事はならねえこと、帯を押へてウウ〳〵と引き捕ッて、無う向う渡ッて、先づ家見世へ引き摺り込んだ所が、跡からそろ〳〵人がついて来て、表店の前へ黒山の様に集まつて、種々な讒言をいふやら、わたしが事を亭主だらうなんぞと、口々に評判しやアがる」と言「亭主と見られた所はありがてえ」と言「なに

ありがてえ事が有るものか、外聞が悪くツて堪へられた物ぢやァねえ。そこでわたしがいふには、「おめへはマァ、よく／＼な事でも有らうが、まさか死ぬ程の事でも有るめえ。まづ氣を靜めて料簡を替へなせえ、身持にでもなつたのか。」といつたら、其の女がやう／＼すこし顏をあげて、くるしげな聲で、「わたしは死ぬのでもなんでもないッ、持病の蟲歯で夕ア夜通しまんぢりともせず苦しんだから、戸隠様へ願掛ケをしてゐたのでござります、モウ／＼口を開くと、猶つよく痛んでノ、」ト、又ほろほろ涙を流して泣きやす。」[illegible]「フム。」[illegible]「そんなら又なぜ、袂へ石を入れて居る」と、聞いたら、「何是れは石ではござりません。」ト、出して見せると大きな梨子が二ツヨ。」[illegible]「何だ身投ではねえのか、イヤ馬鹿々々しい、是れ見さつせえびつしより汗になつて聞いてゐた。」[illegible]「いかな事でも、餘りお前も、先走つた事だねえホ、、、、、、。そしてまアどうしなすつたエ。」[illegible]「なんぼむし歯が痛えとつて、些とやそつと口のきけねえ事も有るめえに、向河岸まで行きもしめえ。こりやァ、おまけがありさうだ。」[illegible]「そりやァマァ少しはおまけもあるとしなせえ。それから其の女がいふには、「どうも人立ちがして外聞が悪くつて、表へ出られねえ。」といふから、是れも尤もだ、私さへ人に顏を見られるがつらいやうだから、女の身では無理はねえ。チヨツどうする物か狐にだうかされたと思つて、茶屋に頼んで駕を一挺いひつけて、淺草まで送らせて、三百五十文おたふれさ。何といい面の皮ぢやァ

ねエかえ。[illegible]、顔色が悪いから、[illegible]

り先のそんなか、[illegible]気色が悪からう。[illegible]何にしろ[illegible]

柳髪新話浮世床三編上巻　終

柳髪新話浮世床 三編中巻

瀧亭鯉丈述

鬢「ときに惚さんの下剃の内、隠居さんのかつらにかゝりやせう。しかし黒イ毛ばかりでよからうかね。」隠「無くば、どうもせう事がねえが、願はくは少しでも、白を交ぜてえもんだナ。」鬢「白を交ぜるよりいつそ田舎味噌にしなさればいい。」長「ハヽ隠居さんはチヨン髷本田に、青黛の青味を見せて、麦ツ粒の吸口でやつとすふしに、しなさる氣だらう。」鬢「ヘン丸で、白髪で拵へたとつて、根を割根にして、兩方へひらいて置くものヲ、とても地髪とは見えるものか。いつそ黒許りもやけでよからう。」長「そんなら白で根隠しを拵へて打ッたらよからう。」隠「なんだかはや、おれが天窓も様々なものになるぞ。」留「その中にも、禿くわんの見立が一番いいネ。」隠「また此の野郎、しやばり出るよ。エヽもう黒でもぶちでもいいから、早く拵へて下せえ。」鬢「モシぶしつけながら、いつそ法體なさつたら、さつぱりしてよささうなもんだネ。」隠「されば、そこが親の馬鹿が、いくつになつても、倅は子供のやうに見えて、身上は渡しても、やつぱりこちらが楽をする心はなく、些とも手助けになら

うと思へば、まさか坊主や俗をふり捨てて、お屋敷がへも出られめへ。「撞なら取ッてすてるこ
くめへ」鳶「トいふは世を忍ぶ仮の名、本名はやつぱり新造ッ子にでもかゝる所作サ。」馬「馬鹿な面
な。新造どころか、ごろツちやに生えた行屈の様な面になつて、睨ぶしをつけた位で口に出く話い。
生のおれが色事といふ柄か」鳶「江府町でなし二十日ぶりしかに」馬「阿弥陀様は南無阿弥陀仏
馬「ハヽヽくゝさ阿弥陀何宗旨だとつ」鳶「宗旨にかまふものか。切支丹でさへなければ、そして難有い
又ヤ疝でもいゝ顔だ。われ／＼より難い顔がありさうなものか。それが出るものなら、神様に頼らず、何
でもあるめへがいゝちや、ねへか。それにすい、あれは何宗だから、観音様を拝ねへ、見下げたな／、
ヤレ堀の内へは、詣らねへのと、かた意地を張るのか、気が知れねへといふがおれの料簡へ水
の言葉進退を、一寸途に聞きかじつて、かたじやう頭に溜えのだ。何にもしられねへ。仏は
に和忍辱とやら、自ふは忍辱とやらのお経をすぶた、とかく物事すなほにして、邪慳、慳貪は、まつくおれたち
ひだらう。それにや、ともすると、他宗他門を譏りちらして、腹をたてゝ、いけもしねへ耳嬉安で、
宗論を始め、あげくのはてには、はッつけあ、畜生めだ。それはおの勝よ、極楽往生はおゐてまへねへか
ら、なんでも口の達者なやつがいゝ。勝つのたから、負けたほうで屈服はしねへからの事だ。ええの
大俗のぶんざいで、仏法の広大な訳がどうして知れるものか。それよりは先祖から伝はつた宗旨を守

つて、外の宗旨で、地獄へ落ちようと、それは其の人の、因果だと思つて、人の氣にさからはず、我が宗旨を大事にして居たら、よささうなもんだ。マヅ斯ういふ歌があるわ、分けのぼる麓の道は多けれども、同じ高根の月を見るらむ。成程是れはちげへねえ。佛の大慈大悲で、一から十まで、竝べて置いて、サァどれでもすいた處をはつてこい、横から來ても、竪から來ても、後生といふ道へは入りさへすれば、まさか人の寢首もかくめえ、盜賊もしめえ。又心さへ實正ならず。また歌だが、心だに誠の道にかなひなば、祈らずとても神やまもらむ、スヽ現世があんのんなら、後生に間違はねえはずだ。」鼻「そいいぢやアねえかえ、丹精して、やんなせえナ。」長「うんにやヨ、まア道理が。」鼻「ハアテ、ようござえスア。」鼻「心だにまことのみちにかなひなばスサ。」鼻「田を見めぐりの神ならばか。」留「中に天神様てござるツ。」ト、いふ所へ障子をあけていりくるは、長「太田道灌ハテ、よくよんだナア、パタアリ。」ト、力んでござる。鼻「色々な役者がをるわ。」なま「イヤ役者といへば隱居さん、茶番の一件はどうしてくんなさる、壁と考へておくんなせえナ。」隱「ほんにさうだつけ。なんにしろ、爰ではさうもしくて、案じもなにも付きはしねえ。」なま「そんならしばらく奥へとおつこもりとしやせう。」鼻「なんだ茶番が有るかえ、そいつは。」鼻「そいつもこいつもいいから、早く髷を拵へさつせえ。」鼻「イヤそれだが、茶番なら。」鼻「ハテようござえすアナ。」鼻「チヨツ、すべくに返禮をくらッた。」隱「隱居となめしは」鼻「惚公詰つて仕舞つた

ら、これぢやア来ますめえ。」[illegible]出来しるものか、[illegible]日上[illegible]
[illegible]の事にはよ。」一[illegible]八[illegible]いやおもしい目に[illegible]
目なつた下駄を見れこの通り。」[illegible]はよ[illegible]見て[illegible]
たよ。」[illegible]「伊勢屋の前までゆくと、[illegible]
いやアたア。」[illegible]うんにや、湿[illegible]ところでは[illegible]
を見回した所が、其気も見えねえから、[illegible]を拾つて持つて来たが、[illegible]始終[illegible]
[illegible]しなしやうだ、[illegible]
いまよ」[illegible]生麩[illegible]大一丈[illegible]
[illegible]、よく付く物だ」[illegible]付くと[illegible]
[illegible]ども[illegible]九恩兵衛が[illegible]
見たつもり。」[illegible]いつは有りかでえ、[illegible]
た[illegible]ふんだ[illegible]追ひ込む[illegible]
あえい、、、、。」[illegible]笑ひ事[illegible]有るか[illegible]被いて[illegible]
住[illegible]五六年[illegible]二十日[illegible]

合はねしまつた人サ。」ト、いふ所へぐわたり、と下駄の音がするゆゑ、鬢「オツト歸つてきたぞ、エヘン、扨々きびしい殘暑だね。」鬢「左樣サ、まことにむし／＼と寒じます。」鬢「コウ／＼九惣兵衛が所にはねえぜ。」鬢「ハテナねえはずはねえが。」鬢「コレ、何だかをかしな顏ッ付キだが、ほんたうか。」鬢「うそと尻餅はついた事なし。」鬢「それでもどうかたかしいやうだ、生藥屋でも何だか、せゝらわらッて居たぜ。」ナウ鬢公おめへ聞いた事だ有るか。」鬢「いいえ、ついぞ、ワシヤといふものは聞かれねえ。」鬢「ア、此のべらぼうめ、かついだにちげへねえ、小鼻をひこつかせて、心の裏で笑つてゐやアがる。」鬢「何、空言をつくものか、勿論おれもためして見た事はねえが、なんでも繼物には丈夫さうだからヨ。」鬢「ナゼ。」鬢「それでも、ワシヤいつまでも離りやせぬといふことが有るぜ。」鬢「此のべらぼう、コレ／＼／＼コレ。」鬢「アハ、、、、、、、コア、くすぐつてえ、離つた／＼。」鬢「エ、あぶねえ、ごはつちやアいけねえ、コレサ仕事が出來ねえ。」鬢「構はねえ／＼、此の一件のすむまでは、暫く家業をしとめだ。」鬢「ハ、、、、、、イヤすつぱり、ひつかつがれたね、こりやアくやしからう。」なにかわからぬこわいろにこ鬢「おのれ等ごときの瓦ッひり野郎に、たばかられる我ならねど、二朱の下駄を踏みかき、きん玉つるし上り、心轉動の折からなれば、斯くやみ／＼とひつかつがれたが、チエ引ざんねん。」留「びんしけんぢやナアッ。」是れは前篇に來りし儒者の口眞似故、外の人はしらず、近郎と留が樂屋おちなり鬢「コレエ／＼いゝ加減にふざけろえ。」鬢「サ

「ちょッと御休みなさいやうなら」甲「チョッ、いゝえましたへ、[illegible]」

甲「ヤンヤで御休みなさい[illegible]」甲「[illegible]丁兵衛の邪魔で御出来やしない、さうかなと[illegible]」

甚「それ[illegible]お花さんもつて[illegible]」甲「さてそんなら首尾[illegible]」

「[illegible]」[illegible]

じゃ下さりまし」[illegible]

[illegible]

甲「へ、、ん左うこととも、先には来たやうに見たけれども、どうも[illegible]

して見るのに、ア何と云ふ」甲「手紙のやうだ」甲「手紙は手紙だが[illegible]上書が[illegible]」甲「それが

読めねえのか」甲「オヤこまった[illegible]読めねえ字だねえか、お前さんと[illegible]なんと書いてあった」[illegible]

よせすば、お前は外で、[illegible]、イヤいたずらの用事でございますからな」[illegible]

「突当屋権兵衛様と、ア、、これは此の本店から一軒めの家だ」[illegible]

れにしてはいろんな書き様だ、道理でわからなかった、そして権兵衛に此の権の[illegible]

衛の権の字に、権にも色々種があるものか、真に惜しいな[illegible]事があるものか、

こうせめえ事をいふから付ねえ」甲「ハア、、外にどういふ権の字を書く」甲「[illegible]、外にも、いく

らも有るノサ、まづ狐の字へ濁りを打ッても、ごんと讀むわ。」吉「ハヽヽヽヽ、狐の字は妙だ、併し狐の聲ノ字でなければ、ごんではねえ。それより、貳合半の字を並べて書くはうがいい。」中吉「モシ其の手紙をくださいまし、ヘイこれはありがたう。」ト、あきれて早かへりゆく。吉「エヽ、いめえましいべらぼうだ、大きに苦しませやアがつた。」吉「うぬが心から苦しむのだ。早くだれぞに、わたせばいいに。」吉「人に見て貰ふも、あんまり知慧がねえから、其の内にはたすけ船も出ようと思つて。」吉「あんなよい樣では、あんまり智慧の有りさうでもなかつたぜ。」吉「それだから、みんなに見える樣に持つて居るにどいつも／＼、智らぬ顏をして、ほんたに、むね氣なやつらだぞ。」吉「ちつとも讀めねえかえ。」吉「江戸ッ子の面よごし、これこそ眞に、權兵衛八兵衛もわからねえといふのだ。ヘン其のくせ高慢に、手紙をひねくッて居るつらがサ。」亘「しかたがねえ、子供の時から琴や三味線、をどりの稽古、遊藝に許り、身をいれてゐたから、今では後悔するばかり。」吉「さうだらう、遊藝に身を入れたもんだから、何ごとにもつこしがねえのだ。しかし遊藝には色が黒い、ヘン其の面では遊藝より、見こし入道なんぞがいいぜ。」亘「イ、ヨそねめ／＼、是れでもチヨイと菊堂でも氣どつて、お屋敷方へあがる所を見せてえ。」吉「チヨイト菊堂を用ゐるにも、下塗は胡粉だらう。」吉「どうして胡粉や一匁でこれはとの内川が有るものか、これ、此、とぼけ剃刀の先で、鼻を擂り出す場所が有るものか。」吉「なんたる此の野

[illegible]

ちよいと[illegible]しやなア。」[illegible]

[illegible]

見たり、ほんに[illegible]

『仕掛』の[illegible]

[illegible]

鑑賞であつて、[illegible]

[illegible]

其處のがいいのと、イヤ使のたんびに買所がちがつて、扨々うるせえ事ヨ」馬「モシ今の話のは、實っにようごぜえす。わたし等は顔に用はねえが、惣身の腫物、ひゞあかぎれ、あせも、イヤ股のすれるなぞには、奇代さ。そして一ト包五十だが、拾包からは、三芝居の立テ物手合、だれでもこつちののぞみ次第の、正筆の扇を景物によこすから、おやしき方へのつかひものには、一トしほ妙サ。」馬「フムン成程、手を盡した世の中だゾ。代物をよくした上でおまけがつく、それではやりさうなもんだ。おつとまうけて、たんと賣る氣だ。そりやア何處で賣りやす。」馬「エ、南傳馬町三丁目の稲荷新道で仙女香と聞くと直知れやす。稲荷様の東隣さ。へゝ何もこんなに、ひる腹もんで、教へる譯もねえが、此の様ないい白粉は、女中方のためになる事だから、どうぞ弘メてえ。年中なに、苦勞させる罪亡ぼしにならうと思ツて。」馬「チョツ、まじめな話だから、うつかり聞いて、たうとうたれかけられた、いま／＼しい。」ト、障子を立てきり、へやへひつこむところ 獣上たゝきどもり、チレチ、チン、チレチ、チン」とて、ト、口三味線の拍子につれて、障子を明ける、障子と親指へ指をはさみ 獣、アタ、、、いめえましい障子だ、ヲ、痛へぞ、痛えにしてはでゝぶつけへ居るノ。」馬「ナアニ苦八ごん許り、そのかすぐにいい。」獣「イヤさうか、眞になア、指をひつはさんだので、眼がくらんだア。苦八なんざア絹にすともの事だ、つひえよ。」馬「なんだ此のへおむくれやらうめ、つかみ殺されやァがるな。」獣「おやッかな、恐ろしい強え人だアヨ、か

らがヲイヲイ、皆で喧嘩をしたとよ、ようはこゑをかけたつたに、えゝ、ありや[illegible]、真田にす
わばいゝ、其ぢやあねえかよ、そこで喰ふ間[illegible]、其[illegible]、そのやうに、[illegible]さがら
ねえからぬ、ヲイヲイ、びんびん、相手がねえよ」[illegible]れ此己にかまつても[illegible]一人でも
[illegible]かの[illegible]、[illegible]開きねえ、すいと一丁目へ曲ると、向うの方の大人で[illegible]かつて
の、[illegible]の野郎がぶつかつて、[illegible]と突き当つたらう。此奴を喧嘩仕掛にしようと思つたが、何分[illegible]の[illegible]
ら、かたはらへ行かうとすると、[illegible]、此の野郎奴が、そこへ[illegible]、四五人[illegible]、[illegible]の[illegible]
らがアアたれといふから、もうたまらないつもりで、吾妻で、虫が承知しねえ、命も[illegible]だ[illegible]に
[illegible]のに、胸ぐらから突きあたりやアがつて、一人で相手に喧嘩仕掛て[illegible]、[illegible]、胸ぐら[illegible]
たアといふことで、[illegible]の野郎といひながら、[illegible]、[illegible]の[illegible]をとつて、[illegible]
いとひつたてると、[illegible]小癪な[illegible]、あふのけにすてんとやつつけたら、[illegible]、[illegible]の
ら、番手桶をもつて、ぶつて頭を、一ツ当で、ぐしと潰れる所へ、後から[illegible]に[illegible]を、
「いとしをあんでひつぱつしたが、[illegible]を取つて二三間へ投げたが、[illegible]、[illegible]の
をさせて、[illegible]と白眼だから、見物が[illegible]、[illegible]とはいたが、その[illegible]の
き○[illegible]その○や、喧嘩に[illegible]が、[illegible]、木偶師の[illegible]、[illegible]つた[illegible]、[illegible]、

喧嘩はどうしたのだ。」 丗「ム喧嘩か、イヤそれから、とても大勢に獨りだから甘口ぢやァ敵はねえ。いてえ思ひをして習ッたのは爰だと、ぐつと、覺悟をきめて、ぐいと尻をはしよつて、買ひたての雪踏の角の有るやつを、兩方の手へつかんで、そいつらのすきを見て、一もくさんと逃げ出して、二丁目から河岸を廻ッて、新町の酒屋へ這入つて、隱れて居たが、べらぼうにこはかつたぜ。」 芸「なんのこつたよわい男だナア。」 丗「それだが、今いつた高麗屋のやうにやつたら、さぞいい心もちだらうナア。」 芸「ハ、、、、、べらぼうめ、そして痛え思ひをして習ッたといふが劍術かつ。」 丗「なに奥の手ばかりさ。」 皆々「ハ、、、、、、、、。」

柳髮新話浮世床三編中卷 終

柳髪新話浮世床　三編下巻

瀧亭鯉丈　著

浮世床の腰障子に、櫛の歯をひくよりも世話しく、又も元結と引合せ、いつも暮の客に年の頃、三十ばかり、色赤黒く、髪は油肩の大たぶさ、額を立派に抜き上げても、寒さの木綿藍染の紺袋なふべし御どの、小紋布子に、茶裏広胴の野羽織に、萌黄更紗の板〆の…を入れ、鷲の足の眼鏡…りたる根付を、前よりみぞの上へ寄せて、差けたる拵、ひとかど分限と見え…男「やア是れはお珍らしい、どうなすッていました。此の間はとんと御無沙汰をいたしました」客「また此の節は、同役どもの内、一両人引込み合ひて、世話しくて…門外へ出る事もなく…んがくし」男「ハイ、それにははや、マア一ツぶくおあがんなさいまし」客「まアだ、先がよほど有るバイノ」男「それ、一ツ二ツ。」客「ハア三ツバイノ。」客「イエお二人様で…」男「イ…おやっ一ツ服すって待とかい。」ト、ずい是れは皆様お早う。」ト、大小を取ッて刀掛へかけ、き「即…れ二[illegible]…」男「この間は徳川様も…向…御…」

か。」築「イヤ隨分息才なれども、彼奴此の頃は女郎どもにはまいをつて、とつとモウどうす事もないんバイ。」隻「へエそれは、イヤ全體かたいお方でございましたが、どうして又ぐれさしつたか、築兵衛さん貴所が、御一所ではございませんか。」築「なる程せえしよはわいども、同道しをつたなれど、其の後は一人で數度參ツて、今ははや、文通などたび〳〵往來しをつて、寔きちい事バイ。」隻「ハァそれははや、大色事となりやしたね。イヤモウあゝいふお人のはまつたのは、やるせのねえものさ。」築「イヤ、はまいをるも無理はなかタイ。じる分はつぶいな女郎とみえて、其の文などの見事なこと、きつとしたもの。エ、初めての文通より、第五本目などのうつくしい事、勿論紙ども吟味しをると見えて、奉書に天地紅の半切へ、筆頭のならびを、松皮菱つなぎなどにたかびくをつけて、書きをつたが、寔に細字にして手蹟は勿論えゝチフ程にもなけれど、そのなつかしきまゝに、一筆しめし上げチフ事から、穴賢まで、はるウか書き終るまでの丹精チフものは感心なことバイ。」隻「へエイなアル。」築「文章は數通ごま〳〵のおもしろいこと、エ、十二本目などの魚盡しの文體のおもしろカ事。鯉したふ。イヤまアだまへが、御まへ鯖を鯉したふ心より、逢鯛々々と、蟹かけねんじ候、などチフあんばい。また我が身烏賊ほど小比目候ても、御前樣には鰤々と、鱠殘よい事ばかい御申し。又或は辛い勤めの中にも、おまへ許しを細魚にして、などと秀句ども取り交ぜて、イヤかんしんな事バイ。後吉め

は其の女子を、繰り返し／＼してゐるので、此の節は何やらえにてゐるネ、此時ところ眞顔のみで
り、飼役中好みをると、一年よりはへまへまで、此このなく宗ぞするが、いゝた人此の浦み、
ごとく、ヤ、まことかねし人間の事ハもに　丹「ナニ、それはおれもんなことだ。ぞんなら様子は
御きようすネ、一件の女郎衆が、そういふあんへ上では、あなたの逆命もうたのうなんて、書内もし
ひかうがござりませう」丹「行きやつたらなんぞ有いませうが、とんと初會ばかりいるので、柳川にゐ
ひた谷傳いなど有れども、一向行かねえ」米「それは又きつい事だね」丹「しあなたは御へあれば
ござりませう」米「イヤ外ならぬ此の方不得手の事なれば、一度なりと行きやつた女郎でもなければ、
殊に角おもしくねえことだけど、澤山の者いれえてに」丹「ハアそりや又どういう事かお気にくわぬとしても人た
ねエ、違ぞうといつたら、先づたちいつた事なれど、揚代の外にきつぴ八川も檢番に聞の、ヤアそれ
はよけれども、そで斷うした譯ハもう、初會の客、ま大諸々のものくわれなつたたれども、三千人の女子の
うちにも、心にそまる女子ナヲは、澤山にはないト云」米「私は、それももつ見ないものだから、目
移のがでるのサネ」丹「イヤたまさかにわいても心にかなうた女子のあれば、柳川が気にいるはず
ナたとやツが心にかなへば、われどもおもしくねエもので、イヤ見世のする時また、四ツ頃まで
も廻りノ＼て、いやゝ足も腰も疲れはて、とうすこともならぬハサ」米「ハヽヽヽヽ」なるご

如何ニ成ス

染「そこではや爲方つきて、何屋とも辨へず、格子へ寄りかゝつてたゞへに、顔見合はせてをる所へ、其の家のわきやァものめが、袖をとらへて、どうぞ、わたくし方にて遊んでくれいと、ひたすらなげきをるゆゑ、かやうに折り入ッて頼みをるからは、麁末の取りあつけへもせまい。エゝ女子求めてふらるゝよりも、ちと女子はつぎでも、客少なの家が、又勝手のエゝ事もあり、生涯妻と定むるではなし、柳川とも相談したならば、しやッも納得しをつて、荒増見分して、ふしよう〳〵に求めをつた其の女郎バイノ。」逢「へエ縁といふものは、おつな物でございますねえ　あなたはよく〳〵、お氣にいらねえと見えましたねえ。」染「いや氣に入らぬでもなけれど、まづ斯うした譯バイ。其の夜揚りをつたハ、早四ッ半頃にも、有らうずと思ふ刻限ゆゑ、短夜のみぎりにはあるし、杯事がすんだら、直さま床入と思ふところに、わきやァものめが來をつて云ふには、氣の毒ながら、おねげへの筋が有るチフゆゑ、どした事と聞いたら、あまりにきやァが寂しさに、家内に召し抱へてある藝者ども、一ッ買うてくれいと、こげえいひをるゆゑ直段はなんぼしると聞いたら、貳朱だとけつかる。』いかにこの方不勝手なればッテン、でえて寐る女子も貳朱なりや、さみ彈の女子も同直チフは、あまい引合はぬものバイ。殊に短夜の砌にはあるし、先づみやはせう。チフたら、ふしような面しをつて行きをつたが、まァた暫くしてえへ方の女子共ゝ頼みをるゆゑ、柳川にもなつとくさせて、たてへ延刻するバッ

ト、足非がにやァ、わきァものは上もあれ、女子どもの心にそむくは、いッそねえと思うて、小西ず、の都合で、三味線弾女を呼び揚げた所が、ナャはれた、まし誰を集の上下で、目なと申けるきにしをつて、首などふわなから、エ、ヲ、鳥殿々々、熊野へござらば、ヲ、同道しましよとかいふ唄など、いやはやおもしくもにやァ事を、コヲ〳〵三味でいて、ぺん〳〵とけつかる。其のうち夜廻りの番人めが、カチ〳〵〳〵〳〵早拍子木を打つて来た故、定おどろいて、コリャ何事と、若えものに尋ねたら、『いや出火でにござりあ、引けでございます』『ヲヤ〳〵、引ヶた』ト、何事やらと聞いたら、番の里では夜の九ツを引ヶと称へる事さうな。『是れは古より申し伝へましたことでござりまする』、ときァ安心はしたれど、一ッたんハッとおどろきし事なやるせな、何かたは〳〵して、おもしくもなる事ァイ。すると夜の嘩子めが、こう〳〵に三味線を仕廻い、面談をかたづけうちァ前で出来たくァ片っくるにも及ぶめえ『チウたら『いやお構ひはござらぬ』なぞとァがぬかつたゆゑ、さてさうることはけつかるから、それはあまい我儘であらう、迎へが来たならさやるまでは、同役中などの噺子でも、聞んで酒ともするなれば、深夜におよべば、むきやァのくなる事もあれども、三味線弾取の役目ものて酒を取つてつる女子が、この方より暇もつかはさぬうち、身勝手にもやうするとは如何の訳だと、存雨ものと抔ついて、なほぜんよのさま〳〵の勝手がましき事、ゑつとした裏芸の事なとなれど、遊所の事なれば、

勘辨いたしをつたれど、最早さう／＼ええやうにはされまい。三味彈のおし賣りいたすのみか、高直の強分を掠め取り、剰へ、一夜抱へ切りの女子を、半途にさぐるチフは、あまい不屆なる致し方此の段當所重役の者へ相屆け、急度申し付け。」チウたりや、彼のわきやア者めも靑うなりをつたが、なんと鬢公がめへなれど、じつた此のはう心中には、一刻も早う座敷のひくるが勝手ゆゑ、こげエまうしたくもなかことなれど、右の様子では後々は、何樣の事申すかけうも計り難く、まアたえへ方の女郎もむきやアが來たチウて、連れて行くはひつおやうと。」「ハ、、、、、イヤそれはさういふ譯ではござりますめえ。藝者は一ツ二ツと切りがあつて口が掛ると、線香を壹本立てやす。線香が立ちきると迎へサ、直せば又壹本立てるといふやうなあんべエで、幾度も迎へはかゝりやすが、吉原の女郎に、迎への直スのと云ふ事はござりやせん。晝夜といふものがねえし、片仕舞と云ふものが、ちやんと極つて居て、其の外に餘計な貰ひ樣はしやせん。そりやア馴染の客でもくれば、名代を出して兩方勤めるから、座敷を明ける事もありやすけれど。」「さうさ／＼若いものも其の通り、いひわけしをつたが。イヤ鬢公委しいものハイノ。」「ナニお前さんこんなことは、朝ツぱらの事サ。」「イヤしかし朝ではなか、えへの事バイ。」「いゝえサそこいらは口元だと云ふ事サ。」「其の譯ケイと奧の座敷バイ。」ト、とかく言葉［illegible］ねて［illegible］だ。「へ、え、なアる、そこでどうなさいました。」「どうチう故たいがいにおいきつ［illegible］る。

ゐ。今いふ通り、郭の法令と有る故、然らば何藝によらず、終りに祝言述ぶるは、天下一統の事、此方ども謡うたへハヽヽヽ、同じ事なれば、何なりと祝言謡いで、暇乞ひせうとしたのに、不興な面して三味間しやつて、彼の貴いれを謡しておたの潮した故、其の文句と云ふ時に時は何なれど、はや衆もやんがて八つにとならうかと思ふ刻げん故、いよいよ申しつのおは、夜の明くるを細れると、蟄をこらへて寛みたが、さて最早だしし廻者揚けて、敢口たつた事はないしをつて、とんとこりく、したわいやいやうハヽヽ、鯨者やしなこをさせたのか、しかしたり、扨一ノヽヽ何とも此の方しらぬが、多分、此の方三半者と見こ、郎席の作りの文句と推量したで○ー　どっちへこ、しかし頓智のいいやつでござりまし、たれ〜なんといひましたなー。ーニ、ヤ、なにとか、ま、松の木がたちまち大木になり、ホウホウ、ふ、ふ、獨身と見て、當す付けをるナト、思うた故、わざとと惚けた顔で、此が聞合もの故、何事も（ト笑）しらんが、此の顔の表では、何と申すっと聞いたら、ぬからぬ面で、鶯と申しやこちとてました面しておかしなる。ハヽヽ、こゝ憎い奴と思へども、來入りの前の事もやる。ナレバ、聞き耳つぶして、こらへてをれば、ずしよたれたれ、歯をかきねて、好むすきだと、ふざけしやば、なぜれたれ、大夫しきりにふり付くる、などと來入りの、けちをつけやるやら、聞けばきく程、腹にすゑかぬる事はいず、いちいち郭何様の事申し出し、堪忍なり兼ねる事も、詰られぬ点でござりますす、諸道ほず、

ひやァく下れ〳〵。』と、さう〳〵追ひ退けてしまうた。」 びん「ハ、、、、、是れは御もつともだ。しかし藝者や若え者が、わるいとつて、女郎衆のしつた事ではなし、かはいさうに、いつておやんなさればいい。」 ちく「イヤサまァだおもしくねえ事が有るバイ。それから漸うの事で、床へ入ッた所が、しばらく逢方がこんゆゑ、こちも一杯機嫌チヤルケン、ちいちちみやァの、謠うたうてをつたれば、やんがて女郎ども來をつて、せえぜんから立ち聞きましたが、おみやァさまは、かくしぎやァがあらつしやる。寔おもしろうして〳〵、どうす事もならんゆゑ、どうぞもそつと唄うてくれいといひをるゆゑ、まァた三輪のクセを、一くさり唄うたれば、イヤしんとなつて聞きをつたが、殊の外よろこびをつて、こえへのやうに、うれしい事はにやァ。久しぶりて、謠うけたまはりまして、只今まで餘程の持病の、シャツが兆したなれど、餘りのおもしろさに、ケイト納まりました。」と、殊なう喜びをる故、「おてめへ謠好きか。」と聞いたりや、「イヤ好きの段か、三度の飯たべずと、謠さへ承ればええ。」チウたが、なんと風雅な、女郎バイノ。」 びん「ハテ妙な女郎もあるもんだねえ、それではしつかり、大もてでござりましたらう、そこがサ藝は身をたすける所ダテ。」 ちく「ところが、いつかうたすけぬテ。」 びん「ハテなぜネ。」 ちく「ナゼチウて、それから、マァヅ聞かッしやい。はうべエ女郎ども、兩三人是れも同じく謠好きぢやチウて、せえはへこえへは客人もねえ故、よろこんでうけたまはりにめ

ふった。何卒御若君なれば、今宵一寸聞かしてくれいと、頼み言うのに、熊谷一途に、えらへ小刻み、段うたうたら、まアた何ぞ変れまもの、一番うたへやいても筋の変つた、喉もつかれて、難儀なれば、此間のいうたら、道行のいふには、御覧の通り、精進精がわれ難しなれば、まして道の詞に、へて皆うつむいて、顔をみあはせ聞きとれてのたんすもの、可哀さうにもつとおやしなはしゃ。

ト云

ずやで、一向ちかふのあす是非なく、また一番うたうたが、今度はかれじぶこふ道の、詞の淡さ。たう一度、一つにいつて、又このみをふうすと、くつと気をおきやまで、熊谷を一番うたうていれたに、まうか、、、、こいつ袋はない物といふ好みにはなかなかおい、こちらの所がさだいきまとした、れさとけつかる」トいハ、、、、、、、このやかましい奴らめ」ト云ふて、此所、道のはてしもなう、信濃太郎に取りまかれてゐては、いつ親に逢ふ事も出来ぬ故、聞かしたによし、さうさう歸りやらうすと思うて、今すまされ、いずれいとはいへども、一つ熊谷の前に起立の御前に出し、敦盛に其の詮を物語するなれば、あまりにいさましいものではない、二つたおやすす、それでは國懸の為でござるが、それは嘸や悲しことをおや、其のゆふれいのはかなしうござる。ただまらぬに、熊谷とやらの料簡では、随逐おそれうぞ、はや身動きもせば、小次郎たかのい事なうござんなされた。どうぞわれをくしとで、夜の明くるまで、爰に置いてくだされ、とて嘆きく〜とぞいう心事

はならん。」と、がた〳〵顫うてけつかる。」えへ方の女子も、同じくふるへ〳〵「寔におそろシてならんゆゑ、はや夜の明くるに間もあるめえ、おめへ方にけへられては、寂しうしてたまらんから、さいはへの事ぢや。しかし此のお客様に、お氣のどくヂヤルケン（デアル故）、そんでゑに三味などひいて、めん〳〵藝盡しして、おきかせまうすがええ。」（宜イ）トチフ（ト云）で、何か早口唄など、交る〳〵歌へをるうち夜はからりと明けはなれて、はや柳川めは支度して、ごア〳〵殊の外寐わすれをつた。うらん（出ヨウ）〳〵トチウ（ト云）て、來をつた故、此方は寐わするゝどこでねえ、起きわすれた事はあれども、其の場におよんでいましばらくともいはれず、爰が武士の意地ぢや（所）と思うたゆゑ、みれんがましい事もいはず、すみやかに「然らば。」トチウ（ト云）て、歸りをつたが、おめへハ〳〵おもしく（面白）ナカ（無イ）ことバイ。」びん「ハ、、、なるほどそれでは、ちとをかしくねえ理窟でござりましたね。」欣吉「そシ旦那はゞかりながら其の女は、そゥ一ッ二つ買つて御覧じればいい、わつちらの今いく女なんぞも、丁度其樣あんべェで素見しにいつて、ツイふら〳〵とひつかゝつた女だがネ、初會に廻シが三人ス、八ツ時分までよッつきやァがらねえから、ぐつと癪に障つたけれど、こゝでぶつくさいつたもあんまり勤。」（ぽんといひかけて来兵衛が顔見てハッと心付き、少シはなしときれて白ける）喜「ナンダあんまりどうしたのだ、なぜ黙つて。」欣吉「さうさきんといつたがをかしい。」鬢「ナニをかしいものか、あんまりきん所へけえぶんがわりいから。」喜「ナぜきんじよへ外聞がわるからう、そぐ

ほれえ噺の仕様だッけ。」鉄古は少し赤面してむねをなで「こいつだといふからにゝみつけ「それからネ、お聞なせえ、あんまりむねつると
かわりいから、見せのほんぼこ三味線をかけて、爪弾にそなたもともにといひたいがとか、何とか、
小聲でやつてゐると、キナ女郎めらア寄つて来たことよ、よつてきたことよ、ヱヱ由縁男がたれの、ヱ
し藤かうらが聞きしえの、あはしまがいいのと、皆みこのみをしやアがつて、たうとう七ツ半まで
語らせられやしたが、其の礼がくふしがりあらが集あつこしやアがつて、又でもあろ一ッぱいと入れて、
酒の四五斤もかつくらつたといふけれど、エ、ひとをつけにしたァろうにでも出てあのくれた噺ると、
二本や三本にやァなるのだ。ヘン畜生だやアねえか。それからヨ、二階中が心安くなつて、ほうらし
れえもんだから、うかうか今だに行きやすノサ。エ、旨公アノ二丁目のよ、アノ二丁目、いア、かう
ぜえたいとけへいくよ。」鉄古「ヲヽ、そつちも知つてる、二丁目の二丁目とけ。」竹「ナニしせんまの
ねた噺よ。」鉄「へへ馬かたの浄瑠璃が聞いてあきれらア、うぬぼれの承知してるつばらわけらねえよ」
竹「ぶきやうな言様だぜ、初音の事だくよ、くやしい。」鉄「ハ、、、、くやしいと、れこそやすかる事でねえ
ト二ツ手ヲ合ヌ、河岸の女の事か。」それなら河岸と、早くいへばいいに、二丁目ヲメエヱヱよといふか
らわからねえのだ。」竹「それでもあいつがとこは、二丁目分だア」鉄「ならはうのエ、分くれななか
すかなきつかけで、二丁目なぞといつたつて、手めへたちの風で、とても大門の客と見へるものか」

北「なんでも人をいちばんツ、へこませやァがる、むね氣なやらうだぞ。へン手前達こそ河岸でそだつて、河岸でをはる、ダボ鯊遊びといふのだァ。こちとらァほんのこつたが、己が身情がわりいから、こんなざまになつて、せう事なし蟲押へに、安見世へでもいくやうなものの、ほんにヨ女郎買ひだとはおもはねえわ。そも〳〵おらが女郎けへのはじまりはサ。」なめ「こゝの鳴物はやつぱり、大小入りのびぜん節でよからう。」北「へン實のこつたが、茶屋付きでなけりやァいつた事がねえ。」南「ム、ン茶屋づきツ、まずい言ひぐさだナ。」北「男藝者や、女藝者を連れずには、おいでなさらずか。」南「ム、ンごてえねえな事だナ、女藝者を一斤男藝者を一斤、都合二斤か。」北「べらんめえ二斤ですむか、三斤ですむか、はずみになつてきちやァ、カラむやみだァ。」南「がうせえな物だナ、それぢやァ喰れへ物もてえさうだらう。この中のやうに手めへの三尺と女の下〆とやつて、半斤々々なんぞといふ事はあるめえな。」北「ヤイ〳〵べらんめえ、いつそんな事をしたえ。げえばァわりいわえ、めえましいひにく許りいやァがる。へこうぬがこゝろに競べやァがるから、ほんたうの事をいつて聞かせても、さつぱり通らねえからいけねえ。ナァ甚さん、おめへなんぞはしつてるけれど、ソレ久しい跡だつけ、玉屋の雛鶴を買ふ時分ヨ、おめへをつれて茶や付きで。」南「コレサそりやァ誰をかつてもいいが、番毎茶屋付き〳〵はよしてもらひてえ、ア、野夫ないひぐさだ。」北「茶や付きに違へねえからいいぢや

アねえか。ソレ仲ノ町でどうだと花を折つたつけ」「ム、あの時の事か。あの時はおうさと言つたつけ」「知つてるだらう。」「しつてるどころか、前々七月から十二月まで、日も不足しねえ位ヨ、」「、おめへは物覚がいいナア」「覚えてるなくつてサ、自分の事だものを」「すりやあの時分は、おやふにいつたよ。」「いきもしそうな物だ。あの時分は草市もまうかつたらうが、今はあゝはいくめえ」「をかしなもんだつけ、おめへなんのはなしだ」「仲の町で花をもつたといふから、草市のことだらう」「へヽいはねえ〳〵、といつもしい、花魁のはなしを聞かせてるわからねえから、まぜつけへしてはゐるですね。」「日暮のさうさまに、こうつこれだけさ、わつちやア今こそこんなざまで」「そんなお前きのふも、北の田圃にまいつたのか」「いんにさ」「ハアそれでも、ご所今だといふからよ」「すこ、ふとい御愛想でねえか、きつと、こんだ」「ハ、、、おつた口をきゝあがるから、まあきいてゐて、いふのだ。やつぱりの晦日もきのふも、先刻といふたおだ」「どう〳〵」「きのふの事を昨日といふから、きのふが昨よ、今日の事を今日、明後方合はせて昨今だわ。それにてはじめて言つた人を言つてこれ、へゝ、あんまりもゝ人だからいつて、おきのどくだらう」「うつちやつておきねへ。手前達にいふのではねえから、たまつてひつこんでゐるがいゝ」何かわきから一ぶ人にてえして口論はねえか」「ハ、、、ぶに人ぶ、またつかみかかるかする。

ハ、、、、。」築「ハ、、、、、氣輕ナおもしれえお人バイノ。」鬢「氣も輕し身上も輕し。重い物は押とはうさうばかりサ。」點「ヘン押の重いといふは、てめへたちのこつたア、こちとらア一ッたいのお生まれがちがふわ。御乳母やお守で、お育ちなさつて、もの心をおぼえるまで、拍子木でお飯をたべてお育ちなさつたから、どうしても大やうだア。」鬢「違へねえなるほどさうだの、あの番屋は日當りがいいから、お乳母や子守がたえず來てるたつけ。」點「ヘン聾に話す樣だ、かうわからねえやつもねえ物だ。」鬢「ナゼそれでも拍子木で飯をくつて、子守や御乳母がついてゐたといふぢやアねえか。」點「コレ拍子木で飯を食ふとつてナ、番太郎許りではねえわえ。飯田町の番屋に居た時の事だらう。」點「大所ではナ、三度々々飯時には、臺所で拍子木をうつて家中へ知らせるわ。エ、引あんまりなんにも知らねえべらぼうだ。」鬢「ム、、兩國のお開帳へ、札賣りにたのまれた時の噺だナ。アノ開帳もはづれだつけナア。」隱居總太郎出で來り 隱「おめへ方はでえぶ六ッましく中の惡い事だの。」點「なにサこいつらア色が出來ねえもんだから、わたしをそねんでいおめてなりやせん。」隱「さうさういゝ事と喰物のいしゆは、こはいものだ。」鬢「サア隱居さん天窗のとつても付けて仕舞ひやせう。」なめ「惣公茶番は極つたか。」鬢「きまつた所か、是れから直に景物を買ひにいくのだ。」なめ「ハアどういふ筋だ。些と聞きてえ」鬢「どうして聞かせられるものか。ネエ隱居さん。」なめ「チヨツいめエましいべらぼうだ、

ときにおれも他人にしやア妬ねえ。まア、、、、、茶番は是非[illegible]もしくつていいやア。[illegible]下手の道化

るやうな心もちで、胸のうちで、独りいそ／＼勘べてる間が楽しみだ。」ト、いふときおくの障子「ハ」

ぜんたい[illegible]もようお出でなさいました。[illegible]旦那、おあがりなさいまし。よういらつしやりました。久しぶ

りで。モシ間をこらうじて、おひるをおあがんなさいまし。」ト、女房がゴタまぜのあいさつ[illegible]

お腹へなさらんか。まだ空腹にはござらぬ。」[illegible]

お前間と[illegible]かのしんざうのあだものが小じよくたにか[illegible]

て御膳に[illegible]

をいむんのだ[illegible]北の[illegible]もう[illegible]

の間から、おれもつけつ廻しつくといて、うゐてくつてなんねえ。」[illegible]も、おくれ、手前

達のやうなしやつたれに、誰がほれるものかえ。[illegible]

ワア、[illegible]木たうだから一[illegible]

いやア[illegible]悪い[illegible]是非のおまア。」[illegible]

静かに[illegible]

キャ、ノ／＼／＼。

書肆のもとめにいなみがたく、[illegible]日、浮世の垢の人情も、[illegible]

大人を好みにまかする作意の妙案。此の三編の拙きは、下ずりの留吉に、なでつけさせたと見給へかし。

柳髪新話浮世床三編下卷　大尾

四十八瓣

四十八癖初編自序

杜預に左傳の癖あれば、三馬に戲作の癖あり。親に意見の癖ありて戲作を止めよの教戒も、書賈に需むる癖ありて、十八年來竟に戲作者の魔界に墮す。號は式亭三馬本杉、名は高慢の天狗宴、彼の熱鐵の熱燗をも、飲んでは醉ひ、醒めては飲する例の酒癖。其の醉醒に毫を採りて、世の人々の無くて七癖、或は有りて四十八癖、異類異形を圖にあらはにして、癖といふ癖物語とす。されど元來ずるけるが生質の癖なれば、半月餘り遲々したるを、發兌に催促の癖あるゆゑ、紺屋の明後日云ひ竭し、倉卒なる筆癖を以て一夜漬の稿を脫す。閲者本文の讀癖は、假名付に從ひ給へと御存じの口癖ながら、ナント子ども衆合點かく。

文化八年辛未十二月三日本町の小築、欲心深き處に筆を採る

式亭三馬戲誌

四十八癖標目

○女房をこはがる亭主の癖
○亭主を尻にしく女房の癖
○萬事を氣にかくる人の癖
○通物になりたがる人の癖
○何事も苦勞になる人の癖
○詞數の多き人の癖
○人の非を數ふる人の癖
通計七癖

女房をこはがる亭主の癖

女房をこはがる亭主の癖

かたちは俗にいはず如し、一体いけうかたへかとまでに行きたる極道のありさま、[illegible]
でも大酒にて目ははれはつれぐれむさにねかし、いろまへ噺にて、かういふを[illegible]
一人にするもに平気のかたちなれ。●「吉ッ子、すべうとおもつたが、やまらねえ[illegible]
れが早く帰らう／＼といつたけれど。」△「傳公いはつしやんなおれんらしい。からトかの／＼に帰り
ヤアおためへだ。[illegible]わんめえし、帰りそびれてしまうのは[illegible]理屈[illegible]●[illegible]にや、
あらすまて吉さがむづかしいから、イヤ[illegible]いいとうちのいこ。△「上[illegible]」●あ[illegible]
ト上に、△「山の神がこたくと言ひなしたつて、かゝとおらば[illegible]とりあはねえ、[illegible]
しやこ」●「そうかのこ」△「そうでねえ。たつて、かゝアがとつて食はうといやアしめえし、[illegible]
えるもんかこ」●「そりやア、商が女だからいいけれどの、しかしおらがかゝアは、女が、おじのあか、
もゝんないか、山くぢらだの、守にねえ世[illegible]つはふ[illegible]
向うから来るのは道屋されたこ」△「かうきとはやくおきたすてこ」●「そこはよくはつてるのに、はず
おきだア。人のおきねえ内に帰るいて、何がおみふつもりだらうこ」●「心配[illegible]

りいか。」●「悪いどこか、三月たまつてらァ。オツト横町へきれよう。コウ〳〵見さつし、ぶらちやうちんといふやつは、夜があけちやァをさまらねえやつだぜ。」▲「ふところへいれさつしナ。」●「オイ。」ト、提灯から先へいれる、▲「コウ氣のきかねえもんだぜ、其のつるのはうからいれさつし。ソレ柄の方をたもとへおとして、提灯はそつくりとふところへ入れるといふやつだ。はたらきのねえ男だぜ、それだからかゝァに見くびられらァ。」▲「ナイがつてんだ〳〵。かんにんさつしさきは子どもだ。」ト、ちやうちんをふところへいれて「こいつはきつい。コウ今度ッからはな紙袋の入るときは、ぶら提ちんを入れようぜ。」▲「うきアねえ。さういつてもよんべは面白かつたぜ。」●「ゆうべは面白くつても、けさはつまらねえ。おらアなぜとまつたか知らん、よせばよかつた。」▲「コウ、けちな男だぜ。友だちのけえぶんにかゝはらァ。」●「友達のけえぶんより、かゝァのたうぶんがわりい。ほんの事たァ。よく〳〵だと思はつし。」▲「さらけ出してしまへばいい。」●「ハンおれが追出されらァ。」▲「てめへ壻か。」●「ナニ、おれが方へ呼んだのだ。」▲「それ見や、氣のよわい。おいらアどうしたもんだ。かゝァが持つてうせた物はきれいさつぱりにまけてしまつて、着たッ切り雀にしておくけれど、チウの音も出させねえ。」●「おめへは仕合だぜ。そんなおかみさんを持つて、ほんにヨ一生の徳だァ。おらァ見ねえ、朝おきると米をといでめしを焚くぜ。それから膳立をしてまくらもとへ出しておいて、仕事に出るが役よ。つひしか商

讀に出たときに、かゝアの起きたことがねえ」▲「はなつたらしだ」●「はなつたらしも承知だが、どうもしかたがねえ。このやアおれが業の滅しねえのだ」▲「吉ッ子、一生のおれの命だ。手前がもうかう云へいつしよに行つてくれねえか」▲「さうすりやアおれも氣が丈夫だ」▲「ばかアいつてねえなアくせになるア。コウおれが教へてやらう。マアいひくさは斷ういはつしやい。口をあけてすつと丈夫なやつに」●「其の所だア、あつたおやアあけねえよ。いつか中も夜半に歸つたら、戸をあけねえでの、おむすび夜明まで往生してゐた。夫れから隣のかみさんのわびごとで、やうやう這入つた」▲「そんなことがここにあるもんか。女房がまはす戸をかけり、ナイトにおみなから、すつと内へ上つて、可かゝアが今晩つやアとんへはおれが所へ行つたア。いひ分はあるめえナ、あると云つてはやアみれ、たゞはおかねえ。マア酒を買つて來や、迎へ酒を呑んべい。朝歸る事ア大概しれたもんだア、今花世下ら捨へておけエ」「氣つけへりゐこ」ト無聞をきめて見さつし、いつはに先をとられるから向うとしつぷく騒ぎだ」●「ぬしのやうにうまく云へりやすいいが、さうしてくかゝアのかの字をいふと、されこそ變だ」▲「氣の弱い事をいふぜ、コウ一台きめさつし。角大で四文二合半とむはべい」●「いやくヽ、ときのその酒は見るも否だ。かゝアの前へ出る事がねえにつけへて是れ見な、夜までつけてゐるぜ」▲「どれ顔に見せようとするひやうしに、「オッット陰の子々々。」▲「そんならその氣で内へ行なさいし」●「アイおそればらかーうらみお置かんなら」

ば。」ト、ふりかへつて心細いおもいれにて別れる。○横町の小便所にてはり札を讀みながら、いつまでも長小便をしてゐれどよきふんべつも出ずこまり入つてゐる。「カウト、先度は生醉のまねをして歸つたからあれで納まつたが、けふは仕方がねえス。ム、あるわい〳〵、髪をちらしてト、此の着ものゝかぐる〳〵と引卷いて、はだか身へ帶で脊負の、この提ちんを、ト脊中へ突插して、裏の物置からそつと上つて物干へどさりと落ちよう。その音でかゝアがびつくりする、直に上つて來るだらう。そのときおれが馬鹿な顏をしていろ〳〵なことを口ばしる、そこで大屋さんがござる、長屋中が惣がゝりとなる。これはおほかた天狗さまにさらはれたに違へねえとかいつてねかす。そこで一寢入、こいつは能いわえそれにきめよう。ア併し夜が明けたから此の狂言もむづかしいス。ハテこまつたこす、それ〳〵、まだあるわい。ゆうべふら〳〵と内を出たとおもつたが、それから後は夢中で、やう〳〵今朝氣がついて見たら、眞崎の田の中に寐てゐたッ。イヤ〳〵、こいつもわるさうだ、チヨツどうするもんだ、默つて歸らう。」ト、思ひ切つて路地ぐちをはいり表へ家へ、來て見れば、女房はだまを寐すなり、ト、〳〵〳〵。ト、しづかの女はまつて にたゝく、うだゐる。トン〳〵。「コヽをあけてくんな。」トン〳〵〳〵。「今歸つたよ。」ト、〳〵〳〵。久しくたゝいてもあけぬ故となりのかみさん出て來る。傳さん。今歸んなすつたか。おめへの所のお平さんはよんべ癪がおこつて、長屋中大さわぎをしたワナ。」●「エ、。」ト、びつくりして、「そりやアおやかましかつたネ。」「久しいもんサ。」●ひさしいもんでもねえが、ついしかねえ所なく泊つて來やした。」「お茶が出來たからあがれナ。」ト、内いふ ●「ア

う」「又ト二〳〵〳〵「あけてくんな」」女房に聲をかけ ●「だれだ」●「今晩のだよ」▲「其所に」●「あれだわな」▲「おれと云つちやア皆おれだ。名をいふがいい」●「ヲヤ〳〵おれではなくあけてくんねえな」ト、いふ聲に、しよう事なしに文をだにさせる中、これ ●俺は女房におつつけ両をはなして

●「コレお平。誰だよ コレ〳〵ソレお平、堪忍しねえ。ゆうべはよんどころねへのさ」▲「久しいもんだ。その手はなくだよ、聞きたくもねえ。また所おつこ長崎のやつは見た事がねえわな。障子にとまつてせんの所帯だからに」●「さう云つて呉れる事はねえ。全體吉さア何所だ」▲「やかましいわな、友達といふと、友達の名を出してかかるに、増さかへおれはいふよ、友達のわるいあそびはしようとはねえ」西にまたふものを首玉へ縄を付けて曳いて往く者はねえわな。そして何處へ往つたのだ」●「どこと」▲「とこだよ」」●「ちよつとあすこまで」▲「ちよつとなら泊ることはねえわな」とことこ、いけねえおやア合點もねえ」●「何よ、なんだわな」▲「アノあすこのソレ、ソレ、あつちよ」ト、きのうへ〳〵寄せなア」●「いいわな、ぶつたつてはじまらねえ理窟だ」▲「うんにや、はじまるよ」●「早く寝ろで呑んで、それからアノ何か、アノ、何かソレ何、今からまつくのさう合つてくれといふのさ」それからソレ、おれもなんだけれど、ソレ何かどうも」▲「なんだナ、ひとの氣もしらねえで、ねえしくもねえ。最ういいわな、きかすと知れたもんだ。すねふんそのやすもう、はたらきがあるなら行て

がいいのサ。女房にすごまれてゐるやうな男で、夜どまりはもつてえなからうよ。マアゆる／＼いつてきかせうから、火でもたきつけて水でも汲んで来ねえ。」ト、いはれて火うちばこを出しカチ／＼とやらかす。▲「エ、らちのあかねえ、爰へ出しねえな。ぶッつけてやらう。」●火うち箱を女房のところへもつて行く。▲腹たちまぎれにカチ／＼と打てどもほくちがしめりてつかず「エエじれつてえ。此のほくちも間を見て焼い置けばいいのに、夜泊りの間はあるが火口をやく間はねえさうだ。」カチ／＼、カチ／＼／＼／＼。「サア。」ト、火をつき出し、「けすめえよ。」●「オイ。」▲「コウ／＼茶釜の中は昨夜の儘だによ、茶袋を替へなせえ。コウ茶釜を洗ふなら中へ手をいれめえよ、鐵氣が出ていかねえ。」●「オイ。」▲「茶釜の湯がわいたら、おれが手水をつかふまで茶を入れなさんな。」●「オイ。」▲「米がねえよ。」●「エ、。」ト、びつくり▲「何もびつくりするわけはねえわな、四百が米が幾日ある物か。夜どまりをするほどだから錢がありやせう、お買ひなさいやし。」●「錢はねえ。」▲「おめへ錢もたいで夜泊りをするのか、能い氣だの。おらァお前の様な氣になりてえ。」●「コウ最うあやまつた。」▲「あやまつてすむなら飢じいとき米にあやまつてゐたら、腹がはりさうなもんだ。オイ／＼、茶びしやくが燃えるわな。いくぢのねえ。」●「ホイ／＼。」ト直す。▲「その釜を提げ往つて米を買つて来ねえな。」●「それだつて錢がねえ。」▲「それでも夜泊りか。」●「コレ／＼をがむ／＼世間體がわりい。」▲「おめへも世間體を知つてゐるか、ほんに奇特だなう。コリヤ一服吸ひ付けてくんな。そして火が出来たら此

の[illegible]入れ、一つ挟み[illegible]」ト、いひながら[illegible]ひきだ[illegible]、これで米を買はねえ」[illegible]
これで帰りしなにお汁の実を買つた[illegible]として[illegible]く[illegible]仕事に出さねえ」●「[illegible]」▲「お帰[illegible]
つたと思ふよ」●「[illegible]」▲「[illegible]節季師走だ、正月物の一枚[illegible]も着せた[illegible]
●「[illegible]」▲「[illegible]寒さに[illegible]だといふからの、[illegible]流れ込んで[illegible]」
●「[illegible]いつは[illegible]ごくう夜と[illegible]の事[illegible]
なわりい。しかし今朝はいつもより御機嫌がいいだけありがてえ。」▲「よくはねえが、仕方がね
えし／＼[illegible]早く[illegible]」●「[illegible]」ト、[illegible]▲「[illegible]」「[illegible]」
▲「[illegible]内の楊枝[illegible]の[illegible]聞き[illegible]」「[illegible]今帰つた[illegible]」▲「[illegible]遠慮[illegible]
[illegible]頭も[illegible]ある[illegible]
[illegible]一生[illegible]の[illegible]ねえ」▲「[illegible]」
にするものはあるめえ」▲「[illegible]思[illegible]
[illegible]役だの[illegible]お[illegible]、あんな[illegible]の、終[illegible]になる[illegible]」▲「[illegible]では
見ねえかな」「その内に[illegible]」▲「そこは[illegible]なしさ」「[illegible]あるだらう」▲「[illegible]」
くおなしのでつべんといふ[illegible]」●「[illegible]買つてきた[illegible]、[illegible]」

ト、たもとからみかんを三ッ出してねてゐる女房にさし　△「また鼻ぐすりか、ひさしいものよ。」ト、みかん／＼をむき　●「コウハ、ちむくれの開山いくぢなしのてつぺんとは誰がことだ。」△「あれか、あれは何よ、權七さんの事よ。」●「權七か、ム、あいつはいくぢなしのてつぺんだ。」ト米をごしく。

物事を氣にかける人の癖

「きんじやうさいはい／＼はらひ給へきよめて給へ。なむとしとく尊神様、なむ出世大黒天、べつしてはあきなひ神えびす三郎左衛門さま、當年は猶さらあきなひはんじやういたし家内あんぜんそくさいえんめい家運長久とまもらしめ給へ。さて又おついでにはをがみませぬ狂言師ならばあひだへ○をいれるつもりでをがみまするはたれござりませうぞや、四国讃州なかのこほり南無ざうづ山こんぴら大ごんげんさま、ならびに成田山、ホイこれもおついでにをがみまするではござりませぬ、私べつして御しんかう仕りまするなりた山大聖ふどう明王さま、悪事さいなん火難水難剣なん病なん、ならびに女難のまぬかれしめ給へ。七なんそくめつ七福そく／＼しやう當年よりべつして欲心けんぞく、富貴繁昌天筆和合樂地福皆圓滿紫色鴫高我開令入給とうやまつてまうす。なむきんじやうさいはい、悪事さいなんはらひ給へきよめて給へなむ。」ト、目をねぶつてらいはいし、「アありがたい。まことにはや今日の天道様

御[illegible]を掛ましても家内大勢のものも[illegible]ひまする、三度の御膳三ばいつゝも[illegible]
まけ、まことにはや[illegible]の御利生、しんこゝにてつしましておありがたい仕合に[illegible]
なむきめうちやうらい、はなはだ諸へ〳〵。ハツトおり難い、ハテ[illegible]
ないはいし、あた[illegible]おろしたり、居たり。コレ〳〵、四郎兵衛、コレサ四郎兵衛といはれ[illegible]
なつ[illegible]をけにしたが、
ねか[illegible]俺にしても今[illegible]かい、さうさ、その気で名を改へねばよい。[illegible]、[illegible]は、ア
ノ今往た[illegible]に[illegible]たが、御[illegible]を御[illegible]人を御[illegible]申し入ますと[illegible]つたが、てつきりあいつめは
おれが御[illegible]がつぎとしりつゝいらざることをぬかす。[illegible]郎兵衛[illegible]
郎兵衛、今[illegible]たがまた、御[illegible]といふも[illegible]御[illegible]で[illegible]けれはこゝ
わ。今の死人といつたほどいつだ。[illegible]すましたあと、ハテわるい耳だ。[illegible]えるもにきこへ
聞えるものか、ムヽさうか、[illegible]屋の藤六殿かえ、聞えた。それでわかつた。[illegible]屋の藤六、[illegible]
値申し上げます。ムヽ、ヨシ〳〵、ハテ紛らはしい否な名だの。あの人もまた、ほかに[illegible]ないそう
に、[illegible]屋をする事もない、家名の頭にしの字がつくわさ。ア、えんぎの。」ト、いひながらとし[illegible]
だ、ノシしん上しんのり、新寺町しない[illegible]兵衛ッ。ハツ[illegible]はらひ給へ〳〵。」[illegible]
出し[illegible]をは[illegible]此の[illegible]へぬぞ〳〵、わすれずに捨てたり〳〵。あてこともない熨斗の
ものなれば

書き樣こそあらうずれ、片かなで書くことがあるものか。片かなのシの字は幽靈の額にあるわさ。今でも田舍では、亡者の額へごま鹽包のやうなものを付けてやります。ホイ／＼初々しくこんな咄もいやだ。ヘツ、ヘツ、鶴龜々々。御いはひは千萬年まづきかつしやれ。ノシしん上新海苔、新寺町しなのや新兵衛といふことを氣にかけて讀み下して見ると、後死ぬぞヨ死ぬなり。ナよしか、なにぬねのは五音相通だとお鄰の先生樣に聞いた。それよしか、後死ぬぞよ死ぬなり、死ぬ寺まち死なぬ屋死ぬべいときこえるわさ。まうまうさば半死半生の體だ、ナントどうだいやだの／＼、ナントいやではないか。コレ／＼此の海苔は早く川へながすがいいによ。コリヤ／＼幸太郎、けし炭で何をむだ書きする。けし炭で丸いものを書くのは棺桶の正面を知る爲だ、わたはけづらめ、ゑくなことはしをらぬ。何はアノ長六はあたまをどうした。エ、何神棚でぶつた。コレどうしたものだ、正月しよからあたまをぶつの、けがをするのといふことがあるものか。ソシテ年神さまのお棚は大切だ、あたまは人のかしらだ。人のかしらを此の家でたとへればすなはちおれが身だわさ、ハテきさまのあたまばかりとおもふと料簡が違ふ。コレ／＼、お神のたなはけがれはせぬかのハツア鶴龜々々。我が身ではなし他の身になれ、こつちの身ではないぞハツア鶴龜々々。フツ、フツ。」ト、袖をはらふ。「道理こそ、昨夜の夢見がわるかつたに、今朝おきるとさう／＼烏なきがどうも氣にすまなんだ。てつきりそんな事のあらう

鯔か、ボラの断上といふものはおもものよ。一體よつ年越の赤鰯といふものは悪魔をはらふ為に用ひる。いつしよにヰサヰナケレドモ、ソコダテ、鰯といふ字は魚偏に弱しと書く。すべての物が弱くてよいといふ道理がない。ソコでおらが内では鰯でない。おれがいふ〳〵魚づくしの本を見て鯛といふ字を撰したが、鯛い字は強ない。それゆゑ強く強いといふ字をとつて、鯛分には鯛を使ふ。ソコデ鯛は軍魚だから、其祝事に勝つといふ心で鯛を使ひます。貌しかる處に

ゆづりは凪に　びつくりして「アレ〳〵〳〵。」よりかぶりから上だのつりはが落ちた。是れはどういふ事であらう　千秋萬歳ならび給へ、七里けつぱい鶴亀〳〵、こつちの身をや…れ、我が身おや…ねえぞ。…〳〵」

通りものになりたがる人の癖

「てめへ名はなんといふ、…、心やすくしてもらはうぜ。江戸…えらのはねえこと、…〳〵見つとおねしが…おらが内は毎日…なやつらが来るぜ、もつとも通魚はいらねえかもあそびに来な。…つ居るだらう、鰹はねや葉文字、もじ猫鰹ほど、お馬鹿にお猿なぞといふ處は…

いらはおらが所をうぬが内のやうにしてゐらァ。イヤきのふもうたせぬいたぜ。まづ朝湯の歸りに髪結床の半二が所へよると、下料が來て居て『景物の手輕にいく樣な茶番を考へてくれろ。』といふ、ソシテ俺にも『一幕出てくれ。』といふたのみよ。『最う茶番でもねえ。』とかいつて、おつにごまかしてしまはうとしたが、何分ゆるさねえ『晩まで。』とかしやぎつて内へ歸ると、墨濱の鞠場が來て『何か雅物がある。』とかいつて見せの、それから例の茶の湯よ。さうすると、既に危く見えたる所へ、青樓と花街と那可之町の茶屋が『異說さん、どうでござります。』といつて、どんとおしかけの『此奴は奇妙だ。』とか何とかいふ内に、堀江町の庄藏が所へ人をやつて、ざつと鰻ばかりが一圓三方と御目にかけられた。シカシ庄藏が所の魚はいいよ。しつてゐるか山田庄藏を。何とおつにうがつだらうが、あいつも地口ばかり云ひたがつて毒のねえ男よ。オイ〳〵、その蠟燭のしんを切つてもらひてえ。コウコウ、三絃を出すか、ハテひかずともの事だァな。あいつも時によるときいてえ事もあるが、まづしばらくさ。江戸ぶしの外此の耳へ入るべからずだ。ひねつてかみがた唄といふ所もわるくねえやつさ。コウ潮來はまつぴらだぜ、おれが前でいたこをひくものは罰酒三杯だ。おれが嫌へなものはかみがた狂言と蛇と潮來だ。併しさうもいへねえよ、今おちやァ、かみがた風が江戸へ流行つて、みじツかな羽織を著る所爲か、生姜な江戸ッ子が多くてうるせえ。物干から唐へ一飛と云ひさうな口ばかりきいて

も蛇塞な家主へあけた様で一向納まらねえ。コウつかねえ事たが毒庵を知つて居るか、しらねえの、あいつも久しい幇間医者よ。旦那また久しいものさ、、やつかましい手を封じると、陰で本服たあいつも捨てちやア物がねえから相應につかつちやアやるのさ。楠が泣底さへぞの時に達者につかはれるやつだ。此の頃につれてこよう。トキニ、杜撰や強脱をしらすか。何しらねえ、しかねエあへの近所だに、しらねえとはアトうらみだ。いにしへの十八大通相傳の通行もやたせ、おれが引合はせてやらう。あの連中を勤めねえおやア、ヲトはどかりだが、江戸贔屓とはいへねえぜ。トいひながら隠れのねしのふた「ハヽア鮟鱇か、こいつアありがてえ。しかもおれがすきをねらつて、鮟皮をたつぷりみせた所が千両だ。コウ、板は誰だ。ナニ、金おやおか、ム、あの竪え〳〵。コレ〳〵、おへを、ここへトー行つたなら料理番にさういつてくりや。「今夜の大皿は蜜柑酒、湯大根はならねエ」と、言つて樽ひ鳩といふ古手を止めて、ぐつと新手が見てえ。」と、さういや、コレ〳〵まだある、柳齋と山南をまねにやつたが、まだ使に歸らねえかきいて、くりや。彼奴らがくると丈參にさうたせるけれど、酒の相手にはやほでねえよ。何も日傭をいれて酒をのんで貰ふ譯もねえが、このやアおれが初た あしつけ足さつし、酒も行年書をするやうになると杖を突いて郵可六町さ。このやア今ッからためしみにしてゐる。トト、いかならら「なんだ、かうきと騒々しい。隣のお座敷は大きな蟲の參會と見えるナ。にぎやか

に見えてさみしいやつよ。晝食ぐるめ南鐐一片が高だから、大ぶたが二枚でると、ひつぱり合つて餓鬼道の體想だ。常にお茶をひく慈姑や獅子茸まで羽がはえるといふもんだから、なまぬるい味噌吸物もけんまでしてやる方だ。下戸の講親が肴札をかなじむから、上戸の講おやが板じばりで鯨舍をはずむといふやつさ。餅をくひながら將棊をさし居ると、生醉が來てめつちやにかき廻すもひさしい株だよ。シタガ鯨舍もあんな座敷はおそれる事だらうス。女護の島へふきながされた串童といふもんで、一人か二人を大勢でとりまいて、お聞だのおさへるのといふ傍から、大坂助に助けてくれなどといふ野暮が出るから、うるせえよなう。あゝいふ時鯨舍の思ひざしといふは、齒のねえぢいさまか、難しさうな生醉へさすやつさ。トキニその酒はぬるいぢやァねえか、あけさつし毒だぜ。イヤよく身にもあたらねえもんだ。十日以來大酒が續くけれど、おらァなんともねえぜ。ホンニヨ、椀久ぢやァねえが、酒にあかさぬ夜半もなしだ。コウ醉醒の藥なら三馬が製へる金勢丸をのむがいい。おれも懷中藥は色々持つ居るが、あれはよつ程能い藥だ。鯨舍の呉れていきなやつは、金箔をかぶつた花柚よ。」トいひながら杯をとり「又おれが飲む法か。コウお泣、チツトついでくりや、オツトよしさ。斯ういつちやあをかしらしいが、つき合ひが廣いから一年の内二百六十日はあすんでくらすのだ。ナントどうだらう、是れでやぼならせう事がねえッ。エヘン。」トひさを四角にしてぐつと上げさせる、きせるといつしよに

ふりむいて見る人なり。

つまらぬ事を苦にする人の癖

此の間も赤酔さまのおはなしできいたが、天地といふものは一たい丸いもので、マヅいはば手毬のやうなかただによつて、其の丸いものが、循環してぐる〳〵とめぐるとおつしやつたが、毬のやうにぐる〳〵廻つたらば、今の地が天になつて、天が地になるだらうさ、もしさうなつたらばひよんなものだす。まづ畳を上へ敷いて、階子を下のかたへかけねばなるまい。さうなつてくると、雨や雪が下のはうから降るだらうから、傘をはいて下駄をかぶつてあるくやうにならうシ、地震があたまの上でゆさ〳〵する。こいつは気づかひがなくてよしと。雷も下でなるから落ることはあるまいていや、これも循環の理だから、雷が這ひ上るもしれぬて。其の時掘抜きの井戸はどうしたものだらう。霜雪は草をたゞるやうにして上から漏むだらうか、雪隠などが第一に困りさうな事だ。どうぞおれ一生に循環せぬやうにしたいものだ。なぜまた天地をよく拵へたらう。俺ならば四角にかくしのと、すわりをよく拵へるものを、むかしの人はどうも智慧がねえ。いつもきかね気にもなかゝらねえが、赤酔さまにきいただけ、どうも案じられてならねえ。ナニかまへどうするもんか、その時は其

の時だけに工夫がつくだらうが、シカシ今がかんじんだ。どういふことで天井の梁がどつさりと落ちまいものでもない。イヤ／＼用心はこゝだ、五尺もよけて脇の方へ寐ませう、さすれば梁が落ちてもきつい怪我はない。全體二階へ寐るはあぶないテ、どういふ事で二階が落ちまいともいはれぬ。イヤイヤ、これは下へ寐ることだわえ。まてよ、下もまだ／＼合點がいかぬテ、ひよつと二階の落ちた時には下に居てぴつしやりとつぶされるわ。ハテ、ム、、あるわい／＼、これは野原のやうな所へ、細い材木で、おれ一人だけの家を作つて這入つてゐるがいい、その事だ／＼。イヤ／＼まてよ、どういふ事で大地がめりこむまいものでもない。ハテ困つた、僅か五尺にたらぬ體のおきどこに困るといふも難儀な事だス。おれタツタ一人のからだでさへ物事を考へて見ると、不安心なものだに、親子夫婦はいふにおよばず、家來けんぞく大勢をかゝへて、安閑としてゐるは勘辨なしな事だぞ。マア元日がくると大三十日がむねにつかへるから、おれが氣にとんと油斷も透もない。錢が八文減るとそばから八文うめる。又二十四文つかふと、すぐに二十四文うめるやうにするから、なか／＼氣の休まる間がない。世の中廣しといへど、俺ほどに物事を考へる者はあるまい。その證據には、親からゆづられた鍋釜竈、寐道具土瓶、手桶一ツ、茶漬茶椀、膳箸、錢が一〆五百六十四文、親の遺言と一緒に受取つたが、今十年の月日はたてども、道具はそのまゝ、錢は今に一〆五百六十四文、一文半錢も多くも

少なくもならぬ、これで安氣だ。此の錢が一文減つても心づかひだが、一文増えても安氣ならぬ。ま併しながら、どういふ事で夜盗がはひるまいともいはれぬ、その時ぬすまれては居所立所に迷ふ。そこゝだテ。用心といふは愛の事だて。あの一貫左百六十四文を、店請合で見せて置けばうかゝそこにも利窟があるて、あの一貫左百六十四文を店請が聞いたらば、慾に目がくれ出來心で、おれが身にどういふ事があるまいものでもない。トいつてあのまゝおくはあぶないもの、そろそろ穴ふ掘つて縁の下へ埋め、そつとむかし蟇になつたはなしもあるから、これもあぶない。いつそうしたものだらう。親重代大切の一貫左百六十四文、ホイわれしにすると大きな損をした。だがそんな事はないが、壁に耳あり徳利に口あり。それは兎も角も、人といふものは、いつ何時相兆相応はかりがたい物だから、どういふ事で今夜の内にも、目をねむるまいものでもない。こゝだテ、用心はこゝの所だ。我等目をねむり候はゞ、壹貫左百六十四文、親重代の品、これにて宜しく葬とむらひ頼み上候と書いて、此の書付をまいばん首へかけて寝ようト、いふをきいて、ト「ひツこめ」りといくらあたけても、落す物もなし、割る物もなし、こゝを考へてみれば何でも不自由してゐるも鼠の居る家は火難がないといふから、まア今夜は安心だ。ながいつ何時どういふ事で、隣から手まやまちがあらうともいはれぬ。今夜は股引をはいて一貫左百六十四文をしつかり脊負つて寝よう。す

はやといふ時ソレ起きるわ、その手で鍋釜諸道具を片付ける、向うの藏へ入れる。イヤ〳〵他の藏はあてにならぬ、やつぱり鍋釜も諸道具も持つてにげる事だ。まかり間違へば親重代の一貫五百六十四文、これさへあればまづ安心だ。」

詞數の多き人の癖

「ちやん六さん、どうなすつた。おまへにお目に懸りたくて一昨日も一寸參らうと存じたが、御存じかはしらぬが、日本橋のへび助どのの事でひまいりがあつて、朝むつくりおきると飯をたべて著を置くとそのまゝ、蛇五右衛門さんの所へおより申して、一ツ二ツはなしを致す所へ、べい助殿がござつて、『かやう〳〵の譯合でござるによつて、よろしくお頼み申す。』と、のつひきならぬ事故、そのあしで福助さんの所へ參つて段々御談じ申して見た所が、とかくはかどらぬ様子さネ。イエまた是れにもやうすのあることでござります。それからおまへ、赤坂へ參つて、四ツ谷くだりをぐる〳〵經めぐつて、小石川へ出まして一二けん用事を足して、直に湯島へぬけて下谷へ一ッけんよる所がござつて、爰まで來たものだから序といふも勿體ないが、淺草のかんのんさまへ參らうと存じて、お參り申して藏前へ出ましてネ、おつな事さ。あのおまへ御存じかはしらぬが、天王ばしの大和屋と申ス茶みせが

ござりますネ。あすこの向圃のあたりで、尾籠ながら小便をひよつて居ると、その隣にも一人小便を致してをる人がござつて、私と顔を見合せると、イヤ爰がをかしい。お前御存じかはしらねえが、千二屋の萬八さのネ、あの人でござりますイ。イヤこれはお久しいと申して互になつかしがりました。あれは一體御存じかはしらねえが、あの人のわかいじぶんは、傳馬町の喜多屋重三郎と申して、こちらから参ると、左りの方五六けんめに、今も大きな土藏がござりますネ。今は代がかはつて他人のものになつてをるが、あすこがあるとき萬八さのの親子にいかれた家さ。あの萬八さのは極道作されるくでつい追出されましたが、その後本まへ、是の、ア、あれは何とか申す町内で、ア、あれは何とか申す人をな内へ同居いたされたが、そこにも又かぶつて、當時は罪人(?)の件にをられるさうでござりますが、イヤどうもしぶりで逢ひましたから、昔ばなしがつきませぬ。私もむかしはあすこの友達でござりましたから、若い時分の馬鹿をおもひ出して、たがひに立つ瀬ではなしをいたす所で、喧嘩かないましたから、きもをつぶして別れましたが、そとこの夜の五ッじぶんに宿へ歸りました。そこで、くたびれはてゝふせりましたが、また昨晩も寢こみに使をうけて遠州屋の御やしき様へ田舎の振で出まして、七ッ頃に歸宅いたすと、お隣さまも及びもこざりませぬ。私の顔が、みぐな乾かはゆうでまこざりぬのに、玉るりから、イヤ翻に上るかと申し、は忌詞でござりますが、イノそれ、何す、旦那

じかはしらぬが、鶴亀屋の御隠居の松竹さまのおせわで、蓬萊屋の臺助どの方へ縁談が取りきまりまして、昨日は結納が參るの酒を出すわの、仲人が來るわのと申して、一日さんがい家内中がごつたかへして大混雜。かれこれ跡仕舞までに夜の九ツまで掛りましてイヤハヤほつといふ息をつきました。その上に此の節は妻が不快でをつて。イヤ、デモ、妻の姝がナ、御存じかはしらぬが、下谷のお邸からお隙を貰ひまして、此の節私方へさがつてをりますから、是れで少しは間もかきませぬが、まだハヤ、町なれぬお屋敷殿でござつて、これとてもいくぢはござりませず困り切りました。イヤモ夜前はそのくたびれでがつかり致した所爲か、いつも七ツ時分には目のさめるものが、今朝は家内の者と一緒におきました。トキニ、昨日はお手紙。ハイ/\、その節もすぐに參りたう存じましたが、たゞ今おはなし申すわけでござつて、ぜひなく失禮。扨だん/\御心配まことにありがたう。今日も早朝參る筈でござりましたが、神田の八丁堀の、かの御存じかはしらぬが。ハイ/\、ハイ/\、これはお手で下さりまし。イヤモウおかまひなさりますな。ハイ/\、これは/\、ヘイお茶をいたゞきます。エヘン/\。」

人の非をかぞふる人の癖

●「お吉さん御めん。」△「ヲヤお徳さんか。」●「今湯から帰つて来たわね。」△「しよにんならもんだに
う。最うちつとまつて、おいらといつしよに行つたがいいわさなう。」●「それだつても、こう云にも
さんだれがあるてな。」△「コウ／＼白酒をのまねえか。」●「何白で、おいらアしろさといふ物を
かじつたことはねえ。」△「そんならけびて白ざけよ。」●「いやな事かな、辛酒なら一升ぐらゐしひつ
かけよう。」△「いやよ。」●「いやよら凄まじい。コウお雛さまをかざつたか。」△「よせ。これ見な。」
い、こなすしつての上へ も持■上の■をあてりや、△「ヲヤ／＼かはいらしいなう。目の中へ這入りさうだ。ヲヤ／＼かはいら
しいあんばいだなう。何だかおだがきれしてゐるよ。ドレ／＼、うきすなんの、ヲヤ、何かし妻く
もあばれなけりや、このやア何の事だ。」△「ドニヨ、うまず女の雛かしてくら哀れなのといふ事だとさ。
御亭主さまか辞つ居てお書きあすばした。」●「ア、い、なんの事たなう。うそすのとそら吉馬の瓜かこ
う。」△「何だかしれねえでもつた物よ。おいらアの、もつとりつぱになるでもりやとの、女の子は
なしか、ツイ種なしといふもんだから仕方がねえわな。」●「そりやアおたけへだ。昔はむかし雛のよ
ゐざた娘をかざつておくよりも、此の方が増しよ。」●「そのやアそうだけれど、雛さへ出つて見ると
ほしくなるよなう。」●「おいらアうさ／＼したはだか小僧や小人形はいらねえから、昌月か玉山の五
人ばやしがほしいよ。」△「さうさ／＼。そして外にも道具がほしいわな。内月の五人ばやしと道具も

そろはう物なら、なんにもねがひはねえ。うざ〳〵した人形はけつく邪魔だわな。」●「コウ〳〵お松さん所の雛さまを見たか。」▲「見た〳〵。」●「あのさまアみな、ごふさらしな事を。へンかさらねえ内は大造なほらを吹いたから、おいらアよつほど立派かとおもつたら、なんのざまだらう。夫れからおれがの、何もしらねえ顔をしての『お松さんおめへのおはなしの大きな内裏さまといふのはこれかエ。』と云つたら、流石の空云ひも、ハツトしたさうで、顔を眞赤にして『イ、エ是れではないのさ。その雛さまはよそへ讓りました。』と拵えたわな。」▲「全體ほらふきだから、あの子のいふ事はあてにならねえわな。コウ〳〵、そりやアさうと、だほはぜはどうした、納まつたか。」●「だほはぜとは。」▲「それよ。鉢さん所のお釜樣よ。」●「ム、まだ納まらねえさうさ。」▲「ナニ納まるものか。」●「コウなぜあの子の事をだほはぜといふだらう。」▲「お前だからいふがの、京傳が作のあうむせきの中にあるだほはぜに似てゐるからよ。」●「ム、〳〵、さうさなう。その晩の鉢さんのあくてえを聞いたか。」▲「ウンニヤしらなんだ。ひさしい夫婦けんくわだからめづらしくもなし。おいらア未だにしらぬかほの反兵衛さ。」●「それがいいのさ、をかしくもねえ。あの時は誰も行かなんだから、據なく俺が行つてとりさへたが、なる程どつちをどうともいはれねえよ。鉢さんも氣が早いが、お釜さんも口が過ぎるわな。鉢さんのいふ事には『コレエ、あんまり金々と大びらな事をぬかしやアがんな。五兩

や十一番の湯の釜を持つてうせたつて、なけなしの鼻にかけやァがんな。あらァおほぐえ雪の間し
ともおもはねえ。節で拵へた面影が南風をくらつたといふ面で、年中うかねえかほには、寄せの後に
で追倒されるわ。引きずりな女もあるが、たつた二人の身じんまくを洗濯やへやるいくぢなしもねえ。
定するおやァねえけれど、前掛を一すぢやつても三十二文かかるにはとられる。夜の間といへど掃除の仕
か腰巾をあてた事もなし、襦の縫けどな汚し元を隠れ次第に帯もあてず、綻びつた裾の格も
まで積んでおくやら、きの小焚いた釜の中も洗はずに又焚くやら、年中着た所へこびり付いて、一寸ほ
を通かさば去々年あたりの小湯のこびりるわい。行燈の皿の中には先年々年の節分の豆がそろほどに
ふやけてゐるが、これまで二度の煤掃にそれを掃除せうでもなし。火鉢へあたつてゐりやァからから
戸棚の戸へたかつた錆を、はたかうといふ気もつかずに、指の先でがりがりと、なた青をほどうといふ気た
らう。泥でも左衛門のつくかゝァだから、色気も惚気もねえけれど、目貫には生え次第、生爪はばけ放
題、横食をするかしらねえが、油壺がらひきだしたやうな着物のざまで、仙洞おほあからァな
うといふざまだわ。たまたま薪を焚けると思へば火鉢の炭団へ熾子をかけて、火鉢の中へ涎を引く
とは、情けねえつた無性なあ。お徳さんきいてくんねえ。そのくせに甘味ものも嗅いで、白魚を一文も
まだ煮の重子いりにからりと見付けて、客頭の茸が追いやつてお茶漬をたべようの、向島の酢漬をと

んぶりに一杯あきる程喰つて見てえのと、一年中食好みで、大福餅から海苔鮓で、竈の下は竹の皮の死骸の山だ。あま酒三杯汁粉が五膳、その後で鴨南蠻の二つも喰らつて、そばやの箸をひつぺしよつて、楊枝をつかひのしやあ／＼でゐやあがる。貧乏神の巫女が風の神の釜祓に來たといふざまァして、ふて寢の捨礫も見倦きたわい。日本國中廣しといへど、鐵の草鞋で尋ねても、最う一人とあるもんか。いかな氣の能い亭主でも、われには愛想がつきるわい。」トおそろしいあくてえもくてえよ。」▲「オヤ／＼おめへよくおほえてゐるなう。がうせいと長い事だに。」●「そのはずさ、あのあくてえは鉢さんの押物だわな。鄰でふだん聞い居るものを、闇に覺えねえでさ。そりやァいいかの、大屋さん所のおかみさんも今度きたのはむねき者だぜ。」▲「そして面の大きいわな、どうで前のおかみさんの樣にはいかねえのさ。」●「大屋を何だと思つて居るだらう。いけふさ／＼しい女だ。」▲「ろぢの出這入りに人の内を覗つ込んであるくが、どういふ氣だらう。」●「どういふ氣があるもんか。高が知れ居らァな。ソシテノ、あのかみさんはあゝ見えても最う大婆だぜ。他で聞けば子が三人あるとよ。それを伯父御の所へ預けておいて、子の無え面で來たさうだが、大きな喰はせ者だなう。大屋さんも店子の事はいふけれど、ひよんなものを脊負ひ込んだぜ。始終は泣きの種だ。」▲「さうさなう　此方にも里にやつた小兒ともに四人あるから始まらねえ。」●「あの又惣領のお鍋といふがきも口がわりいよ。」

〽ゐだんしねえんな。おひねえ女だによ。」●「ヤヤほんに、表の萬屋のお蛸さんが宿下りにきたさうだの。なぜ長屋を廻さねえなう。タシカ表は歩いたさうだ。」〽「おいらア裏店だからつき合つては見つともねえといふ氣さ。よしてもくりやだ。うら店〳〵と下直にとり扱やアがつても、裏店はひとつだア。燒けた錢一文表店から貰はうぢやアなし。アノお蛸さんは内にゐる時分から世事のねえ大面な子だつけが、お屋敷奉公をしたら嘸かしおもひやられるの。」〽「ウンそれおつたものよ。きつい大違[illegible]番を遂る序にもやうど裏口で逢つたかの。」思ひの外愛想がよくなつたぜ。其のかはりに肥つた〳〵〽「もとへかへふとつもやうよ。」●「蜘蛛とも何とも瞥へ様がねえ。立つても行くにも横に歩けるやうだ。」〽「ひさしく聞かねえが三絃はあがつたかの。」●「不器用な子だつけ。アノサレ、胴間聲の琴に耳に付いたつけなう。」〽「ひゞの入つた鐘ななう。あれでも祖馬鹿とおつて御祝儀さ。」●「野暮鐵といへば、お前の好きな祭文をよむ坊主は久しくこねえの。」〽「さうさ、おいらア祭文も能いが[illegible]しがどうも能いよ。今に來るだらう。」●「又百おごらうか。」〽「お互に百文ともれ[illegible]」●「[illegible]寺の坊主おやアあんめえし。」〽「内でごとをいはれるもだもだよ。」●「どこの内でもかみ[illegible]るといつてごとよ。何にもむだはねえけれど。」●「しかしむだのねえともいへねえかな。」●「それだつて、どこのていしゆもてんでんにだりおくるから、ちつと[illegible]の留守事はゐるまいかさ。ヨ

ウコウ横町へ新店のあなごやが出たが、きのふお魚さんが行つて見て、いつそよくするといつたよ。行かうぢやァあるめえか。」▲「行かう〳〵、針箱のひきだしに四百程はほまちがあるだらう。」▲「小使が入ると云つても、二朱くづして見な、いかつばちもつかひ出はねえなう。」▲「ほんにさ、ドリヤお晝の支たくでもせうか。」●「まだ早いわな、最うちつとずらすさ。そんなに手まはしをすると、お夜食に杖をつくわな。」▲「さういひなさんな、あすこへお日さまが來るとお晝だよ。」●「何まだおしやべりの八百屋が來ねえ。」ト、右の袖で口をふきながら長きせるをバタリ。

四十八癖初編 終

眞君曰吾一十七世爲士大夫身未嘗虐民酷吏周人之急濟人之乏容人過憫人之孤一心如此聽命於天昔依此行天必降福

四十八癖二編標目

○幇間めかす素人の癖

○大言を吐いて諸道を譏る人の癖並に兇く應答をする人の癖

○陰で舌を出す人の癖

○金を溜むる人の癖

○金を無くす人の癖

○浮華なる人の癖並に不實者の癖

通計八種混六扮

幇間めかす素人の癖

何屋何がしというて、きつとした世わたりの業もあれど、なまけ者の渡世ぎらひ、年中親のすねばかりかじつて居て、あそびたがるが此の人のうまれつきなり。れき／＼たる一家親類をもちながら、同輩の人に、おひやり、おべつかをつくし、人のさけすみをもわきまへず、恥を恥ともおもはねば恥かいたるためしもなし。是れいかなれば、他の褌で角力とらんことをおもへばなり。金儲くるすべしらねば、金つかふ事もならず。酒色の街に業をさらして、たいこもち同様の行ひするも、他のおあまりを食らひ、銭の出ぬ酒を飲みたがるゆゑなるべし。▲ばち／＼とした南部しまのまがひを上に著て、緋はかたの帯、下著は一反十八匁くらゐする、眞岡木綿のさらさ染に、ちゝぶきぬのうらを付けて、遠目に本さらさとごまかすやつなり。羽織は黒つむぎと見せて黒さんとめへしやれにすがぬひの紋所大きく、もちろん仕立は、まへさがりなしにずんどぎりのみじか羽織、綿をわざとたつぷり入れさせ、黒絲のふとき打紐をむな高にむすび、あたまはわざと毛をうすくした由兵衛奴、やゝもすれば宗十郎の聲色をつかふ癖あり。○料理茶屋のはしごをばた／＼とあがつて來り、下へむいてすてぜりふありて、片手を手すりへかけながら、一ツぺんずういと見渡し、「ヨウ。」ト、うしろへ反身になり、わざとまじめな顔にて、おちついた

ものいふ「コレ、これだものな、油断も透もならねえ。今朝あさ湯へ行つて運氣を考へたところが、ええきんかたはてつきり迎酒だト、ソレ、おほかた揉皮か冬鰹だらうと思つて二軒行きやした。ところ、裏に飲みとは夢にもしらずだ。シカシ中らずといへども遠からずだネ。イエサ、二軒の内と思つた図があつれたから、待てよ、ト考へながら安の前を通つたら、二階で牛裏さんのアノ声が聞えやした。ヘもし、あの奴、アノ声は天地廣しといへど、最う一人とあるめえネエ。イヤ、、、、、コレ、何エ、何か又、あつちの方で悪口が始まつたネ。」どうするもんか、嫉ねく、それが原。ト、、あごをつき出すをきつかけに、在のふ小さいれに、耳をつけて、こればわるい地口をいふ時とをく、頭と下をさて下りて「何エ、何か悪口か聞えねえ。」トお前坊、取次いでくれねえか。」ト耳を、ム、、ム、、あの糠味野郎の請取か、へ、路を通つて来たといふ奴かへ、ヘ、まア安珍いたらまだ。トキニお一杯のお間はござりませんかな、コッチ黒蔵と合点くのかこト、一杯「ア、漸と人心地だ。モシ、いつかの藤原以来大汗になりやした、ハイおつきあひ。」トいひながら手を出す「お酒あ最員分に水をふやせろ、心意氣の能い者はてめへ諸のだ。牛裏でも牛裏さんも實は根みな仕打さ。一寸お使者があつても詞はあたりやすめえ。ハテどうせわたしに見こまれたが因果へけれけへ、そりやァさうと此の出物のやうすだがァ、一番口は切れたといふ様だ。ヘ由良の助おそかつたわやいツ。ヱ、ごふはらだ、思ふさま食ふ法にせう。買ふは損食ふ法大事、和坊大師

ときこえるか。コリヤ、なんにもいふな洒落ではないわ。」ト、又宗十「ドレ〳〵まづ出し物を一見せばやと存じ候。まづ座著が厚燒の鷄卵だらうス。今朝はまだあんまりお早いから、まづ是れでお一ッとか云ひの鷄卵むしや〳〵。トコロデ、ゆうべの殘を、爰にある提蓋へ積んで出したといふやつか。慈姑のよせもの、こいつが惡く甘いやつでいかすト。小海老の照燒が落武者といふ身で、たつた二騎に打ちなされてゐる內が不便だ。さうかと思へば、鄰のとこぶしは千刻前の禿といふ身で、かじけて重なり合ッ居るが一ッも手つかずだネ。爰にさつばり死骸の見えねえ物がある。こいつは何の跡だらう。ハテナ、あたらねえわエ。チト移り香でも嗅いで見よう。」ト、中鉢をかいで見て「ハテナ、鼻高しといへども貴からず、どうもしれねえ。エ、何エ、エ、ごふはらな、今一足はやくんば、斯うやみ〳〵と食はれてはしまふまい。斯う云つちやァどうか狼に食ひ殺されて跡が敵討にならうといふ條だネ。サアサア最う何も食ふ氣はなし、座頭といふ肴を皆しめられたから納まらねえ。チヨツ、悔むべからず、朕が不德とあきらめる事だ。是れから酒でも飲まう。トキニ、これより二番目といふ肴が出さうなもんだネ。」トいふ所へ初段のみそ吸物一人前もて來る。「ありが〳〵。先刻から彼處にある吸物椀の中へ魂が半分飛ん居た。ヘン安いやつさ、いかに跡から來たとて俺が分の味噌吸が出さうな物だとはおもつたが、そこが內端者だから默りんでゐやした。まづ吸にありつき、ハヽァ田舍味噌とひねつた內がいい。ゆうべ氣の腹は

名古屋味噌か白味噌でいくとすつぽは江戸へやせる。通例と見て、椀も出されねえ所が出来た。文の内はまつに家ちやすまえ會席奇妙さ。あの最う飲めも食へもしねえ所へやくらとこじつけて出す内は差障す、其の人數を見切つて出すといふやつが流行だ。たつた三人の客數へ大鉢の饗膳、大平へ汁溜皿で依相がもやしを負つて、切身と竹輪が立泳ぎをしてゐるのも、中でござえやすよ。爰らの庖丁が取つてやらねえ若ぇ料理通にあらすさ。ヨウ娘へ、ヱ娘と云つたら他に返詞が有つたぜ。ヲゝ料理番は河岸から歸つたか、ナゼ、内に居るか。ヲヽ、爰ざやす御亭主が買出しに往くか。ハ、ナ、此奴は穿ち損ひおされ山ねこ、シウシもう河岸から歸つたらうの。ヲヽ歸つたと。ヲ早く二番めを出して貰へればト……まつたの。これもいはずともの事だらう。下で如在はあるめえ。と言はでうでしよと。爰でお頼みはげすトツレあつかく燗をして貰ひてえ、二三日つゞいた腹だからつめてえ酒は通らねえ。ナニ、此の酒をあけろ、どうして／＼、勿體ねえ。酒客が下卑た、酒の罰があたる。お燗のよさ所で半平さんへ上げるといふ所だが、半平さんは他にはつかぬ強ひて、ぬしはとかくのがれたがるナ。強酒さん半平さん、ひうどろ／＼こひうはどうだ。ウツヽト、例の幽霊出来か、あのおどろ／＼、儚なおら爰へ渡してくれ給へ。ナ、どんなふうで、やつかましい、とうらならねえ。ニは知れぬ、ヲレも素人らしい、どうしたもんだ、おすへ擔らねえやうに、ヲレ／＼、最う此上膝の上だと身上に拘は

ア。ほんによ、今こそしれねえが土用干の時見ると酒染の痕が白くかびて、膝の上に日本の圖が現はれらア。コウお酌、てめへに教へて置かう。縮緬の著物へ酒がかゝつたら、熱い灰を上へふりかけて、暫くぢつとしてゐるだ。忽ち燥くから燥いたらば灰をそつくり捨てゝ、跡をはたくがいい。色もかはらず染もつかず、是れ一つお覺えなされても女中方の御重寶、若し御用とあらば傳受書は、二十四銅でお手に入れます。イヤ〳〵若い者さうでない。我には出來ても俺には出來まい、とお立合のうちから被仰るまい物でもない。コリヤ面が看板、元朝から大三十日まで此所が定店賣り間違へと買ひ間違ひ。オツト東西、こりやア洒落だが今教へた事はほん當だぜ。夫れも時過ぎちやア、きかねえ、酒をかけた時の事だよ。ソレどうだ、折節爲になる事をいふぜ。夫れだからあんまり下直にしめえ、恐れおほい事だ。トキニ半表さん、チト上げます。ハヽア右の手を疊につき、左の手で膝をたゝき、座中を斜に見る樣子では、半表さんも醉ひを迎へ出したわエ。なぜだまるか、酒に醉ふとだんまりのまじめだネ。又お押へか、其の何も久しい奴さ。杯の往く度にお押へだネ。半裏さんお間、ナニサ間にお手もとをかしいぢやァねえかネ、そんなら賴まずにのむ方がいい。シカシ賴むだけこつちに一杯の德があるス。まづ飲めの若草か、ウツ。」ト側の手くせ「わたしも酒をのみたがるほど慾をしると親仁のこごとはきかねえけれど、どうもモシ、商賣は否だネ。慾ばつて錢をほしがる、ヘン俗な奴だ。酒

お飲んでおだ口をたゝいて一ぴよこがあらうもんなら、是れにて本望さ。女郎買が嫌ひ、芝居は嫌ひた事なし、酒は嗅ぐも否、煙草は煙を見ても酔ふ、肴はなとゞさくて御免、只銭金ばかりほしがつて咽口を干す者は此世からの餓鬼道だ。ありやアおめさん人間の法に背くから、目からは獣に近いとおもふ。ドンドトいつその事お飯を断物にしたらよささうなもんだネ、わたしは気になやアとアネうだ。世の中をズツと申ためにて悟つた所が、ですそんなものさ。ハテ悟りやした、悟られますか此のねが出来るものか、まア第一親父やお袋がこゞとをいふよ。所が此方悟つてゐるもんだから、商事頓着せず。女房もたず子にもたず、親類つき合ひせず、チツト悟つたもんでござりませう。故断う悟つて見ると、商売が否になつて、山奥へでも世をのがれて、天窓を丸めるやつだが、チトそれも古風な悟りさ。そいつをズツと裏を行つて、やつこあたまで山奥は愚か、内にゐても寂しいから、色と酒の賑やかな所で行ひすましてゐるといふ所は、こゝあたりがてうやアねえか、いまこゝらが悟りの場。チツト肴は拙者が御自由にいしあがる。コレサノ〳〵、其の慈姑とは何事だ、先の鶏卵の裏を行つたト、慈姑、悟りだ、おきやアがれ、何、丸呑みにしろと、久しいもんだ。ホン半頓さん、そのまは情なき論言だね。此のまあ慈姑がどうして丸呑みにいくもんか。生の鶏卵を殻ごとならイザしらず、食よりは太夫前丈だけれど、此の慈姑は恐れやす。コレサお前、でゑへまで可聞く桶に、コレ馬鹿をいふな。

此の慈姑を呑まう物なら、咽がごつくり往生だ。何ヱ、物食が能いヱ。やつかましい、又ふさがせる法か、半裏さんはどうもならねえ。アレ、また半表さんも默つておいでなさるかと思へば、出語りのワキ師の樣に時々獨吟がまはりやす。此の慈姑が丸で鵜呑になる物か考へて御覽じやしな、あれも他の子樽拾ひス。コレどうもならねえ。先達むかう島へお供の時も、活き居る蜆蚶を由葵醬油で食はせられて、家根舟へ歸ると彼の、綾瀨仕入の蜆汁へ、舟蟲の這ひ込んだ奴を、お目通りで又食へだ。」がにがしい顏して「他の者で御覽じろ、食ひもせうが大食傷だ。モウ〳〵惡洒落は眞平々々。ハテサ丸呑みにのめなら呑みもせうが、慈姑ども其の味ひをしらずた。ウツ。」ト、例の手くせをして「どうもならねえ〳〵。」トくちぐせ。

大言を吐いて諸道を訕る人の癖
並によく請け太刀をする人の癖

金があつてたはことをぬかすゆゑ、人がハイ〳〵とうけてばかりゐるをよき事と心得、われおもしろの人かしましといふ人物、●「コレ〳〵好助子、もうちつとまつがいい。きのふ孔糞が所からおつなものをもらつた。何を、アノ何さ軸羅洋でとれるハンカーツー、といふものス。定めて承知だらう。」

△「ヘイ〳〵存じませぬ。何か珍奇な物でございませう」●「これ許りの壺へ詰めて来やした」何れ国産にうまき物は絶えてない。「〆ねおつでごつす」△「それはいたゞきたい。どうも妙な事には、あなたへばかり珍物がふきつけた内がおさまれ入ります」●「此の間物産家にたづねたら和名をすいとふきうて。「ムヽそれを手前味噌で漬けたと見えて、はなはだ鹽が辛い」△「でござりますか。ハヽ、さんはど、これはさやうでござりませう。ヘイ〳〵、いづれさす。遠方よりくるものでござりますから土のはまではござりますれど、ヘイ〳〵、しかし何角と申しても山海の珍味が自然とあつまります所が、江都の御繁栄でござりますヘイ〳〵」●「是れハ、肝がよくはその肴と一緒にすつぱの壺を出してくりやロ。ナニカ、肝はお嫌かネ。ヤ、政が。政がやすいかねえ、肝ばかりはお歯にさせるがいゝ。他の肴はどうもいかねえ」わたしは歯がむづかしい、所謂地蔵菩薩といふ酒で、麦酒に甘酒の上を燗にしやうれたはおそれるやつさ」△「さやうでござりますヘイ〳〵。酒は燗が第一さ」●「わたしはチトあついがが好きだが」△「ヘイ〳〵、酒は熱いが能うござりますヘイ〳〵。ぬるいのは大きに申でござりますヘイ〳〵」●「そこでわたしは他所ではのまれぬ。そこへ行つてきついのは酒好きだ」△「酒好きとはあれは別でござります。ヘイ〳〵、何でもあがるから強健でござります。ヘイ〳〵、ヽハヽ、ヽ奇妙がござります。あなたのお嫌ひな茶袖でまあ、此の間は茶漬いつさんまい。誠にネ、この

かたまつてでござりますが、ヘイ〳〵先日もあがりましたらばヘイ、伊賀の水さし、ヘイその外に、銘は源氏と申す宗丹の茶杓を拝見いたしました。ヘイ〳〵。」●「それは拂ひ物かの。」亭「ヘイ。イエどちらからかお借りなすつた様子でござります。」●「井戸の茶椀を持つ居るぢやァねえか。」亭「ヘイサ、夕暮と申す銘で、ヘイ〳〵。あれも借物でござります。」●「おきやァがれ。」亭「イエその中に奇談は、水さしでござります。正金六十両が物はりんとあつて、私どもがヘイ、五十両なら請人に立たうといふ品物遠州さまの五月雨と申す序語の手紙、勿論へがしてござりましたがヘイそれを添へて三十両でお手に入りましたげな。ヘイ〳〵、餘程のお掘り出しでござります。ハヽヽヽ」●「高金な物を安く買ふは祿のある者の業でねえ。ハテ高い物は高く買ふで、足下たちが渡世になるといふもんだ。ほり出したと云つて嬉しがるは商人のことでごつす、素人はほり出されるがいい。ハテサ、價の貴い所で道具にもなる、自慢にもなるが、下料な品では祕藏する甲斐がないでごつす。」亭「ヘイ〳〵左様でござります。」●「ア、茶伯が茶の湯もよせばいい事さ。なぜだらう、にじりあがりから窮屈に這ひ上つて、乞食の茶椀で古池の水を汲んだやうに青い湯をのむ事もねえス。そのうへで亭主の身についたものを一々にほめこゐばすだ。何の事はねえ、つるしようけいはくをのべて、貧ばふ神の祭をするやうなもんだ。あの男の見識もあれでしれたものだ、學問を仕候といつても言行相違してゐる。

なんとしても／＼、篤行の君子といふものおやァねえ。」我が日本にうまれて唐山の事ばかり羨しがるであるから、本意でねえの。」△「さやうでござります。へイ／＼居を品川にうつしては、漢土の蘇州にかよはんことを思ひ、驪を目黒に放ちては、唐人の人別に入らん事を祈る、といふ所でござりますか。ハヽヽヽ」●「さうさ、しかし又茶柏が内君が國學をはじめたとか云つて、舌つ足らずな物言ふやうに萬葉家の和文を書くにもおそれる。鎌足とか猿田彦とか云ふ名を追つて、異様の名告をすれど、皆何がしの聲色で。」△「へイ／＼。これの日出づる國とか申して、日本を尊む所は至極よさしうござりますが、兎角近儒と忌敵な所が、どうも日本魂ではござりませんで。」●「あれは念佛と法花、古方家と後世家、犬と猿、下女と丁稚、どうも中の悪い事は仕方がない。國學もまたそれよけれど、鹿杖傳萬葉だて。私が此のごろまる人を大きに嘲したて、それは何だといふに、[illegible]道からの案じで、新萬葉といふ歌の體を立てたが是れはどうでごつす、ええ潮汁といふ事かあるめえ。

どろみがたあしくごらかしいをとりつきずたわろさよ今しほこよかと
泥　海　潟　足　踏　魚　漁　夜　味　悪　潮　来

△「これはまことに口偏おそれ入りました。イヤモじつに感吟約りますね。」●「どう言ふね。古學者には斯うはよめねえ。近儒をよませてはこれは又お茶の粉だて、これはいふには及ばねえ。扨何はどうでごつす。久しくあはねえが彼の秀氏麿が亂舞は。」△「イヤこれは、まずます／＼でござりますね」●「兎角熱

がさめぬかの、こまつたものだ。謠をうたふの、鼓をうつのと、いらざる事さ。早くいはば、畜生の皮をたゝいて幽靈の噂をするやうなものだ。すべて何業によらず、わたしが目から見ては孩兒の戯れだ、一々とるにたらぬ。まづ碁將棊といふものが暗の喧嘩、鞠を蹴てなにが德かとおもへば、腹のへるばかりさ。詩歌連俳、香茶の湯、遊藝すべて屁のやうなことでごつす。六藝の内にも就中書家だ。それも世上の書家は各能筆だが、アノなにを見なせえ、假在行が手跡を、あれでも書家の氣だぜ。和樣は俗だとかいつて、唐樣を書く所が、所謂石摺手で、横筆逆筆をつかひ、更に書法といふ物をしらねえ。あれは聲色つかひで、只文字の形を似せて心をとらぬ。あのことを書奴と云つて、文字の奴だとある。和人の唐樣が習はれるものかと、唐人をいつばし呑込む氣でならふが、眞面目といふものを見ずに、墨本ばかりだからひとつぱも役に立たぬ。ハテ墨本といふ物は、まづ眞蹟を雙鉤にして石に上せ、木に刻する。だん〳〵傳はる内には眞蹟と大いに違つて、其の上に運筆の跡が見えず、死物のぬけがらを習ふやうなものだ。則ち畑水練、火燵兵法といふたぐひの物でごつす。どうもあの男等は見識が低い、これにてつき合はれぬでごつす。」△「イエモあなたの仰せられます事は一々御尤も、へイ〳〵まことに高論でござります。へイ〳〵どうぞして氣をつけて上げたいものではござりまするが、兎角目のさめぬでござりまするて。へイ〳〵アハヽヽヽ。」●「サア〳〵酒が來た。一椀喫し給

「ハイ／＼これは／＼いづれも結構な御品、イヤ／＼[illegible]結構な御品を[illegible]ありがたう存じます。[illegible]
やうなに雑体を頂戴、ナニこれは實に奇絶、エヽこれはどうも實に奇絶、一[illegible]ハイ[illegible]も恐れ入りまする
ナニハヽア此れが肴のやうはござりやせぬ、[illegible]奇絶、ドこれはどうも、實に[illegible]、御
酒と申し、イヤ／＼[illegible]でござりますが、なにしろ仕合、ハヽヽ甘露／＼、なんと實に奇絶、ハヽヽ、ハヽヽ、
ヘイ／＼。」

酔で舌を出す人の癖

「ハヽヽそれはうそか、無学文盲聞取法門のくせに、[illegible]するかはいゝかと思つて、[illegible]こゝに
なつきなる[illegible]なんだ[illegible]どうしてもねえものを化にせて、うぬひとの[illegible]をいひける
やつこ[illegible]ナレ／＼くけふも酒けたそ／＼、しつかり酒けさせたてえんその時分を引出さうと思ふか
から、ぜひなく酒けてはゐるが、ほかの者がたかり／＼つゞくしんぼうもやつてねえ[illegible]ほう
といふ息が出る。よく酒の前からはじまつて名酒のうわさ、何あれが名酒なものか。舌を持つた奴
つといふ者はなるほど生姜にさはとつた。口ばかりたいさうなほらをふいても、まいらかれな酒でも
見てはかけもねえ。こちとらは銭こそなけれ大屋の酒を、木綿屋の七三郎、さては薬研の剣菱でなく

ては腹が合點しねえ。それになんだ。なだものの地藏ぼさつをつけておきながら、ヤ惡酒に出現もすさまじい。ナンノ茶の湯のわけも御ぞんじなくて、和學がどうだの、漢文がかうだのと、へゝおきやアがれ。諸藝無得道でゐながら、書の沙汰までするからあきれるわ。世の中のきいたふうをひとりで脊負つ居る野郎だ。サテモ〳〵恐ろしや、酒が二合許りに食へもしねえ國產物で、やゝ一時うけさせた。これぢやアうけても引合はねえ。一度のうけ賃銀扶持に做つて、一分二百と極めよう。よし〳〵此のごろに三十兩ばかりだましうちに切りかけてやらう。シカシ、典物をはめずば借すめえか、あんな奴にはおもちひれ損をさせてやりてえもんだ。れつきとした諸藝を惡くぬかして、うぬひとりの能い子の氣だから罪は重てえ。詩歌連俳何もしらず、遊藝ひとつぼもらちあかず、手は書いても無筆仲間の座がしら、まだちつと取得な所は記憶の能いばかりだ。口はりつぱにきくから、しらぬ人はいつはい食はうが、二度と出過つた人はたちまち藥屋を見透かすさ。ア、困つた代物だ、金があるからおはいおはいを云へばいいかと思つて、チヨツまア今日は請損。」ト、いひながらぶら〳〵行くしうにまさすればか行三人連立ちてけぶ三子と、むかうより來るは、茶相季氏麿假在好助にむかひ　季氏「好助何所へ行つた、もう歸りか。」好助「ヤこれはお三人さま、お揃ひでどちらへ、ハ、ア慢齋さまへ御來臨でござりませう。まア御きげん宜しうへイ〳〵、大きに御ぶさた仕りましたへイ〳〵。トキニ御茶の湯はどうでござります、相かはらず御風流でへイ〳〵。季氏麿さま其のの

もはとんと罷り出ませぬ。ヘイ／＼、御免下さりませへイ／＼。嘉在行先生は毎日の書畫會で、さぞ御繁多に入らつしやいませう。ナニほんに此の間扇紙の拂物がござりました、お入用なら拔ふ」「ハイ、それはもやうござよい」「イヤしおれは貧乏人ぢやによつて、現銀ではチト難澁ぢや。」「久しいとはアハヽヽヽヽ」「イヤサそんなことを云つてもあれはみな贋物だ。先生達の畫はいかうに當みて買るやう、」「馬鹿をいふまい。香具師がやうに冬も蚊屋を內に置き、他所行の上下を着て居るやうな歐脇者ではないと、此方いたつて不經濟だによつて、背越の器物もたぬ。」「イヤ、かの樓齋は内に居たのでござりまへ、御在宿でござりますか、ア例の大言をしつかり請けました」「扨、此方なども悉をさう申しまいた事であらう」「イヤあの人の癖だ」「陰ではわるくいふといふやつが一番わるい、アレ、今日は使をしてござりました」「アハヽヽヽヽ」「扨あのやうに惡く罵つて、あの男の氣に入るものはひとつもあるまい、アハヽヽヽ、ナニしかしらば、アノ／＼唐紙をもつて來てもらはう」「ハイ／＼さやうならば近日ござんしよ、なぞぬかしよう云つたものよ。どれも／＼高くとまつてゐるが樓齋のわるいといふもののおやアねえ」「マア、あの／＼貸してはあるこのお顏だぜ、唐紙も現金なら買つてやらうが、あの畫ア掛け値なら御免だ。」

金を溜むる人の癖

「世の中に金ほどありがたいけつこうなものはない。此のたのしみをしらぬたはけが、色だの酒だのとばかをつくして、あげくのはては金に見かぎられるだ。イヤ又かうならべて見た所は千兩々々、これこそまことに千兩だ。わるくないてナ。アッアありがたい、お金さま、ようこそ私方へ入らつしやいました。何とぞお見すてなくおねがひ申し上げます。私は主人とも親とも存じてをります故、むだづかひなどには一錢たりともつかひませぬ。世の中の放蕩者は、おまへさまを下人のごとくにとりあつかひ、やたらとなげはふつて他に唯やります、勿體至極もない。此のまうからぬ金錢を、只やるなどといふ不所存な事でござりますから、ソコデおまへさまがたがお見かぎりなさる、御尤もでござります。私に於ては文字半錢只やるといふ事は仕らぬ。サテト、かやうに鼻をそろへて金箱の中にあそんでござつてはなりませぬ。何とぞ早く貸付金におなりなされてお子を産んで下さりませ、一夜でも遊ばせては、おまへさまがたへの冥理がわるい。子を産んだら早速お歸りなさい、極時にお顏を見ますれば又かしつけます。兎角長居はわるうございます。こゝにざつと五百兩お出であそばすが、これを三十兩一分の足と見て、一箇月五五二百五十目、一年に三貫目、まづ五十兩子をうむ、イ

すあれなたい事だ。一両に付いて一首月花夢の利だが、そこにはいものの、新う見なほべて見たのれちは俗とたとへやうもない。世の中の人は花を見る月を見る、そして雪を見るの一、高い酒を喜こつて見すもの事だ、月雪花に本尊をあつて風貫を取らうとはいはぬ。誰でも見られるものにかも負見るない。ゆえし野郊所へ踏出たるも一作がすこ、御下へ上て一面の雪景をせればまお氷す。これも澤山見たくば、どこその競日へ行けば、雑木山のごとくだ。しかし、雪晴の夏を一一度にやれる唱みなつたなら、それがそこのよこる文、月も雪もわが目に居て自由に見られる事だ。皆月見る日を珍らしさうに見たがる事もない。其のひまに貧とへやうしてかせにはなる望の道理かよし、加重の外の晴けがある。どうそして總の雪見に行く隙に、片陰火鉢にあたつて見ようと思ふが、それこそ山本の今の若いものはやくにたたぬ、おれは昔のとしになるが、ついしか火鉢にあたつた事なし。暇で人もとて起きず、先日見た事から、女郎屋の内はどのやうなものか、山谷の堤から家作を見たばかりに冬は寒いもの、夏は暑いものと、むかしから定まつたことを、今年ははじめてしつたやうに、さあつくてたまらぬから角へ出ようの、涼しい部屋で昼寝がしたいのとまごろ、其のせいに金銀を費す。いテあついと云つて暑り殺されたはなしもきかぬから、扇子一本で門口にすゝめば事はすむ。門口に涼めば十六文の風が来るか、樋竹に頭巾で百両の風が来ると、金づくにでもかへければもつとだらひと

つ風が間違ふと板一まい下は地獄の一足飛びといふ船にのつて、琴三絃聲色物まねをいう〳〵ときく事もない。まづ第一身しらずだ、花火をポンととぼして、シユッと消えた所が屁の中落ち、其の金を廻して見たがいゝ、いつかどの利分を得るわさ。月々の利足の事を考へて見ると、うかつに錢はつかはれぬものだテ。白くても西瓜だとおもへばひや〳〵としてよいのに、井戸の中へ長々とひやした上を、白砂糖つけて食ふなどとはばちのあたつたやつらだ　おれは此のとしになれど、選り取つて三十八文といふ西瓜を、生涯三度買つた。まるで買つたはそれ許り、立賣は四文で、斯うだによつて、二十四五度も買つたらうが、今おもへば後悔だ、四文ツヽというても微塵つもれば山となる。ハテなんでも物見遊山が好きでは金はもたれぬ。夏は初松魚、冬は初鮟鱇と、高いものを食つた所がわづか咽を通る間の事。十枚五文の干物を食つても腹にたりる味は同じ事だ。して見れば下直な物がよい、樂しみのあとへは苦しみ來る。苦しみの跡へは樂しみ來ると、若い内精出してかせいだものは、老つて安樂。ハテちかいたとへには、錢金をまきちらして騒ぐ内はおもしろからうが、それは瞬きの間。サア節句前になると方々の掛取がうざ〳〵來る、所で一年中の苦しみとなる。その拂ひが濟んで少し苦しみが遠ざかる。またつかふ、又借りる、それでどうして金持になるものか。初物を人さきに食ひ新店へ人さきに往き、芝居は代りめ〳〵に見る。生醉の揚句は女郎買、開帳ござれ、祭ござれ、人が

屑へ迄すてゝくと言て人は一生身がもてす、いづれ貧乏神の神主だ。何でもあることの中、まことの下宿欠しからすと言へにもいふ通りだつけふはチヤおごりませうと思つた時は、昼飯をのばして夜食と一所に食へば、沢庵の香々二きれで茶漬四膳、鯛やひらめのお菜よりも、腹をへらして飯を喰ふほどうまい事はないし、其の上に一食だから、夜食に四膳食つても二膳徳がいく、三膳で、とまで三百五膳所を、一食で都合三膳、夜食四膳、〆て七膳となる、こゝらが利勘だ。まづ南の芝居を見るにいゝ、芝居は何だ、役者が働くのだ。女郎は何だ、只の女だ。日本人が日本人を見るのだから珍らしい事も不思議な事もない、それに大切の金銭をなげうつ、イヤハヤあきれもしない。トヽいくら一両、二両、こゝが十両、こゝが五十両、これで百両、まんまと、そこで家内が三日のくらしがなる、倹をいれてことしもちやうど三千五百両ののび。イヤまだこんな事ではならぬ。然し乍ら見た所ではいい心もちだ、おれが色はこれだ。山ぶきいろといふ色事だからのあくなんでも、イヤハヤ人をはなす、花見の代りに金見をせうか、酒のかはりに焼塩で茶漬を食ひませう。ドレ〳〵」

金をなくす人の癖

「ハイお前のやうに金の番をしてためてばかりゐるのも気がしれねえぞ、おれは世間がおもしろくてつ

めへてばかりゐるだらう。つかふといつてほしがる金、つかふためにこしらへた金を、居すくまりにしておくも惜しいもんだ。おれにもたせるとよつほど面白くつかつて見せるに、あの親仁にもたれた金は勞瘵が出るぜ、咽口を干して食ふ物も食はずに、あたじけない親仁だ、てん〴〵は覺悟だからいいが、奉公人が迷惑だス。そのくせに人づかひがわるくて大の無慈悲者、慾ばる許りで情といふ事をしらねえ。あんなに金をためても死んだ時持つ往かれる物ぢやアなし、いつまで活きる氣で慾をかわくだらう。實子はなし、跡は他人の物だ。大きな屎癡呆、トキニゆうべむじんを取つたからつひぞない金滿だ。マヅト、此の内十兩で典鋪をうける、ト衣裝がすつかり極る。殘りの十兩が、サア〳〵どつちを先にせうか目移りがする。まづこんな時かたまつた金をつかつて見よう。おらアどうも能い所へ往く事の出來ねえ性だス。考へて見るに、いつでもけちな所でぶんながすといふもんだから、死金になる。今度こそ活かして使はうと思ふが、醉ふといくぢがねえ。マア〳〵つかへ〳〵。なんのこれ三百までいきた人は武内一人だ、まづ往き當る所まで使ふサ。ナイ〳〵か、あどん、コレ見さつし、神棚からゆうべの二十兩を下げたが、へゝわるくねえやつさ。金といふやつはいつ見てもかはいいやつだが、此の畜生め兎角おれをにくんでならねえ。コレ金よくきけ、われは鄰のおやぢが所へ行くと勞瘵が出るわ。そこをおれが所へ來たといふもんだから、一夜泊りが能い最屓だ、翌まではもたねえ

ごッちやりと目のさきをちらついたばかりで、又にぎやかな所へ往くのだ。へッ情なしめ、トせうしてくれる、最うちつと尻を落ちつけてくれなよ」 ト上「お前がさういつたつて、金は何とも思はねえよ」「べらぼうめ」 そこをおもはせらア、よすく金にてえじやうこひをすると小判の耳がきれた。ナア小判公、さうおもやアねえかナ」 とな「おめへ又それを直につかひなさんなよ。二つかひたくなくても奇妙に出ていくよ」 ト上「おめへサノ親方の所の三分二朱も義理が悪いぜ」「二、歸すべい、そつと三分二朱よしさに」 ト上「そしてサノ、わたしが簪も三本往つて居るが、こんな時でなくちやアうけられねえによ」「わたしは欲しくはねえが、金を持たしておくとおめへ直に使ひなさらアな」「ほかアいへ、なに使ふもんか。いいわ、でもおめへのかんざしもうけやな。いくらだ、元金二兩、ヤアあさるしいど」 とな「利ともに三兩だ」「きついことはねえのだに、あんまりきつくねえこともあるめえす。それで都合三兩三分二朱よ。大きかに四兩ス」 ト上「大屋さまが三月たまつたが、そらアもう半月はなれ出る度につらい思ひをするわな。早く上げなせえ、おかみさんの顔付がわりいわな」「そらはうめ、やるめえと云やアしめえし。高が三分九百だ。遣れ／＼、構ふ事はねえ、能い、あすの晩から[illegible]なしだ。おれを使れる程だゝいてくれべい」 ト上「よしなせえ。何のつまらねえ、皆二つも分が悪いのだアな」「一ッ悪いはしれ居らア、こつちはやけだ。そりやアさうと、おれが衣裳はどうでう。半分出さう

か。」女房「思ひ切つて皆うけなせえ。又困る時にはやられるわな。」「それもさうだナ。まづ十兩に四兩三分九百ト。」女房「酒屋が一兩二分。」「エト。」トつくり、び「此奴も三分やれさ。飲んでしまつた跡だから拂はずとも能いけれど、不便だ。」女房「おめへのやうな手前勝手はねえよ、酒屋が聞いたら腹を立つだらう。」「腹を立たばやらずを極めるス。」女房「蟲のいいよ。」「ト云つた許りよ。錢金で人につらア見られるは否だ。」女房「それでまア質はかたづくの。それからおめへ、伯父さん所の時がりはいくらだ。」「ム。さうだつけのすゝそれ〳〵一兩一分よ。」女房「それも歸しなせえ、又あとを借りるもんだ。おめへのやうにして人をこらせると二度目がきかねえわな。」「かへす〳〵。ソコデ十四兩三分九百に、一兩二分ト、こいつを三分やるにして、伯父御が一兩一分、斯うだによつて〆て十六兩三分九百。」女房「まだあるよ。權八さん所へ吉兵衛さんの届物を二分二朱五百つかひこんであるぜ。」「ホヽヽニそれ〳〵、あれも今やらねえと尻われのお陀佛だ。それでもあらかた十七兩二分二朱よ。」女房「私も綿入の一枚も著てえ、不斷著がこれ許りだ。そして襦袢の半衿もコレ見なせえ。こんなに切れたわな、紫か藤色の裁を買ひてえものだ。」「買ふがいい。」女房「おめへも羽織の一枚も拵えなせえ。なんぼ男はかまはねえと云つても、最う一ツあつても能いわな。」「ウ、拵へよう、一兩二分もかけたら出來ようス。」女房「小紋のとほし裏があると能いの。」「へゝお人がらだの、面と羽織と別々に見えるだら

うゝこりゃ無理の當つた償ひに一杯飲ようぢやァねへか。ドレ〳〵肴物、肴屋の聲がするぞ、図へ持つて來たら、あのがてよ、何があるへ。鮪か、鰯か買ふべい。一枚、拵へてくんな。牛貝、トゥ鮮しいに赤貝にしてくんねへ。たひらぎもあるナ、そいつは跡で潮煮として、いつ〳〵、鰹はよさそうに身に取つて、殘りは鹽焼に魚田、ナニかゝあどん、そこの棚に串があるから取つてくんな。ッりすぐにこの串へさしてもらはう。ドレ〳〵頭、鰹のあらはあら潮煮としべい。ドッドそれから潮煮かつらむきにして、たひらぎは赤味噌で味噌吸にせう。ドレ〳〵手ぎはよく拵られると、あらに酉かねえから山の神不承知だぜ、何でもかゝあの氣に入るやうに酉をつけてくんな。あれ貰はうとはかゝ拵へまう。コレ〳〵火を焚きつけさつし。おれが煮方だ。潮煮だんぞ、汁の商にねへ物が出た。よし〳〵、ナニかゝアどん、そこの盃を運んねえ。一分と、ま持つ往きねへ。上踊から〳〵とふあらうが今度買ふまで貸して置くべい。ナニ〳〵つりはいらねへ。邪魔だ〳〵。ヲイ〳〵待つたり。その伊勢海老を五ッ六ッ置きねえ。ナニ七ッある。皆買ふべいな。ヲイかゝアどん、最う一朱遣らつし。いゝえいゝわな。餘りは預けておくから二分持つて往かつし。コウかゝアどん、一両の好きな物だからうでるともかじるともするがいゝ。上「オホヽ。おまへそんなに一時に買はずと毎日買ひなされば いいに。」「そりやア百も承知だが、けふはけふ、翌は翌の風が吹かア。今夜にもころつと往くめえ物でもねへ

え。人間萬事三十日は闇ス、おもひ立つ日が吉日だ。ほんの事だが是れが又、何の何がしとかいふ料理茶屋へ往つて見さつし、おれ一人でも二分や三歩はまたゝく内だ。お酔ひあそばすとべん／＼が聴きたくなるから、そちこち小判となるわ。よしか、内で飲みやァ安いもんだ。ナウ肴屋さん、コウ其のはんだいの下にあるのは何だ。榮螺、そいつ面白し、十ばかりくんねえ。コウ一ッの壺へ二ッ宛いれて、五壺にしてくだつし。一ッの身ぢやァ食ひ足りねえ。壺焼といふ奴はたのしみになつていい。オイかゝァどん、是れから八百屋へ往つてもらふだ。承知か／＼。」女房「今に八百屋が来るだらう。」「それが當になるもんか、人間萬事三十日は闇ス。」ト、いふところへ青物うり来る 女房「オヤ噂をすれば影がさすだ。八百屋さん何がある。」「ヘン見通しの法印さまだ、妙といふとこへ八百屋が来たぜ。八百公、何がある、エ、何でもある。そんなら金があるかッ。何と一言もあるめえ。紅毛のさつま芋、じやがたらの眞桑瓜はねえか。そんりやァじようだんだが、そこにある三ッ葉と生姜、獨活に蓮根といふ物を買ふべい。オイ錢は爰におくよ、好きな程持つていかつし。オイ、又何か来たぜ。七色蕃椒か、アイ唐からし、十袋ばかりくんな。」女房「お前そんなに買つて何にしなさる。」「ハテいいわな、高が四十だ。四十や八十はよしない事にもお使ひなさるッ、これを買つておけば半年はたつぷりだ。オイ四十よ、よしか、請取を書いていかつし。サイ／＼そこへ往くのは伊勢屋ぢやァねえか、四方かありかてえ、

雁火を五升ばかり持つて来や。貝杓子ははやく」「ナニおめへ五升買はずと一升づゝ、買ひなせへ。」「ナニ最中に困る時に」「ハテいゝわな。五升や八升の酒は三日通りで事が済むにかける。それとイヽ断は云はれえ物だ。ハテ人間萬事三十日は闇さ。夢のお六を見る様に金詐の翌は晦日でも済まされる」「ヤアそこへ来たのは神屋だ。エヽ、ひし屋甚由等、ちよつとおもしろし。日光佛揃の景色ではないか、ありや、奇妙々々。五十本ばかりくんな。ソレ錢はそこに出てゐるから持つて往きねへ。チヨツト来たが、こいつはいゝそれよ」「ヨウ貝杓子七色を買つて、また箸のさかな」「ハヽア出逢つておかつし。七色で箸のさかなそれなりの味があつて喰ひでも時があるわな。七色が木なら箸は鰭といふもんだ。ヲヤ来たの四方か、諸白五升、こいつが肴から二番めだ。ソレ一分やるぜ、コレ〜御用、其のつりで由兵衛と云ふ木ヒヨ、赤味噌を三十四文持つて来や。モシ〜その間にな屋へ待つて、ヲヽ〜ヽ上白を一分が持つて来いと云つてくりや。コウかゝアどん、向う裏のお酒さんと、まだ吉公を呼んで来さつし。ソレ味噌は落し味噌で、煮立てでこそ好ただ。それやァさうと、隣の野郎が来たら、金を一分遣らつしに」「ナニなぜ」「先頃中花をやると云つて置いた」「ト花、へゝ能い氣色だなう。わたしは湯具を買はうと思つて居るが、だれさへ買はずに済ますに」「なんの買はつし。金のある時、御戸帳を建立するがいゝ。俺も頭巾を買つても、だれから煙草入を買ふがいゝ。夏も帯もなくたら賤にし

べい。京傳にせうか、江戸橋の竹屋か、石町の松本か、マア此の三軒の内でなくちやア持てねえス。コウ此間からねだるが翌は芝居にせうぜ。翌の堺町は丸三から行つて見べい。あすこの内の鐵といふ者はよく出來た者だよナア。」女房「葺屋町も見てえよ。」「行くがいい。どうせ新道の越長へ行くもんだから見さつし。」女房「わたしは夫れもいいが、此の帶も一筋拵へてえよ。コレ見なせえ、ナント能く御奉公つとめたネエ。」「ウウ、拵へて遣るべい、ナニノきつい事アねえ。ホツト御用か、よくしたよくした。山葵醬油としやれよう。」「ナニノコレ、人間萬事三十日は闇だ。コウおくのお圍さんを呼んで來ねえか。アノしろものは醉ふとホトいやらしくなるけれど、なぶるにいい。ホイ炭がねえ、こいつは南無さんだ。大俵四百六十四文とはすめ〳〵。オイ水屋さんか、二荷いれてくんねえ。そして一杯吞んで行きねえナア水屋さん、使ふ爲の金だア、いくら活きるもんか、ハテ人間萬事三十日は闇だ。」

浮虛なる人の癖並に不實者の癖

ばた〳〵とかけて來り ●「御免なさい。」としやうじをあくる ＾「身上寺あるだ堂建たツ。」●「ナツトそんな古句はうんざりだ。オヤもうお晝飯か。ナヤ〳〵早いなう。」＾「ナニ早かアねえ。お前なんざア朝寐坊ときてるる

から、他のお昼は朝飯だらう。」●「かはいさうなことをいひねえな、わつちらはそんな朝寝はしやアしねえよ。」▲「早くて四ツ過さ。」●「ごめんよ。ハイ、よろしくまうしておくれ。」▲「ハイさやうなら。」●「きつい洒落だよ。コレお猫さん、けふは旦那様がお出でがあつたらやアねえか。」▲「イヽエ、けさいてくんな。横町の調六さんと堀の内さまへ行つたよ。」●「後生ねがひだの。」▲「後生はねがはずともゐるしてつかはさ、遊びに往くのも、こことをいふのを止めてもらひてえ。また、これく〱とするわな。」●「うつちやつておきなせへ。こことたと思ふから悪い、鼻唄だと思つてゐやかしておなさわつちらア亭主といふ者を持つた事アねえが、あれもうるせえ物だらうなア。」▲「イヽサ、もたねえへ、持たねえもすごさにい。すくなく〱も五六人だらう。」●「イヽサこれにもだが、御ありさつでいたゐ入のます。わつちらア娘株だ、正銘の箱入娘だから亭主のわけは御存じなしさ。また、しかれはのけて、亭主もたのしみな事もあらうが合間にやアおそれる事もあらうなア。」▲「あるの段ぢやすねえわな。内證のあるなしで夫婦げんくわも起るしの、年中好い顔もねえわな。そんな時にやア、内にゐるが癪でならねえけれど、おいらア稼ぎ出し往く里もなし、ヤレ〱と辛抱して、顔をそむけて居らアな。まゝ〱しみ〱つらい事があるよ、これもおれが因果よ、ほんにの、因果くと[illegible]するおやアねえか、兄貴がどうらくでねえと、おいらア、こんな内へかたづきはしねえけれど、しかたくは

なしおたふくといふ者だから、破鍋が綴蓋の亭主を持つたのさ。誰をうらむわけもねえ。」◉「ヘン能いおたふくの風をして、なるほどおまへさまはおたふく樣さ。どうせ又おめへやわつちらの身上ぢやア、氣にいつた亭主は持てねえと、あきらめるがはやいわな。」△「さうさ。御亭主さまの方でも御不足に思召すから、天秤にかけると、中からほつきりさ。おめへなんぞも、なりたけ亭主は持ちなさんな。世帶といふ内にも、貧乏世帶を持つたほど辛苦なものはあんめえ。それだから、どのやうな美い女でも世帶にかまけるとの、うさまが盡きるわな。お牀のあげおろしから釜の下の事まで一切がつせい女房一人といふもんだから、顏があらびるやら、ひゞあかぎれがきれるやら、イヤハヤかゝつたざまぢやアねえ。これまあ、ちよつと觸つて見な、手がばさ〳〵澀紙のやうだから、綿入物なんざア、人一倍ひまがかゝらアな。」◉「それでもおめへは、たしなみが能いから身ぎれいだ。表の金さんがおめへの事を、男好きのする風だと云つたよ。」△「オヤ否よ、氣はづかしい。まだしもほめ詞にのせたのは金さん許りだ、噓でもありがてえ。ホンニサ、お座敷ならでも能いからなんぞおごらう。」◉「また旦那さまにしかられようと思つて。」△「ナニおかまひなしだ。一生屁をひり合はうといふ心いきもねえ。ほんの一時のがれさ。」◉「オヤきつい情なし文句だの。」△「錢金もなけりやア、情もねえのス、おめへなんぞもおれが意見について、かならず亭主はもちなさんな、ちつともよけいに樂をしな。獨

おほど無な物はねえによつて●「そりや、、おめへがいはずともだ。、、一年もたつと喧嘩をするが當よ。しかし親が案じねえから、こゝではじまらねえわな」▲「それもさうだが、そこは口先であやなすもわな」●「おいらがかゝさんに甘い酢をやいかねえわな。どうしてくく、こつちが薄齒に出みと、ときおやァ新道を曲つておつにひねるからむづかしいといふやつさ。アヽくく、なんにしてもいやだくく。一生けやうなるもんだ。しれねえで持つたもんだよなァ」▲「一生は風次郎さん。踏い門は一風とねえから、わけい内もふできしやれなさ」●「ホヽヽくく、すりみがきと三十四五までだまに」●「ホヽ、お前どのとしまでもおつくりをする氣だ」▲「そうさ」●「ヨー。おれでも四、わつちもす十までと思ふわ」▲「さういひなさんな。おやしきを見なしれ。たけのぼくくく婆さんが、眞白につくるもやアねえか」●「そりやァおめへでもねえ。お屋敷はお習誰とかやらだ。白粉も濃いのはいやだけれど」▲「さうすい事さ」●「コレ御新さんがおめへの所へ何ぞ出しに來やアしねえか」▲「イヽエサ、筆まはねえよ」●「ハテナ。そんなら松野郎と、黒おゝいとで、一ぱんかついだわな」▲「なんだおかやしいの」●「そんな事でなしさ。おいらがやうな五障三従に何があるものか。男を迎るまでにはうなくはねえわな。コヽ、何かおいしさうな物をおたへだの、ナニ下卑やうなやァねえか」▲「はひるなら、あんと往きなせ。おいしい物なやァねえ。ゆうべ鮪の肉を、買つた煮染が殘つ居たから、

其の中へ鷄卵をおとしてジヤ／＼とやらかしたら、鹽が辛くてへんほうらいだ。」●「いかな事でも紅毛料理だなウ。それがお留守事の奢りか。」▲「しがねえちやァねえか。」●「しつかりかねをおため。」▲「鐵漿壺へか。」●「おはぐろといへば、私が所のは最う出る時分だが、さつぱりつかねえわな。おめへのを今日も貰はうや。コレ見な此の通りだ。」ト、口を四角にして歯をくひしめて見せる（割注）▲「ほんになウ。おめへは後生が能いから、それでつかねえのだ。氣のいい者ァ、おはぐろが早くはげるとさ。おいらはいけ根性惡だから、漿子にちつとばかし出すト、直につくよ。」●「さういひなさんなおめへの歯はのりが能いのだわな。わつちらァ一杯つけて此の通りだ。」▲「おはぐろの出ねえのはこまるよ。おいらァ曲突さまの前ばかりぢやァねえ。椽の下へも漬けておいたから、氣づかひなしにつかひな。燗ざましの酒がたまつて、ドンとあるから、勿體ねえとおもつちやァ入れ／＼した所爲か、この頃のはちつと辛いよ。」●「辛くてもよう不承せう。コウ、後にえりを剃つてくんなナ、後生だ。」▲「ム、剃つてやらう、俺がのも剃つてくんな。お前のは衿足が能いから、しやんとして剃榮えがするけれど、おいらァ坊主襟ときてるからはじまらねえ。」●「ハイ／＼／＼御尤も／＼。先は子供、まつぴら御免さりまし。」▲「ほんの事たァな。」●「いいよ。しやれでもねえ。お前のが坊主えりなら、わつちらのは奴襟さ。」▲「お民さんの襟足は眞直に三本あるが、あれは何襟だらう。」●「五徳えりとでもいふだらう。」▲「五徳にも四

本の弥あるわなア」●「それから三毛猫とりさ」▲「三毛は色がまじるかなア」●「そんな面倒な事はしら無えよ。先の辻番できくがいい」▲「ハイ〳〵、かしこまりました。さりやアさうと、剃刀をお砥ぎんにかして遣つた、まだ鈍アねえ。あの子はなかなかわりうたはうたぞ、貸したものを取りに往かねえ。そやす返さねえ。そしていつでも物を止めてよこす」●「鏝の富さんに研いでもらいな」▲「おふ内だツて、床へ往かアな」●「そんならわつちが研いで貰つてやらう。あの人は氣が能いよ」▲「さうでかいきよ、何だなア」●「ム、ヨ音羽やのすし上といふ所が、何所かあるの。おめへどう思ふか、小つあらア、實體な風で、唐様揃ひの、好い男といふよりは少し勇み肌で、額の字除りか、こ、の前な穏な聲で唄ふといふ男が好い男だよ」▲「そのやァさうさ。小口でもきいて、肌合な男なら、猶好なくつても能いわな」●「誰が氣も違はねえもんだなア」▲「併し違ふのもあるよ。石部金吉金兜といふ野暮な好く者もあるわな」●「さうだけれど、手前勝手ないふ様だが、悪い男は律儀なのがよし、好い男の色氣は傍で見て情しい様だ」▲「好い男の色氣なのは正に艶とも思ふが、亭主に持つたら世話がやけねえでよからう。好い男は兎角女房に世話をやかせるもので、悪い男の癖にするやつで、女房に世話をやかせるもあるか、それは一向式、箸にも棒にもかゝらねえのだ。おもずお君さんはあやかり者だと思ふよ。なぜといつて見な、清左郎さんの様な亭主は少ねえによ。まづ第一男がよくて意氣

で、如在がなくッて世事がよしか。女房をかはいがつて夜どまりにも出ずさ。地色ぎらひで野暮かと思へば、人のつき合ひもするシ、老にも若い者にも肌があつて、酒も深くはのまず、錢もはつはとつかはず、ホンニ／＼爪の垢程もいひぶんのねえ人だなウ。」●「奎體お君さんには過者だ。」▲「そりやア角力が違ふわな。あれがほんの、能い月日の下で生まれたといふのさ。」●「それでも相應に不足をいふが、勿體ねえ子だよ。」▲「おいらならば拜んで持つ居らア。」●「あの子はうろてへると男罰が當る。」▲「オ、恐い事、滅多に好い男はもたれねえの。」●「ダガ悪い女程好い男を亭主にするによ、それだからわつちはお樂しみだ。おめへなんぞはお美しいから、オツたまらう。」▲「また始まつた。」●「そりやアいいがお猫さん。翌の頃、本所のお開帳から、淺草の觀音さまへ參らうぢやアねえか。」▲「よからう。アノ開帳には役者が取持に出るとよ。」●「ほんにか。又かつがうと思つて。」▲「うそをついて何にするものか。」●「オヤうれしいなア。わつちはどうぞ紀の國やの出る日に往きてえなう。」▲「おいらア音羽屋だ。」●「わつちはどつちでもいい。」▲「オヤ氣の多い。道理で此の子は、環菊と四ツ輪を、簪へ比翼に付け居る。どつちらでもといふ氣だの。へゝ心いきがいい。」●「いいわな、打遣つて置きな。おめへも覺えがあらうぢやアねえか、きつい事たの。おいらア、亭主の紋を打たせた。」●「へゝ夢にか、あきれもしねえ。その御心ならヤンヤだけれど。」▲「なんでもいいよ。情なし

みりつち、鉢合は一二[illegible]歩をなさし。「そんなら堪忍してやらう。」△「堪忍もおかたじけない[illegible]
へ著物は何を著て往く。」「半襟物さ。」△「[illegible]しれた事だな。」「[illegible]伊達[illegible]」△「[illegible]の[illegible]
婆さんの著るやうになつちや気障だ。路考茶も山出しの姉が著るから[illegible]
はちつと流行物が遠ざかつた。此間黒縮緬の裾模様を黒繻子で[illegible]はせて、[illegible]二人連で通つたが、
いつそ意気でよかつた。」「ウ、いいの、黒ちりめんへ黒絲といふ所はよく気がついたな。」△「[illegible]上
なども案じて著た者があつたさうだ。[illegible]のはなしをきいたつけ。」△「そんなもいよく／＼翌か。」
其の気で殿さまに伺はねえきやアならねえ。」「まだしつかりと[illegible]ねえわな。」ドリ、其の積
りで後に来ようよ。」[illegible]見た[illegible]消[illegible]一[illegible]の骨になるまで通はにやならぬ、やぶれ
かぶれはあたりまへ。」△「アヽ、せつせエ。こヽ、いちばんききどこだい。」ト、はやしたて[illegible]の間へ膝をすゝめる。「そん
なら後に来るよ。」ト、ながしもとへ[illegible]。△「勝手にしやれ、[illegible]」静かに障子を明けなすつ
「それでもあかねえ物を。」△「誰か押[illegible]かの。」「誰だ、[illegible]郎か。黒い[illegible]をする料簡だ
あるぞ。[illegible]表へ[illegible]出し一此のおさき奴め[illegible]、黒さ、いと[illegible]んでせつかせつたナ。
ろおに[illegible]△「おもふさまつめつてやんなせえ。さあ／＼、[illegible]が落ちた、すこし／＼いくちのわるい帯
が引きするわな。[illegible]弱い子だなう、[illegible]おれが手[illegible]つてやらう[illegible]

ばた〳〵ふみならし、かんばり聲にてキイ〳〵といひながら、どちくるふところへ、七十餘歳とおぼしき大屋さま、せつ隱からひよいと出る。これにて三人びつくりのおもひれ。子もちぶさたに、犬にむかひ、「白(しろ)々々。」

「ぶち來(こ)い。ぶち來(こ)い。」—アレサあま、手前(てめへ)ぢやアねえ。」—

四十八癖二編終

古今百馬鹿

式亭三馬戯作
歌川國直狂画
ひやくばかの
百馬鹿
専用佳紙
精工刷印
不破不落
江戸書賈 山青堂梓
國直画

題古今百馬鹿卷首

それ馬鹿の名目いたらず、朝鮮紅毛はいざしらず、愚癡無智などと卑しめたるは、天竺流のお釋迦の經論、頑愚蒙昧、昏鈍不慧においては、阿房の漢名にして、痴呆白痴とよべるは、唐山の俗語を諳記じたる小説家の助技なり。和訓におろかと訓じてより以降、馬鹿に附ける義はなけれど、安本丹の親玉あり、生通仲、粗貌、いやらぬくれ、猿公、うつそり、空氣の抜け出、悉く古道具にて、間抜、鈍癡氣、由、ばか者、近衛の秤量なるべし。薩摩芋いて来た貨物とは、辻の速き言葉りしか、太郎郎、金仕、燒け老ど、通て通じた隠語の捷徑、長を呼ぶに面長とし、短を呼ぶに不足と、ただ費に讃する間へぞ、替鞋に十の貫あるは如何。抑これほうは好い觀物から甲より、のみよの同価値劇より舍ること斯く、なに惚けた寄せて、悉く馬鹿を盡すば、所謂百の口鼻しも不足か空素手か、伸詰た鼻毛の數へも盡きず、結構人も律儀も到頭ればば同じへげたれなり。野郎は伯父の上に立たんことと難く、胥六は脱作が下に立たん事難くなんありける。爰に馬鹿の馬字を名のりて三馬といへる痴漢あり。自己が白れたるみぱ棚へ放火して世人の暗穴を探し、名けて古今百馬鹿といふ。看官これを閲するとも、人を馬鹿にしたといふことなかれ。素より承知の妄言無稽、寔に花押の否か人真似、三木足

らぬ戯作者がお利口らしさを顧みれば、吾ながら吁馬鹿らしうざんす。云爾。

文化九年壬申九月中浣、京坂風に地方を告さば、常磐橋御門通、淺草筋下ル本町、江戸言なら

は、本町二丁目の木戸から二軒目、惠みを仰ぐ江戸の水、製法の間に筆を採る。

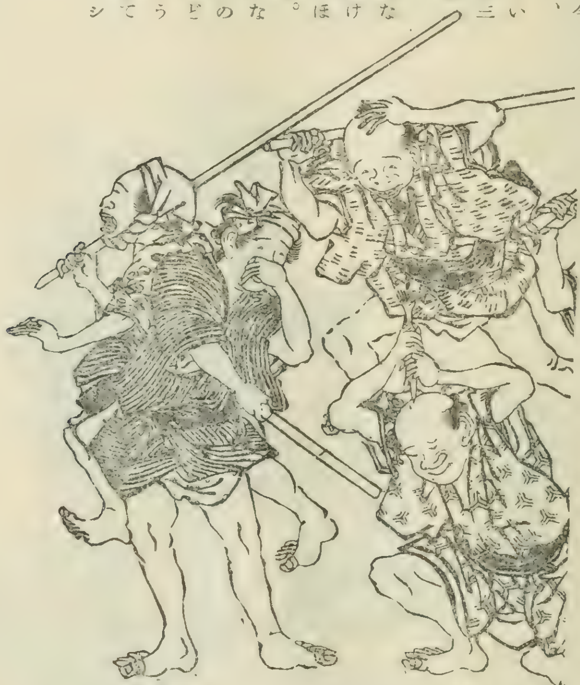
むかし所謂金平本の作者

式亭三馬戯題

楊枝隱の傳

ばかの先生やうじを一本もち出で「モシ〳〵わたくしはこれでも奇妙な術をまなびおぼえました。どなたも何をもかくすことはしなさるな。ただ今此のやうじを一本もちましてひもんをとなへますと、わたくしのからだは隠れまして見えませぬ。すなはちこれをやうじがくれの術と申すのでござります」へこれをかくして両手にてこゝろにかけて目をとぢ一心にとなへて口の内にてぶつ〳〵と唱へをはり、「サアたづねてごらうじろ、わたしのからだはかくれました。」と目をとぢてやうじをしやにかまへ、ちひさくなりてかがみゐる。一座の人々は馬鹿のかゞみゐるがをかしけれども、笑ひをかくして、

「なるほど奇妙な術だ、たつた今まで居たものが見えなくなつた、これはふしぎ、これは妙だ。」といひながら、火ふき竹まきざつぱ三尺ぼうなど手に〳〵携へて、座しき中をたづねあるきぼうにてたゝきまはりながら、馬鹿のせなかあたまなどをしたゝかにたゝけば、馬鹿はいたみをこらへてかほをしかめ目をねぶりてゐるなり。「こゝにはをらぬかあそこではないか。」といひつゝやうじがくれのからだをたゝくに、はじめのほどはこらへゐたれども、大ぜいにうちたゝかれ、遂にはこらへかねてやうじをなげ出し「ハイ〳〵モシこゝにをります〳〵。」



「なるほどやうじかくれの法は奇妙だぜ、さつぱりいづこへかたちも見えねえ。」

「どうかてどたへがしたぞ。しめたしめたく。」

「ア、もしもしく〱こゝにをりましたく〱。もしもしもうしれましたから、此のやうじをとりはたちまちにおすがたがあらはれます。ナントどなたにも知れましなんだらうが、此のやうじがくれの術は、外にしてがござりませぬ。ありがたいことには、わたくし一人でござります」

「おまへはぶたれていたくはなかつたかエ。」

「イエ〳〵さつぱり痛くはございません。なんとしてぼうなどはあたりませぬ。こゝがやうじがくれの法でございます。」といひながらかほをしかめてすう／＼ためいきになり、いたみをこらへる、これ即ち馬鹿のおやだま、これより百ばかのはじまり〳〵東西々々。」

古今百馬鹿初稿標目

江戸戯作者　式亭三馬編

上　巻

第一回　鼻毛をのばす亭主馬鹿
第二回　負けて腹立つ下手象棋馬鹿

下　巻

第三回　来客を叱る[illegible]開馬鹿
第四回　腹自慢する大食馬鹿

鼻毛をのばす御亭主馬鹿

女房にのろけ過ぎては、たがひにやきもちをやきあふ夫婦中。ちわのあまりに小いさかひも、もとより根も葉もなきわけなれば、あとよりわらふでもつたものなり。亭主「おれもいふ氣はねえけれど、ちつとはおめへも料簡して見な。」ト、むしやうに御丁寧なる御あいさつなり。すべて女房の事をおまへ様おぢぶつ様のおとりあつかひ。となりのかみさんなどのわる口いふたねな「一體また鄰あるきをする事もねえス。女房といふものは内をまかなふもの、亭主といふものは外をまかなふものだ。それだからおれがおそく歸るぐれゐはもつともだと、思ふがいい。男といふものは外へ出るといろ／＼の用がふえるもんだ。」女房「ハイ／＼かしこまりました。なるほど男といふものは外へ出れば用のふえる物さ。そのうちにも別しておまへなどは、娘こどもにびりつきの方だから、御用はなほ多からうのさ。それは仰しやらねえでも御推量致してをります。夫だから御歸りもおそくならうシ、又は夜泊り日泊りもございますのさ。先頃のやうなお浮虚な沙汰もうけたまはります。ずゐぶん色事を御精お出しなさいまし。それでおまへさんは御豐年だらうが、わたしはねつからつまらねえものさ。アイ、手まへ勝手もほどのあつたものさね。婀娜文字や豐猫をつれてお舟もようございませう、横町のお損さんと闇八が所のかみさんとあの鄰の何とかいふ半元服の娘をつれて芝居へお出でがあつたといふ事も、ちやんと聞いてをります。なるほど男は外をまかなふものさネ。

その内にもおまへほど上手に外をまかなふ者はあるまいよねへ。」●「これはきつい御迷惑な儀だ。あれは何だわな、あの何さ、ヱヽ、とはうもねへ、とんだ法衣を着るもんだぜ。あの悪口は何だわな、あれは呑太と甚坊が趣向で、俺にも一往かねえか。」とやたら勧めるのよ。おらア否だと云つてきかねに引つぱられたから、ぜひなく上乗で往つたのだ。」▲「イヽエ、それは聞きませんが、そんな噂はなしのつくりことはよその女中がたにおつしやるがいい、わたしはまア不承知さ。何といへばお友だちの所作におつけて、おまへひとのいい顔をしたがるが、そのやアわたしにも耳や目がございます。それもよいのさ、誰もわるいとは申しません。先頃のやうにおかしな浮名の立たぬやうになさいまし。」●「何の浮名がたつものか。」▲「立たれぬことをいふもんでございますか、どうで碌なのはなくな事は起りませんよ、その氣でお出でなせえ。ハイわたしは田風にしたくてもお屋敷に御奉公した者が失せねえで、作りが野暮さ。」●「ヲヤヲヤ野暮とも思はねえわな。」▲「イヽエ／＼野暮でございます。これはおつしやらねえでも譲にかけたやうだ。野暮なものと親切なものとくらべては、お客も御七もさ。するぶんはその娘御やお腰元や、御乳母さんやお後家さまのお取りなさるがいい。野暮利に甚さたとさア、おらアばかりだしはすみますか。」●「リヤおつな事を言ひ出してこまらせるぜ。それはの事」▲「イヽエ聞きませんよ。」●「サア／＼ヨおらア、これでも。」▲「イヽエ、ちつとも耳は貸しませんに」●「ハイ／＼

う云ひなさんな。おれほど老實な者はねえぜ。」▲「ヘンあきれがお禮だ、老實はみんな蟲が食つて浮虛たつぷりさ、それがお屋敷あがりの野暮が目にもしれます。わかい娘こどもはまだしもの事、暗八が所のかゝァめが、なんぞといふとお前さんをつり出しに來て、擧句の果てはわが内へ引入れて近所の女子どもをいつはいに呼びあつめて、おまへにおごらせるのだ。ヤレ酒よ肴よととりよせて、どつびどつびさわぎ狂ふ。あの孔方ばかりも一年にはいくらの事とおぼしめすヱ。」●「そりやアさ、つきやひといふ物もあるわな。」▲「つきやひといへばすむ事かしらねえが、よその女中衆を大ぜい集めて酒肴をおごるからには何か下心がなくてなさるものか。わたしが目見を付けて置くからお前のなさる事はみんな通じますよ、先頃も本所からの使だといつて來たはいいが、何か怪しげに聞くから、ハテナと思つたら一緒に出てお出でなすつたわさ。何所へ連れ往くと思つて、そつと裏から横町へ廻つてみたらば、縞縮緬に厚板の帶をしめた女中が、黑縮緬の御高祖頭巾を被つて角の番屋の傍に立つ居ました。ナントどうでございます。」●「む。」トつかへて「そりやア、何、おらア。」▲「何さ皆しつてをりますよ。あれから晅へ歩行いた事でございませう、而も翌朝色を眞青にして眠さうな顔でお歸んなすつたが、ついと出て一日何所へか行つてお出でだ。大かた暗八が所だらうと思つたから、主をお迎へに上げたら、此の頃はさつぱりお出でなさんねえ、などとしら〳〵しい虛を衝いておこした。あの暗八ほ

どにくいしかたないものはない。ごまごまと二ノ\腹が立つてなりやアしねえ」●「今までのお飼主に違えなんだ。そんなつまらねえ事を何するものか。そりやア、もつともつとのことはわからうけれど、取りとめたはなしはねえのよ。疑つて見りやア方図がねえ。おれだつてその道のこと、餘所から歸つて見ても、おめへが隣あるきをしてゐて、酒でものんで、男とどらくるつて居られちやア、あんまりをかしくねえ」▲「わたしが身にもちつとはうさはらしがなくてはつゞきませんね。先刻もさうさ、お隣のお妻さんが、ちよつと來なことお云ひだから、往つて見たなら最う酒がはじまつてゐるのさ。そこへ往つて、ちよと私はともいはれねえから、一ツ二ツお銚子をたべてゐると、野郎さんや道さんが來て大酒もりとなつたのさ。」●「そこを能いかげんにしてはづせばすむ事か、野郎や道が來て傍に入つたもんだから、てんと面白しでながしかけるだ。亭主をさしおいて男の中へしけ込むも出來さねえ奴さ。おらアやきもちは嫌へだが、内を締める女房の役もやアおめえ、よく考へて見なこ▲「ハテおまへてもあるまいね。どんな好い男が來てるやうか不埒でもするわけでなし。また野暮だからかまひ手もなしね、たとひ手を出す人があつても、そこはお前ひなさるほどの堅藏だから不埒は決してないのさ。女房に不埒をされるやうなお前でもあるまいへ」●「そのやアさうだけれど、情を下げりやアおつきにも思はれる。總體女の身持不埒は長血白血よりは悪い。そんなら、ますます。お

れもやきもちぢやアねえがあんまり踏付にするやうだからいふのよ。」▲「何を踏みつけにした事がございますなエ、じれつてえ。」ト、さい前より綿いれものをしてゐたりしが、「御覧じまし、此の通りの手だものを、是れを男に見せては愛想の盡きる筈さ。ばさ／＼してヨレ、此様に手が荒れるから、綿入物なんぞは出来るもんぢやアねえ。」●「江戸の水を付ければいいに。」▲「付けるからどうぞ買つて来てお呉んなさいまし。白粉文字や豊猫には買つてお遣りだらう、ホンニ三馬が所の薄化粧といふ顔の薬を附けましたがいつそよくのりますよ。」●「道理で美しいと思うた。」▲「ほんにいやよ、すかねえ。此の薄化粧は洗粉にもなるし、白粉にもなるし、いつそ重寶でございますよ。」●「それはお氣に入つてお仕合し。」▲「ハイ／＼。」ト、ひよいとあごを出す。●「お前のおかみさんには髪も髪結さんに結はせたり、着物も外へ出して縫はせるのが御相應だ。わたしのやうに髪にひとりで結ひ、まがり形にも針を通されるやうに縫ひ上げるものはお嫌ひさ。」●「やつぱり其の事さ。」▲「女房は床の間の置物かね。さぞさうおつしやるだらう、唐銅の獅子か着物の布袋さまとおんなじ様に取りあつかはれてはさつぱり引合ひません。」●「久しいものさ。コヲ島田髷も最う古くさくなつたぜ、ナントちと風を換へねえか。」▲「ハイ／＼換へますとも、殿さまの御意なら、何なりと換へませう。締髪にでも、剃下奴にでも、お望み次第。」●「しかしあの當座、片はづしで居られたにはおそれた。」▲「それでも町風にはきふになられねへもの

さ」●「さういひなさんな、尾上斑といふ形を、おれが口を酢くして到頭世話女房にした、こゝは亭主の御丹精だと思ひなゝ」▲「夫れはさうと、文様を御付けておくんなさいましな」●「ム、断つてもう「お前の伝蔵足が好いから御花がすむ」▲「きついよげたのドけたのさ、此様な功上手をかめへて」●「そこが亭主の欲目かナ」▲「いやよ、」●「惟皆に田之助関之助といふ所を酌合してやつてもらひてえ」▲「おめへの口だからなア、世間の贔屓たちが違ふ筈だ」●「ナニサそればかりか、ナニサ雪繭な事さ、ソレいろ〳〵の名あるゝ二个帽を入れたのは吉松茂屋から京へ染めにやつた節縮か、市松上りはいいぞ、なんだ鳶茶か」▲「イヽエ媚茶さ」●「ム、いゝわい、媚茶に黒頭といふ所が、ひねつて裏模様もおつだの」▲「黒裏はおれも一寸たくさんあるから、裏模様にしましたが、おまへの目では粋へなる格へるも黒裏だ、此の模様も可愛らしくてよいねえ」●「ムウそいつもおれに好ませると極富底と琉球紺に、海鼠に酒落なおらしたやつにするさ」●「イヤ〳〵いかな事でも私は海鼠はせうちさう」▲「まアこうさうだつけ」●「お門ちがひさ」●「おれも鰻へだが海鼠は好く好くもねえよ」▲「食物のはなしが出たら煎地の難しい様だが、おいしい食物がたべたくなつた、なんぞお晩へなせえ、呼八が所へ往つたと思つてさ」●「其様な吝嗇なむごつたやい、食がねえ、そんなら鮮鮨が進上にねたろうさ」▲「つきもねえ事だね、七甲けつはいゝ」●「今に魚屋が来るだらう」▲「内で煮たものはいやだから、好

房には宿で煮た物ばかりたべさせて。」●「ア、又いふか、最うおそれる、眞平あやまり。桃川なりと冬鱗なりと仰付けらるべく候。」▲「何にいたさうねえ、おまへのお好きなものをさ。但し女はのけて。」●「是れはしたり又いふよ。ハテ何でもおめへのお好きさ。」▲「茶椀蒸の中へ金海鼠を入れないのをたべたいね。」●「それぎりか。」▲「いくらたべられるものか。女といふものはホンニけちな者さね、驕らうといふ御意が出てもたんとは驕り得ない。」●「茶椀蒸は翌日芝居を見せて、丸三のを食はせよう。」●「それはあり難いねえ。そんなら著物は何にせうチエ、下はさらさ三ツにして上へ何にせうか。」●「さらさ三つなぞは思ひきつていいぜ。黒裏がしつかり揃ふといふ奴だから氣が利い居る。」▲「裏付もモウ、眞田は倦きたから買つておくんなさいましナ。」●「買ふがいい。併し跡月買つたのだぜ。最う倦きたか。」▲「眞田はいや〳〵。」●「ばら緒にでもするがいい。」▲「小僧ではあるまいし。」●「二足の駒下駄も四五足溜つたらう。」▲「あれは段々讓物になりますアな。」●「大層だ。」▲「それでも女に錢金をつかふよりは。」●「アレサ又はじまつた、チヨツなんでも買つたり。一體三足の駒下駄はおいらんの道中する時履いた物だが、今ぢやァ町の女が皆履く樣になつた。いつそ翌の芝居は、襠を著て三足の駒下駄がよからう。」▲「オヤ〳〵けしからねえ。コレ三ヤ、あのの、小僧にさう云つての、江戸の水の詰めかへを買はせて、彼處の向う側の江戸櫻で、常磐香といふびんつけを三本、あれ

は三十二銭づゝだによ。其のかへりに玉屋で[illegible]一筋、おつつけ寒の紅は丑の日に買ふから[illegible]とでござ
いよ。[illegible]代は[illegible]化粧がおんなからよし。其れから越後屋で黒縮緬の頭巾を取つてやら」●「頭巾はとん
だんともねへ。」△「[illegible]年取つたのでござりいます。」●「ム、買ふさ。」△「足袋も瓢箪新道の尾張屋へ
いつもの[illegible]足袋を。あすこのは丈夫で縫もよいから。」●「最う此の冬も七足履いたぜ。」△「髪結さん
に[illegible]はせるさかみさんはたかゝら見ては足袋位はよいのさ。」●「ム、買ふさ。」△「そしてネ、とんだ事
がござりますよ。向ふへ鼠が這入つたさうで、[illegible]箱をさがしてにおいでゝネ、たつた一[illegible]、[illegible]
た[illegible]を、ずん[illegible]に嚙み裂きましたよ。[illegible]「腹が立つてならねへけれど、畜生だから仕方はな
し。まう早速取らねばならないよ。それも越後屋で[illegible]を一反。」●「[illegible]、それでこそ
らう。一反ほどうだ。」△「嚙み裂かれたなア不[illegible]だ[illegible]」●「[illegible]一両か、替へて[illegible]
直に濡るゝから。」△「それでは気がすみません。[illegible]おかみさんたちのやうに、縫物を
いやと申しても見ては、[illegible]によいぜ。」●「[illegible]買ふさ。」△「それからネ、[illegible]、
小間物屋の日松が来たら、此間の櫛をかへすのだよ。あの方はわたしが此間の櫛よりは[illegible]
してあの、ぼら[illegible]の方は、[illegible]に負けるなら不断挿に取つて置かうよ。」●「[illegible]、ぼら[illegible]いあの
るちやァねえか、むだな事だぞ。」△「わたしといへばむだをす。[illegible]何時へかお出でなさる

もむだス」●「ム、、チョッ、そんならむだにもならねえ。買ふさ。」△「サア〳〵口を聞きながらやつとで綿を入れてしまつた。モシ〳〵、おまへ髭をぬくお隙に、そこを引張つておくんなさいまし。」●「ドレ此の綿入物カ。オット承知々々。」ト、上ミの方へ廻りて襟さきをつかむ、△「アレサ、其様に引抓んぢやア、悪くなりまさアな。」●「どうするのだ。」△「大概しれたもんだがねえ。其の手を両方の袖の中へ入れて押へるの。アレサ、手を衛にして。」●「衛にして、ドレ、ハテナ、是れぢやア蜻蛉か。」△「アレサ、右の手を左の袖へ入れて、左の手を此方へ。」●「サットよし〳〵。斯うか〳〵。」△「それでしつかり手を落著けて。」●「ヤ是れは大役だ、コレ三ヤ爰へ来て代つて呉れ。」△「よしか三ヤ代らずともいいよ、邂逅は旦那にもあゝいふ事をさせ申すがいい。辛抱甲斐のない事たテェ。三に手傳はせると綿が引付いて上るから、だいなしになりますわな。」ト、いひながら下前のすそ綿をはさみにて切る、●「オヤ〳〵、産神様がお手傳なすつたさうで、下前の裾綿が多い。ホイ〳〵兎角上前の裾は足綿が入るけれど、下前は多いものさ。しかし下前に綿の多くなる間は縫物の手が上るといふから楽しみは楽しみだ。サア最うよし、ゆるして上げませう。ア、日は短いぞ、何をする隙もない。是れだから化粧をする事もならねえ。」●「やはり木地がお見事。」△「アレ〳〵あんな事ばつかり。」●「けふらは薄化つてるから別してヤンヤだ。コウそこの蠅不入から燗鍋をとつてくんな、お前も一杯飲みな。何ぞ取りにやらう、まづ其の間そこの下

にある皿をくれ給へ。鱠の鹽辛をなして食はう。すツト、鱶形を逆へ與えた、コウ、そなたを向いて見せな、今朝結つたお髪が、とんだ根揃ひがいゝ。今おやす髱下のつかねこの綺麗しがるの。おつきな事があるものだ、おいらもやつぱり髱下の付くがいゝぜ。髱下のつかねた者は黒元結でかざつて髭をして付けたかつたのに、元付といふものはおつりきだぜなう。ト、鼻毛をよまれて女房にまでのろける男、萬一あらば大きな馬鹿。

負けて腹立つ下戸象棊馬鹿

象棊はあやといへども象棊敵といふもの、いまだ見れをきかず、初めて象棊とよばるゝものにいきこゝはたまてなし。一枚二枚とはづす象棊もはなはだ静かなるに、相馬の高上り分別もなく此にしてやられ、金銀を握りつゝ飛を惜しみて雪隠へ詰められ、王が香車にあけらるゝも、たまたま得手に桂車で象棊を指すたゞひの人々、はきあ象棊にひとしきやからが始終やかましくてならぬ。一番勝つと一盤と數へてやらう。といひ、己が負くれば、まけふはなぜか見えぬ。などと、たはことをほざくは野中、盤面もみえぬほど黙重なつての助言だらけ。中にも六十ばかりの禪門一人、のぼせあがりて座を退きしは、一番負けたと見えたり。ナリャ六千キャアノ、敗軍々々、此方は素人の身かうへだ。ナリャとな

たゞお代りなさい、まづいつぷく仕らう。」五助「隠居さん。けふは負けがこむ子。」ぜん門「どうも若い衆にはかなひませぬ。只因二一著錯一。滿盤俱是空だ。」二八といふ人かちほこりて駒を竝べながら、二八「サア來たり〳〵、どなたでもお對手、どいつでも對手だ。此の中での口下開山だものを、くやしくは出てみたがいい。」三吉「出ねえでさ、そんな弱味噌に大平樂をいはせては、男がたたねえ。ドレ、一番敎へてやらうか。」二八「あとで高慢をいはつし、しかし不便だ、チト揉んで遣はさらう。コレ有りがたい事だぜ、おれと指すなどとは二度ならぬ事よ。能く稽古するがいい。強い者と指すとの、へぼ象棊の筋が切れらア。」三吉「其の口を忘れめえによ。」五助「あとでギウ〳〵いふのよ。」二八「なんだ此の五助等が人なみに口を出してからに、てめへたちは歩三兵で相應だ自身番象棊や牀店象棊とは段が違はア。」ト、いひながら竝べるに歩の一まい不足の所へつけ木でこしらへたる駒二まいあり、二まいは半分にさけてかたちのみなり。三吉「サアよしか、しつかりと腹帶でもしめて來るがいい。」二八「おきやアがれ。今に待てと吐すだらうが、コレきめておくぜ、さつぱり待てなしだぜ。」三吉「よしよし。」二八「サア來たり弱い方から出させてやらう。」ト、いひつゝ、飛車角を二まい駒へ拂ひすて、「金銀四枚で澤山だけれど、チヨツ二枚で指してやらうに」三吉「コウおかたじけだ。何の人を、たのみもしねえ事を、コウ飛車角を上げねえナ、どこへ捨てた。」二八「きいたふうな、二枚でも手は出めえが。」ト、いふそばから飛車角を二枚竝べる。三吉「ソレよ

二八「ソリヤそろ〳〵お手傳がついたぞ。ヘン、又助言をせうとおもつて、サア出たり。」三吉「ソレよ

しかし二五チット安をつくではないぞ、安だ〳〵。」[illegible]ためや〳〵、早[illegible]下るとは静かで
[illegible]だ[illegible]来い[illegible]チット〳〵早い〳〵〳〵。二手ばかり余計に[illegible]めか目は[illegible]
[illegible]ところへいて銀が上つて、ソレ角が[illegible]へ[illegible]つたのだ[illegible]
[illegible]おれだ〳〵[illegible]石田で囲つた[illegible]を突き[illegible]
[illegible]ト[illegible]角が取替だわな。」二八「ム、そうか[illegible]角の取替も初心な手だ[illegible]
[illegible]。」[illegible]ソレ行く。」二八「突つかけろ〳〵、トット、なむ[illegible]いつは一番あ
[illegible]〳〵〳〵[illegible]面白い[illegible]
[illegible]角をお打ちなすつたか[illegible]飛車取らうと打つて、[illegible]
ハテこれには[illegible]たッ、飛車と[illegible]談合かい。イヤ断う引いてくれう。」二八「それでもお成の権蔵は
[illegible]香を[illegible]有りがたい[illegible]遣る[illegible]遣つて指[illegible]
[illegible]断うしたらどうすると、ハテ取つてしまふ[illegible]銀がうせると桂で取る[illegible]
車のごとき[illegible]角をおもしろ[illegible]上[illegible]
打つたナ〳〵[illegible]角を打たれようとは[illegible]取れ〳〵」[illegible]
[illegible]で[illegible]は[illegible]となつたのに[illegible]上[illegible]

爰へ香を打つて何になるものか。アレ／＼向うの角の尻ッぱたへ銀を引い置きねえな。」三吉「只とられる。」五助「ム、成か。」二八「ホイ／＼。助言それでよしか。縦ひ成らねえでも角だァ。只とりさつまのかみ。」吉助「そこに手もあれば足もあるス。コウ三公、おめへの手に何がある。」三吉「香桂あとは歩ばかり。」二八「香桂ときにただす、サアどうする／＼。下手の考へ休むに似たりだ。」三吉「ソレよし。」二八「ハヽア銀をぬかれたかいすぐにその銀をとる。ホイ又角の取替となるか。」五助「飛車が居すくまりになつて角の取替つこ許りしてゐるぜ。オヽ／＼、二八が王は今の間に真裸だぜ。ワリヤワリヤ／＼。アレサ、そこを打遣つて置いて飛車をはやく廻す算段にしねえ。」三吉「爰を突走らかすか。」五助「さう／＼。」正助「又うしろからくびを出して オイ／＼三公、王のあたまの歩へ桂を打つて王手とさつし、其の鄰／＼。アレサ馬鹿な者だぜ、王のあたまへ打つて王手になるものか。」二八「かあいや目が眩んださうだ。コレ／＼助言が多いから両方の手へ駒を持つて一齊に指すがいいぜ、それでよしか。ハテナ、角が利い居るから取る事ならずト。まづ王を一間にがして、イヤまづ斯うか。」正五「そりやそりや／＼、そこだ／＼。アレサ、そこへ金を打てばいい事よ。」五助「さまァそれ見たがいい、向うで銀が上つた。愈堅くされるやうなもんだ。」二八「ヘン、おれ一人に三人がゝりだ、それでよしか。サア待つてくれといふめえぞ。ソレ取揃ふ。まづ一番斯う取れ。」正五「オツト／＼、跡王手だ／＼。

とれる／＼」二「エ、いふ／＼しい、そんなら変を一ツまで待つてやらはう」三「お前が舌でなし
と欄あたちやアねえか」二「ハヽヽ一手はいゝわな」三「さあまた待つてやらう」二「今待たすし
よ。変に銀が居て俺が斯う取つたから、銀で拂ふ。ソコデ、此の角を取らうとしたが、それなら
斯うせう」三「又それぢやア三手ほど先だぜ」二「三手遣つた事を下すき直しちやアならねえ」
三「お坊さんのお對手に成るやうなもんだ」二「いゝわな、不便な事だ。待つてやらう」三「二八
こん先刻の高言とは大きな相違だぜ」二「草撰が待つてといつてはすみさうもない事だ」三「ハヽおめ
一人ばかりの對手ぢやアねえ」二「いゝわなりに三手ほどうゝ助言するからかなふものか」三「どうだ、
おれが此の金をとらずに交で王手とするかどうだ。ソレ初王手目の薬」二「マ三初王手なるのか、豊う
初王手は過ぎた」三「ソレ逃げるス」二「与にげたか、卿がらむしやの／＼とたゝつけやら」「ヤト王
手」三「二五かまはず」二「オットト取るがいい」三「コレ／＼三金三の金で取られし」二「ト取れるこう
おも取つてくりまと、ソコデお手には」三「金銀角歩、山々」二「角前にアいゝにあるから皇
うあるはずはないい」「ほんたうないはつし」「金一枚香車」二「ウゝム、斯うう、斯うこざる」三「ああ
徃く、ああ來る、取つてしまふ」二「ハテおも黒くないかエ。まづ要害をかためませう」三「ヤア／＼待駒
か、エ、ばゝつたいな手だ」二「ニイヤハヤ汗き噴集」これは自身番や詠所とらか

てきたなき御象棊を見るものかな。」正「コウ〳〵三公、かまはずに爰から打たつし。ハテサ銀の腹へぴたりさ。」五「さうさ〳〵。道が塞がるから是非とらねばならぬ。トコロデあたまへ飛車が廻る、開馬がきかず筋違ひに退る。小びんへ打ツ。」三五「それでも一枚足りねえ。」正「そんなら爰の歩を成つ置くが一の手だ。」二八「コレ〳〵評議も最うよからうぜ。そこで玉手は如何。」三五「やつぱり金二枚。」二八「香桂他人のはじまりかハテどうしてくれう。ヤまづ王手。」三「かまはず取るス。」二八「すヤ〳〵オヤ飛車が利い居たか。ホイなむ三これは待つて貰はう。」三「コウ又か。」正「また待つてもらふか。」五「イヤこれは未熟なことだ。」三「草閤にも筆のあやまりかの。」三「待つてやるがいい、可哀さうに。」二八「ウンニヤ待つてもらふめえ。飛車角で象棊を指すでもねえ。サア歩を突いた。」三「どうする積りだの、歩を突いて疵をもとめるのか。ドレそろ〳〵詰めようか。イヤまづ此の銀も戴いて置けス。往きがけの駄賃に此の金もしよこなめよう。」二八「トお出でなすかつたか、さうは虎の革の、ヤ褌をかけてやれ。」三「オヤ桂馬のつり褌。」「ハテ捨てゝおきねえ。最う駒はいらねえ。向うは詰みだ。」三「ソリヤ王手。ヘン象棊早馬のごとしとは爰だ、ソリヤ王手。」二八「お手には。」三「何でも角でも、選取つて十九文店へ下に遣る程ある。」二八「まづにげろか。」三「ソレ王手。」二八「取れか。」三「取つたか。」正「取つちやアねえ。」五「とらねえでも詰みだ。」二八「なんだナ、此の徒は、おもしろくもね

えゝ助言も大けいにしたがいゝ。象棋になつて助言があるものか。こちとら依頼人のふたねェのに
から當を遁してゐるが、あれまア遅らひさね。仕方がねへ。三吉が象棋は高のしれたへぼだから、目の當
で指し居れば無論口に助言するぜえ。詰まうか詰むまいがいらざる世話よ。貴様達を相手にはね
らねえ。おつかぶさつて助言するから、盤も駒も横取りだ。うでもなから指すのだわ。それだから見え
る手も見えねえ。それだから上手も下手に負けるわい。岡目なら一人でも定石ありまさあ。
つて見やれ、口惜い事だが負けはしねえ。ひよつと負けた時がそれは畢竟をとあうそものだ、岡目八
目なら何のつきにまけるものか。ハテ高のしれた三吉に、はまァ、へぼの三吉と指すのはあたりまへ
ねえけれど、時の表實によつては負けめえものでもねえ。たとへ負けは時の運で、武人の耳
たぶ、其の日の荒神さまだ。」とこはくなる。「コウ二八さん。」と二八、笑つてゐる、亭主と云つ
た。おれがことを、へぼ象棋だとぬかしたナ。おれがへぼなら、おれに負けたうぬは、へぼの番頭た
コレ他人をせずたらすもしもせうが、他さまを遣いてござるに、へぼといはれては相済みなされねえ。
三番なら、へうぬはへぼといふことをほじつた野郎だア。」「そんなら三度目でもとぬかしたな」
二度待つてもやァもらはねえ。」「先の一度は待たせたぢやァねえか。」「一度は待つてもいゝ、そ
のかはりにうぬがかにに助言の證人があるわい。おらがかたには助言をするものはひとりもねへぞ。」

兵「コレサ〳〵三八さん、どうしたものだ。おめへでもねえ靜かにしなせえ、外聞が悪いぢやアあるめえか。」三「ナニ外聞が悪いと、コレ正助、てめへたちは何の意趣遺恨があつて助言するのだ。コレヤイ、五助も對手だぞ。助言した奴等は片ッぱしから只はおかねえ、象棊は象棊よ、これからは喧嘩の對手だぞ。碁で負ければハテ象棊で勝つわさ。象棊で負ければ喧嘩で勝つのだ。全體助言の爲さまが氣にくはねえ。おれが對手になるからには皆覺期をしやァがれ。」兵「コレサ〳〵三八さん、まア靜かにしなさい。おまへの對手は三吉さんだが、しかもその對手といふは象棊さ。こゝはおまへ喧嘩の場所ではない。ハテ助言した衆も對手の三吉さんもだまつてゐなさるから、こゝはおまへもおしづまりなさい。」三「イヽエ合點なりやせん、これからはどうするか、わつちの氣いつぱいにして見せるのだ。」と象棊盤をかきまはし、べらぼうのさるほゝのと大ごゑあげて詞だゝかい。「どなたがたんとおつしやつてもれうけんに致さぬ。」と、年來の懇意をすてて不和になる人、萬一あらば見たき馬鹿。

古今百馬鹿　初稿下巻

江戸戯作者　式亭三馬　編

お客をしかる太鼓持馬鹿

「イヤこれは旦那お久しぶり、と申したいが、ゆうべも今朝も御目にかゝつたから嘘らしくてならない。顔をトツくりと見たゞけ、其様に流しなすつたらお内へおかしからう。イヤ御亭の殿様の御前なら今お座敷が引けてすぐに出たばかりとなつても、イヤお久しぶりとか、是れはお珍らし山桜とかいふ場だらうが、そこはそうも申さぬ、其様は申さぬ、サア／＼お附合なさい、何か肴もなく一献で、事もねえ、モシ、わたくしどもは朝からの騒動でもござりません。又いはねば何かの事もござりませんとやらだが、是れでもおめえさん、ちつとした医者の倅の端にのぞいたもんでござえましたが、手目にちんぷんかんよりは、むだといふべきいチリ／＼チリツの方が面白くて下手。其頃は先代へ月次の会席に出るやら、怖い物もなく潮来新内、なんでもござれになるやうで、己も取るとまる

の手がまはるにしたがひ、常磐津文庵、富本豊齋とも名告りさうなお醫者様だから、サア近所の者が馬鹿にして風薬を一貼盛らせる人なし。親仁の代脈に出れば病人が不承々々に手を出して、脈がしれますかといはぬばかり。イエ勿論脈もしらねへこと。そらたゞ馬鹿が上達する内にごつと内勘當ス。ソリヤ親類へあづけるかネ。ようかし老實で親類の内に居ようぞ、何がねえ角がねえとお袋の手から内證で引きみんたんの、そいつを代なしして毎晩夜遊び。どうも伯母御もよくせい仕果てて、又候相談に及ぶと、今度は親類一番のむづかしや、閻魔さまが鹽をなめたとも、粂平内が抹香をしやぶつたとも譬へ様のねえ澁ッ面おやぢ、しかも古著屋でこいつ滿とあるやつ。そのくせあたじけないが、取得にはこごとをいふ、何でもぬけ目のねえ伯父御さ。ヤイおらがあづかるからには扉出もさせねえぞ、其の氣でうせをれ、と言ひつける。此方は其の氣でやらしやれだ、何とするものか。當座四五日は二階に居て草冊子を讀ん居たが、サアもう蟲が承知しません。そこで段々と法を書いて、先づそこの内の息子、こいつがわたくしと同い年、ナソレ従弟の事なれば兼て心易し。是れをだましまして店へ寝るといふ法になりました。それから漸うつうくつして、夜そつと出してもらふといふ洒落にはなつたが、著物は著た限り雀、お箭へ殘らず取上げられた事なれば是れにて辟易す。こゝがおつさネ。ソレ古著屋だらう、ネモシ、店に好き次第の古著があるからこいつ面白し、ト剃つへがしの二才を賴んで、コ

し晩に誰く晴着るのため此の言様をこの樣に着して見れ、云はゞ錦の着附に、[illegible]
の下へ羽織をゆりとしたやつ。まうといつた胴へ置いて、寝る時目覺をなしに重ねを[illegible]
寝しつまる。まうよしと騒ぎいたから、彼の衣裳を着て、ソレしたく調へだから例の[illegible]
くれ戸をまけてあらひの、大紐箪笥といふ見えの衣裳を出でしたら、お聽きなせえ、是れまではいい
よい、段取お五分も透かねえ。[illegible]でございたお舟が何だ、まう何處か其所へ[illegible]
たぼたまここの内に流れると、[illegible]くいふからうらはいい、[illegible]
[illegible]。一向氣はつかず。ハテナ、と思つて體を見ると、や胸りたが何だ[illegible]
もいたさ、いや、[illegible]とおもへの様か、[illegible]
[illegible]の[illegible]で目録かといふ着物に、[illegible]
たけ不擦せて、一ぽんの下かからなと[illegible]
[illegible]の[illegible]で、[illegible]のあたりか[illegible]
といふ衣裳附だが、[illegible]目がなしいぢやござりませんか。[illegible]、其の時
ぼ流石つわたくしも面から火が出やした。でまたしかたがねえから初對面なれども自生にはなして、先
付酒にほありついたが、[illegible]だか中でまうちょかしからうござ、其の[illegible]内[illegible]ました[illegible]

イエモシ、此樣な話をするもお座敷の興を持たうといふ氣でなしさ。わたくしの、以前馬鹿をつくしたわけをおはなし申して、おめさんに教訓さ。ハテわたくしなどはそのくれゑな放蕩ゆゑに、其の後親元へ歸參は協つたけれど、業にうといから、やくに立ちません。急に傷寒論を讀まうが、金匱要略を讀まうが、一葉も用に足りぬ。其の間に親父が目をねぶる、さて沒してのちは、たまりもなし、家藏を借金の形に渡して手拍子囃をへ、一家眷屬はたゞ年寄が一人、此方に向いておしんきかすとなつた。おつた暦もあるものでござえすね。そこでソレ、藝は身をたすける程の不仕合ト附合にもある通り、是非なく馴染の太夫の所へ往つて、まづ食客とはなりにけり。ネモシ、はかねえものだね。其のいにしへは旦那〳〵とよばれてゐり〳〵と、ぱりついたやつが、飯を焚いたり豆腐を買ひ往つたり、ある時は出來合の三味線彈となり、ある時は箱を脊負つてお供などといふ、しがなき内役を勤め居る内、おつちこつちの引つぱりで野幇間同然の境界。さて又こいつ苦界さね。そのなかしお客の時分には、ア幇間といふものはいゝ羨ましい、おれが今夜左兩つかつたが、あの徒はどこおもしろくなしさ。其の上に後腹が病める。ネヽナニが、錢も出さねえ酒を飮んで、好きな唄をうたつて、地口や洒落を腹一ぱい出しかけて踊り騷バシ、どうも氣さんじで苦がなささうだ。おれも到頭はあの事だと思ひ込んで、牛は願ひから花魁衆で通しては來ましたが、此の構へ這入つて見ると御料簡違ひさ。初めの間は見番の火鉢

と背ッ地をなして、まだ／\の欠ばかり。まだ／\の仕方でなけりやァ、わたくしとはいかず、ついしか名さして口のさゝつた事は耳にしたくもなし。やう／\の苦説で隣へ出した時の近所の事で、思ふ皆と来つたから膝を着むに間もなし。その見計が算盤を持つて帳場にすつて居ますといふ所だから爽まりませんの。前様の内は吉事にいそがしくなるし、何もかも気をもしれませず、あゝ、ああ、ことかをかしくねえかね、今にもならぬうちに、頭をつかつて切らさねえやうなら、大丈夫、ねへ、癖が大きいのに高いのと、美人形をつかはれます、さうかと思へば名字だ。まて是れにも心をかねませぬ。お客によつて下から出られるもあり、御通りすることはしまい。又御懇情に目をかけたなくんなして、御前様といふ者は大方鮨のやうに摂につしやるのもあり、むしやうと際つてくしをさせて銭のせつてくするもあり、それまから酒ばつかり飲ませて勝てくとされねえやうにするのもあり、中に出勤のいたゞく大通におつて良いお客もござえすれど、まづ取り能いお方といふものはねえものさ。なんでも無事を御目利に頼つたら大きな支配でやたらに面なお客なんか取りまうこござへ、お連の権が考へかましね。是れはマァ、お前さんかりしてゐるやつだからまづいいが、此の女は二十ばかりしてゐる事が出来ねえ物さ。こいつ等の体場数を踏んだ者でなけりやァ駄かしきりません。ハイ、泣くと笑はうといふ児が二人もあつて、米が有る薪が有るといふかゝアを持つ居て、アトなれた話だが、女の一手前

も提げてやる片手間で、否ながらも青楼をなすつて古風でもめかさねえぢやアなりません。お辭儀の一ッもあれば殼無盡の掛金などと胸算用をしながら、「ハイ酒落八は何方でございます。」「ヨウ、是れは旦那お近いぶり。」とか云つて、付元氣の大聲でをかしくもねえに笑ッて見せたり、小癪に障つた事があつてもお客をつかめへて喧嘩にもならず。云ひたくもねえ地口で紛らして毒を呑むやうな酒を飲んで、イエサなか〳〵つゞくものぢやアございません。それだから下戸はよし上戸は是非一度ヅ、大病ひをいたします。是れが酒落八の一代記。まア略して斯くの通りだが、世の中の浮虚者やのら者への諷諫、ひとつにはおめさんへの教訓さ。ざつと見うけます所が、おめさんも三絃がお好きで、能くおなまけなさる御様子だが、モシわたくしが今の身になつて破財したむかしを思ふにつけ御意見申してえネ。まづ三絃は何だス、こいつも俗にしやむせんといふやつだが、蛇皮線などの説はしばらくおいて、早い所が猫の革だネ。其の猫の皮を晒したやつを箱へ押張つて、細い絲を三筋引張つて、ぺこぺこ鳴らすばかりだ。そのむかしニャアと啼いたものが、今はペンと鳴るばかり。鰹節の代りに紫檀だの花櫚だのと奢りはついたけれど、鼠は捕らず只やかましいが能だ。紫の朱を奪ふを惡む、鄭聲の雅樂を亂ることを惡むとさへあります。すれば是れ小唄をうたひ三絃を彈くことは聖人もお惡みなすつたと見えた。お止めなさい。扨又、幇間をあつめ、惡神を引連れるははなはだお身の不爲だ。

よく料簡して御覧じろ。今話も申す[illegible]の事だから、[illegible]に五色[illegible]は[illegible]の[illegible]、[illegible]
[illegible]色は[illegible]ない[illegible]に、[illegible]も[illegible]してやつたではない[illegible]利口[illegible]
あの利口する者は[illegible]にとゞまる、およしなさいおやめなさい。最うく〳〵ふつ〳〵とお止めなさい。
[illegible]
[illegible]、三十にして立つのだけれど[illegible]
し、四十にして不惑もいまだにうろ〳〵と惑つて[illegible]
よ。六十にして[illegible]
[illegible]も捨てておくと其の類だ。扱わるいものは色道だ
ネ。色と名が付きや身上も竈もいらぬ、な[illegible]は
其の罪いくばくぞや、[illegible]として色に[illegible]へよとあるわさ。夫れも[illegible]

かたづけとか、あちらへとかで、お牀に納まるとはちがひます。君子に三の戒めあり。少之時は血氣いまだ定まらず、戒むる事色にありス。なんでも色の方をつゝしまずんばあるべからずだ、必ずおつつしみなさい。君子は其の獨りを愼むとは、名代の牀で、ぶう／＼を云ふなといふ事ではない。兎角色事がわるい。死ね死ぬまいと云ふが人情。そこを考へてみればはまる利はないへ。吾いまだ徳を好む事色を好むが如きものを見ず。すべておめさんがたのやうなお方が、皆酒色に身を滅ぼす。惜しい事だネ。色といふそのみなもとをたゞぬれば、尿と屎の穴にざりける。トツト／＼、いふ口の下からその大盞で引つかけるからどうもならねえ。朝に道を聞いて夕に死すとも可なりだ。おめさんのは、只今道の聽立てに酒と打死だ、ア、惜しい事たナ。其の心がけでは身上滅却だぞ。ア殘念閔子騫、三たび諫めて用るなければ幇間うぬから身退くは天の道なりだ。旦那とはいふけれど吾がお客とする人にあらず。ナニお廁、ホイおつき申しませう。アいや／＼其のお客にあらずしてこれを贈るは諂へるなり。義を見てせざるは勇みなし。」トいうて傍なる三絃をポキリと踏み折る。此のやうに客を諫めて放蕩を戒め、酒をめいらす幇間が萬一あらば大きな馬鹿。

腹白慢する大食馬鹿

■「すに役勤さん、お出でなさい」▲「出ましたか先生」■「大分色が青い、おやせなすつた」▲「ナニ色が青いと、ナニ色が青くても気持は何ともないが」●「嘘をつくぜ、何ぞ気持の悪い訳を隠なしてゐるだらう。ん、聞きねえ。ゆうべ役勤さんはの、角の内で口腹をして食物たれなら」▲「何と申すものか、そんな下卑な腹と思ふか、おらが腹へは富士の山でも這入る。本の事よ。近江の湖水は酢で自滴に飲むに」■「また大層な言ひ出したぜ。コウ毒消しに蕎麦を食はねえか、のびねえ内にやらかしねえ」▲「役者のだ」●「日野様はあた人とねえか」▲「日野様にはいけれど、蕎麦と聞くからの、口をこしたは」■「いつたふに」▲「本蕎麦なら二升も食はねえけりや食つたやうでねえ」■「がうせいだね」●「ナンけふはおれが驕らうが、一朱ずつに食つたらよし、若し食はずはおめえが拂ひをするのだ」■「よキこいつは面白した。おめへ賞に食ふかえ」▲「僕、来はせかの、くみがだ。……」「伊勢屋のは蕎麦が替いが、藪屋のは高価だから見で蕎麦が食はう。其代に条件がある。一膳に来てはのびて悪し、又とぎれて箸を休めては食へねえ。直々によく喰はねえでは否だ」●「承知々々」▲「オツト待ちねえ」▲「そして昨日は食つた山よ。先づむつくり起きると向うからセッの祝の赤飯が来たから、茶碗に山盛りしたのをがすつはの一重食つた。それから納豆汁が出来て汁が三杯、お飯が十五膳、ヤレ、間もなく親類の内から法事の饅頭が来たから、一分の銀を丸ッ棟仕舞にして茶を呑んで居ると、隣の魚屋が来て甘藷を

買へといふから、五百で大きなやつを五はい製へさせて、大把の葱を三把に、一本三十二文出して大きな大根を買はせた。其の葱をずぶ〳〵切らせて大鍋にいつぱい鼈煮を製へて食ふ。それをしまふ間に大根で汁が出來たから、夫れも皆食つてしまつた。しかもおらが内では河豚をくふものおれひとりだから、のこらず一人で食つたが、盛り分けたら三十人前はたつぷりだらう。大かたお飯もよつほどの事だらう。二十膳までは覺え居たが跡はわすれた。それからしばらくして、米屋の米公が來て、汁粉餅を食ひに往かうと誘ふから、オイと云つて往つた所が、食ふともなしに三十膳すゝつて、うちへ歸ると夜食よ。イヤモウ夜食も食ふ氣はねえが、ト膳へ居つて見たら、まぐろの味噌漬が七切ほど皿にあつたから、つひ茶漬を十四五杯搔込んだ。それから腹こなしに湯へ行つて出ると、善公が居て、おらアまだ夜食前だから七色茶漬へ往かうと云ふ。チヨッたつた今夜食の食ひ立てだが、一膳つき合はうかと往つた所が、善公めが食ひッ競をしておれに拂はせうといふ腹だ。こいつは俺が食ひ立てを知つ居てする狂言だ、惡さも惡し、一番見せつけて呉れようと、ヤ食つた〳〵。給仕の小女が一人では間に合はねえから、三人加勢が付いて運んだ。俺が六十三膳食ふ間に、善公たつた三十膳で、腹を撫でるやら褌を解くやら、到頭降參して代を拂つたが、善公めは歸りしなに屈む事がならねえで、雪踏をおれに教へてもらふやつさ。おらア夫れから内へ歸つたら、寢しなに醴を溫めて女房が呑ん

居るのをみて、又五杯つき合つた。ナントどうだ、おれが腹につゞくものは恐らくあるめえ。」■「別

當だ」●「上方の鼻には無銘が居るといふが、おめへの腹には [illegible]」■「ナニそれは

め、そこに書いて往かつし。ヤレ〳〵來た〳〵」▲「サア〳〵これは御馳走」●「サアあがり所

を」▲「[illegible] 今日通りでただで御覧に入れる。是れは御存じの [illegible]、大織冠鎌足公の

簡採、まづ最初の一膳は魂魄 [illegible] へ飛込んで、夢中でわからねへ。そこで〳〵」▲「そこで〳〵

そこで〳〵 [illegible]」■「[illegible] 六

膳に」■「なるほど〳〵 [illegible]

目をとらねばならぬ [illegible]」●「[illegible]」▲「そこで〳〵、そこで〳〵、そこで〳〵

[illegible] 又六膳」■「[illegible] 一膳 [illegible]」●「[illegible]

十八膳、此の代八百文分が [illegible] の [illegible]」■「[illegible]

らねえさうな」▲「そこで〳〵〳〵、そこで〳〵、そこで〳〵 [illegible] 又六膳」■「[illegible]

[illegible]」●「[illegible]」▲「[illegible]」■「[illegible]

か [illegible]」▲「そこで〳〵〳〵、そこで〳〵 [illegible]」■「[illegible]

[illegible] ■「[illegible] 一貫 [illegible]」▲「そこで〳〵、そこで〳〵、

ぞろ〳〵。オツト是れにて十二膳。」●「〆て七百分濟みます。跡が三百々々。」▲「ぞろ〳〵、ぞろりぞろり、ぞろすり、ぞろり。」●「大分いきほひがうすらぎました。」■「食へずは代をはらつた〳〵。」▲「ぞろ〳〵、ぞろ〳〵ぞろり〳〵、ぞろり〳〵。ア、スウ、ぞろォり、〳〵。スウ。ア、ぞろォりアア、スウ、ぞろすりィ、ア、、ぞろすりィ。」●「太夫次第に息喘しくなりまして、蕎麥が根ツからはかどりません。」▲「ぞろすり、ぞオろすりィ。エ、是れ。ごふはらなことだ。五膳までは、食つたが最う一膳で八百文となるのだが、どうも食へねえ。最うよしにせう。」●「エ、、おめへ最う食へねえか。サア〳〵代を拂ひ給へ。扨よわい事〳〵。」■「是れは高慢ほどでもない。」▲「イヤモウ、どうしてか、けふは食得ない。エ、、ごふはらな、一貫、今、もたせて、よこ、さう。」ト宿へ歸るとそのままに大食傷の吐瀉し、ヤレお醫者さま、ソレ金勢丸と、天より賜はりし身體髮膚を、口腹のために毀ひ傷る者、萬一あらば大きな馬鹿。

古今百馬鹿下卷　終

跋

昔錦の賤女が虫よりの紋切形の如く、式亭主人一小册を袖にし来つて予が一言を乞ふ。目を拭つてこれを見るに、過しく古今百馬鹿といふ。予艴然として慍びすして曰く、「足下我を百馬鹿中の一人なりとして、辣更に此の書を投ずるや。我が楊枝隠の傳を行ふは、無何有の郷に逍遥の備て、問好を見るは、浩然の氣を養はんが爲なり。女房に鼻毛をよまれて、長壽の薬を知り、朋友に上足をとられて筋骨の健かなるを試む。我が行状何ぞそれ痴ならむや。」式亭笑つて曰く、「足下いかんぞ痴なるや、童に天下の奇才大明神様をなをなをといふべし。ねがはくは此の一書に語を附せよ。」予忽ち啞然として曰く、「諾。」式亭否を出して去る。嗚呼世上倫俐の子弟、此の書を見て、馬鹿の馬鹿たるを知らば、天生の文殊も師利を罷折つて逃げ、唐土の孔明も堂前へ下居すべし。猥に智慧を振つて水鏡を砕かす事とも、連環を一樹せし通り者の意に倣へ、終に此の語を書して贈る。」時に文化十年、管をもつて天の川を窺ふ頃犬の交むを見るの暇

中橋のをぢい書

人間萬事虚誕計

人間萬事
虚誕計
式亭三馬戯編
歌川國直戯画

歴を読みたまへ三帝の教へしらす、幸より始にして正統なるものなれば、正を守り給ひ、即つ上の宮中の祭たるのみならんに正しくて、国に於ける祭るものは、神の崇拝者の事にして、それは宮中の祭、宮中の祭、ただ祭らる神といへども、祭祀事の祭たることを知らず、宮人達はひに然かるべし。是れ乃ち神道の教論なればなり。

人間萬事虛誕計自序

道家の寓言、兵家の謀計、神變不思議、方便妄語、遊女にてれん手管あれば、賈人に無掛直の譃あり。或は千三大萬八、或はヨタラウ殼鐵砲、うそでまるめた世の中なれば、熊野の烏三羽はおろか、親の頂に松三本、咽に十の字大誓文、今日の天公もそこらは大目に見そなはし給へば、まして冥府の閻羅王も、まばらに舌をぬけ〱と、跡から兀げる正月詞、其の正月の發市にすべきとて、人間萬事と外題を出し、去年の暮から丸一年、看官を一ぱいはめたは例の作者が虛誕計り、されど今年は嚴しき催促、發客への分說も紺屋の明後日云ひ竭くし、是非なく毫をおつとりて、譃のやうなる即案にまづ初編の稿を脫す。彼の何がしの詞を思ふに、虛は寔の骨、實は虛の皮といへりしも、虛はない、吁實なるかな。

文化十年癸酉孟春開市にせばやと同九年壬申の五月江戸本町の小築欲心深處に筆を採る

式亭三馬戲題

喜怒哀樂虚誕之略圖

びんぼう人の虚

人間萬事虛誕計初稿標目

○世間の好き嘘　○空財布の嘘
○風雅を好む嘘　○昔自慢の嘘
○医者の嘘　○女を親六根打の嘘

追貝六冊標目也

傾城にうそもまことも有磯海の浜のまさごの数をしるらん　無名山人

春さとに雨にいつはりなき物をうそ寒き風の吹くはなに　三たら法師

初午に寄
一両を千両といふの春の日に三百両は腰がぬけさう　山寺□馬

山家
まことにおき世にしなぞで住む山に又馬の名のうそもありけり　式亭三馬

○あいさうのよきうそ

「ヲヤ〳〵丹六さんお珍らしい。どうなさいました。まあおあがんなさいましな。宿でもネ、丹六さんが久しくお見えなさんねえが、どうぞしやァなさんねえかと、ふだんおうはさ申してをりました。まづごきげんよう。何は、おかみさんもおかはんなさる事もございませんか。ヘイそれは、アノおちひさいさまもおたつしやで、さぞおみ大きくおなんなすつたらう。ほんにもうお四ツか、早いもんでございますネ、ちつと見申さねえと、見ちがひ申すよふなりはございません、エヘ、、、、。まあおあがんなさいまし。今日はどつちらへおいでなすつたか、大分遅うなりましたネ。あいにくに又、宿で留守でございましてヘ。ハイサ、今日はネ、よんどころない用事で、遠方へ出ましたわな。いぢの悪いものでオホ、、、、。ほんに丹六さんはいつもお若いネ、段々とあとへ年をおとりなさるさうだ。四年あともいまもおんなじやうでございますよ。わたくし共の宿では、かまけ切つて大おゝいになりましたオホ、、、、。ほんに忘れ切つてゐました。おまへさん、ちやうどお夜食じぶんだ、なんにもございませんがネ、でき合ひでお茶漬をあげませう。ハナあがつておいでなさいましナ。なんぼお宿においしいものがあるとて、久しぶりでまづいものもおあがるがようございます。コレ三や、そこへおぜん

を仕やよ。ハテまア、およつておいでなさいましよ。なぜでございますね。よせよ〳〵、こゝや六さんならござんはおいやだとおつしやるかもの、其のおちやうちんを上げ申しませうや、ネヽヤ、さもなさいまし、晴うございますわね。此のぶらはよしな、提灯がないよ。トしまもう出ませんわね、とことを持六さん、モシ〳〵もやうちんが出ましたかな、モシ〳〵これはどうも。まやア〳〵お帰りよろしく。ハイさやうなら。」

ま　こ　と

「けふはおもひもつかねえ人が来て、おらアどこの人かと思つたが、あいさつする内におもひ〳〵思ひ出した。持六さんはかうきにとしがよつたぞ〳〵しやく〳〵として、白髪だらけのあたまで、日はなつた。よしや、あしたのあさはおもやつけでいいよ、あの人にはわれもとひとの顔にかなくなる時だつけ。そのおふそくも提灯をしまつておきや、あの人に貸してやると、めつたに返すことぢやアねえ、まづあゝいつたものさ。」

○そらじぎのうそ

「あんまり御無沙汰をしたから、ちよつとおより申すが、どうだナおかはりもなしか。トキニ主人おるすか、ハヽア奥方いつもうつくしいぜえ。ほらの貝でもめしあがつたか、一年ましにわかくなる、ハヽヽヽ。此方氣ばかりつよくて、からだはらちあかず。ナニサ／＼爰でちよつといつぷくのんで行かう。かまひなさんな／＼。なに、おれか／＼、コレ／＼おれならやめな／＼、むだな事だ。イヤイヤ／＼それは大むだ／＼、たつた今あすこでしたくをしてきた。酒ものみ、飯もくつて、はらは十分だ。かまひなさんな／＼。コレ／＼茶もいやだよ、よしな／＼。かまはれちやアかうしてゐられねえ。それでもみんなおたつしやでいいの、ナニサ／＼上らずともこゝでよし。」ト、たばこをはたき、「トキニ主人へよろしく、奥方ちとお出で、コレたま／＼は來てもよからうぜ、しかしついでのねえ方角だス。アイしからば、ナニちやうちん。おれか、ウンニヤいらねえ／＼。ちやうちんがあるとかへつてじやまだ、ふところ手の方が大きによしさ。ナニあかるい内にかへりやす。アイそんなら。」

まこと

「とはいつたがあすこで食つてくりやアよかつた、チトはらがきた山しぐれだ。しかしそれは八文屋でもつくろはうが、サアくらい／＼。ホイなむさん何かふんづけた、ホイ／＼あかりをつけ

百四十八文(しじふはちもん)、ぶらぶら[illegible]のいたことかいさァ、ばかなことをした。

○雅人(がじん)の虚(うそ)

[illegible]、三ツ[illegible]かかる山谷の草ふかけれど、[illegible]すみかと思ふ[illegible]、何[illegible]たら、[illegible]へぼにふしや、花はうてふもあるかでござるさ、[illegible]やる名[illegible]につけ[illegible]
なう。 ◆「それは[illegible]なれたの、しかしきいたやうな文句だ[illegible]。」 ●そのはやう[illegible]が書にした[illegible]の印本のかにありやす。」 ◆や、それ〳〵と手にしたは、[illegible]にせる尾品[illegible]といつた人の作文だとうさ。天明頃[illegible]の頭い人だ。」 ●[illegible]、雅文の頭で[illegible]などいへん[illegible]のものはなうて[illegible]たやつだ。」 ◆今は誰もしるめえと」 ●しられもアそをかしてはえわな。」 ◆[illegible]がよく[illegible]たの。[illegible]の尚古老人の直筆[illegible]をもつてとかいふ所か[illegible]」 ●師は[illegible]く弟子は[illegible]の[illegible]くがあきされる、しかも尚古[illegible]にも古い[illegible]をよくにえてゐるすこ」 ◆[illegible]物数を乱すがことで、さかんに[illegible]なことだの。そうもいへねえ、[illegible]なる[illegible]なら[illegible]のことだ。[illegible]渡した所ときては奇絶をを。」 ●それ事に[illegible]毛に[illegible]て[illegible]し、人は[illegible]を[illegible]て[illegible]すはどうだ。」 ◆「ム、いい〳〵。いざさらば[illegible]見にこふ所(とこう)までず、ともこい、[illegible]の事(こと)これはんと

欲した。」●「翁の名句を吟ずる内それだからたまらねえ。全體ばつち尻端折の高足駄といふ拵へは不屆だ。」▲「所がころばねえの、こゝはヤンヤだらう。足下の打扮は、あまりけふ〳〵しいの。鷺と割床で稗蒔の中へ寐ようといふ身だ。」●「山田守る僧都か、ありがてえ。ア、いい景色だ雪月花の三景ともに備はるからこゝがきつい。」▲「江戸の勝地といはばマア爰さ。アレ〳〵あの森を見じ給へ實に奇絶だぜ。イヤどつこいな。」ト、轉びかゝつてふみとまる。●「オットあぶなし。あまりヤンヤでもないての。孔明が草廬ぢやアねえが、雪中二たび足駄を踏み反す。」▲「ア、わりい語路だ。しかし折角足駄の歯にたまつた雪を、無備に落すでもねえからいたはる所さ。こゝらが惻隱の志さ。アレ待乳山の眺望、奇絶奇絶、金龍山上一圓の雪だ。ハ、ア金波樓と二藤が樓でありやすを奏する聲風にきこゆ。」●「はたにナア。アレ〳〵をどる酒客が見える、大俗な奴だ。なぜかとゐる事たらう。此のさむさも酒力で平氣と見えた。」▲「オットはし書のある地口かの。」●「踊る平氣久しからず。」▲「ホイ足下のやうに先へ潜られちやアあやまるス。いふへからず、地口も慶長以來元祿以前の古物が出さ。」▲「ありがてえ。」●「骨董子、むかうからくるのはたしかに婦人だぜ。」▲「さん候。此の雪中に獨歩するもの俳氣のある婦人か。扨は此の國にありちふ雪女なるべし。」●「博多染の浴衣を合羽の名代に引つはつた奴だ、かうざと早い足だ。」ト、いふうちすり違へて女はゆきすぎる。▲「おきやアがれ頗る鑑定が相違した。」●「何と見じ天王。」

▲「思按するに、縫ひお針。」●「おそい事〳〵、あの急ぐやうすから、此の大雪にも出されずと與す
する體たらく、今蒸し削いた取上婆さ。」▲「きつい〳〵そこまでは考へぬて、おそらくは中背大の慈悲に
たらう。あれらすといふとも遠からず。」●「あれ〳〵田家に薪水などの光景とう觀でて能いなア
ねえか。」▲「閑靜々々。トキニ雪見塚から白鬚へ出て、白鬚の百花園へしけこむ上にたらう。」●「晩景は言ひ宴の
湯なまで、ひとしほ雅味が増るネ。」●「百花園上には。」▲「百花園を腰えてそれからまたぶら〳〵まだ
鶯鳴が訓ですかな。」●「さ、さうか。おらア梅花上ばかりの承知でゐたつけ。」▲「ナニと花園は鶯と梅た俗
物よりはいいの。」●「雨鳴と鶯は雪よかろう。（雨鳴とは十五日の梅の隣居ない）月の夜は違れた時があつたつけ、昔は初
めてだ。あれから梅若へ出て正福寺へ倚らう。」▲「正福寺も庭がよく出來たつけ。」●「あすこは井戸が
妙だ。」▲「湧きあまる水を泉水へおとすから、夏秋は奇絶さ。此の春は馬と一緒にいつたつけ、村雨
見わすれはしねえか。ア、寒い、寒い。寒風はだへをそつて、チト酩酊でぞく〳〵ついてるわ。」▲「ト車挽かな、
此の絶景を見ながらさむいなどとは、チト不風流。なにさむいことがあるものか、酒の力でほか〳〵す
るに風雅でからだがほてる。ハヽヽ、ア一片の銀世界。」▲「南鐐をはめるやうだの。」●「奇麗なや、
聲は竹葉より傳へ來り、香は梅枝より渡し至る。塞外の征人軍中を寒み、山中の隱士寒食を醒く。王
孫綺席に金樽を倒し、美女紅爐に獸炭を添ふ。」▲「でえぶむづかしいことをいひ出したの。」●「小

說本の切りぬきサ。足下などはさむいと言つてくれちやァまだ俗物だ。」●「何さ只云つたばかりさ。たとひこゞえ死ねばとて俗物といはれては男がたたねえ。命は風雅によつて輕しだ。」●「河豚によつて輕しおやァねえかッ。」△「勿論さ。」●「ありがてえ。ア、降つたる雪かな。いかに世の中の俗物はわるいものがふりましたとやいふらん。」△「道がめつたにはかたづきますまい。雪はさて〳〵あとのわるいものなどとぬかす事さ。此のまァ詠めをしらず、溝へかきこんだり、空地へ山のごとく積むなどはあまり俗だ。諸事風流氣のない人といふものはつきあへねえ。コウ見な先刻の穩婆にあつたまんまで人子ひとりとほらねえ。してみれば風雅人と金持はないものと見えた。あれ〳〵埼玉屋の前あたりを漕がせる家根舟は歌妓を擕へた樣子だの。あいつも潮來節をうれしがる徒だから度しがたい。」
●「俗中の俗だ。雪を見るになぜ潮來だらう。」△「せめて江戸ぶしといきてえ場さ。琴を焚いて鶴を煮るの殺風景だ。」●「たゞ黄白老人孔方兄を費すのみで、侘びた雪見や寂びた枯野見といふ風流をしらねえわな。ソレこゝではなせね。しかし雪見とこゝろざした所がまだしも不便だ　イヤます〳〵ふるワエ、此の事〳〵、ア、いい景色だ奇絕。」△「妙。」

まこと

「ヱ、さむいぞ／＼。コレ／＼はやく湯をうふをこしらへてくりやれ。コレこれだつくかたすやすむ
んといわれようぜ、たぞんくらゐではなおしくきすね。トヽさむい、今にどうふるでござりやまの
たゝ／＼おそろしや／＼。雪見などといふものは、ふたゝびさんはうい／＼ともすまいと思ふ
くらゐぶようしやう事はねえぞ。やつぱり内にゐて、こたつにあたつて、あついで湯豆腐が大
ふうりうだ。おらアもう向島のなかほどで、泣くにも泣かれずどうせうかと思つたが、香車が面
を恥ヾいひやう／＼こゝへ来た。それに又、いまわるく雪めが強くふりやアがる、トヽいゝきつ
事がやねえ。大つぶな雪めがぼた／＼とかたまつてふるもんだから、かたつきもあるけるもの
ぢやアねえわな。ヲ、さむいぞ／＼。コレヤはやくぬどうぞよ、どうするのだ人の気もしらねえ
で、おちつくに事によつて腕の事迄え死ぬ時も助かつて来たのだ、トヽいやな事がたく。

まこと

「ヤレ／＼／＼さむかつたぞ／＼。さむいの裸のと、口でいふやうなことか。けふの雪のやうに
べらぼうな雪を見た事がござらねえ。牛骨みが雪見をなど酔すから、いやなめにあつたが、
イヤハヤふられて／＼すぶぬれになつた。こんなめにあつた事は誠に切つてこれが初めてだ。

えんがはから見ても物干から見ても、雪は雪だ。向島まで寒い目をして、えつちらおつちらいく事もねえス。はらが立ツて〳〵こたへられなんだが、むしやうに風流々々とぬかすから、堪へてはゐたけれど、モウ〳〵風流にはこりはてた、やつぱりぞくぶつがいい。ぞくぶつが見ても雪は白くてつめたいにはちがひねえ。これが又風雅人の目にはくろく見えてゐたゝかだといふものならかくべつ、何やつはりおなじことだやつさ、そんなら内にゐてふぐじるの方が風流だ。オ、さむい、いまだにぞく〳〵するホウ引。」

○昔自慢の虚

「ナニサお前たちがなんのかのと言つても、今どき生まれた人は、むかしの大きな事もしらねえで、りこうらしく口をきくのだ。ハ、ア何だ山王さまのおまつり番附か。フ、ウ」ト、取つて目よりは遙かに遠くへひつぱなしてよみながら、「コレちよつとした所がこれほどちがふ。此のおまつりに麹町から出る象などといふものが今でははんぶんだによ。大象、へ、なんの大象どころかおいらが目から見ては小象だ。ハテおらがわかいじぶんの象ときたら大きなものさ。ア、、ほんの事よ。話すと今の人はうそだといふがの、まづ本町二丁目あたりを象が通ると、あさくさ見付のあたりで脊中が見えたの、コレサ又うそだといふよ、

能い年仕つたものが、何が虚をつくものか。マアわけを言くらい。其の頃の象といふ物は、鼻のながさ五尺ばかり、胴中の廻りがズツとおしだから一里半もあつたらう。その内といふ物は、胴がとしきりにつくらう。ハイその胴よ、あれでも、斯うだによつてと、横はゞが十四五町もあつたか。こゝ通るあ、と、通しておでさ、通るところがある。町はゞのせまい所は両方へおしてきをしたらヤレと斯ういふまつにして細くなつて通るから、それだからけさといら、国略す市内を通る時は、神奈川の宿で、よすく見たといふ人があつた、ナニとかうといふちやねえか。いや見えるはずさ。其の時代の人は、今の人とは生まれつきが違ふから、目の性などもよかつた。おらが器いじふく、盲だと言つて、杖じらついてあるいた者は、ちやうど今時の目明とひつぱるくらゐよ。それ、見なども大丈夫さ。今の盲はおかしの膝行同然だ。先づむかしは常の人でも、朝出しずに江戸をたつて江の島鎌倉金澤とまはつて昼前には帰つた。箱根七湯から熱海へ湯治して、ゆるりと行つて来た所が夕方に江戸入さ。斯ういふと嘘のやうだが、マアきゝなさい。飛脚ときたら、是れは又黒人だから、京大坂は日がへり、長崎へ行つて三日、さぬきの金毘羅へ参つてあくる日の八ツ時分は内へ来て鼻唄だ。それに今どきの人は日本橋から堀の内も一日がけ、大師河原も一日がけ、ヤレくたびれたの何の上、らおあかねえ、イヤハヤあきれもしねえ。マアきゝなさい、角力なども

きたら又格別な事さ。これはまた今どき眞似も出來ねえ、まづ上の口を取る關取が身のたけ十六丈七尺有餘の大の男、髭の長サが五尺七八寸、目の大キサが八間四方、口の廣サが京間で五十三間、鼻の高サが町見につもつたらなんぼあらうか、六町一里と見た所がざつと五六里ものぼらねば小鼻の根をはなれめえス。耳の穴の内規が四間ほど、そのむかし大きな土蜘蛛が住んで人をなやましたげな。首のまはりが百二十間四面といふから、仰向いて見ても雲霧にかくれて、關取の顏は見えなんだ。かすウかに親椀ほどの大きさに見えるものが、三里の灸だといふから、是れで推量しなさい。よく〳〵はれた日でなければ顏がわからぬから、そこであれ、すまふは晴天に極めたものさ。其の頃は火の見やぐらを小便所ととり違へて、火の見番のあたまへたび〳〵しかけられたさうよ。そこで火の見番が、此のあたま小便無用と札を出した、その札といふは今いふ番木だッサ。ャはずんだとこそいへ、東の大關が蚤野直右衛門、西の大關が當麻野蹴半彌、角力場はどこだといふに、其の頃武藏野の原といつて、竪横八百里ほどある原一面に土俵にして取る事だからまことに晴の勝負さ。扨こゝにあるだテ、其の頃の見物といふものは、今どきたいこの音を聞いて七ッおきをしていくやうなことではない。そんなおそまきでは溜りへ這入る事などはとても出來ぬ。そこで四五日ぶんの飯を、三斗四五升もたかせて、いちどきにくひこんで、初日五日も前からすわりこんで、小便の急なものは二日に一遍ほど、

是やきいちどきに一斗五六升づゝ小便をひるである。その内には取組がはじまるといふので、ワア〳〵角力はとぶつた所が、今のやうに押出したり引分けたり、勝負あづかりなどといふなまやさしいことではない。なんでもかでもなげころすか、ふみつぶすか、おつぴしやぐの外にはないのさ。此節は頭取もとめでなくては承知しねえ。そこがむかしのものは武張かかたい。おれが見たのは諸方の土だつけか、闘と闘との取組み、イヤあさましい事であつた。それで見ては誰がおそろしいすばどのもあとへさがつて見てゐたゞ。イヤすさまじい話さ。そこで雨ががはねたゞ、すはねたのあんのとこといへ、その勢ひさきが長崎の果てまで聞えて、唐人が目をまはしたといふはなしだ。しばらくすまれたでゐた所が、どこをどうしたか、蹴半端をぶつとひつゝかんで目より、イヤ富士の山よりたかくましあげて、蛇とぶつてなげ出したが、きさなきい、姿がかうさいた。箱根山富士川で酒匂川をはふるになげこして、京の六條数珠屋町へすでんとうとぶつつけたが、大地へおとを八萬億両、めり〳〵めりめりとめりこんだから、待て主に催り候といふ手紙が、京から角力場まで甲飛脚で、彼が一両時のあひだにつゐたうけ。イヤハヤすばらしい事さ。その後番野直右衛門が對手になる者がなかつた。ナニことうた、其の角力を見た目たぶらわりたや。あるめえ。芝居もその通り、とうか若いとふれの役者はみな大根だ。チツト小男だといふのさ。濃尾の一日ははあつたの。あの頃のかつぶのとう

を今の人にもたせたら、二人でさし荷ひだらう。萬事それに順じて、白粉なども一かたけに三合當とつもつて、五度舞臺へ出れば、三五一升五合よ。今三十二文のおしろい包はてのひらでなくなるけれど、むかしは物がやすいから、十六文持つていくと大きな紙袋へ白粉の一升もいれてよこした。今の纈よりも安かつたよ。紅も笊にいつはい三十二文、エ、エ、紙ではつて澁をひいた笊さ、紅の山計りが三十二文さ。芝居は一日見て十六文。座頭が名古屋山三郎、敵役の立てものが、不破伴左衛門、立ておやまが出雲のお國御前、ア、うつくしかつたよ。見とれて氣がふれたり目をまはしたりする者が、毎日五六百人づゝあつた。それでしまひには顔を見せずに、鬼の面をかぶつて道成寺をした事があつた。今の役者はちひさいくせに、女かとおもへば陰嚢があり、親仁かと思へば藥屋で見たら二才野郎、敵役が後生ねがひのけつこう人で、ぬれ事師が根性悪のむねきであつたり、なにかとりしまらぬ事だ。それ故狂言もうそらしくて見てゐられねえ。なんとして／＼むかし役者は大役者さ。そのうへに親仁はとしよりがする、女は女がする、若衆は若衆がするから、狂言に無理といふ物がけちりんほどもない。それだ物を、今の役者は京人形を見たやうで、ナニ見てゐられるものか。エ何、ト、耳をそばだて ウ、ウ、淺くさのかんのんさまか、ウ、一寸八分とは、むかしのものにしてはちひさいといふのか、ト、少しとしつまり、あれは何さ、エ、何よ、何さ、あれもぜんたい大きなものさ。むかしは十八丈

あつたけれど、大きくては流行におくれると云つて後にもひきくしたのさ。此句集は富士の山だ、おらが小兒じぶんまでは、山の絶頂を見たものがなかつたゆゑ、其の事はない、雲の中にかくれた絶頂さ。されば今では、山のてつぺんがどこからも見えるやうになつた、それも事もたいそうなものだ。しかしこゝにはなしがある。おれが血氣さかんなころには著物の丈も七尺八寸を著たから、それより拵へる者も一疋宛にねば間にあはされただが、今としがよつたから、さきなは三尺一寸を著るから、一反で丈物だとまへだれほどの裁がとれるやつさ。して見れば富士の山もおれのからだも、年がよつてちいさくなつたもしれねえ。ト、話しこゝある所へ一[illegible]となつてへ、、猫のなきこゑばかり（猫いづけきたり）は、むかしも今もかはらねえ。是れもおらがわかいときには、猫に迷つてあるいたものだが、既に著たて山谷通ひをした事は、今の古物きかしもしるまいテ。首つ玉へ鬪鷄の鈴をつけて、自じの名をさらしをもつて、猫道といふものが、しぼりの浴衣で下駄をはいて、杖をついて通つたつけ。其の猫じやらしをおれが持つてゐるから、京傳に見せて骨董集の中へいれさせるつもりだ。此のくらゐたしかな事はない。其角が十牛の讃の内に、京町の猫通ひけり揚屋町といふ句は、猫で通つたにふんだ事を思ひやつた句さ。ナニトどうだくはしいものだらう。おめへたちはむかしものだといつて安くするが、ごうしねえものさ。またまたあつたに流行におくれてはならねえ。ニツト古い事のめづらしい事をし

りたくばおれが随筆をかしてやらう。なに今時のものがハ、、、、、」

まこと

「トいふはみなうそよ。實は今の世ほど萬事がひらけた事はない、むかしにくらべてはすべてがすさまじい。まんざらのうそでも今のやうにはなさねえとどうもむかしがまける。ア、後世おそるべしだ。」

○姑婆の虚

「おかみさんマアおあがんなせえやしな」ト、すゝめ[illegible]子供の涙でよごれくさつた[illegible]出し「サアマアいつぷくおあがんなせえ。茶屋のもちもしひねば食へねえとやらで袖引たばこだ。」ト、孫のはなもわがはな[illegible]はなふききれにて、[illegible]「モシおききなせえ、とんだ事さ。せけんのうはさでおききなすつたかしらねえが、わたしらが嫁どのもたうとう六だん目さ。アイサ、おべこがサ。アノまあきのいい野郎どのが追出す位だから、よく〳〵のことだと思ひなせえ。それはともかくもネ、わたしにかくれて嫁のことへいくさうサ、あの野郎どのがよ。ネエおあへ、どこの國にか、おべことはおべこども

おもふが、けんぞくのおやにそゝのかされて、おんだした女房の所へ行つちやア男でも恥であらね、四三よ、は女でさへ、そんないけびろい事は仕得ねえ。お前まア、どう思ひなさるか、男たるべきものがおくびぬれえことですまうと思ひなさるか。それといふも、みんなのすゝめでてんとのとまうくるさやうで、指おこしが悪いらさ。にくいやつさ。それだから「あの女に内がふとも見ておられて、わがまゝいつぱいをすれやア、まんにしておめへがたはしのをするのだが、麻に返合はねえことぞやうのするいなさま。寝主に合はせねでうつもやつていたら、指の先で三ばそうをふませねのえ」おめへの細へ見なさる通り、わたしは榊にとんちやくしねえで、遠くへのいい聞で、あいらが所にはこれんばかりも口出しはしねえ。それでもまあこのお気にいらねえだとさういふのもつひ、時といふものはいやがられるもので。一昨日の晩も先方の高輪へ自身でんによばれて行つたら、ちやんとそのあとへ来てね、なんだかはなしやつて帰つたさうさ。ナイサ、そんな奴をいまうとうようすにしてすまうと思ひなさるか。それといふも、遠い江戸あの野郎どものすまりがわるいからサ。いゝや一出すとも引くともかたをつけてサ、早らしく思ひさつたがいいのさ。それをまづ、どこの国にか、なかからはんじやくにしておくもの、さうならさらにやアさ、うんにやア、ほんに／＼あやしたが、どんなそだてやうをしたか知らねえが、あの女ときてはろくでねえ生まれつきよ。世のくせに留たち

は見つともなくもねえが口は剃刀だ。ハテサ、人は眉目より只心とお如來樣がお經文にお說きなすつた通り、人といふものは心いきが大事さ。ましてや女とうまれては、唐の楊弓とやら、江戸の小野小町のやうな、うつくしい生まれつきでも、五升とか三升とかの罪がふかいといふわさ。先頃もお談義で御聽聞しやしたが、たゞの女ですら五升三升の罪がふかいといふから、あのおべこなんぞは一斗五六升もつみはふかいのさ。そのくせに、鄰あるきをしてはうぬが能いやうなことばかりしやべりあるくのよ。ヤレわたしは姑とはおもはずに、實の母だと思つて、おくたこなしにするけれど、簪のあげおろしにやかましい。この中も白髪を拔きながら、頭を見たらばつむじが引んまがつてゐました、いぢの惡いのも尤もだ、なァんのかのとあくぞもくぞをならべたてるだ。どんな佛性のものでも、きけば聞きばらで、あんまり心よくもありやすめえ。その上に年よわ三ッにもなる子をわたしがうけとつて、もらひ乳でそだてるのだ。ナニハかゝつたことぢやアねえ。乳のもらひ先も四五けんありやすが、間のわるい時は、さき樣でも顏のいい事ばかりはねえものさ。そのきげんきづまをとつて、乳もらひほどつらいものは、世にこゝあるめえよネ。朝はおきでお日さまのおおがんなさらねえ内から、モウおきようでなく、よるはよるで寢つきがわるくてギヤア／＼ほえる。ほんに／＼孫を飼ふより狗兒を飼へとやらで、今私がたんせいしても、ほんの入佛事さ。おつつけごらうじろ、婆のことを思ひ

ばかしねエ。こいらが成人した上でトンにけふは婆さまの日だと云つて、油揚のひときれも喰して
れるは、マアそれが樂しみ」●孫「いひでもいゝ嬉のにイ」一オヤ、いれもやがて婆さんやかまれる事だらう
ゝノ女の顔が出た時だから我も云くむやアあるのさア。えゝなれに、一語になるかい言ゝ日？「おとなし
くなれ」●「おとなもくなれ」「かゝアに似るな」●「かゝアに似るなに「ハ、、、、へ」ばうる、
人のいふ通りに口はねしをる。十二口はよくきくが年弱だからやう／＼此の頃ある言ひました
これなに御機嫌の能いときはまだしもさ、どうでも貰ひ乳は當にされねヘさうで喰さん事をこぼらう
ゐ。それに乳ばなれの時節が蟲が下つたつて御悩氣なの、一倍やかましいさう。あうけんめえ／＼と
ないで、かゝちやん行かう／＼とうるさくてならねやさん。おつなものゝ親に親だ、、あゝなもんの下と
したふのさ。わたしがあけえつくになつてたましても、ばゝもやんいや／＼と云つて駄々を云ふた
ほんに年はよるめえものさ、孫にまで嫌はれやすわな。これもわたしが因縁のわるいのだとあきらめ
てはゐるけれど、ア、うるせえ婆さ。おかみさんさきなせえまく／＼な因果者だよ。それに目にも
すな歯はらふおかす、ア、せつないやの／＼。生きてゐる甲斐もねえ、早く目をねむつたらのう／＼
としてはからうに、死なれねえも悲さ。このおうも風をひいたからこいつ從いねえ、今度は未曾だた
らうと思つたら又よくなつた。おはかた、せこうのものもさうだらうさ。是れから中まで出向か

よく生きて五年か三年が到頭だ、もうおめへ六十七になりやす。仕合と足がたつやしだから行徳の得萬寺さまのお十夜にもまゐるし、なんにもたのしみがねえから後生ねがひばかりさ。ア、もうあきあきした、ひよいと頓死したらさぞよからう。アツアなんまみだぶつ〳〵

ま こ と

「まだやう〳〵六十七で、今から目がわるくなつては、末がおもひやられる。今おれが目をねむると、あいつらがいいやうにしをるだらう。まだ〳〵めつたにしなれねえ。百までといふよくしんもねえけれど、せめて八十八の賀のいはひでもして死にたいものだ。それにしても目がかすんではどうもならねえ。三馬が所の龍樹散はよくきくときいたから、目をあらひませう。とかく命が物だねだ。」

○女きらひの虚

「コウ猪闌さん、おめへも女ずきだけれど、女にははまりなさんな。とかく女といふやつは、國をかたむけ城をかたむけるやつだァ。かういつてかたむけられる國も城ももたねえけれど、千兩地面をな

くすよ、江戸で何にまごつくも、もとのむこう評判だといふにソヽ好いたによ、ここにゃあ何を妬にはとほませんへうまれたで、七人の子はなすとも、女にはたやのをするといふことへるあんね、所で何ともやらじ芳屋傳とやらいふ、女にはまされすしんたいを棒にふつたもの、殺日本をはじめて諸人あまねく戯もなかうもねへことさ、好若八百屋傳、日本橋六十餘州の内に、ゝゝゝ、濃けいふ蔭帆か、ゝゝゝ、ゝゝゝで上げて評判がとうつたの、また十八の名を聞とて、とつ手分表と見ても女にはまつてかなつたものはたいさうだらう、御存とかお前はといふものは上にはまるやうで、それだから女といふやうは、みだらがなもので、様いせよそもそもらしいやつは女で、おいらでもどだてもなすはたまらないびた、あちの世の戯れにのと言つたのが、あなたにはのみはつたによ、そこへ行きまついやつは評判だつて、評判になあふ事へ上の蔵まつてたつた一度で、なんといつてはすばらしいやすねえ、そのてと議論はいたつてた節だっそ、ここそ此芳譚事家でしてゐる内はまへやいと、承下に追ひされるものを面目に寄をいねえ、女にはさへよると絶つあふに顔をつけるから、ふらず女やそはへよらず、常うからものを言つてもござらしあいまつます、ねと見たらすとにかいよいとやる。よその内へ行つても亭主あらず門口から草をにげ出しゝかへる、それになんぞや親類のたれ助などは、亭主のるすを窺へて、わざわざ炬燵へあたりに行くの、ソヽミツ小いきな娘と見るとたかるはの何に行つて、むだ口をきゝたの、ど

ちぐるつたり、只小あたりにあたりたがるだ。アレあすこがすなはち、李下に冠をたゞさず、亭主のるすに火燵へあたらずといふ古事をしらねえからだ。淨瑠璃本のはしでもよんだものは、そこをおそれるてい。諸事辨慶でしてゐると氣樂だわな、辨慶女におふ事へその結きつてタッタ一度スッナントきついぢやァねエか。ハテ女はなんだッ、女は男にうまれぞくなつた支離者だと思へば間違ひはねえ。紅白粉でつくりみがいて、鼈の衣や馬の爪を折つぺしよつて、あたまへつゝさした所がをかしくねえ。第一油くさくてどうもうつり、白地の浴衣や、博多染でもねえとか言つて、空色地に白あがりの中形で赤い裏襟をわざ〳〵ひつくりかへして見せかけの、ソレ黒じゆすの帶、冬はソレ路考茶とか鼠返しの伊豫染とか言つた所が上ッかはをはいだら何だッ、悉皆皮一枚の戲れだによ、ハテサ高尾でも夜鷹でもくる〳〵坊主にして裸にしたらいつそ氣味やら嫉やらペッチャンだ。アヽ話がだん〳〵づにのめこさを四角にしまへやにな。「かるがゆゑに男女の淫樂は、たがひに臭骸をいだくと言つて、唐の東坡といふ人もいましめたとある。男女とはこれ男と女なり、臭骸とは臭き骸といふ事だそうだ。こゝる博識のはなしであつたがこゝらが悟り所だぜ。ナ、ト何とかいふ俳諧師が、ナ、まてよ、何でもこはい顔のやうに覺えたつけ、ホット思ひ出した、鬼つらさ。鬼つらが句に、骸骨の上を粧うて花見かなと言つたさうだがこゝらは動かねえ。アあの女は意氣だといふ、何が意氣だ、ソレ、皮一枚はがされと骸骨、ヤあいつ

は阿呆だと思ふ、ソレ、皮一枚引んむくと目の穴がぐりぐりと二ツ、鼻の穴が二ツ前に覆つて、ほかすんとしてゐる。こゝを考へて見ると意氣でも阿呆でもねえには、まるで辨慶流がこつけいとこいゝ。辨慶女にあふ事へそのを切つてゝゝ一度とまつ女といふやつはうそさ、ふたゝび引んなすつたやつなどは別してゝむきいの。それゆゑむかしは女とたうなやにきらいなよつもにはまつて徳のついた事、むかしから其のためしなし。しんだいをつぶすやつ、親に勘當されるのに、親類に見ばなされるか、あこで罪を造ふか、天世するか、ソレかんがへて見なせえ、ひとつもよいことはうなことはねえ。みな損の事だ。おめへら長いきをしたくはおれが傳にならつてここだ、そんなにこゝあるをどはすといふはあんまり智恵がねえ。辨慶々々請事でんけいを見ならひなせえ、そいぢやそこにまいて辨慶流だ。ハテナ、辨慶そんなにあふ事へそのを切つてゞゝ一度でゝゝまつからう、ひとゝ辨慶々々。」

まこと

「うはいふものゝ、かう見た所が女といふものは、いつもわるくねえやつだ。世の中に女がなくは、生きてゐるかひはあるめえ。しかそいてかんがへて、もういつへんかんがへるに、その

ばりわるくねえ。これをおもへば、辨慶(べんけい)古今(ここん)の大箆棒(おほべらぼう)。」

人間萬事虚誕計初稿　終

人間萬事虚誕計後編叙

妄語を禁じて法の道を守[illegible]には方便あり[illegible]

[illegible]

して、己がはぢをかくのごとし。

天保四癸巳のとし孟陽

瀧亭鯉丈述

人間萬事虛誕計第二編目次

○稽古所の呼詐
○奉公人請人の呼詐
○喧嘩の呼詐
○寡女の呼詐
○解和人の呼詐
○水茶屋の呼詐
○浮氣妾の呼詐
○何いた風流の呼詐
○田舍者の呼詐

○稽古所の虚言

「お前さん話はことにどうも感心でございますよ。どうしてもお久しくお苦しみなすつたのは、とこ
さまかなにかでございますよ。すつかり浄瑠璃がお上手ときまると申すほどにはございませんけれど、
おのどが御きようだから、お稽古申しても、張合がございますよ。あのかたのお弟子にはとんとあきれまし
ておいて、まことにもうつたらございませんけれど、ほんとにね、どうぞまいと思ひましたよ。ほんに私などは
やめたね、へ、わきさとさへ申すお体でございました。お前のお家元様の、夜分にはしくしてゐたら、顔と
いやうでござりますね。まだ色まはりのはずのに御稽古お出ありやす。師匠のお家元へ行くともきれいに、ちやんと
ました事、あれにおまへさんのわるい頃ではございません。師匠さんがおやうな間違へた時に、三四郎さ
んが三味線をお忘れだから、どうぞと両か窓いそうな所が有つたければ、おまへさんおきにお話しをした
から、穴があいたにしまひました。わすれたからせんたいわたくし尼がつと申したら、三四郎さんが
おれがひくとあいいだから、どうも三さんは、先のあせわやきだから仕方なしに弾かせると、あんな
おいやうまことつき出して、もう〳〵聞いてゐるて、じれつたくつて〳〵、誠に腹が立ちました。左様さ、
あゝ弾かれてお前さんどうして居られますものか。それやア〳〵みんな左様申しておりましたよ。

能くマァ間無吉さんは、しまひまでお語りだ、どうしても腹に節がしつかりだから、三絃にはおかまひでないといつて感心いたしましたョ。オヤもうおかへりかえ。マアもう一ッお浚ひなさいな。オヤオヤどうでもかえ。さやうなら明晩ァ、間無さん〳〵そしてネ、堺町の二番めが出來ましたら、どうぞお早く。ホ、、、、きつとでござりますョ。」

けいこじよのまこと

「サァおつかァ早くしめて寝よう。まことに間無さんの長ッ尻にもおそれるナウ、今夜は垂助さんがまだこないが、又九ッ過になつてこられては難儀だ。ア、間無さんの淨瑠璃にもこまるぜ、なぜァ、ぶきようだらう、そしてマァあの聲で、淨瑠璃を語らうと、思ひついたのが氣がしれねえナウ。あの人も淨瑠璃さへかたらねへと、そんなに人に馬鹿にされもしめえけれど、久しい道化師だョなう。骨ををつてお人がらを、だいなしにするのだ。ほんに兄弟か親類なら、意見をいつてやめさせるけれど、隨分物のわかつた人だが、淨るりにかゝると、ツブのすばかになるといふもふしぎだョ。考へて見ると、かはいさうにもなるし、又天狗をいつて、人の事をわるくばかりいふのを聞くと、にくらしくもなるョ。手前ひとりいい氣だから、どこの浚ひへでも行きたが

つて、このやうに語らるゝにもこまる。こつとも弟子たち同へは、チヨツトした事にまで、必定お咄のやうに、こゝで亡ひやさしくないと、ねだつてきなくぞまされると、ソレ論ないなものだ、よく〳〵思つてみれば、トふられまし。曉テ能ツぽこ者めにはだ、されだからこそおやう〳〵仕込んで、豆信を好きにさせて、まことの事を覺えたが、それがあの人の一番だらうさト、、、、マア〳〵それでも寝ませう〳〵。ナ、親ほん人様のおもはせれ、人間の悪のやうに離くゆるし放さなさい」

○ほうこう人うけ人のうそ

「ヘイ〳〵いや〳〵御尤もでござります。まことに不埒なやつで、ヘイ〳〵たび〳〵御出精の上、引負の勤金三月まで、四月のくだり下されまして、有難い仕合でござります。ヘイもう其上まで永々御恩に預りまして、かやうに御勘辨のある旦那さまに不奉公いたし、其の上引負までいたしまして、にくいやつでござります。ヘイ〳〵さやうでござりますとも、あなたにつとめられませんで諸、どこいたして、どこへまゐつても奉公はできません。ヘイ〳〵御尤もでござります。ヘイ〳〵かしこまりました。ヘイ〳〵にくいやつでござります。ヘイ〳〵有りがたうござります。ヘイ〳〵御尤もで〳〵

御尤もで／＼。」

ほうこう人うけ人のまこと

一ヘンなく子と地頭にはかたれねえとは、よくいつたもんだ。アノ野郎がまへではいはれねえが、先でいふやうでは五年が間丸でくらひつぶしてるたやうだが、先の旦那のおかげで、算筆はすつぱり出来て、いき／＼帳でも付けて、算盤もやくにたつもんだから、ぜんたい外へやらうといふのを、こつちもさいはひ無人だから置いてくれろといつたぢやアねえか。夫れに今では手めへの内で、一人前にしこんだやうに、恩にかけて、ヘンおらがやらうがるすば又一人ひとを置かずはならねえ。して見れば何にかしら、用に立つたには違ひねえ。そこ／＼敵の末にもあんな所に奉公はさせねえ。ちいつところだつてくると、質置に心安くなるからくどかれる、いふ事を聞かねえとにくまれて、湯へでもいくと、けんくわをぶつかけられる、見世へ来てはごたつかれる。夫れを防ぐには、ちつと無理な質もかす、品がしも出来る、是れもたれも主人の為だに、ナアしくじる日には、夫れがみんな引負となる、こんなむりな事はねえ。又首尾よく勤めおふせた、のれんの一枚もくれて一軒見世の一つも、出さにやアならねえから、ちつとの事をもつかはに、お

間、其の節はうびとして、給金不殘になつた。へ、どこに有れば有る物か。ほんに途方も
とつたら、金を揃へて持ていつて、腹いつぱいいひぬいて、金を叩付てやつたことが、何
分金が揃はねえから、一度二度に持つて行くたびに、いひてえことを聞いて、こつちは辛抱く、
御勘弁のお慈悲のといへば、なさにかゝつてわきまへやがる。なんにも六本目がありやアね
えほんだ。何も掛合にいつてさ、すぐにあいさつは出來ねえで、ほんこと家主事に相談して見
眼が黒い中はたふらといふそつもか、なんぞ事にして、うぬらが喰物にしようと思つて、むしや
うにしやくのあけなど、ほんおきどのがそれに乗つて、薬代を捕られて、むつかしい苦労をする
いやアがる。ほんにあんまり智恵のねえ仕人だ。盲人のふのむうなやアねえが、上方ぐらいから
下にいたみが出來るのだ。」

○けんくわのうそ

「いやだ／＼、はなせ／＼、留めるやつは相手だぞ。わる／＼とめるとすりむつくぞ。べらぼうめ、あ
たな野郎にこあふられては男がたたねえ、死んで仕舞ふ／＼。己が死ぬかしにやア、相手を殺してしまふ
て死ぬぞ。ヤイ野郎、サア死にやくらだぞ。ヤ、留吉はなせといふに、……顔をしてねえ、すみ

庖丁をとる。ナニあぶねえ。べらんめエ、ふだんこそ刃物はあぶなからうが、人をころしておれが死ぬにあぶねえ事があるものか。いやだ〳〵、なんでもころしてしまはねえぢやア、つらがたたねえ。だれがいふことも聞かねえ。いやだ〳〵〳〵。」

けんくわのまこと

「ア、あぶねえ事をした。あの時留がはうちやうをとるめえものなら、たんと切る氣もねえけれど、ちつとかそつとは疵でも付ける。向うもぢつとして切られてもゐるめえから、どんな事にならうもしれねえ。もう〳〵喧嘩はしねえ〳〵、それに彌次の野郎めえ、おれが尻を持つて、切るのつくのとさわぎやアがる。たのもしくねえやらうだ。ひよつと殺して見たがいい、おれが相手だから、下手人に、オヽ、おそろしや、ぞつとするア。留めエよく骨をおつてとめてくれた、命のおやだ、ありがてえ〳〵。南無俗名留吉大明神、ありがてえ〳〵」

○孀女の吁詐

「ナニこんなばゝアに誰がかまひ人が有るものか。さやうさ これでも四五年も跡までは、ちつとは水

毛がれへつたから、髪もたいてい結ふ髷もあへつたけれど、何の今さらやすその髪をなさはうでもなし、そして年々とるといふものは[illegible]しいもんで、一年ましに鼻はへる菊石はふえる、色は黒くなるし[illegible]は皺寄る、、、華奢の針板だし、、、、、、、、、[illegible]にて、元の[illegible]にとつきられ[illegible]まつくなすると[illegible]年がまゝ、、、、ことしは[illegible]、[illegible]は、[illegible]眼の[illegible]たもよりのことだらうけれど、人の世話になつて[illegible]ら、[illegible]こころを[illegible]の子をみれば、[illegible]毛抜をとつて、[illegible]上にふきつけて、両[illegible]、あれでも[illegible]の髪の中[illegible]、それだから[illegible]見える[illegible]、ことし年といふものはかうしいもんで、それでしろく見ると[illegible]たか[illegible]、そして髪をあつた時はさうもいはないが、そこにはすみの[illegible]で、[illegible]一[illegible]に結ふが[illegible]、すべきれいな[illegible]、しかし[illegible]目にかけたい、[illegible]と思て、子供を[illegible]だから、[illegible]の皮はだぶくして、乳といへば[illegible]の一[illegible]なやつが、しなびきつておちれとする所が、[illegible]を下[illegible]、ほんにまあ[illegible]ているのに[illegible]はいい乳やつ。そしてまつくりな[illegible]とは[illegible]から、洗ふことそくさ[illegible]の皮もすりむけないと思ひま

すこし湯屋のはあへくろもじのやうじをさして置いて、何か其の楊枝どので、爪の間を一本々々ほじるこ、あのやうに又おつくりに念を入れれば、私らがやうなものでも若くも見える鼻も高く目もぐりぐり、色も白くせいもすらりと見えるはずサ。へゝこつちやアおつくりをする間があれば、火燵へでもあたつて、焼芋でもたべて居たいといふかんだ。へゝ色氣より喰氣だ〳〵」

やもめ女のまこと

「運のねへといふものはくやしいものだ。まだ年もあたといふ身ではなし、ほんたうの年でもまだ五十だ。夫れも年弱だから四十九も同然だ。夫れに隣のぐらぼうめヱ、こつちではおまへさんおかみさんと、色氣ありげにおもてなしてやればいゝと思つて、おれが亭主をなくしたし、となりのおつかァだのと、あんまりこゝろねえ女だ。あんなのははやりでもあるまいし、まァ何にうへだらうけれど、顔だとつて、鼻の形ばかりみてやつたが、小皺はすくなし、いつも顔でも愛嬌あふれたで、隨分思ひ付のある方だ。せいは三十ぐらゐからうが、あの人だつて高いといふせいでもねえ。色がおつと黒いやうだが、今まで色氣のねへ顔にかけたんだか、今更白粉を付けたやうに見えてはわるし、とうもうマまなのけても皺がふいて、それ人にもれるから、お欲さんのつける仙

女香にいまうかもしれん。ア、おれにも金のたんとある、いゝ旦那を一人見付けたい。みんな人仕事がらみでに、とてもこまつはりとした形に出来ねえ。そしてまだ下ッ端でござります、ながら身ながらをしいもんだ。人にも内々頼んでも置くけれど、どうもいゝ身の堅いやうな旦身にしみてくれねえんだ。お顔でさへあれば旦那がつくから、おいらがそこで、旦那を根上げに下はねえ。しかしおいらと云ふのいんきよのは、こつと稼ぐ若いのでいゝのだぜ」

○ちうにんのうそ

「コレ管右衞門さん、おめへにも似合ねえ野暮をいふ事じやねえか。あれが此頃はつんつんとしてつてるのわけさ。そして鬘六も今度の件、手めへもよく〳〵わけがあると思へばこそ、おいらにいふのだ。管右衞門さんせえ承知なら、神直りをしよう。ほかの事ではいけねえで、こいつしますが、よつたく根も葉もねえ事だといふのに、おめへも腹をたつだらうが、おいらに免じてまけてくんなせえ。そしてあんなおかみさんやといふが日本に有る物か。それを相手にしては、おめへも男がすたるぢやアねえか。そしてアノ晩のおこりといふは、やつぱり早吉だわな。先生とやらいふ所で、早吉もこつちのほうが面白いから、こつちへばかりおちやけやするから、鯨はふてくされで帰つたと云ふ八

あたりだから、醉ひがさめて見ると、サア氣の毒でたまらねえやうすヨ。さればサ、そこがやつはり醉つてるこからの事だ、何も藝者をあけてしやれてる所で、無盡の事をいひ出すといふのが、コレわからぬの本家本元。勿論その事なんぞは、何をいつたか、ちつとも知らねえさうだ。さうサ〳〵、お前なんぞの酒はどのやうによつても、つひにむちうになつたといふ事は今まで見ねえ。夫れだからおれがいつでもみんなに管右衛門さんの酒は、謹文のかしく上戸だといふと、みんながなぜだといふから、醉つて不斷のごとしだッハ、、、、。それでこそ樂しみにも藥にもなるだらうぢやァねえか。變六なんぞのは、螺の貝の杯で、たいてい飲んだあとでは、ヅウ〳〵いふのはまことに恐れるヨ、ハ、、、、。マァ〳〵なんでも腹のたつた所はおれにくんねえ。しれた事あやまらせるヨ〳〵」

ちうにんのまこと

「變六さんちつとおめへに無理をいひに來たぜ。さうよ、マアサ〳〵そりやァおめへがいはねえでも、人がしつてるわナ。おめへの腹ア立つは尤も至極、あの晩の始末といふものは、どうもサ言語道斷、イヤ豆吉なんぞはたゞあきれてるぜ、相手がおめへなればこそ、大さわぎにもならず、そしてサ、おめへなんぞには、世話にもなつて居ながら、よしんばおめへがサ、醉つてのう

これだから、癖と不理窟をいはうとし、受けて居るにつけてならねへ譯だ。殊に何もふりにつく事せな

し、おめへのいふ所信理のたうぜんだ、勿論手めへもしとく／＼わかると思へばこそ、わたしもか

つて、腹下にまずおうじる一件で、あんなことでもしをしたが、酒のうへと言ひのがれに、いまさら

なんぞ、かねていひぶんでもあつての事かと聞いたら、イヤ意趣もなんにもねへ、まことに面目ねへ、

ことは、藤六さんはわらにはいま、ぶからうとにらもうとで、酒はちよつと何もかもわからねへ所、

どうしてあのやうに酔つたか、まことに金ぴらさまのばちでもあたつたらう。どうもなしたわざ

はやまつた仕かたねんきん、藤六さんせえ承知してくれるなら、どうぞあいさつをしてくれろとい

ふから、そこでおめへの腹をただしに来た…、酒に酔つたとて、親の面へ乗つたやつも

ねへもんだが、まア酒にでもかづけずは言譯があるめえヨ。もちろんしらふで、あんな事を

いふ人でもねえが、なんにしろ悪い酒さ。ちげへねえ、おめへなんぞのやうに、きずのねへ上戸

はねへ。それだからおれが、ふだん藤六さんの酒は手紙の發句だといふと、みんなが己すといふ

から、飲めば口わけ、悪口きれいたといつて口をふさいで、それでことたのしみに悪業にも

ならうではねえか。夫につけても喜右衛門が酒はのみ口上戸とつけやした。なぜなら酒を出す

と直ぐできつと呼ねらすに出るからね…、…、…書いてありますとやあいとするのみ書

だから、雪隠へおちた猫ぢやァねえが、どうせつかめへどこはねえ、おめへ腹形のわりいのはわたしにくんなせえ。そりやァけ、あやまらせなくッてけッこんどは管右衛門大閉口だわサ。」

○水ちや屋のうそ

「おまへさん今までどこにおいでだエ。フン引今来たちいい、けさから来なと川においでの事はしつてをりやァす。ヘン山中のまよはせじまひに、ほんの義理で、ちよつとお立ちよりだ。それでもかいしき、お見すてにならないのがくわんのんさまのおかげだネ、、、、。おいしくないお茶でもわざッと一ツホ、、、、。どうせこんな所におちつくお尻ではあるまいけれど、まア一寸でもこゝへおかけよ。ナニいつて来るエ、フン気やすめもんだヨ、ナンノ急用もねえもんだヨ、ホ、、、、。オヤあのまじめな顔がサ、そんならきつとおいでだね、お出ででないと聞かないヨ。そしていろ〱おはなしがあるからヨ。」

水ちや屋のまこと

「ヤレ〱うれしや今日は早くけハツた、毎日〱こんもよく来るぞ。盆と暮に二朱ヅヽ、お仕切

で、年寄がいつてもすゝめるか、へゝゝ生花と茶の湯にきたらねえ、たま／＼外の人が何と思ふやう
にするとね、ナニ茶代は私の方からやつてありやすが、へゝゝここはく出来てゐます、そして廣小路の
者りは其の人におれんぶだから、毎日毎日でゝ、見せてあるきまして、菓子屋がなければすし屋がすけ
るい、すしやがなければ蕎麦がくらいのと、噂さしやう皆りやつて、ついそ両はん費つた事でねえ
お宇治さんや何かと、時々あてゞこすつてやつても、うぬぼれがつよいから、ちつとも気がつか
ねへ。そしてちつと白い歯を見てるとたんじたがる、ほんに／＼こまりものだア、今いつたこと
はみんなうそだよ、そとゝお茶なよ。話も何もないよ、ふしおはなしが聞きたくば、ぐつぢにか
けてある人に四もん気めへを見せて、下略さ、（悲、々、ちよ）

○うはきめかけのうそ

「旦那さんわたくしはネエ、皆さんがヤレ海老蔵がよいの、ヤレ大和がよいのとおつしやりますが、わ
たくしはまた役者より作者がひいきでござりますわ、顔見世なんぞは、三升なぞからまた出来ました
ネエ、例の大和でも紫若でも、たゞの人にいたしてこうじまし、見られる顔ではござりませんぜ、
素顔だと申しても、よつぽどぬつてゐるさうでござります。へエそうですか、あんたなんぞは、おさし

をあげて、お風呂へめすばかり。それでお色の淺黑いのは、眞白な役者よりは、よツぽど白いのでござります。さうともしらず、みなさんがヤレ大和がきれいだの、紫若がうつくしいのとおつしやるのが、をかしくツてなりません。男のくせに、紅や白粉をつけて、ほんに氣はづかしい、まことに役者は大きらひでござりますわ。しかし旦那さん、曾我がはじまりましたら、早く狂言のすぢを見たうござります。實に作者はかんしんなものだ。」

うはきめかけのまこと

「まづかういつておかないと又甚助がはじまつて、春狂言も御延引かこはいから〳〵ことし、ほんにほんに役者といふものは、どうしてあのやうにきれいなものだらう。今のやうにいゝたのか、ばちでもあたらねえければいい。海老藏でも大和屋でも、夢でもいいからどうかして、わたいの本望がかなつたら、夫れこそモウ〳〵殺されてもいいよ。芝翫もよし、今三津五郎紫若海老藏もいやみがなくてよし、關三京新屋が升まだ〳〵いくらも、エヽらじれツてえ。ほんに女と生まれたみやうもんに、一チ度は役者をよんで見たい。どうぞ男になつて、富でも買ツて當りたいぞ。併し男になつては役者を買ふにつがふがわるし、エヽじれツてエことだ。どうぞ富があたつて、

ハッとおどろくひやうしに、また女になりたい。」

○利いた風流のうそ

「[illegible]此の[illegible]に[illegible]には、[illegible]御風流に御[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]、[illegible]
とに、[illegible]
ちよつと向うへわたつてごらうじろ、實に[illegible]春にしられぬ花ざかり。富士と筑波を並べて見て、都
鳥の浮寝、[illegible]かぞへられません。さながら[illegible]雲の[illegible]、こ[illegible]、富士筑波にお[illegible]
にもしろ[illegible]、[illegible]
シお[illegible]
見せずには[illegible]
ハ、、」

利いた風流のまこと

「疝氣がきざしてきたわえ、ア、アよせばよかつた。愚慢めにそゝのかされて、とんだめにあつた。なんの何所で見ても雪は白いにちげえねえ、もう／＼こり／＼した、風流といふものはごむいもんだ。風ながれると寒くから夏はよからうが、冬のもんぢやアねえ。なんの愚慢坊主めエ、うぬばかり風流がつて、人までくるしめやアがる。あんまりくやしいから、チト盲人泥道だが、温好子をすゝめて、くるしませてやらうと思つて、すゝめては見たが、一ツ所に行かうといふかと思つて、いや／＼してゐた。ナアノ、早くけへつて火燵と湯豆腐でたすけてもらはう。ア、五臓六腑が凍りついたやうだ、ナ、歯の根が合はねえ、これが元になつて死ぬと、愚慢坊主にとッついてくれよう。」

○まちげいしやのうそ

「ほんにお酌も、此のやうな御座敷ばかりだと、内になるよりは樂なもんだ。イエ／＼まことにサ、御酒は氣まゝにたべてサ、三味せんはあなた方へおわたし申して置いて、すきなお淨瑠璃をうけたま

はつても、ほんにどうかお客がしれませんわ。このうへのおなさけには、そつとさして下さるよ
お、、、、。ここ様にはうちの口ないもんでござりますネエ。皆にお浄瑠璃と申し、お三味せんのお
しろい事、くにたい事こそ、わたくしどもにはわかりませんけれど、まことに人がらのよいおまへの
いふのでござりますもの。それだから此の丹次郎と聞くと、いつでもわくくに身こしらへもせずうちたへ
て参りますョ。まアくうそでない定めしかみさんにお聞きなさつてごらうじまし。いつでもおうは
さばかり申してをりますョ。」

まちげいしやのまこと

「モウく、藝者さんの間役も大儀だく。へい聞き賃でも出ることか、けちにいのちをお辭儀をし
た事も程もよ。そして此の間に天じんをかいて、猫ばゝ、八ちか皮どはえることかへ、ほんにとな
なひきずりだらう。いつその事猫わかへまへだ、皮でも賣ればいい。よそや猫わかへてくれるはれ
かるだらう。まアくまた泣るさうだ、ア、なんぞだくなんば一中節はしないものだといふ
て、あんまりわりい謎だ。歸へおけさへすれば、一中節の正本だと思つて、まアくとせなやい
つて、文句がさつぱりわからないが、今のうちた東禅へでもいいはない。へいるところのではな

くて、にがく、ゑごく、すつぱく、黄いろく、青く、マアなんといはうか化有な聲だゾ。」

人間萬事虛誕計第二編　大尾

善惡表裏 人心覗機關（ひとごころのぞきからくり）

人心覗機關自序

天地の大機關は、造物者の老大奇巧にして、和蘭眼鏡の及ぶ所にあらず。人間の大機巧は、神儒佛の棡木偶人にして、竹田近江の操む所にあらず。喜怒哀樂は操りの絲に從つて移り、高貴貧賤は機車の高低に從つて變る。抑盛衰榮枯を機巧の模様に譬へば、釜山海一瞬に兩國橋と轉じ、爛熳たる花見の體恐くお目が認れば、忽然として夜分の景色を現はし、矢作の長者の御殿構瓦落離として臺が變れば、八百屋々々と爲るが如し。迎新送古の幸不幸、機車の狂ふと不狂とにあり。光陰箭のごとく其の題變つてまゐる。日月歳の如く古客の舌もおよばず、夢幻泡沫の瞬きする間に、千秋萬歳これで到頭、什麼好い巧にあらずや。生死流轉の速きこと、有爲轉變の速かなることを想へば、實に先さまはお變りく。扨也胸の機關は如何、且づ下回の分解を聽け。

九月中浣、江戸前取立てのひんくする隱士、小田原町の妾宅に二日滯留の間筆を採る。

式亭三馬題

人心のぞきからくり欲ぶかき人間の図

酒　色　財

善悪表裏 人心覗機關標目

○馬鹿につける薬といふ二人の表裏

○高慢な咄して草澤商牛の表裏

○見えはる癖一とする人の表裏

○料理を食自慢する人の表裏

○狼ものとよばるゝ下卑な女房の表裏

通計五種

善惡
裏表

人心覗機關

江戸戲作者　式亭三馬戲作

○馬鹿はつくさぬといふ人の表

▲臺所のたなさがしをしあきて、はしごのしたかなべをのぞき、ちよいとげゞごうしながら「ハヽヽア奇妙〳〵々々。ちよびとお摘八郎兵衛と出かけたが、此の昆布卷はいつ煮た、エ妙にお手際だの、此方の料理にしてはヤンヤだの。」ト、瀧水二升の卷樽をひねくりまはし「ハヽア瀧水、妙。コレ此の樽が昨日到來かの、昨日到來どこらが如來ツ。ハヽヽアこいつ飲めるやつだテ。ドレ〳〵一杯きこしめせとまうさうか。是れとはしらずに河豚を一杯貰つておいた、ドリヤお手づから御庖丁と出かけよう。」●女房「わたしが煮て上げませうから、お前さんは其の樽から御酒をばお出しなさいまし。」▲「ウン〻ニヤよし〳〵、けふはみつからが遊ばす、こなたは縫物を欲ばり給へ。」●「そんならさうなすつて下さいまし。お鷺が布子を拵へかけたから、さて〳〵日が短くて埒あくものではない。」▲「さもさうず、さもありなん。ト、そこの庖丁を取つて貰ひてえの。」●「そんなにお小使を

しては同じ事さ。其の位ならわたしが立つて致すが増しでございます」▲ナント殿中、おまへを情けないと申したはみづからが大謀り」▲ト、此の内に、と仲ならで申さ、これを存分にして、刺身や木の芽などのといふところが嬉しいえ。此中のあまりはなしかえ」●「何だか仰しやる事はわかりません。ひうしいものでは」▲「山椒の事だわな、大概しれたもんだ」●「そんなむりばつかりおつしやる。貴方の酒肴はしれませんわな」▲「サア是れにはさう〳〵謝り奉る」●「山椒ならば火鉢の引出し」▲「そうとも違はぬ」●「其の下」▲トいふし、是れにて大願成就。ナテト、火の一段だが、炭取は、トツトここにあの両黒さんはう因果なければ、あいにくに炭がなし」▲ト、手を真黒にするもすもうだ」のうちさかな出来、酒のかんも出来て、ど「アレ〳〵〳〵いそがしや〳〵」一碗喫せんと酸して、おほいに玉手を弄した、是れだから宅でのむのは否だよ、料理茶屋へ往つて見さつし。菱の露もやすねえ。なチョンと揃つとお出ましなされ」●「其のかはりに物まへにこんなことあるはずだ」▲「そこらはしたり料中にて左様の事はまうでぬものにて候」▲「いやさ、其れだから近来は馬鹿をつくさねえな、諸ながら骨折るほど楽しくなつた。最う後悔なく、後悔と理屈とを先へ立たせた。仲間も離れた由子と二人で花見に往つたけれど、おさず見がられて、ナントさうくなつたで柳點に、『どつちらが利口で上手で別れたり』といふ句がある、それはとつけもない工夫になつた

づ初物を宅で食ふ様になつたから是れにて御推もじさ。アツア恐るべし三十餘年の先非を悔いだ、おれも今までに料簡がつくとこれほどくるしくはなかろうに、壯い内といふものは馬鹿ばかりつくすものさナア。」初物を宅で食ひ、友達のつきやひを體よく外す樣になッたから、最う御安心可被下候。大丈夫大磐石、石工の陰嚢を針銅で巻いたといふ男になりやス。」●「きつい御自分の味噌さネ。まだ／＼油斷なりませんよ。」○「おあんじなさるな。最う是れからはむだづかひせず車輪主でかせいで、思ふさま金を溜めてこなたにも樂をさせる。イヤほんの事よ、ハテいつまで馬鹿をつくすものか。おれも初老と云つて四十から老の坂をのほるのだ。是れを則ち初老といふ。」●「初老ぬけがしたらむよんなものさ。」▲「是れはしたり船中にてさやうの事はまうさぬものにて候。」●「そんなら御萬が上等をひとつ拵へてお遣んなせえ、紫縮緬に。」▲「ヨット皆まで宣ふな、承知／＼。すゐぶん拵へてやるよ。まア来月のことさ。」●「正月著にするから、今月中でなくては間に合ひません。」▲「今月でもよし。」●「安うけ合だによ、お萬あてにしなさんな。あんまりお返辭が好過ぎる。」▲「綸言汗の如し出でて再びかへらず、ハテ拵へてやるわな。下谷の廣小路へ誂へるがいい、あすこの家は什物がよくて安い。」▲「伊藤松坂屋かへ。」▲「◎の人が来たら誂へるがいい。」●「オ、うれしい／＼。そんならネ、わたしも縮緬のちよく／＼著を拵へてよ子。」▲「拵へるがよしさ。黒裏かへ。」●「何にせうか。」▲「おほ

しおしの通り御馳走なさい」●「きつと拵へますよ」△「好いとも。」●「ありがたい、」まで記せる簡つたといふもの、お前が帰る此中かられだつてあるけれど、いまだに雨かいだ」△「不断帝が、とればお剣承知、しかも腹癒で買つておいたっ」●「まア、ま、けふ買つて来てやらう。もう一分やるといひ、此の跡手付に一分遣らいた。」●「それは豪年くなィ、まアノ＼、お前でお前さんの御前の上下前にたんまと頼んだ、サァノ＼安いお出でよ、愛へ来てお弾きな」■「アイよ」か、二階で三味線に長歌をひとくさり唄ふ。△「サ二ナノ＼とうといへず、此のころはけじめかよくなつたから、なるほど斯うしてきて飲み孔がなくなつたが、隣合といふ聞る様の三曲でまアしておけば、下直な物だ、是れも又一時の物だから今まで誰のたのしみをぶらずに馬鹿をつくしたは後悔だ、迚くこなたの意見につけば流石にきついおさまき當惑だ。ハヽヽ、芝居見ずともよく、女郎買はずともよし、御酒飲まずとも、遊所もしきらめて見ると此方の入るはなしはねえのに」●「ナニひさしいものさ、いつでもきうきつしてゐるけれど口の様にはまゐりませんよ。」△「トヽト論中にてさやうのことにはまうさぬものに」候」●「捷いはなしは今あがる河豚でございます、最う此のやうノ＼とむつしやりなさい、やつぱり河豚をあがると」△「コレャどうしたもんだ、論中にてさやうのことはまうさぬものにて候。コレ河豚にも申せば、■にもあたるとありまス。そこでおれが狂歌を詠じたヤア聴き給へ」と、

河豚は食ひたし命は惜ししといふ心をよめるス

捨て果てて身はなきものと悟らねど雪のふる日は河豚をこそおもへ

サ。どうだ西行でも河豚を食ふ口にあつては敵はねえ。併し此方のいふ通り河豚も今日限として食ふべからず。貴い金銀を費して色と酒とに身を崩し、學句の果ては、家を失ひ命をなくしてしまふ。イやこんな馬鹿な事はあるめえ。もう／＼／＼ふつつり徒遣ひを止めて、友達附合をおつりきに切抜けて、尋常老爺の仲間入となろう。其の事／＼ア、思へば十五年遅かつた、是れにこりざる事なし。きつはりと珠数を切つて徒事は止める／＼。ア、いい心持だ。昨日にた鯖の煮漬し、而も女房料理、ソコデ晝飯の菜物の殘りがやほどに、ホツトやほではない、ばつといきな昆布に油揚、里芋のお平、其のうへにお内のお手料理の河豚鼈煮。それから下ものは種抜蕃椒、鮭の鹽引の切身、お袋の貰ひたなめもの、いたつて鹽の辛きやつ。是れが下酒物として到來の薫酒、ひとつで五合とおめにかけてお肴が三絃を聽いてたのしむ所が、いやどうもいへねえ。こゝだ／＼諸事此の事だア。今までは大馬鹿、向後馬鹿を盡したらおめにかゝらぬ。あア酔つた、此の酔つたきもちは料理茶屋で金を費しても此の通り、ハテ他にかにつた酔ひやうもねえ。ヤア／＼お前や此のお道具を殘らずかたづけて。ホツト靜かに靜かに、まア／＼ふく仕らう。なるほど女房の詞も用ゐれば徳なこともある。おのれが様な智者に

もし失、こちやのやうな遊所にも一隅あわせた。ネネくく、お前は天命の用も忘れた。今夜は野宿であつた」●「時雨を首代にお頼みなされませ」と言ふ。ここで、主ごみも首尾に間合ひませんかゐのか、それに、お酒を欲しくなされて、ほうそが前掛に二百匹出して下せえ、お駕が帝を取て、これで御しよう」●「お前は駕籠でございますのか」とゐ、ミヤ、思ひ付いた中か首尾だ」此二十文替は知相を押す「あつちの駕を入れたます」●「親たらのは、よささうなもんだ」とネミナあつちのがいい」●「駕籠をかわいい」とし、それも御用でございますか、時代、●「まだまだ逝くなお帰んなさいましよ、お駕籠は天井でございません」と言はれたが、今もい過ぎ駕ニ駕籠はしなさえ」●「へい、うまいこんな事だ」と言ふて、それの中の身はこの事にしてトト出て行く。

（其の裏）●「ここに奇妙といふところでござりました。今宵此の床へうらくといくつもあるよいことではありませなかつたの。しかし二百匹にしやうだ」●「また手もなく、まいて、首尾よく、表のかすめのいたりはての姫の細の命びてこいで一日も早く私もやつてまいくうれしがらせて、女房や娘などを相手でひつかけるめで来ました」●「そのほどに付む

んと僞つて着物を出させ、金までを奪ひ取つてきたが、ナント豪傑だらう。」△「たてがたきたてがたき。」●「女房それともしらず御きげんうるはしく出した所は大べらぼう。」△「諸事そこらでござんせう。奇の字〳〵。」●「トキニそこらの木戸ぎはに籠もよお美籠持が居るだらう。」△「なんのことだか解せぬの。」●「ハテお前でもあるめえ、萬葉の序びらきにある籠のことさ。」△「エヽきこえた、籠ハヽよ美籠持とは駕籠かきのことか。籠母與、美籠持、ハイ駕籠と名告らされねはせうだ。」●「おほかたこきの四辻に居やせう。」△「いそがへし〳〵。諸事馬鹿はつくすべきことだ。」●「今發明した所が老いれの學問はじまらねえはなしだ。やつはり相かはらず馬鹿はつくすべし。世の中に馬鹿をつくすほどおもしろきことなし。」●「さん候〳〵、おそらくは此方などが馬鹿の冠たるものだらう。ハテこゝが馬鹿でいい。」

〇高慢を吐く藪醫生の表

學問に重きをおかざり、人の病を治すことを業とせずして、生質下根にて書物を見れば欠を發し、少刻も學問ならず。たゞ世間巧者とばかり心がけ、輕薄を常として、てれんつゐしようの妙術をきはめ、羽織は小袖よりも長く、乘物の簾は息杖よりも太し。幇間媒人地面の賣買、あたまをふりたてかけま

はふ、見る事の出來ぬ、漢方醫にかゝつては[illegible]の事件は吟味[illegible]と、元祖[illegible]に[illegible]ひとな
く、[illegible]にうときのみつき[illegible]、[illegible]由す[illegible]質のたるのみ[illegible]と[illegible]て[illegible]、[illegible]を
はそれ[illegible]で二日を肉を入[illegible]けいかし、稻田安康、鈴木調庵、[illegible]閑と名附け、[illegible]に
南[illegible]となのる。何とせうか何とせうか、いつた[illegible]醫者でもして見ようといふのあり[illegible]これを[illegible]けて、
[illegible]醫者といふ。見脈ぴん/\として病家の人をおどかし、他の醫者がむづかし[illegible]見立てしを[illegible]、か
ろはずみに[illegible]て、[illegible]合ひ、他の[illegible]と、症を[illegible]以ての外に[illegible]、[illegible]
ばかり利口にしやべくる[illegible]生、つまる所は[illegible]、[illegible]
りと[illegible]醫者の[illegible]、[illegible]田仲[illegible]と先へ[illegible]の[illegible]に[illegible]、[illegible]
し、お醫者さま奧へ/\」ト、でつちにいひつけ、古さきの手代どもがひそめく聲をうす/\聞きながら、しきり
[illegible]
[illegible]
[illegible]「仲[illegible]見まひ」[illegible]
と見えさす。すへ/\構はず/\。」ト、[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

能はず。醫は異なり、異言異體よく用ゐらる。醫は夷なり、やゝもすれば人を夷ふ。醫は稲荷、よく尾を出さずして人を誑す。これみな眞の醫者にあらずして、デモ醫者をいふなり。彼の川柳點に、六まいでばつたくと殺すなり、又、藪醫者はうきめを見せて世をわたり云々。猶多しと雖もこゝにいはず。且鉢兵衛艮兵衛がたぐひ名醫となりたる世にすくなからず。こゝにのぶるものは藪醫のデモ醫者をさしていへり。漢に所謂草澤醫生のことなり。仁術を施し給ふ名醫大先生にはあらず。近世デモ醫生といふ者なし。仍つてしか云ふ。「ハヽア今日は御顔色が大分うるはしい。」ト、こしのものをずいとぬいて右のわきへおき、指をぱちりぱちりトならしてゐる。「イヤ／＼やはり其のまゝお牀にお出でなさいドレ／＼。」ト、みやくは見るまねばかり一向わかるものでなし。「ハヽアようごつす、最う氣づかひない。エヽ何はどうでごつす、惡寒の氣味は去りましたかナ。彼の寒けは、サヽどうしてもまだ寒栗するテ、ぞつ／＼とする氣がありたがる。イヤ、二三日の内でごつす。ドレお舌を」ト、顔をしかめてのぞいて見、「エヽエヽようごつす。お熱氣は大きに去りました。」ト、腹へ手をさしいれ、「ハヽア心下も板の様に張つてをつたが大きく透きました、いづれ留飲はあるでごつす。ソコデ寒熱往來して吐瀉おびたゞしく、胸膈嘔吐いたして衝心煩悶する故に、其の氣逆上して小便不利るもの難治とござつて、チト救ひ難き病症でごつす。大體の醫者がまゐると白虎湯の症などといひたがる、なか／＼白虎湯でも奴豆腐でもかなはぬ。御病人がお若くて氣力がたくましうござればこそ、マア此の位にも致した。これは拙者が匕先ではござらぬ、御病人にお健かな所がござるに仍つて治す。又此のお症もはなはだしきにいたつては水腫脹滿の横あいを引出して、傷寒時疫の變症が參ると、醫者おさらばでごつす。ハヽヽヽヽ」ト、根からむちやくちや、盆と正月、雷と地震をいちどきによせたる如き病症を口から出はうだいにしやべくり、醫心のなき人となればたいそうをならべておどかすなり。かたはらに醫

者の友は時は一言も、ほすかと思ひ乍ら、「ドキ〳〵お腹はどうでござります、ドキ〳〵いけますか」と云ひ乍ら脈はつてきさい、とくとお熱のあるのも内は其のはずでござります。お通じは、いゝゑ、イヤ、マア、強の物に気味不快の節は、で、外邪が手つだうでござります。是は随分に治すがよござれど、それははなはだ心安い。でござりやうに、内をよく整へて内から追出さねば本の療治でない。是は能く覚へて申さば病たる心のみ、医者のに踏ん込ぼ込んだでござります。しかる所が嫌なとて外から追つかけて、奥へ追込みますれば、それでもかなりのかねて、病火上下〳〵、嵩へは進入るとも外へは出ぬ。其の時内から追出す時は養のものにして外へ出す事でござります。然らば病といふとも鄙の其の病を、此等の道理で、身の為にと申しても病のいけぬやうすもないこと、世上の医者がすき〳〵の事を論じて気ゆ所を、と外すれば、誠にの腹、ハ、、、ゝ、と、いふ所、

の藥は今朝進ぜた筈だ。ホテト内君のお藥は、もし昨日の殘りがあらばお流しなさい。今日のは加減致したから、まづ是れをあげたい。ソコデ手代衆の。」ト、又一人みやくを見終り、新規にくすり紙を出して調合をはり、少しく首をかたぶけ「硯箱を。」ハイノヽト持ち來る。「エヘ。ノヽ。」ト、いひながら筆をとり「生姜一片入、煎法如常」ト、書き終り「名は。」ト、まへんなりから「エ、エ、すヽ、萬八か。」ト、いひながら「千三屋萬八殿主劑」りとなけ出し、書きつけた「常の通り。」ト、筒をへいみて、いうた許り、だんまりんにて高慢にくすりつき出す「兎角時候中りでごつす、更にきつかひなし。其の藥をたてつけて吞んで、チトせつなくともとりかぶつて汗をとるがいいの。早く發散してしまへば何の事もない。イヤ此の頃は病家が多くてどうもならぬでごつす、實に斯う又病人が澤山でも醫者はたまらぬての。まア毎朝五ツまでは在宿いたして調合場に在る。夫れから五ツがコヽと鳴るとかけ出すでごつす。然る所が内幕の頃やうノヽ歸宅、ナニカ彼是仕度でもいたして煙草の一ぷくもたべるうち、最う早諸方から呼び使でごつす。其の上に晝の間あちこちから見まつて疲れると呼びに参つてあるから、是れへも參らねばならず、そちこち廻る内に夜の四ツとなります。イヤハヤ命がつゞかぬでごつす。其の間には夜中に門を打く。是れも役目なれば夜中と申し雨露霜雪もいとはず、見まはねばならず。ト家來なども同じながら、隙な醫者の家に居ると違つて、イヤハヤ骨の折れた事でごつす。今日等は乘物でごつすが、迚も歩いてなければ間に合はぬゆゑ、昨日まではすたノヽかけ歩きました。醫者が扁脚が我ながら解せぬです。ハヽヽヽ。」

いた[illegible]小見世茶屋に、[illegible]お小兒でも[illegible]御願人でござりまする[illegible]にお出でなされて、に
いたさへ十件の間より入り來り[illegible]頻面爾者に觸れるにこまつた[illegible]、、、、、
ぎにぎをして上げよう、、、、、[illegible]
御主人がになりましたうちから[illegible]にして[illegible]執念、[illegible]別の者でもないが、[illegible]
ますこつてす。先方では[illegible]でこゝへ下お、こなたの御様子は[illegible]でござりませうか、始終[illegible]
ゆーと云申しながら、あすこへはおせわ申したいても[illegible]、あなたの[illegible]申した所が八十歳でムく
ござりまする。或は極不埒な老人、[illegible]もない[illegible]はたとへやさしいといふところが[illegible]とれたこと
と、目は見え、始と申すものいゝおなつかしいに逢したものでこゝす、まつ[illegible]にはれそい[illegible]
な面影も見られるとキ、申すやうな[illegible]、キット御主人さうでござりますしかるに先方の[illegible]
まい主極面白い、[illegible]上は御ぞんじの通り近[illegible]でとうぞ[illegible]、[illegible]
た別ぶれと、夫貴と申さではこそ[illegible]、男らしくて、[illegible]の人物[illegible]
御様とおなじまして、あまり悋しきことやにようて、なにおせわ申したいて、[illegible]
始終のう[illegible]まださ、念の御為いそいつにも及ばぬでござります、[illegible]
イヤハヤ御主人、またお噂が始つた[illegible]
またたる者、則ち[illegible]

これが沽券の寫し、サこれであきらかにわかる。只今まで仕切地に致してをつたが、此の度金子要用について拂ひたいと申すです。まづ是れもとくと御勘辨。兎角病家がせはしいでおちついてお咄が出來ぬでごつす。いづれ明日おみまひ、まづ御勘考。トキニ、かやうな事をおせわいたすも、ほんの御別懇故いたすわけでごつすが、傍で聽く者があらば山醫者とぬかすでござらう。シカシ御主人、世間醫者といはれるには增しかいハヽヽヽ。イヤしからばお大事に、彼の御縁女さまのこともしかるべきやうに、ハヽヽヽ。せはしい中で、ハヽヽヽ、イヤしからば。」

（其の裏）一おれはふつとおもひついた醫者だが、よもやこれほどにはやらうとはおもひもつかぬ。此のくらゐるならばもちつと料簡があつたものを、今さらやめられはせず、だん／＼はやるにしたがつて、いろ／＼むづかしい病人ばかりいつてくる、ハテさて困つたものだぞ。人にはきかれず、師匠はとられず、此の上にもはやつて來たら金をにぎつてかけおちだ。それより外に工夫がつかぬ。」ト、いゝながらかつてをうごき「コレ鉢六や、向うよこ町の伊世矢の内は簾がかゝつたとか、ハテナ、それでは昨日あたり死んだわヱ。蟲がしらせたかして、むしやうに逃げたかつたが、一昨日斷つてしまはせ、きのふだとはじめをみる所だ。ヤレ／＼けんのんな世わたりだぞ。子に醫者をさせ

むなしい空間をさせることだ。もの／＼これにこりぬことはない。大病人になつて見ると、それ／＼の醫者が五人も十人も寄合つて、たがひにそれのみをいふばかりで、見る／＼悪たらく／＼、どうも氣味がわるくてしかたがない。そこではめくてならぬ。あゝいふ時にはなまじ醫者になつたことははなはだ悔むけれど、術者か売藥師のやうにそやしたてて、ものまへとをく／＼と断聯の来るには又こたへられぬ。アヽトあの病人もトトむづかしいテヽ、いひごけんに云つてはおいたが、何の病かどうして俺にしれうものか。たゞ血氣散を盛つておいたから、ほんの一時しのぎだが、まず、明日の工夫だ。さて／＼善道出世御目に、いや／＼これではたまらない。醫者家業もまづこれを見て、それから醫療手引草、トツとありました。これからひき出して、病の時に醫師人の来るが規矩、あれは是々がついてあるから宝物のもしい、同じくにするかをにしてあつたのた、ア、おお藥といふものはよめぬから何のやくにもたたぬ、具つあものはつ、いれすあくはないチヨッ、つひそだとは思へど、まづあれをもたねば醫者らしくない、へ、こゝれにはこれはなござ、ハヽ、なんだ、龍腦、ハテ、くまのゐのことを熊膽と云つて、あれはくまのうるだかいふから、龍腦は龍の膽をしらん。牢下、ハヽ、おつた名だナ。まてよ、此の中には、おてしみを優ませ詰め、くゝ、それ／＼、百人一首の末の中にあつたゝ、それ、しゞの名にあめく、

しかし、子の字があるから、七夕の子だらうか。七夕の子を干したものだらう、どうもわからねえ。車前草、フム、車の前の草ト、車の前にある草はなんだしらん。祭の牛車ならば輪に唐草が書いてあれど、あれは胡粉で書いた草だ。サテハヤ、本草家もむづかしいものだ。ア、面倒だ面倒だ。ちつと本でもよむと目がいたくなつて来て、肩がめり／＼とはつてくる、イヤ／＼やつぱり盲人のじやうるりをかたる様に、おれは本なしでやらかすが利かただ。正氣散をのませたらば狂人たちまち正氣になり、風ひきにのませたら正氣さま忽ち邪氣をおひはらふ。おれが工夫がいつでもいい。海士がわづらつたら龍王湯、死にさうな病人には延壽丹、念佛ぎらひの坊様には不換金、諸事おれが醫案が妙だ、エヘン／＼。

善悪表裏 人心覗機關卷之上 終

善悪表裏 人心覗機関

東京戯作者　式亭三馬戯作

○見えばう第一とする人の表

▲[illegible]しまわり[illegible]まい、おの〳〵黒はんえり。[illegible]にして、別に[illegible]きん、今時いだとい ふ事に[illegible]出たり、[illegible]なり。「ヤ、是れは雅境ごん、どうしなすつた、娑婆以来といふ何も古いやつさ。トキニどうでこ[illegible]した御世界は[illegible]でもあるめえス。世をはかなゐといふ事もありやすめえ。わたしらこそ当時の身の上、[illegible]て、あはれなるかなだ、イヤ[illegible]にさえず[illegible]大人いか[illegible]おはしまず、相かはらず御清雅な事よ、[illegible]うらやましい上根と好きこそ物の上手なりけれだ。わたしらは根が薄くて倦速いとうでゐるからこゝでかた[illegible]や酩酊子如何れたら甘給ふ、酒力ます〳〵、かネ　奇妙に飲むよ、[illegible]一升はとめかはだ[illegible]、おれが意見をば未だ用ゐずだの。コウ、御無用はあつてさ、ハ[illegible]一本[illegible]と何かしまわれ[illegible]

どうしてきらひだらうか、足下にして此の病ありだ。モシ大人おとなげねえ、何でござえすナ、さう又俳諧に凝るでもありやすめえぜ。ヤ、爰にしばらくをかしなことがごせした。此間麥飯が催しでさる所へ句をいれやしたが、チト慾ばるやつだが景物點ス。醬汁辛味五辛、などといふ梁山泊が、うなづき合つて私をいつぺい負かす氣の所が、句〆へ行つて天。イヤ流石の五辛きもを潰しさ。」ト、笑ひながら、そこらをじろじろと見て、「ハヽア大人モシおつな物がお手に入りやしたネ、こりやア古渡といふ内にも明末あたりの物にあらず、おそらくは元だらう。是れは奇なものをおとり出しなすつた。」ト、いひながら、うゑが見せ兩樣にして見せながら、一腰を「是れかネ、ナニサお目にかける程の道具でなしさ、至つて麁物、目貫が家雕だとかいひやしたが、マア物をいふ奴は目貫と縁頭さ。出し目貫にしたから持てやす。ナニサ宜しく御一笑。モシ此の帶はどうでござえす。何と御鑑定なすつた、博多と見えやせう。ト見せて博多でなしさ、ハルシヤの異體ださうス。此奴も他人のしめざる内が山ス、おしつけはやりやせう。わたしが流行らせる積りだ。何かでえぶ寂寞たる光景だネ、わたしもチト寂しい心持だから、おそれお顧みず饅としやせう。」ト、玄關に控へゐる草履取に向ひ、「草吉や、山田庄藏が所へ往つて百疋さういつて來や、堀江町二丁目の鰻屋だによ。コウ／＼すおと串を交ぜてだぜ。エヘヽ、もし大人、最う俳諧も倦きる、歌はもとより香氣になつたから、おつりきなものをおもひつきやした。彼のまがひ八丈、まがひ南部

鵜なきから喰んだ趣向で、まがひ萬葉といふ歌の體さ、いはゞ和歌者流の新道とも謂つてくれるのだナ。まづ狂歌と詰歌の合間ないくやつだネ。聞いてくんな雅人を詠める

おほみきの、ゆすくれなきさけ、ふまみちをどみのちまたにこけたらくだまこ

トヽトおつでござい。これはこ馬で詠むからつい口つきにかぶれたのさ。此の二十五の歌がきくあれど追つて御披露。しかもすとど歌といふ集が出来てあるが、さつきも云萬葉と裏付で發市するさうだ。末摘比萬葉集といふ酒落さ、どうだ、常吉か、山作は承知か、ことを早くと云つたらうの。トキトキトおお話だが、そのふしぎなる事があつたうしたう。御宿に誘はれて山谷へ往きやすのさ。なぜといふに先に昨日三升に逢つたに、山谷へ助六の墓を建てたといひやしたから、それを見がてら出かけやす。三升さういふて、江戸子だと、ソレ花川戸の助六といふ者は其のむかしかうらく者さ、其の寺がしれたについて向島の隠居在在のとき、寺へ往つて種を尋ねたがわからずにしまひ、トコロデ、はからずも今度其の墓がしれやす。ソコデ三升が寄進で彼の助六が墓を山づほに再興ト、なんとどうでござえやす。元祖市川柏筵から代々家の藝とする助六の墓が、今七代目團十郎に至つてしれたなどはきつい〳〵、今三升の面目といふ物さ。本所の高島屋さんか賴場年代記へ書かねへ内に緊の話は聽きやした、しかも高島が口から直傳の由来、あの新場をことしと七十九だが、ネエト健

かぢやァごぜえせんか。我見ても久しくなりぬあの壯さ。いまだに月代青く髮眞黑、ナントもしきつい者ぢやァごぜえせんか、當時の壯たはどうして齒が立つもんか。オット話分兩頭となつたが、それから柳齋と山谷へ往つて助六が墓を見て、歸りが金龍の寮へ寄つて墨濱を眺めながら、綾子にお手前をとか云つて嬉しがらせの、房齋仕入の菓子か何かで、茶を吞みの、二ツ三ツ話して居ると八百善から仕出し、まづ是れにて心落著ス。そこで金龍が才子ぶつて例の高慢を吐くに、綾子が同氣相もとめて器物の自慢、猪口許りも五七種出して、一々に由來をたづね奉るから、チトうちながらも、酒をふるまつて味噌をあげるから暫く請け居て、杯しばノ\廻る内に、どういふわけか蘿本の女房が逗留に來て居ス。てんと面白しでからかひながら飮んで居ると、ちやうど晩鐘がボヲンとすると、向うの寮でコロリンシヤン、紙砧の音、蛙の聲、諸事合がはたつぷりあつてハイさやうならス。しかしてのち柳齋がいへらく、竹屋から兩國まで乘らうツサ。是れはあまりに情なきことかな。吉野川一かたの名船も、元服して大根を積む時分に水邊は何事だらうス。まづ第一寒くてたまるものでなく、いづれ巴亭と極めること、時こそよけれ人もや者共といふ時刻だとか云つて、兩頭の蛇であるきながら、會所の前あたりまで來て、判頭跡へ引返しの解。今朝歸りの今まで寐。こいつはモシどうでごぜえす。」

（其の裏）長崎に住まゐをして居たり、下人章吉此のはなしを聞いてこれも見てたいといふ　うそ〳〵〳〵〳〵。あんな嘘つき人うそ。ちやア
ヤあきれはてた、うそつきだぞ。おらが所の若旦那はなぜあんなにうそをつくだらう、嘘でも
おもしろいかしらん。帯がハッシヤもすさまじい、やつぱり博多だやつさ。他は目も當られも
のだとおもふか、其の博多も兎角の仕立にでもすればいいのに、性が大の生娘とすてあたじけね
ヱ開山だから、やつぱり唐服から買つて御注造にあにせた、しかも俺が買ふ時を見て居た。
せめて武芸から上の物ならよけれど、芸歩こしのうは位で買はなから、イヤはなしや聞合
り、ホヽヽ〳〵きもがつぶれる。なんでもかまへんすればいい事とおもつて傾刀なんぞも大概そこ
らのことだらう、他を馬鹿にするもほどのあつたものだ。きのふ山谷へ往つた、ハヽ鼻をつけ
といかさまに馬鹿をつくせ、うそッつきめ。きのふ山谷どころか、掛取が来てせつくもんだから、そと
へはづすには錢が入るといつて、錢箱のぶたにして二階へあがつて、ねさせてたつて居たれ、
ナニ山谷、へこべらぼうめ。湯へもいかずにすつこんでゐてからに、イヤな臍うんの帳へ付つた
との、どこともかやの女房が来てゐたの、茶の湯だの酒だのと、あはからき事にでも見たらう。
ヤハヽなんといふうそつきだらうか。今まで奉公もして見たが、あんなにうそをつて主人は始め
てとつた。そのあひだにはうそがせつなくなると、おれまでも商人になつて、コヽヤ章吉、てめへ

もしつてゐるナア、てめへもソレ一緒に見たッけ。」なんのかのと、おれまでうそつきの同類に引込むだ。アノサうそつきといふものは、うぬひとりでうそをつい居ればいいのに、そばにゐる人をうその證人にするからつらが憎い。まんざらあとかたもないうそだと思つても、「草吉、ナア草吉、てめへも見たつけナア。」などといはれては、まさか主人の事だから、イ、エさつぱりしりません、それはお前さんのみんな虚言でござりますともいはれず。これにも年中困るて。なんのつきに三升、ヘン團十郎などはちかづきでもなくて知つたつらにはなしかけるだ。あと月から今月へかけてけふのうなぎを奢るばかり、形ばつかりでえそうで、口はがうせいにおごるやうだが、かけた錢一もんつかつたおぼえなし、うそつきのおや玉、しはん坊の座がしらとはおらが若旦那のことだ。エ、虚言々々々々々々うそウつきめ〳〵。」

○料理を食自慢する人の表

「コレ此の料理は一種も氣にいらねえ、こんな潮煮が食らはれるものかエ、これでも料理茶屋かへこ表裏茶屋かきいてあきれらあ。けふは料理番が代ッたナ、誰だノヤナ誰だよ。ナニ、代りはしねえ、代らねえ事があるもんか、御口中が曇らぬ鏡だわ。けふはどいつだ、ナンノ名もしれねえ料理番をつ

かつておいらに食はせようとはおしが重てえ。やす料理茶屋の手際だぞやすねといへば、草履取の相當だ。上と下へ往つてきうい〻。鯛がふんとござつて汁が終滿といふ場りだ。此の場りへ二三匹ぶつかけたら鯉がとれようから、其の鯉を刺頭あかめにして來月あたりの賣前にさうせえといふうちへ、コレ、魚の不自由な山國ならずいぶん堪忍もなろうが、江戸むやア合點しねえ。ヤア是れで通る客もあらうが、それはおいらとは評が違ふ。駄味噌をぶちあげるやうだが、指の腹程の初茄子を生漬にして、お宿でもめしあがる。又料理茶屋へ往つた時には、目玉程の初茄子を吸物にさせて、まあはめ二三度、茄子の數が三四十でも直が一分拂つた男だよ。お直段を云つたらア鄙人様が寶るけれど、聲をいはねえちやア手前たちにわからねえ。初松魚をな南せうか初鰹を三兩せうが、魚類青物ひつからめて初といふ字の付いたものは、茶屋配りの番附と一緒に、人先へ見参ようすわ。八ッ時四分の江戸繁昌であれなならねえものは、鼻が鈍いか、座敷が下手か、よく〳〵の引物よ。お花が鐔が一ことか、らと、あきれ〳〵とはやり出すから御利生にはおそれてゐる。全體こゝの内は人を見損つて居るさうだ。煮鶏卵のつけ合はせを見て此の雪花菜はよく煮つた。惜しい事にむきみがねえといふさうな。無闇目と倶一にされては、お隣もとかけもねえ。料理通とも食物本草とも渾名の付いた男だから、我が製へて覺えのあるのだ。最うおことはしれたから、チトにくみだが下げてくれた。おれ風のならまだしも

の事、けふはお連もあるもんだ、あの男は平生こんな料理で承知するかとおさげすみもおはもじい、まづ第一料理通の名がすたるわナ。ソレ見さつし、おち付の味噌吸物は汁をわざあとすつたばかり、ソリヤさし身は手しほへ取つたまんま、蓋は一遍見たばかり、三ツ物はそつくりそのまゝ、茶椀物は吐き出して、死骸は爰のコレはひふきの中。ナントよしか、腹の立ツのも無理ぢやアあるめえ。跡は定めて鹽花だらう、それも承知よ、ナイおさいばゞ一

「其の裏こア、一杯のみたくなつた。コレ小ぞう二合買つて來たか、オツトよし〳〵。サテト、今日はさかなは何もなしか。ナニ、干物がある、乾魚おやア飲めねえす。ム、佛さまに油揚があつたツけ、こいつ妙、しかし生姜はなかつたの。なむさん大根おろしにしたくも大根なし、ト、そんならそれを燒いて醬油をかけのむしやり〳〵か。これはなんだ、ハヽア、しほのからき去年のたくあん。ハツヽ情ない、昨々は茶屋で大俎を並へて何も喰はず、しかもみんな殘して來たが、ありうちなんぞ一種欲しいこツア、昨夕からのやましくなつた。ハン、うしと見しよぞ今はこひしき。」

○狼者と呼ばるゝ下卑女房の表

たゞ天のごとく敬ふやうにもてなして、内心は地の如くにあしらひ、我儘いつぱいに身をもちこね長屋のつきあひ悪く、萬事智恵ぶつてさし出たがり、浮儲えん／＼と陰口買ひの女房「コウ／＼お屋さん、おつとばかりおくれた。コウおめへ一昨日のは前筆であつたよ。おらが所の買物のさうよいとはあつたけれども、どうしてか來ねへからおめへのを買ふ、隨分氣をつけておきな。さうするとお長屋はみんな引付けて置るよ」と、猫なで撫ふところ手に二階の間へ出て來り、さつまいも「ヤレ／＼、これで二十四錢か、お前は高覧だから、最う三本まけなよ、お陰さなのを、おつそれたやりいや、おつとえきなのをさう、、、、此人はよくじよふだれないふなう」と、しらねよう、姉はじめ早く持つて行きな」此の間い、貴は毎か。●「あの間へ大およしさん。のちに來なよ」▲「なんだ」●「まだ相手もの出来ねえ」▲「おそのか、久しいものさ」●「否ならおめへの名」▲「およしか、悪くしやれるなう。さうだつてもおそつのことだよ」●「さつまいもがなくては夜が明けねえ。それでもおめへばつかりはつひぞふかしたことがねえよ」▲「面倒だから大ぶかしを買つて食ふわな。コウ／＼あたしりなやは留守か」●「留守なら、朝ッぱらから商へきつ。お前の所のむつかしやもけふは仕業か」▲「さうよ、ゆうべも簡

つて歸ッてあの通りだわな。無理ばつかり云つて人をいびるのだ。」●「惡い酒だよなう、しかし何所のもおなじことさ。おらが所のしろものはいびノ\ごとばかりぬかすわな。」▲「なんだよ、もつてえねえ。御亭主さまのことを毒々しくいふと罰があたるによ。」●「罰ばかりあたつても利生なしさ。てんでんが商へして掛がとれねえとつておれが知つた事ぢやァあるめえし、やたらにおればかりしかるわな。おへねえ、よたくれ爺だ。コウノ\およしさん、おらァなんの因果であんなおちゝいを亭主にしたらう。今おもへばごふはらでならねえ。ホンニノ\よその夫婦をみるとうらやましいよ。」▲「其のかはりおめへは朝晩のことに不自由しねえわな。こごとはいひなさるけれど氣だてはいゝわな。ハテお前のいひなり次第なんでもァイノ\だ。お前がちつと猫撫聲であまへると旦那さまは直にのろける。」●「餘りのろける風でもねえのさ、あのまァ勘定猛いことを見な。めつたに徒費は出來ねえだのそれかの、買つてくれる事は好きさ。」▲「それが第一にいゝおやァねえか。」●「おちゝい殿を亭主にしてゐるから、其の位な事はありうちさ。だゝをいひちらして氣儘一杯にする代り、一生おちゝいをつかめさせて旦那さまだ。あのまァ天窓をみな、白髪をぬくと坊主になるばかりだ。七分は白髪で赤い毛が三分あつて黑い毛はたつた一分さ。」▲「おつな玉蜀黍がある物だのァハ、、、」●「アハ、、、ハわつちはネ此中もつくノ\と見たらふき出したくなつてきたよ。あのソレ表の萬屋にある和合神さ

まめ[illegible]△「ムヽ」●「あの顔に寫眞だ」●△「すハ、、、、」△「聞いたらさぞ腹を立つだらうな
うに」●[illegible]かまふもんかな、千儒男といふものはあつかましいものだなう、てめへの嫁にしようと
若い女房にもつわさ　あの爺さまの脆い内に世帯を持つて子を拵へてみた、ちやうどかつら位の總領
を持つわな」△「ハテなんとかいふ何があるわな」●「[illegible]、何さ、花嫁の後ついて出る何とやらといふわ
な、するかへ人間変わつてしまふかして、やると嬉しがるわな、それが御亭主への功徳さ、ああへたつて
いつまで若い身さやうだと、女は老けるものだからおしつけ新い加減の夫婦になるよ」●「わつちは
否、すかれた」△「ほんにさ、今でも餘り違ひは見えねえ」●「[illegible]およしさん後生だわな、よし
てくんな、泣出したくなるよじれつて[illegible]付[illegible]中で[illegible]其[illegible]氣をかけ[illegible]「おまへさん一昨
日はお樂だつけね」△「何を」●「寺まゐりは大うそ、おほかた伯母さんとこの嫌御と逢引だらう、
さうするがいいのさ、わつちらはお邪魔にならずつておい[illegible]」△「[illegible]い邪推だなう」
●「アイサ邪推さ、随分さうなさいましよ」△「ほんたうに逢引所か、お寺まゐりかとおもの御無沙汰
を埋めにあるいたわな、何しにおめへかくすものか、[illegible]うたがひなさんな」●「どうだかしれて
こそ、御夫婦連で芝居御見物、さぞお面白うございましたらう[illegible]いいわな、御夫婦でいらつし
やるのを、他からいふ人はないのさ、[illegible]すとゆへば[illegible]往くかしらさ」△「此の子はまた

ぐり深え子だよモウ。行かねえといふに何往くもんかナ。おめへと夏狂言をみた儘だ。」●「ほんにさうか。そんならゆるしてつかはす。」▲「ハイ〳〵ねつからありがたく存じません。」●「ナント此のごろに往かうぢやァねえかナ。」▲「往かう〳〵。」●「一軒の芝居は丸で一日見て、あとの二軒は切見に往くがいい」▲「よからう、ソレぢやうどいいわな。薬師さまから燈籠佛さまへ参ると拵へて、鄰のをばさんに鍵をあづけて。」●「八ッ時分から出かけよう。」▲「ムウ食ふ事から先へ立てる樣だが、其の時こそ江戸橋の升屋で奢らうよ。」▲「ム、〳〵表の白助さんと横町の黒松さんを連れて往かうぢやァねえか。」●「他見がわりいわな。」●「何かまふもんか。をかしらしい事でもあるぢやァなし。」▲「ねえから猶清くするがいいわな。おめへはまだそれだけ若いよ。」●「たゞ洒落を云つたりをかしな面をして地口を云ッたりするから、あの二人は気さんじでいい。わつちはなんにも願ひはねえが、酒肴をしこたまならべて、白さんや黒さん、それから福さんや得さんの構をあつめて、おもひれしやれのめさせて見てえよ、さぞ賑やかだらうなう。晋さんが例の三絃であだな聲のめりやす、白さんが字餘り潮来、黒さんの聲色、福さんの新内、得さんの豐後、逸さんの祭文、斯う揃ッたら妙だらう。其の中にも尙さんは藝なしだけれど、其代には男が好いから、チヤンと坐らせておいてお樂しさ。」▲「すヤ〳〵浮虛な子だなう。其の時御亭主さまはどうする。」●「使にやつたり給仕をさせたり。」▲「すヤあきれ

返るわ。ホンニ〳〵罰のあたつたことをいふなう。」●「それだから願ひだといふわな、どうでかなふはなしではなし、シカシ芝居へ往くもよしわるしだよ。」▲「なぜ。」●「役者を見た跡がやすくはなくおゝいどのがおそれるに。」▲「ハイ〳〵なるほど御もつともだ、一寸罰のあたつたお詞だ。一生は納まらねえぞ、おめへは情なしの開山だ。おらァ地鐵をいふ性だが、おめへ其の心ざしぢやァ極楽がおもひやられるぞ。モウ〳〵けがにもいひ出しなさんな。ホンに勿體ねえよ。」●「ハイ〳〵かしこまりました。」ヨウおよしさん、おめへもよつぽど正直もんだなう、今まで云つたことは皆嘘だわな。それやァさうとをかしいことがあるよ、わつちが所の旦那さまは定紋が抱柏より、それにも氣がつかず、わちが音羽屋贔屓といふ物だから、門松を一本ぎ。中扇の中に抱柏の紋を一本と目上で三本置いたおざしにうたせたもの、旦那さまがちよいと見つけて、「これは扇の中におれが定紋を付けたのだ」といふから、早速出たらめをこじつけたわな。「イヤそれはお前の紋をうたせたけれど、扇につけて持遊にするかと云つて叱んなすつちや悪いから、扇いのせて毎日つむりへ頂いてゐる心だつ」と云つたら、眞に受けて御機嫌大よしさ。」それから「最う一本は」ときかれたから、「旦那さんの替紋」と向けたらば是れも相濟みさ。餘り人がいいから、あゝいふ時は氣の毒だよ。」▲「人をばよく食ひ下たなう、おめへの所のは芝居ぎらひだからだまし能い。そのうへにおめへが蛇つかひの狼者とさてゐる、

いいやうにあつかはれるのだ。」ト、いふ所へ足おとが聞ゆる。●「およしさんナツトエヘン。」ト、咳ばらひ、およしだまる。●所へ氣のよき御亭主あきなひより歸り來る。●「オヤお歸んなさいましたかエ。まだお晝前だけれど、朝がお早かつたからおひもじからうネ。」●「ナニサひもじくもない。コレ／＼おやしきからお人は來なんだか。」●「イ、エ。」●「ハテナ。」●「ドレお茶をあげませうか。」ト、立ち上りにはかに慇ぎんなる詞に變り、ていしゆを大せつにする。●「オヤ／＼おまへさんマア、此のまァおつむりはどうなすつたのだネエ、はけが此樣にひしやげてさ。アレサぢつとしてお出でなさいまし。」ト、ていしゆのうしろへまはりてはけさきをなほし、「間を御覽じてお髪をたばねてお貰ひなさいな、いつそ見ッともなうございますわな。ソシテきのふからおつなきせる筒をお持ちなさいますネ。紺ちりめんの長筒で。」ト、ながし目に見やり「何所やらの面白い方におもらひなすつたらう、さぞお嬉しうございませうネ。」●御ていしゆ少々やかれてうれしきおもひれ。「此の人はとんだ事をいふ、ナニさ何所からもらふものか。是れはおやしきでもらつて來たの。」●「お屋敷でもなにさまでも、女中はおなじ事でございます。」●「ナニサあてこともない、女中といへば女中、最早ばく／＼した老女さ。アノ何だわな。何さ。」●「いはれますまい。」●「何いはれぬことがあるものか。お局さまのお物師のお縫さまといふお人が下さつたのだ。」●「お縫さまからくださつたおきせる筒だから大事になさいまし。女房の縫つて差上げた筒は直に打遣つてしまつて。」●「イヤこれは迷惑、こなたはとんだことばかりいふ。」●「イ、エとびませんのさ。ホンニ／＼おまへ

さんが離し何にしておくは胡散な物だぞ。」ト、髪をなでつけながらべろりと舌を出す、●かほを顰「スウ、ア、舌がいたい。スウ、きのふから舌が痛くてどうもならねえ。」ト、ひとりごとにて舌「スウ、[illegible]
[illegible] ■御ていれ[illegible]「舌がいたい、それは大事のことだ。舌を咬んだのではないか。」●「イ、[illegible]
■「御舌にでもなられようが、毒庵さんに見て貰はつしやい。舌疽にでもなるとた大変だ。」●「なぜ[illegible]
■「舌がだん／＼わざまるを舌疽といふ。」●「舌疽ではばからしい。」■「しやれではない。」[illegible]
ハ、、、、[illegible]■[illegible]
ナ、ア、ア、ア、[illegible]おつなにげじか、、、何だか、[illegible]
[illegible]
[illegible]
れはさつまいも。」ト、ほり出す後 ■「すや／＼／＼又一本さつまいも。」ト、とり上げてためつすがめつ[illegible]
[illegible]、はつと思ひ、●「すや／＼ほんに最うやけましたか。」先程お前うの[illegible]
ひ申して、わたくしがたべるよりは、お前さんにあげ申さうと思つて、[illegible]
れでもこゝろざしといふものは通じるもので、おやうどお前の間に合ひました[illegible]
の利いたおいもだぞ、さあ／＼すぐにおあがんなさいまし、[illegible]、、、、

（其の裏）「今にも燒けたらば食はうと、たましひは火鉢の中へくばつてゐたのに、相になところへ歸つて來たぞ。一本はぢいさまにしめられ、たつた、ほん一ツ本。チヨツ、くちよごしな。」

昭和二年十月十七日印刷
昭和二年十月二十日發行

（非賣品）

近代日本文學大系
第十七卷

編輯兼發行者　東京市麴町區內幸町一丁目六番地
國民圖書株式會社
右代表者　東京市麴町區內幸町一丁目六番地
野中次郎
印刷者　東京市本所區番場町四番地
非上源之丞
印刷所　東京市本所區番場町四番地
凸版印刷株式會社本所分工場

發行所　東京市麴町區內幸町一丁目六番地
國民圖書株式會社
電話銀座七八三番
二一八八番
三六八六番
振替東京五二二九八番

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03045 2577